PL
798
.6
A6
1928

Tamenaga, Shunsui
Tamenaga Shunsui shu zen

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

# 爲永春水集

全

# 爲永春水集

全

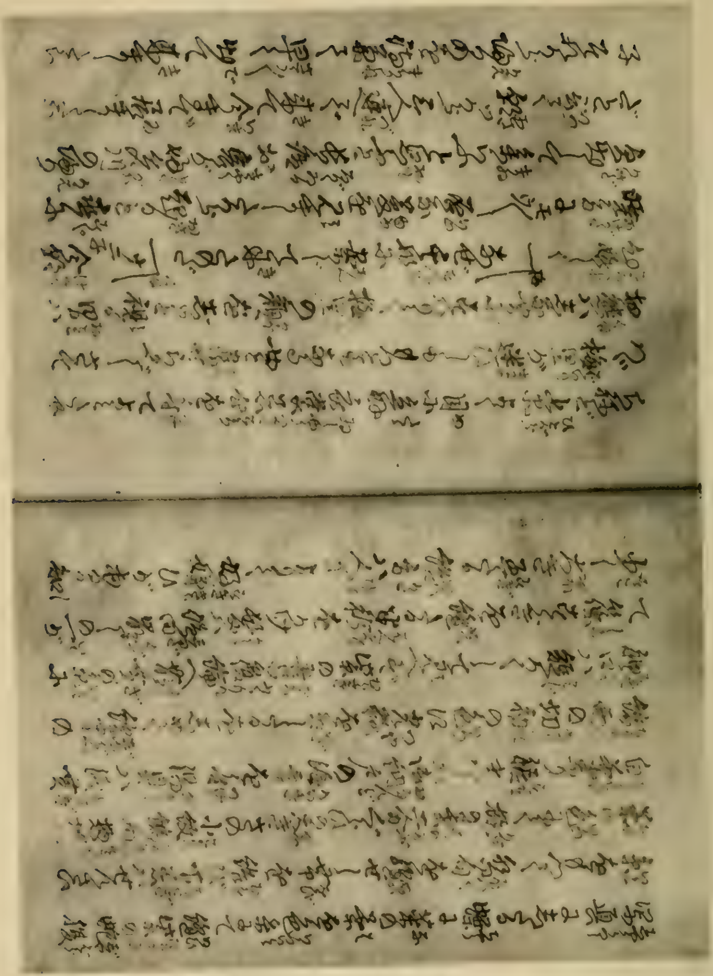
PL
798
A6
1928

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

LIBRARY
MAY 03 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

http://www.archive.org/details/tamenagashunsuis00tame

唐琴屋浦右エ門娘
お蝶
妓院ニ生長ど
色香も深く
一旦の薄命ハ
雪中
梅の
人情
節操の功と
早く咲
子延亭
万枝



# 近代日本文學大系 第二十卷目次


梅暦發端 春色恵の花 ……… 一―八二

春色梅兒譽美 ……… 八三―二五六

梅暦餘興 春色辰巳園 ……… 二五七―四二二

春抄媚景 英對暖語 ……… 四二三―六六五

春色梅美婦禰 ……… 六六七―八五六

風月花情 春告鳥 ……… 八五七―一〇七二

解題 ……… 文學博士 笹川種郎 …… 卷頭―一六


目次 終

# 解題

文學博士　笹川種郎

## 爲永春水

春水は一方に人情本の元祖と稱せられて、人情本作家の代表者たるが如く囃し立てられると同時に、他方では剽窃者虛名家として、小ッひどく罵倒されてゐる。春水の惡評に就いては、其の當時から行はれてゐた。馬琴は「近世物之本江戸作者部類」に彼を評して、「馬琴が舊作の讀本の、火にかゝりて全部せざるものを、板元より買ひ取り、恣に補綴して畫を易へて新板の如くになして鬻ぎしは、此の男の所爲なり、「常世物語」「三國一夜物語」「化競丑三鐘」等、猶此のほかにあらん。」と云ひ、猶之れを詳にして、

曲亭の作讀本、其の板燬に係りて烏有となりしは、「勸善常世物語」五卷の内二卷、此板、文化丙寅春三月の火に燒亡す、文政に至りて越前屋長二郎（爲永春水）其の闕を補刻して再刷す、（その板二三人に傳へて、今は丁

子屋平兵衛藏弆すと云ふ、「三國一夜物語」五卷、これも亦その板、文化丙寅の火にて烏有となりぬ、文政中、越前屋長二郎、又恣に其の出像を新にし、文を增減して、再刻を大坂屋茂吉に委ねたり。茂吉そを刊刻するに及んで、曲亭是れを聞て、其の作者に告げずして、再刻を恣にしぬるを咎めしかば、鶴屋喜右衛門、西村屋與八等、茂吉、長二郎が爲に曲亭に陪話て、刊刻成るの後、校訂を乞うて免許を得んと云ふ。またいくばくならず、大坂屋茂吉（京橋のほとりなる書賈なり）身まかりければ其の再刻今に成就せず。こは馬琴の幸なるべし、（中畧）又「化競丑三の鐘」は、その板焼けたるにあらねども、板元蔦屋重三郎が久しく摺り出さざるほどに、過半亡失したるを、越前屋長二郎又其のまゝに購求め、恣に補刻して、販ぎたれども、古板なれば多くは賣れざりしならん。

と云つてゐる。馬琴が他作家を落して、自家を揚ぐるに汲々たるは、人をして顰蹙せしむるに足るものありて、其の云ふところは、割引して聞くの要ありとは云へ、春水の厚顏なる、同時代の他人の著作を補綴板刻して恥ぢなかつたのは、事實であつたと思はれる。

春水、氏は佐々木、名は貞高、通稱を越前屋長二郎と云ひ、後に鷦鷯正輔と改め、狂訓亭と號した。隻眼であつたから、人彼を渾名して眼長と呼んだ。屢居を轉じ、はじめは橘町に、ついで、通油町に、辨慶橋に、牛島に、下谷池の端に、淺草寺地中に、晚年には神田多町一丁目に住して

ゐた。初は貸本屋を營み、青林堂と稱し、中頃に糶書商となり、ついで香具師となつて、爲永正輔と呼んだが、久しからずして廢業した。「舊本のせどりと云ふことを生活(なりはひ)にす、且つ軍書讀の手につきて、夜講の前座を勤めることも折々ありと云ふ。」(『江戸作者部類』)とあるは、即ちこのことを云つたのである。其の後作者の仲間入りし、式亭三馬の門人となりて、三鷺と號し、ついで二世振鷺亭となり、南仙笑楚滿人の遺女に金を贈つて、三世楚滿人と稱した。文政五年には、『八百屋萬神樂太鼓』『小絲佐七紫總絲』を著はし、同七年には、『園雪花廼魁』、同八年には、『尾上伊太八局岩藤歸咲古郷錦繪』を、同九年には、『いろは短歌新板役者目附繪』『繫馬七勇婦傳』『腹內覗機關青柳巨新話楠筍』『寒紅丑の日待』後編(前編は振鷺亭の作)を、同十年には、『手鞠唄幼繪說』『戲場小錄長璧太郎譚』『和歌三人由來』(瀬川路考の代作として)同十一年には、『浦島太郎珠家土產』『風俗女西遊記』『篠塚太郎英勇話』『蝶衛鎌倉模樣』を、同十二年には『愚智太郎懲惡傳』を著はしてゐるが、一向に當り作なるものはなかつた。『作者部類』に之れを評して、「文政の頃より、『合卷臭草紙』を作りて、彼此の板元へ侍りて印行したりといへども、一篇もあたり作はなし、文政十年の頃より、古人楚滿人の名號を接ぎて、南仙笑楚滿人と號したるに、その新作の讀本、世評なかりければ、板元竝貸本屋等が楚滿人と云ふ名は、ふさはしからずと云ふより、又春水と改めたり。」と云へる

は、事實に近いものであつた。然しこれ等の著作の多くは、彼自身の筆に成らずして、門人の手に成つたものらしい。

彼が作の人情本としては、文政四年板に、瀧亭鯉丈との合作『明烏後正夢』あり、同五年板に、『八重霞春夕映』あり、同六年板に、『明烏發端』あり、同七年板に、『軒並娘八丈』『凌霜俚談菊廼井草紙』『於保呂月』四篇（初・二三編は十返舍一九作）『藤枝戀情柵』『袷妻雪古手屋』あり、同八年板に、『春宵美談三日月阿專』『園雪三勝草紙』『蘆假寐物語』同九年板には、『當世虎之卷』後編（田螺金魚の作を補綴したもの）『婦女今川』、同十二年板には、『教訓二筋道』（梅暮里谷峨の『傾城買二筋道』の後編）『明烏後傳寐覺繰言』『松操物語二輯貞烈竹節談』（駒人と合作）『文治高尾紅葉伊達染』『戀情癡談夜半雪』『松竹梅二組杯』等があつたが、貸本屋片手間の眼長のこととて、學殖もなく、文章も拙く、唯に賣名に汲々たるのみで、傑作として推稱すべきものはなかつた。

然し彼は俗才に長じてゐた。巧に當時の通人津藤に取り入つて、其の腰巾著となり、又遊藝師匠幇間等と交りたることは、『春色恵の花』の卷頭にも、清元延津賀、爲永喜久、同津奈、櫻川善孝、同由次郎と署せる奉納提灯を描いてゐるのでも分る。彼は此等の人々をモデルに取り、事實を潤色して之れを活寫することに勉めた。洒落本と云ひ、黄表紙と云ひ、中本と云ひ、モデルを

取扱つたにしても、暗に之れを諷するに過ぎなかつたが、春水に至つては、露骨に之れを取扱つて、半ば彼等の爲に宣傳をしたのである。賣名の徒が之れを誇り顔に吹聽したのは云ふまでもなく、世間の評判となつて、其の作の賣行きがよかつたのも推して知られる。此の點に就いては、彼は自然主義の作家であつた。

人情本作家として、彼は最もはまり役であつた。よし自作と代作との區別は判然せずとするも彼は流石に他の人情本作家よりも、題材を取扱ふことに巧みであつた。いづれも彼を環れる通客藝人より敎へられ供給されたものと思はれるが、眼前の事實を捉へて、之れを旨く組み立てて行つた。「梅暦」は卽ち其の標本で、彼が人情本作家の代表者たる所以は、そこにある。

彼はきはどい所まで情事を寫しながら、必ず之れに對して辯解の辭を添ふることを忘れなかつた。

作者伏して申す、かかる有樣を述べて草紙となす事婦女子をもつて亂行を敎ふるにひとし、尤もにくむべしといふ人あり、嗚呼違へるかな、古人云へる如く、三人の行ひを見ても、必ず我が師とすることありと、誠に曰ふ、他の風俗見て我が風體直せと、もとより予が著はす草紙大方婦人の看客をたよりとして綴れば、其の拙俚なるは云ふに足らず、されど婬行の女子に似て貞操節義の深情のみ、一婦にして數夫に交り、いやしくも貴全

のために欲情を發し、横道の振舞ひをなし、婦道に缺けたるものをしるさず云々。

作者、爲永春水伏して申す、わが著はせし草紙いと多く艶言情談ならざるはなけれども、いづれも婦人の赤心を盡して婬亂多婬の婦人をしるせしことなし。

の如き、取つてつけの辯解は、一にして足らない。心苦しいための云ひわけではあらうか、云ふだけ野暮の骨頂で、春水の勸善懲惡説は、時代の風潮かも知れないが、捧腹絶倒の極みである。『梅暦』は當り作であつたとともに、彼の得意の作であつた。彼が之れを自作なりと吹聽して置かなかつたのは、偶々彼が代作に依りて賣名してゐたことを裏書してゐる。彼は『春色辰巳園』に於て曰く、

金龍山下に寓居して、金龍山人と號し、草菴といへばまた風雅めけど、風流なること少しもなし。九尺二間の寐所を借宅して狂訓亭と自稱するは、拙作の主意、勸善の教訓他に異り、趣向文章前後して、筆に狂ひの多ければ、教といふ字を狂とし、響をきやうとよまするも、おのれを戒む亭號なり。一に爲永春水とは、四澤に滿つる御贔屓を願うて替へたる戲作の魯智、以前楚滿人と呼ばれし時は、多く門人に筆をとらして、自作の草紙稀なれば、巧拙ともに本意にあらず、梅ごよみより已來は、實に予が手に綴りしものなりと、そのことわりを改名とともに、四方の御ひいきさま方に告げて、いよ／＼御顧みを偏に願ふことになん。

と、まことに露骨な告白である。同書巻之十、第十條には、

甚「ハイ／＼。」といひながら、「貞操婦女八賢誌」と云ふ繪本読本を出し、「これが評判のいい新板でございます。」米「さうかえ誰が作だえ。」ト作者の名を見て顔をしかめ、「アイ／＼私アこの狂訓亭といふ作者はどうも嫌ひだよ、楚満人といつた時分から見るけれど、どうも面白いのは少いものヲ。」甚「イエ／＼それはみんな弟子や素人の作つたので、楚満人が名ばかり書いたのでございます、この「八賢誌」をマア御覧じまし」

と云ひ、「春告鳥」巻之八、第十五章に、

くま「ハヽア「娘七種」かね。」といひながら、中本を取つて序文を読み 梅「金龍山人狂訓亭爲永春水か、よくいろいろな名を書いて置く作者だ。」くま「左様さねえ、全體元は南仙笑楚満人と申しましたねえ。」梅「左様さ二代目の楚満人さ、大そうに弟子なんぞも出来やしたつけが、なぜ名をかへやしたか。」くま「ヤヤそれでも狂訓亭としてからは、弟子任せにしないと申すことでございますが、そのせゐか近頃の中本は此の作者が一ばん面白うございますよ。」

と云ふが如く、此の作者ほど著作中に自家を吹聴し、又辯解するものは、殆んど他に類がない。讀書丸や江戸の水の様な自店の商品を廣告することはあつても、作者自らの宣傳をやる作家は春水の専賣と云つてよい。これほどの賣名家は古今に稀なりと云ふべきである。

一體此の作者の作物中、どれだけが信憑すべき自作であるかは、明らかでない。自作であつても、不評のものは之れを代作と一概に片づけたのもあらうし、好評のもので、案外に代作もあつたらう。「春色辰巳園」第三編の序に、

地獄の沙汰も作料(かね)次第で、かくが戯作の汗業なれど、櫻川とか壽樂とか其名があれば、その人のお蔭で趣向もするやうによみ給ふは、素人分別、近來門人さへつかはぬ春水、巧拙ともに筆一本、たゞし此の書の脇織といふは清元延津賀の校合のみ、

と云へるは、云ふに落ちずして語るに落ちてゐるのではあるまいか。『梅ごよみ』の背後にも、相當の後援者はあつたらしく思はれる。清元延津賀と云ひ、櫻川善孝、同由次郎と云ひ、いづれも趣向の供給者であつたやうに思はれる。『辰巳園』に、

闇「そんならそれはいいが、おらア其方に逢つたら何をか云はう〳〵と思つてゐたつけが、ふゝさう〳〵思ひ出した、此間久しぶりで善孝に逢つたら、由次郎や壽樂三孝が事なんぞのうはさが出て、幇間の樂屋ばなしでまことに可笑しかつたが、またよく〳〵考へて見ると、氣のつかはれる活業だよなう、イヤしかし何家業もむづかしいもんだ、此間文亭と云ふ友達が來て話したつけが、「女八賢志」と云ふ繪本を狂訓亭は丹誠して、「八犬傳」といふ讀本にならつて、その始末に似ないやうに、その趣の似るやうにと、大骨を折つてこしらへたら、

『八犬傳』に似せて書いたと言つて惡く評判をする看客があると云ふが、作者は同じ事にならねいやうに、遠い似るやうに〳〵とこしらへる苦心を思はねえで、似せてこしらへたと云ふ看客は、どう云ふ見識で、本を讀なものかしらん。そんならばと言つて、何水滸傳と名をつけて、「水滸傳」に似せるやら、唐土の男を本朝の女に書き直したは無理があつても僻らねえとはおつなものだ。」新至「イエしかし何事も運次第な物でごぜえます、今被仰本の作者が書いた、「梅ごよみ」なんぞと云ふものは、中本始まつて以來の大あたりださうでございますが、狂訓亭爲永春水といふ名は、「梅暦」といふ外題ほどは看客が知らずにしまふから、大器夢中で讀むかと思やア、少し悪い所があると、へゝ楚滿人改狂訓亭か、この作者はおらア嫌ひだなんぞと云はれるから、なんぞも愛敬がなくつてはいけません。」圓「新孝、其方も少し狂訓亭びいきだのに」と、自家廣告をしながら、善孝由次郎の宣傳に勉めてゐるところに、どうやら一味徒黨の香もする。天保二年板の『秋雨夜話』九冊は、まるやかく子と云ふ作者名であるが、馬琴は之れを春水の匿名なるべしと推定して『此の二書（『赤繩結紙古滿』とともに）は婦人の作なりとは思はれず、筆すさみにあらず、必ず是れ爲永春水の作なるを、わざと婦人の作なりと僞りたる物なるべし。當春春水が作の中本世評よろしからずとて、貸本屋等が厭ふとか云へば、婦人の作にせば、看客の珍らしく思はんとてのわざなるべし、こは己が推量なれども大かたは違ふべからず。なほよく

彼の樂屋を探るべきになん。」と云へるは、或は事實を穿つたものかも知れない。然し『梅曆』一たび出づるに及んで、彼の名聲は當時の文壇に於て俄然として高くなつた。『梅曆』及びその續編以外に、彼の作にかゝれる人情本は、前に記したものを除いて左の數種があつた。

（重陽嘉言）應喜名久舍
（貞孝節義）出世娘
かゝりの婦美
花の名所懷中曆
春色籬之梅
（一刻千金）梅之春
清談松之調
春色傳家の花
春色初嘉須美
春色霞の紫
女實語教
（奇談）和可紫一二三四編
（貞烈美談）園の花
春曉八幡佳年
（艷麗花情）黃金の菊
春色戀志良波
祝井風呂時雨傘
春色湊の花
（遊仙奇遇）錦の里
（田家奇遇）春雨日記
（松間花情）春の月
春色辰巳の梅
貞操婦女八賢誌初二三輯
（秋色艷麗）處女七種
（向顏相見）其小唄戀情紫
（風月花情）春告鳥
春色園之梅
（洞房語艷）以登柳
（北娼餘談）春色袖之梅
（孝女貞婦）娜眞都翳喜（タマツバキ）
（光濤新話）玉うさぎ
（深情奇緣）辰巳の雪
花鳥風月初二編

## 梅曆閑情 春若草

此等の人情本中傑出した物は、『梅曆』の他に於て、『春告鳥』及び其の續編を推すべきである。

水野越前守が改革の餘波は、人情本に及び、天保十三年六月、春水は手鎖に、板元は過料に處せられ、著作せる人情本の板木は沒收せられて燒却せられた。春水は遂に其の歲七月十三日、手鎖中に五十四歲を以て歿した。彼の晚年は悲慘であつた。築地西本願寺地中妙傳寺に葬つた。

## 春色惠之花

六冊、溪齋英泉畫。天保七年板。

『春色梅兒譽美』『梅曆餘興 春色辰巳園』の前編として著はされたもので、唐琴屋丹次郎と此糸、米八、お蝶などとの馴れ染めのそも〱初まりを描いて、津藤をモデルにした、千葉の藤兵衛もちよッぴり顔を出してる。丹次郎が好男子の代名詞の如く、米吉、仇八が藝者の代名詞のやうにもてはやされたのを見ても、『梅曆』の世評高かりしが思ひやられる。

## 春色梅兒譽美

十二冊、柳川重信、重山畫。天保三年板。

米八、仇吉の喧嘩、藤兵衛とお由との再會、丹次郎を環りての紛紜せる情事のいきさつを敍して、讀者を魅するところ、流石に人情本の白眉たるに背かぬ。たゞし作者は「丹次郎が別段に名跡をたつる心願かなひ、繁昌の基を開く時に臨んで、お蝶は本妻となり、米八はお部屋さまとなり」、善人榮えて惡人亡び、お由、此糸、米八、お蝶が姉妹分になると云ふ、大團圓を以て編を結んでゐるが、大入り大當りの好評を得たので、更に續編を述作することとなつた。

## 梅曆餘興 春色辰巳園

十二冊、歌川國直畫。天保四年——六年板。

米八、仇吉の喧嘩から筆を起して、書名の如く深川を中心としての情話である。末段米八と仇吉との喧嘩も事なく收まり、丹次郎の種を仇吉が生み落したのをお米と名づけて、米八の實意に答へたと云ふ、至極々々太平の目出たし〳〵に終つてゐるが、作者の狡猾手段は、猶『梅ごよみ拾遺別傳』と割註して、次の『英對暖語』を出してゐる。

# 春抄婦景 英對暖語

十五冊、靜齋英一畫。天保八年板。

前編『惠之花』を出して足らず、猶續編として、此の書を公にしたのである。『辰巳之園』に出た藝者增吉の情夫宗次郎、お柳と云ふ裏長屋の娘の情人文次郎、別莊の若隱居岑次郎と紅楓お房の姉妹の情事を描いたもので、續編とは云ふものの、あかの他人の話である。『梅暦』の好評につけ込んで、作者のさかしらごとと見るべきものだ。

# 春色梅美婦禰

十五冊、歌川國直、靜齋英一畫。天保十二年板。

『英對暖語』の續編で、岑次郎を中心に、お京、お糸、お房などの情話、制次郎、お園、此等の戀愛關係を寫し、『梅暦』以來の丹次郎、米八、仇吉を點出し、最後には迎島にある岑次郎の別莊に、千葉の藤兵衛、小梅のお由、丹次郎、お蝶、米八、仇吉、制次郎、此糸、お園などが集まつて、目出度く此に大團圓となつたのである、編中に勾引、夢の段などうるさい程に多く、趣向の

燒直し、蒸返しは、氣の毒なほど作者の奚囊が空つけつになつてゐる事を證明する。あらずもがなの續編であるが、これでなくては讀者も承知せず、作者も承知が出來なかつたことと見える。

## 風月花情 春告鳥

十五冊、柳煙亭國直畫。天保八年板。

「梅暦」の丹次郎は、唯の若旦那であつたのに對し、この書の主人公鳥雅は、相當に斯の道の苦勞人であつた。此の男を中心として、お民、薄雲、小濱などの情事及びお熊、梅里の戀を描いたものである。此の作者が處々に夢を用ゐたことは、自身も心苦しかつたと見え、此の書の中に辯じて云ふ、

友人作者を難じて曰ふ、「子作る所の中本、夢の段を用ひざることなし、いと拙き所爲ならずや。」春水曰く、「そもそも予が著はす草紙は、いづれも人情の他を記さず、こゝに於て其の段取相同じ、故に狂言の如く今の世態にあたらぬ場は盡く夢となす。夢にして夢ならず、かくもありけんと思はるゝこともあるべし、こは書組と目前の同じきを變化する所爲とゆるしたまへかし。」

とあるが、苦しい辯解と云ふべしである。

續編としては「春色雛の梅」十五冊（天保九年板）があるし、「雛の梅」の別傳として、「春色園之梅」十二冊（同上）がある。

解題終

[illegible]

梅曆
發端

# 春色恵の花

# 自序

浮世にとほき山住の、春を數へて雪中に、先づ頼もしき冬至梅、其の香もゆかし白梅の、開きてしらせし柴折戸に、臥龍が隆中の才智ならねど、節知り貌の梅一輪、其の花びらの五年以來、板元畫工の丹誠に、木ぶりも仕上げし枝から枝、やうやく香の高くなりて、來る年ごとに看官の、まだかくと問ひたまひし、御ひいき故に深山木を、園に移して文永堂が、壽梓の中に一株の、根強き一品となりにたる、此の喜びに此の花の、根分か繼補の手入をせよと、文好むなる御得意の、すゝめに任せてまた更に、開く連中の花心、若やぐ春の一ト趣向、過日へ歲とる梅ごよみ、いとめづらしく溪齋が、久しぶりにて溪扉を、出づる雪間や初音の鶯の、やさしき美姿うつしたる、米八、於蝶、此糸か、まだ蕾なる惠みの花、惠みは則ち看官の、惠みを祈る發端六冊、全傳拾遺の實入にならつて、粹なる人の氣にも入り、鹽梅のよき御評判を、いく枝にも願ふ事になんありける。

中の孟陽

金龍山下狂訓亭

爲永春水誌

梅ごよみに猶
愛敬を添へんとて

香を含む梅の恵顔と春風に
ほころびて匂ふ花の口紅
乗合の袖の薫の梅が香を
むかうへわたす隅田の船長

琴通舎英賀

# 春色恵の花　巻之一

江戸　狂訓亭主人著

## 第一回

萬葉集に花といへば、梅の事ぞと定められし、櫻を花と稱するは、はるかに後の事ぞかし。そは兎も角も梅が香の、かをりを慕うてゆかしくも、こゝに説きおこす一回の物がたりは、昔々のことにして、鎌倉の北の方にいと賑しき五街一郭ありけるが、其の中に唐琴屋浦右衛門と聞えしは、郭に名だたる青樓にて、繁昌いはん方もなく、殊に仁慈のこゝろ深く、抱へし遊女を我が子のごとくいたはりて、不便をくはへそだてけるが、いかなる前世の約束にや、種々の薄命かさなり、また他の業にて損失つゞき、わづかの間に内外の不都合となり、浦右衛門はこれを氣やみに世を去り、その妻お賤といふもの、萬をまかなひ月日を過せしが、いよ〳〵内證むづかしく、借金のみ多くなり、心をいためありけるが、養子丹次郎といふものあれども、元貴人の種にして生得心やさしき許り、利をむさぼる

事はたゞ賤しき業と思ひ、慈悲ふかければ何事にも、哀れ不便が先に立ち、歎きて無心などいはるゝときは、親疎を論ぜずこれをすくひ、徳を積むことしば〳〵なれども、當時は損失多くなりて、後の榮えを看るまでは、婢俗のそしり少なからず。土地に似合はぬ母子の仁心が、かへつて唐琴屋の衰へとはなりしなり。されどさすがに家業がらにて、表をかざる郭の意地、娘お蝶に踊の稽古、また淨瑠璃の稽古にも、連れだつ抱への宅唄女二人あるが、かはり〴〵にさし添ひ通ふぞ立派なれ。今日も稽古に立ち出づる、時刻は巳刻を早起と、自慢は郭の人の常、長谷の觀音の中見世を通りながら、藝者勝次お蝶にむかひ、(勝)「お蝶さん、此の間の人形の似貌は出來ましたかえ。」(蝶)「イ、エまだだわ、芝翫ならば他へ遣るのが出來てるが、梅我のに奴を置いて、似合ふやうにするにはむつかしいとサ。」(蝶)「ほんに左樣だらうネエ、しかしちよつと催促をしてあげよう。」トいひながら、似貌人形茶番道具の細工名人と聞えたる、泉目吉が見世へたちより、(勝)「吉さんまだ出來ないかえ。」(小吉)「ヘイ大きにおそくなりました、モウ何したがこしらへてございますから、四五日のうちに出來ます。ツイ此の間お屋敷のかざりものの人形のお急ぎで、取りこんで居つたから延引りました。」(蝶)「オヤ怖いネエ、アノ首を御覽。」(勝)「オヤ眞にねえ。オ、氣味のわるい、あれは吉さん何にするのだえ。」(吉)「エ、あれは怪談のあつらへでございます。」(蝶)「夜見たらばどんなに恐からうネエ。」ト、立ちながら見てる折

から、唐琴屋の養子丹次郎、宅唄女の米八と前になり後になり來りしが、お蝶を見てビックリなし、丹「オイお米。」トいひながら、うろたへ南駒道の方へ引き歸す。勝次は此れをちらりと見れども知らぬ貌、お蝶は溫厚なれば氣もつかず、蝶「サアまゐらう。」勝「アヽ、チット急がうねえ。夫れおや早くお賴み申します。」吉「ハイ／＼、トキニ西川のおさらひは何日だネ。」勝「まだ知れないヨ。」吉「さうかネ、どうぞ道具を拵へ度いものだ。」勝「左樣いひませうハイ左樣なら。」ト暇乞をして、雷門を拔け並木の方へさしてゆく。道も女の癖なれば、他の噂や往來の、男の善し惡し品定め、土地がらなる洒落た氣に、自惚ばなしの小聲なり。勝「それだがネ、どうも惚れた男や好風な男の前では、何だか氣がおかれて、ろくに物もいはれないものだネエ。その癖お客なんぞは少しも恐れはしないけれど、素人氣になると男はどうも恐いやうだねえ。」蝶「アヽ、心やすだてに、ものはいひにくいヨ。」勝「お蝶さん、おまへは丹さんがよいか、大文字屋の春馬さんが好いかえ。」蝶「春馬さんは、草雙紙や中本作者だから面白からうネエ。」勝「イヽエ／＼、春馬さんはどうかしらないが、作者に好な心立の人はないとサ。」蝶「オヤさうかえ。それでよくいろ／＼なことが作られるネエ。」勝「お蝶さんはどんな男を見ても、丹さんのやうに好漢はないのサ。」蝶「オヤ／＼噓をおつきな。お兄イさんは私をばいやがつて、さつぱり構やアしないヨ、それだから憎らしいわ。」勝「イヽエ、それでも押しつけ御夫婦にな

つて御覧、どんなに両方でかはいがる事だらう。」蝶「イ、エ、お兄イさんは米八さんがひいきだわ。」ト、いはれて勝次は心の中、扨は利發のこのお蝶、丹次郎と米八の中を少しは悟りしか、今も確かに駒道へ引き歸したる二人の風情、羨ましいと女氣に、其の身も惚れた丹次郎、少しりんきの心にて、勝「ほんにさうお言ひだと思つて見りやア、米八さんがときぐ〜若旦那とをかしなそぶりだと思ひましたわ、面が憎いねえ、内室さんに左様言つてやらうかネエ。」蝶「アレサそんな事を母人さんに言つては悪いヨ、ひよつとお兄さんが、私でも言告けたとお思ひだと氣の毒だヨ。そして此の間うちから母人さんが、いろ〜苦勞してお座でだから、あんまり何角を聞かせては悪いヨ。」勝「ナニおかみさんに言ひはしませんがネ、あんまり他が見ても看憎いほど、いやらしい事がありますわ。不斷女郎衆の仕うちを、見てゐる私どもでせへ、あきれる節があるから、素人の宅ならどんなかと思ひます。此の間も此糸さんが、仲の町へ往かしつた跡で、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○つしやる、米八さんは島田の髷を引繰りかへして、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○、何の氣もつかず行きあはして、誠に氣のどくでありましたわ。」蝶「オヤ喧嘩をしてかえ。」勝「大かた左様でございませうヨ。」ト、笑つて行くむかうより、櫻川新孝勝次を見つけ、勝「杉の森へ

稽古なら、モウ／＼おそい／＼。」勝「オヤ新孝さん、この間はチットお出でなさいませんね。」新「ハイよろしく。」ト別れつゝ、なほも道草くひながら、たどり／＼行きなやむ、お蝶が案じは丹次郎、まだ年ゆかぬ心にも、始終夫と思ふ身に、少し恨む涙顔、勝次にそれとさとられまじと、いひまぎらかす獨言。米「アヽ、痛い、眼の中へ塵がはひつた。」ト、襦袢の袖で顔を拭き、「頭巾をおくれな。」蝶「オヤ私も冠らう。」ト言ひながら、疊んで持ちし御納戸縮緬の頭巾をお蝶にわたし、其の身もかぶりて二人連、目につく娘と眞女風姿、往來の人に見返らぬ、者もあらざる郭の癖、日毎にうはさの通ひ路を、稽古所さしてあゆみけり。それはさておき米八は、お蝶勝次をやり過ごさんと、小戻りしたる駒道り、行き當りから鳥羽長屋を、舟川戸のかたへ出で、河岸を通りて吾妻橋を、わたる中さへ右左、いそぎ急いで小梅の方、人目つゝみを左になし、業平橋の此方なる、心あたりを尋ねゆく。米「何處へお出でなはるんだえ。」丹「何處へでもいい所があるヨ。」米「ナゼだえ、いつもの所は悪いかえ。」丹「わるくもねえが、また途中で誰ぞに逢ふと面倒だから、此方へ來たのだ。」米「そんなにお蝶さんがこはいかねえ。」丹「こはいわけもねえが、勝次や何かが口がやかましいわな。そして母人さんがいろ／＼身上の事で、氣をもんでお出でなさるのに、榮耀らしく遊んで歩行いても悪いわナ。」米「それだからそれ、私をやめてしまつて早くお蝶さんと、御婚禮をなさるが宜うございます。」丹「さうか、そんな

ら左様しようが手前どうする。」米「どうもしませんわ。」丹「いい心あたりでも出來たか。」米「こゝろ當のねえでもねえが、まさかそんなにしたくもないのサ。」丹「ナニ〳〵、遠慮はないから勝手にするがいい。」トいはれて忽ち米八は、くやしさうなる顔色にて、米「わちきの勝手にしようといふのではありませんが、おまへさんのお爲にならない事を、くよ〳〵とおもふ中へ、今のやうにおいひなはるからさ。」丹「そして手めへはどうするといふのだ。」米「死んでしまひますのサ。」ト、云ひはなして涙をこぼし、うつむいてあるきしが、跡のかたへ引きかへす。そも〳〵米八が生質、かかる奉公するといへども、正直一途にして心やさしく、また發明なれども、此の年やう〳〵十七歳なれば、なかなか唄女の風にあらず、たゞの娘のこゝろにて、其の中にも抱へられたる主の息子なれば、すこしは奉公人といふ遠慮もありて、愚癡の出るも無理ならず。されど今日は思ひきつて、我がまゝにすねて見せるも戀の智慧、けしきをかへて早足に、跡へかへるは身でも投げるといふ風情を、口にはいはで丹次郎に、それと思はする手くだなり。丹次郎もすねるとは知りながら、米八の跡をしたひ、人目を憚りつゝも前後見て、丹「コレサお米〳〵、オイ米八コレサ〳〵。」ト付いてゆく。子供喧嘩に等しけれども、こゝが戀路のならひにて、理窟も道理もこの道は、別なるものといふ事は、かならず諸君のごぞんじなるべし。

# 第二回

丹「オイ〳〵儀助や、今の物を平岩へさう言ひつけて置いて、それからちよいと向う越しをして、（これはつだづゝみより、さんやぼりへのり切る事をいふなり。）眞土山の表門の際に、花井觀光さんといふ、人相を見る先生の所へ、これをもつて往つて、どうぞお願ひ申しますと言つて、見て貰つて來て下せえ。」儀「ハイ〳〵。」ト、墨色の一の字を書いたのを受取り出てゆく。米八は（せんこくよりあたりを見まはし、）米「若旦那こゝの宅は何でございますえ。」丹「爰は百姓家サ。」米「どうして知つていらつしやるえ。」丹「何今の親仁は養父さんの時分に居た、臺所の下ばたらきをした男で、そして毎時街へ掃除に來るわ。」米「ヲヤ左樣でございますか、さつぱり氣が付きませんわ、獨身者かえ。」丹「イヽニヤ、嚊は土手の際へ團子茶屋を出して居らア。」米「ヲヤさうでございますか。」丹「そりやアいいが、手めへ今途から何處へ行かうとしたのだ。」米「川へでも飛び込まうと思ひましたわ。」丹「べらぼうめえ、とき〴〵狂氣を起しやアがる。それほど死にたかア殺してやらう、サア爰へ來ねえ。」ト手を捕へて、引きよせる折から村の若衆四五人、若い衆「ハイおたのみ申します、牛御前さまの月集めでございます。」トいひながら、臺所の土間へどろ〳〵と這入るゆゑ、米八はビツクリして飛び退く。丹次郎も周章てて立ち出で、丹「ハイ〳〵只今留守でございますが、何なら私が上げて置きませう、いか程でございますか。」若い衆「ハイ、左樣ならば又參じま

せう、それとも下されますならば、六十八文づゝでござります。」丹「そんならば、亦お歩きなさるも御面倒だらうから、私が出して置きませう。」ト、出してやれば、村の人々禮をのべつゝ歸りゆく。米「ア、引びつくりした。」丹「ナニびつくりする事があるものか。」米「それでも大勢來ながら足音もしませんものを。」丹「それはそのはずさ、土のやはらかいのに雪踏ははかず、みんな草履だからョ。」トいひながら、また米八の側へよりしが、近邊を見て庭へ立ち出で、藪垣の入口にある無細工なる竹の木戸を押し立て、繩にて柱へ結びつけて、元の席へ入り笑ひながら、米八を押し倒して脇指を拔き持ち、丹「サア死にたくば殺してやらう。」米「ア、嬉しいね、サア／＼早く殺しておくれ、その方が氣がもめなくつてよい。」ト脇差の下を潜りて、笑ひながらしがみつく。丹「コレサ無暗な子だぜあぶねえ。」ト、脇差を片脇へはふり出す。米八は麥藁細工の多葉粉の筥を枕にする所へ、此の家の女房は亭主が言ひつけたると見え、片手に茶の土瓶、片手に燒團子をもちて、脊戸の方なる椹木の垣根の破れをくゞりて、臺所より入り來りしが驚きて、女房「これはしたり、マアあなた方は刃物を拔いて。」ト、いはれて二人は亦ぎやうてん、うろたへながら丹次郎、丹「ナニ／＼じやうだん／＼。それはいゝがお前は見世をあけてどうして來た。」女「イエ今儀助が見世へかけよりまして、郭の旦那がござつたから、早く煮花をこしらへて宅へ持つて行けと申しましたから、うろたへて拵へて參りました。

お團子はあがりますか、何だか醤油の付燒だァから、少しマアあがりまし。」米「モウ大きにお世話さまでお氣の毒な。」丹「サア〳〵構はず見世へ往きなせえ。」女「ハイ〳〵、左樣ならば御ゆるりとお休みなされませ。」ト、また裏口より歸りゆく。丹次郎は跡より立ちいで、小便をしながら脊戸の方の垣のくづれを見つけ、緣頰へ上りながら、丹「なるほど田舍は氣樂なものだ、入口の木戸をしめりやア、裏ぐちは行き拔けでも、構はねえとは神代の樣だ。」トいひつゝ、横に寢ころび、丹「ア、引今日は誠に精が盡きるぜ。」米「田舍だから他は來ないと思へばじれつたいねえ。」丹「どうもしかたがねえ、マア附燒團子で一斤二百でも呑みな。」米「オヤほんにお茶をあげようねえ。」ト、茶をくみてさしいだし、「團子はヱ。」丹「オイ〳〵一本やらかさう、手めへはいやか。」米「わちきやアモウ。」丹「へ、誰に見えをする。お客は居ねえぜ。」米「ナニお客に見えをしますものか、おまはんにする見えだわ。」丹「しやれるなしやれるな、俺をば馬鹿にしきつて居る癖に、チット亭主は亭主の樣にする物だ。」ト、いはれて米八ぞつとする程うれしけれど、不躾らしく其の氣で居るともいはれず、まじめになつて、米「ナヤほんたうに心づかひでありますヨ、たゞさへ愛想をつかさうと、思つてお出でなさるものヲ、そんな色氣のないものをたべて、いよ〳〵捨てられるといけないから、たしなみませうヨ。」ト愚癡らしくいふ。丹次郎はなほもちやにして、丹「だん子はたしなむだらうが、さつまいもはたしなむ事は出來

めえ。さつまいもを喰ひ過ぎると取りみだす癖に。」米「譃をお吐きなさいねえ。何時私がそんな事がありました。」丹「いつでも取り亂さア。ドレその證據を見せよう。」ト○○○○○○○○。米「アレサマア私もお茶を呑むわね。」と、丹次郎の呑みかけし茶を採つて、さも嬉しさうにのみ、又茶をついで二口三口のみ、歯をならしてくゝみし茶を、縁頬より庭へ吐き出し、軒端の梅の蕾をちよいと、三ツばかりもぎりてかみながら、○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○、その心づかひ細密にして色情をふくみ、しつぶかならずしてその情ふかく、諸事のとりまはし十七才の處女には、珍らしくも如在なきものならずや。かくて平岩の酒肴も持ち來り、儀助も歸り來りしかば、酒食はそこ／＼にして爰を立ち出で、みめぐりのうしろの方の通を、ぶら／＼と歩行きながら、丹「それぢやァおめへは、うしやの鳫木から乘切つて、すぐに歸んねえヨ。」米「アイ、それだがおまはんも早くお歸んなさいヨ、何處へも寄らずに。それが苦勞だわ。」丹「またつまらねえ事をいはずとも早く往きな。」米「今まゐりますわネ、そんなに邪魔になるかねえ憎らしい。」丹「エ、イいつまでも同じ事を言つてゐらア。」米「ハイ／＼、それぢやァまゐります。」ト、二足三足別れしが、また立ちとゞまり、米「アイどうせ通り道だから、堀のお津賀さんの所へ、ちよいと寄つても遲くはありませんヨ。」丹「延津賀さん所へ往つたら。」米「お蝶さんにも清元を教へてくれろといふ言傳かえ。」丹「べらぼう

めえ、エ、なんだつけナ、それ〱、兼様に此の間の月並の摺本は、まだかといつて聞いてくんないそしてあんまり長く居ちやァわりいぜ。」米「ナニサ辨天さまの御靈像を、いたゞいて貰はうはずだから、それを聞いてだきに歸りますヨ。」丹「さうか、そんならば急いで歸んねヽ。」米「アイ。」と丹次郎の貌を、珍らしさうに見て莞爾と笑ふ、そのかはいらしさ丹次郎が眼には、衣通姫も小野の小町も、これには過ぎじと思ふなるべし。だきよせたきをこらへて、丹「サアきり〱いかねえか。」米「アイそれぢやァきつとでございますヨ。」丹「なにを。」米「アレサ今のことをサ。」丹「ム、上谷町のはなしか、承知だ〱。」米「だましちやァいやでございますヨ。」丹「しれた事ヨ。」ト、たち別れるをまた引き止め、米「アレサヽァ。」丹「何だ。」ト寄り添ふ折から、畑より土菜を荷ひし人來たれば、米八は丹次郎が手をちよいとつめり、笑ひながら早足に別れゆく。

春色恵の花卷之一　終

# 春色惠の花　卷之二

江戸　狂訓亭主人著

## 第三回

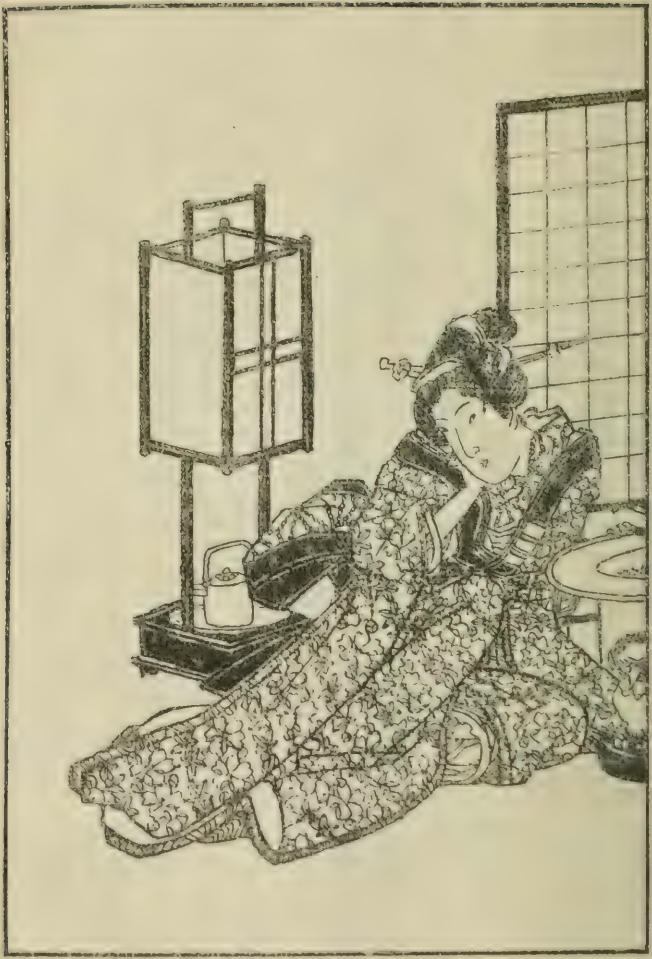
こゝに唐琴屋のおいらん、此糸が深く契りし半次郎といふものの、其のなれそめをたづぬれば、まだ此糸がこの郭へ來らぬまへに、半次郎と思ひあうたることありて、それがたがひの緣なれと、かはらじものとのやくそくも、變るならひの世の中に、儘ならぬこともありし故、たがひに程を隔たりしが、まためぐり合ひて命もをと、深く心を通ぜしなり。そも半次郎は武家の種にて、正しき身分にありけるが、繼しき母の惡みによりて、爺親へ讒言なし番場の町の莊屋なる、中野鄕造といふ緣者の許へあづけられ、しばらく閑居して在りしころ、鎌倉の町の大火によつて、この莊屋鄕造の許へ逃げ來りし親類三四人ありけるが、その中に十六七才の娘あり、姿形容のうつくしきこと、たとへるにものもなく、また心ざまもやさしくて、實に絕世の美人なり。この節半次郎は二十三才の當世風の息子に

て、女にすかるゝ容體なりしが、互に思ひは内心にあれども、遠慮がちにて過ぜしが、或とき家内は殘らず他行ひ、かの娘お絲といふ者と、半次郎のみぞ留守居をなせり。その日は夕方より大雨にて、嵐のごとく降りければ、出で行きし者もかへり來らず、主人郷造さへ歸らざる由を、我が門通る人に言傳なしたり。夜にいれば雨はいよ／＼はげしく、爲方なければ半次郎は、表の木戸より茶の間臺所諸方の雨戸にしまりをなし、要心をよく念入れて、座敷にいたれば彼の娘も、勝手しれざる家内まごまごしながら、其の邊を片寄せあんどうをてらし、油を注ぎ居る所へ、半次郎はやう／＼と手を洗ひ、拭きながら爰へ來る。娘は少し笑顔にて、 絲「まことにモウ／＼、勝手がしれませんから、どういたしたらよからうとぞんじますヨ。」 半「イヤモウ、出しぬけに留守居をさせられるものだから、おたがひに大まごつきサ、やう／＼の事で諸方をしめてしまひやした。トキニマア大そうにひどい降だねへ。」 絲「まことにこはい樣でございますヨ。」 半「なにか怪物でもするのでございませう。マアどうも仕方がないから、今夜ははやく寢るはうがよからう。といつた所が自分々々に、此方の座しきと遠方のざしきへ、一人づゝ寢るのだから、どうか少し氣味がわりいやうだ。」トあたりを見まはす。お絲も火鉢のそばへよりよりながら、身をぶる／＼とふるはし、 絲「ほんにこの樣な廣い宅は、人がすけないと隅々が百られるやうでこはうございますヨ。」 半「さうさ。そして鎌倉の中とちがつて、こゝは半分田舎だ

から、人がすけないと直に狐や狸がつけ込んで出て來るし、また舊い家には物の祟りや恨みの念などが在つて、惡くすると幽靈なんぞか出たがるものだから、まことにモウそれが否さね。」ト、さも氣味わるさうにいふ。糸「オヤ〳〵氣味の惡い、實正でございますかえ。」半「ナニ大ぜい人が居ると何の事もないが、さみしい陰氣な所へつけこんで、出るから困るのさ。」ト、まじめにいはれて、娘はおどおど、にはかに脊中の方を見返りて、糸「オヤ、今何か奥の方で音が致しましたヨ。」ト、いふ顔いろ、あどけなくもかはゆらし。半次郎はわざと身を縮め、半「エ音がしたとえ、ア、いやだ〳〵。」糸「どういたしたら宜うございませうねえ。」半「左樣さ、どうもしかたがないから、マア觀音さまでも信心して居るより外は仕樣もないのサ。イヤ何かわすれたと思つたら、お夜食をまだ給べない奴さ。」糸「ほんにねえ雨のさわぎとこはいので、お飯のこともわすれて居りましたわ。そして何が何處にございますか、私には知れませんけれど、マアお臺所へまゐつて、お膳の道具をたづねて參りませう。」半「ドレ私も往つて手傳ひやせう。ナニ〳〵何でもかまはず、引きずり出してやらかすのサ、どうも仕方がねえ。」糸「オホヽヽヽ、叔父さんや何かがお歸りなさつたら叱られませう。」半「ナニ構ふものか、こはいから夜通し起きて居たゆゑ、何も角も喰べてしまつたといひやす。」ト笑ひながら、二人して勝手の方へゆき、膳茶椀そのほか飯菜の品々をたづね出し、やう〳〵と座しきへ運び、茶をはうじて土

瓶にいれ、 糸「わたくしはよいが、お前さんの上る物がないから、悪うございますネエ。」 半「イエどこ
うもしかたがねえ、どれ。」トいひつゝ、蓋物を殘らずあけて、 半「ヤヤ／＼鐵火味噌に座禪豆梅干、
こりやヤ何だ鹽押しのなすびと、こう荒たうがらしか、まるで金山寺やが荷をおろしたやうだ。」 糸「ホ
ホヽヽヽ、それでも納豆はありませんヨ。」 半「否わたしは何よりのおかずがあるからいゝ。」 糸「イ
ヤおまへさんのお菜があるならば、それを少し私にも下さいましな。」 半「わたしはあげたくッてもネ、
おまへの方にあるのだから、どうもしかたがねえ。」 糸「オヤ／＼、私のはうには何もお菜を隱して持
つてはをりません。」 半「イヽエ澤山ありやす。」 糸「何所にえ。」 半「コレこゝにありやす、何より美味
い愛敬をもつてお出でぢやァないか、わたしはそのかはいらしい顏を見ながら、お飯菜をたべれば、
蒲燒も玉子もいらねえ。おまへは氣障だらうが、今夜許りは雜交膳でたべておくれ、此樣な事に亦と
ないから。」ト、ゑみを含んで少しまじめにいへば、お絲ははつと顏あからめしが思ひ切つて、 糸「お
まへさんこそ、その人愛で諸方の娘や女郎衆をお迷はせなさるだらう。」 半「此方でばかりまよつて、
つひぞ女の方で迷つたことはないのサ。」 糸「嘘ばッかり。」ト笑ひながら、半次郎の茶椀へ茶をかけ、
糸「サァお茶をかけましたヨ。」 半「オヤ／＼、これははゞかり、ア、美味い／＼、どうぞ少しの間でも
いいから、斯うして食事を給べたいものだ。」 糸「おまへさんの好女とかえ。」 半「さやうサ、お絲さん

雨夜の怪談
月老



といふ、まことに〳〵かはいらしい娘ごッしかしおよびもねえことだ、此樣なことをいつて氣障がられるより、あきらめて早くおまんまを給べてしまはう。」ト、いへども娘は心のうち、何とあいさつしてよいやら、またなぐさみのじやうだんに、いふやらしれぬ男の心、なまじひなる返事をして、さげしまれんもはかられずと、用心すれども惚心、顔にあらはれて何となく、溜息をつくその中に、まんざらでなき戀の情、自然と知れて半次郎が、心のうちに悦べど、まさかに手出しもならざれば、言葉途ぎれてさし向ひ、やう〳〵食事もすみけるが、雨は漸々に強くなり、風吹きあれてすさまじく、雨戸に當り植込の、木ずゑをならし鐘の音も、遠近にしてものすごく、うしろ見らるゝ片明り、寂しきまゝに搔き立てる、瘦燈心に數をまし、百物語にあらねども、底ごゝろある半次郎は、化物ばなしの實錄らしきを、二ツ三ツ四ツかぞふれば、はや子刻の鐘きこえ、間が惡けれど娘氣の、こはさに堪へ兼ね男に向ひ、糸「半さん、お否でも今夜は此のおざしきへ、私の牀もしかして下さいましョ

半「どうござうしておくんなせえ。何だかうすッ氣味がわりい。」糸「アレサそんな事をお言ひでない、だん〳〵こはくなりますワネ。」といひながら○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○、わたりに舟の梶をたえ、浪立つ胸のやるせなく、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○

○○○、○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、半「ア、さむいさむい、○○○○○○○○○○○○○○○、爲方がない。」ト恨みがましくいふ。此の時は、はや小夜ふけて、風はしづかになりにたれど、雨水つたふ軒のつま、音さへすごくもの悲しく、木かやも眠るとたとへたる、丑三ツ頃にやなりぬらん。氣味わろければ兎にかくに、前後見まはす夜著の袖、落ちつきかねし折節あれ、お絲が見かへる次の間の、隔ての障子にあり〳〵と、うつる火陰ともろともに、髪ふり亂せし女の幽靈、お絲は見るよりソットばかり、一聲たてて夢中になり、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、半次郎も恐るゝ風情、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○、やゝありて半次郎はお絲に向ひ、半「こはかつたかえ。」（おいとは小ごゑにてふるへながら、）絲「アレサ口をおききなさいますな、まだ居るかも知れませんよ。」ト、○○○○○○○○○ふるへる。半「ナニサもう蠟燭へ火が移ツたから、幽靈はもえてしまつたアナ。」絲「いうれいがもえたとはえ。」半「アハヽ、ヽ、ヽ、正體を見せようかえソレ。」ト障子を明ければ、手燭にともせし蠟燭の、傍にある化物らふそくの袋をとつて、半「それ御覽じろ、中店で賣る泉目吉が新工夫、なんとうまい細工だらう。」絲「オヤ〳〵、私はまたほんたうに幽靈かと思つて、どんなに膽を潰しましたらう、アヽ、怖かつた、コレはゞかりだが御覽なねえ、○○○○○○○○○○。」ト ○○○○○○○○○○○○○○○○。

半「すやほんになう。堪忍しな。」

## 第四回

半次郎は氣のどくになり、右の手にてお絲が脊中をさすり、左の手にて鳩尾のところをおさへながら、 半「まことに臆病だなう。」 絲「それだと言つて、宵ッからして思ひれこはがらしたあげくに、化物のはなしで、モウ〳〵こはくッて〳〵ならない所へ、幽靈が見えたものォ。」ト、涙ぐんだるおどろきに、若しこの上に癪などが、おこりもせんかと案じられ、見れば看るほど近増り、貌の艶色はいふもさらなり、雪の樣なる衿元に、梅花のかをり仄かにして、少し亂れし黑髪の、貌にかゝるも愛敬ありて、かはゆらしき姿なるに、○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○、見ぬふりをして横目にて、半次郎の貌を見れば、芝翫の少しやせたる容、眼すゞやかにいやみなく、物やはらかなれども勇壯みはだなり。そもや月下冰人達が、此樣な息子や娘をば、一緒に倚せてすみやかに、添ふもそはれぬ氣苦勞を、さするは何のいたづらぞ。無き縁ならば神力にて、私情の出來ぬ樣に、その用心こそ願はしけれ。嗟なにとせん儘ならぬ、色の世界ぞ是非をいふ、道理はたえてなきことか。○○○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○

〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。斯くて此のすゑ両個とも、薄命なる事のかさなりて、半次郎はしばらく田舎へ漂泊ひ、お絲は唐琴屋へ身をうりて、此糸といふおいらんにはなりしなり。それよりはるかの月日もたちて、たがひにわするゝといふ事にはあらねど、あはれぬ中かとあきらめて、過ぎゆきにしのかなしくも、笑うてくらす浮き勤め、全盛なるほど萬の事に、心づかひもいとおほき、郭のならひか此糸が、まだ何事も他任せ、なれぬ苦界の夜見世ごろ、鈴の音ひゞく表二階、客を歸して只一人、物思はしきその風情、折節新造絲花が、せはしくかけ來り、花「おいらんエ。」此糸「なんざいます。」花「アノウ、今吉田屋の宅から聞きに參りイしたから、つれ申しなと言つてやりましたが、ようおツすか。」作者曰く、しんざうの一存にて、茶屋へあいさつせしはいかにとなれば、此糸をこゝろやすだてにおもひゐればなり。此糸「アレサ制たらことわつてくれなましな、此樣にふさいで居りいすものを。」花「オヤ左樣さいますか、惡い事をいたしイしたねヱ。それならアことわりイしようか。」このいとはすこしかんがへて、「ナニようさいます、左樣するとまた此川さんが、番しんの事なり。何だのかだのと申しイすと惡うおツス。」花「オヤ此川さんは今牀ざいますから、何も知りはしイせん。そして里風さんだから夢中で居ますヨ。」トいふはたしかに此川のいろをとこなるべし。此「オホヽヽ、左樣ざ

ますか、それでもマア吉田屋の宅へわりいから、斷りイすまいヨ。」ト、何事も遠慮がちなる身のおこなひ、女郎唄女も素女も、愛敬ふかきものぞかし。かゝるはかなき草紙などを、よむにつけても心を用ゐ、卷中なる人物の善し惡しを手本になし、常の行ひをつゝしみ給はば、めでたき人となるのみかは、自然と愛も深かるべし。それはさて置き此糸は、貌を直して支度する所へ、此のほど居つゞけして、今かへりたる客人の、また途中から引きかへして、轉び込んだる大生醉、ことに毎時でもすねる癖、他いびりなる根性惡者、されど麁略にならざるは、つき出しよりの客人にて、諸事を世話して金の面、はり通したる不人品、何か心にさはりしやら、當りちらして此糸を、側へ引きよせはなさばこそ、下らぬくだを卷舌も、まはりに取りまく若いもの、遣手を始めおじぎのつるしよう、とりはやしたる大盡の、威光はつゞるも面倒なれば、看客よろしく察したまへ。これに引きかへ初會にて、この家へ來りし吉田屋の、客はさみしきまはしの座敷。氣の毒さうに新造絲花、「もしえ、初の名ざしを此のやうに、まだお目にもかゝりなんせんから、おいらんがどんなに氣をもんで居さつしやるか知れませんけれど、作者曰く、近頃さとことばとしろうとの、只のことばとまじりていふがおほくあり。誠にあいにくでおッす。もしも餘りなしかただと思ひなますなら、御遠慮なしに他のおいらんを呼びないませんか、隨分ほかにもいい女郎衆が居りイすから。」客「ナニ〳〵いいわな、おめへが其樣に氣のどくがる譯もねえ、こゝへ來ると急にさし合ひ

の出來たので、吉田屋も氣をもんでその事を言つたけれど、少許此方に料簡があつて、自惚らしいがまだおいらんと杯もしねえのに、名代でいいから聞があつたらば、ちよつと近付になればいいゝそれも聞がわるけりやァ再度來てあはうと、初手から承知のまはし部屋、かならず氣をつかはずといいヨ。おめへもかまはず往つて寢な。しかし今吉田屋がいひ付けて置いたもの有、何か持つて來るだらう、それをたべてから寢るとも、遊びに往くともしな。」ト、やさしくいへば新造絲花、まだなじみもなき客なれど、男もほどもよきのみか、深切らしき言葉の樣子、貌をながめて居たりしが、何思ひけん立ちあがり、 花「ちよつと往つて參りイす。」と、にはかにらうかへ驅け出し、此糸が座敷にいたりて看れば、○○○○○○○○、彼の居つゞけの生酔客は、寢入りしとおもはれて、しづかにはなし聲も聞えねば、よく〳〵伺ひ新造絲花、障子の外より小聲になり、 花「おいらんえ〳〵。」ト、いへど返事もなさぬは、寢入りし客に知らせじと、心づかひの故ならんと、すこしやうなしして佇めば、案にたがはず此糸が、そつと拔けいで襠も、靜かに外し屛風の外、 此「絲花さんかえ。」トいひつゝ、廊下へ出で、これも小聲に、 此「吉田屋の客人はどういたしイした。」いろ男の來りしにはあらず、このやうに本間のきやくをおそれるといふはいかにぞや。つき出しより萬事せわをなすを恩にかけ、ことに此のせつあげづめになしておく中ゑ、もちまへのむづかしき事をいはれるがつらければ、かくのごとくようじんするなり。 花「吉田屋の客人がネ、誠におとなしくして居さつしやるから、氣のどくで〳〵なりイせんのに、信にやさしく何かを氣をつ

けなんすから、何だか悲しくなりイした。そしてどうも、ものかずもいはず、いやらしくもなく、男ぶりから氣だての樣子が、まことに好いた客人さますから、おいらんによろこばせ申さうと思ひイして、ちよつと驅け出してまゐりイしたのでございます。」此「すヤばからしい、私やァまた吉田屋のがいいやうにわけをつけてくれさしッて、誰か出してくれなましたか、また他へでも往きなましたのかと思つて居りイしたが、それにしては絲花さんが、ちよつとも座しきへ貌を出さつしやらねえのは、どうなんしたかと考へて居りイした所へ、呼びなましたからそつと出てまゐりイした。それにまた見なまし、あいにくと意地わるが立ち戻つて來て、何だの角だのとむつかしく、依怙地なことばかりいひすワナ。」花「さうざますか、いつも〳〵面がにくうおつすねえ。マア間がよかァ、ちよつと吉田屋のへ往きないましな。」此「ア、左樣いたしいせう。」ト衣紋を繕ひしが、此「著改へて出イしようか。」花「ナニそれでようざますわナ。」此「それぢやァ跡を氣をつけてくれなまし。」ト、行きに蒐るを引きとめて絲花、絲「おいらん。」此「何ざます。」絲「お迷ひなんすなえ、よつ程好い男ざますヨ。」此「ばからしい初會の人ざます、其樣な薄浮ぢやァおッせんヨ。」ト笑ひながら、廊下をばた〳〵別れゆく。折節奥の見通に、一座も多き賑しさ、野夫の好みか米八といふ、宅唄女のこゑにて、

淨るり へ初のごけんにほれたきやく、とこへも早うゆくはずを、一座の前もなんのその、あすなぶら

りよとまゝにして、こゝろでやぼな閨いそぎ。（下界）

奥に聞ゆる浄瑠璃も、これ此糸のつじ占とも、知らねど新造絲花が、好いた男と一言の、うはさも心にたのもしく、やがて一間をさし覗き、ビックリおどろく胸のうち、はや涙ぐむ女の情、おもひ乱るゝばかりなり。

これより一間に入るさまは、次の五回にくはしくしるす。

春色恵の花巻の二 終

# 春色惠の花 卷之三

江戸 狂訓亭主人著

## 第五回

そも吉田屋よりおくられて、此糸名ざしの初會の客は、番場にありし半次郎、久しく田舍へ行きたりしが、このほど僥倖なる事ありて、いさゝか都合も直りしかば、田舍より鎌くらへ立ちかへり、お絲が身のうへをたづねし所、薄命ゆゑ憂きつとめ、今は唐琴屋のおいらんとなり、此糸といふ全盛にて、さとに名高き指折りなりと、聞いて心にこゝろよからず思へど、人の吉祥不祥さだめがたきが常なるに、よんどころなきことよりして、遊君契情となるものを、貞女ならずとにくむのは、屆かぬ此方の勝手づく、便りなき身とするゐかけて、頼まれしこの半次郎が、田舍へゆきて音信もせざりしゆゑに、さぞかしな恨みもしけん、戀しくも思ひしならんと尋ね來て、それとはいはず初會から、廻し座敷の寂しさを、こらへて宵から待ちわびし、○○○○○あんどうを、枕もとにひきよせつゝ、懷中

硯をとりいだし、鼻紙ひらいてむだがきの、姿を障子の外面よりして、さし覗きたるこの糸が、飛びたつばかり嬉しさを、また恥かしき此の姿、縱ひいかなることありても、操を破りて多くの人に、まみゆる事はせぬはずと、はら立たしくもあらうのに、心ながくも宵よりして、やさしき噂は絲花が、知らせに聞いていとゞなほ、戀しさまさるその人とも、思ひがけなき半次郎の名、なにかの話してよからうやら、別れて後の過ぎ越しかたも、また今さらに悲しさの、數をそへたる女の氣、胸に一ぱいせき来るなみだ、こらへかねては聲たてて、むせかへりッ、障子のうちへ、まろびいりしが○の側、糸「半さんまめで居なましたか。」トいうた許りに泣き伏せば、半次郎は兼てより、承知ながらもひつくりし、しばらく言葉もなかりしが、まづ何がなく○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○○○、涙をはらはらと落し、○○○○○○○○○○○、半「不實な男と思うだらうが、マア何も角も堪忍しなヨ、コレサお絲ばう。」ト、いはれて嬉しさ此糸は、涙を拭いて半次郎の貌を見つめ、糸「モシエ半さん。」半「エ何だ。」糸「ぬしは私がこんな身になつたのを、やつぱり憎いとも思つてはおいでなんせんのかえ。」半「ナニにくいと思ふものか、おれが別れて便りもせず、まして助力になるほどの事もなかつた過ぎし日を、氣のどくにこそおもつて居る。しかし今ぢやアこの北里で、一二をあらそふ噂のおいらん、おいらの様なものが娘の時分のなじみだとい

はれたら、おめへの外聞がわるからう。たゞ一通りの初會の客だと、新造衆にも左様言つておきな。此のすゐ好男の邪魔にならねえ様に、折節來るから最ういやらしい事はなくともいい、また化物ばなしでもして遊ばうわな。」ト、少しすねたる言の葉も、惚れた女の身にとりては、いとゞ戀慕の増すかがみ、くもりなきといひわけなしても、さすがに色里のならひとなりし薄情のつとめ、いひわけくらきじれつたさ、胸にあまりし浮きことを、くはしく語りあかさんにも、只悲しさが先だちて、とゞめかねたる涙の雫、はらひもあへぬ折もをり、新造絲花があわたゞしく、これはたしかに本間のきやくが、やぼにはらをたちし事ならんか。花「おいらんえ〳〵。」と、障子の外よりよびたつれば、此「アイ。」ト返事も涙聲、半次郎は手を放し、半「アレせはしなく呼ぶ聲は、あつちの客がやかましくいふのだらう、ちつともはやくマアいきな。」此「ナニ宜うざます、はらァたつたらそれ切りに。」半「イヤ〳〵、それはわりい料簡だ。自惚らしいがまだいろ〳〵はなしをしたり、聞きもする心で今夜來たこの身、ハテ兎も角もゆるりッと、たがひに信な咄もしよう、今に限つた事ぢやアねえ、マアちよつと往つて來な。」花「おいらんえ〳〵。」此「そんなら往つてまゐりんす、急度まつてお出でなましョ。」ト、泣顔かくして廊下へたちいで、絲花ともろともに、表ざしきの方へさゝやきゆく。既にその夜もひけ過ぎて、本間の客も腹を立つてたちかへり、半次郎はそれよりさきに絲はなに斷りて、そこ〳〵に出で行きけるが、ふけゆくまゝにしん〳〵

と、地まはりの聲もすがれ、はるかに土手のあたりにて、餅舂き唄ををかしげに、うたひなふひの聲さへも、いと哀れに風が吹き送る夜の寒さのしみ〴〵と、身にしみわたる此糸は、一人本間にものおもひ、すねて歸りしその人は、つらにくければ氣にもせず、またあすの夜と絲花に、言ひおきかへりし半次郎の、おとなしくもなつかしく、もだゆるばかりに氣のもめて、折角たづね來し甲斐も、涙の貌を見せしのみ、焦れし程の女には、あらざりけりと愛想をつかし、もしこれ限りとなりもせば、再度合はんよすがもなし。文の便りも何處其所へと、届けどころも聞きおかざれば、今さらにまた篤かなく、寐りもやらぬその所へ、絲花は彼の半次郎が、座敷に出でし臺の物、酒肴等を本間へはこび、

花「おいらんえ、お茶をいれエせう、おまへんまをおあがんなましな。」此「アイ。」ト、言つたぎり鬱いで居る。絲花はさし覗き、花「おいらんえ、吉田屋の客人の事でおふさぎなんすかえ。」此「なぜさネ。」

花「大かた左様ざいますだらうと思ひィすわ、それも無理ではおツせんよ、餘程好いた人さんざますわ。どうぞおふみをかく、よんでおあげなんしな。」此「どうも覺束なうおツす。」花「文をお出しなましな。」此「まさか吉田屋の内へ初會文も出されませんわな。」花「ほんに左様ざますねへ。」トいひながら茶をはうじ、煮花を拵へ、花「サアマアおまへんまでもおあがんなまし。」ト此糸を起して、だらり〳〵と氣ながに膳へすわり、これより二人が種々と、客のうはさをする中にも、此糸は半次郎がことをの

み思へども、さすが絲花にもくはしきはなしはされもせず、またなじみなき男の身のうへ、憂さはらしにものゝけにも、ならぬ辛氣が癪のたね、しをノヽとしてふしどに入れば、絲花もそこらをかたづけ、たれとともにか寐にぞゆく。この時はまさにうしみつの鐘の、ほそく聞えつゝ夜まはりの、金棒りんノヽとさえわたり、ひつそりとせし折しもや、いづくの座敷かしのびごま、たが客なるか知らねども、小聲にさえた一節は、音も清元の新權八、瀬川如皐が名殘の作、

淨るり〽夢の浮世と思へばや、いつか二人がなき跡の、しるしのいしに手向の水も、丸に井けたの二世かけて、かさね桔梗の紋どころ、ひよくと契る妹脊どり、こほくにぬるゝ俄雨、〽アレあのやうに行く先も、ふさがる胸のうちあけて、なぜにかうしたことならば、いうてきかせてともノヽに、とひだんかふもござんせう。くがいの身とて水くさい、そんな心ぢやないわいな。主はおほえてゐるさんすか、始めてあうた其の時に、いとしうれしき身にしみノヽと、〽するな夜風はかみ風か、もしや出雲でむすばれた、えにしぢやあるとこつちから、むりないきぢをたて通し、まだその上にわたしまで、捨てていことはどうよくな、いかに戸ささぬみよぢやとて、そりやあんまりなじやうなしと。下畧

半「そのじやうなしをこの樣に、戀つて來るもするきやうだの。」トいふ聲きいて此糸は、夜著をはね除

け貌をあげ、此「左様いふ聲は半さんかえ、マア今ごろにどうなんして。」半「サア絲花さんのはなしをきけば、やきもち深い此所の客、まはしがあるといふ事を、悟るといつも意地わるく、歸りかけても立ちかへる、癖の人だと噂ゆゑ、おめへにまでも歸つたと、いはして一人外座敷に、隠れて様子をうかゞへば、心をゆるして歸つたと、いま絲花さんが知らせたゆゑ、ヤレうれしやと思つて來て見りやア、歸つた人でつかれたのか、おいらの事はどうしたかと、聞きもせず、平氣で寐るとは恨みだぜ。」ト、いへば涙に此糸は、はれまぶちの眼をうるまし、恨めしさうに半次郎が、貌つれ／＼とうちながめ、身をふるはして寄りそへば、亦もきこゆる淨るりの、

〽死なざやむまい悪性を。

半「するがの富士の山よりも、高いくらゐのおいらんを、勘當されてゐる身分で、あゝわれながら無理な料簡、モウ以前のお絲さんぢやアなかつたものを。」此「アレばからしい、その様な心で居りイすくらゐなら、此様にくらうはいたしいせん。今も今まであまり夜と、いひなましてもひよつとモウ、あはれぬやうになりイせうかと、泣いてばツかり居りイした。」トいふ中、さし込む持病の癪、手つからおさへてくるしき風情、

ゆかり〽まるに井筒の戀中を、下行く水のくみかはす。

深き思ひに半次郎、半「すヤ癪が起つたのか、〇〇。」〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、此「〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」花「すヤおいらんえおいらんえ、何を獨言をお言ひなんすえ氣味が悪うおッす、夢でも見なんしたのかえ。おいらんえ、アレサおいらん目をお覺しなんしなえ。」ト、よび起されて此糸は、此「すヤ半さんはえ。」花「アレサまだ目が覺めなんせんかえ、半さんとは吉田屋の客人の事ざますかえ。」ト、いはれてはつと此糸が、穗に顯はれし男の上、夢にもその名を呼びしかと、恥かしき程わすられぬ、心はおなじ半次郎も、これよりしこッてかよふほどに、二人はたがひに苦の中に、たのしみあれど身のつまり、殊に半次郎は勘當の不自由がち、されど此糸ははつめいなれば、ためになる客をうしなはず、主のためまた身のためと、大事につとめて半次郎をば、ひそかにみつぎてかはりなく、根岸のさとに住居させ、しのび逢ふのもたまさかなれど、心の誠をたてとほし、するの松山浪こさぬ、ちぎりめでたきいさをしは、梅ごよみの四編にくはしくしるせり。

## 第六回

行路難しと古人の言葉あたれるかな、さしも靜けき世の中を、渡りかねたる薄命、花の櫻の宿中に、土屋といへる旅宿あり。爰をしばらく假の宿、貧しき親を養ひの、爲に親子の旅かせぎは、鎌倉

まさりと他言を、當に來りし甲斐もなく、活業にたらぬ雛遊を、蓄込みしごとの惡漢が、ありとまし
らぬ温和の性質、爺親は早五十歳をこえ、娘は十六七歳、鎌倉にて一廉の賣女になられる器なれど、
外聞を厭ひ、亦内端なる料簡より、まだ田舎へは出でしなり。容儀もよく愛嬌もあれど、このほど竈
に角間がわるく、このしゆくに來りても、著替の衣類までをうしなひて、小づかひに遣ひ込み、殊に
この家へ止宿りし時より、土地の若者がしらにて、六雙の傳八といふ者、深切ごかしに世話をなし、
宿中の座敷をうけおひ、出勤代の手附なりとて、三両の金をわたし、そのうへにて此處へ何程、彼處
へ何分と酒代をつかはせ、そもそものとりはやしは、さも大層に花も貰はれ、座敷代もとれるやうに
言ひきかせ、さて藝者をはじめて見たる所が、役人衆の方へ遠慮があるの、地頭所よりなり物はしば
らくさしとめのと、種々のさまたげありて、むなしく日を送りしゆゑ、この宿をたちて他へゆかんと
すれば、傳八に立て替へられたる金が借金となりて、立つ事もならず當惑いはん方もなし。
作者曰く、この類の事は春雨日記にもしるして後人の用心とはなせり。今太平の御代なれど、利
慾の爲におのづから、燈臺の元くらき愚癡にまよひ、千金を尊しとせぬ繁業の市中を捨て、高利
を求めんとする心より、その手筋の者にたばかられ、旅へ家業に出でて、田舎人の爲に身をいや
しめられ、損をなして、くやしき事に出で會ふ者すくなからず。されば鎌倉の美婦をつれ出し、

それを餌となして、金銀を雙方よりむさぼる曲者多し。かならず〳〵だまされて、繁華故郷をよそよそしく、旅へ活業に出で給ふな。男子は格別、娘御達の藝ある方々は、くれ〴〵も用心ありたきことぞかし。

さても土屋に逗留の唄女およしは、爺親と二人ざしきにさし向ひ、今日しも雨のつれ〴〵に、いとど侘しき中庭より、空を詠めて哀れけに、よし「爺や林雨とやらになるといけないなう。」親「さうョ、たゞさへ旅はつらいといふのに、金はなくなる活業は出来ず、他の宿へゆくにはこゝの借財を拂はねえけりやァならず、どうもこまつたものだ。」よし「それに此の間は傳八さんが種々な事を言つてこまるョ。」親「さうか、困ることだの、どうぞしてこゝを早く立ちてえものだ。」トいふ折からに、彼の傳八イ聞きなせしが出抜けに、障子を開けてずいと這入り、傳「コワおめへ等ァ、むしのいい事を相談するなう、エ、コウ左様うまくはいかねえぜ、櫻の傳八が相場をつけた女を、たゞ通したことはねえぜ。」よし「オヤ〳〵をかしいねえ傳さん、何もいい相談をしはしませんョ、只活業が出来ないから、自由になるなら他の宿へ往つて、かせいでそれからまたこゝへまゐつたら、丁度よからうと思ひますから、その咄をしたのでございますョ。」傳「そりやァどうでもいいサ、どうでもいいが、この間の三両の金は、月またぎて三月になるから、利が三分世話賃をいれて四両にならァ、その勘定を今するが

いゝ。それに宿の方にも三兩ほど、はたご賃がたまつたといふから、此の傳八が口入の事だから、はらはせねえければならねえ。兩方で七兩だァきつい事もねえネ。サァ其の勘定をしてもらひやせう。」よし「エヽ」トびつくりする。親「モシあの金が利ともに四兩になりますネ。」傳「さうヨ。それに松戸の親方にかりた金だから、日限が極つて居らァ、今日勘定をしねえけりやァ、およしばうを松戸へおくりに、つれてゆくと言つておらが宅に待つて居らァ。」親「イエモシ傳八さん、私どもは其樣なやくそくで、あの金をおかり申しはいたしません。」傳「モシ〳〵爺さん、おめへはそのやくそくを忘れたかァしらねえが、此方は證據がとつてあらァ、ソリヤ是れを御覽じろ、金を渡したときの證文がありやす。この證文に判があつて、さうではねえともいはれめえ。」

この證文はおよし親子がこゝへ來りし時、當所にて興行のねがひを地頭へいだすときに、印形がいるとて傳八にわたしたることあり。そのときちよいと白紙へ判をとり置き、今このはかりごとをなせしとぞ

傳「サァどうだ。」親「どうしてそれがおぼえもない書付に判をすゑて。」傳「それぢやァ謀判だといふのか、もう聞いちやァ料簡がならねえ。御代官樣へお願ひ申して、汝を牢へいれてくれるぞ、覺悟をしろ。」よし「そんなら私が松戸とやらへ。」傳「いくが否ならこの宿の總勘定をして、勝手な方へ行くが

いい。それがならざァ此間中から、おれが言ひ出した事を貌を立つてくれるとも。」よし「どうもそれは。」傳「ならざァ金を出しなせえ。それも明日とはまたれねえたつた今だ。」想「モシそれは餘りなことを。」傳「なにが非道だ、コレよく考へてみるがいい、何所の馬の骨かしれねえものに、只金を出す奴があるものかばか／＼しい。サア何樣するのだ、松戸の親方も待ち遠だァ、何道でも早くあいさつをするがいい。」ト、かみつくやうにせき立つれば、想「さうでございませうが、どうぞ近在でもまはつて、席上でもしてもらつて、その金をまとめておかへし申すやうに。」傳「イヤ／＼、其樣なまだるいことを聞いちやァ居られねえ、どうで諸方わたり歩行いて、美言おやァいかねえやつらだァ、サアサアうしやァがれ。」ト立ちかゝりて、お由を引きたてゝゆかんとすれば、その手をはらッてさすがの生得、よし「アレサ傳さん、いいかげんに無理もおいひな。女郎活業をするくらゐならば、此樣な田舍へ流れて來ずとも、鎌倉で活業をするわネ。そしてまたおまへも、いやらしい事を言つておくれだけれど、鎌倉には男がないと思つてお出でか、山家の猿も二三年鎌倉へ往つて居ると、人間らしくなる所だわね、其の繪土ッ子がはる／＼と、爰まで男にことを缺いて、まご／＼しに來るものかネ。」ト、はら立つまゝに言ひまくれば、傳八も憤然となり、傳「ヤイ／＼、きいた風なこのあまァ、これえいやらしい事を言つたナァ當座の興よ、女で金を儲けるのは、この傳八が活業だァ。コウ爺さん、おめへ

親の役だア、どうともかたを付けるがいい。」親「いづれどうかいたしますが、マアしやうばいをいたしてから。」傳「エヽイ、むしのいい。其樣な氣のながい事を待たれるものか、金が出來ねえければ、手足を縛つて抱いて寢るとも、女郎にするとも、二ッに一ッ理をつけねえで置くものか。サアどうするのだうしやアがれ。」ト、遠慮會釋もあらくれ男、親父を突き退けおよしを引きたて、既に座敷をつれ出さんと、腕まくりして傳八が、きそひかゝれば親子の難儀、口惜しながら馴染もなき、この旅宿のことなれば、爭ひ勝つべき道理もなく、殊には金づく、さしあたり途方にくれたるおくざしきの、隔紙あけて此の中へ、別け入る一人の綸土氣質、勇壯はだなる富者栙、旦那「まづ暫く。」ト、傳八をおしつめて其の座になほりける。

そもこの人は何者ぞ、いつも久しき筆癖ながら、第四の卷をよみ得て知るべし。

年毎に惠みの花やまたひらく　　金龍山人狂訓亭

楳のこよみを雪の夜著述

春色惠の花卷之三 終

# 春色惠の花二輯の序

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかゞ答へん。紀氏の女か古事は、彼の相國寺に其名を殘す鶯宿梅。それ曹操の先途の梅は、口を酢くする軍務の早卽、鹽梅の臣とは執事の古名、即梅暦を開販いて、文永堂が常に吉日良辰となりし事、是れ看官發賞人遊行の袖にも携へられて、よく見南枝の御風聽、御贔屓の香を傳へて、萬家にもてはやさるゝは、貸本屋衆の軒端の梅、追ひ〳〵繼穗の賞言、それが作者の幸福となりて、最初は裏家中の鄕、ちり塚の傍邊に實生の趣向、今は辰巳の園にうつして、粹な噂に實入もよく、前後八編の梅暦、またも餘蘗の種を下して、六冊となせし睦の花、その雪中の寒紅梅、色香も深き溪齋が、筆にも穿ちし髮の風、眼前と流行五分も透かさる新著の魁惠みの花、由可里にたよる御緣日の、植木屋ならで室咲の、根は覺束なき鉢を並べ、此の花を召させ給へ求め給へと、一向に袂を引いて願ふになん。

于時天保六未初冬來陽を待つ新板にとて、筆を狂訓亭の東緣に採られたる。忘懈先生東都人情物の本を流行らせ初めし作者の元祖。

南仙笑楚滿人六年以來、改名してます〳〵發行の詮索家、爲永春水の需めに應じ、此の卷中では初

編より、おなじみ深き辰巳の小庵稲荷横町の南窓にっ

櫻川由次郎謹誌

# 春色恵の花 二編巻之上

江戸 狂訓亭主人 著

## 第七回

さてもお由が雑遝の中へ、立ち入る其の人は弱きをたすけ、強きをくじく生質を得たる、東男千葉の藤兵衛といふものなるが、最前より奥の間にて始終を立聞き、傳八が非道親子の當惑不便に思ひ哀れみて、さしかゝりたる金をのこらず立てかへ、其の座を濟まして傳八が悪計を除れさせ、早々當所を出立すべし、路用もかして不自由させまじと、殘るかたなく深切に世話をなしければ、お由はさらなり親父は藤兵衛をふしをがみ、これ然しながら常々信心する成田山の御利益なりとて、遥かに成田の方を拜禮し、猶およしと相談して、今夜は御山に通夜をなし、いよ／＼神徳を蒙らんと、ます／＼降り來る雨をいとはず、櫻の宿を立ち出でて、不動尊へと參詣をしたりける。されば此の夜およしをば、藤兵衛にたのみ置きしが、藤兵衛も雨天にこまり、逗留せしことなれば、一日二日はこの家に逗

ぶこゝろ故、およしをあづかり、宿へもその事をいひきかせしに、土屋のあるじも元來心よき者にして、傳八の惡だくみを心にくく思ひ居たることなれば、藤兵衛が男氣を悦び、實は旅宿錢も藝人の旅かせぎなれば、半減にて傳八との相談なれば、半分にてくるしからずと、正直なるはからひ、別だんに酒肴をこしらへ、藤兵衛をもてなしければ、藤兵衛も宿へ祝儀をつかはし、およしを相手に酒をくみかはしけるが、既に其の日もくれゆきて、雨は次第に降りつゞき、物さみしさいはん方なく、世間もしん／＼となりしゆゑ、およしははづかしさうに三味線をとりいだし、由「おまへさんにおきかせ申すのは不躾だから、内證でひきますヨ。」ト、しのびごまにて、

淨るり「〽けふのごけんの初昔、惡性ときいて此の胸が、おぼろの月や松のかげ。〽わたしやお前の政所、いつか果報も一森と、ほめられたさの身のねがひ、〽ほれ過ぎる程ぐちな氣に、〽心の底のしれ兼ねて、〽じれつたいでは、〽無いかいな。

ト小聲ながらもうるはしく、唄ふ節さへ三味線さへ、なか／＼未熟の業ならず。藤兵衛つら／＼お由を看るに、田舍あるきのくはせもの、すれッからしの旅かせぎ、藝も丹田山綿紬と、はじめは思ひたれどよく見れば、自然と艶ある本結城、ひけらかしたる厚化粧にあらで、素貌のうつくしさ、どうしてこんな藝人が、田舍へかせぎに出でしやらと、いぶかしければお由に向ひ、藤「トキニマア、おめ

へ達親子はどうして田舎へ出たのだえ。お前の藝なり容儀といひ、鎌倉の中にも澤山はねえ藝者、何もわざ／＼こゝらまで、出て來ねえでもよささうなものだが、何ぞ鎌倉に居にくい譯でも有つてのことか。色男の手を切るに、土地をはなれねえおやァ、わりいとかいふので出て來たのかえ。」蕙「ナニイエ、どういたしまして、そんな事ではござりいません。おとつさんが薄命でござりいますから、唄女でもしてと思ひ付きましたけれど、藝はほんたうでなし衣類はできませず、どうも鎌倉では俺でも世間が立派だから、其の中へ恥かしくつて出られませんゆゑ、マァ田舎へでもと申して、こちらの方へ出てまゐつたのでござりいます。」藤「じつにさうなら氣のよわい事だ、斯ういつちやァどうかせじのやうだが、誠におめへぐれへな繪土唄女は、なか／＼ゆびを折つてかぞへる程はねえぜ。何田舎へ出る事が有るものか、チツトはゞかりだが、おいらが繪土でおめへに近付になつて見たがいい、それこそ立派な立者にして見せらァ。なんでもマァ鎌倉へかへつたら、おいらをたづねるがいい、なぞと通人めえた事を言ふやうだが、幇間にも唄女にも、相應に近づきもあるし、また友達の座敷なりとあさせてよ、一日に二會や三會はなんでもねえぜ。請けさせるやうだが、櫻川の由でも祈誓でも、おいらがといきの唄女だといやァ、まさか川向うを通る人をみるやうにやァしねえぜ。繪土ッ子どうしが土地をはなれて、こんな所で心やすくなるのも何かの縁だらう。是非おれが一肩いれてやらうから、とつ

さんにさういつてはやく鎌倉へかへるがいい。」ト、いはれて嬉しきおよしが心、どうしてこんな頼もしい人と、此の家に泊り合はして難儀を遁るゝのみならず、今よりすゑのたよりにもと、さも深切なる男氣に、ほれ〲とすれど遠慮して、およばぬ事といく度か、おもひなほせど煩惱の、われからくるふ心のこま、亂れそめにし娘氣の、看まじとすれど貌ながめ、溜息をつくその風情、かの藤兵衛もそれぞとは、知つて居ながらよそ〲しく、藤「でえぶあきたやうすだ、サア寝て休みなせえ、なんだかおいらもじれつてえやうだ、サア〲寝よう〲、大きに心なく退屈をさせたなう。」由「アレたいくつしたの倦きたのと、言ふのではございませんヨ。」トすこし涙ぐむ。藤「オヤ此の子は泣くのか、何ぞ氣にさはつたか。」由「イ、エ、どう致して、さうではございませんが。」藤「出すぎて何かをさばいたのがくやしいかえ。」由「どういたして勿體ない、なか〲さういふ氣ではありませんヨ。あんまりお前さんが深切に仰しやるから、嬉し過ぎて、何だか悲しくなつたのでございます。」藤「なぜ。人に深切にされると、腹の立つやうな心持かえ。」由「アレサさうではございませんが、是れまで一人もあなたの樣なお方に出合つた事もなし、どうぞと存じましても、私のやうなたらはぬ者は、直にあいそがおつきなさるだらうと思ひますと、それもまた苦勞でございます。」ト愁への貌にて藤兵衛を、見る眼はいとゞかはゆらしく、又藤兵衛が心の底に、ほれた慾目で思ひはかれば、もし此のむすめを

今一際、みがきをかけて存分なる好みの衣裳を著せたらば、辰巳に名高き娘女でも、折江町の何某とても、なか〳〵これには及ぶべからず、自由にならばまづ此所にて、著せ替へたいと胸の中に、巧へる氣の一重ね。

極上あつらへ織の白七子を、御納戸の紋付に染め、江戸褄模様にこぼれ梅、紅白の上絵彩色銀絲にて、松葉をちらしに縫はせ、野暮なるやうでも細密なる模様にすれば、御納戸に松葉の銀絲も古風に見えず、梅の色どりも紺屋でならず、畫工英泉の筆意をたのみ、下著は縮緬鼠のさや形、これは大きくめだつくらゐの中形がよし、古風にていやみなし。帯は花色勝山に、色絲をもつておらんだ模やうを、立縞の如く縫はせたらば、類がなくツてよからうか、黒のごろふくに雨龍の飛形を、すがぬひにさせたらばどうだらうと、流行家の心から、粋な苦勞も樂しみか、岡目で思はばばか〳〵しからずや。

由「なにか考へ出してふさいでいらつしやるねえこ」 米「ナニサふさぎはしねえが、今とんだ事をかんがへて、大きに苦勞をしたやつサハ、、、、。」ト笑へど、お由は何故かをかしきすぢのわからねば、わづかのことも氣にかゝり、 由「すヤ、なんぞおきけすみなさることがございましたかネエ。」トすこし貌を赤くする。その正直なる心根を、おもへばいとゞゆかしくなり、 米「ナニ〳〵そんなことではねエ、かならずわるくおもひなさんな。實は不躾だが、おめへの身の上を兎や角と思ふ心から、どう

ご繪土へ歸つたら、一ばん立派に押し出してやんやと賞められて見たら、いゝ心持だらうととんだ事を考へ出したのヨ。」ト（衣しやうのこのみ、おびまでのむなざんようのわけをばゝくはしく話せば、およしはいよ／＼うれしく／＼て、）よし「それほどまでに私を、御ひいきに思しめして下さいますかえ。」藤「ありがた迷惑かしらねえが、風とこゝろにおもひ込むと、根こそぎあくまで世話をする氣性も時によりけりさの。」よし「あつかましいと思ひなさいませうが、どうぞこのすゑお見すてなさらずにと、申すもあんまりはゞかりで、あなたの御外聞がわるからうかと存じますと、始終およばぬ願ひだから、猶悲しくなりますヨ。」ト、ふかくその身を恥ぢらひて、内端に遠慮の言ひまはし、藤兵衛はます／＼かはゆく、藤「見かけはどうか、きやんな娘と思ひのほかに、おとなしい正直者だ、今の通りの心ならば、やぼなことだが、まだ家内に留守居ももらはぬ此の藤兵衛、否でもなくば宅へもらいれよう、それも氣づまりだとおもふなら、どこぞへ小いきな家をこせへて。」よし「エほんたうでございますかえ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、藤「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、よし「〇〇〇。」〇チヨント木の頭、これより後は、梅ごよみの三ぺんに詳しくあり。

## 第八回

京町の猫通ひけり揚屋町、その裏茶屋の奥の方、たしかにこれは里八とか、里吉とかいふ男藝者の

住居と見えて、三四人よりて俄の稽古の體、●「だれだとおもふ、奴だぞ、あつたにからうす杵くふの
か。」▲「中見に底つけ、うそつき彌次郎といふんだどつこい。」●「ヨイ〳〵〳〵これはさてしあれはさて。」
▲「よい〳〵〳〵。」●「これは御ぞんじ粟餅の曲搗き。」×「なだいは砂糖も粟太門、きなこもあれも
一粒より。」●「えもんをつくろふ大門口。」●「しんたか座敷や間夫の床、さて青樓は夜ぞふけて。」×「ふ
けたら持て來いあんもにせう。」●「ついたら來な子のおあつらへ。」▲「これは御存じ名代々々、アヽ
くたびれた。」ト杵をなげ出す。●「サア〳〵、もうおつと身にしみてやらかさうぜ。」▲「マアすこし
休みねえな、むきになつてやりたがるぜ。」●「もらひたがるよりよからう。」「くれたがらねえにも
こまるぜ。」▲「そりやアいいが、おらア堀までちよつと往つてこねえぢやアならねえ。」●「なにやこ
そ、そろ〳〵逃げ出す前置きをならべやす、太鼓持の客待合も見ぐるしいものだ。」▲「ナニ〳〵さう
ぢやアねえ今日は。」●「延津賀さん所の月ざらひとこせへるのか。」▲「いんにやさうではねえ、少し
内用があるから。」×「ヘンないようならば往かずともよからうぜ。」▲「ナゼ〳〵。」×「無い用ならば
無用も同じ事だ。」●「なに大かた呑みか食ふかする當があるのだ。」▲「コウ〳〵それほど意地きたな
ではねえぜ。」●「酒にも女にもびり〳〵する男だぜ。」●「トいふがお座敷の酒はいやだらう。」●「そ
りやア知れたことよ。」▲「それ見ねえ、酒は兎も角も、女はむかうからよつて來るからどうも爲方な

しに。」●「ふみづかひにもやられるのか。」△「エ、よしてもくんねえ、おいらアふだんさう思ふぜ、何の因果でこんな女澤山な場所へ來たかと、つく〴〵とふさぐ時があるぜ。」■「その女澤山の中で、色が出來ねえから、よく〳〵わりい男だ。」△「エ、よくひとの英氣をくじくぜ、素人の中で居てさへ女がうるせえのに、女ばかりの中へはひつたら、うるさくツて〳〵。」×「モウくるな〳〵といはれるだらう、すこし遠慮するが。」△「ヘンおめへぢやアあるめえし。」トいひながら、障子の外へ貌を出して路次を見たりしが、△「オヤ〳〵、となりへおつりきな女がはひつたぜ。エコウおいらが知らねえ女は、この郭にはねえはずだが。」●「そりやみたことか、ちよいと障子の外へ面を出すと、直に女のことをいはア。そんなにもびりつきてえのか。」△「イヤしかしいい女だぜ、眼つきのりきんだ。」く「はなのしやんとした。」■「口元のかはゆらしい。」●「えり元のきれいな。」く「髪の毛のさかだつたやうす。」●「二本の角をふりたてて。」×「火煙をふくおそろしさ。」■「サア〳〵つまらねえ盡しは、いいにしてけいこをしねえか。」△「イヤじやうだんぢやアねえいい藝者だ、まづけんばんにあのくれゑないい女はねえぜ、大かた辰巳だらう。」く「インニヤいたちかもしれねえ。」●「ねこだらうぜ。」く「なるほど猫の緣は離れねえの。」●「にやんと違へ、有るめえが。」■「まだか〳〵いいかけんにしねえな。」△「しやれぢやアねえ、あんまりいい女で氣にもなるの。」●「ム、ウしれた〳〵、唐琴屋の内唄女だ

らう、まだ年のいかねえ發明らしい顏の女だぜ。」△「さうヨ〱、まことに言ひぶんのねえ女だが、鄰の家へ何しにきたらう。」■「へゝ其身々々にきいた風な口をきいても、世間の穴はさぐられめえ、おいらはその女の好男まで知つて居るぜ。」△「サアノ〱それは知らねえでもいいから、モウチツトけいこをやらかさうぢやアねえか。」●「さうヨ〱。」△「モウ日限がなくなるから、氣がせいてならねえ。」●「きがせいて、それだから、せかねえ日にやア思ひやられるぜ。」×「夫れこそすこしもできめえ。」△「おめへの色と同じ事だ。」■「又まぜる種をまくのか、サア〱車輪でやるぞ〱。」ト、またつきかゝる粟餅の、けいこのさわぎ賑やかなる。それにひきかへ鄰の二階、しんとなしたるさしむかひ、家内の人ははうせしなるか、かの唐琴屋の米八は、男のひざによりかゝり、額をおさへて少しうつぶき、米「ア、いそいで來たら切なうございますわ。」トいひながら、丹次郎の貌を見ながら、米「オヤおまはん酒をおあがりか。」丹「ム、さつきからまつて居るのに、間がわりいからおつとばかり、つまらねえものを取つてもらつて、一人で猪口に三ッ四ッのんだが、ナゼどんなだ。」米「ナァニ顏があかいからサ。」丹「あんまり又ながいぢやァねえか、おいらァモウかへらうかと思つた。」米「それだつて、わちきも誠にくじれつたくッてならないけれど、藤さんを大門までおくり出して、しまつて來ないと惡いから。」丹「山しろ河岸のか。」米「ナァニ津藤さんは此の頃ぢやァ、近所にか宅にか、かは

いい人が出来て、さツぱり此方へは来なさいませんわ。」丹「さうか、それにしても長かつた。」米「それでも、どうでも思ふやうにはなりませんわネ。おいらんは今夜ア、あんなにおちあつてゐるものだから、きげんをわるくかへしてしまふと、わるいといつてゐるもんだから、新造衆や何かを大勢つけてよこさしつたものを、首尾よくおくり出してしまはないと、また何だの角だのとやかましいから、どんなに気をもみましたらう、堪忍しておくんなさいナネエ。」丹「そして出て来る時、鬼兵衛は内所に居たか。」米「ア、ゐましたよ、それだが私やア、藤さんについて出たからいいが、おまはんいいかねえ。」丹「ナニおいらアおツかさんの用で出たんだから、まだ帰らねえと思つてゐるからいいのサ、そしてみんなは宅へけへツたか。」米「ア、けへりましたが、私やアまだ仲町に居るつもりに、さういつてやつたからよいョ。」丹「さうかそんならいい。」ト横になる。米「しかしとなりでみんなが見て居るだらうと思つて、まことに這入りにくかつたがネ、はひつて見ると嬉しいねえ。」トいへば、丹次郎はにつこり笑ひ、丹「さうだが、今朝はまことにびつくりしたツけなう。」米「ア、ネエ、まことにすこしの間だつけねえ。」丹「おいらア、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、ゆうべ釜をかけた儘でおいたのを、かたづけに往かうと思つて、○○○○○○○○○○○○。」米「オヤツイもよいねえ、ツイは私がいふ事だわネエ。」丹「○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」米「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」丹「それでどうした。」米「それからあのウ。」丹「あのもねえもんだア、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、いろ／＼に逃げ口上をいつたおやアねえか。」米「ナニ逃げ口上をばいふものかねえ、それでもこはかつたものさ。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」丹「ナアニ、おいらアすぐに蔵へいつてしまつたからよかつた、あれははんに思ひもつかなかつた、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」トわらつて居る。

# 春色恵の花二編巻之上 終

# 春色惠の花 二編卷之中

江戸 狂訓亭主人著

## 第九回

米「アレまたそんな憎いことばつかり、私やアまたおまはんこそ、○○○○○○○○、○○○○かねえうるさい目にあつたと、お思ひだらうと、跡でくやんで居ましたわ。」丹「なぜまた圍に○○○○。」米「ナニゆうべッから少しも寐ずに、表ざしきに居たもんだから、誠に醉つてくるしいのにネ、奥へ往つて寐ると、さう〴〵しくつていけないから、およしどんに（これはないしよの女中のことなり。）斷つて湯をしまふ時分に、○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○。足音がよウく似てるたがネ、急度お蝶さんはおまはんの眞似をして、歩行くのだらうと思つて、くやしかつたわ。」丹次郎はわらひながら、丹「またそんなくだらねえことをいふヨ。」米「さうはいふものの、お蝶さんもかはいさう

ごねえ。かんがへて見ると私がわるいから、しみ〴〵苦勞になりますわ。」ト すこしふさいで 丹「なにがわりい。」米「なにがといつて、おまはんもいい氣だねえ。どうせ始終は私やア除けもんだと思ふと、心はそくなりますわ。」ト こゑうるみて なみだぐむ。丹「なんの又つまらねえことをいふヨ。始終といつたところが、おッかさんもあの通り、ぶら〳〵して居て、何だかだん〳〵に、このごろは痩せるやうすなり、鬼兵衛が心いきはあの通りか、どうせ始終家内にもしもの事が有つた日にやア、おいらアマア、外ものと思つて居るのサ。」米「エ。」ト、米八はびつくりせし様子にて、米「オヤ、おまはん外といつて家内にやア居ないのかえ。」丹「さうヨ。」米「なぜえ、なぜそんな事をお言ひなはるんだえ、エ丹さん。」丹「オアニサ、今の事ぢやアねえけれどノ。そして俺がゐねえけりやア、却つていいぢやアねえか。」ト 米八は すこしやつきとなり、米「なにがいいえ。」丹「ハテおめへに逢へばといつても、マアおめへさへ苦勞して宅を出てくれさへすれば、おいらの出るくらうまで、させねえでもいいといふやうなものだ。マアさうもなるめえが、おッかさんのぶら〳〵病がほんたうに氣になるヨ。」米「そりやアさうだけれど、もしもの事があつておまはんが、家内に居ねえやうになつたらば、わちきやアマアどうせうねえ、なんぼ逢ふのにあひいいといつたつても、今なら苦勞しながらも、朝晩マア顔を見て居て、一つ家内にくらして居るから、じれつてえながらもうれしい事もあるけれど、一所に居られねえやうになつたらどうせう。」

ト、鼻紙を出して涙をふく。 丹「なんの泣くことがあるものか、今すぐにおッかさんが死にでもするやうだ。ア、えんぎのわりいことを言ひ出した、おれが悪かつた、鶴亀々々。サアモウいいやァな。」米「それだつても、おかみさんのことは苦勞になつて來るし、おまはんの事はじれつたし、そしてさうでもなつたら、やつぱりお蝶さんもつれてお出でだらう。」丹次郎はわらひながら、丹「またお蝶がことか、こまつたもんだ、ありやァわけはねえ子どもだァな、サアもういいぢやァねえか。」米「なんぼ子どもだつても、おまはんのいひなづけと言ふものだから、子供心にも女房氣どりてゐなさいますわ。」丹「まだいつて居るのか、氣どりになつてもならねえでも、おれせへ心もちがなけりやァ、いいぢやァねえかナ。」米「い丶え、おまへ様も大きに心もちがありますものヲ。」丹「エ、モウいいにしねえナ、しつッこい。」トいひながら、ちよいと突きとばしてわらつてゐる。 米「わちきのしつッこいのを今氣がおつきか、じれつてえ。」〇〇〇〇〇〇。此のとき路次を魚屋の聲。 魚「たこにあはびでござい、魚屋はよろしう魚屋でござい。」トこの商人の聲、丹次郎が胸にあたるか、 丹「なんのしつッこいもよく出來たア、おいらが何の角のといふと逃げたがるくせに。」米「アレまた、おまへさんもうそばつかり、何時私が逃げたがつたえ、サアおいひなはいよ、何月の何日に逃げました。」丹「いまでも逃げたがるぢやァねえか。サッきッからくだらねえことばかりいつて居て、おいらァもうおそくならァナ、モウ

モウおいらアけへるぜ。」米「アヽ、そんならお歸んなさいヨ、おまはんこそ逃げたがつて、そんな事をいふ癖にじれつてえ」トいひながら、ちよいと〇〇〇〇。丹「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」米「すヤなんだねえ。」丹「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」ト、いへば米八は〇〇〇〇〇〇〇〇、米「よウくいろ／＼なことをおいひだねえ、そんなら斯うして居よう。」トすわる。丹「どうして居ようと。」米「かうして居るのサ。」トまじめで居る。丹次郎はわらひながら、丹「ドレどうして居る。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。米八は嬉しけれども笑ひもせず、〇〇〇〇〇、米「よふく人をあへたりもんだりおしだねえ、〇〇〇〇〇。」丹「〇〇〇〇〇〇〇、なぜそんならば、おいらが宅に居ねえといつたら、いろ／＼なことをいつて泣いたのだ、しかしほんの義理いツぺんか。」米「アレモウほんたうに、丹さんは意地をわるくわちきにこまらせるのだネ。そんな事ばかりいつて、ほんたうに今内に居ない氣でもありやアしないのかえ。エ丹さんうまく私をだまして出しぬいて、おまはんが家内に居ない日にはどうせうねえ。丹さん堪忍しておくれな。わりいことがあるなら、これから氣をつけるから。エ丹さん。」ト、涙をふいてうつむいて居る。

作者曰く、かくのごとくわけもなきことを、くどく言つて泣いたり泣かせたりするが情人の道にて、なか／＼理窟も評議もなきものなり。他目で見ると何のこともなき言葉や、たわいもなき筋

が、その身になりてはくらうにもなり、悲しくもなりて苦勞をするが樂しみなれ。
折節長家のはづれにて唄をならふ子どもの聲、
上唄へあへばかほ見てうれしいけれど、別れおもへばあはぬがましか。
米「かほは毎日見て居ても、宅ぢやァじやうだんもいはれないと思ふと、まことにくやしくなるわ。」丹「そんならばなぜにくらしいといつた。」米「アレサ、じれつてえといッたつて、にくらしいといたつて、それはアノ。」ト、少し言葉がきれると、丹次郎は笑ひながら、丹「アノと許りではわからねえ、アノなんだ。」米「モウ〳〵、なんだかこゝろにおもふやうにやァ、わちきにやァいはれないものナ。」ト、何かもどかしき樣子なり。丹「それでも憎らしいとはいへるぢやァねえか。」トいつてより、○○○○○○○○、よく〳〵きけば米八の聲、米「○○○○○。」○○○○○○○○、○○○○○○○○○。丹「何だな、をかァしな。」米「それでも下に人が居るさうで、はなしごゑがするから、○○○○○○○○○○。」丹「○○○○○○○○○。」米「アレまたそんなことを。」丹「エ、それ火入の中へ○○○○○○。」米「アレサ、そんな事はうつちやつてお置きなネエ。」丹「それだつても、二階がきなッくさいといはれるとわりいやァな。」米「すヤいやだねえ。」丹「いやだといつてもしかたがねえ。」トいふ折しも、となり裏の方にて、清元をさらふ娘の聲、壁ごしに耳をつらぬく、而もはげしき車引、

左繪車引哉袖褄

淨るり「へいろかあらそふくるま引、さゝのきけんかほんにいゝよ、顔はさくらになる日ちよと下略、」 米「ヤ、まだおまはんのかほはあかいねへ。」 丹「おめへのかほはさくらいろだ。」 米「ヤしやれ。」

淨るり「へあをにすねたる松のくせ。」

丹「モウいいかげんにすねねへか。」 米「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」

## 第十回

色の世界の栄ちをいはゞ、錦の裏の糟粕にて、故人山東庵の寓意に傚ふべし。折節の流行はかはれども、姿はかはらぬ郭の風情、看官よろしく察したまへ。こゝに唐琴屋のおいらん此糸は、むらさき山まゆの肌付を二枚着て、御納戸天鵞絨と、本國織の腹あはせの平ぐけを、しだらなく結び、御納戸山まゆの襠を、三ツ羽おりてちよいと褄をとり、階子をばた／＼と下りて来て、上草履をぬぎ、いまだ掃除もせざる、きたない臺所の廊下を、平氣にて褄を下し、平ぐけの解けかゝるのを直しながら、いう／＼として裾の汚れるに氣も傷めぬは、さすがにおいらんの寛闊、これぞ東の名物ならずや。内證にては娘お蝶、火鉢をふきながら聲をかける。 蝶「おいらんお早う、お眠さうだねへ。」 此糸「ヤ

イ」トにつこりと笑ひ、ちひさなる聲にて、蝶「のちに遊びに来なまし。」ト、いひながら小川場の方へ行く。蝶「ハイあり難う、藤さんは今日居さつしやるので有りますかえ。」ト、いへども返事なければ、振りむいて見るに、此糸はゐざるゆゑ、蝶「ナヤどうせう。」トいふ後から、お安といふ女笑ひ聲にて、安「モウ小川場から出て、二階へ往つてしまはしつた時分でございますヨ。」蝶「オヤ安どん、謔をおつきな、なんぼ早いといッたつて、いかなこつても。」ト笑ひながら立つ。安「お蝶さん、湯へはひつておしまひなさいまし。今日ははやく妙見さまへ参りませうヨ。」蝶「アイヨ、お安どんおまへはもうおはひりか。」安「ナニ私やアお富どんがはひつて居ますから、マアおまへさんおはひんなさいヨ。そして私やア、奥の御飯をこしらへて上ゲますから。」蝶「ア、アノお安どん、私がおきて来る時ネ、おッかさんが今日は少し心もちがよいから、内所へ出て見ようとお言ひだつけ。」安「オヤさうでございますか、それぢやアマアお聞き申して、御膳をもつてまゐりませう。」トいひながら、取りちらせし内所を片付けて居るト、丹次郎は神棚を拜みてしまひ、内所の次の間なる佛間へはひりながら、丹「お蝶ばうや、おッかさんのおまんまをこしらへさせなよ。」蝶「ハイ兄さん。アノ今お安どんがこしらへ懸りましたヨ、そしておッかさんは、今朝は内所へ出ておあがんなさるとサ。」丹「さうかえ、それはいいの。それでもマア、おまんまは毎時の通り、やはらかい方がいいから、別にこしらへ

させて置きなヨ。」トいひ付けて、佛壇へをがみにかゝる。蝶「お安じやん、それおやァ私は湯へはひる
ヨ。」安「ハイよろしうございます、はやくはひつておしまひなさいヨ、今にまた出たら、いゝ歸ります
ヨ。」蝶「アレそんな事をおいひでない、悪い事ばッかり。」安「ナニかまひますものか、朝夕に往く
といつて、毎日はやく出て行くが、きつと間ひもの所へでも往くのだらう氣障な芸術だ。」ト支配人
の噂をいふ。その中お蝶は浴衣を着て、湯場へ行く。米八は湯より上り、ゆかたのまゝにて化粧をし
て居ると、お蝶はその前を通りながら、蝶「オヤ米さん、風邪をおひきでないか。」ト、いへば米八は
米「あゝかたじ、今長湯をしたらあつくッてくなりませんョ。お前さん今おはひりかへ、能い湯で
ありますョはやくおはひり。」蝶「ハイ、さうかへ。」ト湯へはひりにゆけば、引き違へて若い者が出、
喜「米八さん、藤様の方へ往つておくんなさいまし。」米「アイ今ちよつとみごしらへをして行くョ、
箱をやつて置いておくれ。」喜「ハイお早く。」ト、いひながら見世の方へゆく。内所にては丹次郎こ
し聲を高くして、丹「米八さん藤さんの方へ出るョ。」米「ハイ。」ト言つた許り着物を着替へて、部屋
の次の間より、丹次郎の顔をちよいと見て、米「まゐりますョ。」ト小聲にていふ。丹次郎も傍を見な
がら、丹「オイ。」ト、返事をしながら線香を立てる。たゞ一言の問ひ答へも、多き人目の闇のうち、
思ひは深き戀情なるべし。さて又表二階には、此糸の客藤兵衛居續けと見えて、本間のれんたへちよ

いと腰をかけ、黒ぬりに金蒔繪をせし、大きなるはんざふへ貌をうつむけ、楊枝をつかつて居る。中の間には番頭新造鬼面火鉢の大きなるを二ツならべて、兩方の灰をきれいにして櫻炭をつぎながら、ほん「此里さん、本間の火鉢を入れておくんなんし。そして次の間の火鉢へも、澤山炭をついで銅壺の湧く樣にしておいてくんなんしョ。こんな花野や藤樣のうがひ茶椀をもつて往つたかョ。きり／＼片付けて了やョ。」といひながら、中の間の火鉢を直し、ほん「此里さん、サァ片方引いておくんなんし。」此里は二ばんしんざうなり、本間の牀の間そのほかちがひだな、つくゑのかざりつけをのこらず片づけながら、掃除をなし、ていねいにふいてゐる。すべてなに事をするにも、ぎやうさんにしてらちあかず、これこのくるわのならひとするべし。藤「この火鉢をこゝへもつて來るといつて、おほさわぎをやつたのか。」ト笑ひながらすわる。此「オヤ藤さん、布團の上におすわんなんしな。」藤「ナァニ、俺ァ野良の撫牛といふ通り何は嫌ひだ、サァ／＼酒にしようぢやァねえか。」此「オヤさうざますか、それぢやァ布團をあげてきれいにしようぢやァ有りませんか。」藤「さうョ／＼、さうしてもらはう。今にまた末社が來ると大さわぎだから。」此「こんな花野や、吉兵衞どんを早く呼んで來て牀をあげさせや。そして吉野はどうしたのォ、誠に誠にながいよウ。」ト、いひながら次の間へ立ち出で、此「オヤざしきぢやァ　おいらんのことなり。　何の間に湯から上つて來さッしたえ、うがひの水はありますかえ。」おいらん此糸は身じまひをしながら、此糸「アイ今あがつて來ましたョ、水も有りますがネ。藤さんはえ。」此「藤さんはネ、今楊枝を遣つてしまはしつた許りざますョ。

マァ早く身ごしらへをしておしまひなんしョ。」 此糸「さうざますか、わちきやァもうだいッきざんすョ、米さんは來イしたかえ。」 此「イ、エまださますョ、何をして居るだらう、内所の鏡許り見たがつてし。」 これは丹次郎のことをいふのなり。 此糸「アレサ、そんな事をおいひなんすな、何だかしれやァしませんわネ、マァおよッとサ。」ト此里の耳に口をよせ、此糸「ネ、ネ。」ト何か囁く。

これは米八と藤兵衛と、わけもあるやうに思はるゝとのはなしにて、此糸が兼て米八との示合はせとしるべし。

此糸「ネそれだからあれよりやア、その方があやしうざんはアな。」しんざうは、きもをつぶせしか、ほいろにてあたりを見まはし、此糸「すヤオヤさうざんすか、私やァうッかりざますネ、ちッとも氣がつきませんョ、マァ〳〵。」 此糸「アレサ、またそんなことをいつちやァ、わるうざんすョ。」 此「ナァニ、そんなことを。」トいふうち、次の間のしやうじをあけて、米八はにっこりとわらひ、 米「おいらん。」ト、いつたばかりに立つて居ると、此「オヤどうしたンだよ、米さんなにをして居るだらう、そんなにつくらずともいいよ、早く來なまし、マァこつちへはひらねえのかヨ。」 米「ほんにさうでございましたッけ、まだはひりもしないうちに、斯うかれてはをかしいネ。」トいひながらずつとはひつて、おいらんのきやうだいのそばへすわり、なにかひそ〳〵はなす。 此糸「マァいいよ、はやく藤さんとこへ往きなョ。」トわらひながらいふ。 米「たれおやァきつとおねがい。」 此糸「アイョ、しようちだといふのに。」 このとき、此里はほんまにゆきて、藤兵衛と話をしてゐる

米「オヤ此里さんえ。」此「アイなんざんす、米さん用があるなら本間へ來なまし。」ト大きな聲にていふ。藤「米さんたいそう勿體だのォ、こつちへ來てもいいぢやアねえか。」米「アレ今そこへ參るのでございますわネ。」ト本間へはひり、米「藤さんありがたう。」トおじぎをして、米「モウ／＼此里さんの大きな聲でおびえますヨウ。」此「それだつてあんまり勿體だからサ、ネエ藤さん。」藤「ナアニ、すつかりとあかして、おいらに見せようと思つてサ。」此「オヤさうさアすか、ぬしのは赤心らしうざますわ。」米「オヤ否だ。」藤「ナニいやだ。」米「アレ主の事ぢやア有りませんヨウハ、、、、。」此「オヤそれぢやアわたくしのことでございませう、何がをかしうございますえ。」ト大きなこゑにてわらひながらいふ。みな／＼笑つてゐる。藤「サアかんはどうだ、マアちよいとはじめようぢやアねえかの。」米「さやうさネ。」此「サアもう出來ましたよ、これをマアそこへ出しませう。」ト高いてふあしのぜんへ、いろ／＼のふたものならべていだす。このをりから下より臺のものをもち來る。此「そらなにか來ました、オヤ丁度いい常吉どん、ちよつと布團をあげて往つてくんなヨ、吉兵衞どんはどうしたか來ねえよ、ずるいヨウ。」常「ハイ私があげませう、いま吉兵衞は下の夜具をはこんでをります。」トいひながらほんまの夜具をちよいと肩にひつかけて、一まいづゝ次の間のやぐだなへのせる。此里はつぎの間のかたへむかひて、此「こんな此芝さんでもだれでも、帚木をもつて來て、ちよいとれんじへあすこの所をはき出しなんし、藤さんはきれい好きであらッしやるから。」藤「その事／＼、ヤレ／＼漸う方が付いて、落著いてすわられるやうになつた。オイ／＼

常吉、御大儀ながらちよつと、揚屋町まで往つて來て下ッし。」常「ヘイ／＼どこへ參ります。」亭「すノ秀太夫をよんで來てくだせえ。」常「ヘイ／＼。」ト、立ちあがる所へおいらん、次の間より本間に入り來る。

春色惠の花二編卷之中　終

# 春色恵の花　二編巻之下

江戸　狂訓亭主人著

## 第十一回

湯より上りて、十分に粧ひし此糸のうつくしさ、貴妃も小町も、これに競べて看る時は、古風と唐の彩色にて、なか／＼此の姿に及ぶべからず。但し一座にくらぶる色は、米八をもつて對するのみ。

藤「オイ／＼常こう、ついでに例の所へ、何ぞ美味えものを澤山いひ付けて來て下せえ。」常「ヘイかしこまりました。」藤「オイ／＼大將々々、（これはおいらんこの糸にいふことば、しやれていふなり。）なんぞうめえものを好んでやらねえか、米こうも何ぞさう言つてやらッし。」此糸「わちきやア昨夜、餘りうなぎをたべたせゐか、寒氣がしてなりイせんワ。」藤「ハ、、、うなぎを喰つて、さむけがしもしめえ、くだらねえことをいふぜ。なんぞ温氣のするものを、さういつてやるがいいぢやアねえか、米こうは何だの、早くあつらへねえか。」米「わたくしはやつぱりいつもの。」此糸「米さんは玉子むしざアすわ。」此里「ア、きつとさう

ざんすヨ。」藤「玉子蒸やァ唄女がすくだらう。」此糸「なぜえ。」藤「ナニ薬屋落ちよ、そんならそれを澤山にして、外に美味え物をよこしてくれろとさう云つてくんな、そして秀太夫に早くとヨ。」花「ヘイヘイかしこまりました。」ト出てゆく。此花は大きなこゑにて「秀さんにおいらんではやァく來なと、おそいと足へ馬といふ字を書いてやると、いつてくんなヨウ。」里「オヤ、あんなくだらねえ事をいはツしやるよ。馬といふ字ぢやァいけませんわ。」花「なぜざアす。」里「うまは背中へ重いものを、しよはせるとらちがあきませんわ。」花「オヤほんにさうざますネエ、牛といふ字にすればようざましたねえ。」米「オヤオヤ、牛は猶のろ〱してるぢやァありませんか、駕籠といふ字の方がようざますわ。」此糸「ほんたうに駕籠がいツち早うざんすワ。」藤「アハヽヽヽをかしい手合だぞ、どれも〱よく揃つて下らねえのオ。」みな〱いちどうに、「オホヽヽヽアハヽヽヽヽ。」

此の頃右のごとく、足へ何といふ字をかいてやるヨなどといふこと流行るとぞ。かかるたはむれがおどけなくて面白かるべし。

米「藤さんは、おあげ申しますヨ、ア、せつねえあんまり笑つたらばくるしい〱。」トむねをさする。藤「サア〱ふさした〱。」トちよくをとる。此糸「よしのや。」ト氣をつける。かなろ「アイ。」ト酌をする藤「此里さん、お勝ばうもよびにやつてくんなな。」此糸「おかつばうがいやざますよふ。」里「おいらんどうしよう。」

糸「さういつてやんなんしな。」里「アイ、それぢやァおかつばうどんをよこしてくんなと、アレサ此菊さん喜介どんにさういつて來なまし。」菊「アイ。」ト出てゆく 花「こんな米さんちつとならさねえかよ、身にしみねえ唄女衆だヨ。」米「すヤさうでございますねえ、下卑相の方へ身にしみましたから。活業みじゆくで手につかぬだァいけませんネ。」花「誰にヨウ。」糸「米さんこまるヨ。」米「おいらん御免なはいましヨ。」花「こんなァ。」米「ハイ引。」トおほきなこゑにてへんじをしながら、つぎのまへかけ出してさみせんをもつてくる。藤「米こうたいそう浮いてゐるの。」米「さう見えますかえ。」藤「こゝろおきなくふしをつけてのろけなせえ。」米「ハイ〳〵、しかしお勝さんが來てからはじめませう、さういへば今朝はまだ一度も貌を見ませんヨ。」藤「おれが貌を見てゐればいゝぢやァねえか。」米「アレおかつさんの事でございますさアなネエ。」花「こんな米さん、またちつとも樂をしようと思つて、三味線のことはわすれたやうにして居るヨ、マァ内所でちッと彈んなヨ。」米「それぢやァマァちつと彈りませう。」糸「ナゼまたそんなに彈かせたがんなんすヨ。」花「さうぢやァ有りませんが、米さんに戀情けさしてやらうと思つてざますヨ。」米「此花さんえ御深切でございますネエ。」ト、いひながら調子を合はせる。此里「米さん、しらぶッつけぢやァあんまりざますから、かけんをしておくんなましよ。」米「此里さん何ざいますえ。」里「何でもいゝヨ。」藤「米こうがうてきにいぢめられるの。」米「どうも流行りますからネ。」藤「それでもいゝかノ。」糸「餘り氣が

多いから。」米「すヤおいらんまであんな事を。」藤「米こうおほえて居なつしヨ。」米「おれもまアよ。」里「す
ヤ藤さん奸心でございますヨ。」藤「をかじんと大きにおせわか。」をかやきもちといふ事なり。藤こゝろではよく〳〵かんがへてよいなまへかし
米「なんとでもおいぢめなさいヨウ。」ト皆々からかつてゐるうちに、けいしやおかつもこのところへ来る。かつ「ごめんなさいまし。」トつぎの間
のしやうじをしづかにあける。里「おかつさんこつちへ来な。」かつ「すヤ藤さんえ今日は御逗留、おいらんおはやうご
藤「おかつさん大そうめかして来たの、道理で永かつたぞ。」米「おかつさんきれいだヨ。」かつ「すヤお
いらんえ、あり難うございますヨ、米さんお早う。」米「おかつさん誠にまつて居たヨ、今朝は一度も
お前に合はなかつたネエ。」かつ「ア、わちきもさう思つてゐたヨ。」米「おまへの来るのをまつてゐたか
ら、まだ鳴らさないだヨ。」かつ「さうかえ賞があるねえ。」米「ア、そりやアちがふわネ。」かつ「ちとよい
と出して来ようかネ。」トさみせんをとりにたちかゝる。藤「ナニ〳〵、おかつさん米こうのいふのはうそだぜ、兎角米
こうは楽をしたがつて、今まですゝけて居たんだ、なう此花さん。」米「すヤ〳〵嘘をおつきなさいま
し。」花「イヽエ、藤さんのいはつしやるとほりでございますわ。私がいくらさういつても、三味線に手をか
ける気が出ないから、憎うございすわ。折角人がのふけさしてやらうと思ふのに。」米「さうだやアあり
ませんわネ、ずるけるやうにして引つはつて、お勝さんの来るのを待つて居たんでございますさアな。」
藤「へ、こうまくいふぜ。」かつ「サア米さん、ちよいとどうもなんとも申されませんネエ。」トしやみせんをいたゞき

米「オヤ〳〵おかつさん、私やアまた、仲間をよくする方がいいとおもつて、みなさんにいぢめられながらも、待つて居てあげたノに。」かつ「まことに御しんせつ。」ト、いひながら調子を合はせる。米八も調子をあはせながら、米「おかつさん、おまへのあがつて来る時ぢや、いは帰つて居たかえ。」かつ「イエまだ内所にはだれも居ないヨ、若旦那ばかり。」トいつて米八の貌を見る。米「さうかえ。」ト何くはぬあいさつ。心の中では、よウく若旦那の事を言ひたがるヨすかねえ。お勝も心の中で、よウくないしよの様子を聞きたがるヨすかねえ。

○米八は丹次郎と情通あれば、もしやお勝がわがごとく、なりもするかと氣をつけゐるに、丹次郎は少しもその念なけれど、おかつは丹次郎に深く惚れて、何とぞと願ひてをれど、米八といふ邪魔あれば、なか〳〵にできがたく、戀の叶はぬ心より、いつも米八をねたむ心あり。右にしるせし二人の心の好かねえは、看官賓にと察し給へ。

これはさておき米八お勝は調子を合はせてお定まりの座付賑やかに、いろ〳〵のをかしみ、座敷の穿ちは人情盡しがたければ、畧してしるさず。これより二三日過ぎて後か、かの此糸が座敷の中の間に、おいらんと米八二人のさしむかひ、なにかひそ〳〵と相談。米「それぢやアおいらん、そのつもりにしますヨ。」糸「さうサさうしなよ、その外の事は其のときまた手段もあるから。もうあんまり座敷

へ來てはわりいヨ。」米「アイ承知してをりますが、まだ今の内はいいけれども、いよ〳〵私がその事を言ひわたされでもすると、もうおまへさんにも口も利かれねえもんだから、今の中ばかりだと思ふと覺悟をした心の下から、なんだか心細い樣でなりません。」トすこし淚ぐむ。此糸も眼の中すこしうるみて、糸「ほんにどういふ緣だか、姊娣のやうに思はれて、そんな事をおまへがいふと、おいらもなんだか氣が弱くなるヨ。マア〳〵願ひが成就するまでは、かならず他にけどられなさんなヨ。」米「おいらん死んでもわすれはいたしませんヨ。」糸「トいつてお蝶さんも、今いふ通りのわけだからその氣で。」米「それもよウく合點して居ますよ。」糸「サア〳〵早く行きなヨ。」米「アイ。」ト紙にて顔を拭いて、またちよいと膝を突いて坐り、米「しかし藤樣はこん夜來さつしやるのかえ。」糸「ナニ今夜藤さんは却つて來てはわるいから、內所の前は藤さんでしまつてばかりゐるつもりで、中の町まで來さつしやれば、出て行くつもりに文をあげたら、その約束の返事が來たからよいよ。それに多滿屋へ往かつしやる連衆と一所だから、ひよッとすると付合に、いかつしやるかもしれねえヨ。」米「さうでございますかえ、ム、あの日奈鶴さんのお客ぢやァありませんかえ。」糸「さうサ、多滿屋なら付合にいかつしつても、心づかひはないからいいヨ。いつでもアノ此汐さんが出てくれさッしやるから、どんなに酒をたべさしッても、よく世話をしてくれさつしやるし、何も案じはないヨ。」米「さうでございま

すよ、一體アノ座敷の者は、みんな能い氣めへでございますわ。そしてネ、アノ薄菊さんとやらもいい女郎衆でありますねえ。」糸「さうサ、それだからすぐに文をかいて、頼んでやつておかうと思つて居るのサ、それに藤さんがたび〳〵往つてせわになるから、なんぞこしらへておあげなんしといつたら、藤さんがしやれに紙入と煙草入を、みんな對にこしらへてやらうといはつしツたから、此の間もん所を聞きにやつたら、やつぱり五三の桐を付けさツしやるさうだから、今夜、藤さんにさういつてあげ申さうねえ。」米「それぢやア何かにつけて、マア來さしツたら中の町まで、お出でなさらねえぢやアいけませんネ。」糸「さうサマア、なにはともあれおめへは下へおりなヨ。ツイはなしがながくなつたの。しかし此の節かはいさうな役廻りは藤さんだヨ。それだが二階の。」トこゆびをいだして、糸「帳場が居ないで、丁度はなしをするのにもいいノ。」この帳場といふは、遺手部屋をさしていふことばなり。これはたしかに遺手がびやうきにて、やどへさがりゐると見えたり。米「ほんたうにもうあり難くツて〳〵、私やアなんの因果で、こんなにおまはんに苦勞をかけるのみならず、藤さんにも氣はづかしい事ばかり、どうぞ堪忍しておくんなさいヨ。」糸「そりやア最初から覺悟をして居る事だアネ、マア〳〵首尾よくものがいつたなら、その時たんと禮をいひなまし、マアそれまではたがひの胸に。」米「そんなら下へ。」糸「はやくいきなヨ。」

## 第十一回

戀に氣もせく上家町、かの米八は此の日頃、思ひがけなき唐琴屋の内所のもめに、此糸とはかりし事も前後に、なりゆく浮世の定めなさ、ものゝ哀れを身一ツに、やる方もなき胸の雲、春の朧の夕月夜、しのんで來る商人家の、路次をはひれば裏家の二階、いかなる人の物すさぞ、この頃世には絶えたりし、宮古路ぶしの情死もの、語るはたしか鶴賀の一曲、加賀八太夫が中音にて、落をとつたる愁たん場、その淨瑠璃は左の通り、

○吉原筏

詞梅は青々と身にしみて、桃はふとくこえすぎたり、こまやかならずうすからず、花はみよしの嵐山、千本の花の上をゆく、名も高崎屋の花筏、下を押し切る二挺立　中略

へむさんやな高崎は、けふの與吉が玉章の、とくにとかれぬ胸のうち、緣をきるとは心得ぬ。なんぞ恨みのあつてのことか、たゞしあいその盡きたのか、文はよめどもよめかぬる、こゝろのなぞの案じられ、二間座しきのらふそくも、涙に闇と見えわかぬ、所へ與吉は貌もやせ、髪もそゝけてうつかりと、さも哀れなるその風情、それと見るより高崎は、心の關の恨み草、しがみ付かうか泣かうかと、腹立つことも今さらに、いはでのもりの岩つゝじ、もゆる思ひとしられけり。

米八は立ちとゞまりて心の中に獨りごと。米「オヤ珍らしい、ありやアたしか加賀八さんが、作者に

上

丹次郎
養家の
物語も

頼んで語り出したと、噂のあつた吉原筏とやらださうだ。ア、なんだかかなしい、人の事とは思はれない。」ト、しばしイむ後の方、手拭にて顔を隠し、みすぼらしき姿にて、ゆき過ぎるわかき男、立ち止まりて、「米八か。」　米「エ。」ト、びつくりすかして見て、　米「オヤ若旦那丹様かえ。」ト、いへば丹次郎は手ぬぐひを取つて、丹「どうしてこゝへ来たのだ。」　米「わちきよりはおまはんが、どうしてこゝへお出でなはいました。」トいひつゝ朧の月影に、みれば男は肌うすな、姿を恥ぢてさしうつむく、髪もみだれて面やつれ、今聞きたりし淨るりの、與吉とやらもかくこそと、おもへばいとゞ悲しくなり、少しなみだごゑにて、　米「丹さん、マアどうしてそんなに、かなしい姿におなんなはいましたのでございます。まだこの寒いのに、著類もたつた一ツ著してからに、サアマアあすこへお出でなさいなネエ。」トつれ立つ。長家の娘の聲、

淨るり　へかくせど色香梅が花　合　ちりても跡の花の中、いつか故郷へ帰る鴈、合　まだ花寒き春かぜに、柳の都跡に見て、氣も戸塚はと吉田橋、墨繪の筆に夜のふじ、よそめにそれと影くらき、鳥のねぐらをたどり来る。

さても米八丹次郎は、此の裏屋なる中程の、家の二階にいたりしが、兼て家内は戀知りゆゑ、はづして二人がさしむかひ、胸ふさがりてやゝしばらく、言葉もたえてなかりける。

これいかなる故なれば、唐琴屋の内所色々と混雑なし、お蝶の母親も病死して、支配人鬼兵衛の悪心より、丹次郎を他へ再養子に遣はし、すべて家内は鬼兵衛が、思ふ存分にはからひけるが、丹次郎は養子に行きたる先方も、番頭手代の悪計によりて、忽ち養家は身上立ち難く、ちりぢりになりゆき、あまつさへ丹次郎の身に、罪をきせられ、忍びかくるゝ如くなりし故、元来おとなしく慾情にうとき生質なれば、俄に困窮難澀して、唐琴屋へも寄りつかれずと、為方つきて、よへかた目をかけし上家町の裏に来りて、何とぞ米八を呼び出し貰はんとせし所に、米八も丹次郎を案じて、此の裏の人に頼み、やうすを尋ねもらはんためにこゝへ来かゝり、丹次郎には逢ひしとぞ。

米「モ若だんなえ。」丹「モウ若だんなといはずと、名をよんでくんねえな。」米「アイそれでもどうも不躾らしいものを。」丹「ナニ名をよんだといつて、不躾な事があるものか。」米「それおやア、マアこれから名をおよび申しませうがネ、これから先はおまはんは、どうなさるつもりでおらッしやるのだねエ。」丹「どうにも斯うにも、おやしきの方の納め金や駈落をしたやつらの事がわからねえ中は、世の中へ表むき出られねえといふのだから、しやうがねえ。どこぞ田舎へでも、マアいつて見ようヨ。」米「アレサ、そんな心ぼそいことを、おいひなさッちやァいけないわねえ。それよりか近い所にお出で

なさいョ。わちきがたづねにゆくから、遠いとこまりまはァナ。そしてなぜ養子にいかしつて聞もなく、そんなにお金がなくなつて、おまはんの難儀になッたんでありますねえ。」丹「それがだん〳〵はなす通りのわけで、はやくいへばおれがだまされたのサ。」米「それだつてもそのわけが、私にやァさッぱりわかりませんわネ。他のしたことなら、おまはんの、とがにならない様に、いはれさうなものぢやありませんか。」丹「それができるくれゑなら、にげもかくれもしねえワナ。」米「なぜざませう、悔しい事だねエ。」ト膝にもたれて、泣いて居たりしがやゝありて、米「それぢやァネ、エ丹様。」丹「なんだ。」米「アノあしたの晩に、どうぞこゝまで來ておくんなさいまし。」丹「ナゼ。」米「ナニネ今夜實おまはんにお目にかゝられるとはぞんじませんから、爲方がありません。」トいひながら帯の間から、ちひさき金を二ツばかり、紙にひねりしまゝに丹次郎にわたし、米「エあしたは是非都合をしてあげ申すから、どうぞ田舎なんぞへ、いかない様にしておくんなさいョ。」トいへば丹次郎は、かのかみにつゝみし金をちよいといたゞいて、ふところへいれるをば見て、米「オヤ何だネエいたゞいてサ。」トいひながら又その心をさつしてみれば、あはれになりまたもやなみだにむせび、米「丹さん。」丹「エ。」米「さぞくやしうざませうが、しんばうして居ておくんなさいョ、是非私がどうかしますから、」トいふ顔ぢつと丹次郎は、ながめて涙をはら〳〵、膝にひきよせ言葉さへ、互にいはれぬ實と誠、そこに倒れて泣き伏しけるが、やゝあつて、丹「いい氣だと思つたらうが堪忍しなョ。」米「かんにんしな

もをかしいねえ。」ト、につこり笑ふなみだの笑顔、やがてぞ開く恵みの花、これより後のものがたりは、梅ごよみといふ草紙につゞりて、先年より御高覧をねがひおきて候へば、この発端六冊を御一覧のうへ、いまだ梅ごよみを御ぞんじなき御方さまは、御もとめ遊ばされ、よろしく高評を賜へ」としかいふ。

春色恵の花二編巻之下 終

# 春色梅兒譽美

# 梅ごよみの序

南枝に雪の積む頃より、一輪ヅヽの梅の花、かぞへて願ふ吉方は、三鏡寶珠の惠みを祈る、春のあしたの賣りだしに、多願玉女の門いでよし。色星玉女の利益には、袋外題の色ずりよし。天星玉女の神德に、惠方の買手來を始め、そもゝ八將神の方位にそむかず、建つとは仕立の切形よく、平らは表紙に門もなく、書許り除くはひやかしにて、破るは御免の表紙附け、立直を定んの當日に、執るとはまんぎになる納ん卷を、開くの看官に作者が願ふ御評判、滿つとは則ち板元の、藏入いはふ天恩月德、四季の土用はいふも更、春夏秋冬止む時なく、日々の註文追摺とは、チト慾心の十干十二支、土公をおせばそんな直が、出るとは部數の限りなし。諸君遊行の間の日には、かならず此の冊子をもて遊びて、梅が香つたふ御風聽、今年もかはらず御取立てと、願ふ心の十方ぐれ、八方金神の中央に、坐したるこの三四年の災厄も、やゝ解けそむる薄氷、春水四澤にみつるといふ、時をゑがほや花の兄、文永堂の引立てに、柳川重信畫の愛敬で、何卒あたれ大當り、日あたりもよき梅の枝を、月曜星の御前に供へ、一陽來福の吉書はじめ。

于時天保壬辰年春正月の發行にとて、冬至の宵に墨水を硯にうけて筆を染め。

江戸前の市隱狂訓亭
爲永春水しるす

さては此の程御はなしの、梅暦の畫上御書き入れのたしにもと、反古の中より
見出しさしあげ候。
月中仙子雪中梅　第一嫦娥第一香
御稿本明キ次第借用申し上げたく願ひ上候　めでたくかしこ
清元延津賀
狂訓亭雅兒

# 春色梅兒譽美　巻之一

江戸　狂訓亭主人作

## 第一齣

野に捨てた笠に用あり水仙花。それならなくに水仙の、霜除程なる侘住居、柾木の垣も間原なる、外は田畑の薄氷、心解けあふ裏借家も、住めば都にまさるらん。實と寔の中の郷、家數もわづか五六軒、中に此のごろ家移りか、萬たらはぬ新世帯、主は年齢十八九、人品賤しからねども、薄命なる人なりけん、貧苦にせまる其の上に、此のほど病の牀にふし、不自由いはん方もなき、容體もときの吉不祥、いとゞ寒けき朝嵐、身にしみ〴〵とかこち顔、獨りわびしき門の戸に、女「少し御免なさいまし少し御免なさいまし。」あるじ「アイ誰樣エ。」女「さういふお聲は若旦那さん。」といひつゝあける障子さへ、ゆがむ敷居に漸うと、あけて驅け込む其の姿、上田太織の鼠の棒縞、黒の小柳に紫の、山まゆじまの縮緬を鯨帶とし、下着はお納戸の中形縮緬、おこそ頭巾を手に持ちて、みだれし鬢の島田髷、

素顔自慢か寐起のまゝか、つくろはねども美しき、花の笑顔に愁への目元、亭主はびつくり貌うちながめ、丹「米八ぢやァねえか、どうして來た。そして隱れて居る此所が知れるといふもふしぎなこと。マア〳〵こちらへ、夢ぢやァねえか。」ト おきかへりてすわる。 よね「わちきやァ最う、知れめえかとおもつて胸がどき〳〵して、そしてもう急いで歩行いた物だからァ、苦しい。」ト むねをたゝき「咽がひッつくやうだ。」ト いひながらそばへすわり、「おまへはんは煩つてゐさつしやるのかえ。」ト かほをつく〴〵見て、「寔にやせたねえ、マア色のわるい事は、眞青だヨ、何時分から惡いのだえ。」丹「ナニ十五六日跡からヨ。たいそうな事でもねえが、どうも氣が閉いでならねえ。それはいいが手めへまア、どうして知つて來たのだ、聞きてえこともたんとある。」ト すこしなみだぐみてあはれなり。 よね「ナニ今朝は妙見さまへ、參りに來たつもりで宅は出ましたヨ。寔にふしぎなことサねえ、お前樣が此樣な所に御在宅といふことは、ほんに夢にも知らなんだがネ、此のごろ目見に來て居る、したぢッ子が これげいしやしたぢの子といふりやくしことばなり。 ありまはァな。その子の宅を聞いたれば、本所の方だといひましたが、それから皆々と、種々なことを聞いて遊んで居るとき、其の子が宅の近所の咄をする中で、どうもはなしの樣子が、おまへはんの噂のやうだから、其の晩一所に寢かしてよく〳〵聞いたら、宅に意氣な美しい、お内室が居ると言ひましたから、それぢやァ違ッたかと思つて、猶くはしく聞いたれば、おまはんの年よりおかみさんの方が、年うへのやうだといひますし、

またおかみさんは、とほして家には居ないといふし、聞けばきく程なんだか、おまはんのやうな心持で、モウ／＼どうも氣が濟まねえから、其の子によく／＼私の聞いたことを口どめして置いて、今日の朝參りには、なんでも尋ねようと思つて、十五日を樂しみにして、出て來たんでありまさァな。日頃の念力とはいふものの、風としたことからおまはんの、在家が知れるといふは、妙見さまのお蔭だと、嬉しいに付けて氣がゝりなは、おかみさんがあるとの噂、今日はどこぞへお他出のかえ。」丹「ナニつまらねえ、どうして女房どころなものか。そして其の子は其所の娘だらう。」よね「なんだか宅は八百屋だといひましたヨ、そりやアマア、いいぢやアありませんか。おまはんマアそれよりか、今から私のことなんざア、思ひ出しもしてはおくんなさるまいネ。そして噂にきいた、お內儀の事をかくさずとも、いいぢやアありませんか。」丹「ナニサ隱すどこぢやアねえ、此の容だものを、よく／＼もつて見るがいい、其の子の噺だつても、なんだか知れもしねえ。マアそりやアさうと、宅のやうすはどうだノ。」よね「宅のやうすは大變サ。鬼兵衛どんの氣ぢやア、皆に旦那さんといはれてえ心持で居ますのサ。それだけれど、御內室の在世な時さへ、あのとほりの理窟だものを、どうしてさういふ樣にいきますものか。それを何の角のと言つて、三日にあげず內證はもめが絶えやアしませんわ。私も全體おまはんの、養子に行かしつたときから、住みかへに出たいと思つて、氣をもんで居ましたけ

れども、どうもあゝいふ意地わるだから、ゑこぢになつて出すめえと、今日まぢやァ我慢して居たけれど、おまはんの宅は知れるし、そしてマァ。」トあたりを見まはし、なみだをひざにこぼしながら、「此様なはかない形身になつて、いさつしやるのを見て、どうしてあすこの宅に居られますものか。私やァ今日けへゐると直に住みけへをねがつて、婦多川へでも行つて辛防して、おまはんの身を少しも樂にさせ申してえネエ。」トしんじつ見えし女のいぢ、男はしじうふさいでゐる。よね「エモシ、そして養子に行かしつた御宅は、マァどうした譯で急に身代が立たなくなつたのでありますエ。」丹「さればサ、今さら考へて見りやァ、やつはり鬼兵衛が先の番頭の、松兵衛となれ合ひで、直に戸を塞す身上を、承知でおれを急養子、そんなことは露しらず、這入つて見れば借金の、山も縁つくどうぞしてと、思ツたゆゑに鬼兵衛にも、判をおさせた百兩の、金も養家へいれ佛事、それから宅へ出入もならず、音信不通とされたのは、みんな此方がふつゝかゆゑ、またそのうへに養子先の、身上はぶんさんして、まだ後日にはこれがあると云つて、番頭松兵衛が畠山さまへ出してある、五百兩の證文はおまへに上げますその代り、分散殘りの百兩は、私が七十兩あとは外の者へつかはしますといつて、其の身は上方へ登るといつて、行方なし。二番ばんとう久八といふ者が、深切におれが名代に畠山さまへ行つた處が、隨分金子は下げ遣はすが、先だつて松兵衛に、おほせつけられた殘月の御茶入、御拂ひものとてわたしおかれしが、此のほど聞けば梶原家へ、

千五百兩に納まりしとの事、夏井丹次郎よりさしあげ置いたる五百兩を、さし引き殘り千兩は早速に上納いたせと、いはれてびつくり立ちかへり、相談さい中お屋敷から、久八が宅へ役人衆がござられて、殿の御國へ御立ちゆゑ、心づかずにをつたるが、夏井の家分散とあれば、ゆるかせならぬ茶入の金子、松兵衛ならびに當主人、丹次郎同道いたせと大むづかし。それから久八がはからひて、おれはしばらく世をしのぶ身のうへ、松兵衛は行方しれず、段々久八が難儀するさうだ。とはいふものゝ俺もまア、くやしい難をきたぢやアねえか。」よね「まことに聞くもくやしいねえ。そしてだれが、おまはんの病氣の世話をしますヱ。」丹「ナニ世話といつて、居付いて世話のしてもねえが、長屋の衆や、またおもに世話になるのは、今はなした久八といふ人の、かみさんの妹が女髪結をして、此の近所に居るから、それが時々來て、なにかのことをしてくれるのサ。」よね「さうかえ、其の女中とはヱ。」丹「女中とはヱとは何のこツた。」よね「なんでもないのかヱ、どうも氣になるねえ。」丹「なにそんな浮氣な沙汰ぢやアねえわな、かうして居てもおいらア實に心細イヨ。」ト なみだはらはら よね「若旦那え、なぜそんなに悲しいことをお言ひなさるのだヱ。もう斯うしてお在家が知れるからは、どんなことをしても、私が身の及ぶだけはおまはんに、不自由はさせやアしませんから、氣をしつかりと持つて、早く能くなつておくんなさいヨ。こんな寂しい所に夜も獨りでマアさぞ。」ト顏をそむけて袖をあて、昔と

いへど遠からぬ、昨日にかはる此のすがた、たとひ内證は兎も角も、大町小見世の若旦那、所柄とて何事も、花美に暮せし其の人が、三疊敷を玉のとこ、ならでたまさか問ふ人に、さすが恥ぢらふ憂き住居。思ひやるゝ男の心、惚れた女の心には、千萬無量のもの案じ、よそ目に知れぬ歎きなり。男はなみだをふきながら、圭「何サおいらア斯うして人に、遠慮をして居る身ぶんだから、不自由も何もしかたがねえ、どうで自由にならねえ身のうへだから。」よね「サアそれだから、モウこゝを歸りたくありませんヨ。」圭「そんな事を言はねえで、どうかまた顔を見せてくんな、そしてモウおそくなるだらう、いいかえ。」よね「ナニ今朝は遅くなる用心をして來ましたヨ。奥座敷のに。」このおくざしきといふは、たしかにこの宅げいしやのゐる所のおいらんにて、そのいへのおしよくのこととするゐしたまへ。「徳さんの手紙をたのまれたから、裏前までわざ／＼行つてやるつもりで取つて來たから、今日中に人をたのんでやればよいヨ。そして觀音さんと淡しまさんへ、お百度をして歸る積りだから、よつほど手間がとれることがあつても、いいやうにしてありますヨ、イヤ火が一ツもないねえ。」トいひながら、火うちばこをさがし、やう／＼に火をおこして、「薬を煎じて置いて上げよう、どの土瓶だエ。」圭「その火鉢の脇にあるヨ。」トといひながらまくらもとのくすりを出して、「生姜もその盆のうへにあるだらう。」よね「ア、有りますヨ。オヤ此の口のかけた土びんかえ。」トおもはずわらひしが、またかなしくもなり、ふじいうなるをさつして塞ぎ、「お醫者さんは何所のだえ。」圭「ナニそれも、お濱さんが世話をしてよこしたのだ。」よね「おはまさんとはエ。」圭「いま

はなした久八のかみさんの娣よ。おほかた目見の子の言つた、かみさんとはそのことだらう。それはいいがおいらの事を知つて居てはわりいなう。」米「ナニサ他はなんだか氣が付きやアしませんわネ。そして飯はありますかえ。」丹「ム、おめしはゆうべ向うのをばさんが來て、焚いてくれたからいいが、手めへ腹がへつたらうが、此近所にはどうも鳥渡喰はせるものもねえ、餘ッほど遠いからこまるネ。」米「ナニ私やア午刻までは鹽禁だから、どうで何も喰べられませんが、おまはんに何ぞおいしい物でもたべさしたいネ。私がなんぞ拵へて上げたいヨ、斯うして居るうち何ぞ用を思ひ出して御らんなねえ。」トいひながらかみいれより、何かつゝみしものをいだして「マアこれで、何ぞ不自由なものを買つて置いて、そして身になる物をちッとたべてお見なさいよ。今朝はほんの朝參りではあるし、おまはんにあはれるかなんだか知れないから。塞に少金ばかりしかありませんヨ。また其の内都合して出て來ますヨ。」ト手にわたせば男はうけとりきのどくさうに、「これぢやアどうも氣のどくだ、そして米八もうおめへけへるのか。」米「ナニまだ歸りやアしませんよ、おそくなつても今のわけだから宜いわネ。マアおまはんの首が、ひどくうつとしさうだねえ、そつと束ねてあげようかえ、さうしたら、心もちが、ちつたアさつぱりなさるだらう。」丹「さうヨ、まだ居ても能かアそろ〳〵とゝかしてくんなナ。」米「ア、どれ。」トうしろへまはりてうれしさうに「私のさし櫛でもよからうネ、ナ、〳〵塞にモウおそろしい。」ト、心よわきは女の癖、過ぎ越し方を思ひ

出し、鬢水ならで衿元へ、ひいやり落つる涙の雫、男は振り向き、丹「よね八なぜ泣く。」よね「それだッても。」丹「それだつてもどうした。」よね「おまはんマアなぜこんなに、はかねえ身のうへにならしつたらうねえ。」ト をとこのかたにとりすがりなく。をとこは振りむきよね八が手をとりひきよせ、丹「かんにんしてくんなヨ。」よね「ナゼあやまるのだエ。」丹「手めへにまで悲しい思ひをさせるから。」よね「エ、もうおまはんは、私をさう思つておくんなさるのかえ。」丹「かはいさうに。」ト だきよせれば、よね八はあどけなく、病にんのひざへよりそひ顔を見て、よね「眞に嬉しいヨどうぞ。」丹「どうぞとは。」よね「かうしていつまでも居たいねえ。」ト いへば男もつくぐ〵と、見れば思へばうつくしきすがたにうつかり 丹「○○○○○○○。」○○○○○○。よね「○○○○○○○○○○○○○○。」丹「○○○○○○。」○○○○○○。此のときはるかに觀世音の巳の鐘ボオン〳〵。

## 第二齣

遠くて近きは男女の中とは、清女が筆の妙なるかな。抑丹次郎と米八は、色の樂屋に住みながら、いつしか契りしかね言を、たがへぬみさをの賴もしく、尋ねて深き中の鄕、九尺二間の破れ疊、病の牀に敷きものも、うすき緣とかこちたる、恨み涙の玉のこし、捨てて貧苦をいとはじと、誓ふ誠の戀の慾、これぞ流れの里にある、人の意地とは知られけり。主丹次郎はかほをしかめ、丹「米八その藥を茶椀へついでくんな、胸がどきぐ〵するから。」よね八はさしぐしで男の髪をとかしながら よね「オヤさうかえどうせうね。」ト、びつくりし

て薬を持ち来る。丹「何サ何でもねえが。」トにつこりわらふ。よね丹「わりい事をしたねえ。」トこれもにつこりわらふ。丹「それやアさうと、アノお蝶はどうしたなう。」よね丹「お蝶さんかエ、あの子も寔に苦労しますヨ。それに里兵衛どんが、何かをかしらしいさうだから、猶心づかひしてゐるやうすサ。随分わちきも側で気を付けてゐますけれども、何をいふにも、おまへはんのことをもつとはかんぐつて居る　このかんぐるとは、するりやうしてゐるといふ俗語なり　ものだから、じつにしにくうございまさァな。」丹「さうサあれも幼年い中から、あのやうに育ち合つたからかはいさうだヨ。」トすこしふさぐ。よね「さやうサネ。をさな馴染は格別かはいいさうだから、御尤もでございますヨ。」トつんとする。丹「何さ別にかはいいといふのではねえわな。マアかはいさうだといふことヨ。」よね丹「それだから無理だとは言やアしませんわネ。」トすこしめじりをあげて、りんきするもかはゆし。丹「まぬけめえ、直に腹アたつから、何でも聞かれやアしねえ。」よね丹「さやうサ私やア間抜サ。お蝶さんといふ寔にいひなづけのあるおまへさんに、こんなに苦労をするから、間抜の行きどまりでありますのサ。」丹「よくいろ／＼なことをいふヨ、そんならどうでも勝手にしろ。」トよこをむく。よね丹「すヤおまへはんは腹をたたしつたのかえ。」丹「腹をたつてもたたねえでも、打捨つておくがいい。」よね丹「それだつても、アレサ、おまへはんがお蝶さんのことを、かはいいとお言ひだから、ツイさういつたんでありまさアな。」丹「ナニおいらがさういふものか、かはいいではねえ、かはいさうだと言つたんだ。」よね丹「すヤかはい

いふ、かはいらしいもかはいさうだも、おんなじことだやァありませんかえ。そんなら私がわりいから、堪忍しておくんなさいナ。」丹「どうでもいいわな。」ト いはれて、もとよりほれこみし、男はとかく氣がおかれ、あいそづかしもされんかとなみだぐみ、よね「アレサほんたうに私がわりいから、どうぞ堪忍して、機嫌を直しておくんなさいな。」ト おろ〳〵する。丹次郎はにつこりとわらひ、丹「そんなら堪忍するが、最うおそくなるだらうから、おれがことを案じずに、宅へかへつたら、座しきを大事に勤めなヨ。」ト やさしきことばにむねいつぱい、わづかなことがしみ〳〵と、悲しくなつたり嬉しきは、ほれたどうしの戀中なり。よね「モウ若旦那おまはんが、そんなに優しく言つてくれさつしやると、又猶のこと歸るのが否になりますァな、急度モウどんな事があつても、變る心を出しておくんなさいますナヨ。」丹「何べらぼうめえ。」よね「わちきやァそればつかり、案じられてならないョ。斯うして居さしつてもどうぞ時節は、私のことを思ひ出しておくんなさいョ。」ト あどけなきこそなほゆかし。

へわすれねばこそ思ひ出さず候、とは名妓高尾が金言ながら、互に思ひおもはるゝ、深き中ほど愚癡になり、少しはなれて在るときは、もしや我が身をわすらるゝ、ことあらんかと幾度か、思ひすごしも戀の癖、其の身にならねばなか〳〵に、他目に見てはいとゞしく、阿房らしくも馬鹿らしく、笑ふは實に戀しらず、哀れも知らぬ人といふべし。

丹「おもひ出す所か、わすれる間があるものか。」よね「それでもァノ、お蝶さんのことを思ひ出しち

やア否だョ。」トをとこの顔をみる　丹「ばかばかり言つてるすとも、歸る支度をしなさい。」　よね「何の支度があ
りますものか、著物を端折るばかりだわネ。それだやア最うなにも用はありませんかえ。アノネ私が
また來るまで、不自由なものがあるなら、どうかして使をよこしておくくなさいョ、是非わちきやア
住みかへする心だから、さうなるとまたどうでも出來るから、案じずに御在でなさいョ。少しは胸に
法もありますョ。」トいひながらそこいらをかたづける。　丹「まためつたな業を仕出來して、後へも前へも行かねえやうな
ことをしてくれるなョ。」　よね「ナニサおあんじなさんなよ。どうも時節じせつで心にもねえ悪法も、
おまはんのためなら身を粉にしても。」　丹「米八や、いいはなしを聞かしてくんなョ。」よね八はたちかへりしが、またトわけ、
よね「おまはんナゼそんな顔をしておくんなはるのだえ。」さんといふをはんといひ、さるといふをはるといふ、すべてかたことはさつしたまへ「わち
きやア猶心が殘つて歸られないわねえ。」トなく。　丹「なんだか心ぼそくなつて、どうも歸しともねえやう
だが、どうしても歸らざアなるめえなア。」トいはれて見ればよね八も、しんそこほれた男の心、おもひやるほどいたはしく、　よね「いッそのこと
に、これから直に。」　丹「ナニ／＼それぢやアわりい。さうすると鬼兵衛がなか／＼すべよく、くらが
へゝさせるこつちやアねえ、サア／＼機嫌よくして歸んなョ、ョ米八。」　よね「さうさねえ。どんな事
でかおまはんに、難儀をかけるやうな事になつちやアわりいから、氣を鬼にして歸りませう。」　丹「さ
うよ、なんでもすべよく出るならよし、無理な事をして手めへの身に、どんな事でもあつた時は、

なほ／＼おいらがちからがねえから、どうぞ俺を思つてくれるなら、ひどい胴居はちかごろはらをすゑて、ぜんあくともいちづにすることを、どきようといふ。ひとびとはしたなければ、つかふべからず。しねえがいいヨ。」よね「アイ私だつておまはんのためにすることだから、どうなつてもとはいふものの、二人が身にとつて、末のつまらない胴居はしやアしませんから、案じずにちつともはやく能くなつておくんなさいヨ、そんなら私やア最う行きますヨ。」トしをしをとして立ちあがりしが、しがみついてしけ／＼と顔をながめ、よね「急度でございますヨ。」丹「何を急度だ。」よね「ほかの氣を出すといやだと申すことサ。」丹「ム、ヨ、承知だからモウ道よりをしねえで歸んなヨ。」よね「ナニ途中寄りをする所がありますものか。」丹「そして先刻の手紙を、手めへ裏前へ頼んでやるのおやアねえか、誰にかおれが頼んでやらう。」よね「アイさうだッけネ、それおやアさうしておくんなさいヨ。よく氣が付いて呉れさしッたね。」トあがつて來て文をわたす。○下されしといふをくれさッしやる、くれさしッたのたぐひ、これみな里のことばくせなり。よね「いつまで居ても限りはねえから、もう思ひきつて往きませう。」トあがり口へおりてはきものをはくゝ丹次郎はおくりいでゝ、丹「ア、コウ米八。」よね「アイ。」丹「なにかまだ用があるやうだッけ、イヤいい／＼、急いで行きなヨ。」よね「アイそんなら。」トなごりをしげにいでゝゆく。そのうしろかげを丹次郎は、見おくりながらひとりごと、丹「かはいさうにあんなに苦勞させるのも、何の因果だらう。」トなみだほろり。「ア、モウ／＼ふさぐめえ／＼。」トふとんの上にすわりしが、「ホイこれはしたり頭巾をわすれて行つた、ア、こまるだらう。まだ遠くはいくめえ、ア、おれが驅けていかれる身だといいが、じれッてえ。」ト

頭きんを手にもつてらふ〳〵してゐる　トよね「若旦那え。」丹「すイ米八か。」よね「私やァ頭巾をおとして。」丹「いまおいらもさう思つて、まごついて居る所だ。」ト頭きんを手にわたし「何所までいつた。」よね「何だか武家地のやうな所まで往つたけれど、何そして頭巾はなくなッてもいいけれども。」丹「いいけれどもどうした。」トよね「また鳥渡歸りたくなつたものを。」丹次郎はうれしさうににつこりわらひ、丹「そんならいいから早く歸んなヨ。」トよね、こゝんどこそ實にかへるヨ。」トおもひきつて出て行くうしろかけを、見送りて、こゝろのうちに、丹「アヽ憎くねえやつだ。」トしやうじをぴつしやりとしめ、ためいきをつく。をりからひるあきんどのこゑ、へ豆腐ウ引イ

嗟愚癡なるに似たれども、またその人の身にとりては、他に知られぬ戀の道、此のおもむきにかはるとも、實はおなじ男女の情、色は思案の外とはいへど、物の哀れをこれよりぞ、知らば邪見の匹夫をして、心をやはらぐ一助とならんか。

老婆心人　狂　訓　亭　記

春色梅兒誉美巻之一　了

# 春色梅兒譽美　卷之二

江戸　狂訓亭主人作

## 第三齣

九年なに苦界十年花衣。さとつて見れば面白き、色の浮世の其の中に、色を集へし一郭盛り久しきこの里に、唐琴屋とか聞えしは、いと賑しき家なりしが、主夫婦死去りて、血筋の娘阿蝶とて、今年十五の形容艶く、されど兩親あらざれば、鬼兵衛といへる後見が、心よからぬ動止も、親類縁者あらぬゆゑ、只本店の持ち同然、その本家へは彼の鬼兵衛が、如才なく機嫌をとり、なに事も深切めかして勤めおき、今は唐琴屋のあるじのごとく、萬事に我意を行へど、首をおさふる人もなく、女郎藝者に發見なる者はあれども、給金にかはれし身ゆゑ、後見も主人に同じ鬼兵衛には、流石たてつく者もなく、たゞ先主人のありし日を、言ひ出してはつぶやくのみ、また爲方もなかりしとぞ。斯くて此の家のおいらんに、此糸と稱ぶお職あり。年まだ若き身ながらも、萬に付けて抜目なく、内外の者の

思はくは、いふも更なり茶屋船宿、お針が三の和の噂にも、賞める花美好きされぱとて、はすはにあらぬしとやかさは、是にもはぢぬとり廻し、艶色は里の指折りにて、殊にやさしき實情しりなり、頃しも春の梅ごよみ、れんじに開く鉢植の、花の香かをる風寒み、身に染む紋日物日さへ、春は殊更やるせなき、今日ぞ跡著の著染初めと、賑ふ時も巳の刻を、過ぎてまつたく起き揃ふ。軒に呼びこむ朝日紅、色の街ぞゆかしけれ。爰においらん此糸が、座敷のうちにひそ〳〵と、囁くものは内藝者、其の米八と稱ふものなり。よね「モシエおいらん私やアもう、おまはんのことは、死んでもわすれやアしませんヨ。」ト なきながらいふ。 此糸「アレサ此の子はヨ、そんなに泣いて、ひよつと誰ぞ來るとわりいヨ。今みんな湯に往つたから、早く顔を直して下へ行きなヨ、何も案じる事はねへヨ、そして他にさとられなさんなヨ。」よね「寔に〳〵ありがたう、しかし藤さんが少しの内も、他人にいはれさつしやるのが私のやうなもので、寔に面目なうございますねへ。」此糸「ナニサ、それもあのとほりの氣性の藤さんだから、見かけて頼んだわけだもの、それをいとつてるちやア出來ねへ世話だものを、能いわなヨ、マア〳〵おいらに任しておきなヨ。何にしても今夜また、文をやつて呼びたいもんだが。」ト はなしのうち、らうかをしづかにばた〳〵 よね「オヤお蝶さんの足音ぢやアありませんかねへ。」此糸「さうサ早く下へ往きなな、わいい顔をしなさんなヨ。」ト いふ所へしやうじをそつとあけながら、此の家の娘お蝶、蝶「おいらんお座敷かへ。」ト つぎのまへはひる、もうア

アざしきざんすョ、お蝶さんかえ。」蝶「ハイ。」ト立つてゐる。此「本間へお這入りなんしなえ。」トいひながら、顔のいろをかへ、よね八にむかひ、よ「これサ米八さん今の通りだから、どうぞお氣の毒ながらさう思つておくんねんし。」トけんどんにふくれていふに、よね八も心にうなづきこれもけんどんに、よね「アレサ私のしたこつて有りますものを、ずゐぶんさうおもひますのサ。」トいひながらついとたつてらうかへ出てゆく、引きちがへてお蝶は本間へはひる。此「口のへらねえ藝者だョウ。」トくやしさうにいふ。蝶「おいらんなんでございますエ。」此「ナアニちつとしたこツて。」蝶「おいらんが腹をおたちなさることだから、よく〳〵なことでございませう。」此「何外の事ならわちきやァもう、成るッたけ他と顔をあかめ合ふまいと思つて、藝者だらうが新造衆だらうが、餘つほど氣をつけてやりますはァな。いかなこッてもあきれたおやァおさんせんか。」蝶「どうしたんでございますエ。」此「私をばまるでこけにして居るんでざんさァな。」お蝶はとしはもゆかざれど、をさなきときよりそのなかにすめば、それぞとするゐりやうし、蝶「米八さんは、日頃男ぎらひだの堅いのと、他がいつてるゐおやァありませんかえ。」此「男ぎらひだか、男好きだか知れやァしませんわ。私やァまた先の出やうで、是ればつかりは打捨つて置きやァしませんわ。彼奴を出すか私が出るか、二ッ一ッ方をつけなくつちやァ悔しうざんす。鬼兵衛どんが云ふ事を聞いてくれねえと、内所へ長坐つてやりますョ。」トはらだたしくいふ。是れすなはちよね八といひあはして、このおいらんの客人藤といふものとよね八と、いろをせしおもむきを拵へ、それを此糸がやかましくいひ出して、よね八をやす〳〵とくらがへさせ、かの中のがうなる丹次郎は、もとこのいへの跡をもとるべきものなりしを、両親なくなりてのち借金おほく、しんしやうたちがたきところ、またやうしにやりて、まづかとくもなきほどなれぱとて、かり方をおしつけ、鬼兵衛と

いへるが後見してはじをなし、丹次郎はひかげの身となり、こん窮のやうすをきき、氣のどくにおもひ、このおいらんが心は、古主を米八にみつがせんとおもふ、義理となさけのこんたんにて、いとたのもしき手くだなり。お蝶はそれまでとはしらず、わがいひなづけせし丹次郎と米八と、わけのありしことをかねてさつし、すこしはやきもち心もあれば、よね八をにくみいい氣味とおもふゆゑ、　蝶「オヤさうでございますかえ、知れないもんでありますね。そりやアさうと話にうかれて、藥をあげまうさなんだ、おいらん湯吞へつぎませうかえ。」ト　くすりをつぎ下へおいて、　蝶「おいらんえ、今のやうにお言ひだがね、私はおまへが内所へすわつたり、何かするとまことにこまるから、どうぞ左樣しないで、世話をしておくんなさいョ、ひよつとおまへがさういふことだと、私やア心ぼそいョ。」ト　ほろりとこぼすなみだのしづく、両おやこの世にあるならば、家にかゝへし奉公人、なに手をさけこたのまれう、およそをさなきをりからに、おやにはなれてそだつほど、かなしきものゝあるべきかと、わかりし心においらんは、ひとしほ不便となみだぐみ、　此「ほんにおまはんはかはいさうだね、斯うして居さしつても、おかみさんが達者な時の姿はちつともなし、禿同然の形をして、此の樣に二階へ藥を持つて來さつしやるのを見ても、涙のたねでおッす。」ト〇お蝶を膝に引き寄せて、思はず涙におせかへる。眞の歎きは傾城の、やさしき鑑となりぬべし。作者此の草稿しるす時しも、菊月初めの七日の夜、丑三の頃になん、はじめて鴈の告ぐるを聞きて、

かくばかりやさしき君がたまくらにことづてやらんはつ鴈のふみ

これは扠おき彼のお蝶は、此糸がいとやさしき言葉に、わアつト　こゑをたて身をふるはせしがかほをあげ、　蝶「おいらんえ、おまへさんがそんなに言つておくんなさると私はモウ、母人でもあるやうに思はれてかなしい

ヨ。」トまたとりすがるひざのうへ、肩ぬひあげのみはじさへ、せまき娘のこころねを、さつしてみればこのいとが、なほいとしさもいやまさり、 此「わたしも何の因果だか、一人ならず二人まで、倦くまで世話をしてやらずば。」 蝶「エ一人ならず二人とはエ。」 此「エなにサ、お前さんも若旦那をもサ。」トいひまぎらして涙をふき、 「そして此のごろは下のは下のとはこうけんの鬼兵衛がことなり。 機嫌がようおざんすかえ。」 蝶「ナニ私やア窪にこまりますヨ。いふことをきくのは否、聞かないければあのとほり、いぢめて朝晩やかましく、マアどうしたらよからうねえ。それにつけてもお兄イさんは、これ丹次郎がことにして、心にをつととおもへども、いつしよにそだち、殊にはづかしければ兄といへり。 何所にどうして御在でなさるか。こんなに私がつらい思ひをするとは、ちつとも知らずにおいでだらう。」トはをくひしばるくやしさを、なみだのほかにすべもなく、 此「ナニサお案じでない、どうかして法をかいて。」ト言ひかけてなほ小ごゑになり、 「爰を身抜けをさせまうす、手段もまたありませうわネ。かならずきな〳〵思はずに、ずゐぶん今の内は機嫌よく用を足しなんしョ。座敷のものが今湯から、上ッて来ると悪うざんすから、早く下へ往きなんしョ、かならず案じなんすなエ。」 蝶「ハイおありがたう、それぢやア下へ往きますヨ。」トたつて次の間へ出る。らうかをばた〳〵かけてくるかむろしやうじをあけて、 禿「オヤお蝶さん、今下の方でたいそう呼んでゐますヨ、はやく裏階子から下りてお出でなまし。アノ意地悪根性が、おそろしい貌をして、おまはんを呼びますわ、顔が憎いヨ。」 此「しげりやなんだ其の口は、お蝶さん早く下へ往きなんしョ。何もこはいことはおざんせんわネ。」トいへどお蝶はおど〳〵と、けらいにひとしき鬼兵衛をおそれ、こはがるふぜいのいぢらしく、そばで見るめも口をしけれ。

「しけりや一連に付いて往つて見て來や、小言が出るとわりいなう。」米「おいらん、しかられたら木ておくんなんしョ。」ト おろ／＼涙にしたへゆく。 此「かはいさうにいぢらしい子だなう。ほんに米八さんもあの子もどつちをどうともいはれねえから、二人ともにこんなに苦勞してやるといふのも、何の因緣やら。」ト ひとりごとをいひながら、ほつとためいきをつく。 となりから番しんしやうじをあけて、 はんしん「ながい湯でございましたらうネ。」 此糸はにつこりわらひながら、 此「アイヨ。世應にながうさんしたネ、おまはん今あがつて來るとき、下でなんぞまた、小言が出やアしましなんだかえ。」此「イヽエ、氣が付きませんョ。」ト いふ所へ走かけて來て、 米「アノウおいらんエ、又ネあの意地わるがおこりましたから、早くいつておあけなましュ。」 此「さうかどうもこまるョ。」ト うはざうりをはきらうかへいでる。 はん「またお蝶さんのことざますか、かはいさうにさぞくやしからう。」 此「それだから、私もちつとは力になつてやるんざんすわネ。」ト いでてゆく。ばんしんはかんざしでゆあがりのつむりをかきながら、 はん「しげりや、書附をとつて來や。そしての、夕ア書いて置かしツた、藤さんの文を巴屋へちよつと持つて往つて來やョ。そして金曾木の柏屋か來たら、翁草の後篇と、拾遺の玉川を持つて來なと、さういふのだョ。ドレおいらんの來さツしやらねえうち。」ト いひながら茶ほうじを出して茶をいれる。

作者曰く、この草紙は米八お蝶等が人情を述ぶるを專らとすれば、靑樓の穿ちを記さず。元來予は妓院に疎し、依つて唯その趣を畧すのみ、必ずしも洒落本とおなじく評し給ふ事なかれ。且

筆のついでに申す、此の一條、お蝶が苦心のくやしきを見て、父母のことを大事になし、必ずしも仰せにそむき給ふな。豈世の中只此のお蝶に限らんや、父母にはやくはなれし人は、他人の爲に恥ぢしめられ、いぢめらるゝ事、これにまされる人もあらん、成長るまで父母の此の世に在すぞ、千金にもまして、いとありがたきことと尊み給へかし。

あるときはありのすさみにつらかりしなくてぞいまは人のこひしき

## 第四齣

雲介ども四五人よって駕籠を取り卷き、くも「サア〳〵お娘や出なせえ〳〵。」かごのうちよりむすめのこゑにて、娘「ハイ〳〵、おほきに御苦勞でありがたう、そんならこゝが金澤の。」くも「サアその金澤へはまだ一里、金澤よりか金になる、おめへの艶色に棒組も、仲間のやつらも息杖に、氣をもたせたる永丁場、息つぎなしにいそいだわ。」棒ぐみ「みないひあはした深切仲間、さいはひ此所は同樂寺といふ、無住のあき寺、お娘を正座に取りまいて、念佛講をはじめるつもり、何と憎くもあるめえが。」くも「サア〳〵お駕籠を出なせえ〳〵。」トかごのすだれをはねあげられ、おろおろしたるひとりのむすめ、娘「エそんなら爰はお寺ぢやとえ。そしてマアこんな寂しい墓原で念佛、誰とやらお言ひだけれど、私が坊さんではあるまいし、どうして正座にお念佛が。」くも「となへられぬといふことか。サッても野暮なおぼこ娘、此の節そんな世間見ず、わかりのわりい子があるも

のか。みんながおめへを相手にして、百萬遍を勤めるのだ。サア／＼早く出なせえ／＼。」ト引き出されてなき聲に、娘「それでもわたしはこのくらがり、こはくつて／＼なりません。百萬べんをなさるなら、私を金澤の親類へ、送つて跡でゆるりッと。」棒ぐみ「どうで直に抱かれて寐ようといはれるやうな好男は、一人も見えねえこの仲間。」くま「さうよ／＼、何れにしても、泣かせる仕業、邪魔のねえうち少とも早く。」棒ぐみ「泣かせるならば本堂へ。サア天井持にかついだ／＼。」ト四五人よつてぶるぶると、ふるへる娘の手をとれば、娘「アヽレどうぞ堪忍して下さいまし。年もゆかいで高慢なと、なほ憎しみもありませうが、私はいひなづけのお方のために、神さんへ願をかけ、辨天さまへ斷物して、男の手にもさはるまい、三年の中は戀しい人にめぐり逢つても、一所へは寄りますまいから、どうぞして尋ねあはして下さいましと、誓ひをたてゝ深いねがひ、どうやら私を手ごめにして、なぐさみでもなさるやうす、どうぞ後生でございます。堪忍しておくんなさいヨ。」くま「なるほどなア、さう聞いて見りやァかはいさうに、こまッちやくれた姿をしても、まだやう／＼に十四か十五、花も咲いたかさかねえ生娘、しかしそれだけなほ執心。」●「それ／＼宿場々々の飯盛さへ、杓子あたりのわりい此方等、此樣なことでもねえ日には、無臘のお娘の手いらずを。」五「賞翫などとは此のまゝに、またあらうとも思はれねえ。サア／＼本堂へ引つぱれ／＼。」ト、たちかゝられて身を縮め、齒の根も合は

ぬふるへ聲、娘「モシ〳〵どうぞ此の中で、きのつくお方があるならば、あやまつておくんなさいヨ、手を合はして拜みますアレヨウ引。たれぞ來ておくんなさいましヨウ引。」涙は顔に玉の露、折から朧の雲はれて、明光々と照る月に、見わたす方は遙々と、目も屆かざる田甫道、里をはなれし荒寺の、なほ物すごくおぼえけり。●「これサ〳〵お娘や、をがんでよけりやア此方がをがむ。どうで叶はぬ此の原中、自由になつて少しのうち、抱かれて寢れば直にすむ。」▲「さうヨ〳〵、まんざらわりいことでもねえ。」ト捕ふる袖をふり拂ひ、前後左右へ逃けながら、娘「アレヨウどうぞ堪忍しておくんなさいヨウ、そのかはりに、わたしがおいらんにもらッて來た、お金が五兩ありますから、これと私が此の著物も、みんなおまへさんたちに上げますから、おいらんに貰つた紅鹿子の此の肌著、これをひとつもらへばよいから、あとはみんなおまへたちのものにして、どうぞ一所に寢ることは、アレ〳〵〳〵後生だから。」ト逃げ廻るを、追取り廻して惡漢ども、手取り足取り引つかつぎ、軒もる月の本堂へ、遠慮會釋もあらくれ男、どよめきわたつて連れ立ち行く。

　そも〳〵此の娘は何ものぞ、これ唐琴屋の娘お蝶なり。いかゞして此所に來りしとたづぬれば、彼のおいらん此糸が計らひなり。そはいかにとなれば、後見の鬼兵衛多くの借金をひき請け、唐琴屋の家を相續なすを恩にかけ、お蝶に迫りていやらしく難儀させ、所詮をさまらざるを推量し

て、お蝶が艱難辛苦をのがれさせんが爲、以前唐琴屋の番頭なりし忠兵衛といふもの、金澤の備人となり居る由を知り、殊に其の身の親元も金澤なれば、兩方へ文を添へて、祖師樣へ參詣の時を得て、途よりすぐに落せしなり。これ併しながら、途中の用心まづ心づかざりしは、發明なれども郭育ち、わづかなれども旅といふに、心の屆かざるは、流石あどけなき傾城氣質、前後わからぬお蝶が娘心と察して、ふかくとがめ給ふことなかれ。

はや告げ渡る初夜の鐘、遠里小野にこだまして、いと物淋しき古寺へ、擔ぎこまれし彼のお蝶、鷲にとられし小鳥にも、なほ増りたる哀れさも、情を知らぬ雲介ども、寺の破戸を引きはなち、お蝶を横に押し倒し、▲「サア〳〵、まんがちをするな鬮どりだぞ〳〵。」ト、既にあやふき地獄の責め、藁を數へて立ちさわぐ。時に後のくらがりから、そつとお蝶が耳に口、こなたへ來いと言ふ聲は、たしかに女と、こは〳〵ながら引かれてしりぞく娘のやうす、雲介どもは氣もつかず、鬮を爭ふ最中へ、ワァット聲かけ五六人、手んでに棒を追取つて、雲介共をなぐりたて〳〵つゝ、聲々に「勾引しの盜人めら、片ッぱしからふんじばれ、一人も逃すな〳〵。」と、呼ばはり〳〵走せかゝられ、元來無道の人非人、皆ちり〳〵に逃げ出す。折からお蝶の手を引いて、あらはれ出づる勇みはだ、されど月夜にぞつとする、素顏の意氣な中年增、月諸共に横にさす、櫛も野代の本檜木、秋田といふは鼈甲か、しや

れた出立の旅姿。こしま「オヤ／＼、おまへたちは最うそんなに、りきまなくつてもいいぢやアないかえ。みんな逃げてしまつたのに。」五六人「ばかなつらな東ッ子だぞ。コレうぬらアとはうもねえ頓智きめらだア、ヤイうしやアがれ、エえ、だれだと思ふ業法人め。」つれ「ヤイ耳のあなをかつぽじつてよく聞きやアがれ。忝くも尊くも、小梅の姉御お由さんの弟ぶん、古風なやうだがくりからの、龍吉さんたアおれさまのことだ。」また一人「こともおろかやそれがしは、小梅のさとに人となり、瓦の煙にふすぼれど、元業平のまうし子にて、梅のお由が一番子ぶん、女たらしの權八さまだぞ、由縁のいろの。」こしまい女およし「これサ／＼、おめへたちやアあきれるヨ、きはどい所で茶番をすらア。」五六人「違へねえ、まるで立ちまはりをさせやアがつた。」女「ほンにおまへはマアさぞこはかつたらう、モウ／＼氣を大丈夫におもちョ、私は小梅の女髮結、お由といはれるおてんばもの、江の島の辨天さまへ大願で月參り、役にたたずも行き過ぎが、若イ衆達の氣にいつて、姉御々々と立てられるが、嬉しいといふもちつと自惚、しかし今ぢやア人にも知られ、餘りまけたこともねえ、女伊達らのおちやッぴい、江の島からの歸り道、みんながたいそう道草を、喰つてたうとう往來を、間違へたのがおまへの仕合、野道畔みち森の中、藪から棒に此のお寺へ、來るとおまへがすでのこと、それから急に若いしゆと、言ひ合はした此の仕末、まことにあぶないことだつけネ。」ト、聞いてお蝶はやう／＼に、心をしづめ

胸をなで、嬉し涙に襟さへも、噎せかへるこそ道理なれ。やゝしばらくありて、長「まことに〳〵私は生き返つたやうな心持になりました。どうぞ申しかねましたが、とてものことに私を。」由「往くところへ送ッてくれとおいひのかえ。」長「ハイどうぞ〳〵。」由「そりやァかならずお案じでない。此様に若い衆が大勢だから、おまへの身のうへもよく聞いたうへは、送るはおろか行く先い、詰でもわりいやうならば、私の宅へ連れてかへつて、どいつが來ようがどのやうな、尻が來ようが受けあつて、公儀へ對した不法がなけりやァ、理窟のわかつたけんくわなら、憚りながら尻おしだ。サァ何にしろ夜が更けちやァ、旅宿にこまるわけになる。サァみんなが此の子を中に取りかこんで、あいつらが仕かへしの用心して。」若い衆「ナニ〳〵もう來る氣づけへはございやせん。なんなら私がおぶつて上げよう。」由「イエ〳〵兼さんや源さんには頼むめえ、榮さんか金太さんか、次郎ならば丈夫だが、其の外ハ娘ッ子の番には覺束ねえ。」ト、笑ふときしもまた雲る、朧月夜にやう〳〵と、里ある方へうち連れて、たどり行くこそ頼もしけれ。

春色梅兒譽美卷之二 了

唄女三四人寄り合ひし中に米八、よね「梅次さん今のはなしに、どうしてもしておかうの。」うめ「さうよわりいことはいはねえから、さうしねえヨ。」側に眉毛をぬいてゐる政次、まさ「ナニサまた其所の座になると捨罪をいふわな。」よね「ナニもう今日はみんなの意見について、ほどよくいふ氣よ。」うめ「いふ氣ばつかりぢやアいけねえぜ、しかしおいらもおぼえがあるよ、おらアもう幸さんの時にやアナウまのじ。」政次のことなり。まさ「さうよ手こずッたつけ、大津屋の内儀にたいそう世話になつたなウ。」トいふうち米八は帶をしめて仕舞ひ、よね「オイめのじ うめじのことなり ちよいと。」ト茶椀をいだす。梅次は火鉢のわきに下りてゐる土瓶をとつて、うめ「これか。」よね「アレサどうも請けのわりい。」うめ「オツトしようちだ。」ト、そばにある燗德利をとり、湯呑へなみ〳〵とつぐ。米八はぐつとのんで胸をたゝき、フウと息を二ツ三ツ外へはつし、齒をかち〳〵とならし、よね「サアお出かけなはるんだ。」政次梅次「うまく言ッて來ねえよ。」米八は莞爾として出でて行く。

# 春色梅兒譽美 卷之三

江戸　狂訓亭主人作

## 第五齣

初といふ名に客人はあくまでにあとをつけたる雪の中裏。それかあらぬか知らねども、いづれあだなる婦多川の、色の湊に情の川岸藏、戀の入船迎へ船、たれ棧橋といふ聲と、意氣な調子の騷ぎ唄、たえぬ世界に愛はまた、閑幽とした船宿の、二階に二人さし向ひ、酒もさえなき不調子は、どういふ譯かわからねど、（旦那らしき風俗の人藤といふ客人、）藤「コウ米八手めへマア、さう意地をはるものぢやアねえぜ。義理と人情をかんがへりやア、少しはどうかそつちから、嬉しい返事もしずばなるめえぢやアねえか。」マア／＼それはさうと一杯呑まつし。」ト　杯猪口を出す。米八はふしよう／＼に手を出して猪口をとり、だんまりで出せば、藤は銚子をとつて、藤「ドレお酌を。」ト笑ひながらつぐ。藤「ちよつぴり生姜といきやせうかね。」ト、生姜をつまんで出す。米八は莞爾して、またつまんでとり、よね「ハイ藤さん。」

ト猪口を出す。藤「イヤモウやう〳〵口を聞いたの、ヤレ〳〵骨の折れた事だ、ドレ。」と猪口をとる。米八は銚子をとつて、よね「ドレお酌をかね。」ト酒をつぎ、「ちよつぴり生姜たァ、私は行きとゞかねえヨ。」藤「コレサ、そつちはどうもさう癪をいふから恨みだト、いふ所をやつはり根強く恨まねえの。」よね「そりやアさうと、だれぞかけてやらうぢやァないかねえ、さむしいヨ。」藤「また逃句をいふよ。そりやァいくらでも呼びにやるがいい、何とか返事してもいいぢやァねえか。ホイまた言ひ出した、われながらどうもわりい。」よね「そりやァおまはんだれが來たつて、しようと思ふ返事ならしまはァな。まただれがゐなくつても、否ならしやァしませんわね。」ト、いふうち下から、女「ハイお肴がまゐりました。」ト、ひろぶたを二階へあげる。藤「オイ〳〵一ッ飲みねえな。」女「ハイありがたうございます。米八さんなんだかまじめでゐなはいますネ、どうかなすッたかえ。」よね「ナニサどうもしねえが、全體このごろァさはりようじでゐたんだわネ。」このことばつうじんはおほかたごぞんじなるべし。女「そりやァわりいネ、癖になるもんだヨ。」藤「マアいいわな、米こうはどうもおれせへ來りやア、あのとほりヨ。オット氣障をいつたの、堪忍さつし。」女「ハイ藤さんありがたう。」ト杯を藤にさし、下へおりにかゝる。藤「マアもう一ッのみねえな。」女「下がいそがしいから、またあがります。」ト下へゆく。藤「いつでも賑やかだの。」女「ハイ。」ト階子の段をおりながら、「米八さん。」ト聲をかけ、「どうもしうちが悪いヨ。」と心でい

つて眼としかた。米八も心に合點、米「ありがたう、サア藤さん何か來たからお呑みな、私も呑みますわ。」ト茶椀をいだす。藤「またひさしいものよ、今日はもう何も言はねへから、落着いて呑みねへ。」茶わんもちつと恐ろしすぎるの。」トやさしくいふ。米「ナニそれで呑むのぢやアねへわネ。二三日よ うじで居たから、さツぱり酒氣がないから、今日は丁度よいヨ、マアついでおくんなせへな。」藤「そんならどうでもお心任せサ。」トついでやる。米八はうけて莞爾笑ひ、米「死なざ止むまいおつな持病だ。」トいひながらぐつと干して、「藤さん湯呑ぢやアお否かへ。」藤「隨分いいのさ。」米「よかアおあがりな、サアつぎますぜ。」藤「マア酒と討死をするぶんの事よ。」ト請けて、「コウ米の字、手めへ郭に居る内は、こんなに酒は呑みやアしねへとおもつたつけ。」米「マア呑んだでも呑まねへでもなしさ。」

藤「コレ〳〵、此のくれへなことは誠に返事をしてもいいぢやアねへか。おらア今日はおうおとなしく、何もいはずにゐるのに、そつちからをかしくすると、どうもツイ癇癪にさはつてならねへ。」

米「サヤおつなことをお言ひだヨ。何もをかしくもどうもしやアしないわネ、私も一體おそろしい我儘ものサ。そいやアもう、他人にいはれるまでもなく、ずゐぶん手めへでも知ツて居るのサ。それだけれどマア、よく積つてお見なせえな、此糸さんはあの通り明理つたお方、それなればこそ始めから、何も角もうち明かして、ぬしにたのんだわけぢやアありませんか。實におまはんの深切は、身にしみ

口舌從来是禍基

じみと嬉しいけれど。」トすこしうるみごゑ、「ご存じのとほりのわけゆゑに、どうも返事がなりにくし、といつて恩のあるおまはんに、無得心なあいさつもならずと、いろ〳〵考へても、思案の出よう樣もなし、實にわちきやアとつおいつ、思案してばかりゐるはアな。」ト淚をふく。藤「コウよしねえ延喜がわりいわな、泣いてもらつちやア近頃氣の毒だ。いつも〳〵同じせりふも最う聞き倦きた、精進もののこんだてはマア儘にして、ちつと惡毒天麩羅か、黑漫魚のさしみで油の乘つた、あいさつが聞きてえの。手めへもう少とは、婦多川の水が染みさうなもんだぜ。まだものいひが少とは直ッたのがしゆしようだヨ。おれがおかげで身拔をして、斯うして自前出居衆になつてゐて、それ相應にこしやくなことを言つて居たッて、まだ屋根船へ首から乘るうちは、始まらねえぜ。」ト米八が膝を喜世留でつゝくつ

酒がいはする惡口も、金と場ずれた人の癖、戀故えこぢを言ひ出すは、男の常とはいひながら、通者めかしては中々に、かなはぬ色は藝者にて、やつはり男はいくぢもなく、金をつかつて氣を能くし、ばからしきほどあどけなきが、戀の生根といふべきか。

米八はちよいと膝を脇へよせ、よね「ア、モシ藤さんあんまりいろ〳〵なことを、大きな聲でいはねえでもいいぢやアないかえ、しづかにお言ひなせえな。」ト三味線をとつて爪彈に、

〽明の鐘、ごんと突きや氣のきいた烏サアざいもくのうへで楊枝をつかふ、それにこけめが朝なほ

し。

嗟呼癇癪のしのびごま、看官汐合のほどをはかりて、よろしくおかぶらの足を洗ひ、引込む時ぶんの間を見合はせ、野暮と化物にたとへらるゝことなかれ。そも此の二階の床の間に、誰が筆なるか一幅の掛物あり、かかる家には似合はしからねど、こゝに因のあるに等し。

口舌従来是禍基

物いへば唇さむし秋の風

## 第六齣

行く水の、流れと人のみのさくが、ト口の内にて幾度か繰りかへしつゝ、他目もふらず稽古に通ふ一人の處女、年は三五の月の顔、花の口元うるはしき姿に、伊達の三升じましやんと結びし小柳の、帶も目にたつ當世風、行くむかうより年の頃、十九か二十のやさ男、首をかしげて物あんじ、思はずハッタリ行き當り、互にこれはと顔見合はせ、男「お蝶ぢやアねえか。」女「オヤお兄イさん、マア／＼どうしてお目に。」男「ほんにまアふしぎな所であつたなう。マアいろ／＼聞きたいこともあるが、爰おやア往來だからどこぞへ。」ト近邊を見まはし、「アヽあすこにうなぎやがある、マア久しぶりだから一所にお飯でもたべよう。」ト、いはれてお蝶は嬉しくも、また恥かしく赤らめし、顔におほひし懐紙

の包み、只アヽ〳〵とうち連れて、うなぎやにこそいたりける。うなぎや「いらッしやいまし。お二階へいらッしやいまし、お多葉粉盆をおあげ申しなョ。」ト女房があいそに段階子、二人はあがる二階の座しき、表のかたは多寡橋の、往來賑ふ春げしき。丹「寔におらア、お前の事を案じて許り居たが、今日らこゝで逢はうとは、夢にも思はねえ、どうしてこゝいらを歩行くのだ、何かあの、郭にはゐないのか。」蝶「アーモウいつか中から居ませんョ。」丹「そして今ぢやア何所にゐるのだ。つばくら口の懐紙を持つて歩行くからは、近所にゐるか、何所へ稽古にゆく。」蝶「イ、エ此の近所ぢやアありませんョ、小梅に居りますわ。」丹「小梅から此所へ稽古に來るのか。」蝶「イ、エ銀座の宮芝さんが月に六齋、近所のお屋敷へお出でだから、節をよく直してもらつて、不斷は市原のお師匠さんへまゐるョ。」丹「さうか、銀座の宮芝さんなら節は大丈夫だ。そして市原から今日はどこへ行くのだ。」蝶「けふは稽古の歸りに姉さんの名代に、上千寺さまへ參るのでありますョ。」丹「小梅の姉さんとはだれのことだ。」ト聞く折から下女茶を汲んで來り、下女「いかほど」丹「アイまア中位なのを二皿ばかり燒いてくんな。」女「ハイ御酒は。」丹「イエお飯〳〵、それともお蝶おめへのむか。」蝶「イ、エ。」トにつこり、下女は階子の手すりの際に、寄せありし衝立を二人の脇へたて、下へトン〳〵おりて行く。蝶「ほんに小梅に居るのも、姉さんといふも、ごぞんじないはずだねえ。」ト、

おいらん此糸が深切より、鬼兵衛が非義を遁れて金澤へ行く道の難儀、梅のお由にすくはれて、此の程郭へはお由が理詰の掛合にて、むつかしく談じてお由がかたへ引き取り、姉ぶんとして、かはいがらるゝやうすを委しくかたり、さすが娘氣の心ぼそく、涙のかわく間もあらず、きく丹次郎も涙をながし、お蝶を引きよせれば、お蝶も丹次郎に取りすがり、

蝶「寔に私やァおそろしく、こはいかなしいおもひをして、辨天さまやお祖師さまへ、願をかけて、おまへさんをしたひますのに、おまへさんは私を、思ひ出してもおくんなさるまいね。」トいふ所へ、あつらへのかばやきを下よりはこぶ。「サァあついうちァたべな。」ト、飯を盛つてやれば、蝶「アレわちきがよそひませう。」ト茶わんをとる。丹「寔に久しぶりで、お飯をいつしよにたべるなう。」ト、かばやきの、しつぽの所ばかりむいてお蝶にやる。蝶「ハイありがたう。」トさも嬉しさうに喰べながら、「お兄イさんのお宅は何所でありますエ。」丹「ナニ宅か、家はもう宅といふ名ばかりで、はなすも外聞がわりいやうだ。」蝶「アレサマァはやく言つておきかせよ、ヨウ兄さん。」ト少しあまえるもかはゆらし。丹「ナニほんの假宅だァ。」蝶「オヤそれぢやァ濱の宿の舟川戸かえ。」丹「ナニサ、そりやァ郭の假宅の場所だわな、おいらの今居る所は中の郷といふ所だ。」蝶「オヤ〳〵、それぢやァ私の居る所から寔に近いねえ、寔にモウモウ何より嬉しいねえ、是れから毎日行つて見ようヤ。」丹「どうして〳〵來て見られるものか。」蝶「ナ

おてう
丹次郎

だよ。」丹「なぜといつて。」長「おかみさんでもありますのかへ。」丹「ナニつまらねへ。そんな所か、はんにヨ郭の宅の湯どのよりせまいわな。」長「ナニおまはんばかりなら、小さい宅がよいわネ。」トいふ所へ跡の一皿を持ち来り、下女「ハイおあつらへでござります。」丹「オヤ〳〵もう一皿大きいのをやいてくんな。」下女「ハイ〳〵。」トおりてゆく。長「そしてお宅ぢやァ、だれがお飯や何かの世話をしますネ。」丹「長屋の老女さんがしてくれるよ。」長「わちきが行つて用をたしてあげたいねへ。」丹「ナニおめへだつても、仕つけねへ業が出来るものか。そして独り者の宅へ、娘が来るとわるくいはれるからわりいよ。」長「それぢやァ私がいつちやァわりいかねへ。」丹「ナニわりいといふわけもねへが。」長「わけもねへならば明日は直にまゐるヨ。」丹「あしたは留守だ。」長「留守でもよいわね、私の行くのをまつてお出でよ、折角楽しみに思つてゐるはァネ、ヨ、兄さん宅にお出でよ。」丹「留守でもいいから宅にゐろ、よつぽどよく出来たをかしい子だ。サア〳〵さめねへうちにたんと食べな。」長「わちきはもう腹中がいつぱいになりましたヨ。」丹「ナニまだねつからたべもしないで、サァお茶をかけてもうちつとたべな。」長「兄さんもたんとおあがりな、そしてネ兄さんどうぞこれからかはいがつておくんなはいし。」丹「知れたことよ。」長「それでもわちきが、いろ〳〵苦労したのも知らずに、わすれてお出でだものを。」丹「なにすこしもわすれるものか、いつかもおめへのことで、おほきにいひ合つたくらゐだも

のを。」蝶「オヤ誰とエ。」丹「エ。」ト少し行き詰り、「ナニサ夢に鬼兵衛と言ひ合つたくらゐだものを。」蝶「うそばつかり。オヤ私やア兒さんに逢つたら、なにかはなさう〳〵とおもつて居たッけが、アヽそれそれあのおまはんのひいきな米八さんネ、とんだことをしましたよ。」丹次郎はしらぬ顔 丹「なぜどうした。」蝶「アノネ、此糸さんの客人の、藤さんと色事をしたのが知れて、たうとう住みかへに出ましたヨ、實におほさわぎでありましたッけ。」ト、流石發めいのお蝶なれども、米八は丹次郎ゆゑに、住みかへに出でしとは、心づかぬも道理なり。丹次郎は知らぬ顔にて、丹「さうかそれぢやア此糸が合點しねえも尤もサの。そりやアいいがたいそう煙る、出前でも澤山燒くさうだ、どうも素燒の匂ひが嫌ひだ、これには山谷がいいの。」蝶「ア、ねえ裏でも廣くつて、二階でないから煙が來ないでよいヨ。」丹「ドレちつと障子をあけよう。」ト、表のしやうじをからりと開け、何心なく手すりへ手をかけ見下す往來。米八が梅次と二人でお客を先だて來かゝり、二階を目早く見つけ、米「オヤ丹さんまだ宅へおかへりでないか、今に梅次さんと一所にかへるから、ちつと待つてお出でヨ。」トいひながら莞爾笑ひ、酒亂の客の伴して、多寡橋のかたへ過ぎ行く後かげ、丹はびつくりお蝶はかけ出し、蝶「オヤ米八さんぢやアありませんか。」丹「ナニ〳〵米八ではねえ。」ト、口にはいへど心にギツクリ。今米八が其近邊から、かへり來らば大變と、思へば何かそは〳〵して、「サアもうよかア歸らうの。」蝶「ア、かへるがネ、今

のはどうも米八さんらしいヨ。かくさずといいぢやァありませんか。」ト、いつたばかりでさしうつむき、涙の露はひざの上、そでなくはへて身をふるはし、いはぬはいふに増穗の薄、みだれし鬢のほつれがみ、かほにそよぐもかはゆらし。丹「すヤこの子はなぜ泣くのだ。」蝶「イ、エ泣きはしませんヨ。」丹「それでもどうもをかしいやうだ、サア顔をふきな。」ト手拭をやれば、お蝶は目をぬぐひ、男の顔を恨めしげに、見れどさすがに娘氣の、まだ添ひぶしもせぬ中で、をさな馴染のいひなづけ、はしたないことをいうたなら、愛想つかしも出來ようかと、思ひなやむもわりなけれ。丹「サァまたあんまりおそくなッたらわるからう。」蝶「ナニそれはよいけれど、お邪魔なら早くかへりませうヨ。」ト、つんとする。丹「すヤ此の子は久しぶりで逢つたのに、そんなにすねるもんぢやァねへヨ。」蝶「ハイ〳〵もうすねはしません、何でも翌は兄さんエ、たづねて參りますヨ。」丹「ムヽ、來るなら晝過ぎがいい、晝前は留守だから。」トいふは翌は十九日、米八が妙見さまへ、朝參りに來るを恐れてなり。今丹次郎が病氣も直り、身の廻り其の外不自由ならざるは、みな米八が仕送りなれば、心配するも理なり。丹「勘定してくんなヨ。」ト、手をたゝく。外に客もなく小軒な宅ゆゑ、下へ直に聞え、下女が來れば代をはらひ、二階をおりるその時しも、客を送つていそがしげに、このうなぎやへ入り來る米八、客の座敷へ出てゐては、百味も物のかずとせぬ、そのぜんせいより自腹の我がまゝ、のみけたいのが歌妓

の樂屋。よね「ナニ丹さんが居ざア、二人でゆるりやらアな、梅の字サアあがんなナ。」たん「さきへ行きなヽ」よね「ナニ小川か、おいらもいかうや。」○下りかゝりたる丹次郎、續いておりるお蝶がこゝろ、そも米八と落ち合つて、いかなるわけとなるやらん。作者もいまだ承知せず、嗟かかる時は好男子も、また人知らぬ難澀あり。畢竟この後何とかせん、看官よろしき段取あらば、はやく作者に告げ給はんことをねがふ而已。

ほち〳〵とひろひよみする梅ごよみ花の香かをれごひいきの風

清元延津賀

春色梅兒譽美卷之三　終

# 春色梅暦

仔細らしき顔で、息子を禁制める親父も、功徳池の内より涌き出でたるにもあらず。殊勝らしく数珠爪ぐる母親も、菩提樹の二股より生まれもせず。されば色好まざらん男は、玉の卮の當なき心地すべき筈なり。兎角當世の姫殿達の、翫弄に具ふもの、色情の草紙にあらずして、何か右に出でずなん。世の流行書肆の米箱をうるほす事、是れ將に小説家の戯作の種蒔、萬よしになれり。今茲に開ける梅暦は、爲永大人の古書はじめにして、書房が金神の金得利は、天おん得たる家のふく日、とるたつ年の春の新板、嗚呼趣向の新しき事、室咲の梅も遂に及ばず。變生女子の新工夫は、青湞の梅のあるにして、過ちなしの延喜吉慶、恵方に向うて出方題に、阿房な事を序めかす而已。

九返舎主人戯述

# 春色梅兒譽美　巻之四

江戸　狂訓亭主人作

## 第七齣

さても丹次郎は、二階より下りかゝりたる段階子、登る梅次と米八に、ぎよつと後を振り向けば、かはゆき顔に茜さす、りんきの眼元露ふくむ、お蝶がうらみ米八も、それと見るより角目立つ、こゝろをやう〳〵おししづめ、よね「丹さん待つてお出でといつたのに、歸りさうにしておいでだ。」トいひながらお蝶にむかひ「オヤお蝶さん、まことにお久しいねえ。たいそうに美しくおなりだ、そしてマア少しの中に背丈も延びたことは、それぢやアモウ、何處へ嫁にお出ででも能い。」といひながら丹次郎の顔をじろりと見る。丹次郎は知らぬ貌で、丹「ほんにちつと見ねえうち、大きくなつたなう。今其處で逢つて見そくなつたくらゐだ。」よね「ナニ見そくなふこともあるまいねえ、お蝶さん男といふものは、どうもたのみになるやうで、頼みにならないもんだ、なう梅次さん。」ト少し丹次郎にあてゝる。

うめ「そりやァさうだけれど、なんでも女の氣魂次第さ。此方が惚れりやァ他もほれるから、油斷をするといかないよ。」〇お蝶はさすが娘氣に、表向をつくろふ愛想のならねば、胸におもふこと面に出でて、やゝしばらく物もいはずにありけるが、やがて心を取りなほし、蝶「米八さん堪忍おしよ、私は久しく逢はない人にあふと、急にかなしくなつてものがいはれないから、ツイだまつて居たョ。」トわらひ顔する一言は、娘心にしかたなく、精いつぱいの世事なるべし。よね「ナニ堪忍も何もいらないわネ、そしてマァ郭の方はどうおしだエ。」丹「マァ今にくはしく咄さうが、おめへは兎も角も、梅次さんにはやく酒でも。」うめ「ナニマァよいわねえ。」よね「上りしなにモウあつらへたわねえ。」丹「ハアさうか。」トいふうち誂へのうなぎと酒を下よりはこぶ。これよりしばらく杯の取り遣りをしながら、よね「それぢやァお蝶さんは、今ではどうしてお出でのだえ。」丹「イヤモウとんだはなしさ。」トお蝶が身の上を、先刻聞き置きたるとほり、くはしくはなせば、さすが米八も氣の毒におもひ、よね「それぢやァマァとんだ苦勞をなすつたねえ、しかし物怪の幸ひとやら、鬼兵衛どんがわがまゝらしいことをするのを、見て居るよりは能いわネ。」トいひながら、米八つく／＼とかんがへ思ふに、此のお蝶は丹次郎がいひなづけといひ、まづわが身のためには主すぢなれば、わるくすると男をとられるも知れず、また丹次郎も好物の娘なれば油斷はならず、はやく明白でいひ出すにしかず、そのうへ義理で

よし八

二人が心をとりおさへ、たとひお蝶が何と思ふとも、此方はやけに隱さぬが後手にならざる用心と、胸算用の差引して、お蝶に杯をさし、よね「ハイはゞかりながらすこしお呑みなっ」蝶「そんならちいツとついでおくれ。」よね「梅次さんどうぞ。」うめ「アイ。」ト酌をする。よね「ほんにお蝶さん、ひさしぶりでお目にかゝつて、こんなことをいふもぶしつけだがネ、今ぢやァわたしも婦多川で、どうやら斯うやら藝者の數になつたといふも、自惚らしいとおわらひだらうが、實のこと此の梅次さんをはじめとして、みんなが心易くしておくれだから、押しもおされもしない身のうへ、それについちやァ若旦那も、だん〳〵の御ふしあはせ、また申シにくいがわたしも。」トすこしいひかねしがおもひきつて、「ついしたことから若旦那と、深くいひかはして、身儘になつてはいふにおよばず、今でも一所に居ないばかり、お客の座敷に出て居ても、心ははなれぬ夫婦中。」トわざとあぶらツこくいふは、まだはじまらぬお蝶がこゝろのいろを、とりひしぐつもりと見えたり。「それゆゑわたしが何も角もと、いふはどうも失禮だが、手のとゞくだけ身をいれて、みつぐといふ程ではないけれど、マア若旦那のたそくになる氣、だん〳〵聞けばおまはんも、どうか氣がねな今の樣子、かならず遠慮をしないますな。およばずながらおまはんをも、ずゐぶんみつぐしがくをして。」ト半分聞いてお蝶もまた、年はゆかねど戀の意地、蝶「まことに御深切有りがたう、しかし宅に居た藝者衆に、二人が二人お世話になつちやァ、お氣の毒だから、私もどうか若旦那の手助けになるやうに、これか

らちつと氣をつけて。」ト聞いて米八さけすみわらひ、米「すヤさうかへ、それおやァ若旦那のお住ゐはまだ。」トいひつゝ丹次郎に向ひ「ァ、ほんにおまへはんに、さう云はうとおもつてわすれて居たがネ、若裏に小ぢんまりとした家があるから、急にあそこへ越しておくんなはいヨ、中の郷は私が往つたり來たりに遠いし、そしてモウ不用心だから苦勞だよ。さうなさいヨ、今日歸ると造作とか戸棚とかを買つて仕舞ひますヨ。」ト何か急腹の樣子、梅次は爲方なしにさばく心。梅「ヲウ米八さん、何だかおめへ丸くねへ言葉付きだが、素人らしく姙心でも有るめへが、どうかをかしく座がしらけるぢやァねへか、丹さんおまはんマァこの娘を連れて先へお歸りな。」丹「さやうさ、女の子一人で宅を出たのだから、案じるとわるいからはやく歸しやせう、それおやァ米八おらァ先へ行くから、梅さんとゆるりと。」米「ハイさやうなら、急いでお歸んなさい、お蝶さんまた此間に。」ト口にはいへど心には、犬骨折つて鷹の餌と、なりもやせんと廻り氣は、ほれた女の常にして、野暮らしけれどむりならず。

蝶「ハイさやうなら。」ト、梅次と米八へ一度にあいさつして、二階を下りる。丹次郎もつゞいて上り口へ行くを、米八はうしろから背中をひどくつめり、眉毛をあげてにらみながら、もとの處へすわり、米「はやくお歸り憎らしい。」梅「モウいいおやァねへか、前は小兒だァな。」丹次郎はにがわらひ、丹「おへねへ氣ちがひだ。」米「ァ、わつちやァ氣ちがひさ。」トくはへて居た楊枝をはふりながら、中

音にて、「お蝶さん、迷子にならねえやうに、手をひかれておいでよ。」丹「いゝかげんに馬鹿をいひな。」ト梅次に何かさゝやいてたのみ下りて行く。よね「いめえましいなう。」うめ「何のつまらねえ、あんなひい〳〵たもれを妬心することもねえ、おめへマア不斷の氣に似合はねえ、丹印にかゝるとまことに愚癡だヨ、てえげえにしねえな。」ト丹「それでもどうも。」うめ「ばからしいやアな、丹さんだつてもまんざら、おめへの貌をつぶすやうなこともあるめえわな。」よね「さうも思ふけれど、お蝶さんが才子だから、油斷はならねえ。」うめ「あきれるヨ。」ト猪口を米八へさし、「サアはやく呑んで切りあげねえな、おらア今日はおめへのお蔭で、酒が裏に落ちていけねえ。」よね「ほんになう堪忍しねえ、面目ないがなぜこんなに迷つたらう。」うめ「モウ〳〵、おいらは請けねえ〳〵、澤山だア。」トにつこりわらひ、うめ「實に色が活業といふぢやアねえが、萬事行きわたつたつもりで居ても、〇〇〇〇〇、どうもわれながらこけになるよ。」よね「ア、他のことを前方アわらつたが、もう〳〵眞にじれつたくなるのはこの道だなう。」トしみ〴〵といへば、梅次は手拭を米八がひざへかける。よね「オヤ何をするのだ。」うめ「おめへがあんまりのろけるから、よだれをたらすかとおもつてサ。」よね「オヤくやしい、遊ばれるとは氣がつかなんだ。」うめ「氣が付いたらモウ出かけよう。」よね「ウ、モウ酒もいいの。」ト勘定を供の男にさせ、箱持にはあらずおくりなり。二人は何かひそ〳〵と、さゝやきながら歸り行く。思ひある身と

たれかは知らん、いよはま〳〵と賞めらるゝ、その美しきが仇となり、他にまさりし苦勞する、娘藝者の浮き沈み、豈圖目のおよぶ所ならんや。作者ある時席上にてうたひめをよめる。

絲竹にみさをの節は有りながら手折りやすげに見ゆる唄女

これはさて置き彼のお蝶は、よもやとおもひし米八丹次郎が、斯くまで深き中となり、殊に男を見繼ぎおけば、我がものなりとうちつけに、いはぬばかりの仕こなしのみか、丹次郎もまた米八とは、離れぬ契りと推し量れば、彼のうなぎやを立ち出でゝ、歸る道さへはかどらぬ、姿を見れば猶更に、かはゆらしくもうるはしき、莟の花のお蝶が側、往來も稀な武家小路、丹「お蝶おめへなぜ泣貌をして歩行く、エ、これさ機嫌を直しなよ。」トいへばお蝶は前後を見まはし、丹次郎の顏をながめて、釣りさがるやうに左の手に、兩方の手をかけてしつかりと引かれながら、蝶「お兄イさん。」丹「エ。」蝶「おまへさんは誠に憎らしいヨ。」丹「なぜ。」蝶「なぜといつて、先刻も米八さんの事をいつたら、知らぬ貌をしてお出でなすつて、いつの間にか御夫婦になつて、おいでなさるぢやァ有りませんか。」丹「ナニさういふわけもないが、おいらが浪人してこまつて居て、殊に病氣の最中來て、かれこれ世話をしてくれたから、ツイ何したのだ。」蝶「ツイ夫婦におなりか。」丹「ナニ夫婦になるものか。」蝶「それでも末には一所になるといふ、約束ぢやァありませんかえ。」丹「ナニ〳〵、夫婦にはなりやァしねヱヨ。」

米「そしてだれだえ、おかみさんになさるのだえ。」丹「おかみさんは米八より、上段もうつくしいかはいらしい娘がありやす。」米「オヤ何處にエ。」丹「これこゝにさ。」トいひながら、お蝶をしつかり抱き寄せて歩行く。お蝶はうれしくすがりし手に力を入れて、二の腕の所をそつとつめり、眼のふちをすこしあかくして、につこりとわらふゑがほのあいらしさ、幸ひ往來も絶えたれば、千話をしながら行く道の、横小路より出し抜けに、「鍋エ釜ァいかけエ引。」二人はビツクリ早足に、左右へわかる割下水誓ひもかたき石橋を、渡れば春の薄氷、とけてうれしきえにしぞと、思ふ妹脊の中の郷、粋な小梅の隠れ家へ、心で手と手とりかはし、柾の垣根藪だゝみ、寄れば人目のはね釣瓶、覗かるゝかと隔たれば、此方の軒に鶯の、ほうほけきやうも我がうへを、わらふ鳥の音はづかしく、たどり／＼て歸りゆく。

鶯の遲しと鞭やうめの花　　巴　兮

## 第八齣

若鮎や釣らぬ柳へ刎ねに行き。　藤「この扇はだれのだ、鮎ばかりぢやァねえ、餌もねえ針へかゝる藝者や女郎がいくらも有る。」トいひながら横になつて居るところへ、米八は元氣らしく二階へ來る。藤「けふは大分御機嫌だの。」よね「ハイサ酒でも無理にまゐらずばと、こせへておきますわ。」トすこし

鼻であしらひ、膝からどんとすわる。藤は餘程酒がまはりし風情、すこし調子高に、藤「ヲイ米八さん、今日はどうぞその突つかゝり口上は、一條抜いてもらはうよ、つゝ掛つてよけりやア、とうから此方で突つかゝるのだ。いつでも／＼和かに、馬鹿になつてゐてやりやア能いかとおもつて、ふざけてえはうでえふざけやアがつて、なんいこつたえ面白くもねえ、言ふことがねえと、客の直下しばつかり。これエ、たなおろしでたしなませられる藤さんたア、小べりへ手をかけて小舟へ乗り移りやアしねえぞ。をんな日照がしはしめえし、自惚のお守りやア手めへから出すか、あきれた頓智氣だアな」トよね「すやこはい。」トいつたばかり、牀の間の柱へ寄りかゝり平氣なかほつき、藤はぐつとせきこみ、藤「すイあんよりすましたつらアするなえ。」ト大きな聲をする。トよね「もし藤さん、もうちつとしづかに言つてもきこえますわ。なるほど女日でりがしやアしめえしとは、そりやアモウおまへさん方のやうな、粋とやら通人とやらいふ人の事、亦私どものやうな自惚のとんちきは、男日でりのしたやうに、丹次郎より外にやアマア、私が目をかけてやらうとおもふ者は、一人もねえかとおもはれますわ。また一人や半分有つた所が。」トすこしおもひ入れのこなし「あの義理の此の義理のと。」トなみだをこぼし、「もう勿體ねえほどありがたくつても、二個の人へ義理が。」トいひかけてまたけんどんなることば「其處がやつぱり男日でりのした所かえ。」ト懐手をしてうつむく。藤はすこし考へ、藤「コウ奥歯にもののはさまつた、どつちつかずの殺し

文句で、また一芝居藤さんをたゝく氣か、おつかねえの。何ぼ手めへが利口さうに、小いやらしい口をきいてもナ、これよく〳〵聞けよ、土場のちつともまじらねえ、黄色な光る餌を付け、義理と恩との鐵丸をかけ、つらい年季の長棹をこうかして、身儘と場所を替へばりと、意氣地の婦多川へさえねえ面を晒し竹、細い元手の絲筋で、やう〳〵命を繼棹にやァ、誰がお蔭でなつたのだ、土段場へ直したうなぎの様に、びくしやくしても齒はたたねえぜ。」よね「もしエ藤さん、いかに六萬坪が近いといつて、あんまりごたくをならべるもんぢやァねえわネ。」藤はぐつとかんしやくをおこし、藤「なにこの女ア。」トきせるをとつてふりあげる。よね八はちよいと身をひねつてなみだはら〳〵。よね「藤さん、それほど憎けりやァぶつとも殺すともおしな、あんなに事をわけていふのに、おまはんの胸にやァまだわからねえのかエ、じれつてえ。爰でおまはんに殺されりやァ、私も餘程有卦にいつたのだ。」トまたちやかして、「そしてマアこゝの内でも金まうけだ。」藤「ナニなんだと、うぬァふてえことをぬかすな、ァ、時節につれてさうなるものかえ、乞喰染みた丹次郎につながつて居りやァ、根性までゆすりかたりも稽古のためかえ。」米八は氣色をかへてかんしやく。よね「モシエ藤さん、よしてもおくんなはいョ、假にもそんな穢らはしい事を言つておくれでないョ、私はなんといはれてもいいが、いとしいかはいい丹さんに、疵がついちやァ、かんしやくといふも近ごろぶしつけだが、命も捨てる私がこゝろ。今私が殺されりやァ、此所の宅で金まうけだと言つたのはネ、よ

くお聞きよ、こゝの柱は米八さんが御入滅あそばしたのだと、義理と實意にからまるものは、けつくて守にかける人が、たんとあらうとおもつてサ。その時は私も何とやら信女と名弘めかして、極樂の新道へ世帯を持ちますわ。とてものお世話ついでに、冥土とやらの店請も、おまはんにおたのみ申します。」と愛想づかしの有りたけを、ならべたてたる覺悟の惡態、側にありあふ湯呑にて、手酌のぐいのみあふつきり。藤はじろりとこれを見て、藤「イヤハヤあきれてものがいはれねえ。」折節階子をあがり來る、此の家の主文藏が、年は五十を二ツ三ツ、こしても流石老いこまぬ、氣性も土地がらはでやかな、三升格子のどてらを著、紫合絲の細帯を前でむすび、白の喜世留の重たきやつを袖くゞみに持ち、文「藤さん今日は。」藤「オヤちやんか、此間はいつ來ても逢はねえの。」文「エイ、此間はちつと遠くの講釋を聞きに行きますから。」藤「どこへ。」文「木びき町へ、良齋が出るが、まことに日本一といふ、晝夜の席が出來て大入サ。」藤「さうか、しかしあんまり遠いの。」よね「ハイおとつさんあけます。」ト猪口を出す。文「アイ。」ト請けて下に置く。藤は急に立ちあがり、藤「ちやん、ゆるりと呑みな、おらアちよつと多賀町まで行つて來るから。」文「なぜえそれぢやアわりいナア。」よね「ト私がわりいからサ。」藤「わりいかいいか知らねえが、なんぞといふと義理づくも、手めへの勝手になる義理は、たてとほしゝも我儘に、己への義理は何處でする、無理と知つても男の意地、おつなはずみ

に迷つたは、此方がわりいと幾度か、思ひ直して歸つても、そのうつくしいしやつ面に、生れ付いたが其方の不運、しかし是れからモウいはねえ。野暮なことだが、マア跡でちやんにゆるりと話して見や、まんざら男のおればかり、無理だと定めが付きもしめえ。」よね「マア堪忍して、いつもの通り機嫌を直してお歸りな。」丈「旦那マアもうちつと。」藤「イエマア歸りにまた來やせう、なんだかなかしな時宜になつて、辰巳婦言の藤兵衛に、どうか似よりの役まはり、名さへも同じ二枚目がたき、金を遣つていやがられ、わからぬ人といはれるも、星でもわりい年だらうと、氣が付いてみりやアばかばかしい、ドリヤ行つて來よう。」ト出でて行く男の心、米八が察して見れば、なか〳〵に親兄弟も及びなき、その深切は數ならぬ、此の身を深くかはゆいと、思つてせらるゝ情のほど、忝いとおもつても、初めをいへば此糸さんの、いふにいはれぬ情から、身儘になつた大恩の、金はといへばアノ藤さん、つく〴〵かんがへ、ア、モウ〳〵死んでしまひたい。丈「コウ米八さん、おらア詳しく知られえが、いつか中からちら〳〵と、耳へはひつて氣になつたが、マアよく料簡して見なヨ。今の浮世で藤さんのやうに、實意の有る人は、めつたにはあるめえぢやアねえか、といつて手めへの田へ水を引くやうな、意見をいふ氣はさら〳〵ねえ。どうかおめへの身の立つやう、又藤さんの氣の濟むやうな法のつけやうが有らうぢやアねえか。」よね「誠におとつさん有りがたう。眞はうれしいおまはんの意

兒、私もいろ〳〵思案をしても。」文「サア藤さんがいやならば厭にして、何でもかでもこれまでは、厚く世話にもなつた人、あんまりおめへが意地ばつちやア、愛敬をうしなふばかりか、恩を仇でするやうなものだ。マア〳〵おれにまかせなせえ、どうか思案がありやせう。」トいふ折から米八が迎へ、よね「どうしませうね。」文「藤さんか、ナニ今日はもう寄りもなさるめえ、もしお出でなすつたらいいやうにいはうから、マア歸んなせえ。」よね「そんならどうぞおとつさん。」文「ム、承知だ。案じなさんな。」ト斯かることには物なれた、もやひの舟の解きかけん、汐のさしひき如才なく、もつれし中へ乘り込むも、商賣がらの親父役、實にかた柄のかけがへをも、用心する船宿とは、いはずと知れし風情なりけり。

春色梅兒譽美卷之四　終

# 春色梅兒譽美　卷之五

江戸　狂訓亭主人作

## 第九齣

こと問はん心とも見ぬ憂きなかにまさる恨みをたへ忍びつゝ。それにも似たる心かな。お蝶は獨りくよ〳〵と、姉のお由が留守の宿に、思ひわびたる戀の慾、まゝにならねばなほさらに、戀慕の情のいやまさる、男のうへと米八が、我儘らしき有形も、元はといへば金ゆゑに、いはば古主の此の身まで、ないがしろにするその風情、また丹次郎も米八が、見繼に月日を送るゆゑ、いふにいはれぬ中ぞとは、口に告げねど心には、又捨てられぬ時宜なりと、思へばどうぞ其の身より、丹次郎を活業ぎたく思案にくれたる門口へ、見なれぬ若者二三人、三人「アイごめんなせえ、オヤ姉さんは留守かえ。」蝶「ハイ今日はチト、遠方へまゐりまして在りませんが、何ご御用でございますか。」三人「さやうさ、外でもないがこゝの姉御は女達で、いろ〳〵人の世話をしなさるが、ひよつと此の節おたづね者の丹

次郎を、かくまつてあるもしれねえ、尋ねてこいと代官所から厳しい御詮議、たとひ此の宅におかねえでも、何處か近所にかくしておき、姉御が見繼ぐに相違ないと、聞いておいらが捕手の役目、しかしおいら達がいひ付けられたはこゝの仕合、たとひ繩目におよんでも、又言ひわけの仕やうも有る、ナウお娘姉さんは留守でも、おめへが丹さんの在家をば知つて居るだらうノ。」蝶「イヱ〱、どうして姉さんも私もその樣なお方は。」三人「ナニ知らねえ事があるものか、しかもおめへはその丹さんといひなづけで、別れ〱になつたのが、又此の節途中で出合つて、いろ〱咄をした事まで知れてるぜ。」蝶「イ、エどういたして。」三人「イ、エどうして知らねえと、強情いやア是非がねえ、そのかはいらしいおめへでも、しばつておいてもいはせるヨ。」蝶「それでも私は。」三人「彌かくしやア斯うする。」と三人一度に立ちかゝり、お蝶を引きすゑこゑあらげ、三人「ヤイこの女アふさ〱しい、そのうつくしいしやッ面で、まじ〱と虚をぬかすか、サア早く丹次がゆくへいはねえと斷うだぞ。」と雪より白き手をとらへ、捻ぢ返されて口惜し涙、蝶「ア、レどうぞ堪忍して下さいまし。」三人「そんなら丹次郎が在家をいふか。」蝶「イヱ〱何とおいひなさつても、丹さんとやらの在家はぞんじません、ア、いた、どうぞお許しなさつてくださいまし。」三人「たとひほえ面さらしても、男の在家をいはねえければ、かはいさうだが手めへも同罪、お役人さまがお出でがあれば、さぞこはからうと思ふ

から、情心でおいら達が、やさしく聞けば情強く、しらぬといやァしかたがねえ、是れからお代官さまへ引きずつて行つて、おもひれ責めて白狀させる。とはいふものゝ夫れも金づく、丹次郎が落度といふは、畠山さまの金の一件、千五百兩といふ大金ながら、こゝで少しも才覺すりやァ、日延もできめえ物でもねえ、それが出來ねえ日になりやァ、丹次郎は衒りの頭人、しかし丹次郎が身を大切に思つて、金の工面をしようといふ人は、めつたに有りもしめえ。イヤこんな事はいらざるお世話だ、サア〳〵しらざァしかたがねえ、お代官所で言ひわけしやれ。」と無慙やお蝶をいましめて、引き立てんとする表の方、丹次郎に繩をかけ、村の役人附きそへば、所の目明し二三人ン、お由が宅の容子を見て、

目「オイ〳〵モウ頭人が此の通りしれたから、枝葉の者は追つての御沙汰、その女はマァ宅へあづけて、サア〳〵來やれ。」といふ聲に、お蝶は涙の目をはらひ、見れば哀れや丹次郎は、われさへ見にくきいましめの、繩も怨めし憂き事の、斯う重なりて來るものかと、胸くるしくも恥かしき、貌さしいるゝ懷の、涙にしめる道もせや、お蝶はおもはずはしりいで、すがりなげくを押しへだて、

目「これ〳〵姉えどうしたもんだ、とが人のそばへづか〳〵と寄つたらば、己も同罪。」と踏みかへされてたふるゝお蝶、その間に村のひと〴〵は、丹次郎を引き立てゆく。お蝶はやう〳〵起きあがり、

蝶「アレマア待つておくんなさいョ引、丹次郎さん丹さァん引。」と聲張りあげる一生懸命。姉のお由

が聲として、丹「コレサ〳〵お蝶さん、コレお蝶ばうや、これさ夢を見たのか目をさましな、大層ひどくうなされるナウ、お蝶さんや。」と呼び起され、目覺めてみれば一ッ夜著、姉と添寐の眞夜中にて、身は冷汗の氣味わるさ。蝶「オヤ姉さん堪忍してくださいまし、大きな聲でもしましたかネヘ。」丹「アヽ大きな聲で、丹次郎さん丹さァん引と、二度ばかりいふので、私も目がさめたヨ。」ト びつくりはづかしく 「オヤをかしい虚ばツかり。」と口にはいへど胸さわぎ、動氣は未だをさまらず、丹「ナニおかしいわけもないわネヱ、ふしぎな縁で兄弟となつて、斯うして一ッ寐もわたしは、誠の妹だと思へば朝夕遠慮せず、無理を言つたりわが儘も、おまへに隔てぬ心から。それにおまへは隱しだて、ナゼうちあけては咄さぬのだえ。」蝶「オヤ何をえ。」丹「何をとは恨みだよ、今おまへが寐言に言つた丹さんとは、中の郷に當時日影の身のうへで、幽にくらす侘居ひ、それも女の仕送りで、はかない寄子その中で、また此の頃はまとまつた、金がなければ畠山の、寶の一件でむづかしい、譯になるとの事ださうだ。いらぬお世話のやうなれど、人の難儀を身にかへて、助けたいのが私の心願、とはいふものの金づくは、思ふに任せぬ浮世の常、わたしはとうから知つて居る、他の事とは思はれない、その丹さんのさしかゝる、苦勞を救ふが操とやら、心の誠の顯はし所、おまへも思案のつけどきぢやァないかねえ。」ト いはれてお長はおろおろなみだ。 丹「わたしはしらぬそのおはなし、丹さんの身の難儀とは、そんなら今の

が正夢で。」ト是れより今見しゆめのはなしをする。　丹「さうして見ればちつとも早く、金をこしらへる都合が肝心、エ、じれッてえものだナウ。」蝶「姉さん私が身をどうぞして。」丹「それぢやァ私が鬼兵衛とやら、お前の宅の後見に、立派につがつた口上が、たたねえわけになるけれど、おまへの思ふ人の爲、と言つて肌身を汚すやうな、勤めをさしては女達と、他にいはれた私が外聞、マア〱翌夜が明けたら、又能い智慧も出るだらう。しかし私も丹さんの、話は噂に聞いたゆゑ、何かの容子はおまへが直に、たづねて來たがよからう。」と、いはれてお蝶は嬉しきも、亦案じいる男の身の上、思ひ過してくよ〱と、寐られぬ耳に曉の、鐘もかぞへて待ちあかす、戀と意氣地に迫りては、粋な小梅の名にも似ず、胸の煙は瓦燒く、竈にまさる朝霧に、おきて勝手へたち出づる、折から聞ゆる朝勤めは、本中寺の壽量品、お蝶は夫と思ひこむ、丹次郎が無事そくさい、壽ながかれ末ながく、二人一所と量るなる、品こそかはれ世の中の、人さま〱の物あんじ、察し心のある人は、哀れとしれど慾にのみ、ふける匹婦の情なしには、實の戀の要はしれまじ。嗟人情を推しはかれば、人間萬事中庸の、ほどよくするはかたくもあるかな。

一りんの梅に雪ふるじれつたさ　　清もと　延津賀

うら〱かな春をかぞへん雪の梅　　珍奇樓　小松

# 第十齣

丹「オヤお蝶かどうして來た、大そう早く來たナウ。おいらは今おきた許りだ、何處へ行くといつて、そんなに早く出て來たのだヱ。」お蝶はむねをさすりながら、丹次郎がそばへすわり、蝶「誠にモウ〳〵、どんなにいそいで來ましたらう、ア、切ない。」丹「なぜそんなにいそいで來た。」蝶「なぜといつて私はモウ、おまへさんの顏を見ない内は、どうも苦勞で悲しくツてなりましなんだヨ。」丹「何がそのやうに氣になるのだネウ。」蝶「なにがといつて、私はマアゆうべ誠にモウいやなこはい夢を見たから、氣になつて〳〵、そのうへ姉さんが何處でか、お前の身の事を聞いてお話しだから、今朝夜の明けるのが待ちどほで有りましたヨ。」丹「またこの子はをかしい事をいふヨ、夢を見たといふぐらゐで、そんなに驚散にさわぐ者があるものか。」蝶「イ、エ夢ばかりぢやアないヨ、おまへさんなんだか苦勞な事が有るぢやアありませんか。」丹「さうさ、さうだけれど何も其のやうに案じる事はないヨ。」蝶「それでも私は聞きました物を。」丹「マア何にしても火を拵へよう。」蝶「オヤほんに、寒くツて寂しいと思つたら火がないのだネヱ、私が火をこしらへますヨ。」ト立ちあがり、たづねて出す火打箱、それさへ袋のがま穗くち、いぢりまはして笑ひだし、蝶「オヤ兄さんおつなほくちだネヱ、私にやアどうもつきさうもないヨ。」丹「どれ〳〵おれが打ち付けよう、火を焚き付けるのは、おめへも米八も下手だ。」蝶「米八さんは、兄

さんの宅の勝手がしれてお出でだらうが、私にやァ知れないものを馬鹿だから。」ト すこしすねる。是れよね八といはれたがモウ氣にかゝるやうすなり。 丹「またすねるヨ、何米八がおめへにかなふ物か、何でもかでもおめへの方が、おいらは能いとおもつて居らァな。」ト やう〳〵火をたきつける。お蝶は火ばちへすみをついで、火をおこしどびんをかけ、 蝶「兄さん、ほんたうにお金のいる事が有るぢやァ有りませんか。」 丹「さうさ、ちッとこまつて居るけれど、何どうかなるだらうヨ。」

蝶「イヽエ、それでもむづかしいといふ事だから、私は覺悟をして居ますヨ、そして今マァいくらあるといいのだネエ。」 丹「エマアこゝで五十兩あると、月を少し延ばされるけれど、どうもさうはいかないから、せめて三十兩ほしいが、どうしたか米八もさつぱり來ねえから。」 蝶「米八さんでなくッても、私が姉さんにさういつて拵へますヨ。」 丹「ナニどうしてそんな事が。」 蝶「サァそれだから、私の身をどうでもする氣で來たんでありますヨ。さうだけれどおまへに、自由にあはれないとかなしいから、どうぞして別れて居ても、時節貌の見られる所へ行きたいヨ。」 丹「ナゼどこへ往く氣だ。」 蝶「どこぞへ私があづけられて、お金をこしらへてあげるヨ。」 丹「ナニ〳〵そりやァとんだ事だ、かはいさうに、どうしてお前にそんな事がさせられるものか。」 蝶「それでもどうでもして、お金をこしらへないと、おまへがどうかされるといふものウ、私は死んでも能いよ。」ト いひながら、こどもごゝろのあとやさき、かくごしてもかなしくなり、

蝶「兄さん。」ト いひつゝひざにとりついて、おもはずわつとなきいだす。 丹「これさマァ泣きなさんなヨ、サァ〳〵かほをふきな。」ト

抱きよせれば、嬉しさうにより添ひ、蝶「お兄さんエ。」丹「エ。」蝶「あのネ、あのウどうぞ早く斯うして居て、何かの用をしてあげたり、夜もさみしくないやうにして、おはなしをいたすやうにして。」丹「それからどうするのだえ。」蝶「一所に居たいと申す事サ。」丹「そしてどうするのだ。」蝶「をかしいねえ、それでよいぢやァないかえ。」丹「おいらは一所に居るばかりぢやァ否。」蝶「なぜえ、米八さんでなくツてはわるいのかエ。」丹「ナニあいつにかまふ物か。」蝶「オヤうそばツかり、大そうお中がよいくせに憎らしい。」ト白眼める。（さてこのむすめのりんきして、にらめるといふはなか／＼たやすき事にはあらず、しんじつのこゝろから、せい一杯のやきもちなり。）丹「ナニ別段に、中のいいといふ譯はねえが、かれこれ世話をしてくれるから、わりい貌もされないワナ。」蝶「わりいお貌どころか、いつかもうなぎやの二階で、おまへさんが米八さんの、貌をおみなさるお貌と言つたら、そのかはいらしい目に、愛敬らしい風をして、喰ひついて上げたいやうに見えましたものウ。」丹「つまらねえ事をいふ、おめへこそ一日ましに美しく、娘ざかりになるから、今においらがやうな貧乏人は、突き出すだらう。」ト（いふときどびんの湯がにえたち、チイ引フウ引）蝶「アレ兄さんいやだよ、髪がよごれるわね、いけないヨ。」（こんなときでもかみをきにするは、娘のくせなり。）丹「ホイ／＼堪忍しな、何ならおいらが結ひ直してやらう。」蝶「ア、サア結つておくれ、サア／＼。」ト笑ひながらあまえるすがた、（かはゆらしくもいろふかし。）丹「サア結つてやらう、絲鬢奴かくり／＼坊主にするか、疱瘡をモウ一ぺんさせるか、なんでもチツト貌形に、申分をこせへね

えけりやァ、人が惚れてうるさいばかりか、油断がならねえ。」 蝶「よいヨ兄さん、そんな事をいつてだまかしておくのだヨ。」 丹「ナニほんたうに氣がもめるからさ。」 蝶「イヽエうそだよ、其の證據には私には、さツぱりかまつておくれでないものを。」すべてお蝶がもついひ、おさへてすねる心もちにてよみ給ふべし。 丹「○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○」○○○○○○○、○○○○○○○○○、○丹「○○○○○、○○○○○○○○○。」○ ○○○○○○ ○○○。蝶「○○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○、破れ戸ぐわらりと押しあけて、入り來る二人の破落戸、つくり、是れはと驚く丹次郎、お蝶はゆうべの夢に見し、その風俗の人々に、似たりとおもへばおそろしく、ふるへてわきへかしこまる。ときに二人は丹次郎が、右と左へびとつかと坐し、●▲わるものゝ言ば印、 ●「お尋ね者の丹次郎。」 △「サアじんじやうに繩かゝれと、いつちやアそこが可笑しくねえ。」 ●「さうよ盜人といふおやァなし、形よくいへばマァ貸し借り」 △「ていわるくいやァマァかたり。」 丹「アイヤモシ、お二人ともにたかしなお言葉、何ゆゑに其のやうな。」 ●「何ゆゑとは押しがつええ、畠山さまの寶ものを、引きずり込んで梶原家へ賣りつけて、金は殘らずおめへが卷きあげ、世間は分散ひろぐといひたて。」 △「婦多川の妓者を圍ッて、味ィたのしみ、宅にやァこんなかはいらしい、不鹽の娘をひきずり込んで。」 ●「朝ッぱらから癡話ぐるひは、あんまり押しがおも

たからう。」▲「へ、色男には何がなるッ。」●「かたりにやァ丹次郎がなるッ。」丹「イヤモシこれはけしからぬ。」▲「たうがらしが隠居すると、古イせりふもをかしくねえノ。」●「縄掛るのが否ならば。」▲「黄色イものをおめへの名代、金がなけりやァそこいらに。」●「おかるもどきのしろものが。」▲「ほんにナァ、しかしまさかにさうもなるめえ。」●「サア代官所へ引きずらうか。」ト丹次郎が手をとれば、おちやうは悲しく、わけいりて、蝶「アノお金がいくらあると、丹さんを堪忍する事が出來ますエ。」●「オ、お娘が仲人か、そんなら二人が見逃して、此の場はすます其の代り、小判でざつと五十兩。」▲「かはりにお娘が一二年、おいらんになりやァ直に内濟。」丹「イエ〳〵此の子は義理ある妹、どうしてその様な事が。」●「できざア直に代官所へ。」▲「エ、めんだうだふんじばれ。」トふところよりなはとりいだせば、お蝶はなきだし、蝶「マア〳〵どうぞお待ちなさッて下さいまし、丹さんのかはりにわたしが身を、どうともしてお金をとつて内さいとやらにして。」●「ヤレ〳〵いい子だ深切ものだ、そんならおめへの心にめんじて。」トおてふが手をとるおもてのかた、深あみがさのさむらひ一人、侍「丹次郎はゆるしても、ゆるされぬはゆすりの悪漢其處うごくな。」トうちにいる。わるもの二人はうろ〳〵と、立つを引き据ゑたゝきつけ、侍「ヤイ盗人ども、丹次郎やこの娘をなんとする。」●「エイ。」▲「サア畠山の寶の一件。」侍「詮議いたすは譽田次郎、この近常が人にはたのまぬ。」、●「エイそんならあなたは畠山の。」侍「家中としらぬたはけ者。」トあみがさをとればびつくり、▲「エ、イヤほかに詮議の丹次郎。」侍「あやしい身形で人の詮

さく、その方どもはいづれの御家來、吹貫縕袍に三尺帯、見れば丸腰五分月代、ハテ珍らしい御家風だナ、早く目通りを退かすはゆるしおかぬ。」トてつぼねの扇子をとつてなぎたつれば、二人はそとへにげいだし、●「がたみつやァイ。」トあくたいをついてにげゆく。其の跡にて、侍「ヤイ丹次郎、その方まつたく存ぜずとも、手代がすゑたる印形は、謀判なりとも其方が身のうへ、のがれぬ落度さりながら、右の金子を年々に割り付け、上納いたすならば、格別の慈悲をもつて、濟ましてくれんと同役の相だん、よつて内金二十兩、明後日まで金役所まで持參致せ、迷惑ならんが金高の、百分一にもたらざる上納、有りがたいとぞんじませイ、さらば。」と詐りことば數、いはぬはいふに彌まさる、大家の藩中役柄の、人とし見えてゆかしけれ。

春色梅兒譽美卷之五 了

# 春色梅兒譽美　卷之六

江戸　狂訓亭主人作

## 第十一齣

鳥一羽濡れて出でけり朝櫻、露を含みし此糸は、客をおくりて朝まだき、霧屋が家にやすらひし、表二階の迎酒、とりちらしたる皿小鉢、下へ持ちゆくその跡に、かの婦多川の米八が、心に思はぬ戀衣、恩に著せるにあらねども、胸にあたつて此糸が、この「モシエ米八さん、知つての通り私が自まんで、愚癡やいやみは願がけを、したよりひどい禁物と、心に誓つてをりイしたが、マァあんまりぢやァありイすめえか。そりやァ成程藤さんは、男心のいたづらに、何とか言ひもなんしたらうが、たとひどういふ譯にしろ、私がお前に達引で、これまでにした深切を、斯ういふしぎになりイしては、あんまりぢやァ有りイせんか。」よね「おいらんエ、そりやァモウ、何と恨みをおつしやりましても、少しも無理とはぞんじません。今さら私がどのやうに、申してもとり拵へた言譯らしいと、思召しで

もありませうけれど、さら〳〵さうした譯ぢやアありませんヨ。」このト「チヱヽ、そりやアモウ御[illegible]らして、表むき貌を踏まれるがつてんで、世話をして上げましたのが、私のあやまりでござりますから、このト「さうお言ひなはいましては、誠に私が濟みません、實に昨夕ア藤様の、お供をしてこゝまで參つて、藤様はおいらんの所へお出でだとは、言はずとしれた事でありますから、内所へ遠慮な私が身、おいらんへは下へ頼んで、言傳を申して堀の舟宿で、延津賀さんに逢ひまして、濱の宿へ泊つて、今朝藤さんのお迎ひがてら、おいらんにもお目にかゝらうと思つて、こゝへ參ッたら藤さんは、ゆうべ餘所へお出でで今モウ歸ッておしまひだと、いはれて私もビックリして、どうせうかと思つて、をりましたんでございますものを。」このト「そりやア茶屋衆となれあッた日にやア、何とでもお言ひなまし。」トすこしくいしきおもひれ、涙ぐむこのト「その恨みは中々に、無理とは思ひませんけれど、また私が身のくやしさは、どのやうだと思召す。始めは實に藤さんの、お蔭で身儘に他所行も、遠慮のないと丹さんを、ゐつゞ、はおいらんおまへさんの、いふにいはれぬ御深切、その嬉しさに引きかへて、アノ往きれたつた藤さんか、女にことを缺いたやうに、日々の座敷を茶屋舟宿、宅は替れどお客は藤さん、尤もあゝいふお方だから、義理と恩との二道を、情で塞ぐ戀の責、動きのとれぬ差向ひ、手詰の出合をいろ〳〵と、斷りいふも藤さんへは、吾がまゝらしく思はれても、おいらんへの道をたて、泣いつ口說いつ言ひぬ

ければ、また舟宿の亭主さんや、相衆の藝者衆人傳に、手をかへ品をかへながら、モウ是れぎりで腹を立つて、呼んではくれなさるめえと、思ふ翌日翌夜、勿體ないほど深切に、いはれて看てもツイちよつと、返事の出來る譯ではなし、いつも私が突きかゝり、愛想づかしの茶わんざけ、色氣も戀もさめはてる、ふて寢のようじて二度三度、斷りいへば見舞に來たと、部屋へまで心づかひの土產物、白まへ出居衆の私だけ、抱への子供のまへもあり、すげなくすれば己惚が、増長すると陰言を、いはれる胸のくるしさも、初めをいへば丹さんの、貧苦をみつぐおいらんの、情を仇でかへすまい、どうぞよる〳〵おいらんへ、御恩がへしの出來るやうと、瑜伽山への月參り、妙見さまへ千遍の、おだいもくいふその口で、浮いた調子の騷ぎ唄を、彈いてもおいらんおまはんの、お心いきは日に幾たび、いはない事はありませんヨ。どうぞ今までのやうに、ひいきにしておくんなさいヨ。」トいひながら、しんじつあらはすなみだの目もと、この「かんにんなんしあやまりイした、まさかさうとは思つても、此のごろさつぱり藤さんの、足は遠し便りはなし、うたがひイしたがそんならば、おめへに心がうつつたゆゑ、ソリヤ藤さんの癖さんす、諸事に如在のない人ざますが、風と心がうつるといふと、其處へ一圖にこる氣になるのが、藤さんの持ちまへ、夫れでおッすゆゑ私もマア。」ト言つて跡をいはず、おもふに此のおいらん發明ゆゑ、藤兵衞の世話にはなれど、未だ極意のまぶとはせざるものか。よね「モシエ。」トおいらんの耳に口この「オ

ヤさうざますか、それぢやア半さんの事をかえ。」よね「アイサ、どうして聞きイしたか。」この「それさますからにくうざんす。」トはいへ手前がつて故、につこり笑ふ。よね「誠に小蜜な所へ氣がつかつしやるから、モウいけないと言つちやア有りませんよ、あれで。」この「あれでモウもつと、おうやうだと惚れなんすか。」よね「イ、エ否でありますヨ。」トいふ折から此糸が、新造いと花はいきせきと二階へ來り、何か紙に書きしものを出し、花「今お針さんが、おいらんにあけてくれろとよこしイした。」トみくじをいだす。おいらんはうけたへて披きながら、この「すヤこりやアいつものとは違ひますね。」花「妙見さんのざますとサ。」よね「ドレおみせなさいヨ。」ト手にとりて、「オヤ二十四番でありますネ。」

| 二十四番 | 天天天人地 | |
|---|---|---|
| | 西有白虎靈 | にしの方にある人があくにんならずともち身のためにあしき也。 |
| | 是即惡神形 | それについてかんなんをする事 |
| | 家中不安穩 | あらんおもひあきらめて用心し |
| | 萬事何以寧 | つゝしむべし。 |

此糸「イヤ爰から繪岸は何方に當りイすネ。」よね「ちやうど西にあたりますだらう。」花「それぢやア

半さんがおいらんのために。」この「アレサしづかになんし。」よね「おいらんえ、何ぞ此の節苦勞になさいます事が有りますのかえ。」この「ナニ今始まつた苦勞ぢやァありイせんが、私やァこんなおみくじは嫌ひざます。今はたとひわるくッても、末には嬉しいとか、思ひがとゞくとかなら樂しみにもなりイすけれど、何だか是れぢやァわかりイせん。悪人ではなくッても、身のためにわるいといつて、あきらめられるくらゐなら、氣を揉むものは有りイせん。」花「さうざますから、おみくじはおよしなましと申しイしたに。」よね「おいらんエ、凶は吉にかへると申します、かならずお氣におかけなさいますなエ。」トいへどおいらん此糸は、胸に當りて思ひいる、戀の山路やいばらの行手、浮き川竹のながれの身、そも傾城の種といふて、別に蒔きたる畑もなし、みな親か兄弟のために、苦界の年のうち色を商ひ色をつゝしみ、用心しても月と日の、永い勤めに短夜の、鐘をかぞへて曉を、待つ夜もあればながき夜の、鷄の音恨む牀のうち、九分のくるしみ一分の樂しみ、それさへ男の氣によりて、盡せし情をあだにする、やからも多くあるなれば、哀れといふもおろかなる。嗟傾城に實なしとは、板橋雜記の情にわたらず、女郎の終身はとりきまらずして、たとひ三十才の上はこすとも、たゞあどけなく花やかに、わけのないのが花にして、折々の風情あるが、眞に契情の心にして、素人の操を守ると、日を同じうしていふべからず。畢竟このすゑ此糸が、憂き身の果てはいかならん、そは第三編の

はじめに解くべし。

看官藤兵衛此糸が事によりて、いまだ批評をすることなかれ。作者胸中に奇境をまうけて、まさりおとらぬ氣々をならべ、米八、お蝶、此糸が實情を三幅對とし、いさゝか新奇の手段あり、發市の日をまたせ給へとねがふのみ。

## 第十一齣

八重といふ工手間に遅し梅の花、ひらくる時はおりながら、まだ春風のさそはずや、お蝶はこひのはつごゝろ、知つてかなしき今日の身は、かの丹次郎がためにと奉公に出で、御屋敷へ召さるゝ、淨瑠璃かたりとなり、其の名も竹蝶吉と呼びかへて、月待日待に招かるゝ、娘の淨るり多きなか、そも宮芝萬が丹誠に、仕あげし藝の間はどよく、延びた島田の黒髪を、きつて男に對情が、今背いた若しゆ髷、化粧をした美しさ、二階の窓にたゞひとり、今宵よばれしお客の好み、出ものの淺うて一心に、ゆるらへホホ〳〵姉様、わしは切られいでも死なねば成らぬ事が有る。ヤアそりやなぜに。さればの、この中きた時だん〳〵の噺し、やるせも金故ひんゆゑと、聞いたときの其のかなしさ、どうぞと思ふ心から、わしや此の金はぬすんできたのぢやわいの。くるとしんじよと思うたが、親方のものちり一ツ本、そまつにするなとの御いけん、どうもやらうとえいはで、見せびらかしてゐました。

たつた一人の姉さま、何ぼほどかう〳〵にしてもしあきはなけれど、丁稚の内はじいうにならず、ぬすんでなりとくを助け、あとでは直に身をなげて、さいごはおばせの野中の井戸、わしやきしなにノ、死ぬる所までみてきたわいのと、すがり付きしやくり上げたる有様に、小梅は身も世もあらばこそ。其のやさしい心ざし、聞けば聞くほどなほ悲しい、二タ親に別れてより、そなたもわしもなん行く行。わが身にくらべかたりゐる。

此の家の主は老女にて、お阿といへる寡婦なり。元はお蝶が實の親、唐琴屋の二階につとめし遣手なりしが、強慾非道の曲ものにて、わづかの金より利をかさぬ、今はかまくら雪の下、寮防まちとかいへるに借宅して、音曲の子供をかゝへ渡世とせしが、此のせつ其の者のたぐひ、みなそれ〴〵に暇をとりて、このお蝶を二十五兩にてかゝへ、諸家へ立ちいらせて祝儀をもらはせ、活業とはいたすなりけり。この金は丹次郎が方へおくりしとぞ。お蝶は以前つかひたる、やり手を母とかしづきて、その内證は主人とおそれ、朝夕口ぎたなく呵らるゝ口惜しさ、手詰の金とはいひながら、抱へらるゝなりからに、それぞと心づかざりし故、わが家のやり手としらずして、そのめしつかひ同然に、なりにし運のつたなさを、日夜に歎くもしのび泣き、あはれはかなき世の中なり。お阿老女はいかつがましく、階子の段をたゝきながら、くま「コレサ〳〵蝶吉〳〵、エ、イつんほうめコウお蝶。」しやう〳〵ききつけしやうすにて、蝶「およびかえ。」

とうはいいかげんに、そら耳をはしらかせエ、つんぼうめエ。」蝶「オヤ、さつぱり知れましなんだわ。」ミ「モウ九ツが鳴つたアナ、いいかげんにして支度をしねへか、馬鹿々々しい。」蝶「それでも今日の出ものは、私が高りつけねえものだから、ふくさふくつて行かないとこまるものをさ。」ミ「ヱヽ、いけねえ事か、口をかゝらねえでゐるときは、さらへ〳〵といふのに、うじ〳〵して居やアがつて、呼出しさへ出るとか、座しきがあるとかいふと、足元から鳥の立つたやうにさわぎやアがつて、何でもあれを馬鹿にしてゐるからだア。仮にも親だぞ、あんまり口返答をしたり、わが儘がしたくばしてえやうに、何もかもいはれねえさきに断をするがいい、どうで手めへの蝶だらうで、二十の三十のといふ命の利合もとれるものか、それだから左文太さまが二十といひかけてはしごを上り、お蝶が側にすわり、ここのとよく聞きな、古鳥左文太さまは、大そうに御内福だといふことは、萬長でも聞いたぢやアねえか、さういふ金もちが、世話をしてやらうといはッしやるのを、今もつて返事もせず、ヲヤなんだその涙ぐんで居るのか、何がかなしい何がくやしいのに不吉な」蝶「イヽエ、今まで逢つて居た長吉殺しのところが、あはれだからッて涙が出たんでありますよ」ミ「まアあきれ手めへで語つて手めへでかなしいのか、どうぞ聞き人がその半ばで、情のうつるやうならいいが、座場へ出して押しあはしたら、ただわしがくれる連も出来めへ、すこし小長くかたられたら、聞き人は欠で迎へたらう、またしも日常

だちがまんぞくで、色の白いがお仕あはせ、それゆゑ彼是人さまが、たまにやァ言つてもくださるのだ、藝で立派な身形は出來ねえとサ、かういふのもおめへの爲だ、なんの今どき十人なみで、旦那の二人や三人ぐらゐ、とらねえたはけがあるものか。」蝶「ずゐぶんお客を大切に勤めて、淨瑠璃を精出しませうが、どうぞ旦那をとるの、左文太さまのお世話になるのといふ事は、堪忍しておくんなさいヨ。」くま「いんにや、さういやァ此方も意地だ、手めへ勝手を言はしちやァおかねえ、コレ淨るりを語り候ぐらゐで、三十兩からの金を出すものがあらうと思ふか。まさかのときの用心に、受取つてある二枚の證文、旦那がいやなら戀が窪の郭へやつて、年一ぱい生まれ故郷のなじみの中で、苦界をするも亦よからう。旦那はいやだもふさ〳〵しい。」蝶「アレサ母さん、モウよいわね、出がけにおまへが小言をおいひだと、氣にかゝつておさしきの機嫌もとりにくいヨ。」くま「口がうしやな、とりにくくば往かずといゝヨ。ヨウ小言をいふと濟ました貌で居るが、大かた其方の腹の中ぢやァ、元主人だといふ氣だらうが、そりやァなるほど六七年いぜんに、たしか一年ほどよんどころなく賴まれて、唐琴やの女郎衆の、世話アして居た時も有つたが、何も奉公人ときまつて、勤めて居やァしねえヨ。へ、何すぎた昔がこはいものか。」蝶「ナニ私がそんな事を思つて居やァしませんヨ。」ト口にはいへど心には、無念といふも餘りある、お阿が雜言娘氣に、迫るなみだのはら〳〵〳〵。折から表の格子戸

あけ、武家の使と見えたる男「ハイチトおたのみ申します、梶原のやしきからまゐりました、蝶吉さんの迎へでござります。」くま「ハイ〳〵、これはモウ大きに御苦勞さま。サアヨ蝶吉、はやく支度をしねえか、サアお茶でもあげませう、今日はお客さまは、大勢さまでござりますか。」蝶「エイお客より、藝者衆の方が澤山でござります。櫻川善好、櫻川新好、湯又、話家では龍調に柳橋、清元では志津太夫に壽女太夫、延津賀、踊では西川扇藏、義太夫は此方のお蝶さんに小でん、なんでもマア大騒ぎさネ。」くま「オヤ〳〵、そりやアマアおもしろかろうね。」使「イヤ〳〵まだあるわえ、おらが旦那の御ひいきの、婦多川の米八梅次。」トいふをりからお蝶はしたくして、二階よりおりきたりこれを聞いて、蝶「オヤ米八さんとやらもお出でだとかえ。」くま「マアそんな事をきくより、わすれもいでもねえやうにしろ、さやうならモシどうぞお願ひ申します、モウ〳〵餘所の子供と違つて、氣が付かねえで困り切ります。」使「ナニサおッ母さう言ひなさんな、娘子供のでき過ぎたはわりい、おほこな方がかはいらしくッてようござります、サア參りやせうネ。」蝶「ハイいつて參ります。」蝶「ハイさやうなら、イヤ、どうで今日は晝夜になりますヨ。」くま「ヘイそれは有りがたう、お蝶氣をつけねえヨ。」蝶「アイ。」と出でたつ風俗は、梅我にまさる愛敬貌、上著ははでな縞七子、上羽の蝶の菅縫紋、下著は鼠地紫に、大きく染めし丁子菱、襦袢の衿は白綾に、朱紅で書畫の印づくし、袖は緋鹿子帶はよ

た、黒びらうどに紅の山まゆのくおら仕立、しかも目にたつ三升格子、 の腰帯は、おなんど白茶の金まうろ、勿論巾は一寸二分、五分でも透かぬ流行に、野郎びんなる若衆髷、けに羨ましき姿なれども、お蝶が身にはつゞれにも、劣る心で樂しまぬ、是れも浮世かまゝならぬ、座敷へこそは出でにけれ

春色梅兒譽美卷之六　了

## 梅兒譽美三編序

夫れ聖人は物に凝滞せず、今狂訓亭の主人は、物に[illegible]せず、騒がしき市中に住みながら、悟き[illegible]として、能く世と推し移る人情本、書き著はせしは、和漢の理窟くさき事を、奪胎換骨して物にあらず、文貞を論ぜず小袖に仕立てし様に、先哲の力を借りし物にもあらず、只意氣と世の流行を専らとしたれば、色も香もある梅暦、春を知らする道の小冊、今三編に到り、首尾全く整ひ、かゝる[illegible]りし言の葉に、花の作者の筆を揮ふには、悉く意氣にして賤しからず、且おのづから備はる所あり、實に奇々妙々と謂ひつべし。然るを爰に予が序を添ふるは、所謂玉に瑕を添へ、黄金に[illegible]の愚にして、筆を採りて、可惜紙を費すは、これ皆蛇足の所爲と、みづから[illegible]といふ。

故十返舎一九門人

癸巳の孟春

金鈴舎一寶述

# 春色梅兒譽美 巻之七

江戸 狂訓亭主人 著

## 第十三齣

戀ゆゑにやつす姿も誠と實。彼の婦多川の米八が、今日召されたる梶原の、抱屋鋪の龜戸村、茶會に寄り來る客人へ、酌取る役の彭簡、一座揃ひし大寄の、その供部屋にしよんぼりと、人目つくろふ箱持に、なつて來りし丹次郎、待ち草臥れて勝手より、庭につゞきし花畑、月の明りにうかれつゝ、思はず庭の端のかた、小高き岳に物好せし、放れ座敷の緣側に、登りて見れば泉水の、向うはさゞめく廣座しき。終日すごせし酒宴に、客も亭主も打混じ、取りみだしたる無禮講、手にとるごとき大さわぎを、詠めて在りしがうと〳〵と、眠氣もよほす時しもあれ、息も鬧しく驅け來る人俤、何事やらん素足にて、此方の枝折戶突きひらき、驅け込むはずみ立ち上る、丹次郎に行き當り、互にびつくり月影に、すかしながめて「丹さんかエ。」丹「オヤ〳〵お蝶か、どうして此所へ。」と問はれても、しば

し涙に口ごもりて、返言せざれば丹次郎、障子をあけて小座敷の、うちへ抱き入れ介抱し、丹「オ、大そうに動氣がするの。」ト、胸なで下せば心をしづめ、米「ア、實にこはかつた、それはそうとどうして丹さん、おまへは此所にお出でのだえ。」丹「ヱおれか何ョ、。」蝶「米八さんを案じて、此の御屋敷へも一所においでか。」丹「ナニ／＼そういふ譯ぢやアねえが、米八にすこし頼んだことがあつて来たのだ。そんなことよりおめへはマア、どうしてこゝへ逃げて来た譯だ。」ト聞かれて、お蝶は丹次郎が膝により添ひ、蝶「今こゝへ逃げて来たのは、此の御屋敷の御用人、番場忠太さまの若旦那忠吉さまといふのが、いつもわたしにいろ／＼なことをいつて、無理に自由になれとつて、實にモウ／＼否で否でならないのに、今日お客も何も酔ひきつて、正體ないのをさいはひに、先刻からつかまへて、困りきつた所へ、隠れんぼが始まつて、私が隠れたお湯殿へ、丁度また、忠様が隠れに来て、いやおうならぬ手詰といひ、眼をすゑて脇差に、手をかけたから、一生懸命に突き倒して參つたが、いつまでも此所にはゐられず、どうしたらよからうやら。」丹「そうか、それは困つたものだ。しかしこゝの御用人の若旦那なら、始終おめへの爲にもなるだらうから、機嫌の直る樣に。」蝶「お兄イ樣。」トいひながら、丹次郎の顔を見つめ、蝶「それでは私が、お客や何かのいふ事を、承知きでもするとお思ひかへ。宅へ歸つて斯ういふわけと、咄せば邪見な母さんゆゑ、金になるなら心に隨へ、言ふ事きけと慾心ば

ッより、殊に常々旦那を取れの、宅へ遊びに來る人の、中でもお錢の有る人へは、おもしろくさゝく、
挨拶しろ、何ぞもらふ胸算用でもしろのといつて、朝夕責めることばつかり。それもわからさはまだしも、お
んへ、およばずながらも志を、盡すつもりの身分も、淺ましい座敷の勤め、どうぞおはいやだと
思つておくんなさいよ」ト云ひつゝ、「少しの間もおめへのことを忘れやアしねへけれど、米八
と違つて、奉公先へいかれもせず、遠慮して居るから、猶を戀しいばつかりだよ」ト云ひつゝ、眞る
私はどうで今に死んでしまふから、米八つさんと中をよくなさいまし」丹「なにを云ふのだ。なぜ
たのだ」長「なぜといつて見さんに、側にお出でないから、御存じはあるまいけれど、今私が居る
た宅の叔母さんといふはね、元は遣手のお熊どんでありますよ。そしてこの／＼意地がわるくつて、日
ごかましく小言をいつて、實につらくつてならないけれど、その中にはどうかしてお兄イさんと、一
所になられる事もあるだらうかと、當もないことを便りにして、辛抱してゐるのに、おまへさんは米
八さんばかり思つて、斯うしてお屋敷へまで、逢ひに迎へにお出でたものを、とても私は苦勞したとつ
ていけないから、はやく死んでしまふよ」丹「そんなにいはれることをいふもんだやアねへ。斯
うして米八のはうへ附いて來るのも、金の都合をはやくさせて、おめへをお由さんの方へ、一旦歸す
積りで居るのだ、わたしがたねへ、といふは表向、實はどうも氣がゝりでならねへ」長「なにが、どう何

がといつて、一日ましに仇になるおめへを、他なかへ手放して置くが氣になつてならねえ。どうも、他が只はおくめえとおもふと、夜も夢に見て、たまらねえ時なんぞがあるものを。」蝶「オヤ嘘ばッかり、にくらしい。」丹「ナニ嘘ぢやァねえ。丁度今夜の様なことがあるから、油斷はならねえ。」蝶「イ、エ、米八さんが氣にかゝるものだから、附いてお出でのだヨ。」丹「ナニさうぢやァねえ。おいらのことよりおめへがだれとか約束して、此の數寄屋で待ち合はせるのだらう。邪魔になるとわりいから、おいらァ供部屋へ行かう。」ト立ちあがればすがりつき、蝶「ナゼマァ、そんなかはいさうなことをお言ひだねえ。」ト、いひつゝ涙はら〳〵。身をふるはして泣貌の、目元にほんのりあかねさす、それさへおぼろにわからねど、いだきよせて丹次郎、丹「じやうだんだヨ堪忍しな。ほんに今までしみじみと、二人ではなしもしなんだが、おいらゆゑに此の苦勞、さぞつらからうが辛抱してくんな。其のうちにはどうかして、おめへをとりかへすから。」蝶「ナニ今無理に兄さんの、お側へ行かずとよいけれど、二日置き三日置きぐらゐにちよつとでも、貌が見られるやうにしたいねえ。」ト抱きついたる蔦かづら、色づく秋のするつかた、小夜ふけわたる蟲の音の、ほかには座敷のはやり唄、古きをまたも繰り返す、絲おもしろく連彈に、

〽噂にも、氣だてが粋でなりふりまでも、いきではすはでしやんとして、桂男のぬしさんに、ほ

れたがえんかェ、。
丹「ありやアたしか姉多川の政吉さんと、大吉さんではねえか。」蝶「アヽさうでありますヨ。」丹「おめへは何ぞ語ッたか。」蝶「アヽ仲町の今助さんと掛合で、琴責をかたりましたヨ。それだけれど今夜のやうな、さう〴〵しいお座敷では、義太夫はどうも、じれつたいやうでありますヨ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、前後わすれて貌見合はせ、何かいひたき心と心、また座敷にて、ド、一い、間ほどもさすが藝者の調子。

うた〽惚れてこがれた甲斐ない今宵、あへばくだらぬことばかり。

〽おもふほど、思ふまいかとはなれてゐれば、愚痴なことだが腹がたつ。

蝶「アレお聞きよ。うたにさへあのやうに唄ふものを、殊にお兄イさんは米八さんがあるから、私のことはどうしても、思ひ出してはおくれぢやアないヨ。」丹「ナニ〳〵、思ひ出すといふは忘れるといふ、不實があるからおこつたことだ。おいらは思ひつゞけだから、別に思ひ出すといふことはねえ。」蝶「ヤ〳〵嘘ばつかり、兄イさんが忘れるひまのないといふのは、米八さんのことサ。」トいひながら〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。丹「〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、蝶「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」

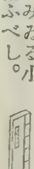
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、丹次郎が顔をぢつと見つめてゐる。丹「ハテナ座敷がしんとして、三味線の音はきこえないで、節時笑ひ聲が聞えるが、櫻川の囃りくしでもはじまつたか知らん。」米「イ、エたしか龍蝶の落し咄だヨ。晝間も遊蝶が、新内のはひつた咄をしたがネ、寔におもしろかつたヨ。」丹「フウムさうか、若衆の中では遊蝶が、一ばん上手になりさうだ。」米「ぎす／＼しないでおとなしいからよいネ。」丹「なんだ噺を賞めるかとおもへば、男ぶりを賞めるのか、うつかりしてゐておめへの艶情を受ける奴サ、いつの間にか惚意くなつてゐるのだ。」米「すヤ／＼譃をおつき、ナニ遊蝶に惚れるものかネエ。遊蝶には私の友達のお喜久といふ子が、どんなに惚れてをりますだらう、誠に憎らしい樣でございますヨ。」丹「トいつて、いつか情通してでもゐやアしねえか。」米「いやだヨ兄さん、其の位なら、此樣に苦勞をば致さないヨ、憎らしい。」丹「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇。」〇〇〇〇〇〇〇〇米「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」トいひながら、すりむいた、しやうじをあけ、はるかにさしきを〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、つもり／＼し憂きことをかたる心の奥庭とは、たれも氣のつく人もなく、彼の人々もこゝまで、尋ねこぬこそ幸ひなりけり。

作者伏して申す。かかる行狀を述べて草紙となすこと、婦女子をもつて、亂行をなしふるに等し、もつとも惡むべしといふ人有り、嗚呼たがへるかな、古人いへる如く、三人の行ひを見ても

みならず我が師とするに有りと。諺に曰ふ、人の風俗見て我が風儀直せと。元來予が書は、草紙大界婦人の看官をたふのとして綴れば、其の拙陋なるはいふにたらず、されど淫行の女子に似て、貞操節義の深情のみ、一婦にして數夫に交はり、苟くも金の爲に戀情を發し、横道のふるまひをなし、婦道に缺けたるものをしるさず、作中艶語をしるすといへども、男女の志、清然と潔く古きをならべて、此糸の蝶吉、於由の米八の四人女流、おの／＼その風姿異にすれども、貞烈いさぎよくして大丈夫に恥ぢず、なほ滿尾の時にいたりて、婦徳正しく、よく其の男をまもりて、失ちなきを見るべし。

## 第十四齣

見ればたゞ、何の苦もなき水鳥の、足にひまなき思ひとは、人間さま／＼の活業、あるが中にも他目には、樂で小いきな風俗と、羨ましくもおもはるゝ、その身になりて見る時は、松坂縞の花色裏、紫太織に黑八丈の、鯨帯せし娘にも、おとる氣がねは世の中を、渡る一筋の縁はいなき、娘の身ことゝなりしこゝろ、突きだしの氣苦勞は、なれぬ座舗のとり廻し、遠慮にすれば座が寂しく、ふざけた客の調子にのれば、通な客の氣にあはず、野暮と洒落との間には、心意氣の、の字とり、七色聲の、たゞせば、これ人間のとは映えに、とりたゝれたる宴會の、席に褄をもとられねば、ごきげんする

山裾と引きずるお客、いたらぬ癖に枯野見と、極しも枯れの時候はづれ、河上に舟の見えねえのが、山でごぜすと富士筑波、今出現をせしごとく、思ふやからに口をかけられ、素足も野暮な足袋はしき、寒さも辛や牛島の、土手の鴈木をふるへて上る、野分の風に興福寺の、入相をきくうしやの掛茶亭、駕籠と乘り代へかへりたき、心も知らず半可通の、客は藝者も或親の、祕藏娘なる事を思はずして、惡口く譏るを穿ちと思へり。嗚呼悲しいかなと氣がつけば、粹ほどまさる色の道、實情と見せし虛計あり。これはそれにはあらねども、苦界は同じ米八が、義理と情の柵に、舟を舫ひて比良岩の、座鋪の一ト間藤兵衛が、いつも長柄の橋柱、くちても殘る戀の意地、言ひしらけして無理のみに、醉うて倒れし轉寐の、ひぢ枕せしかたはらに、しよんぼりとして見かへれば、誰がおきわすれし一冊の、小本をとりて繰りかへし、小聲に讀むはをんなの癖○これよりは米八が、ひとりよみゐる小冊と見給ふべし。

○仙女香といふおしろいを、手にもちしふりしんざう青梅、青「女浪どんちよつと來な。」○十才許りの禿、禿「なんざいますエ。」トきたる。青「アノおめへ、この白粉をやるから、毎日顏へすりこみな、さうすると此のおしろいは、能い藥がはひつてゐるから、顏のこまかい腫物が治るよ。そして此の給をやるから、坊さんにならねえか。」禿「わちきやアいや。」ト顏をしかめ、「仙女香ばかりおくんないまし。」青「オヤ／＼この子はヨ坊さんにならねえと、その頭の瘡腫が治らねえヨ。それが今に眼へでもはひつて、眼くらにでもなつ

て見な、いけやアしねえ、言ふ事をきいて坊さんになんな。」ト言はれて禿は考へて居る。高「坊さんになると、おいらが又可愛がつてやるヨ。」禿「そんならばうさんになりますから、實正に仙女香も甚もおくんなましエ。」高「ア、いい子だなう、サアいたくねえやうにすつてやるから。」トいひながら、あきざしきへつれて行きて、たちまちくり〱坊主にする。禿は頭上に手をやつて見て泣きいだし、禿「わちきやアいやでございます、繪を返しイすから、前の通りにしておくんなイましヨウ引。」トなく。高「ばからしい、剃つてしまつてどうなるものか。」トわらひながら、「千代春さん〱、ちよつと来て見なまし。」トかけて行く跡に禿はおろ〱涙、折から聞ゆる外座敷の唄、へ憂き事の數や積りし戀の山、登りつめたる二人が中に、畧○此方のざしきのおいらんは、年ごろ十八九、きりやうは故人の路考を生うつし、髪は割唐子に結ひて、さしものも立派に見え、衿元雪より白くあらひ粉にて磨きあげたる貌へ、仙女香をすりこみし薄花粧は、ことさらに奥ゆかしく、唐更紗の額むく黒びろうどと白茶北京毛織の平帶をしめ、夜具をたゝみて、座敷きれいに片寄け、疊の上に片ひざ立つて居る。客は息子株、尤も妻子のある身分、風俗はこゝに畧す。はやくも九ツの時至り、家内何となくさう〲しく、番々の新造内しようの牀を延べて、閨をつくろふ。亦も聞ゆる外の淨るり、へ無量壽の、佛の敎へ聞くならく、されば はかなき朝貌も、千年の松に枯れ殘る、無常の風の吹きとおよ、お花をつれ

て半七が、ム 半「アレあの浄るりは、おはな半しちが情死のところ、名も似寄つたるおめへは花山。」兵「ぬしも似た名の半兵衛さん。」半「アヽ、身につまされた文句ぢやアねへか。」兵「他に知られイせんうちに、早く殺しておくんなんし。」半「ホンニそれ〳〵、人の見ねうちちつともはやく、少しの苦痛しんぼうしや。」ト屏風を手ばやく引き廻らし、刀を抜いて半兵衛は、既にかうよと見えたる所に、たれとも知れず障子の外にて、「料簡ちがひさつしやるな、死んで花は咲きませぬ。これを見たうへ兎も角も。」ト障子をほそめにおしあけて、二人が中へ投げ込む一通、これ花山が年季状、半兵衛は手に取り上げ、とツくと讀んではツと息、半「こりやこれそなたの年季状。」兵「確かに今のしはがれ聲は、花町さんの客人で、宵にあがツた番頭風俗、私のことをいろ〳〵と、聞きなましたお方でござんす。」半「ハテナア、それぢやア忠七が、おひもかはらぬ深切か。」花「その人さんは何ざんすへ。」半「家内のしまりの重手代、親父が秘藏の白鼠、その名も忠義の忠七が、ハテ心得ぬ此の場の始末。」花「この證文が有りイすれば、死なでもよふおす半兵衛さん。」半「ホンニこれでは死なずとも、誠にこれは。」

（作者曰）めでたし〳〵、

是れより後編にくはしく入二御覽一候。

ト讀みおはつて米八が、米「すヤにくらしい作者の癖だヨ、モウ此のあとはないのかねへ。」ト、嘆き言ひ藤兵衛を、見れば酒の無正體なく、ねむるいびきの聲ばかり。米「アヽ、此の本を見るにつけ、心がゝりは此糸さん、アノ氣性だけ今更に、引くもひかれぬ縮緬の半さん、お二人ともにひよッとマア、この本に有るやうなことが。」藤「サアあるめえともいはれめえ。」米「エ、藤さんお目が。」藤「とうから目が覺めて聞いてゐた。マア聞きなよ、知つてゐる、アノ此糸が突きだしから、世話になつた繪半の半兵衛、零落しても突きださず、義理と端手とは二道に、諸分を知つたおいらんと、氣性を買つた此の藤兵衛、さうして見ればヨウ米八、マア此糸に義理はいるめえ。」米「よもやとおもふことまでも、行き屆いたおまへさん、心は惚れても女の意地、どうも返事の出來ない義理と、相かはらぬが理窟なし。」藤「なるほど情にこはいけねえぞ。」トいふときしも、堤の上にて子どもの聲、『ヨウ、ヨウ、ヨウ、ヨウ、ヨウ三ヨウ引。

作者狂訓亭が、この草稿をつゞるの日、わが草庵にあそびて、うしろの鴛鴦、向う樋の内の文段をよまれて、友人のざれうた。

琴通舎主人

枯野見て牛島かへる舟さむみ乗りかへたきは馬道の駕籠

金龍山人　春水再識

春色梅兒譽美卷之七　了

# 春色梅兒譽美 卷之八

江戸 狂訓亭主人 著

## 第十五齣

住めば繁華の諺も、今は誠の並家、鄙にはあらで雛人形の、姿にひとしき美婦人の、籬垣歩行は梅が香の、傳ふ堤の春の風、竹屋も呼ばで向う越し、自由自在の釜の湯が、風雅と洒落た茶會亭に、何某隱居何の寮と、槙木の垣根建仁寺、柴の戸漏るゝ鶯の、聲うるはしき初日影、朝湯が出來るか自慢とは、すこし開けぬ片折戸、密と立ち出でねむさうな、貌に莞爾愛敬を、こぼせし水か薄氷、駒下駄ならす田甫道、音さへたかき左褄は、小梅あたりの名取の娘、通ひ稽古の朝がへり、所かはれどかはらぬは、根下濡島田の當世風、品やさしきはおのづから、江戸者の隅田川、呑みあかしたる平伏輪の、庭下駄はいて木場の藤兵衞、幸富久寺の垣にそひ、朝湯の出來ぬを口小言、藤「どうもこつちが無理だけれど、朝は湯へ這入らねえうちは氣がすまねえ。」 つれだちし櫻川由次郎、[illegible]羽をりをいくぢなくきながら、由「モシどう

も、湯は臺臂が一ばんようござえます。しかし今朝はおめへさん、すてきにお眼がはやくさめましたネ。」「呑み倒れたけれど、寐入りはしねへものを、時に湯は出來たらうか。」「さァ明きましたらう。そのかはりまだ女湯が沸かねへだらうから、わるくすると膿眼縁の藝者が、箱まはしに浴衣を持たして來て、今朝は化粧をするのも大儀だ、船で前へ歸りたいねへ、何ごとといつて居て、狹い流しを礫だらけにして居ませうぜ、ふけへきな。」「といふのは假名、實はその藝者がおめへの顔を見て、キャ由さんおまへもゆうべは此方かへ、何處にお出でだかさつぱり知らなかつたヨ、悔しいねへといはれるつもりで、内の湯を待ちかねるふりで、おいらを引出しやすしねへか。」由「ナニつまらねへ、素人じみてさうな女にのみけもしますめへ。」藤「イヽさ、なんぼ櫻川善孝の息子でも、女ぎれへといふ請人はあるめへ。」トいひながら、むさしやの向うの湯の前へ來るをりから、湯やのしやうじを明けいるは、意氣な若衆髷、湯あがりすごき櫻色、年はたしかに十六七、ぞつとするほど美しき、姿もはでな替り縞、寐卷の細帯手拭を口にくはへて、いと小さき黄木の櫛にて、みだれたるびんのほつれをかきなでながら、藤兵衛と顔見合はせびつくりして、「オヤ藤さん。」「オヤたれだとおもつたらお蝶ばう、ヤレ／＼久しくあはねへうち、見違へるやうに大きくなつた、そしてマア何處に居るのだへ。」トたちとゞまりて藤べゑが、うまれついてのしんせつ者、くはしくきくを由次郎、藤べゑがせなかをたゝき、「ひとりのことよりわが身の落度、コレ、言分はなん

なんエん。」ト小ごふにいつてわらふ、蝶「ゆうべこの近所へでも止宿つたのか。」蝶「イ、エ、小梅の姉さんが患つて、この横町の寮へ来て居ますから、其處へ參つて居りますヨ。」ト立ちとゞまつて咄の中、櫻川由次郎は、わざとさきへ湯に這入り、はづすつもりと見えて、由「旦那、さきへまゐつてをかんを見ますぜ。」ト笑ひながら湯屋の障子をあければ、敷居の溝あさきゆゑ、ぐわらりとはづれて倒るゝを、構はず内から飛び出す小童、小「こちやかまやせぬかまやせぬ。」由「氣障に遊ばれるやッサ。」トいひながら着物を脱いで、出格子に置き、流しを見れば板の色青くして井戸がはの如く、通例より小さき溜桶に、遣ひかけの糠袋をかけ、紅梅の小枝がいれてあるは、風呂の中にゐる小兒のいたづらなるべきか。萬事田舎びて亦おのづから風流に、江戸の湯屋には絶えてなかるべし。由「此奴はまことに遂いてゐるわえ。」トいひながら湯に這入る、をりから表はむかしやの、垣根によりそふ藤兵衛お蝶、たゞかみ唯、横町から、びつくり出で合ふおくま婆々、これはおてふをかゝへしかのやり手ばゝアなり。くま「オヤ／＼能い所で逢つた、今日もまたむだ足をするところであつた、サア／＼一同に歸つた／＼。」蝶「オヤ母御か、びつくらした。」くま「ナニびつくらしたふさ／＼しい、コレ能いかげんに馬鹿にしろ、姉御が病氣で二三日、日間もおくんなせえ、もつとも座敷の日割勘定、見番拂ひの晝夜には、降りかけてもたらねえ金、コウ日や三歩で十日の餘、引き揚げられてつまるものか、今日で幾日足をはこぶと思ふ、ヤレ醫者どの

へ薬とりに行つたの、保里の内へお張御符を戴きにやつたのと、延引りてえほど止留められちやァ、其方の勝手はよからうが、此方の腹が日ぼしにならア、サア〳〵直に連れて歸る。」ト立ちかゝりたる惡婆が邪見、お蝶はかほをあからめて、くやしながらもせんかたなく、蝶「大きに延引くなりましたが、看病する伯母さんが、兩三日の中に來るはずだから、どうぞそれまで。」くま「イヽヤならねえ、途方もねえ。」トききわけなきを藤べゑはきのどくにおもひ、「コウをばさん、くはしいわけは知らねえが、この子は子どものことだから、姉御とやらに掛け合つて、連れて行きなすつたらよからうぢやァねえか。」くま「ハイおめへさんは。」藤「見わすれたか知らねえが、唐琴屋の二階ぢやア、少たア人に知られた藤兵衛、紋日物日も相應にして置いた。コウ此糸が座敷では、隨分おじぎを澤山させたぜ。」くま「ほんにあなたは木場の旦那。」藤「おれを旦那といふよりは、お蝶は貴さまの元主人、それをなんだか口ぎたなく、子どもとおもつて輕しめたら、あんまり冥利がよくはあるめえ。」トいはれてしよげたるおくま婆々、少しひるみて見えたりしが、心をすゑて藤兵衛に向ひ、くま「モシ、おめへさんはこの子の世話でもなさる氣で、御深切に仰しやるのかネ。元はともかくも、今ぢやァたがひに得心づくで、表向は親子、まさかの時は抱への奉公人、しかも一切わたしらがまかなひで手取に渡した二十兩、喰ひ雜用から元利の金が、すつかりそろつて返つたら、證文をあげやせう、しかしこれでも、小いやらしく、密男があるから御勘辨者だ。」ト歯に衣きせざる一言に、こ

らへかねたるやまとだましひ、まけぬ氣性の寛闊富仁者、そも藤兵衛が今さらに、途中で出合ひたれば、しらぬといはれぬ意氣地となり、藤「コウおれにやアさつぱりわからねえが、遣手婆々や引手の伯母御に、はりこまれちやア男が立たねえ、トいふのはやぼなはなしだが、實はおめへが可愛さうだ、乗りかゝつた船だやアねえが、もやひの綱を引きとめて、濟みすましを付けてやらう。コウ母御、今日はマアお蝶をおれに預けなせえ。」トいふところへくる日頃伊輪の女、ゆかたをもちきたり、藤べゑにむかひこしをかゞめ、米「すヤまだお湯にいらつしやいましか。」藤「ナイゆかたか、こりやアお世話、イヤ丁度いい處へ來た。」ト女の耳にくちをよせ、なにかさゝやけば女はさう／＼かけ出しゆく。米「藤さんまことにお氣のどくでございます。」トもぢ／＼してゐる。風呂よりはさくら川が格子をのぞき、由「旦那、わたくしはもうあがりますぜ。」藤「オイ由孝、チット面だうなことが出來てきた、マアおらア湯は後にしようヨ。」トいふところへくるいせんの女、かみに包みしものを藤べゑにわたす。藤兵衛はかみをさぐりあらためおくまにわたし、藤「サア、いづれおれが仲人になつてやるから、二三日これで日延べをしな。」トわたせしかねはたしかに壹兩、おくまはこゝろにつこりして、くま「イエナニ、是れぢやアあなたへお氣のどくだ、ナニわたくしだつても理さへわかれば、何もさうやかましくいふ氣はございませんが。」藤「よし／＼、いづれにもおれが呑込んだから、兩方のためにわるかアしねえ。」トおくまをばおひはらひ、お蝶をつれてひらいはい、はなれざしきにいたりければ、蝶「まことにマア、ひよんなことでお氣の毒な、どうぞ御堪忍なさつて。」藤「なにつまらねえあやまるわけもねえ。さだめて意味も有るだらうが、此方が氣ぢやアお阿めは、此糸な

そら目をかけた、おめへの處の遣手だやアねえか。たとひ何でも元主人の、娘のおめへをあんまりこなした仕うちだから、持まへの癪にさはつて、いらざる世話をやく氣になつたが、マアどうした理合で今の身になつたのだ。」ト問はれてお蝶は涙ながら、此の草紙の初編二編に記せしごとき身の上を、くはしくはなせば元來富貴の寛闊、ひかぬ氣性の男達、小梅のお由が仁俠の、噂に猶さら捨てられぬ、同氣の合ひしも緣の絲、引くと知らねど藤兵衛が、藤「そりやアマア、とんだ苦勞な身の上だ可愛さうに。しかし案じねへがいい、是からおれが姉御にあつて、どうか婆々が方を引離つてやらう。」トいふうち酒さかなを持ち來る。藤「コウお飯をはやく持つて來な、此方はいいが此の子には、お飯の方がよからう。」トキニ由孝はどうした。」女「牛の御前さまの所に。」藤「さうかなぜだらう、ハヽアわるく氣どつて帰すつもりだな、はやく呼んでくんナ。」女「ハイ〳〵。」ト勝手へゆく。蝶「お酌をいたしませう。」藤「ナ、ナニ、かまはずに、お飯をはやく喰べてさきへ行きな、姉さんが案じて居るだらう。」蝶「イヽエナニ、常泉寺のお祖師さまへ、直に參つて歸る積りにさう言つて來ましたから。」藤「ナニ朝湯から婦多川へ直にか。」蝶「イヽエナニ、土手下のアノお屋敷の際り。」藤「ウ、やつぱり小梅の瓦焼く手前だの、しかしそれでも餘程あるの。」蝶「三町ばかりありませうが、此所等では菜太、鄰家へ行くぐらゐに思つて居りますヨ。」由次郎も來る。此の時膳を出て　斯くて是れよりやゝしばらく酒宴ありて後、由「旦那今日は少しの

中おひまを戴いても、よろしうございませうかネ。」藤「アヽなにサ、何所ぞ約束があるのかい。」米「ナニエ細丈と茶利屋とゝ、私を一座にするおざしきがあるからと、此間うちから里八がやくそくをいたしました。」藤「ハヽアさうか、そんならちやうどいい、俺もお屋敷の御用があるから、今日は一日まア[illegible]ら[illegible]いゝから直に行きねへ。」米「イエマアお晝すぎからでもよろしう。」藤「ナニサよく〳〵、おれもソレ爰を出かけるからいゝよ、このかはり一寸ひとつおたのみが有りやす、こゝから向うへ乘切つて、濱の宿の川岸へ言傳をしてくんねえナ。」米「ハイ延津賀さんの所でございますか。」藤「ムヽさうサ〳〵。長壽にも間違なく來るやうに、そしての宮戸川のお鐵も來るはずだから、なにもかも一所に[illegible]て、川岸から舟で來てくれろといつてくんな。」米「へいかしこまりました、そんなら御免を願つて慾ばりに。イヤ藤さん御ゆるりと。」ト藤べゑがかほを見て、ほり出しものをしたといふしかたをして行くをまたかへし、藤「コウ〳〵、慾推ばかりせずと濱の宿へ寄つてくんなよ、土手から向うへわたりは渡りましたが、ツイ失念をとお株をやつちやアいかねへぜ。」米「ナニつまらねえことを御しやいまし、この御用許りで乘切りますものを。イエ向島も自由は自由になりましたネ、渡り越しの舟が今ぢやア六人で、替り〳〵に渡しますぜ。」藤「ほんにほんに寶だ、昔人の數までは誰も知りやアしねえが、昨今まで佃屋を呼ぶに、聲を出したもんだつけ、そのはずかね、故人となつた白毛翁が歎きつゝ送たる昔語に、當時は今日の世の中となりし、

須田堤立ちつゝ呼べど此の雪に聲たか竹屋の音さたもなし

藤「この歌も今すこし過ぎると、爰は山谷舟を土手より呼びて、堀へ乗り切りし頃の風情を詠めり、と前書が無えとわからなくなりやす。イヤこれはしたり、出舟のもやひを引つぱるやつサ。」由「寧そ今日はよしませうか。」藤「ナゼ〳〵。」由「すこし跡の幕が氣になるやうで、後髪を引かれるやうな心持に。」藤「馬鹿をいはずと早く行きねえ。」由「さやうならば思ひきつて、へイ御機嫌よう。」ト立ち出づる。土手へ出口の木戸の口、ひらいはの家内大勢にて　男女「へイ御きげんよう、へイさやうなら、オヤ由さんばかりお歸りのかエ、旦那はお跡からかえ。」由「さうよ。」女「だうりで出しぬけにお立ちだと思つて。」由「旦那を歸しこと、おれを置きたからう。」女「オヤマアあきれた。」由「うちばな子だらう。」女「藤さんエ、由さんがあんな事を申します。」トおくざしきの方へいツつけるまね、時まさに春、正月十日あまりの事にして、南枝やう〳〵ほころぶる、梅暦のころになん。寶福寺の巳の時の鐘ボウン〳〵引、瓦燒く煙霞と倶にうすく消え、今戸に河岸揚けの材木の音聲、風の間に傳へて、はるかに定使を呼ぶほらの貝の音ブウ引〳〵。

## 第十六齣

扨も小梅の里に住みし、於由は久しく病牀ひて、洲崎の邑の伯母なりし、寡婦の宅を假住居、家主

の伯母は故郷の本家に、據なき用ありて、此の程家にあらざれば、留守居がてらの出養生、今日は少しく病氣の怠りしゆゑ、徒然をなぐさむ爲の物の本、開く雨戸に春の日の、閑和なるは陰うつす、障子の梅の粋な身も、さすが女のこしたかを、思ひ出してつく〴〵と、心ほそ音に鳴る鐘は、金龍山の巳の時にて、耕地を通る商人の聲、辻賣「白酒々々引本やうかん〳〵。」木精にひゞきて遙かにきこゆる折こそあれ、お蝶は木場の藤兵衛に、打連れだちて竹垣の開戸明けて、蝶「姉さん、氣色は何ともないかえ、歸りがいつもより遲かつたらうネ。」トいひつゝ這入る中戸口、藤兵衛にむかひ、蝶「マアこゝへお上りなすつて下さいまし。」トいひながら奥へ行き、およしに藤兵衛が譯をくはしくはなしければ、由「フウムさうかえ、それはマア御深切に、有りがたいことだ、はやくこちらへお通し申しな。」蝶「ハイ。」トお蝶もうれしげに、次の間へ立ち出で、蝶「藤さん、どうぞこちらへお出でなすつて。」藤「よしかえ、お氣持の悪いに。」由「イエナニ、今日はモウ大きに宜しうございます、御遠慮なさいませんで、どうぞ此方へ。取り亂してをりますから、お出迎へ申しません。コウお蝶ばうや、そこへ早く、マアお茶の支度でもおしヨ。」藤「イエ〳〵、おかまひなさいますな。」トあいさつしながらお由が座敷、藤「御免なさい。」ト座につけば、まづこちらへと上の座へ、すゝめてたがひに顏見合はせ、いといぶかしき風情なりしが、お由は胸をおし靜め、つねには似氣なく涙ぐみ、由「あなたはた

しか七年以前、佐倉の宿の縋屋の宅に、成田がへりの御泊りで。」由「ほんにさうだつけ、降り込められた奥二階、酒の相手と頼んだが、かへつておまへの難儀となつて。」丹「ほんにその時、あなたには何にも御存じないことゆゑ、外目有心の押しかけ喧嘩、なんのはかない旅藝者と、わが身でさへも恥かしく、思ふわたくしに浮名を立てられ、さぞおにくしみでございませうと、お詫をしたのがお縁となつて。」丹「おつなはずみとおもつたが、まんざら木竹の身ではなし、終おぼつかない當座情。」由「江戸で逢はうとおつしやつたを、樂しみにしてその後は、わざと氣隨の俠客、心の中ではなつかしいと、知りつゝ旅から歸るより、三味線捨てて結びつけぬ、女髪結となつたのは、萬一おまへさんに逢つた時、浮薄な活業いたしませぬ、男の機嫌は猶の事、とりさうにも仕まいとは、自惚過ぎた操とやら、どうぞ御推量なすつて下さいまし」ト誠をあらはすお由が風情、思ひ餘つて遠慮する、涙の眼元言葉かず、いはぬはいふにいやまさる、情の色香粹な程、察し心に藤兵衞は、丹「ほんにマア、夢を見るやうな心もちだ。佐倉で逢つたそのときは、たしかおまへは十九の歳で、厄年だから成田さまへ、參詣に行く路次、親子づれの旅かせぎと、聞いてたしかに薄情の風に、吹きながされてゐたらしいと、思ひのほかに藝も身も、立派な座敷の取りまはし。」トいはれておよしはにつこりわらひ、うれしさうに、由「アレマアにくらしい、七年跡もその調子の、嬉しがらせを眞にうけて、今日までつくした心

の操、有りがた迷惑とお思ひだらうが、どうぞかんにんしておく〳〵なさいましよ。ト、いひ出ししかたと、初(?)ん
こゝにお由に似合はぬその風情、これ世の中の女の情にて、よきもあしきも、憂きも嬉きも、これ
出したると定まることはなし、その逢方の男しだいで、色氣しらぬも年増氣の、じみになるあり年増にて、う
らはつかしき端手姿も、みなこれ男を思ふより、その時々の移り氣にて、更にさだめの評判に、野暮
と律儀のうはきにて、男女の情をしらぬといふべし。○[illegible]しなとは此りでいふこと、成田か
ら歸ると直に間もなく、大和めぐりに友達が、行くと聞いより好きの道、母親ばかりで甘やかされ、
我儘承知のなまけ者、同氣求めた友達の、浮氣連中の長崎に、阿房盡して伊勢、浪花、京の女郎で長崎
の、味も衣裳も見物しようと、うかれ歩きの月と日に、江戸では大事の伯父の病死、留主中出入のお
屋敷を、五軒までとつぱりが出來て御用止め、それも知らずに道中を、遊びならしたそのあとは、
懐づゝでさへならぬ、金の工面に西國中國、御出入の御國家老へ、十兩二十兩と無心の借りも十七
八倍、これが幾らか江戸へ知れ、しかもかひちらして遊ぶもいいが、百里二百里の所に居て、親をも
家をも見かへらねえ、不孝といふがあるものか、伯父の死んだに葬式の供にも立たず、捨て置くと、
世間へも聞きも濟まず、第一伯母へ濟まねえといふも尤も、伯母といふは家付の娘で母の妹、義理あ
る中の言ひわけと、内評定があるとも知らず、遊び飽きてお江戸入の、その日に直ぐ内を勘當、し

ばらく上總の親類へ、預けられて居た時分、おめへのことを折々は、思ひ出しても仕方はなし、それからやう／＼二年程過ぎて、宅へ歸つたところがおめへの所が氣になつて、いろ／＼捜して見たけれど、少しもしれずにしまつたが、實にわすれる間はなかつたぜ。」由「だうりでしれないはずでありましたねえ。あれから佐倉を立つて小見川へ行つて、東の方を廻つて江戸へ歸ると、父親がいひますから、はやく宅へ歸りたいとおもつて氣がせいたのに、わたくしが風邪をひいて寢たり、父親が亦煩つたりして、やう／＼六七十日過ぎて、宅へ歸つておまへさんのことを、いろ／＼と噂を聞いても、どうしてもさつぱり解らずにしまつて、その中おとつさんも亡後るし、伯母の世話でやつとくらして居ても、藝者や何かでゐた時は、萬一おまへさんにおめにかゝつた時、情もないやうに思召してはとおもつて、女を相手の髮結は、はかないけれど女の身で、男の世話に。」トいふところへ、お蝶茶をこしらへきたり、蝶「姉樣ェ、お茶が出來ましたがネ、お茶菓子が。」由「眞にあいにく何もないネ。」蝶「いつもの物でも取つて參りませうか。」由「ア、そんならどうぞ行つて來ておくれな、秋葉さまの裏門をぬけずに、むさしやの横手を眞直に行くと近いさうだよ。」蝶「アイ此間もさう通つて行きましたヨ、どちらを買つてまゐらうネ。」藤「ナニ／＼、わたしはモウおかまひなさんな、それより今にひらいはが、なにか持つて來るはずだ。」由「オヤさうでございますか、それはマア。」トいひさして、「お蝶ばうはや

く行つてお出でよ。」蝶「アイ今まゐる所でありますヨ。」由「そんならネ、兩方とも買つて來ておくれヨ、お祖師様へもあげるから。」トいふをききさし出でて行く。はづす心とはづさせる、心の中は當合ふ、色の手どりと知られけり。それはさておき藤兵衛と、お由はまたも顔見合はせ、手もちぶさたのその中に、お由はいとゞ嬉しさと、またはづかしさに胸さわぎ、いひそゝくれし身のうへの、貞も操も七年餘り、證據なければ今さらに、くやし涙にくれにける。畢竟二人がこの座の埒は、そもいかならんそのよしは、十七回をよみて知るべし。

春色梅兒譽美卷之八 了

# 春色梅兒譽美　卷之九

江戸　狂訓亭主人著

## 第十七齣

消えて除く寒をもおのづて梅の花、開くや笑みの眉の跡、春の霞の青々と、蕾の花に猶まさる、お由の側へ寄り添ひて、背中をさすりながら、由「ヤレ〳〵マア、知らぬ事とはいひながら、澤山苦勞をさせたッけノ、さぞ〳〵斯うして奇會ふからは、憚りながら大丈夫だと思ひなせえ。」由「さうやさしく被仰ると眞に嬉しく思ひますけれど、どうもおまへさん方にかぎらず、男子達といふものは、浮薄なものだから、いとゞおもひがますやうなことが、この末ともに有らうかと案じられますわ。」藤「ナゼナゼ、なぜさうたぐるのだ。」由「なぜと被仰るけれど、私が心からとはいふものゝ、おまへさんの御深切を、身にしみ〴〵と思ひ込んで、一生再會はないでも、女の意地をたてとほして、未來とやらではぜひ〳〵と、執念深く心を定めて、女伊達だの俠だのと、朝夕苦勞をして居た中、おまへさ

んはわたくしのことはわすれてしまつて、唐琴屋の此糸さんと、深い和合と妹のお蝶が常々の噂、それも男の名聞で、おいらん買ひも藝者の情合も、無理とは存じませんけれど、久しぶりでお目にかゝつたお蝶も、どうか可愛がつておやりなさりさうだからサ。」トいふときしも平岩の女と若者、岡持をさゝげ持ち來り、だいどころへ置く、ことわりて歸る。由「サヤ／＼マア、大層に種々と。」お蝶ははやく歸るといいのに。」ト片寄せて、力なささうに亦膝の上に來る。藤「サヤ小川かと思つたら平岩の使か、俺が運んで遣らうものを、そしてまだ用が有つたツけ。」由「ナニ今あの子が歸りますヨ。」藤「ほかの用おやアねえが、おめへの好きな玉子蒸を、こしらへさせようと思つてサ。なんとどうだえ、情なし男と思ふか知らねえが、七年跡の相宿に、三日一夜座のその時に、惚れた氣からはたべものの、好ききらひまでおぼえてゐるア。これでも浮薄か情なしかね。」トいはれてお由は莞爾と、嬉し涙の笑ひ貌は、此糸米八お蝶等が、亦およばざる姿あり。藤兵衛は〇〇〇〇、藤「コウおめへが爰に居るとも知らず、戀しさ餘つて此糸が、少しおめへに似てゐるのゑ、眞から斯うといふ氣もねえが、當座此方の氣保養、また藝者の米八を世話をしたのも、込み入つた腹に理合のあることだけれど、マア今はいふめえ。ドレちつと貌をしみ／＼見せな、かはいさうにやせたなう。」由「お醫者さんが仰しやるにはね、全體氣から出た病氣だから、時折は髪も結つたり、湯へも這入るが能いとお言ひだから、二日置き三日置きに、お蝶の肩へつかまつて、湯までそろ／＼

行きますけれど、眞にいやみらしい程、力がなくッてやう〳〵歩行きますヨ。」藤「だうりで長病にしては、あかもよごれも見えねえで、美し過ぎると思つた。○○○○○○○○○○○○○○。」ト笑ひながらいふ。○○○○○○○○○○○○○、由「○○○○○○○。」○○○○○○○○○○○○○○○○○○。藤「薄著では寒からう。」ト夜著を掛けてやり、藤「ア、何だかおれも寒い。」○○○○○○。折節お蝶は息せきと、歸り來りし勝手口、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○草帚木、垣根の外をはきに出る、足音さへもしのびつゝ、溝の土橋を渡る時、風に飛び來る白梅は、春の小蝶かおのが名の、蝶も莊子の夢心、嗚呼世間の定めなき、彼の藤兵衛とお由が再會、伴ひ來りしお蝶さへ、露知らざりし七年の、古きをこゝに繰り返す、さゝめごとさへあやしとこそ、娘心に思ふなるべし。

○作者爲永春水伏して申す、わが著はせし草紙いと多く、艶言情談ならざるはなけれども、いづれも婦人の赤心を盡して、淫亂多淫の婦女をしるせし事なし。たま〳〵玉川日記のお絲が類も、因果の道理をあらはして、そのいましめの用心あり、一帙五卷の其のうちに、一婦二夫一夜がはりの枕を寄することを、二組までつゞる類ひ、えせ文章の讀本も、心をつけずよむ人は、かへつて予をそしるなるべし。

お蝶ははうきを手に持ちて、這入る柴の戸奥よりは、茶椀をもつて駈け出す藤兵衞、お蝶は見つけて走り入り、蝶「オヤ藤さん、お茶でございますか。」藤「イヤ／＼水だ／＼。」蝶「すヤなぜ。」藤「今姉さんが少しどうかしたやうだから。」蝶「エ、。」トびつくりもろともに、お由の牀の右ひだり、蝶「姉さん引。」藤「ナニ／＼、呼ぶ程の事はねえ、ナイサアヨ、これサ氣を確りともちな。」トいひながら、お由が口へ茶椀の水を口移し、お由は細眼にあたりを見まはし、由「すヤお蝶おかへりかえ。」トいひながら、藤兵衞をそつとつめる。藤「何のこッた、おいらアほんたうに目をまはしたかと思つた、サア薬を呑みな。」ト何か丸薬をやる。お由は莞爾、由「ア、モウ／＼、嬉しいとおもつたら氣がとほくなつた、直に死んだら此のよな苦勞があるまいのに。」蝶「ナゼ姉さん其様なことをお言ひだねえ。」藤「これからはおれが附いて居らア、死にたくッても殺しはしねえヨ、なうお蝶ばう。」蝶「ア、どうぞ、これから姉さんや私の力になつてくださいまし、誠にモウ心ぼそくッてなりません。」トいふはどうやら身勝手らしく聞ゆれど、これへつらひなき娘の人情にて憎むべからず。お蝶はしちりんの炭を繼ぎ、白湯を汲んで來り、お由に呑ませ、蝶「アノウ藤さんが、お取りよせのものを、此方へ持つてまゐりませうか。」由「ア、モウわたしも心持はよいから、お燗を付けて藤さんにおあげな、そしてさめたものは雪平でか、小鍋でかお温めよ。」蝶「アイ。」トお蝶は勝手へ行く、跡に二人はさし向ひ、藤「ほんたうにモウいいか。」由「ア、

モウ能うございますヨ、わたしはね、七年前の事から段々考へて、今日斯うしてまた會ふことが出來ると思つたら、モウ〳〵死んでも本望だと思ひましたヨ。」藤「うそばかりつくぜ。」由「アレサ譃ぢやアありませんものを、憎らしい。」藤「かはいらしいといはれるやうな仕うちは出來ねえが、隨分憎ッ風俗の中に、またおつな信實をもつてゐやす。」由「それだから女の執著がとりつくから、用心をなさいましョ。」藤「男を迷はせた報いが掛るから、おめへこそ用心しねえョ。」由「いつわたくしが他を迷はしたことがあります。」藤「別れて居たうちのことは知らねえが、まづ藤兵衛といふ男を、ひどく迷はせたぢやねえか。」由「此糸さんや米八さんには、少しは上症もなさつたらうが、何わたくしのやうなものに迷ふの惚れるのといふ、氣づかひはございませんが。」トいふところへ、酒とさかなをだんだんにはこぶ。およしも牀を出る。藤「おめへはやつぱり其牀に居なナ。」由「イ、エモウ、氣がしつかりとなりましたから。」ト御納戸紬の棒じまの小夜著を引掛けて、火鉢の際に坐り猪口を引出しより出して、藤兵衛の前に差し置き、由「お蝶おまへもこゝへお出でな。」蝶「アイ今お肴を燒いてからまゐりますョ。」由「さうかえ、サア藤さんおはじめなさいましな。」藤「ドレ〳〵、久しぶりでお酌をしてもらひやせう。」ト猪口を取りあげ、これよりしばらく酒くみかはして、その日は爰に遊びくらし、夜に至りてお蝶が給金を返濟して、身儘にせんことを相談なしければ、お蝶がよろこびいはんかたこそなかりける。されば藤兵衛は終夜、お由が

操の節義、女の身にして七年以來の、俠勇き活業の苦心、實に清潔の行ひは、梅のお由と異名せし、世間の噂に知られたれば、いさゝかも疑はず、これより心を傾けて、お由をいたはり、月毎に何不足なくなすべしと、思ひの條をいひきかせしとぞ。扨これまでの風俗とは、藤兵衛お由二人とも、すこしく違ふ趣向あり、その心にてよみ給ひね。斯くて藤兵衛は、其の翌日立ち歸りて、五七日音信なければ、お由お蝶は夜晝共に、待ち明かしては噂のみ、障子にうつる鳥影も、さらだのあたる春の雨、花の爲には乳の恩、千々に心をいためつゝ、案じ煩ふ門の口、四十才ばかりの一人の男、理窟ありげな勿體面、男「ハイチトおたのみ申します、千葉の藤さんは此宅にお出でなさいますか。」トきいてお蝶ははしりいで、蝶「イヽエまだ、こちらへはお出でなさいませんが、私どもでもおまち申して居りますから、是非こちらへお出でなさいます、何ぞ御用なら左樣申しませう。」男「ハテこまつたものだ、わるくすると六ツかしくなるが、里長縣さたになつたら、藤兵衛さんでもマア、明白の立つまでは、闇い所へ行かずアなるめエ。今の内はやく内濟をたのみなさりやアいいが。」ト立ちかゝつたる獨り言、問はず語りの口占も、あぶなせりふにお蝶より、奧で聞きとるお由が胸へ、ギックリ當る男の身のうへ、よもやとおもへど若しひよつと、難儀のかゝる大變を、仕出したるかと案じられ、由「お蝶や、マアそのお方を此方へお通し申しなナ。」蝶「アイ○モシおまへさん、マアこちらへお上んなさいまし。」男「ハイそん

なら少し御免なさいまし。ア、コレどうぞ、お目に掛つて內分にしてあげてえものだが。」ト なにかあやしきそのことば、おてふは茶わんに茶をくみてさしいだし、 蝶「ハイお茶を一ツ。」男「ハイイエモウおかまひますナ。」ト いひながら家內をじろじろねめまはし、 男「誠に結構なおすまひだ、どうも藤さんも諸方へ金が入りなさるから、つい無理な事も仕なさる筈だ。」ト聞えよがしの壁訴狀、お由は次へ立ち出でて、由「マアチト此方へお出でなさいまし。」男「ハイハイ、イエ大きにお世話さまでございます、お邪魔ながら少しお置きなすつてくださいまし、しかし今時分まで、此宅へお出でなさらねえくらゐだから、モウお出でも有るめえか。さうすると猶々むつかしくなるが。」ト、しきりに氣をもむ其の風情、傍聞きするお由は更なり、お蝶も何やら胸さわぎ、案じてお由と顔見合はせ、ホツト吐息をつく〴〵と、思へば聞きも捨てられぬ、彼の藤兵衛が身の落度、何事やらんと問ふもうし、問はぬもうしや牛島の、其の角文字や疎々に、齒もりの假言聞きとれぬ、折から表へ立ちかゝり、臺所を差し覗く、古椀袍の破落戸が、わる者「アイモシ、五四郎さんチョツト」ト 以前の男をよびいだす。 男「オイ岡八か、何だ頼んだ理ならモウ少し。」 わる者「とても內々にはなりやせんゼ。」男「ハテこまつたものだ。」ト 立ちかかる。 そもこの一事は何事ぞ。第十九齣を看て知るべし。

## 第十八齣

梅一りん一輪づゝの暖かさ。春の日向に解け易き、ゆきの中裏なか〳〵に、浮き事つもる假住居、

それさへ兼て米八が、三筋の絲し可愛さの、女の一念信實に、思ひ込んだる仕送りを、請けて其の日の活業は、世間つくる丹次郎、文使とは名許りの、所作なき任に誹諧や、左文字の點のいとまには、二上り亦はド、一の、新文句をこしらへて、友達の寄會所、茶番の落の師範とは、昔は絶えて聞きもせず、嗚呼此の土地の風俗たる、意氣の情の源にて、凡そ浮世の流行を、思ひ辰巳の伊達衣裳、模様の好み染色も、實に婦多川が魁にて、端折藝者の多き中、別けて當時の名題には、政吉、國吉、淺吉、小絲、豐吉、久吉、今助、小濱、是れに續くは又稱にて、七場所噂の一粒選り、客人此の藝妓の名を知らずば、婦多川通とは言ふべからず。とはいへ狂訓亭は知己ならず、十目の視るところ、十指の指ざす妓藝を算へて、他國の仁に知らするのみ。これは扨おき丹次郎が、宅の障子を密と開け、路次の左右を見かへりて、出づるは歳齢二十一二才、洗ひ髪の島田の髷、ほつれて少し横にまがり、湯あがりの素顔いやみなく美艶にて、眼の縁櫻色にほんのりと、今なほ逆上せし風情、溜息をついて莞爾と笑ひ、障子をしめながら捨てぜりふ、女げいしや仇吉「オヤその甚介はあべこべだヨ。」トいひながら浴衣をかへし左づま、まじめになつて出かゝる路次、米八と行き向ひ、兩人「オヤ。」仇「今湯へお出でか。」ト、口にはいへど心にギックリ、米八は兼てよりかぎ付けたる二人がたん次郎とあだ吉が色情ごとはちよつとしたることゝにて、しとがらなれば論じ給ふな。中、何くはぬ貌にて米八は、右に持ちし浴衣を左脇にかゝへ、銀の簪の首に付きし

さんご樹の、大玉を細き指にてちよイと持ち、眉毛を八の字にしてたぼ下を掻きながら、米八「丹さんはモウ起きたかねえ。」仇「エ、ア、確か起きてお出でだョ。」米「オヤ〳〵、今おまへあすこから出ておいでぢやァないか。」仇「イ、エ、外から聲をかけたばかりだョ。ト何も言ひわけをすることもねえナウ、用があれば行きもするのサ。ア、湯ざめがして寒くなつて來た。」ト、小癪にさはる仇吉が、心の中のいがみ合ひ、すれ違ひ行く色と情、彼の米八は丹次郎が、障子の外から出しぬけに、ぐわらりとあければ丹次郎は、うつむいて書物をして居たりしが、仇吉が小戻りせしと思ひ、見向きもせず、丹「オヤ何ぞ忘れたか。」米「ア、まだいひ殘した事が有るわ。」トいはれてびつくり丹次郎。丹「オヤ米八か。」米「そんなにびつくりせずと能いぢやァないか、私だとつて來られねえ宅ぢやァあるまいし、但シ仇吉の外入るべからずと、路次口へ札を出してお置きならよかつた。」丹「何をいふつまらねえ、今しがた三孝さんが來たから。」櫻川三孝がことなり。米「フウム三孝さんが、島田に髪を結んでかえ、茶番ぢやァあるめえし、澤山だ。」トいひつゝ、茶椀へ土瓶の茶をつぎ一口呑んで、米「オ、つめた、水だョばかばかしい、火鉢の火ぐらゐはおこしてお置きなねえ、夢中になッてお出でだ。」丹「なぜそんなに叱言をいふだらう。」米「言つても能いのサ、エ、くやしい。」ト茶椀を取つて水瓶の際へ投げ出す。カラカラン引 丹「しづかにしねえな外聞のわりい。」米「仇吉さんとはしづかにおしな、私ァ夫婦だから遠慮せ

すとよい。」丹「おめへもつまらねえことをいふぜ、素人じみて妬心をいふが、仇吉は今障子越しに、何とか言葉をかけたが、おらァろくに返事もしはしねえのに、悪推も程があらァ。」米「さうさねえ、私がわるするサ、外から聲を懸けて、何かの相圖に簪をはふり込んで行つたのかえ、とんだ二番目の狂言だ。」丹「わからねえことばかりいふぜ。」米「ナゼわからない。。コレ是れを御覧、仇吉さんが不断にさしてゐる に仇といふ字のさしこみの簪が、何で爰にあるのだえ。」丹「ナニ噓をいふぜ、こゝに其様な物があるものか。」米「アレマァあきれるヨ、サァソレよく眼をあいてごらんナ。」丹「どうしたのだかどうも解せねえ、ふしぎなわけでうたぐりを請けるものだ。」ト なにかわからぬいひわけをいふうちに、米八はくやしなみだ、丹次郎にしがみ付いて、やゝ久しくものもいはずにないてゐる。丹「コウ米八、コレサマァ堪忍して、おれがいふ事を聞きねえヨ、成程仇吉が是れまで深切らしいことを言つて、時々爰へ寄つておつなことを言ふ時もあるけれど、何おれが外へ心のうつる様なことがあるものか、第一おれがはかない身で、朝晩の事も手めへの厄介、仲の郷から引越すの何だの角だのと物入のつゞく中で、著物の一枚づゝも拵へてくれる手めへに對して、浮薄なことをして濟むものか、そりやァほんにヨ、大丈夫だから案じなさんな。」米「なま中に、私がおまへをかうしておいて、おまへの手助けといふも、夫婦となつて見りやァ恩でも世話でもねえわけだけれど、お蝶さんといふものは有るし、亦その外に斯う云ふ仕儀ぢやァ、私が餘りかはいさう

なわけだねえ。といつて私が斯うしておくから、男妾でもかこつて置くやうにと、一言のことでも氣にかけやァなさるめえかと、大抵氣兼をして居るのに、どうすればそんな氣だらうねエ。」丹「なぜそんなに愚癡をならべるのだ、女房じみてうれしいが、モウいいかげんにしねえな。」ト〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、米「あしたの晩隅田川へ行つて、仇吉さんを其樣おしな。」丹「なんであしたの晩に、おもひもつかねえことをいふぜ。」米「おもひも付かざァこれをお看。」ト、取りいだしたる口上がき。

いよ／＼明日は、例のやくそくにて御出での由、幸ひ米印は千藤の催しにて、今助大吉櫻川一同にて、芝居の見物と申し候。左樣に候へば、夕方にかの所へ參り、待ち合はせ申し候間、急度々々間違ひなく、併しお客がわかれとなり不申候はば樂しみに致し候甲斐もなく候。くれ／＼も程よく其の座を外し被下候樣賴み上げ／＼、必ず／＼米印の氣のつかぬ樣に。

米「名當はやぶれてないけれど、夕一座のお座しきで、仇吉さんの懷から、落した手紙の此の書手は、おまへさんの手で書いた、おたのしみのかたいやくそく、これでも思ひもつかないのかえ、サア

よく御覽ソレお見な。」ト突きつけられて丹次郎、今さらなんと言ひわけも、思案もつかぬその所へ、呉服屋の若い者障子を明けて、若「ヘイお著衣が出來ました。」と越後紬のねずみの棒縞へ、黒七子の半衿の懸つた袂のある縕袍を出す。丹「ナヤおらアあつらへはしねえぜ。」米「仇吉さんでもよこしたらうわね。」トいひながら呉服屋にむかひ「たしかに請取つたヨ、羽折の衿をよく返るやうにして、はやくしておくれとさういつてくんなヨ。」若「ヘイモウお誂へなすつてあるのでございますか。」米「ア、モウ五六日前に頼んであるよ。」若「ヘイ／＼かしこまりました。」ト歸り行く。米「サア御ふしようでもちよつと著ておみせ、丈や行が間違やアしないか。」丹「エさうか、そいつはありがてえ。」ト氣の毒さうにおもひさくなつて、著物を引掛ける。米八は嬉しさうに見て、米「なんだえ、そんなにこは／＼著ることもないね、繻子が美服でも拵へてもらやアしめえし。」トいふ所へ、櫻川由次郎障子越しに、由「米さん此宅かえ。」米「ヲヤ由さんお早いね。」由「ナニモウはやくはねえヨ、みんながそろ／＼出かけるさうだ、おいらア少し用が有るから、高雄の茶屋へ行つてるるから、さういつてくんなヨ。」ト行き過ぐる。米「ドレおいらも支度をしようや、丹さんおまへ、今日今の所へ行くときかないヨ。」丹「ナニ行くものか、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」〇〇〇〇〇。米「〇〇〇〇ふけえきな、小兒をだますやうな。」丹「藤こうに貰つた落されちやア御免だぜ。」米「おまへぢやアあるまいし。」ト心殘して出て行く。

○作者曰く、此の情人の喧嘩、こんなことでは治まらず、どうしたものか。

春色梅兒譽美卷之九　了

開くや花の寒紅梅と、ホ、敬つて申すとは、顔見世のせりふなりけん、ァ、つがもなき梅暦の、評判は伊勢ごよみの細かに穿りて、綴ぢごよみの、讀み易く、柱暦にあらずして、萬年中の御重寶、百年の後當世の、人情を知るよすがにもならん。たゞし卷中の婦女、艶容戀情を旨として、更に教訓とするにたらずと、そしれる人もあるよしなれど、道にそむきし婬婦はしるさず、いづれも浮薄を表とし、心に操を守る事、鐵石のごときのみ、よくあぢはひてよむときは、をしへの端となることあらむと、親びいき連の櫻川、小梅の兄貴が柴の戸を、たゝねて梅ごよみの卷末をふさぐものなり。

辰巳の遊人　櫻　川　善　孝

深雪をもしのぐ功や魁に手がらを見せん春のやり梅

金　龍　山　人　爲　永

# 春色梅兒誉美四編序

今も昔も世の中の、人の心のやさしきは、千々の金にますなるべし。殊に女子はよしあしに付きてやさしう有りたけれ。家富み榮えて何事も、愁へなき日はたれとても、心ばへさへうつくしく、恨みし顔もはしたなき、言葉もなくて過せども、家衰へて昨日より、今日は貧しくなりし時、誠の心は見え侍れ。別けて男女のなからひは、翠帳紅閨の中に、新枕せしその初めは、偕老同穴のかたらひをなし、後世かけて契りおくしたしみの、あはれにもなつかしく、嬉しくも聞き聞かれし約束も、男の身の上おとろへては、秋の紅葉と色かはり、野邊のちくさとかれ〴〵に、なりなんことはあぢきなく、いと〳〵まさなきわざになん。むかし、もろこしに孟光といふ女あり、富人の娘なりけれど、その夫陵伯春といへる人、しだい〳〵におちぶれて、覇陵といふ所に世をのがれ、さもたのみなき時節となれども、孟光はうしともせず、夫とともに彼處へ行き、田をかへし草を刈り、または手づからはたを織り、人にやとはれ賤しきわざをなしつゝも、禮儀を厚く男につかへて、他の富貴を見かへらず、誠を盡してつかへしとぞ。嗟近世の娘たち、この半ばをも守り得ず、義理と道とにそむきても、美き衣を著てひけらかし、出世と思ふ人でなしも、姿の花の色ざかりに、よしや一度榮ゆるとも、凡そ生

きとしいけるもの、浮世の秋にあはざらめや、身にはつゞれを纏ふとも、心清きはめでたくも、たふとき人といふなるべし。典侍直子の歌に、

あまの刈る藻にすむ蟲のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ

おもしろからぬ筆くせながら、金龍山人が老婆心、巻をひらくの兒女しゆに、よくよみ給へと申すになん。

狂訓亭　爲永春水誌

○春若みまだ鶯も片言に
はゝう／＼とほむる梅が香　二代目 十返舎一九

○酒の名の白梅に来て鶯の
てうし高くも初音つけけり　假名垣魯文

○吾妹子が袖かとぞ思ふ閨の戸の
あくるおそしと匂ふ梅が香　松亭金水

○文好む名にめでてこそ梅ごよみ
ひらかせたまへ四方のちご達　三亭春馬

# 春色梅兒譽美 卷之十

江戸　狂訓亭主人著

## 第十九齣

十七回次お由と蝶吉は、彼の藤兵衛が音信を、待つに甲斐なきその人の、噂も何やら氣にかゝる、風聽に心を定めつゝ、由「モシ五四郎さんとやら、今のお言葉の前後をお聞きまうせば、藤兵衛さんに何ぞ濟まぬことが、出來たのでございますか。」と聞かれて得たりと膝を寄せ、五四郎「イヤモシ、どうもとんだことさネ、アノ藤さんは千葉の材木座で、第一ばんの福有人、殊に侠客なお方ゆゑ、世間も廣く誰一人、指さすものもねえところが、今度は少しむつかしい、理窟といつても外ではない、餘り諸方附合が廣いによつて、むだ金が際限もなく入つたゆゑ、大分内證がまはつたさうさ。まづそれは兎も角も、今日わたしがお尋ねまうすは外ぢやアない、簗防町のお阿といふばァさんの抱へ、お蝶といふ子の給金を。」ト聞いてお蝶は胸さわぎ、姉のお由と顔見合はせ、はや涙ぐむ娘氣の、先くゞいけ

し案じ顔、五四郎は心に笑み、五四「さてその給金を、藤兵衛さんが殘らず勘定して、ばァさんに渡しなすつたところが、その金を藤さんが歸ると、その晩盗人が這入つて、ぬすんで行つたトいつても、藤さんは構ひもないとおぼしめさうが、その盗人が這入つた跡に、藤さんの鼻紙袋、中には證據の名前の書物、そこで老女も氣が付いて、渡した金を藤さんが、またその晩に、盗みに來たと推量ゆゑ、紙入を證據に表向にするといふところへ、丁度行き合はして聞けば、まんざら藤さんとも知り合つたわたしのこと、聞き捨てにもならねえと、きのふから藤さんを、お尋ねまうしたわけだけれど、モウ内々にはならねえと、聞いて見りやァ仕かたがねえが、どうぞお阿に金をマア、半金でも渡して取り留めて、内濟にしたいものだ。」トいふ折からに表の方、岡八は聲を掛け、岡八「五四郎さん、そんならお氣の毒だが、お代官さまへお阿さんをやりますぜ。」五四「オイ／＼岡八手めへどうか今日一日、延ばすやうにはなしちやァくれられめえか、ア、これこんな事とは、藤さんは知んなさるめえ、こまつたものだ。」由「モシどうぞ、内々にする仕やうはございますまいかネ。」トさすがに利發なお由でも、身にかゝりたる藤兵衛が、噂に心もくらみてや、お蝶はもとより年ゆかず、途方にくれたる女同士、由「ナゥお蝶、よもや藤さんが其樣な事はありもしまいねえ。」蝶「アイどうしてそんなこはいことが、他の物をとるなんぞといふことは。」五四「サアモシ、ねえは知れてゐるが、紙入といふ證據があつて

お阿ばァさんの心の底にも、藤さんが忘れて置いて行つたらうと、少しは思ひもしようけれど、うぬが麁相でとられた金、取りつくしまがねえゆゑに、邪も非もかまはず藤さんを、相手取る氣になつたのは、持ちまへの強慾もの、どうも仕かたがございません。」ト聞いてお由は五四郎に相談し、貯への金少々と、衣類そのほか取りあつめ、十五六兩ほどの品々を、風呂しきそへて淺はかにも、渡せば五四郎請取つて、五四「ヤレ／＼はや、わたしは藤さんを、おたづねまうすばかりに來たが、どうも仕かたがねえ乘りかゝつた舟だ、これをそんなら七ッやへやらかして、マァざつと半金だ、これでおくまをなだめやせう、とはいふものの藤さんは、一向知らねヱ譯で、外から盜人が出た日には、たちまちかへる此の代物、よくマア數を書附にでもなさいませんか。」由「イエナニ大概おぼえてをりますョ、それよりも早く濟むやうに、そのうち藤さんがお出でなら、おまへのお咄をいたさうか、おまへのお宅はどちらでございますか。」五四「エハイ、わたくしはあのお阿ばァさんの、ぢきに裏長屋にをります、何れまた明朝までに此方へ參ります。」ト風呂敷背負ひ、出かける門口、お蝶が方をたづねつゝ、是へ來かゝる丹次郎、五四郎と突きあたり、丹「イヤ久しいな松兵衛、能い所で逢つたマァ下に居や。」五「ハイ今少し急用が。」ト逃げ出すを引き戻し、丹「此の盜人めエ、ふてえ奴だ、うぬがお蔭で丹次郎が日影をよける今の難儀、畠山さまへ引きずつて行つて、おはらひに出た寶の行方、知れてはあれど金

子の行き道、主人の判を似せた重罪、サア一所にうせをれ。」と、立ちかゝればふり拂ひ、五四「古主といつても五日か三日、下から出りやァ付けあがり、覺えもしねえ寳の金のと、畠山はさておいて、鎌倉御所から呼びに來ても、行きたくなけりやァ行かねえ。」と驅け出す五四郎組みつく丹次、あらそふところに岡八が、丹次郎を引き倒し、岡「この晝鳶めエ、何をするのだ、顏に似合はぬ荒かせぎ、サア五四郎さん急ぎなせえ。」ト丹次郎が顏をこぶしにて、二ツ三ツうちなやまして驅け出す二人、それと見るよりお蝶は走せ出て、蝶「お兄ィさん丹さん、お怪我はなさいませんか、どうなすつたのでございます。」ト泣聲すれば、お由も門へ出づる向うの繩手道、今驅け出した五四郎と、彼の岡八が衿がみをつかんで投げ出す千葉の藤兵衛。

○そも〳〵五四郎といへるは、元丹次郎が養子に行きたる、養家の番頭松兵衛といふ悪漢にて、丹次郎が以前の養家、唐琴屋の鬼兵衛となれ合ひ、丹次郎をだまして主の養子となし、忽ちその家を押しつぶし、借金其の外を丹次郎になすり付け、畠山家の拂ひ物を梶原家へ賣り、その金を取りにがし、酒色とかけ事に遣ひなくして隱れ廻り、近ごろ千葉の藤兵衛が方に、番頭となりて有りしが、藤兵衛此の程上州信州の山方へ、急に商賣用にて、行かねばならぬ用事の出來て、山方の者と同道し、旅立つ時しも此の五四郎に、お蝶がことをくはしくはなし、金子を預け窒防町

の、お阿がかたを掛け合はせ、又お蝶がことお由がことを、殘らずのみこませてはからはせんとなせしに、さすが藤兵衞も母親の手まへをかねて、内々のことなれば、さらに他は知らされば、五四郎持病の惡念きざし、主人藤兵衞がこのたびの旅だち、なか／＼三十日には歸りがたしと推量し、古支配人の眼をかすめ、十兩許り見せの金を盜み、おくまへは亦々一二兩をわたし置き、お蝶がかたへ尻の行かぬやうにしておきて、今日僞りてお由がかたへ來り、同類の岡八と二人にて、うまくお由をだまし、金子衣類をかたり取りしが、天誅の時や來りけん、藤兵衞は由が方の相談ごと、途中にて調ひにはかに立ちかへりて、五四郎が取り逃げの樣子を聞き、お阿が方の埒あかざるまで聞きたゞし、それより爰へ來りしゆゑ、五四郎をとらへしなり、よろしく察してよませたまへ。

梅のお由と蝶吉は、思案に落ちぬ藤兵衞が、この場の樣子怪しみて、たゞずむところへ藤兵衞は、二人の奴を引きずりながら、藤「サアうしやアがれ盜人めら。」と五四郎が手を捻ぢかへす、透間に逃げ出す岡八のむかうへ來かゝる立派の侍、行きちがひさま岡八を、手もなくいましめ此方へむかひ、侍「藤兵衞其奴を逃しまするな。」と聲かけられておどろく藤兵衞、藤「ア、貴君は本田次郎さま、これはこれは。」とイむところへ、こは／＼出迎ふ蝶吉が、案内につれて藤兵衞が、彼の侍に會釋すれば、

本田次郎も打ちうなづき、霞にあらで春の野に、引くや繩手を笹垣の、内へ追ひ立て入る二人、おもひがけなきいましめの、二人も居所のひつぢ稻、それさへ枯れて芹なづな、その七草のかひもなく、後悔してぞひかれゐる。

## 第二十齣

再說本田近常は、於由が寓居の座しきへ通れば、藤兵衛お由蝶吉は、おの／＼首を疊に付けて、不思議の來駕と問ひまうせば、次郎は惡漢等を、庭の樹立につながせて、さて藤兵衛にまうしけるは、

「我が身只今此の岡八を召し捕りたるは、主君重忠の御下知にて、かね／＼詮索ある白徒なればなり、また其方が捕へたるは、丹次郎といへるものに、難儀を懸けたる不忠の手代、松兵衛といへるものに似たり、何ゆゑに召しとらへたるや、定めてよからぬ仔細ありて、見遁しがたき譯ならん、其の儀は何か知らねども、すでに舊惡あるものならば、岡八もろ共問注所に召しつれさせん、其方の手に捕へし、彼奴が惡事は何事ぞ。」と問はれて藤兵衛、此の程の一十をまうしければ、お由蝶吉はいふも更なり、今入り來りし丹次郎も、陰彳して五四郎が、其の惡計におそれけり。斯かる處へ近常が、供人およそ三四人、垣の外より差し覗き、扣ふる風情に本田次郎これを門より呼びいれて、五四郎岡八を引き渡し、牢屋へつれよと言ひふくめ、來りし家來は先に歸し、其の身は跡にとゞまりて、近「ト

キニ藤兵衛、かねて頼みし儀は、ひそかにたゞしくれられたるか、たゞしはいまだ其の實否を、さぐりがたいやうすかな。イヤそのことはともかくも、此の家を見れば女夫の住居の樣子、長座いたさばさだめて迷惑、また內々の事を他人中で、たづね申すもいかゞしい。」與「イヤ〳〵、これは私が退れ難い內緣の者の宅、少しも御遠慮はいりませぬ。しかししばらく皆々には、遠慮いたさせ申しませう。」といふを聞くより蝶吉於由は、勝手の方へ立つて行く。跡に藤兵衛膝すり寄せ、鳥渡のお相談の一件は、くはしく穿鑿致しましたが、唐琴屋の養子にて、又々他家へ養子に參り、その家破滅の折からに、難儀を請けし丹次郎どのこそ、素生は例の血すぢに相違ござりません。」與「ソリヤ榛澤六郎が隱し子にて、我のうへよりその母諸共、他へ遣はせし小兒なる、丹次郎にてありけるか。六郎成清が頼みしにはあらざれど、同役のよしみ、子を思ふ親の心を思ひやつて、年來たづねし我が誠心、行きとゞいて滿足いたす、時節を待つて親六郎へ、對面いたさせつかはすでござらう。しかし彼の丹次郎が浪々の宅へ、寶の一儀で參りし時、十五六才の容義よき娘が、深き中にてあるやうす、參り合はして見とめしが、猶その外に彼是と、心まよはすうかれ者と、聞いてはどうやら物がたい、六郎どのへ親子の對面、此の近常が請け合つて、今は妻さへ持ちし身と、とりなしがたい浮氣では、かへつて年倍の成清へ、恥をあたふる同然おやが、親子なのりを致させて、たとひ家督とならずとも、榛澤氏

の嫁ぢやとも、いはれる樣な女子どもでござるかな。」藤「其の義もいろ〳〵手を盡し、品を代へて穿鑿いたし、ためしましたが、いづれも實義と見とゞけまして、それとはなしに丹次郎どのへ、見續心にいたした儀も、大かたとゞきましたる樣子、猶又しかと相正して。」近「萬事如才のなき貴殿、このうへともに何事も。」藤「ヘイイエ、毎度御屋敷さまの御恩と申し、別して御ひいき下さいまする、榛澤さまなり貴君なり、此の樣な御用ぐらゐは、百分一にもたらぬお禮、それにつきましても先だつて御新造さまのわたくしへ、内々仰せ聞けられましたこと、貴君さまにも御召仕ひの、女中に御手をつけられましたことのござりまして、其の時妊娠いたせし樣子、しかとわからぬことゆゑに、捨ておきしが後々きけば、その女中お種を安産いたされて、それをつれ子でいづれへか、縁づかれしまで御聞きなされ、その御行方もわたくしへ、たづねくれよといふおたのみゆゑ、これもいろ〳〵心をつけましてをりますが、只今もつて手がゝりが。」トいはれて近常面を赤め、近「これは〳〵ぞんじもよらぬ妻が頼み、此の後とても左樣な儀は、決して穿鑿いたすにおよばず、何十五年も昔のこと、心にかけもいたさぬ儀。」と口にはいへど心には、だれもかはらぬ愛情の、今さら思ひ出でられて、何所にあるか無事なるかと、案じは顏に顯はれしが、さすがは武家の意地つよく、近「イヤナニ藤兵衛、六郎が見かへらぬ、實子のことを心を用る、穿鑿いたすは同役の好誼ばかりでなく、いまだ榛澤氏に家督の子息

なきゆゑに、第一主君へ不忠なり、彼の人の先祖へも不孝なりと、思ふによつていたすわけ、この近常は愚妻の腹より、出生の小兒も二人まであることなれば、かならずともに妻が頼み、ほねをりくれるにおよばぬ儀、くれ〴〵捨てておかれヨ。」ト是れより家内を呼びいだし、ていねいにいとまやつけ、半田次郎は立ち歸る。また丹次郎はこれよりさき、藤兵衛といひ近常を見て、何とやらんうしろめたく、お蝶にわかれてかへりしなり。さて藤兵衛はその跡にて、お由お蝶に向ひ、藤「ヤレ〱、兩人ながらきもをつぶしたらうなう。」由「ほんにマア、だまかされるとは知らず、おまへさんのお顏を見るまでは、どんなに苦勞をいたしましたらう。」蝶「モウ〱誠にかなしくつて、私のことからおまへさんが、どうかされるといふことゆゑ、悲しくつてなりましなんだ。」藤「さうだらうとも、もう少しおれが來やうがおそいと、あいつらにいいやうにされるところであつた。そのかはりばちが當つて、近常さまにつかまつて、連れて行かれたから、モウあいつらはそれ〲のお刑法になるから、わるいことはしねえもんだ。イヤあんまりごたくして、はなすのを忘れたが、今こゝへ來るまへに、お阿が所へ寄つて、金は此の間渡したが、お蝶ばうの證文が見えねえといふから、假請取を取つて、鄰の人が請人で、今日までに證文を尋ねて歸すやくそくだから、それを取りに寄つたら、お阿ばアさんがの、河豚にあたッて死んだといふ所へ行き合はしたが、イヤお阿が河豚で死ぬと云ふは、とんだ

落しばなしだ。あんなによくばりやァがつたが、死んで見りやァいくぢはねえぜ、仕合なものは店請ばかりだ。弔ひをしまふと、直に雜作もなにも賣るといふ相談で、長屋の道具屋が來て、直をつけてゐて、長屋中が寄りあつまつて、高笑ひをして泣くものは一人もなし、道具屋に葬式ぐるみ引きとらねえかといふ相談をして、わらつて居るやつサ。なるほど人間といふものは、慾をかわくがものはねえぜ。それだから妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者と、佛さまが、ホイ／＼こんな野暮をいつて、老い込みたがることもねえ、それよりかコウお蝶ばう、モウおめへのからだは、何所からもしりの來る氣づけへはねえぜ。」蝶「まことにありがたうございます。しかしマアお阿さんも、かはいさうなことをいたしましたねえ。」藤「なるほどおめへの氣めへおやア、いいきびだとはおもふめえが、ナニ／＼善惡ともに、むくいのくる時節だわナ。」由「こはいものでございますねえ。」藤「イヤおらア今日は大切な日だ、斯うしちやアゐられねえ、うしやへ駕籠をさう云つて、イヤ／＼駕籠より船にしようか。」蝶「オヤなぜエ、今夜は此方へお泊りなさいましな。」由「何を思ひ出して、急におかへりなさるのだねえ。」藤「實は此方へ遊びに來たのだけれど、今思ひ出すと今日は巳の日だ、是非洲崎へ參詣らねえければならねえ。」蝶「辨天さまへかえ。」藤「さうヨ。」蝶「姉さんと私と、同道につれてお出でなさいな。」藤「イヤおそくなつたから、今日はよしねえ、餘程急がなければならねえ。」といふ折から七ツの鐘ボ

ウン引 出「ほんにモウ七ッだね。」藤「なんだか今日は日がみじかい」ト急ぎあわてゝ歸りゆく。これは扨おき米八は、いつぞやよりして仇吉と、戀の遺恨のもつれにて、丹次郎とも毎度か、口舌をせしが此の頃は、浮名の立ちしのみならず、仇吉が爲に八幡の社内で、ちやうちやくされ、人前にて恥をうけ、其のしかへしの覺悟をきはめ、今宵洲崎の辨天へ、夜詣りをする仇吉が、跡をしたうて磯づたひ、巳の日なれども夜なれば、人目あらぬを幸ひと、驅け出し行くうしろから、米八またもやト聲かけて、帶引きとらへる者あれば、これはとおどろく米八が、ふりかへつて顏見合はせ、米「ヲヤおまはんは藤兵衞さん、どうしてこゝへ。」藤「オヽ、さだめてびつくりしたらうが、今途中で聞いた喧嘩のやうす、くやしからうがコレ米八、マア氣を靜めてよく聞かッし。何ぼ傾城水滸傳や、女八賢傳が流行つても、女の喧嘩は色氣がねえぜ。ハテこれまではともかくも、聞き捨て見捨てのならねえゆかり、マアこん夜は、おれがいふことをきいてくれろ、といつたところが日頃口說のわけぢやアねえ、これ今まで心を盡した丹次郎を、大事におもつて連添ふ氣ならば、藝者の意地や立引は、この藤兵衞に任しておけ、今櫻川とも相談した、立派に手めへの顏の立つ、仕方はおれがして見せる。」ト、おもひがけなき藤兵衞の、言葉に米八ふしん顏、米「そんならいつもわたくしへ。」藤「かれこれいつたは氣をひくため、いよ／＼丹印を大事にする、心と知れては藤兵衞が、肌をぬいで世話をする、マアそのつもり

でこゝから宅へ歸つて、時節を待つがよい。」と無理に引きつれ立ち歸り、その後藤兵衞がはからひにて、大勢の藝者をあつめ、其のうへ仇吉丹次郎が手ぎれ、米八が顏の立てかた等、殘る處なくはからひける。

この喧嘩の前後は、ことながくして、なか〳〵限りある丁數には、說き盡しがたし。よつて三編の口繪に、その風情を見せしのみ、近きにいとまあらば此の草紙の追加として、詳しく貴覽にそなふべし、則ち外題は、

梅ごよみの餘興　春色辰巳園　狂訓亭作　國直畫　全部六冊

發市の時を俟ちて御高覽のほど奉希候。

春色梅兒譽美卷之十了

# 春色梅兒譽美 巻之十一

江戸 狂訓亭主人 著

## 第二十一齣

再回ひて見しやそれともわかぬ間に、雲がくれにし夜半の月、それならなくに逢ひ見ての、後の心に比ぶれば、昔は物を思はざる、身にしあらねど此の頃は、苦勞求めて牛島の、寓居にお由がもの案じ、憂きをかたりて姉妹と、誓ひし例の蝶吉が、姉を大事と心付き、蝶「アノウ姉さん、おまへさんは此節は、誠にふさいでおいでだがネ、なぜで有りますエ、今ぢや藤さんといふ後見が出來たから、氣が丈夫ぢやアありませんか、チットうき／＼となさいナねえ。」由「アイヨ、おまへも他のことを苦勞にして、氣をもむ性だから、私が元氣のない貌をすると、直に案じて同じ様に、ふさぐだらうと思つても、ツイこんな性だから、胸がつかへる様になつて、今までの奴な氣まへが出なくツて、只心ぼそくばかりなるヨ。」トはなしながらへ勝手口、四十才あまりの內儀風、たしかにこゝと合點きつゝ、內儀「ハ

イチト御免なさりまし、お由さんとは此方でございますか。」トおとづるゝ聲、お蝶は立ち出で、蝶「ハイどちらからお出でなさいました。」内儀「アノ私は、千葉の大和町から參じましたが、お由さんにお目にかゝつて、くはしくおはなし申したいことがございますが、どうぞおむづかしくも、お逢ひなさつてくださいまし。」といふを聞くより奥の方、千葉ときいては藤兵衛が、方よりならんトお由は聲かけ、由「お蝶さん、こちらへお連れまうしておくれ。」トいひつゝ出迎ふ中の間へ、お蝶とともに入り來る内儀、お由は貌見てふしんの體、内儀は何やら眼に涙、たがひにその座がさだまれば、まづはじめてのあいさつに、しばらく有つて彼の内儀、内儀「早速ながらお由さん、御遠慮なさるお方もなくば、チト込み入つた私がおはなし、亦おききまうすこともあり。」ト見かへる側にお蝶はさとり、勝手へ立つて行く跡に、心がゝりとお由は摺りより、「大和町からと被仰るからは、たしかに千葉の藤さんの。」内儀「さればサ、そのことでは有りますけれど、マアこれを御覧じて。」ト取り出したる一品は、昔蒔繪の織部形、好みを盡せし三ツ組の、懷中杯下重ね、しかも世に知る下の句の、「ほとゝぎす。」といふ五文字にて、高尾が筆を寫せしなり。お由はこれをいぶかしく、手に取りあけてその身もまた、手箱を出して八重封じ、上に記せし書附を、あくるを止めて彼の内儀、「その書きつけはわたしが手で、みまがひもない後日の證據。」と半分いひて涙聲、お由は聞いてびつくりし、由「エ、そんなら、私が五ツ

の歳おわかれ申した、母御さんでございますか。」内儀「サア、ソイと、返事も出來にくいわたしが胸を、推量して邪見な母と思はずに、堪忍して。」と泣きしづむ。お由もワット聲をあげ、むせかへりつゝつ寄り添ひて、由「イエ／＼、何の勿體ない、堪忍どころぢやございません、親父さんの存生な節さへ戀しかつたおつかさん、よして常々氣にしても、尋ねる當もないおまへが、どうして私の在宅が知れて、モシマア夢ぢやァ有りませんか。」と取りすがりたる親と子の、道理さへしれぬ愁歎に、お蝶も貰聞き貰ひ泣き、障子を隔てて泣く聲も、へだてぬ中と知られけり。やゝありて二人とも涙をはらひ、け「オヽ、モウマア、私としたことが、歳がひもなく泣いたとて、返らぬむかしと今の身を、くはしくいふもはづかしい、ことではあれどわざ／＼と、今日來た仕儀の前後、よく聞きわけて合點して。」と過ぎ越しかたの物がたり、拙き筆に言葉がきでは、しるし盡さんよしなければ、左にしるすを見て解したまへ。

○そも／＼お由が五歳の時、この母親は歳わかく、やう／＼二十一歳にて、お由を産みしは十六歳の、暮の事にてありしとなん。かくて乙子をまうけたる、二十一歳のころにいたりて、その亭主薄命くして、夫婦より／＼談合し、夫はお由をともなひて、田舎の縁者を心あてに、あきもあかれもせぬ中を、離別なしつゝ、乳呑をば、母の手元に委ねつゝ、つひのよるべもそらだのめ、

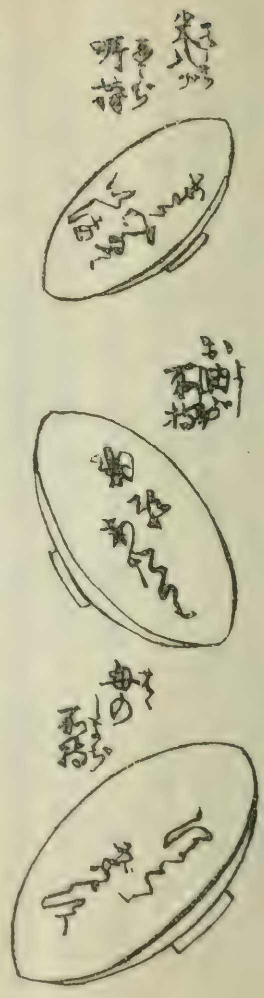
はかなく親子ちり／＼に、なりにし後にこの母は、我が子を里につかはして、その身は乳母に出でしかど、心づかひの期なれば、忽ち乳のあがりし故、當惑したる折からに、彼の藤兵衛が父なりし、藤左衛門に思はれて、心ならずもまたさらに、結ひなほしたる島田髷、圍はれ女にはなりしなり。かくて里子にやりたりしは、是ぞお由がいもとにて、今婦多川に全盛の、藝者となりし米八なり。さて米八は里親の、養育にてひととなり、母はさすがに藤左衛門に、子のある由をかくしたれば、手元におくことならずして、つひに里親にまかせしゆゑ、十三歳のとき米八は、里親難儀のことありて、唐琴屋へ藝者に賣られ、身まゝにならぬそのよしを知れども、このごろ藤左衛門は老病にて、なにごとも不自由ゆゑに、本妻にあかしてお由が母親を、千葉の家内に引き取りしゆゑ、何事もわすれしごとくうち捨てて、八年あまりを過ぎしとぞ。かかればお由が旅寢して、佐倉にいたり藤兵衛に、ちぎりをむすぶ前の年、米八は唐琴屋のかゝへになりしことゝおもはる。さてお由と米八が、姉妹といふことは、今この母が知るばかり、お由は五歳、米八は當歳のときなれば、はらからありとは露ばかりも、しらで月日をすごせしとぞ。こゝに親子の對面は、およそ二十一ヶ年ののちにして、いと／＼ながき月日なり。この始終にて見るときは、母親のとしは四十二歳、お由は二十六歳にて、かの米八は二十二歳におよぶなるべし。よく／＼か

んがへ讀みたまはねば、作者のつゞりがあしきゆゑ、わかりがたかるくだりもあるべし。すべて予が作意の癖は、發端にいふべきすぢを、のちにしるすが常なれば、よろしく察して、高覽をねがふのみ。

斯くてお由と母親は、前文の一條を問ひつ問はれつ時うつる、噺に果てしもなかりしが、稍ありて、母「ナヽお由、今までいうたは過ぎた事、今日わざ〳〵と來たわけは、チトおまへに頼みが有るが、聞き屆けておくれか。」と、いへばお由は膝すり寄せ、由「アノ改まつたそのお言葉、たとひ別れて育つても、産の恩ある母人さん、頼むなんぞと被仰るは、他人がましいなんのマア、親子の中ぢやァございませんか。」母「サアさうでは有るけれど、此の杯の三組の、一ばん小さいすゑの所を、別るゝ時に遣つたのは、今はなした米八が、證據の品、母の此の身は二十年に、あまる恩義の大和町、藤兵衞さんの兩親に、今もふかせし義理あるこの母、藤左衞門さまからそのお子の、藤さんの代へかけて、一方ならぬ深い緣に、かゝればつながる姉妹が、姉も妹も藤さんの、お世話になつて居た日には、たとひ兩方知らぬ同士、藤さんとても其樣なれど、此の身になつては朝夕に、他目にしれぬ心の苦勞、大旦那が死去られて、モウ八九年になるけれど、やつぱり旦那の繁昌の、時にかはらぬ本妻さん、わたしを實の妹と、思つてゐると深切づくめ、何も不足のない宅で、本妻さんの御苦勞は、只藤さん

のお身のうへ、嫁御さへとられぬは、唐琴屋だの和哥町ぢやの、またそなたぢやのといふ者が、三方四方にあるゆゑと、聞いてはどうもその儘に、捨てておかれぬ藤さんの身持、勿論是れまでいろ〳〵と、道樂の止む間がない故、母御の苦勞は無理ならず、何の縁でか親子三人、千葉のお宅の厄介に、なるもふしぎなことながら、お米なり（米八がことをいふなり）其方なり、いつそ私がすゑ〴〵まで、知らねば知らぬで濟ましもすれど、別れて居ても親子の情、案じて暮す月と日に、だん〳〵知れた今の身のうへ、知つてはさすがよそ〳〵しく、ならぬが浮世の人情づく、こゝの所をくみわけて、どうぞしばらく藤さんが、本宅に腰の落ち付くやう、其方の仕打でどうでもなる、お由もかうだと米八に、是れから逢つてはなしたら、得心しないことも有るまい。此の頃聞けば唐琴屋に、少し遠ざかつてお出でもないと、さうして見ればお米は、商賣外の座敷へ行く日もあらう、お足の近いはどうでも此方、それ故頼む此の母が、無理であらうと聞きわけて、愛想つかす程ではなくとも、おもしろからず會釋うて、遠ざかるやうにして下され。」と、いはれてお由は口のうち、只ハイ〳〵もないじやくり、しばしは答へもなかりける。

### 三ツ組杯の圖



これ親子三人が別るゝ時、後の證據とせしものなり。因にいふ、織部形とは古田氏の好みにして、凡その道具小器を珍重せられし故、此の小杯をも織部形といふ。古き椀久の唄に、へ思ひざしなら武藏野でなりと、何ぢや織部の小杯トつゞりたり、武藏野といふは大杯にて、のみつくされぬといふ謎なりとぞ。

## 第二十二齣

さてもお由はつくぐと、過ぎ越しかたの物がたりに、去りにし親父のことさへも、胸につかへて悲しさの、猶いやまさる浮世の義理、亦藤兵衛と米八が、中をくはしく知らざれば、現在姉の契りたる、男と知らねば兎も角も、五才の時に別れしより、二十年まで隔たりし、母のたまさか廻り合ひ、

賴むといはるゝ、一言は、思ひ切らねばならぬ仕儀、とはいへその身は七年前、いまだ姉も此糸も、逢はぬ前より言ひあはし、緣あればこそわが身さへ、あはれぬ中と諦めて、心にあらぬ女丈夫、一生やもめで活業さんと、思ひしものが計らずも、お蝶が事より廻り合ひ、昔にかへる女氣の、他よりわけて貞正の、心を又も入れかへて、どう緣切つてこれぎりに、なられうものかなりもせじ、ならねば母へ不孝ごと、千々に碎くる物思ひ、折から鄰の垣根ごし、清元入のドヽ一を、娘が唱ふその一節

〽梅に鶯アレきかしやんせ、〽するなゆかりと我ながら、我がつま琴を掻きならす、思ひの丈の尺八も、〽一夜ぎりとはきにかゝる、〽凧の絲目も花の邪魔

他の端唄も身に當る、緣の絲目の切れよとは、花をちらさぬ辻うらか、とは思へども藤兵衛と、わかれてなんのながらへて、また來る春を待たれうぞと、繰りかへしたるお由がなげき、母は義理ある藤兵衛に、身を保たせんと思ふ故、無理を承知のねつり言、母「モウ／＼能いからなきなさんな、親とは云ふでふ二十年、産んだばかりで恩もなし、たま／＼尋ねて來るよりはやく、親子の名對面をするやせず、思ふ男と緣を切れ、母が恩ある家へ對して、濟まぬのなんのと得手勝手、みんなわたしがわるかつた、姉娣他人のはじまりとやら、ずゐぶん娣にはり合つて、男をとられぬ用心しな、年とつたそなたがその樣子では、娣もなか／＼得心しまい、人なみ／＼の親ならば、親の威光もいふけれど、

薄命のゑ子どもにも、口のきかれぬ生きがひもない此の母が、死んで萬事のいひわけします。」とすけなく立つを引きとめて、由「アレ母人さん、お氣のみじかいマア堪忍して、私の申すことを一通り、お聞きなさつてくださいまし。」ト涙ながらに七年以前、佐倉で逢ひし時よりして、心を盡せし操のやもめ、神や佛の惠みにて、ふたゝび合ひたる今日の今、浮氣で惚れて身のために、男を釣り寄せくらすかと、思しめすのが恥かしい、モウきつぱりと思ひきつて、是れまでしつけた髪ゆひと、小梅の宅の貸衣裳、損料夜具の活業で、その日を過して故人つた、おとつさんの命日には、現成庵へでもお參り申して、一生を送ります。」ト、いはれて見れば母親も、無理と承知で言ひ出して、今さらなんと善し惡しを、定めかねたるこの座の模樣、折から鄰につゞいたる、四疊半の小座しきの、縁の障子を押しあけながら、「イヤナニ、姉おそのとの義理をおもうて、藤兵衛が身持に付いての、心づかひはかたじけないが、お由女は私が大事の戀嫁御、吉辰を選んで藤兵衛が、家の内儀でございます。」トいふこゑ聞いておどろく二人、入り來る姿は歳のころ、五十才あまりの尼御前にて、さも上品なるその出立、御納戸加賀の羽二重に、花色ちりめんの裏つけて、下著も對の花色無垢、尼「おゆるしなさいまし。」ト手や膝に、珠數つまぐりて座につけば、由「あなたは此間お鄰で、お目にかゝつた御隱居さま。」母「思ひもよらぬお姉さまの、どうしてこゝを御存じで。」トお由が母とお由とが、右左から問ひよれば、尼は

につこりうち笑ひ、尼「さぞふしんなと思ひなさらう、今日來たわしが心のうち、釋迦さまでもごぞんじあるまい、とはいふものゝ案じたより、產むが易いと世の諺、產まぬ子ども身の素姓、わしが年來姉ごと、思うてくらしたおそのどのゝ、實の娘のお由女郎、それと知らずに藤兵衛が、深くやくそく堅めたは、一方ならぬ緣者の中、何心なくお鄰から、つゞく庭ゆゑ不遠慮と、思ひながらも來かかつて、ふと耳にいる咄し聲、品こそかはれ藤兵衛が、爲をおもうておそのさん、血をわけた子に緣切れとは、まことに義理の深いこと、わたしはそれに引きかへて、子にあまいゆゑ藤兵衛が、是れまでつゞく道樂わがまゝ、今さら嫁の穿鑿も、里のしうとの氣々さま〲、それよりいつそ子どもの氣にいつたら、女郎藝者でもかまはぬ方が、當世かと思つて見てもさうはない、三日も尻の落着かぬ、女は宅へもいれられずと、不斷思案の絕えない時節、此間途中で櫻川が見えたゆゑ、だん〲の理をはなして、世間のひろい善孝のこと、どうぞ倅が遊び先、たがひに始終眞實に、添ひとげようといふわけの、女があらば一日も、早く宅へとたのんだところ、唐琴屋は藤兵衛も、繁く行つたは一盛り、どうやらこれはない緣と、いふゆゑそれから米八が、方はときけばはツきりと、わからぬあいさつさりながら、元此糸と同じ家に、居た時どうか譯あつて、ふた川へ自前とやらになつたは、不殘藤兵衛がしたことと去る人のはなし、それゆゑわたしが米八を、たづねて直に心根を、聞かうと思ふその中

に、噂を聞けば丹次郎と、いふ人に操を立つて表向は、男ぎらひと風聴を、させる藝者と聞いて見れば、これも此方のものではなし。それほど馬鹿には產みつけぬと、腹は立つて見るものの、男の意地とか達引とかで、ふりつけられても幾度か、通ふ遊びもするものと、聞けばまんざらだまされて、世話をして置くわけも有るまいと、いろ／＼氣をもむその中に、こちらの樣子を聞き出して、幸ひこの頃お參り申す、現成庵でお心やすくなつたお鄰のお袋さん、うち明かしておはなし申し、それとはなしに此の間、知己になつたお由どの、元は小梅の女伊達、強い人ぢやと噂とは、うつてかはつたそのやさしさ、殊にすぐれた美目形容、これで心がはすはでなくば、藤兵衛が嫁には過ぎものと、だんだん近所の取沙汰から、氣だての樣子何ひとつ、不足はないと思ふゆゑ、今日は直々千葉の宅へ、這入つてもらふ相談をと、來かゝる爰への庭傳ひ、願うてもない緣つゞき、おそのさんの實の子と、始めて聞いて嬉しさに、罪深いといふ立聞も、われをわすれた此のよろこび、しかし此方はその氣でも、心々の人の望み、お由どのの始めおそのさん、藤兵衛が本妻にするのは、心にそまぬかえ。」ト、いはれて飛びたつうれしさは、何にたとへん方もなく、おそのお由が喜びにも、涙さきだつ夢ごゝろ、しばらくあつて、丹その「おもひがけない御隱居さまの、有りがたい思召し、今にはじめぬことながら、勿體ないやうにぞんじます。」由「いやしい此の身を有りがたい、お慈悲のお言葉ではございますが、さう

して見ると藤さんの、お蔭で世にたつ米八さんが、俄にどうか前後の、都合も違ふ心あて、たとひ姉と知らずとも、女の心のはかないを、ぞんじましては是れも亦、心にかゝる成行の。」藤「イヤそのことは遠慮におよばぬ。」由「さうおつしやるは藤兵衛さん。」尼「オヽ藤兵衛が來たのかえ。」トしやうじをあけ藤兵衛は、尼のまへにすわり、藤「お歳よられて母人さん、私ゆゑに相かはらず、さま／＼のお心遣ひ、モウ／＼これから氣を入れかへて、急度身持を改めます。殊にお由を添はせんと、ふかいお慈悲のお志、野暮らしい御氣性だと、なか／＼出來ぬ今日の仕儀、お由やよく御禮を申しなな。おそのさんもいろ／＼と御深切、併しこれからきまじめで、みんなに安堵をさせ申しやす。又米八が事は、その始め此糸が頼みによつて、自前の身にしてやりましたが、それから後にお出入やしきの、畠山さまの御家老職、本田次郎近常さまから頼まれまして、心にない無理なことまで言ひかけて、心の底をさぐつて見ましたが、中々みだれぬ心の操、歳のゆかぬ女には、また有るまじき氣性ゆゑ、此の藤兵衛が證人媒人、丹次郎どのの内室と、始終をはかる深いわけ、しかしこれは今こゝで、ちよつと申してわからぬおはなし、まづそのことは兎も角も、私が爰へ來かゝつて、控へて居たもやゝしばらく、さだめて母人さんも御食前だらう。」ト次の方へ向ひ、藤「オイ何や、お蝶ばうやちよつときてくんな、お蝶さんゐねえのか。」と呼べどお蝶は先刻より、お由がことに佇聞して、案じ煩ふそのあげく、彼の米八を丹次郎へ、そひ

とけさせると藤兵衛が、言葉にハツト當惑し、涙に返事もなさぬとは、しらでお由は次へ出で、與すヤ此の子はやおいでないかと思つたに、藤兵衛さんがお呼びだヨ。ト言はれてアイと立ち上る、娘心にいとせまき、袂をぬらす憂き思ひ、一ト間へだてゝ悦びと、歎きと變るお蝶が胸、畢竟このすゑいかならん、そは第二十四齣にいたりて、滿尾の段にくはしくしるす、これよりはまた、此糸が傳にうつれば、前後を繰り返しつゝよみたまへ。

春色梅兒譽美卷之十一 了

# 春色梅兒譽美　卷之十二

江戸　狂訓亭主人著

## 第二十三齣の上

戀ゆゑに、心のたけをつくし琴、亂れそめにし此糸が、結ぼれとけぬ部屋の口、花「おいらんヱ、お湯が出來ましたョ。」此糸「アイすぐに這入るョ、絲花さん氣をつけてくれなましョ。」糸「アイお案じなさりイすな、お杉どんが今泥溝店へ行きイしたから、まだめつたには歸りイせん、はやく湯からおあがりなんして、頭痛がするとでもいひなまして、すこしお休みなんし、ゆうべはあいにく客人が、落ちあひなんして、嘸じれッたう有りイしたらうネ。」トいふはこのほどこのいとが、ふかくちぎりし半べゑの、今は二階をとめられし、のみならずして時をりは、仲の町であふさへも、うす／＼しれて氣をつけられ、思ふにまかせぬことのみゆゑ、きのふよりして半兵衛を、ひそかにへやにかくして置くなり。このいと「アイサ、まことにさつしてお くんなんしヱ。」と、目を見合はせて戸棚の方、心殘して湯どのへと、出で行く跡に絲花は、部屋の戸だなをそッと明け、いとはな「半さん、さぞ氣づまりでおッせうネ。」半「おれが氣づまりより、萬事おめ

への心づけへ、コウ手を合はして拜んでゐるコ。」ト、こそ〳〵咄の後の方、いつの間にやら遣手のお杉、杉「絲花さん。」杉「エヽイ。」杉「オヤ仰山な返事のしやうだ、ちよくり私が部屋へお出で。」杉「すねに疵もイなんぞ用ざますか、うッかりしてゐた所を呼びなましたから、びつくりしイした。」杉「すねに疵もつて笹原を走るとやらサ、何でもいいから一寸お出で。」いと「アイサア參りイせう。」ト、立ちながら明けかけた戸棚を、ぴッしやり立てつけて見ても、心おく、遣手を先へ絲花が、つゞいて出づる廊下より、引違へて此糸の、座敷へ踏み込む若い者、下ばたらきやら寐ず番やら、大勢一度に驅け入つて、戸棚に忍ぶ半兵衛を、引きずり出して口々に、大ぜい「此糸さんのお座敷には、盗人がすまつて居やす、不殘さんのお座敷で御用心なさいましョ。」若者「サア〳〵みせしめの爲に、此の盗人を下へ引きずり出して、内所の前で筋骨を、抜くほどの目に合はせてやれ、あんまり人をめくらにした。」ト ぶつやらふむやらあらけなく、ひだうのちやうちやく半兵衛は、身の誤りに手ざしもならず、ことに大ぜい手あしをおさへ、身うごきならぬ此のばのなんぎ、やう〳〵かた手を合はすまね、半「コウ〳〵喜介どん、どうぞ拜むからをんびんにして、おいらはともあれ此糸がかはいさうだ、コレこのことが内所へ知れてはッ」喜介「イヤあきれもしねえたは言をいふぜ、盗人を座敷へ置くおいらんも同類だァ、何かはいさうがいゝものか、高金出した奉公人を、いけふさ〴〵しい色男め、よわいのが當りめへと、ぶる〳〵するも胸がわりい、ぶつて〳〵ぶちのめして、恥づらかかせて此の郭へ、足ぶみのならねえやうに、

此奴を引きかついで、はやくはしごをおろした〳〵。」さしづに合點と二階より、引きずりおろして内所へも、見える所で亦聲々、惡口なして半兵衛を、いと情なきちやうちやくに、湯どのの内には此糸が、それときくより氣も狂亂、ハットばかりにさしこむつかへ、胸をおさへて湯どのより、出でんとするを抱藝者、秀次といへるが引きとゞめ、耳に口よせ小聲にて、秀「アレお待ちなさいまし、おいらんさぞくやしいとも思ひなんせうが、家内中むかうづらになッて、おいらんに恥をかかせる此のしだら、内所でたしか言ひつけた、樣子で見ればなま中に、今おいらんがあのせきへ、出なはいましては半さんの、ます〳〵お爲になりイすまい、マア辛防して此の場をすまして、跡で恨みをおはらしなんし。」といはれて此糸心付き、此糸「アイ秀次さん、深切におあり難うおッす。」も 口の内、くやし涙をはら〳〵〳〵 上り口には半兵衛を、おもふまゝに打ちなやまし、表の方へ突き出して、一度にどッと笑ひ聲、胸にこたふる此糸が、無念と思へど爲方なく、藝者秀次にいさめられ、素知らぬ體にもてなせど、面目なさと口惜しさ、兼て手當をせしならんが、誰が告口より顯はれしぞ、今は二階を止められても、元は内所や若い者、みなそれ〳〵に目をかけて、心遣ひもせし人を、いかに不實な家業でも、あまりといへば非道の仕方、よし半さんが忍んで居たはわるいにもせよ、此糸が自惚らしいことながら、五丁の内でかぞへられ、仲の町でも評判を、取つたればこそ相應に家業の爲にもなりしもの、少しは兒容に見

るはずな、目下にならぶ子供にも、貌向けならぬこの始末、どうして恥をすゝがんと、胸をいためて湯どのより、出づるらう下の中の間に、しやに構へたる彼の鬼兵衛、その片脇に判人蔭八、何か談じて居たりしが、此糸を見て、鬼「アイ此糸ちよつと來な。」この糸「アイ湯ざめのしないうち、仕舞をして參りイせう。」かげ八「イエサアちよッとお出でなせえ。」この糸「すヤ何でございますね。」鬼「モシ蔭八さんサア見なさる通りの始末だが、これで唐琴屋のお職といはれやせうか、後見なまへのわたしだとて、斯うふみつけにされちやア、外の子供のしめしが出來やせん、マア兎も角も連れて行つてくんなせえ、私が代に抱へた女だと、思ひ入れ仕置の仕法もあるが、親方にはまうけさせたことも有るさうだから、それに免じてマア何がなしに、濟代をさせやす。しかし此糸はその方が勝手だらうけれど、他のうちへ行つて、いままでの眞似は出來めえ。サア此糸、蔭八さんの處へ行かッせえ。」この糸は心をすゑ、此糸「ハイさうざますか、そんならなにかの支度をしイして。」ト立たんとするを鬼兵衛は引き止め、鬼「イヤ二階へはモウなりません、コウ子供やお杉どんにさういつて、此糸の寐卷とうちかけを、一枚よこしなせえとさういつて來や。エヽモシ蔭八さん、座敷や部やのものは、此糸が物だといひやせうが、あんまり馬鹿にしたしまつだから、何もかもよくしらべたうへで、渡すわけになつたら渡しやせう、まう今日はこのまゝおまへにあづけます。」と、さもにく〱しく言ひはなして、奥に入りたる跡

見送り、彼の蔭八が此糸と、顔見合はせて小聲になり、かけ「ヘエ親方ぶりやァがつて、大層な面アしやァがる。モシおいらん丁度願つたり叶つたりだ、御不自由でも、直にマアお出でなせえまし。」と氣も輕く、斯かる事にはなれたる判人、殊に指折りかぞへられし日の出の此糸、濟みかへは能き幸ひと駕籠を入れさせ、まづ我が家へ引き取りける。亦唐琴屋の二階には、遣手の部屋に此糸の新造絲花を引き寄せて、何やら小言をならべ立て、叱るふりにて其の間に、ひそ〱をしふるお杉が聲、杉「サア今の理ゆゑ、濟みけへにさせるは私が情でざいます、鬼兵衛どんの腹ぢやア、此糸さんをおかみさんに直して、手めへの後見を位をつけて、旦那といはれてえ料簡、それが出來ずとも、働きのあるおいらんだから、半さんは突き出しても、座敷のをば（このいとがことなり。）今までの通りで置くつもり、さうして見ると此糸さんが、二枚も下へ押しさげられるか、無理な都合で新造出しでもしなさらざァなるめえぢやァないかえ。それもあんまり馬鹿々々しいと、實においらんの爲を思つて、何もかもぶちこはしてしまつたわけでありますヨ。」絲花「アイお有り難うおッす、さうならおいらんの大事のものや首のものは。」杉「私が立ちあつてしらべるつもりで、座敷へ行くからはやく手まはしをして、著替や何かは此糸さんと、中のいいおいらん達に、内證であづけないまし。」絲花「さしものはどうしいせうネエ。」杉「花のに（禿の名なり。）よく言ひつけて、尾張屋へ持たしてやつて、金にして濱の宿へ（蔭八が方のことなり。）しれない

やうに届けて上げなさいまし、サア手ばしかくしなさいまし。」ト、面は鬼と見せかけて、内にふくみし情のはからひ、遣手にまれなる深切もの、心よからぬおいらんたちへは、かへつてかくすこのはからひ、人目をいとふ遣手部屋、わざとお杉は聲たかく、杉「イエ／＼、おまへがたにめくらにされるやア、私が役がすみません、サア／＼一處に座敷へ來なせえ、おいらんはじめおめへまで、これまでのしだらをいち／＼わけにやア、内所のまへはいふにおよばず、二階中へ口がきかれません、モウ／＼ぐず／＼したいひ譯をしなさいますな。」ト、あたりへきかせる小言のかず／＼、内々にては此糸や、この新造の爲にのみ、なるやうにこそはからひけれ。

## 第二十三齣の下

淵は瀬と、變るならひに川竹の、流れを留めし山の宿、假宅長屋の裏住居、日向きわろき藤八が、判人なれど石に印、堅いが甎と活業に、只正直の首さへ、山のかみとか世にとなふ、妻女結ねの儉約も、たらぬ世帯のその中に、折節風邪の煩ひに、女房お民が手一ッで、まはらぬ暮し常なれど、このせつわけてふてまはり、こまりし中へ此糸を、あづけられたる其の日より、さすが郭で全盛の、にはかに今日は零落して、三度の食の榮耀には、魚吉の臺も飽きたりし、口にするめの醤油燒は、まづい物屋の立肴、お職といはれし此糸も、浴衣の上に寐卷著て、北東出錦の卷帶は、鄰家の人も振りかへ

り、日に辰巳屋の貸布團、それを敷寐の柏餅、猿屋で買ひし口取も、最中の月と賞翫すべし。夜晝わかたぬ不自由は、此の雑文にて知察り給へ。女房おたみ此糸にむかひ、民「オヤ私はわすれ切つて居りましたが、今表へ出ましたら、兼さんがお津賀さんの言傳を、頼まれたと申して、此の蓋物とお金をよこしまして、これではぶしつけだから、おいらんが何ぞ食べたいとおつしやるものを、買つて上げておくんなさいましと申して、コレ御覧なさいこんなおいしいものが參りました。」ト蓋物を開いて出せば、此糸は、此糸「オヤ御深切に嬉しいネエ、そしてマア延津賀さん處は、遠いぢやアありませんか、近いと行つて逢ひたうおッすねえ。」かげ八はびやうにんながらもわらひだしそのあどけなきをかんしんして、かげ八「コリヤアいい言をお言ひなさる、なる程おいらんの足ぢやアむづかしい、爰からお津賀さんの處までぢやア、仲の丁を半分道中するほどありやせうハ、、、、。」此糸「オヤさうざいますか、ばからしい、私やアまた大層遠いと思ひイした。」お民はかげ八にむかひて、民「モシエ、此のお金はおいらんへ上げて置きませうネ。」此糸「アレサをかしい、私が持つてをりイしたとて、仕方がおッせん、おまはんそれでいる物を買ひなましョ。」民「それぢやア悪うございます。」かけ八「コレサ〳〵、お民つまらねえ事をいふなえ、延津賀さんの深切は、藝者に稀な事だけれど、壹歩の金をおいらんに、持たしておいたとてはじまらねえ、今にだれぞ來て泣きごとをいふか、くるしいはなしをして見や、それこそ自分のことは忘れて、持つて行きなましなんぞと言つて

はふり出して仕まひなさらア、それだからお津賀さんが、何ぞ買つて上げろと兼さんに、さう言つてよこしたのは、おらが宅の不都合を知つてゐるからだアな。」民「さうさねえ。」トはなしに此糸氣もとめずふた物のなかを見て、此糸「オヤ私の好きなものをくれさしッたヨ。」トわらふはよく／＼氣にいりしものか、すべておいらんといふものは、いろけはあれどおも／＼しくして、くひものはあまりさわがず、たいがいのうまきものも、げおく／＼ほどにはおどろかぬものなり。民「ほんにねえ、モシちよつとお見、白魚と玉子をいりつけて、海苔をまぜて、山葵が下すばかりに皮をむいて有りますヨ。」かけ八「そんなにびつくりしねへかい、一ツで五貫目ある琉球芋のはなしを聞いたやうに。」民「オヤ何もびつくりしは仕ないわね、外聞のわるい。」かけ八「エ、イやかましい、それよりははやく煮花をこしらへて、おいらんにこれでお茶漬でもあげる支度をしねえな。」民「ハイ／＼直に小言になるからいやだ。」かけ八「否だもおしがつよい。」民「アレサ、モウいいにしないましヨ、併しはやく夫婦喧嘩がして見たいねえ、さうなりイしたらさぞ嬉しいことでありませうネ。」かけ八「イエモシ、おいらん達や娘子どもの料簡ぢやア、はやく思ふ男と一所になつて、とき／″＼はすねたり喧嘩をしたら、さぞたのしみだらうなんぞと思ふのが、世間のあたりめへでごぜえますが、サアさうなつて子どもでも出來てごらうじろ、立派にくらす御新造さんでも、色氣も戀情もさめてしまつて、エあれがかと見違へられるやうになりますぜ、いはんや貧乏世帶をもつてごらうじまし、昨日まで町内の若衆が、血道を上げてさわいだ娘でも、直に大腹を抱へて、味噌

こしを袖に、右の袂へ燒芋の八文も買つて、歩行くやうになると、まだ島田でゐられた物をなんぞと後悔して、泣くのがいゝくらも有りますぜ。しかし今の娘は親のしつけがわりいから、はやく亭主をもつて、子どもでも出產るのを恥かしいとは思はねえで、手がらのやうに思つてゐます。イヤそれから見ると女郎衆は、マア十人が九人、めつたに小兒は產まねえから、通人は兎角おいらん達を引きずり込みたがりますぜ。」トはなしの中に、辨天山の七ツの鐘ボウン引〲。民「オヤ〲モウ七ツかねえ。」かげ八「ナニオヤ〲なものか、いつでもお晝と夜食と一ツにならア、おいらんがなんぼ朝おそくツてもおひもじからう。」此糸「イヽエ、何だかおまんまなんざア、たべたく有りイせん、實は先刻ッから胸がいたうおツす。」かげ八「また半さんのことで、ふさぐわけで有りませうが、モシ今にどうかなりますワナ。とはいふものゝ半さんも、ぜひ今日あたりは來なさりさうなものだテ。」此糸「イヽエわちきが斯うなつたこととは知らず、まだ郭にゐると思つて、たゞ面目ねえくやしい、これといふも、わちきのお蔭だなんぞと、今ぢやアにくんで居なんすだらうと思ひイす。」トさすがりはつなおいらんも、戀ゆゑ愚癡のくちをしなみだ。かげ八「たとひなんでもかでも、友達をたのんでも、郭のわけを聞きなさるはずでごぜえます。」此糸「それに便りの有りイせんは、もしや此の間の時に、打所でもわるくツて、途中か宅で萬一のことが、ありはしまいかと案じられてなりイせん。」かげ八「ナニ〲、それほどの有りますめえ。」トはなしのうちに女ばうが、膳だ

てをして、此糸に食事をさせる。　かけ八「そして半さんは、何處に當時お出でなさいますネ、やつぱり綺岸とやらかネ。」此糸「イ、エ、さうぢやア有りません、矢義の城さん所に、かくまはれて居さッしやるといふことで有りイす。」　かけ八「ハテネその城さんのお宅はヱ。」　此糸「たしかに巣鴨とやらでおッす。」　かけ八「そいつはたづねるにも、急なことにはめゐりますめヱ、困つたものだ。」とはなす折しも入口の、障子の外にての聲、「ハイチット御免なさいまし。」　民「ハイ誰様ヱ。」「アノウ、郭へよくお出での藤八さんの處は、お前さんでございますか。」　かけ八「ハテナ娘の聲だが何だ知らん。」この糸は弟ときゝて二かいへかくれる。　民「こちらでございます、お這入りなさいまし。」「ハイ。」ト障子を明けながらも、遠慮をなして這入らねば、民「サアサア此方へお上りなさいまし、何の御用でございますか。」　かけ八「御遠慮なく、こちらへお上りなせヱ、ハテどうか見申したやうなお子だが。」といぶかれば、蝶「ハイ久しくお逢ひ申しません、わちきは唐琴屋の。」かけ八「ハイどふただッけネ。」蝶「ハイアノウ、久しく本家に居りましなんだから。」　かけ八「ハハ、ア、やつとおもひ出したお蝶さんでございますか。」蝶「ハイ。」かけ八「ヤレノ\/\さうでございましたか、御免なせヱ、此間はチット病氣が。」トいひながら、すこしおきかへりて、「少し見申さねヱうちに、大そううつくしくおなりなすつた。コレサお茶を上げねヱか。」時にマアどうしてわたくしどもへ、たづねてお出でなさいました。今ぢやア何處にお居でなさいますヱ。」蝶「ハイ小梅の方に居ますヨ。」かけ八「ハアそして私

に御用といふわけもあるめえが、それともなんぞ郭へ使にでも參るわけかネ。」蝶「イ、エ、さうぢやアありませんが。」ト、しばらく云ひそゝくれしが思ひ切つて、蝶「アノウおまへさんに、チット頼むことがあつてまゐりましたが、アノウ私を何所ぞへやつておくんなさいな。」かけ八「エイそりやアマアとんだはなしだ、何ぼおめへさんが其の中で、お育ちなさつても藪から棒に、そんなことをおもひつかッしやるとは、よく／＼なわけでありませうが、マアどうなさつたのでございますエ。」蝶「ハイすこしお金が入りますからサ。」かけ八「サアその金のわけ、また當時のお身のうへを、くはしくお聞き申したうへは兎も角もだが、何にしてもわいいおぼしめしだ、てえげえの事ならさうせずと外に。」蝶「イエアノウ、今ぢやア私の身は自由になつて、何にもかゝり合ひはないから。」かけ八「そして金の入用な譯はえ。」蝶「それはネ、郭に前年居たお兄ィさんが、今度眞正のお宅へ歸參とやらが叶ふについて、いろ／＼お金の入るといふことゆゑ、それを私がこしらへて。」トいふこゑきいてこのいとが、二かいよりしておりきたる。畢竟此のすゑいかならん、次の一齣の終りをきくべし。

## 第二十四齣

扨もお蝶は丹次郎が、本家へ出入り身を立つる、其の手土産に先だつて、松兵衛が横どりせし金子を今少しなりとも、調達したしといふ内心をきいて、その金のために身を賣つて、男に操をあらはさ

んとせり。かくして見れば歳ゆかねど、その心ざし貞勇にて、いはゆる侠氣の娘といふべし。わづかの間に、身を再度代らんとするは、尤もかんしんすべき事か。時におひらん此糸は、二階より下り来り、此糸「すヤお蝶さん、誠にめづらしうありイすねえ。」蝶「すヤ〳〵おいらんかえ、どうしてマアここへ、すヤいつぞ苦勞をさしつたさうで、お痩せなはいましたわ。」此糸「さうざいますか、此間中からいろ〳〵と、苦勞をいたしいすが、おまへはマアどうしてこゝへ、お出でのわけでありイすえ。」トいはれてお蝶は繰り返し、だん〳〵のわけをはなし、蝶「おいらんエ、なぜマア私はこのやうに、苦勞症でありますだらうねえ、そしておいらんの御苦勞なさいますのは、やつぱり半さんのわけで有りますかえ。」此「ア、さうざます、それに今までと違つて、モウ〳〵くやしいめにあひイしたから、いまだに胸がさけるやうでなりイせん。」トこれも身のうへをくはしくはなして、互に愚癡をかたり合ふ折から、表へ雪踏の音、「ハイチト御免なさいまし、陰八さんのお宅はこちらでございますかネ。」「ハイこちらでございます。」「ヘイさやうならば御免なさいまし。」ト入り来る人は櫻川。此糸は目ばやく見とめ、此「すヤ善孝さん。」善「ヨウ引おいらん、ヤレ〳〵〳〵こりやァ有りがてえ、おめへさんがいらッしやりやァ、何もかも直にわかるわけだ。イヤまづ御免なさいまし。」ト上る。かげ八「サア〳〵こちらへお出でなさいまし。」善「ヘイ〳〵、イエモウおかまひなさいますな。時においらん、マアとんだわけ

春
姿の花
心の見立
秋
姿の花
心の
見立

夏
姿の艶
心の見立
米八
姿の艶
心の見立

でござえましたネ、私やアさツぱり存じましなんだが、此間千葉之助さまの御分知の、千葉半之丞さまといふ、おやしきへはじめて召されましたが、是れまでつひぞ参る様な御えんもないが、どうして召してくださるかと、存じて上ツて見ますと、旦那さまといふのは繪岸の半さんだからきもをつぶしまして、だん／＼御様子を伺ふと、是れまでは御部屋住なり御病身ゆゑ、若隠居なされてござつた所、急に親御様も御兄イ様も、おなくなり遊ばして、半さんが御家督と、おなりなされたと申す事、それも御次で承りまして、それから御内意おいらんの事を、わたくしにとり計らへとお頼みゆゑ、唐琴屋の方へ其の後参つて、掛合の中昨日まゐつて見ると、亦びつくりいたして、やう／＼今日こちらへまゐりました。」此「オヤさうでありますか、マア／＼半さんのことは、便りのないもちつともわかりイしたが、唐琴屋はどうしイした。」善「まだこちらでは、さつぱり御存じない譯かネ。」かけ八「こちらからまゐると、申して置きましたからまだ何とも。」善「イエ／＼、おいらんのことゞらゐなことではございません大變サ。」此「オヤなんざいますエ。」善「イエモシ、誠にきものつぶれたおはなしサ。今の旦那は後見ださうだが、ありやアモシ古鳥左文太といふ、盗人の頭ださうでござえます。」善「エエイ、そんなら本店からつけた鬼兵衛どんは、盗人でありますとえ。」かけ八「そりやアマア大變なことゝでございます。」善「それがどうして知れたといふと、千葉の藤さんの御家に居た男が、松兵衛の五四

郎とかいふわるもので、それが重忠さまへ召捕られて、それからだん／＼あらはれて來たさうでござゐます。それゆゑ唐琴屋は、どうもむづかしい樣子、どうか立ちさうもないといふ噂でございます。しかし今また他ではなしをきけば、榛澤六郎さまが、そのまへからのおしらべで、唐琴屋の家の娘が内々でおたづねなされたさうだが、古鳥左文太當時は鬼兵衛後見ゆゑ、家にはかまひなく、家財はその家付の娘と、本店へくださるだらうといふ、はなしを聞きましたが、さうして見ればおいらんの、お身のうへもどうか手輕く方が付きませう。いづれおいらんは半さんの方へ、お出でなさるわけでござゑませうネ。」此「さうなりイすと嬉しいねゑ。」善「それさへお聞き申せば、直に方をつけますが、モシわたくしやア、此の本の作者に憎まれてでも居りますかしらん、野暮な所といふと引き出してつかはれます。しかしマア／＼、善惡の差別がわかつておめでたい。いづれ近日何もかも、をさまる樣になりませう。」トいふこというてそこ／＼に、歸る善孝其の跡に、此糸お蝶がはからずも、悦びいさむ春の色、めでたく開く梅ごよみ、吉日撰みてそれ／＼に、をさまる家の大畧を、こゝにしるせば彼のお由は、藤兵衛が妻となり、又此糸は半之丞が方へ行き、お蝶が素性はこれより後、六郎成清の正しにて、近常が種なるよし相わかり、丹次郎がことを内々世話になりし恩といひ、操めでたき娘なれば麁畧にならずと、我が子丹次郎が別段に、名跡をたつる心願かなひ、繁昌の基をひらく時に臨んで、

お蝶は本妻となり、米八も一かたならぬ貞實なれば、親の六郎へ、はれてお部屋さまとうやまはれ、いづれもその中睦ましく、新造絲花遣手の杉、判人等善き人は、いづれもすゑ〴〵めでたくさかえ、また惡人はそれ〳〵罪をかうむり、四人の女子はお由を第一とし、此糸を二ばんとなし、三番目を米八とし、四人目をお蝶とさだめ、歳のじゆんにて内々は、姉妹のやくそくをなし、子寶おほくまうけつゝ、幾代かかをる春の梅、實いりをこゝに壽きて、めでたく筆ををさめはべりぬ。

春色梅兒譽美卷之十二　大尾

梅曆餘興

# 春色辰巳園

# 梅暦餘興 春色辰巳園序

黄帝は暦の本家本元にして、是れより羲氏和氏と云ふ二人の番頭、命を受けて猶暦を改む。帝堯是れにのつて亦糶賣取次を多くなし、既にして本朝に出見世出でしより、貞觀の始め、大春日眞野麿呂、又天德年中司暦博士、賀茂保憲といふ問屋達、廣く傳へて暦なる事久し。玆に狂訓亭の主人、先に梅暦の匂ひよきを世に廣め、成る事四篇にして筆を止む。夫れ彼は、天地陰陽、變易交易、順逆相剋、吉凶得失の大仕掛にして、天下の重寶又是れにならぶ物なし。是れは男女の婬樂を誡むるのをしへにして、勸善懲悪の世話狂言なり。されや世の見物、是れをあかずめでけるものから、書房の慾心其のかぐはしきに現をぬかし、今一花咲かせんと、頓にそが餘興を需むる事切なれば、ふり捨てがたき梅が香の、匂ひも深き川の世界。題而春色辰巳園と云ふ、よくその穴を探ること、川太郎も終に及ばず、嗚呼趣向のいきなるや、意氣張強き戀路のたてひき、かけ引きのよき筆のあやに、釣り出したる三筋の絲、互の胸に忍びごま、ばち利生ある撥皮の、厚き意の仇競べ、ねじめはあだな一調子、變つたすぢは新工夫、すいと甘きを味うた、作者が料理卽席卽案、ぐつとひねつた獻立の、うまみを味ひ給うたなら、亦二の全部を待ちたまへと爾云。

春色辰巳園序

于時天保四巳春　狂訓亭にかはつて述之

三亭春馬

梅暦餘興 春色辰巳園 巻之一

江戸 狂訓亭主人 著

第一回

へそれも鳴く音の鶯も、梅に三うらの小紫、粋なゆかりと我ながら、我がつま琴とかきならす、思ひのたけの尺八も、れんぼながしは權八が。」ト うたふとなりの淨るりは、こうしもこゑも清元の、たかねをいれしつれびきは、十二呂律の調ひし、 その十二軒の會席に、小池と呼ばれし一ト構へ、世事で丸めてうはきな中に、實意を見世のかゝりさへ、直な柱も杉皮附、つくろはねどもおのづから、土地に合ひたる洒落造り、如在内所の咄し合ひ、また呑み直して意氣にする、客の絶え間もなかりしが、今日も尾花か梅からか、此家にしばらく酒もりも、程よく呑みて歸りたる、跡に殘りし女妓の中に、何かもつれて亦殘る、彼の梅暦にて看官の、おなじみなりける米八仇吉、善惡わからぬさしむかひ、たがひに醉ひて仇吉は、二階ざしきの中窗から、庭を眺めて、 仇「オヤお熊さん、ちよつとお出でな、はなしがあるから。」 この小池の娘おくま、二かいのおたへ見かへる。ごぞんじのあいき

やらもの、あだ吉にむかひてわらひながら、手のひらへよの字をゆびでかいて見せ、かほふくらして見せる。是れはたしかに、仇吉、丹次郎がわけを、このほどはよね八が知つて、はらをたちゐるだらう、といふしうちなるべし。くま「今まゐるヨ。」ト云ひながら勝手の者に、何か用事を言ひ付けて居る。仇吉は元の座に行きおとなしく小聲にて、仇「米八さん、ちよつとはゞかりながら上げませう。」よね八はきこえぬやうすなり、仇「モシ米さん否かえおいやかえ。」よね八は氣がついたといふやうす。米「オヤわたいかえちッと。」仇吉ははなであしらひ、仇「フン私かえどころか、最前から、猪口のやり所もねえやうに、はゞかりながらのおそれいるのと、下から出りやァおそろしい高え唄妓衆だの、はおりさんだのが聞いてあきれらァ。」米「オヤさうかエ。私やァ此方にちッと考へることが有つたから、きがつかなんだサァ戴かう。」トちよくをとる。仇吉はその手をおさへて仇「コレサ米八さんひとが杯をさすのに、考へることがあるからのまれねえなんぞと、ぶしつけながらよくそれで押勤の、なるほど違つたもんだ。」米「オヤ仇吉さん、呑まれねえとは云やァしねえヨ。」仇「さうよなう、氣がつかなんだのか、猶わりいの。いッそまだ呑まれねえといふはうが、罪がなからうヨ。」トいはれて米八も、さげすむやうなる口調にて、前髪を掻きながら、顏を皺めて笄を落し、米「よくいろ／＼なふしをつけるの、面倒な酒ならばよさうヨ。」トだんまりでしらぬかほなり。仇吉はすこし大きな聲にて、仇「コウ米八さん、おつな事をいふの、此方から下派に付いて、はゞかりだのなんのとくどくいふやうだが、腹さんざものをいはして、ふしをつけるもをかしいぢやァねえか、清元の新手ぢやァ有るめえし、お

つに節をつける人はたつた一人だよ。併しおめへは知るめえ、七場所の内おやァねえがの。」米「もう いいやァな、いいかげんにしねえな、おとなしく請けてしてやりやァ、何だなおもしろくもねえ、おめへにやァいふ事が澤山あるが、此方やァ勘辨して居てやるのだ。」ト聞いて元より仇吉も、胸に燃えのけんくわの序びらき、ひざを直して近くより、仇「オヤなんだえ、いふことが有るなら聞いてやらァな、サァ聞かうなんだえ。」米「マァしづかにして、おめへの心にきいてみな。」仇「こりやァわからねえぞ、いふことが有るといふから、聞かうといへば、またおめへのこゝろに聞いてみろと、わからねえの行きどまりだノ。サァなんだ云ひねえな。」米「聞かずと知れたわたしが亭主サ。」仇「ム、おめへの亭主がどうした、死んだら香奠でも上げようかえ。」米「さうよ、まんざら他人でもねえ中だから、香奠までにも氣がつくの。」仇「ア、仲間好みだからヨ。」トちやかしてゐる。米「仲間の好みもねえもんだ、あんまり人を踏みつけにしなさんなヨ、そしてマア他人にこけだと、後指をさされるのがお氣の毒だの。知つての通り私と丹さんの中は、たれ知らねえ者はねえから、いくらおめへがはねばたきをしたつても、丹さんはマァ私に見代へる鳥はねえと思つて居るヨ、お氣の毒だが。」トいはれてぐつと仇吉も、上る眼じりに反る脣、せき立つ胸をせかぬふり。仇「モウいいかえ、もつとしやべんねへな、あんまりいろ／＼なことをいつて、おめへの恥を多分かきな、自惚のねえものはねえといふが、おめへのや

うにさう行きどまつてゐりやア、何も氣のもめることも有るめえ。マア第一おいらなら、手前の夫を他にとられるといふも、あんまり智慧のねえはなしだ。しかしおめへ達の亭主を、他がなんとか思つてやつたら、有りがてえ事だと思つて居て、ちやうどよからうのに。」トすました顔にて「かはいさうにおめへもまだ洗うて見たき沖の水だの。」米「なるほど、おめへも餘程世話役だの。妙正さまの坊さんぢやア有るめえし、念をいれてお加持をするの。清元の節づけから、うぬぼれの御意見まで、澤山聽聞致しましたが、マアよくつもつてお見ヨ。私だつてもどうやら此處の土地では、すこしは他人も知つてくれて居るのに、丹次郎がことを彼所此所でいはれたり、笑はれたりしても、ちつとやそッとのことをやかましいと、心ですましてしらねえ顔をして居るのも、おめへなり私なり、斯ういふ活業してゐるからにやア、ちッとやそッとのちよい色ぐれゐは、あたりめへな譯だわネ。それだけれどおめへのやうに、ちよいとした事にも、何か突つかゝつて見たがつたり、出合ひせへすりやア、氣障を云つたりするもんだから、もう三度に一度は、此方も心持のわりいことだらけだらうぢやアねえか。何も私が通人がゝつたことをいふこともねえが、此の末ともに仇吉さん、止しておくれと無理はいはねえから、ずゐぶん穩便におたのみだヨ。」仇「ム、なるほど、粹とやら通人とやらいふ人は、おめへの事だらうヨナウ。よせと云ふのぢやアねえ、穩便にしてくれろとえ、おつな福清だの。」これはみなさま淨るり

にてござんじの、かし〳〵六三の福清をいふなり。「そしてマァ、一體なにを穩便にするのだえ、そりやァ私にいふのか、だれにいふのだえ、おめへどうした大層醉つたの、こゝは十二軒の小池だョ、櫻川の善孝でも來てもらはうか。」これはこの家の、櫻川由次郎が緣あれば善孝に來てもらはんといふなるべし「チット氣をたしかに持ちなョ、丹次郎だの亭主だのと、何だかおめへ氣でもふれて居るやうだぜ、逢橋の毘沙門天へ日參でもして、御利益をお願ひ申しな。」

これは此のころ逢橋なる、何がし公の御中屋敷に、勸請あらせられし毘沙門天の御事にて、靈驗あらたなることかくれなく、婦多川一同に尊信せるよし、依つてかくはいふなるべし。

仇「まだ若いに氣の毒な。」トあくまで手強く仇吉が、酒の機嫌で突きかゝる、言葉を聞いて米八も、ぐツとせき込む戀の仇、その仇吉の貌を見る、顔にもちるや紅楓葉の、靑かりしより思ひ染め、辛苦萬苦のその中に、見繼ぐ男をねとられしと、思ふ心は素人も、それしやもかはらぬ女の情、くやし涙のせぐりくる、無念をつゝむぞせつなけれ。

## 第二回

僞りと思ひながらも今更に、たがまことをか我はたのまん。これは仇なる男などの、深くも愛せずさすがに捨てもやらぬを、相たのみたる女の心をよみたるなるべし。それにはあらで米八が、常さへはち〳〵としたる眼を、またつりあげし見脈にて、額に靑く筋はだしても、さすが利發な女ゆゑ、ゥ

ントこたへて落ちついたものいひ、米「オヤさうかえ、わりいことをいつたッけの、仇さん堪忍してくんなよ。なる程婦多川の水のしたみ唄妓衆は、また格別ちがつたもんだなう。」ト、につこり笑ひ落ちつきはらつて居る。仇吉はごふはらさうに、仇「どうもよくさうすまして、他をさげすんでゐられるの。なんだか知らねえが、其のをんびんのわけを聞かせなヨウ、コレサ。」米「モウおめへも、餘程たけ〴〵しいなう、いいわな、其様なお前のやうに強情なら、證據を見せようから、それで何とでも云ひなヨ。」トいつた許りでだまつてゐる。此の時さすが仇吉も、女心にギックリと、思ひまはせば過ぎし頃、彼の中裏にて米八と、出合ひがしらの其の節に、丹次郎が方へ落したる、笄の事を氣がつきしが、またつく〴〵と考へるに、それを證據になせばとて、云ひ抜けならぬ事もなし、また丹次郎と私とはなゐほど戀情サと、云つたところがしれてわるいといふは、世話になつてゐる旦ばかり。是れもむづかしいことはなけれど、兎角丹次郎にほれた心のよわみから、あんまりたんと云ひつのりて、もしまた丹次郎に、さげすまれんもはづかしと、さすが歌妓のやさしさは、戀意を活業の女の情、思ひなやみて口ごもれば、また米八も心に一物、こゝで去頃拾ひ置きし笄を出して、まづ一番はへこましても、此所でばかりはおもしろからず、またこれぎりになりもせまじ、せけばせくほど戀の意地、仇吉ばかりをせいたりとて、男のこゝろをとりきめずば、益なきことと氣がつけば、また時節をはかりて手を

きらせん、まづそれまでは捨てておき、今までのごとくあやつりて、このゝち丹次郎をも、よく〳〵談じてしゆだんもあるべしと、心意の二人の手取、呼吸をはかる取組も、餘情惚れたが負けになる、色の土俵のせきと關、四十八手はまだなこと、新手をもつてお客をば、投げもからみもするなれど、たがひに惚れては素人にも、おとる唄妓の寶競べ、何れおとらぬ仇吉米八、女房氣どりの一文字に、無理な横綱横戀慕、戀の行事の團扇さへ、かたやにどうもあげかねし、作者が筆の勝負附、しばらくこゝにおつかれば、仇米雙方ともにしばし無言○折から階子をどん〳〵と、お熊は手すりにつかまつて、くま「米さん仇さん。」米「オヤおくまさん、たいそう長居をしたネヱ。」くま「長居はいいがね、マアどうしたのだネ、おめへさんがたア何を先刻から、ぐづ〳〵いつてゐるのだえ。由さんがあんな氣だから、米八さんと仇吉さんは、どうかしはしないかと苦勞にするから、私が何どうもしないか、二人ながら醉ひ倒れて、居なはいますと云つておいたがネ、おめへさんがたが云合の、喧嘩をおしだのといふと、直に人が噂をして、何かにつけて邪魔になるわネ、モウ能いかげんにして兩方が堪忍おしよ。」米「まことに有りがたう、ナアニわけもねへことだわね。」仇「おくまさんありがたう。」トいふうち下より女の聲、女「おくまさん〳〵、ちよつとお出でなはいまし。」くま「アイヨなんだえ。」女「アノちやうちんやの又さん處の、何がお出でなはいました。」くま「何がとは何のこつた、お歌さんがお

出でのか。」女「ハイ。」くま「もの覺えのわりいと言つちやアねえ。今まるゐからお茶でもあげなョ。」女「ハイ。」折からまたも下よりして、櫻川由次郎がこゑにて、由「オイ／＼仇吉さん、母御が迎へに來たョ。」くま「オヤ仇吉さんおつかアが來たとサ。」仇「オヤさうかえ、それぢやア行かう。」トいひながら、お熊と一所に下へおりて、あいさつそこ／＼に歸り行く。米八はしづかにおりて、雪隱へはひる。それより仇吉が歸りし跡へ、米八は出で來り、米「まことにモウ醉つて／＼、いいこゝろもちに寐てしまつたョ、お熊さん有りがたう。」おくまは笑ひながら、くま「仇さんも酒の上がわりいかねえ。」米「ナアニさうでもないのサ。」由「笑ひながら何を喧嘩をするのだ、打捨つて置きねえナ、高くとまつて。」よね八はにつこりわらひ、米「オヤ由さん、何ぞお聞きかえ堪忍おしョ、寐て居た氣だがねえ。」由「違へねえ、夢にでもけんくわをしたらう。」米「寐言が由さん耳へきこえたかエ、しかし私等ア、いとゞせへいけねえのに、高くとまつてお見な、猶いけやアしねえわネ。」由「能いよおれが肩をいれらアな。」米「オヤうれしいねえ。」トいふ折から、客を歸してお熊も米八が側へ居る。由「お歌さんは何しに來た。」くま「ナニ何でもないが、只ちよいと寄つたのサ。」由「米さんの處へ、相模屋のはなししたかなう。」米「ア、福田屋中島屋、丸本外四間のも聞きましたョ。」これはご存じの家の事、なんのはなしかそれは作者もしらず。由「さうか、なんだか面倒だなう。」米「ア、ねえ、オヤまたわたいは、此處へすわりこんで居る氣ださうだ、ドレ行かう。」ト立ち上る。由「また急いで歸つて

亭主をかはいがるヨ。」米「オヤ〳〵嘘ばつかり、何そんなものが有るものかねえ、お熊さん。」ト顔を見合はせにつこりわらひ、ちよいと手がるくつまをとり、門のわきから勝手へもあいきやうをいふ。米「どなたもお使ひたて申しました。」此「がうぎと時代なせりふだの。」米「ア、お屋敷ものだからネ。ハイ左様なら。」ト歸りゆく。吹きすさむ風ならうらみそ花の春紅葉のこる秋あらばこそト、古人の名歌妙なるかな、月に村雲花に風、思ひ思うた其の中を、水さすあれば慾徳に、ツイ引かさるゝ事もあり、また付人のあふりから、元木を捨つる心にも、あらで浮薄な色事も、終にもつれて恩と義理、わすれて横に行くも有り、眞そこほれた心から、たがひに深くうたがひすぎて、わづかな口舌が元となり、死ね死なうとの約束を、今日は見かへて増す花の、盛りを見するつらにくさに、仇敵の思ひをする、中もはじめに結んだる、誠の縁はきれやらで、互に別れて月と日の、立つにしたがひ男女とも、またうとまるゝ後の色、あるときは有りのすさみにつらかりしなくてぞ今は人の戀しきと、過ぎたることを兩方が、思ひ出して立ち歸る、俗にいはゆる腐れ縁、はなれぬ縁とは親兄弟も、當人も知らぬ再會あれば、たとひせかれて遠くなり、亦は不義なる行ひの、ありて他人の方へゆくとも、みなこれ其の身の心より、出づるにあらず何事も、滿つればかくる世のならひ、逢うて別れて別れて逢うて、中たゆるとも縁あれば、またちぎり合ふ時ありて、定めがたきが戀の道、たゞ何事もあらそはぬ、風

の柳のしなやかに、愛想づかしを言ひかけたらば、

僞りとおもはでたれもちぎりけめかはるならひの世こそつらけれ

と、無常を感じて爭はず、他も恨まず月日がたてば、捨てたを悔み捨てられたが、身の仕合となるもあり、とは云ふものの萬の事、不足をおもうて元をわすれ、不義の道へ入る時は、一旦榮えを見するとも、末は後悔うたがひなし、たとひ浮氣な活業にも、およばぬ慾の願ひから、他にたばかられぬ用心して、只其の時のことを思ひ、親兄弟の強慾に、ひかれて不實をする事なかれと、いらざる筆のついでにしるして、姫との達に意見をするも、作者が癖の老婆心、嗚呼われながら老い込みなりけり。それはさておきこゝにまた、所はいづれかわすれしかど、疊や横町か稻荷横町の邊になん、日くれてやう〳〵人顏のわかる頃、出會ひがしらの男とけいしや「オヤ。」トたがひに立ちどまる、これ仇吉と丹次郎。仇「マアちよつと、爰へ寄つておくれなねえ、そんなにおまへのやうに、内儀さんをこはがることもねえ。」丹「何ささうぢやァねえが、今内へおれが客をまたして來たからヨ。」作者曰く米八は丹次郎が宅にはゐず、兩田屋にゐれどもをり〳〵行つて居れば、内儀のやうにいふとしるべし。仇「アレサ、マアそれだからちよつとだわネ。」ト、ある家のしやうじをそつと明けて、仇「増吉さん。」宅より女のこゑにて、増「オイだれだ。」仇「おれだヨおめへひとりか。」増「ム、おれ一人だ、誰も居ねえ這入りねえな。」仇「サアおはひりヨ。」トいへど、丹次郎は默つて居る。家内

より出て來るは年齡二十六七、このごろまで出て居たといふやうす、眉毛はおとしたれど、兎角氣儘にしてくらすがいいといふ鹽梅、きれいに齒をはがして、櫻川善孝が所で取次ぐ、丁子車といふ齒磨を、やうじ箱へ入れながら表を見る。今日髮を洗つたと見え、ちよいと結んだのが後へひつくり歸り根を新藁で結び、縞ちりめんの棒じまの廣袖、博多の男帶をしだらもなく、ぐる／＼と巻き、仇吉とは極心やすき樣子なり。丹次郎を見て、增「オヤなんだナ、もしこつちへお這入んなせえな。」仇「サアおあがり。」トずいと奥へはひる、丹次郎もつゞいて這入る。仇「オヤくらいあんどんだ。」ト火鉢の側へすわる、丹次郎立つてゐる。仇「丹さんおすわりな、なんだねえ。」增「モシおすわんないましな、しかし仇さん兎も角も二階へ行きねえ、ひよつとまたうかれ仲間が押しこむといけねえから。」仇「なアにさうしちやアゐねえとヨ、強情でいけねえやアな。」增「マアいいやアな、おめへがそんなことを言つてゐるからだ。サア私と一所にお出でなせえヨ、アノ子にかまはずサ。」仇吉はたばこをのんでよこをむいて居る。增吉は先に立ち、丹次郎が手を取つて、二階へ行きながら下を見て、增「仇の字我儘をするの。」ト笑ひながらはしごを上る。色の世界のならひとて、初めて逢ひし增吉が、男をこなす取りまはし、垢ぬけしたるそれしやの風情。それ婦多川の水たるや、清むも濁るも日に幾度、色の出汐に乗り込むあれば、また引汐の思案有り、にじゐ程なほ深くなる、さてさま／＼の水加減は、生洲の魚をやしなふとやい

はん。

梅暦餘興 春色辰巳園卷之一 終

梅暦餘興 春色辰巳園 巻之二

江戸 狂訓亭主人著

## 第三回

京風「へみつの車にのりの道、夕顔の宿の破車、あら恥かしや我が姿、梓の弓のうらはずに、あらはれ出でし俤は、むかしわすれぬとりなりを、アレあれを見よ蝶は菜種、なたねは蝶のつがひ離れぬ妹背の中かや、見るに嫉まし亦うらやまし、我は磯邊の友なし千鳥。」仇吉「オヤありやァ何所だの、いい聲だヨ。」増吉「ありやァ裏の家へ、逗留に來てゐる娘だヨ、そりやアさうとおめへ二階へ行かねへかナ。」仇「ア、。」と立ちかゝりて、何か増吉が耳にさゝやく。増「ウ、しようち〳〵、さうか米八さんのかさうか。おいらァはじめて見たヨ、いい男だの。」ト仇吉が脊中を一ッたゝく。仇「いいヨたんと遊びなヨ、そりやァいいがそのわけだからの。」増「いいよ、今におつかァが歸ると、おめへの宅まででさういつてやるからいいやァな、早く二かいへ行きねへヨ。」仇「おたのみだヨ。」といひながら二か

いへあがり、仇「丹さん。」丹「なんだ。」仇「ナゼマアそんなにふさいでゐるのだえ。」ト、側へ摺り寄つて、丹次郎が手をとらへ、仇「ほかおやアないがネ、おまへにさう言つて置かなくつちやアならねえことが在るから、悪どめをしたんだァネ、毎度そんなに無理やアいはないわね。」丹「それだから、こゝの宅へ来たからいいぢやアねえか、それがわりいと云つたか。」仇「わりいといやアしねえが、氣のすまねえ顔をしてゐるからサ。」丹「よくいろ／＼なことをいふぜ、そして、マアなにをいふことがあるのだ。」仇「なァに外のこつちやアないがネ、私が日ごろいふことだが、それに亦おまへも聞いて知つてお出でだらうが、ことによれば米八さんには勝たれめえけれど、少しは意氣地らしいことも、いはなければならねえ事が有るから、それをおまへに極めておいて、私がなんぼ離れねえ心で、達入を云つた所が、おまへの料簡がおぼつかねえと、私はモウ死んでも生きてもゐられねえほど、外聞のわりい身のうへになるから、どうぞ丹さん私のやうなはかないもんでも、わりいものにみこまれたとあきらめて、はなれる心になつておくれでないヨ。エ、エ、丹さん。」ト男の顔を見て、涙をホロリと膝のうへ、思ひこんではなか／＼に、案じ過して胸せまる、女心ぞ哀れなり。丹「なんだ、それをそんなにたいそうらしくいふのか、死ぬの生きるのといふほどなこともあるめえ。」仇「オヤそれぢやア丹さん、私がこんなに氣をもむのを、おまへは當座のなぐさみで、今にも風のもやうによつて、直

にも別れる料簡かえ。」丹「ナニさうぢやァねえが、あんまりおめへが氣をもむからヨ。」仇「いつそ氣をもんで、死にでもしたらよからうと思ふヨ。」丹「なんのつまらねえ、そりやァいいが、おらァこゝの宅は知らねえ内だが、かうしてゐてもいいか。」仇「よくなくッて、お前をこゝへいれるものかネおまへは知らねえはずサ、今ぢやァモウ只の宅だものを、お案じでないヨ。おまへの逢つてわりい人は來やァしないヨ。それよりか今のわけだから、急度こゝろを定めておくれヨ。」丹「そんなにおれを極めたといつて、おめへの身をかんけへて見ねえ、あんまり極め過ぎたら困るだらうぜ。」仇「オヤなぜえ、をかしい事をお言ひだねえ。」丹「なぜといつて、先だつてあらまし聞いたおめへの身のうへたとひどういふわけにしても、おれが一生女房に持たうなんぞといふ事は、ならねえ義理と知りながら、ついしたことから日にまして、實を盡してくれるから、自由になるなら米八が、外に浮薄なことでもあつたら、それを節にと思つて見たり、亦おめへの身をかんがへれば、なか／＼さうした譯にもならず、よしやおめへはさうしても、させてはすまぬ浮世のならひ、儘にならぬといふうちにも、始めからして今日か翌日、切れてしまふことが、たがひに知れた二人が中とは、神々さんもお知りなさるめえと、宅で一人で思ひ出して、泣いて居る時があるよ。」ト、聞いてしばらく仇吉は、物さへいはずしやくり上げ、さしこむ癪に齒を喰ひしばり、こらへかねたる女の情、思はずむせるなみだ聲、

仇「私がいはうと思ふことを、おまへに今さらいはれては、いふもをかしい譯だけれど、正直私も時々は、思案にあぐむおもひすごし、今は斯うして中よくしても、始終そはれる譯にもならず、どうぞすべよく別れたら、此の物おもひはあるまいかとおもつて見たり、いや〳〵、どうでうつくしく別れると、いふは出來ないわたしが胸、腹でも立つて別れたら、いつそあきらめにもならうかと、思ふ矢さきへ似た人の、聲がしてさへ思ひ出す、心がたえねえ今日このごろ、兄弟分とか親分とか、なつたところがなほのこと、じれつたからうと來年の、ことか今年か知らないが、今ッから後のことまでかんがへると、しみ〴〵死にたくなるけれども、よくもわるくもおつかァに、育てられたる恩はあり、手まへ勝手をしたならば、おまへのためにわるからうしと、ほんに何かをかんがへると、かなしくつてならないヨ。」ト、取りすがりたる仇吉が、實意を聞けば丹次郎も、有るにあられぬ物思ひ、心のそこには米八も、またなか〳〵に捨てられずと、途方にくれし男泣き、しばらく二人はさしうつむき、溜息をつくばかりなり。折から下より增吉が、登る階子の中段にて、增「仇さん、サア煮花が出來たヨ。」トいひながら、しづかに上り二人を見て、「オヤどうしたんだえ、其樣にふさいでからに、兩方がだんまりかえ。」トいひながら丹次郎にむかひ「モジエ、初にお目に懸つて、まだおなじみもねえわたいが、ぶしつけらしいわけだけれど、仇吉さんも一方ならねえ苦勞な樣子、くはしく譯はしらないけれど、

おまへも米八さんといふものが、有ると知りつゝ斯ういふわけになつて見れば、仇さんはいふにおよばず、だれしも覺えのある事だが、ほんに命も捨てる氣に、なるのが意地づく色の道、たま〳〵斯うして逢ふときには、恨みつらみは餘所にして、たがひに嬉しい顔をして、たのしむがいいぢやァねえかえ。そりやァ前後いろ〳〵と、かんがへだてをして見たり、取越し苦勞をする日には、氣色を惡くするばかりで、まことにつまらねえわけだわね。斯ういふわたしも今までに、小春紙治のお綱ぢやァねえが、面白いことはでなこと、譯のありたけ氣をもんでも、緣といふ字の出來不出來で、望みの通りになりはしないが、せめて結んで居る中は、その日を和合く暮すのが、第一のことだと思ふョ。餘り何角を案じ過して、氣をいためるはそんだわネ。オヤ心なくお邪魔をした、仇さんチツト浮きねエな、そんなにふたりが涙ぐんで、ふさいで居たとてはじまらねえョ。いいころお客の機嫌を取るに、つらいくやしい目をするも、陰で莞爾する事が、有るのでつゞく唄妓の命、氣をはつきりと持ちねエヨ。」ト、さすがその身も苦勞人、色の諸分をくみわけて、意見も手輕く口輕に、いひつゝ下りて行く增吉、跡には二人が顔見合はせ、仇「まことに增吉さんは嬉しいョ。」丹「ほんに深切な人だなう。イヤそれはさうと、おらァ斯うしちやァゐられねえ。」ト、立つを引きとめ仇吉は、仇「アレサ丹さん、マァお待ちな、そんなにうろたへて歸らずともいいわネ、まだはなしがあるから、もうちつとお出で

ヨ。」丹「それでも、宅へ客を待たしておいたからヨ。」仇「うそをおつきな、何お客が有るものか、米八さんが待つばかりだヨ。」丹「なんの珍らしくもねえ、米八にかまふものか。」仇「ム、ウさましてたんとおあがりな。」丹「コウおめへも素人じみたよしねえな。その甚助は此方もあるが、そこは我慢でおいらァいはねえ。」仇「オヤ私はいはれるおぼえはないよ、有るならおいひサァ聞かう、何を私がやきもちを、やかれるやうな仕打をしたえ。」丹「また直にじれこむヨ、かんしやくをおこすと身の毒だア。」仇「そのかんしやくもだがわさだえ、かはいさうだとお思ひな。」丹「おもふどころかこの頃は、夢もおめへの事ばかりだ。」仇「アレサ、ちやかしておくれでない、他の氣も知らねえでまことに憎いヨ。」丹「にくいばかりは地金だらう。」トいへばたちまち氣しきをかへ、しがみついて身をふるはし、仇「丹さん、そりやァあんまりだヨ。外に男もねえ様に、他人に笑はれそしられても、また米八さんににくまれても、おまへ一人に情をかけて、もらへばすむとあきらめて、今まで他には上手もいはず、いつこく者でとほしたのが、世間を兼ねる氣になつて、何だかかたみが狭いやうに、これほどつくす私が實が、おまへには知れないのかえ、エ、くやしい。」ト喰ひつく。丹「アイタ、、、、、これさ／＼堪忍しねえナ、おへねえ氣違ひだァ。」仇「ア、私は氣違ひサ、嫌がるものを無理やりに、色にすると言ふ料簡は、マアほん氣なざたぢやァないのさ、サア亂心を直しておくれ、サア／＼。」ト丹次郎をこづきまはす。丹「もう／＼俺がわるい、

堪忍しな。」トわらふ。　仇「ナニをかしいものか、それよりやァ今のことを急度だョ。」　米「きつとでなくッてサ、急度でなかァどうする。」　仇「エヽどうするえ、斯うするわ。」　米「エ、あぶねえ、かんざしで目を突くわな。」トいふをりしも、増吉が聲にて、「仇さん、母人をおめへの宅へやつたから、ゆつくりと遊びなよ。」二かいにてはすこし間をおいてあだ吉がこゑ、　仇「アイヨありがたう。」

## 第四回

八軒かぞへしその中に、こゝは何屋か知らねども、化粧部屋の其の風情、立聞すれば正に是れ、何れも仇なる五六人、其の品々の座住居は、六歌仙めく唄妓の氣儘、△□○掛合の心にてよみ給ふべし。

□「てえげえにしてはやく行きねえ、又ばゝァがどなるぜえ。」　△「それだつて、なんだか著衣の著臙梅がわるくッて、そしてなんだかじれつたくッて〳〵。」　□「こまるだゝつ子だぜ、すッかり脱いでしまつて、ほんたうに著直しねえなハヽヽヽ。」　○「悪い癖だぜ、いつでも〳〵出る先へ立つとじれてるぜ、おいらァきつい嫌へヨ、マア第一えんぎがわりいやァな、ドレ〳〵をばさんが起きて直してやらう、やれ〳〵せわのやけるあまッちやうだぞ。」　○○「そりやアいいが、おいらの今日の髪は、たいそう根が上つたやうだの。」　○□「さうよなう、ドレさうでもねえが、ム、ちつと上つた、そしてつとがちつとつまつたからョ、わるかァねえ。」　□「よくも有るめえ、イヨお嬢さんやつとお氣がすんだの、リ

アサアはやく行つて澤山よくばんねえ。」〇「それどうだ、どうもおいらでなくッちやアいけめえが。」わらひながら△「ハイ〳〵有り難うございます、彼方此方のお情でたすかります。」トいひながらぐつとつまをとつて、ちよこ〳〵とかけだしゆく。〇「いよう引ッ、テレッ、テレ。」〇「またはじまつたヨ、さう〳〵しい。そりやアいいが、おいらアわすれたことをしたぜ。」〇「なによう。」〇「妙正さまのおみくじを、どつかわすれたヨ。オヤオヤじれつてえなう。」□「またか〳〵、せつかくさう〳〵しいのを出して遣つたら、直に跡へかはりが出來たヨ、なう寅次さん。」〇「さうよ〳〵、どうも子どもはうるさくつてならねえぜ。おみくじが見えねえの、ヤレ著物がすべつたのと。」〇「オイ〳〵琴次々々、お言葉の鼠だが、著ものがすべつたとはをかしいネ。」「「さうかね、またお言葉の狸だが。」△「イヤもうさう〳〵しいぞ、おことばの鼠だの狸だのと、けだ物やのやうだなう。」〇「何サ肥後の熊本だものウ、衆人そのはずだアな。人は勿體ねえ物をなくしたといつて、氣をもんで居るものを、あのくれゑなもんだア。」〇「太の字も餘程愚癡ッぽくなつたの、老婦やアどうもやかましいぜ、なくなッたら又取りにやんねえな、妙正さまが京都へでも行つてしまやアしめえし、たかが遠くなつて多賀町だアな。」□「それともしれねえぜ、今年やア中登りださうだぜ。」〇「又々同じやうに口を出すヨ。それでもの、おみくじやア見ねえでもいいが、今夜のむじんの吉凶だアな。」トいはれてみな〳〵こゝろづき、てん〴〵に居なほり「オヤ〳〵さうだッけ、忘れきッてゐた。

おいらも一ッ見てもらはう。」「それ見たがいい、もう一ぺん取りにやらうか、いや〳〵、しかしもう妙正さまはよさう、緣起がわりい、森羅殿ばしへやらう。」「それよりやァ和歌町へやんねえなさ」「一さうよなう、おらァ無盡がとれると、マァ何はともあれ、東屋の方は少とも入れて置かねえと、亦面倒だわ。」「勘定のいいこと計り云つてゐるぜ。大層とれるから左樣だらうヨ。」「マァおよいとさう言つたものヨ、取つたらおごらうヨなう。」「おてえ〳〵ごまではございません。」「なぞとやつたも、氣恥かしいちやァねえが、マァめの字にしてえの。」「なんぞ見せにやんねえな、老父が來ねえと不自由だの。」「めの字といへば、梅吉さんの處へ、さつぱり尋ねてやらねえの。」「さうふどうしたんだの。」「あんまり吞み過ぎるからだァな。」「吞みすぎて煩やァ、おいらたちもお仲間だが、吞むばかりでもあるめえよ、しかし酒が達者になつたのは、米八さんだなう。」「さうよ、おいらァよつぽど吞む氣だが、どうして叶はねえわ。」「吞んでもまたあのくれえ、とほつた子はねえぜなう。」「寶正にあの子なんぞが、氣のとほつたといふのだらうヨ。」「そりやァさうと、仇の字のわけはどうしたらう。」「さうヨ、よく米の字がだまつてゐるの。」「ナニ此間小池の二階で、やかましくいつたさうだよ。」「なんぼ米八さんがあゝいふ氣でも、少とは言つたらうヨ。」「それだけれど、どうも是ればつかりやァ、ふせぎやうがねえなう。」「仇の字だつても、また大屏にした

やア外聞がわりいから、達入とか横引とか、やらかさねえぢやァなるめえよ。」○「さうかの、とんだものをやらかすの、おいらァキウ引と一杯やらかしてえの。」トいふ時しも未時の鐘ボウン引〳〵。そも寄り合ひし此の模樣、さも氣さんじなやうなれど、その身になつて見るときは、辛氣心苦の會所にて、なか〳〵たやすきくらしにあらず、逢ふさ離るさの物おもひ、義理のしがらみ身の衣裳、春の初日の出立から、蝶飛ぶころの待ちかねて、著替は文庫に落著かず、袷小袖に夏衣裳、やるせなきまで光艷かざる、中に一人はぢみられず、負けぬ氣性は癖となり、亦借金となりゆきて、結ぶ年季に切れる客、せかれる間夫をやう〳〵に、離れぬ末は身のつまり、金のなる木もあるやうに、迷ひてわからぬ慾の道、ゆけども〳〵本街道へ、出るにでられぬなんぎとなるべし。凡そ世に住む娘御達、分限に過ぎたる美服を好まず、其のほど〳〵を愼みて、恩と情をこゝろにうけよ。及ばぬ願ひに上を見て、不實の人となることなかれ。よしやたま〳〵不人情にて、一旦榮ゆる者ありとも、永き月日のその中には、思ひの外に零落して、後悔することうたがひなし。わけて美人はわが色香に、われとほこりて慢心し、彼の山鳥のわが姿に、ほれて水死をするに等しく、日毎にうつす鏡臺は、をろの鏡のおろかなる、心をてらしてうはきをつゝしみ、不貞の女となるまじと、思ひてさへも親兄弟の、爲に苦しみ不義不實と、いはれる時節もあるものなれば、返す〳〵も娘御達の、身にはつゞれを著たまふとも、

心に錦のはれ小袖、操の衣の纔々は、肩身も廣しと思ひ定めて、正しからざる行ひは、親御が慈ゆゑ
ゆゑすとも、かならず迷ひて道ならぬ、方へは足をいれたまふなと、悪まれ口に娘たちへ、意見はい
つも作者が癖、狂訓亭が老婆心、なんと子供衆合點か〳〵。
其の名噂も與志町に、さゝやかなりし假住居、内にきこゆる三味線は、絶えて久しき流行の、昔を
こゝに宮薗節。
へ梅川も、せきくる涙チン、今こなさんのそのやうな、憂身は誰がさすぞいな。あだな一座の付合
に、思はれ染めて思ひそめ、いとし痞へにかあいが癪、逢ひたいが色、見たいが病ひ、戀しい顔が
懲りより、按摩さんより灸より、氣合が能くなりやわるうなる。お袋さんの御機嫌が、そこねて見ゝ
ぬあすの日を、文で繰り出し口舌で留め、
米八「今日はマア、こゝまでにして置きませう、あした又逢橋の毘沙門さまへ参るから、丁度今時分
來ますヨ、どうぞその時分お宅だといいねえ。」宮その喜代八「ほんに明日は寅の日だの、浅草へ行くやくそ
くが有るけれど、おめへの來るまでまたうヨ。」米「ナヤさうかえ嬉しいねえ。」喜「うれしいほどのこ
ともあるめえが、捨たりきつた宮薗ぶしを、ならつてくれるがうれしさに、だれにでもをしへる氣だ
が、どうも請取の能い人はすけねえにはこまる、おめへはどうも感心だヨ。」米「オヤどうせう、一番

私が覺えがわるいから、お氣のどくでなりませんわ。」喜「ナニ〳〵、どうしておれがこの歳になるまで、お前のやうな器用な弟子は、とつたことはねえ。」トいふ折からげいしや二三人、おもてからこゑをかける。〇口々「米さん引米八さん。」米「オヤ〳〵どうして知れたエ。」ミナ〳〵「たの字に聞いたが、今ッからチヨイと覗くつもりだわ、おめへも行きなな。」米「オヤさうか有りがたう。」ト、喜代八にいとまごひして立ち出でる。

梅暦餘興　春色辰巳園卷之二　終

# 梅暦餘興 春色辰巳園 卷之三

江戸 狂訓亭主人 著

## 第五回

契情も賤女も元は乙女にて、生所が別に有るにはあらねど、貧しき活業親の爲、又は其の身の幸不幸で、娘盛りの七變化、種々さま〴〵の世の中に、多くは親の不所存と、慾と我が子の出世を思ひ、昨日はそしりし他人の噂、今日は我が身の不義不實、生質いたる溫厚しき、娘を末は札付の、婬婦にそだてても、はぢをしらねば氣もつかず、薄情ものの餌となり、そゝのかされて逃げ隱れ、なぐさみ物になる類、皆これ因果の母子にて、日々非道に導かれ、人間でなしとなり行くのみかは、果ては不實の報いにて、はじめ思ひし立身の、半途にいたりて天の誅め、男のばちにて一生涯、誠の出世はなることとならず、萬年新造といはれたる、花の盛りも永くは保たず。それ人たるもの、始終を守るはかたけれど、そも〳〵女と生まれては、五障三從の罪深ければ、過ぎたることを折節は、思ひ出して

身のうへを、よく／＼つゝしみ花ちりて、見るかげあらぬ時になりても、心の花のちらざるやうに、用心するこそよかるべし。こゝに一首の古歌をしるして、後悔なからんことを教ふ。

　ながらへばまた此の頃やしのばれんうしと見し世ぞいまは戀しき

足ることを知らざる時は、只上ばかり見る氣になりて、羨ましきことたえる間なし。我が子に錦を着せんとて、穢れし行ひさせるたぐひは、大畧母親の所爲なりけり。それはさておき仇吉が、素性をここにたづぬれば、元は朝夷の切通し、小島町の裏借家に、いとおとなしく生ひ立ちしが、幼きときより音曲に器用にて、こゝや彼所の座敷にまねかれ、賞めらるゝのが嬉しさに、今まで一度見も知らぬ、方へも遠慮することなく、親は元來不自由なれば、娘が他に愛せられて、髷結切よりもらひ初め、はや十四五才にいたりては、小貳朱包の肴代、酒賣る二階縁日參りと、さそはるゝ儘おごらせる、心の底意いやしくも、母親お八重が慾心から、若者どもがはりに來るを、徳を得たりと悅びて、色氣のあらぬ仇吉が、もそつと男をたらしたらば、あの息子は金を出すだらうのに、どうかいい鳥がかゝりさうなることもやと、朝夕氣ばかりもみ居たりしが、娘は親に似もやらず、袖褄ひく人多けれど、たえてこれをば見かへらず、あぢなことから親類と、なりにし人の情にて、久しく色氣白歯の生娘、いやみなしにて有りけるものが、年をかぞへて今ははや、流れてよどむ婦多川に、數へられたる苦勞人、

今宵もたしか丹次郎と、口舌しらけて氣のすまぬ、別れのときに增吉と、愚癡をならべし門口へ、母の迎へに爲方なく、不承々々に立ちあがり、增吉へいとまを告げ、二足三足立ち出でしが、 丹「ア、なんだかおもしろくもねえ、母人おめへ先へ歸んねえな、私は跡から行くから。」ト立ち止る。 母「なんだな此の子は、をかしなことをいふなう、おれがわざ／＼迎へに來たのに、先へ歸れの何のと、じくねおと早く歩行きねえな。」 仇「いやだョ、私ァまだ用があるから、跡から歸るョ。」 母「おめへも餘程醉つてゐるぢあァねえか、おれと一處に歩行びなョ。」 仇「エ、モウじれつてえ、何で其樣に急ぐのだな。」 母「ナニじれつてえ、此方がじれつてえわ。此間は旦那も足が遠いぢやァねえか、勘定しらずめエ。そりやァはや、外に旦那を見付けることは苦にもならねえが、一ト月でも半月でも、座敷ばかりで居られるものか、親父の方の講中の、預り金も晦日にやァ揃へて、同行へ渡さねえけりやァならねえから、二兩はぜひ拵へてくれろと、云つてよこすし、お八十(これはたしか仇吉が妹にて、緣付いてゐるものとしるべし。)が方の壹兩も、あれが內證で、都合してよこしたのだから、早くけへさねえとおれが口が聞けねえ。」 仇「そんなに今ならべ立てねえでもいいやァな。」 母「イヽニヤ言はねえと、手めへはいい氣になつてゐるからョ。そしてマア此間、旦那の置いて行つた壹兩貳歩はどうした、其時から何も貰やァしねえぢやァねえか、それに叔父さんも二歩くれたぢやァねえか。」 仇「よくいろ／＼な詮議をするなう、よく考へ

てお見な、叔父さんの金が、去頃の樣にもらつてばかり居られるものか。今ぢやァ斯うして居るから樂だらうと思つて、戯談にもこのごろは、工面がよからう何ぞといふから、此間も帶を一ト筋こせへてやつたら、どんなに嬉しがつたらう、その勘定に、二朱と三百文たしてやつたから、二歩もらつたと云つて、それが何時まであるものかな。」母「エ、べらぼうめえ、それぢやァ釣を取られたのだァ。ナニ今そんなことをせずともいいこと、きいたふうな、斯うして居るうち、末のしがくでもしようとはしねえで、取られる所許りこしらへるもいい働きだァ。」仇「どうしたといつていいぢァねえか。此樣な活業をさせながら、きちやうめんな事が出來るものかな。やかましい。」母「ナニやかましいものか、宅へ行つて手めへの料簡もよく聞いて、親父にしつかりと相談しねえけりやァならねえ。」（仇吉は酒のうへといひしやくにさはりて、）仇「なんだおつかァ、親父に左樣いふと。何とでもいひねえ、今までおもひれ氣をもまして、だん〳〵歳を取つて少しぐれるなことを、何もをかしく云はずといいぢやァねえかな。今度叔母さんか叔父さんが來ると、わけをはなして、それでもおれがわりいといふなら、死んでしまはァ。」母「ふざけたことをいはねえがいい、大勢の兄弟の中で、手めへが一番おれに苦勞をさせて、成長つたところで息をつかずに、手めへの自由をされたら、いいつらの皮だ。」仇「何を私が自由をしたエ。」母「エヽやかましい、いちいち親にさからはずと、早く歸るがいいわな。」仇「なんでそんなに急ぐの

だナ。」丑「急ぎやァしねえが、はやく歩行きなナ。」仇「おれが宅へおれが歸るに、はやくつてもおそくつてもいいぢやァねえか。」ト くだらぬことをいひながら、親子げんくわをなしながら、やう／＼とわが家へかへり、仇「ア、モウ／＼、まことにやかましいといつちやねえ。」丑「オヤやかましいと、コレおいらはさつきから、途なかだからいいかげんに聞いて居たが、あんまりしやれるなヨ。」仇「しやれやアしねえが、口やかましくてならねえヨ。」丑「ナヤこの子は、大きな聲をしなさんな、外聞がわりいヨ、これでも家内に居ては、しよ／＼氣がもめてなりやァしねえわナ。」仇「氣をもんでもらはねえでもいいのに、お氣の毒だの。」丑「なんだあんまりふざけるな、いいかと思つて。」仇「ナヤねつからいいと思ふことはねえの、まことに私こそ氣がもめて／＼エ、くやしい。」ト茶椀をなげる、裏口の障子へあたつてチヤランと引。丑「コレそのなげうちはだれにするのだ、サアおれを投げるともぶつともしろ。日ましにふざけて親を馬鹿にしやアがる。」ト しだいにつのるおや子のたかごゑ、近所の人きたる。春吉「ナヤなんだえ仇さん、モシヤアおつかア堪忍おしヨ。」ト いふに外の三人なかへはひりて、仇吉は○春吉お秋姉妹にてげいしや、はる吉の内へつれてゆく。その氣にてよみ給ふべし。春「あださん、おまへマア今夜はたいそう醉つたの。」仇「何ネ、お前の前だが、此の頃おやァまことに口やかましくつてならねえから、うるさくつてうるさくつて。」春「アレサ、そんなにいひなさんな、どうで歳をとると愚痴になるから、氣休めをいつて置くがいいわな。」仇「それでもくやしくなるからツイ。」春「アレサ、お前はどうもまけねえ氣だ

からならねえ。」仇「あんまりうるせえから、いめえましいといつちやァねえ。」春「それはさうと丹印はどうしたのだ、何でもおいらがこゝで聞いて居たら、一人で小言を云つて出かけたつけ。」仇「ナニ全體それから起つたことだわナ。」春「母御がそれをやかましくいふのか。」仇「ナニあれでもおいらの母人は、時々いろ／＼な氣になつてならねえわな。」春「さうか、そして米の字の方は、中でも直つたといふわけか。」仇「ナニ／＼大違ひ、まだ／＼此間十二軒の後を、おもひれ云はねえけりやァならねえ。」春「さうかなる程、それもだん／＼わけがあるだらうけれど、元はといへば米八さんが、大そう苦勞をしたのださうだから。」トいふ處へ妹お秋、茶をこしらへて持ち來る。仇「オヤお秋さん有り難う、誠に醉つて苦しいから何より嬉しい。」茶わんをとりてお秋が髪を見て、仇「オヤ、いつもより風がよくツて、髷がひくくつていいなウ。だれだおいらも今度はさういつてもらはう。」秋「今、三孝さんが、娘大幸記といふ本を貸しておくれだが、唄妓の一代記ださうだが、誠に評判がいいとサ。狂訓亭といふ作者は、野暮な人ださうだけれど、娘と唄妓の事は、ひどく穴を智畧つて書くとサ。」春「何だな此の子は、つまらねえことをいふヨ、仇さんはしやれ本を直にやらかして、樂しんだり苦しんだりして居るのに、草雙紙のはなしなんぞは、耳へはひるものか。」仇「ほんに心がらとはいひながら、一人で泣いて居る時が有るが、よくこれでサ座敷が勤まると思ふヨ。」春「さうよなう、しかしおいらは色をしたことが

ねえから、氣ももめることはねえが、色が出來たらさぞたのしみにもしたり、腹もたつたであらうだらうヨノ。」仇「ムウ、色を木進とは新しい言葉だの。延津賀さんがおめへのことを、くはしく書いて篇造さんが手交つて、三冊ばかりになつてゐるとヨ、あんまり立派な口もきけめえ。」米「イヤさうか、今さら氣恥かしいの。」仇「氣恥かしいといへば、この間おいらも、米さんと喧嘩をしたのを思ふと、今さら氣恥かし。」米「さうか、おつかァとけんくわをしたり、米の字と物言ひをしたり、それも不殘丹さんのことだからしかたがねえ。」仇「これほど氣をもむのを、向うでも察してくれねえちやア、おいらの立處がねえ。」春「いいのサ、それもみんなかはいい男のことだからしかたがねえ。」仇「それは知れたことヨ。」米「エ、悔しい、うけさせられた。」秋「仇さん、モウ夜が更けたから、私と一緒にお寢な。」

仇「アヽさうしようヨ。」トいふ折から八幡の八の鐘ボヲン引／＼。

## 第六回

いつも立ち寄る湯歸りの、姿も粹な米八が、垢拔したる糠袋、口にくはへて抱へたる、浴衣も京藍二重染、八重に咲いたる丹次郎が、花の色香に心せく、門に落ちたる反古さへも、もしやと拾ひうち開けば、

薄くこそ亂れて咲ける藤の花久しき色はあらじとぞ思ふ

米「ア、いやな歌だ、ふけえきな。」トいひながら、丹次郎が宅の障子をあける。丹「オヤ、今日はがうぎとはやく起きたの、湯は込んでゐたか。」米「イヽエよく透いてゐるヨ、私アこゝで顔をして行くから、其のうちおまへも湯へお出でな、今丁度仇の字が這入つた所だ。」丹「ナンノつまらねえ、ナニあいつらに用が有るものか。」米「あんまり用のねえことも有るめえ、増吉さん所の二階も、わる長かつたねえ。」丹「コウ米八、おめへは此の頃ア、まことに愚癡になつたぜ、八軒の中に唯一人のさばけもんだと、評判される身分ぢやアねえか、そりやア他人知らねえ姤心だから、かまやアしねえが、思ひもつかねえことをいはれると、おいらも腹は立たねえが氣の毒だ。」米「氣の毒なら仇の字のわけを、止めておくれとはいふめえから、少し遠慮にしておくれな。」丹「コウなんぞといふと、仇吉々々といふが、おらア何もおめへにいはれる程の事は。」米「ないといふのかえ、それぢやア丹さん恨みだヨ。どうで私も此様な我儘もんだから、二度に一度はお前にも、氣障がられることも有るだらうけれど、及ばずながら斯うして苦勞してゐるから、少許はかはいさうだと、お思ひでもいいぢやアないかえ。」丹「そりやア思はなくつてどうするものか。おれもどうかして、手めへの厄介にならねえやうにしてと、いろ／＼氣をもむけれども、今ぢやア元手はなし、さうかといつて、さすがつまらねえ業體をしたら手めへの外聞も惡からうと思ふから、まことに氣がもめてならねえから。」米「オヤそれで好色を

かせぐのかえ、おつな氣のもみやうだねえ。」丹「おれが何時、色をしたことが有るナ、つまらねえ。」米「私こそ詰らねえ身の上だわ。」ト何か解らぬ愚癡をならべ、爭論ふ折から障子の外、奴の小女子、だれとか、からかひながら驅け來り、小「ばかやァ引イ。丹さん昨夕のものが出來たから、ちよいとお出で。」ト言ひながら障子を明け、米八を見て心付き、わるいことをせしと氣の毒なる樣子。丹「オヤ私ァわすれた、おまへの所だッけか、直さん所だつけか。マア今もう一ぺん聞いて參るョ。」ト、まぎらかしたる言ひわけは、これ仇吉が使にて、彼の米八へはさし故に、かかるさそくの出たらめは、色の世界の實生にて、他にはあらぬ利口もの、丹次郎へ目くばせして、障子引き寄せ驅け出し行く。

米「オヤありやァ増吉さんの宅の子だネ。」丹「エ、ム、たしかさうだつけ。」米「さうだつけぐらゐなことでもあるまい、いつもたび〱來る樣子だ。どうしたこつて増吉さんと、心やすくするのだエ。」丹「エ、ナニ何サ、此間疊屋横町で本を借りてゐる時、増さんの旦が善好さんの處に居て、それから一所につれられて、増吉さんの宅で酒を呑ませられて、其の時から一二度行つたッけ、何今のはたしか人違ひサ。」米「能いかげんなことをお云ひナ、増吉さんは旦那も亭主もありやァしないョ。戸綱町の店に居る兄さんが、通ひ番頭になつて、今ぢやァ大層仕合がよくなつて、身分が正直と極つたから、妹が唄妓なんぞをして居るといはれては、仲間の衆へ聞えもわりいといつて、兄さんが引つ

こませて、亞御と一處におくのだから　なか〳〵旦那なんぞを取ると、兄さんが承知しねえとサ。此間しかも小池の宅へ、増さんの兄さんと、湯淺屋の正兵衞さんと來なすつて、其の時正さんのはなしで、くはしく聞いて知つてゐるョ、好男ぐらゐはあるだらうが、おまへをあすこの宅へつれて行つて御馳走する人はないはずだよ。但し仇吉さんは、姉娣の樣にするといふことは、櫻川の由さんがはなしで、とうから知つて居ます。」丹「さうか、それぢやァその増さんの兄さんだらう、おらァまた悪く推量つて、旦那だと思つて居た。時にお米、おらァ手前にいつぞは云はうと思つてゐたが、いや〳〵何もかも世話になつて居ながら、いやらしい亭主ぶつて、妬心もできすぎたとさげしみもしようし、なまじひ云ひ出して、そんならどうとも勝手にしろと突き出されても、立派には口のきけねえ身分だから、なりつたけと料簡して居たが、おれが事ばかり、いけやかましく目くじらたつて云ひながら、少しは手めへの心にも、遠慮といふが有りさうなもんだ、トいつたら其方ぢやァ、お客の大事も色仕掛も、不殘おいらを見繼ぐからだと、云ひ拔ける氣だらうが、さういふ氣がねをさせるのも、實に氣の毒になつて來たといふは、此方のうつくしづく、胸のわりい事だらけだから、寧そのことにさつぱりと、切れてたがひに安堵しようよ。」ト、いはれてびつくり米八が、くやしなみだをはら〳〵。丹次郎にしがみつかんとせしが、鏡臺の鏡を片脇へ投げ出し、箱に寄りかゝりてしばらく無言。丹次

郎もわざと知らぬふりで、浪花白雨といふ小本を讀んで居る。（東春雨の後編なり、御高覽願上候。狂訓亭代して申す）米「丹さん此方でいはうと思ふことを、さかさまらしい事にマア、何かしつかり見留めたことが有つておまへが其の言葉、私は夢にも他外の、心は持たない此の苦勞、何で切れるの別れるのと、輕々しくいふのだヱ。それだから常日頃、妬心らしいが彼是と、時々釘をさして置くのに、何だの角だのとしらをきつて、たうとう向うへ抱きこまれて、あげくの果てには切口上、お前はそれでよかろうが、私はどうして座敷へ出て、のめ〳〵と勤まらうか。愚癡なこつたが中の鄕から、此方へ越して今日が日まで、串戲にもそんなことを、いはれたことのない私、馬鹿らしい程一途の氣性、何が證據にいふのだヱ、サアそのわけをしつかりお言ひ、何所の座敷へ出て居ても、なるたけ對座では居ないやうに、氣がね苦勞の此の月日、私が樣なはかないものでも、藤さんはじめ彼是と、動きのとれない義理づくめ、餘り情がこはいといつて、憎まれる程つゝしんで、野暮唄妓だの弱氣だのと、そしられたり笑はれたい、トいつていつこく色氣もなく、新子が初に出たやうに、こはがるばかりぢやァお客もなし、他にも負けめえ風俗形衣も、立派にしようしいやらしい、ことは少しもいやだといふ、こんな勝手な唄妓業が、外にもあるか知らねえが、私はそれで通して來て、此所の土地では札付の、男ぎらひと名をとるまで、どんなに苦勞をしたことか。いかに惚れたを付け込んで、我儘をいへばといつて、それぢやァ私が思

ひでも、おまへの冥利がわるからう、なんぞと言つたら猶のこと、愛想のつきる譯だらうけれど、おまへも何か腹があつて、言ひ出した切口上、私ア覺悟を極めたから、お前もその氣で居ておくれ。」トずつかり言ひ出す米八が、詞にさすが丹次郎、元より當なき出たらめに、心のそこはぶる／＼もの。丹「かくごといつてどうする氣だ。」米「どうするといつて、切れる女の心いきを、聞き正さすといいぢやァないかね。」丹「いんにや、まだ切れきらねえその內は、やつぱりおいらが掛り合ひだ。」トいへば米八莞爾と、心にわらへど知らぬ顏で、米「なにも私が死ぬ日には、掛り合ひにならねえやうに、仕樣がいくらもありますわ。」丹「コウ米八、何も死ぬ程のことでも有るめえぢやァねえか。」米「よいヨ、わたしが身で私が死ぬのに、いらざるお世話さ。」丹「ナニ手めへの身だ、そんな我儘はいはせねえ、たがひに彫つた入れぼくろ、はゞかりながら米八が、命の主は丹次郎、俺がからだもその通り、米八といふ主がありやァ。オイさうとはならねえヨ。」米「それだから死ぬ氣になるのサ、しかし一人で死にはしないヨ。」丹「そしてだれと死ぬのだ。」米「死んで亭主を取りころすのサ。」丹「うらみ重なる伊右衞門どのか、とんだお岩の聲色だ。」と惚れた同士の契話喧嘩、はてしもあらぬそのところへ、小池のお熊は逢橋の、毘沙門さまより歸り道、丹次郎が障子を明け、くま「丹さん、由さんがさういつてよこしたがネ、此間の唄の文句が、出來たらばおくれとサ、オヤ米さんお早う。」米「お熊さん、モ

ウヱウ丹さんが、世話がやけていけないョ。」くま「蟲でも起つて居るだらう、おもひれ灸でもすゑておやりな。」トいふうち米八は、多葉粉をつけてさし出す。くま「すヤ有り難う。」ト立つて居て呑む。丹「マアおあがりな。」　米「イヽエ、よしかお熊さん、こんな性悪の男の所へおあがりでない。」丹「つまらねえことばつかりいはア。」　くま「うらやましいなう。」米「大違ひ、かう見えても極女好きでよわるヨ。」ト、いふ時しも路次口より駒下駄の音、奴の使でらちあかねば、まちかねてかの増吉がうちより、驅け出して來る仇吉が、姿を見ておくまはにらみ、くま「エヘヽ。」トせきばらひ、米八に見えないやうにして、小ゆびを出して見せる。それとさとりて、米八「ドレ小川にいかうや。」ト、外へ出る其の時ちやうど、仇吉がうしろ姿を見送りて、せきたつ米八、仇吉もお熊がをしへに米八が、長居をねたむ女の情、色は土地がら土性金、金を離れて實情に、ほれた木性とながれの水性、そもや五行の相生相剋、をりも節とて商人の聲、商人「荒神さまの御繪馬〳〵。」

是れより増吉仇吉が、唄妓の穴の極祕密、いよ〳〵米八仇吉が、喧嘩の趣向の奇々妙談、辰巳の園の後編三冊、つゞいて御覽をねがひ上げ候。

梅暦餘興　春色辰巳園卷之三　終

# 辰巳園二編序

千艘の出舟あれば、萬艘の入舟あり、色の湊の夕景色、道のかきがら踏みわけて、陸歩ながら此の里の、穴を穿りし筆の綾、實に作者の黒江町、小本の中の流行先生、そもうゐ暦の開けてより、大吉利市の大當り、戀にはすゐをとほし矢も、石に辰巳の風俗通、土橋仲町裾矢倉と、他のかぞへる類にあらず、よく人情に大島町、眉毛ぬらして用心しても、ばかされやすき稲荷横町、これ化すにはあら・ずして、自身番横町に自身のまよひと、意見もこもる翁永の癖、金子横町の金でかはれぬ、唄女郎の心いき、土地に居てさへおぼつかなき、眞の咄を聴き出して、細かにしるす紅筆の、文はいとしい念力が、彼の舟宿に行き届く、客の心のかはゆき誠は、親里までもうかべらるゝ、もやひの舟の鹽ざかひ、さす、ひく、そこる、にじる程、深くさがせし辰巳の園、また呼び出されし二編目は、行つて來なよと縁起をいはふ娘分の、言葉もさえた調子にならば、音〆くるはぬつくだぶし、送り迎への船の中、枝藏がよひの道草に、ぺん／＼草の業くれは、藏ほふしの娘が仕込むまで、妙な穿ちと虚賞にはむくを直に付け込んで、序文を賴むと狂訓亭が、川岸を付いたる櫻川、久しく怠る病氣の牀上、御ひいき方へ乘り出さん、その内心で筆を採り。

辰巳の遊人

善孝誌

# 梅暦餘興 春色辰巳園 巻之四

江戸 狂訓亭主人著

## 第七回の上

鹽むきの、小赤貝少なしといへども、土地に來つて見る時は、座附肴の自慢にして、絶えぬことなき流行奴、今朝兒參の新妓あれば、晩方引込む自前あり。爰に白狐の通も得し、手取手くだの上手達が、軒を竝べし新道を、稲荷横町とか呼びなれし所に、程よき中年増、彼の增吉が中の間に、今日も遊んで仇吉が、此の程目病の氣保養、氣の相同士とて深切に、親子も和合き增吉が、增「サア茶がはひつたョ、母人此所へおくぜ。」ト湯呑へついで茶をいだす。母「アイ〳〵。」仇「母御お待ちョ、今奴が來るッネ。」增「オヤさうだつけなう、母人今仇さんが、奴を越後屋へやつたから、美味いものが來るョ、あけて置かうか。」ト湯呑を取りに寬ると、母親は手を出し、母「マア〳〵、一杯呑んで咽をよくしめしておいて。」ト、笑ひながら茶をのむ。增「さうか、そんならもつとつがうか、仇さんサア茶

はいやか。」 仇「何いいのサ、茶は茶酒は酒だァな。」 増「さうか、女房は女房情人は情人か、どうしても跡でいふはうがいいらんだの。」 仇「亦か、やう〱途切れたのに。」トいふ折から、十一二の小女子絲びん奴の色素、髪のはけを横ッちやうにまげ、がた〱と障子を明け、仰山に驅け入り喘息いつて來りしが、 小「ハイ仇吉さん。」ト、出して肩で息をしてゐる。 仇「アイヨ、御くらう〱サア母御。」 増「ちよつとマァ見な、奴がどうしたんだな。」 小「それだつても、あんまり久しくまたせておきやァがるから、腹が立つて〱思入小僧と喧嘩をして、どなつてやつたら、追つかけて來やァがつたものを。」 増「こまるがきだよ、出ると喧嘩ァして來てどうもならねえ。」 仇「ナニサ、さうぢやァねえやァな、おいらが待ちどほだらうと思つてだなう。」 小「アイ。」ト、とぼけた顔をして居る。 作者曰、色白にきれいなる女の子を、いとびんやつこなぞに、おもひきつてこしらへ、いやみなくして、使ふがはやりて、いつもこの土地の風なり。あながち今もあるといふにはあらず、たゞおしはかるのみ。 母「サァ〱おいらはこの事だ、ドレ〱老人がはじめるものだ。」 仇「さうよなう、母御たんとお上り、サァ増さんどうだ。」 増「いいのサ、甘い物もわるかァねえ。」ト練りやうかんと、極製のかすてらへ庖丁目を入れて、臺へ積む許りにせしを一切とつて、 増「オヤ〱ぞんぜえな切りやうだ、併し餅と酒の兩刀だからふしようしてやれか。」 仇「酒のわりいほど腹は立つめえ。」 増「違へねえ、練りやうかんより、此の薄皮のはうがいいなう。」 母「何だなこの子は、一人でそんなにせえ出さずといいわな、意地のきたねえ。」

増「フムウ、おめへの喰ふのが、少なくなると思つて急腹だの。」米「ふざけなさんな、外聞の悪いにくまれ口ばつかりきかァ。仇さんおめへわりいものを、姉妹ぶんにしていけないヨ。」トわらふ。仇吉もわらひながら、仇「それだからうらやましいヨ、増さんは仕合だ、ほんに母御のやうなさばけた人はないヨ。」増「ナニさうでもねえ、時々愚痴をいふ折も有るわネ、それだがその愚痴が餘程をかしいヨ。此間も何かしながら獨言に、ア、モウ〳〵、死んでも了ひてえ、じれつてえトいふから、私がオヤ母人何がそんなにじれつたくッて、死ぬ程の事があるといつたらの、何もいふことがねえから、手前でにをかしくなつたさうで、吹き出して笑ふやつサ。それだからの此間兄さんが來た時、何をか私のことをいッつけると言つて、半分ごろから外のはなしになつたもんだから、兄さんがをかしがつて笑ひだすと、まじめになつて、おめへ達は親を馬鹿にすると言つて腹を立つから、兄さんがいふには、そんならいつそお増をこらしめのために、屋敷へでも出して、窮屈な目をさしたらよからうといふと、直に涙ぐんで、心細いことを言つて、おれにいやがらせてあそぶといふわな。」米「ヱ、いいかげんに、親の店卸しをするもんだァ。」ト仇吉ははらをかゝへてをかしがり、もみのきれにて目をふきわらひながら、うす皮をとつてだし、母「サア〳〵奴、おめへもけへ〳〵わのだちんをたべな。」増「母人ちつと叱つてやんねえヨ、もう〳〵いけねえぜ。そしての奴や、今度ッから待たして置いたッて、はらを立つもんぢやァねえよ、薄皮ばつかりやァ出來たて

をよこすからだヨ。」小「アイ。」母「奴々、手めへやおればかり、豐年ぢやアいけねえ、ちよツくり催促をしてこいヨ。」小「アイ、今けへる時はやくと言つて來ました。」增「それでも宅へ騙け込んだぢやアねえか、はやくもう一ぺん行つて來な。」仇「ナニしづかでもいいやアな。」小「サア〳〵行つて來よう。」ト出でて行く。母「おいらも行つて來よう、なうお增。」增「ア、さうしておくれ。」仇「何所へ行くのだえ。」母「ナニ上專寺へ御名代サ。」仇「さうかえ日參かえ。」增「さうヨ、それぢやアおつかア、ちよつくら行つて來ておくれ。」母「サア〳〵いかう〳〵、仇さん御馳走たんとお遊び。」仇「アイヨ。」母「ドレいかう、イヤついでに榮代へまはつて、賀久子さん處へ寄つて、奴が御手本を取つて來ようか。」增「ほんにさうしておくれな、そしてなんぞ新作の、稿本とやらが有つたら、かりて來ておくれな。」母「よくいろ〳〵な事をいふなう、忘れてもいいか。」增「忘れるのまでことわらずといいわな。」仇「アハ、、、、をかしい〳〵。」母「オイ巾著を忘れた、お增や、その用簞笥の上に有るからとつてくんな。」增「そりや始まつた、枝藏あたりから歸つて來るヨ、杖をやらうか。」母「ころばぬさきの用心か、まだそれ程は老い込まねえ。」增「おめへは老いこまねえつもりでも。」母「エ、もういいにしねえな、ふけえきな。」ト氣さくな母の機嫌よく、お祖師さまへと出で行きける、跡にお增はわらひながら、增「サア〳〵仇さん、心おきなくのろけなせえ。」仇「ナニおめへの處の母御なんざア、ちつとも

心はおけねえわな。」増「ずるぶんむかしの洒落者だが、どうも歳がよつちやアいけねえなう。」丹「ト

ニナニ、此宅の母御は通人だヨ。おいらが宅の母人ときちやア、モウ〳〵堪らねえヨ。」増「ナニ何所でもさうだアな。」トいふうち、小女子が前に立ち、何かいろ〳〵持つて來る。小女子障子をあけて、

小「サア〳〵來ました〳〵。」増「御苦勞々々々、其處へ置いて行つてくんな。」仕出しの男「ハイ〳〵、おほきにおそくなりました。」ト置いて行く。丹「増吉さん、かんをかけようか。」増「さうヨ、奴其所の燗德利へ酒をいれて、仇さんのとこへやりねえ。」小「アイ。」仇「オツトよし〳〵、おいらがするヨ。」トかんを付ける。増吉はきたりし肴を、火鉢のそばへならべて、増「サアマア仇の字はじめねえか。」

仇「オヤおめへ主のくせに。」増「また株でおつなくせだの。そんならわたくしが、おはじめ申さう。」ト猪口をとる。丹「お酌を致しませう。」増「いたしでも鼠でもいいが、やつと酒になつたやうだの。」

仇「さうヨなう誠に長かつた。」増「サア仇の字。」仇「アイサア〳〵呑まう〳〵、なんだかちつと浮いたやうだ。」増「しかし、ういてもおめへ、澤山は眼にわりいヨ、今日はよつほどいいかとおもふわ。」

仇「ア、今日はたいそういいよ、日朝さまはありがたいなう。オヤおいらア、おつかアがいくならお洗米を、ム、さう〳〵、今朝はやく家内の母人が行つたからいい。」増「あんまり逆上せるから、眼も悪くなるのだアな、困つたもんだよなう。」仇「さういはれると、己ばつかり逆上せてるるやうだが、

まさかさうでもねえョ、そして。」増「いいよ彼男でも逆上せてゐるョ、解つたョ。」仇吉はわらひながら、仇「ナニサヽア聞きなョ、それでもの、どんなにおいらの眼を、案じて居るだらう。」増「オヽヽ大變々々、始まり／＼。」ト仇吉のあごを、手ぬぐひでふくまねをする。仇「あれサヽア増吉さん、じれつてえ。」増「イヤもう困るの、おれまでじれつてえのか、近所には事なかれだなうハヽヽヽヽ。」仇吉もしばらく笑つて居て、仇「しかし串戯ぢやアねえョ、おいらアどんなに氣色がわるくつても、大畧我慢をするけれども、こんどの眼ばかりは苦勞になるョ。」増「さうョなう、ひよつと眼がつぶれると、丹さんの顔もみられずか。」仇「そればッかりはほんたうだョ。」ト目をふいてふさぐ。増「つまらねえことをいふなう、つぶれるほどの眼で、酒が呑めるものか。第一そんなにのろけてゐられるものか。それよりかマア、ちつと酒をはやらせなナ。」仇「さうさねえ、斯うだものいけねえなう、どうかしたさうだ。」ト、下においたる猪口を干し、顔をしかめて、「ア、つめてえ。」増「それ見な、あんまりなかいからだ、よせばいいのにそれこそ毒だ。」ト燗でうしを取る。

心爰にあらざれば、見れどもみえず、食らへどもその味ひを知らずとは、斯かることをや言ふならん。喜怒哀苦愛惡慾の七情に、我となやます煩惱の、中に戀ほどやるせなきものはなけれど、近來は人情甚だいやしくなり、只美服をかざりて色をつくろひ、婦女子の心ます／＼賤しく、

眞の情合あらざれば、娘一人に男八人、逃げて隱れてその先で、また他男と逃ぐるたぐひ、朝々色のかけながし、親もこれらを恥とせず、若い中は二度となし、一人や半分好男のないは、今時ない事などと、たはけをつくす母親の、甘きたはけにほめられし、娘もいつか札付の、だうらく者となれるが多し。それから見れば仇吉等は、眞をまもる女といふべし。

## 第七囘の下

折節何れの客なるか、細絲のさえた音色、ヘチヤン〳〵、へそれ引テン〳〵、いざなぎいざなみ夫婦より合ひて、まん〳〵たるわたづッみ、あまのさかほこおろさせたまひ、引き上げたまふそのしたゝり、こりかたまつて一ッの島よ。月よみ日よみひる子そさのッおうけたまふ、ひる子とまう引すはえびすのことよ。

トうたふも古風な七福神。仇「モいやなものを彈いてるよう引。」トじれる。増「なぜ、七ふくじんだやァねえか、あたりさはりは有りもしねえもんだに。」仇「ナニサ、他にやァねえがおいらはあるよ。」増「さうかなぜの。」仇「わたやァもう七福神といふものは、よつ程えんぎのいいものだと思つてるたけれど、まことに嫌ひになつたわ。」増「サァわからねえ、折節へんちきなことをいふからこまるの。」仇「それだつてしも、夫婦より合ひて、まん〳〵たるわたづみ、あまのさかほこおろさせたまひッサ、

氣障ぢやァねえかなう、いやらしい。」増「どうも〳〵、およそ愚痴なものも聞いたが、おめへぐらゐ愚痴な人は、どうも實に〳〵、御殿女中ぢやァねえが、感心だ。唄にまで妬心ぢやァ仕方がねえなうハ、、、、。」仇「それだつても、夫婦より合ひてが氣にいらねえわね、夫婦といふ字は腹が立つよ。」増「そりやァおめへの、文句の取りやうがわりいわな、寄り合ひてまん〳〵たるわたづみも、おめへと丹印にとつて見ねえな、どんなにうれしい辻占だらう。」仇「さういへばさうだけれど、どうもすゑ始終苦勞したところが、夫婦になられるわけでは、有るめえと思ふからだァね。そりやァモウ米八さんに、義理と人情をかいてしまやァ、世間の口はなんのそのと、思つて見てももしやまた、丹さんも米八さんにやァ、いふにいはれぬ恩が有るさうだから、兼ておめへにはなすとほり、兩方共つかれぬ義理と、うぬぼれらしいが私にも、顔を立てさせてくれる心に、なりかねない氣性だから、そればつかりおもひ過して、自分の身ではがいい心を出して居るんだァね。」トすこし聲くもりて、眼をおさへて居る。増「マア〳〵、なんでもあんまり氣をもみなさんなよ、高慢らしいやうだが、なんでも人間は義理や人情を、捨ててしまつちやァわけはないョ、あつちこつちを考へて、苦勞するから色もかはいいわけなもんだァな。いきなりに世間を捨てて懸ッちやァ、からすてばちで、いとしいなつかしいの情合も、うすくなるから、おめへなんぞも猶のこと、唄妓中間で取りわけて、二とは下らねえ米八

仇吉、どつちこつちの勝ち負けが、有つてもといふうち、おめへは不思議な縁で姉妹同然になつて居るから、寄場の世間噺にも、いかに色にこりかたまつても、不人情な子だわけ知らずだとは、いはしたくねえと思ふのも、マア釣方とやらいふもんだらうヨ。」仇「ほんに嬉しいヨ、こゝろやすくすればこそ、一所に苦勞してもらつて、ほんたうにおいらアモウ、しみ〴〵わすれやアしねえわ。」増「またふさぐとわりいから、ちつとういて遊びなヨ、いらざる意見らしいことも言ひ出して、また理に落ちた、ドレ燗を直さう。」ト、燗銅壺の蓋をとる。仇「おつかア遅いなう。」増「ナニまた方々へよつて來るからヨ、いつでも斯うだヨ、オヤさういへば奴は何所へ行つたッけの。」仇「さうサなう、ム、左樣左樣、いましがた其所のおつかアの、仕事のそばの本ばさみを持つて出て行つた。」増「ヲヤさうか、それぢやアおほかた稽古に行つたらう、行くならいくと言へばいいのに。」仇「ナァニ、餘りわたいらが夢中になつて、はなしをしてゐたから、わざとだまつて行つだのだらう、利口な子だなう。」増「ばかぢやアねえやうだが、おてんばで〳〵困りきるよ。」仇「そのかはり藝もするどからうわね。」増「アアさうサ、歳に合はしちやア、ずゐぶんもの覺えもよし、いたづらだけのことは、どうか有りさうだが、まだ何だかわからねえヨ、どうぞマアさうおうなものにしてえもんだヨ。」仇「ならなくつてサ。」増「イヽヱ左樣ではないよ、何にしてもおいらがもう、時代違へになつて居るから、どうもいけねえ

ワナ。稽古をして來たつて、此方が知らねえ新ものなんざア、小言をいふことが出來ねえから、どうも押手が利かなくつて、じれつてえよ。」仇「さうサなう、それだつてそんなに、時代ちがひといふほどもちがひはしねえわな。そして縦ひ知らねえでも、又おめへなんぞの座敷の出立は、どうもまた藝を磨いたものばかり、みがかねえぢやアならなかつたさうだから、どうしても子どものためにはつよみだアね。」増「なアにさうでねえヨ、おいらアモウ、わづか四年ばかり引込んでるが、一年ちがつても樣子の變化るもんだアな。そのうち今日日の唄妓衆や何かは、よつぽどほねがをれらアな。ほんに私なんざアそのうちで、ちつとどうも一こく座敷だつたから、面倒くせえことが嫌へといふ野暮てんで、どうも流行りやうがねえわな。」仇「さうでもねえよ、そりやアモウほんたうに、お前のうはさは知つてるヨ。私もおめへのいふとほり、斯うして世話になるから、ざしきの噂も氣をつけるヨ。今の私等が仲間は、不殘らくだわね。そのうち私なんざア、何も是れぞと取りしきつて、藝もなくつてマア唄妓衆の仲間も、付合をよくしてくれるから氣がねもなし、船宿衆やお茶屋でも、ひいきにしてもらふも、ほんたうに今更おそまきな、世事ちやアないヨ、おめへなんぞとこゝろやすくしてるから、何か行きとゞいた唄妓衆と、思つてくれるのだらうと、ほんに自力で斯うしてゐるとは、おもやアしねえワネ。」増「ソレ見ねえ、それがどうも今の唄妓衆やア如才ねえヨ、左樣早速他を嬉しがらせ

ゐといふのが、日ごろ活業のみゝッちいのだわな。藝ばかりでけいしやがやァねヱわな。今はまた廓のことゝ、はりも意氣地も達引も、むかしにまさつた人情だから、それに準じて藝もそのとほりサ。もつとも此方をあそぶお客にやァ、氣障もたんとはねヱけれど、時に寄つちやァ鼻もちのならねヱこともも有るもんだァな。私等なんぞの時分にやァ○おけさしやうがきなら○で濟んだもんだが、どうしてどうして、ヘおまへをまち〳〵蚊屋のそとを唄つた口で、佳吉ヘまたの月見をたのしみに、日數かぞへて思ひ出すトいふ世の中だから、實にほねが折れるのサ。」

○看官の通君子、殊に辰巳の穿鑿家、此のさうしを閲したまはば、そのいたらざるを笑ひもそしりもしたまはんが、元これ穿ちの冊子ならず、たゞ人情を盡さんとて、愚癡をならべるのみなれば、かならずしも當世の洒落家、予が非をかぞへて梅暦の、愛敬までうしなはせたまはんかと、おそれてこゝにわぶるものなり。

# 梅暦餘興春色辰巳園卷之四 終

# 梅暦餘興 春色辰巳園 卷之五

江戸　狂訓亭主人著

## 第八回

同じ唄女の果てなれど、歳増吉が程もよく、過ぎにし世事の噂さへ、さぞ取廻しも他よりは、增りしことに有りつらんと、思ひやられてゆかしけれ。をりからお增が表の格子、しづかにあけて一人の男、男「ハイ御免なさいまし、お增さんのお宅は、此方でございますかえ。」增「アイどなただえ。」ト中じきりをあける。男「ハイわたくしは、寺町の者でございますが、昨晩このお手紙をたのまれましたが、あまりおそくなりましたゆゑ、お届けしましなんだ。今日もまた急な用にたのまれましたゆゑ、大きにおそなはりました。」ト ふみさしいだす。增「アイ。」トとつて、ム、とうなづき、「ハイおほきに御苦勞でございました。チツトお待ち。」ト仇吉に渡す。仇吉は取つて莞爾うれしさうに笑ひ、這入口へ向ひ、仇「アノおまへ急な用にたのまれたとは、やつぱり此の人にかへ。」男「イ、エナニ、外さまでございま

す。」仇「ウムよし／＼。」ト安堵の様子、これも何か米八が用かと思ひ、氣にかゝりて頼みし用まで聞きし、このくらゐ氣にかけてもらひなば、男のたましひはうか／＼となりて、何事も手に付かぬことなるべし。彼の男は、外の手紙二三本選りわけながら、男「さやうならよろしうございますかネ、お返事でも届けますのではございませんか。」増吉はかんざしで、つむりをかきながら、かほをしかめ、増「ナアニ、これはたしかに請取つたと、いつておくんなせえ、ア、そして使代はエ。」これ素人は氣のつかぬところ、かるばしよがらとするしたまへ、男「イヽエ、モウおもらひ申しました、ハイ左様なら。」増「アイ。」仇吉は上にぐる／＼と、くるみし文を取つて増吉へ渡す。」増「ヤごてえねえなこつた、かはいらしい手だなう。」トよみかゝる。仇吉はかきのけて、仇「増さんマアそれよりか此文からさきへよまう。」増「ナニおいらのとこへ來たのだから、私はこれをよむツ。」仇「アレサマア。」増「イヤもう手めへ勝手な子だぞ、左様ならおめへの方へ來た文から、さきへ拜見か。」ト一所に寄り添ひ、仇吉が持ちし文をさし覗く。仇「なんだか氣になる様な、じれつてえやうだ。」トいひながらあけてよむ。

口　状

ついちよつと、やうすきくまもなつかしき昨日今日、こんなえにしがからにもと、やはなたとへも愚癡といふ弱味にひかされ、氣ざを承知の悪筆文だん御ゆるしあれかし。

仇「ちよつとマァ見て。どうしたんだらう。」ト にっこと笑ひ、うれしきおもひれ。 増「オヽ〳〵、眼も何もかまはなくなつたの、日朝さまよりありがたからう。」ト 脊中をちよいトつめる、仇「ァいたい。」ト わらひながら又よみかゝる。

御目もじより二日はたてど、

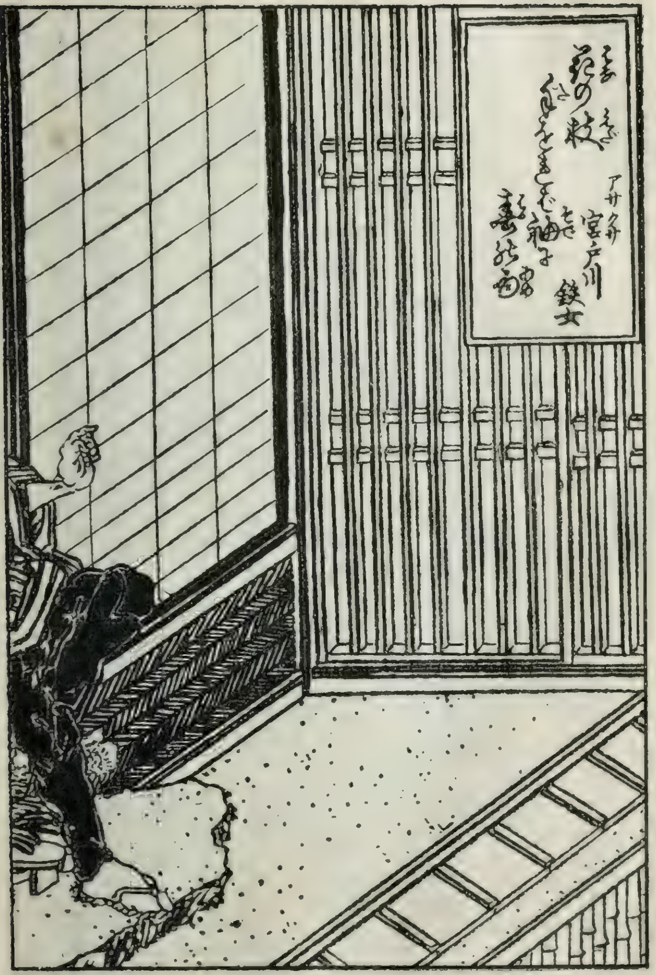
仇「オヤどうしたんだの、今朝の文は。」トすこしかんがへる。増「エ待ちなョ。ウム斯うだ〳〵、此方から頼んで遣つた文は、今朝こりやァ此方の文の、行かねえ中に出た文で、早くだらうョ、ゆうべおそくなつたから、かけ違つたんだ。」仇「ム、〳〵さうだらうの、マァ後をよんで見よう。「エ、トおんめもじより二日はたてど、

もはやおがねをあらはしてか、何の便りもおとづれもなう、きのふじやうしんじへ參り候へども、かげだに見せぬこゝろなさ、日てうさまへ日さんも、やまの神へ極内々をしらぬ顔か、しつてかしらぬか、さうしたものぢやァあるめえ。」ト

よ　う　じ　　　　より上

トよみて、二三度くりかへし、まだよみたらぬ心なり。仇「オヤ〳〵、えんぎのわりいナウ。」増「ナゼえんぎが悪い。」仇「それだつて、めでたくも書きもしねえで。」増「何また男が、そんなことを書くもんかな、併しのろけるも無理もねえなう。」仇「ァ、もう何だかじれッてえ。」増「それだが、どうも

眞實に惚れてもにくくねえ人よの。一つとして拔目のねえ、若い人にやアめづらしいヨ。ヲヤそりやアさうと、くらくなつたの、もう二人ながら歸りさうなもんだ。ちよいトマア付けよう。」トあんどうをいだす。増「仇さん、おめへはまぼしからう、少し斯ういふあんばいに置かうの。」仇「ア、ナニ、そんなぢやアないヨ、今日はよつほど能いヨ、いつも日のくれる時分になると、頻りに痛くなるが、けふはそんなでねえから、もうよからうヨ。」増「さうか、そんならいいが、あんまり呑み過ぎて惡くなると、おめへの母御が、あんなに頼んで行つたから、案じてゐるだらうと思つてヨ。そしてお茶漬にしようぢやアねえか。お前もあんまり、お飯をたべねえでゐるからわりいヨ。」仇「ア、たべようヨ、何おまんまはうまいわネ、氣色のわりいのでないから、毎時たんと食べるけれど、酒を呑むとどうもいやだヨ。それでもいつでも、母人と喧嘩をするわ。」増「どんな者でも、酒を呑んではいやなもんだヨ、その方が多いヨ。」トいふうち表の障子を明け、入り來るものは仇吉が母、母「ハイ御免なさい、増吉さん今日やア一日、お世話さまでございました。母御さんは。」トいひながらあがる。増「オヤ仇さん、母御が來なすつたヨ。」トいひ、亦仇吉の母に向ひ、増「母御お前お歸りな、此方からいい時分にやア、送らしてあげるわねえ、今日は大きにいいさうでネ、今まで此所で少とづゝ、酒盛つて遊んでゐましたヨ。」ト、多葉粉を吸ひ付けて出す。仇「おまへ母人迎へに來たのか。」母「ア、ちよつと歸んな。」


アサクサ
宮戸川
鉄女

仇「ナゼ。」母「なぜといつてあんまり、朝から日のくれるまで増さん處でも、てえ〳〵お世話さまだァな。そしてのちよいと歸つてくんな。」ト何か用ありさうにいふ。増「母人さん、私の處ぢやァ晝夜お出でもかまやァしないョ。マァお心づけへなしに、もう少とあそばしてお置きな。」仇「いつでもおまへ、此方へ來て遊んでゐるから、今日に限つた事ぢやァないのに。」母「ナニそりやァいいがの、歸らなくッちやァならねえことが出來たからョ。又來るがいいわな、ネエお増さん。」増「さやう、そんなら仇さん行つて來なな、母御があんなにいふから。そしての。」ト仇吉が耳に口寄せ、何かひそ〳〵とさゝやきて、増「ヨヨさうしなナ。」仇「さうさなう、そんなら歸らうか。」増「今そして、お夜食にしようと思つて居た處さ。」母「さうかえ、それはモウ。そして母御さんは何處へ。」増「ナニ先刻、じやうせん寺へ行きましたが、まだ歸つて來ませんワネ。」トいふ折から増吉が母親は、奴と（小じよくのことなり。）二人歸つて來る。増の母「オヽ〳〵、大きにおそくなつた〳〵。」ト家内へ這入る。増「まことに遲くなつたねえ、何處へ寄つて居たんだ、そして奴は一同に行つたのか。」奴小「ナニ一處にいきやァしませんが、今其所で逢つたから、一處に歸つて來ました、今日はもう大勢で〳〵、もう〳〵待つて〳〵、まことにまことに。」増「もういい〳〵、喧しい子だョ。」仇の母「おつかァ、おけへんなすつたネ、今日はもう早朝からあの子がお世話さまに。」増の母「オヤよくお出でなすつた、今朝お出でなすつたさうだが、お

めにかゝらなんだッけねえ。それでも仇さんも、大きに今日はいいさうでございますョ。」仇「ヲヤさやうでございますさうで、大きに有りがたうございます。奴さん稽古か、よく精をおだしだの。」ヱヘイ。」増「私の處の奴は、人さんが來なすつても、しらねえ顔をしてゐてどうもならねえョ。」仇「ナァニ、みんなさうでございますョ、サア行かうの。」仇「アヽ。」トだんまり。やう／＼に立つて、仇「それぢやァ増さん、今の事を急度だョ。」増「ムヽ承知々々。」増「オヤなぜお歸りだ。」仇「有りがたう、すこし又宅に。」増「さうかえ、それぢやァまたお出でョ。」増「仇の字、そんならさうするョ。」

くれ六つのかねゴウン／＼。

## 第九回

敵にして強くなければ、味方にして頼もしからず、此方が惚れれば他も惚れて、さてじれッたき戀の癖。そも米八は日々夜々に、繁昌いはん方もなく、全盛な權氣苦勞は、絶えぬ浮世の義理ばりに、茶屋船宿はいふに及ばず、何やら角やらの附けとゞけ、仕掛文庫も四季々に、心にかゝる伊達衣裳、はじめから用心して、後日の時には此の色を、斯う直したらまた一晴、これは紋を斯う置いてと、胸工みしてかゝつても、思ひの外の油じみ、酒のよごれに光なしょ、光る旦那をこゝろあて、それもはづれてまごつくは、素人の知らぬ表向、びつくりするほど立派にして、押し出す初手のとりかゝり、金

も貸さうし身儘にも、なるとさばけた談合を、うまくはまりし親馬鹿の、二枚證文兩方とも、役にたてるは七ばかり、雜用出衆で居てさへも、忽ちつもる借金の、山びらきにでもなつたらば、また一盛りよからうかと、思ふやからも有るなるべし。そも突出したら能い鳥が、直にかゝつて嬉しやと、思へば引色くはせもの、茶屋船宿も當座の利德に、化された風で宿なしをも、取りもつ當時の不人情、見るにつけ聞くにつけ、いやな事とは思へども、馴れてはさすが捨てられぬ、男の爲の憂き苦勞、それがかうじて此の頃は、胸の痞へや癪といふ、禁句のたぐひはいとはねど、さし込む他のしやくりをば、口で氣なして心では、もしやとおもふ女氣の、あるがならひをましてまた、仇吉といふ増花の、ありと知つてもはしたなく、いはれぬ株になりおほせ、今ではどうか我と我が、心をしかとたしなみに、いとゞ思ひのます鏡、いつにかはつてはづかしく、寄場に一人手枕の、耳に聞ゆる清元の、けいこもおのが身にそしむ、戀の安名が物狂ひ。○深山櫻。

○上〽アレあれを、いまみやのらいさんをうが筆すさみ、土人形のいろ娘。〽たかねの花やをることも、泣いた顏せずはら立てず、〽りんきもせねばおとなしう、アラうつゝなの妹脊中、合ぬしは忘れてござんせう、しかも去年の櫻どき、植ゑて初日の初會から、逢うての後は一日も、たより聞かねば氣もすまず、うつら〳〵と夜をあかし、〽晝寐ぬほどに思ひつめ、たまにあふ夜のうれしさ

に、さゝごとやめてかたる夜は、いつよりもツイ明けやすく。下略
米「アヽ、何だかふさいで來た、恥かしいと思つても、ツイ妬心をする氣になるが。」ト、獨言いふうしろの方、いつの間にやら新子のお房、ちひさな聲で、ふさ「米八さんこゝに」米「ヲヽびつくりした、房さんかオヤおめへ、もうちつと先刻、小池へ出て行つたぢやァねえか。」ふさ「アヽ、直に歸つたヨ。」米「ナゼどうしたんだ。」ふさ「ナニ、お客がいやァないものを。」ト涙ぐむ。米「ムヽ、此間はなしたわけの人かへ。」ふさ「アヽ。」米「それでもマア、よくたづねて來たなう、しかしおめへは歳のいかねえ料簡から、かはいいとおもつて見たり、他人がいろ／＼わるく言つたり、しやくつたりすると、否にもなつたりしても、また戀ふ氣になるのも、定まりはないやうだけれど、だん／＼此間中のはなしでは、慾で今まで一所になつて、居たわけでもなし、はじめを言へば深切に、かはいがられたうれしさに、ツイ深くなつたといふわけぢやァないかえ。尤もおめへも是れまでは、他のいたしりも親たちの、氣がねも長く辛防してゐたから、むかうも義理のわりい仕打が此方に有つたとて、ひどく憎みもしめえけれど、他は兎角に其の元を、わすれてしまふといけないヨ。私なんぞも此方へ來て、他並に、といつてはうぬぼれだが、どうやら斯うやらかうして居れば、世話をしようの色になれのと、いふ人が有るけれど、其所を押し切る義理と意地、たうとう我儘を仕遂げたら、今ぢやァそれと札が付いて、勤めよくなつた

から、案じるわけのものぢやァないヨ。おめへなんぞは親たちが、此方へ出れば能い旦那が、五人も二人も直に出来て、親兄弟もそのおかげて、うかみあがるつもりで、よこしもしたらうけれど、そりやァなるほど、素人の娘で居るとはわけも違つて、盛りの時は十や二十の、金はなんのといふやうになるのも、土地がら玉の輿にのるのはいくらもあるけれど、恩をわすれて出世して、死ぬまで繁昌する人は、藝者にかぎらず女郎衆でも、又素人でもありはしないヨ。今新地へ行つて居る、慾次さんを見な、おめへは知るめえが、まへ方は此方へ出て居て、ばり／＼といはせたさうだが、大そういい人に請出されて、仕合な人だと、其の時分婦多川ぢうが、うらやましがつたさうだけれど、あの子の親が慾次さんの、まだからッきりいけねえ時から、世話をした人を突き出して、それから此方へ出したさうだが、そのばちかして一たんは、立身しても忽ちに、他の思ひでだん／＼に、歳をとるほどつまらなくなつて、またしかたなくしん地へ出て、昔の影のねえばかりか、わりい病氣も有るやうな噂を聞いたが、モウ／＼／＼、凡そ女は罪ふかいといふうちにも、女郎唄妓の身のうへほど、冥利のわりいものはないヨ。といつて活業づくだから、うそも手くだもない日には、座敷もお客もないわけだから、是非嘘もつき義理もかく、仕うちも時々あるけれど、長い間世話になつたり、久しく思ひおもはれた、人を慾ゆゑ突き出して、ふり向いて見るもいやだと、いふやうにせへしねえければ、始終出世

も出來るもんだと、意見を言つてくれた人が有つたッけ。それからだん〳〵氣をつけて、永い目で見て居ると、まことにそれに違ひないヨ。おめへなんぞも來た日から、私を便りにしなさるから、おまばかながら此のやうな、意見もへだてぬ心から、かならず腹をおたちでないヨ、そして何と言つてお歸しだ。」ふさ「ナニまた四五日の中に來ると言つて、元氣のねえ顔をして、直に歸るから、ナニお出でないといつたら、ナニ永居をすると、猶もの思ひだ。あんまり何角を氣兼をして、煩ふなヨトいつた切り、歸つて行きましたわ。」ト少しふさぐ。米「さうか。今度來たら、おいらに知らせな、おめへの義理も立ち、先の人の胸も落著くやうに、談じてやることが有るヨ。」ト、生まれ付いたる米八が、藝妓にまれな深切もの、歳下なればお房をも、妹と思ひ遠慮なく、意見の風情頼もしけれ。（此のお房といふ娘子の傳は、いふ代表品といふ中本六冊、近日出板いたし候辰巳の園の拾遺なり。）折から歸る政吉が、浮いた調子の咳ばらひ、政「エヘ、ヘム」米「政の字かふさ「かへつて居るヨ。」政「オヤ〳〵、こゝも差合か、ふけえきな。」ふさ「政吉さんお歸りやす」政「オイヨイ、おいらの娘か、よくおとなしく待つて居たの、ドレ〳〵お土産をやらうか。」ト笑ひながら、鼻紙へ書いたド、一をお房に見せる。ふさ「オヤ〳〵有り難う。」ト明けてよむ。

なまじ、ていよく離別れただけに日柄立つほどおもひ出す

ヨヤ〳〵、澤山書いて有るねえ、後で樂しみによまうや。」米「オイ〳〵政の字〳〵、今歸つて來

た人相を、當てて見せようか。」政「ム、〱、當てて見な〱、すつかり當るとおごるぜ。」米「ドレ。」ト起き上り、米「知れた〱、びつくりしなさんなヨ。エヽトまづ色でなし、通例でなし、少し不足はあるがまんざらでなしと。」ト云ひながら政吉の顔を見る。政「早くいひなな。」米「アレサせはしねえ、左樣人相がわかるものかな。」トにつこり笑ひ、米「コウ連から先へいふぜ、榮藏さんト（これをざえ榮藏なり。）八藏さんだらう。」（この八藏といふは瀧亭鯉丈なり。）政「エ。」トびつくり、米「どうだ、一番ギツクリだらう、コウ噂で聞いたが、源さんは男ぶりから見ると、萬事の行き渡りは百だんも能いぜ、慾ぢやアねえが大事にしな。併し如才も有るめえ。」政「どうして知つて居る。」米「ヘンそりやアはゞかりながら、米八さんだヨ。」トいふ時しも表の方、呼び流し行く占者、占「當卦本卦のうらなひ、失物待人願望男女一代の吉凶。」米「オヤおいらもあれに出ようか。」政「ちげへねへ、丹次郎といふ色情をつゝしむべしか。」三人「ハヽ、ハヽヽ。」

梅暦餘興春色辰巳園卷之五　終

江戸 狂訓亭主人著

## 第十回の上

春の梅、秋の尾花のもつれ酒、それをこいきに呑なほす、小池の客の絶え間なく、四季の賑ひ十二軒、こゝの二階ぞ樂しけれ。今日も一人の客人有り、意氣ならねども野暮ならず、彼の仇吉をひいきにて、如才なけれどおほやうに、いつも機嫌のよき上戸、とりまく一座は櫻川、さゞめく酒の面白き、娘お熊が取持に、いとゞ榮ある其の風情、仇「オヤどうしたんだらう、よく道をおわすれなさらねえネ。」客幸三郎笑ひながら、幸「べらぼうめえ、女房の所へ来るに、道をわすれるといふがあるものかえ。それに手めへはどうも實のねえ女だぜ。」仇「なにが實がないのだえ。」幸「アレあいくれねえもんだ、おれがこんなにかよつて、やせきつたのに、どうしなすつたとも云はず、どうも餘程世事のねえ惣嫁のねえ女だなア。」仇「それだつても、まだ今こゝへすわつたばかりだアネ。そしておまへかよつた、

て、知らしてよこしもなさらねえで、どうして知れる物かネ。私アまた月代をはやして、すこしやせて、大分好い男になつて来たと思つたり、あんまり足は遠かッたし、いつもより男ぶりがあざやかだから、幽靈でもありやアしねえかと、案じてゐたわね、ネエ由さん。」櫻川由次郎わらひながら、由「先刻から默然つて聞いて居たがネ、どうも一所へ寄ると、癡話げんくわをしなさるから、困りやすネエ。」仇吉も笑ひながら、仇「ほれたどうしたといふものは、みんな此樣なものかねえ、ネエおとッさん。」幸「ナニおとつさんだ、もつてえねえべらぼうだ、息子か孫にしさうなものをつかめへて、おとつさんだの何のと云つて、そして手めへ、おとつさんに惚れちやア、いもでんがくだといはれるぜエ。」櫻川三孝かたはらより、三孝「ナットナット、お二人ともあらそひ無用にして、ちつと御酒を精出すこととしませうぜ。」壽樂「アッ。ア能い御料簡いかさま先程から。」幸「どうもお前たちやアわりい料簡だヨ、俺がちつと色慾の方を出精がうと思ふと、どうも邪魔をするからわりいぜ。その癖壽樂なんぞは、世界中の女をこせつく癖に、他の事をば戀しらずだ。」壽樂「オヤ／＼、たつた一人名ざしで、わたくしをこせつくとは、お情ない御一言。」幸「オイ／＼壽樂子、左樣は云はせねえ、まづ此の近所はいふに及ばず、芝の神明淺草の境内、何でも女の居るところといふと、其方のまごついて居ねえ事はねえぜ、此間も柳屋のお吉が見世で、たゞ一人何か談じて居たぢやアねえか、まさか其方が陸釣の、汐待といふひまもあるめえ。」幇間の客をつかま

ゐこゝろで、ほどよき所にまち合はせゐる
を、をかづりといふみなさまの御存じなり。 善孝「エ、エ、あの日は、などゝ申しわけをする事もないが、
モシ茶見世なぞといふものもおつなもので、まさか私どものちよいと休むにも、毛なみを嫌ふわけは
ないが、諸人の知つてゐる札付の見せで、浅草の山内でも。」 由「または両國、大坂の道頓堀、」 三孝「京
都にては四條河原、伊勢は白子の觀世音。」 善孝「コレサ〳〵、生捕りました〳〵を、丸でやる氣か。」
幸「イヤ、しかし浅草ぢやァ、宮戸川のお鐵、柳屋のお吉、また少し所帯じみた深切はいふが、相模
屋のおさよ、此の三軒の見世に休んで居れば、氣はづかしくねえの。」 由「イヤモシ、此間つく〴〵見
ましたが、山科のお直ネ、だん〳〵程がよくなりましたぜ。」 三孝「ソリヤこそ、由次郎が地金のはじ
まり。」 仲「由さん上げるヨ、私ぢやァいやだらうが、山科の直さんのつもりでお上り。」 由「コウ〳〵
みんななんだか横道へまがるぜ、おれにやァ色はさせねえつもりか。」 善孝「なァにサ、おめへさんは
なんでも、酒とたゝかつてお出でなさりやァ、言分なしサ、二日酔のひやうらうは、水雑汁で半日ば
かり籠城して、あくる日むかへ酒のきほひで、辰巳へ向つて打つて出るトいふやつが一ばんいいネ。」
幸「そこで此方が何萬騎かゝつても、びッくりともなさらねえのは、幸さんだらう、おそらくおめ
へさんにつゞくものは、一人もあらじとご思ふ。」 新孝「とんだてんぢ天皇で。」 由「てんのうだの森の。」
三孝「イヤモシこじッく。」 由「こじッけ〳〵、何でもないこと百申そ。」扇にてだいのふちをそつとたゝきはやしながら、「イヤ何

でらない事百申そ。」三「てんの／＼、イヤてんぢくの／＼。」新孝「だァるま大師といふ人は。」新「コリヤ一に俵をふんまへて。」由「二には荒衛、鷄。」三「イヤ鳥は喰ふともどりくふな。」新「中に天神寐てござる。」三「ござるの尻は眞赤いな、コリヤ／＼／＼、もちこんか。」ト手ぬぐひをちよいとあたまへのせてかた／＼の肩をはづし、いやな身ぶりをしてどしどしとをどる。幸「もういい／＼、モウいいかげんにしねえか、よくさうしやべられたもんだ、すこし鳴りが止んだらまた始めたア。」新「鳴りは止んでも雷光るのが。」由「モウ遠くなりました。筑波の方でごろ／＼と。」新「いふたらおまへも合點して。」新「コレサ／＼、せつかくしづかになりかゝつたのに。」新「オヤ、おめへが始めたぢやァねえか。」ト、何かわからぬ騷ぎのうち、仇吉は何もいはず、笑つてばかり居たりしが、ちよくをとつて三孝にさしいだし「サア／＼御守殿さん、ちよいと上げよう。」三「エ何ヱをかしなことを。」由「ごしゆでんさんとは。」トいひながら、三孝の方を見やりあごでしやくり、由「オヤ、其方はおやしきに色でも出來たか。」三「ハテ奇代な、ずるぶん當りのねえことでもねえが。」トあたまをかく　新「うぬふてえ奴だな、その分にやァ差しおかれねえぞ。」一同に、大ぜい「そのやらうぶちのめせ ぶちのめせ。」三孝「ア、、とかく色男は、どうもそねまれるヨ、そねめ／＼。」由「仇さん、マア此のやらうのごしゆでんの譯はえ。」仇「エ、その譯かえ、なァに何でもねえが、肩はづしで居るからサ。」ト手輕くいつてしまふ。幸「おきやァがれハ、、、、、、。」みな／＼「ハ、、、、、、ハ、、、、、、此奴はいい業晒

しだ。」三「何のをかしくもねえ。仇さんもう些と默つてゐなさればいいのに忌えましい。」仇「ホ、、ホ、、、、、、ア、をかしい。」三「何のをかしい處か。」幸「手前もう些と、仇吉だまつてゐてやればいい。餘程三孝がいつちよふり、いい男のやうに見えたものを、大しくじりだ。サア／＼呑まつし呑ましし。」米「ア、いい氣味／＼、三孝一人おちが來ちやア、ごふはらだとおもつたら、マア／＼それで安堵した。時にさきねえか。」三「どうして／＼、おかされ／＼。」幸「それはごていねい。」幸「ときに幸さん、邪見な者だねえ、ちつとおさしなさらねえかネ。」幸「イヤ、もうゐるせえ小兒どもだもの」トよくをだ 米「へイ有り難し、殊に小兒共とはありがてえネ。」与「なアに、不殘本卦還りをしたらうと思つてヨハ、、、、。」米「ハ、、、、、ナニ笑ひ事ぢやアねえ、餘りむごいお見立だ、餘人は知らず私なぞは。」仇「七十の賀いはひかえ。」三「どうも仇吉さんはあんまり情ねえヨ。」幸「似た者は夫婦よなう。」米「へイ／＼兼て承知。」幸「イヤおれがやうに、厚皮ぢやアあいさつも出來めえ、少し色氣を兼ねようか。」仇「ナヤそれでも少しは色氣が。」幸「エ、やかましい、おれを爰へこまでようと思つてし手の一がいやがるのは承知してゐるわ。」仇「きつい走り走りだヨ。オヤ承知といへば、与さん爰へ行つた使はどうしたねえ。」幸「さうサなう、もう一ぺん聞きにやればいい。」仇「お聞きよ由さん。今頼んだ使はどうしたんだらうねえ。」米「さうだつけね、あんまり騒々しかつたから、ツイ失念、ドレ一ツ

寸きいて參りませう。」トたちあがる。三「オツト〳〵、迎へに行き者多勢ありだ。一人先驅け高名などと、その拔掛はならぬ〳〵。」新「なるほどこれは尤も至極、そんならだれでも掛で行かう。」三「よし〳〵承知だ。」由「凡そ世界に名木名鳥、問はしやれ〳〵。」ごぞんじのはやこと、出たらめのかけあひ、あるきながらもいふこと有り。米「問ひましよ問ひましよ。」由「木に鳥が止つた。」米「何の木にとまつた。」由「松の木にとまつた。」米「何の鳥が止つた。」由「鶴を止らがして、是りよを其方へ渡した。」三「請取りかしこまつて、中々もつて合點だが、木に鳥がとまッた。」由「何の木にとまつた。」三「柳の木にとまつた。」由「なんの鳥がとまつた。」三「燕をとまらかして、是りよを其方へ渡した。」由「請取り畏まつて、なか〳〵もつて合點だが。」トだん〳〵はやくなつて、二人ながらせい〳〵といつてゐる。仇吉はすこしじれこんで、みなみなしじうわらつてばかりゐる。仇「モじれつてえよ、いつまでも方がつかねえなう。」トいふ所へ、はしごの音。トン〳〵〳〵。

## 第十回の下

階子を登る足音は、則ち小池の娘お熊。くま「仇さん、さぞ待ちどほだつたらうね、今來なはるよ。」仇「さうかえ有りがたう、おまへが行つておくれか。」くま「アヽ、今日はあいにく、いろ〳〵いそがしいから、ちよいと私が行つて來たのサ。」仇「さうかえ、有りがたう、早く來ればいゝねえおとつさん。」幸「さうヨ、今に來るだらうが、立派して來るには及ばねえのに、亦おれに惚れられようと思つて、

化粧でもして居るだらう。コウ仇吉増吉が來たといつて、手めへ必ず氣をもむなョ。」仇「ホヽヽヽホヽ、お前こそ姤心を起しておくれでないョ、私が色の世話をする人だから。」米「さうか、醉ァ酒の一升も遣つてくれョ、ハヽヽヽヽ。それはさうと困つた奴等だ、客をば其處除にして、アレ見や、不殘一所へこぞり寄つて、順廻りになつたのだナ。サアく\もういいく\、便宜がしれたから、騒ぐには及ばねえ。」山「サアく\みなの者ども、もうよいく\、返事が知れたから行くにおよばずく\。」三「サアやめたりく\、ア、大きに骨を折つた。汗びつしより。」幸「ア、あつい。」幸「そんなに骨を折ることもねえス、手めへたちも持ちめへの家業に、さう骨を折ればよかつたに。」新「みな一同におそれいり。」幸「時にお猪口頂戴。」ト又もや酒の騒がしくて、がやく\したるその所へ、下より女の聲。「おくまさん。」くま「アイなんだえ。」トはしごの口へ行く。下よりは増吉が、増「おくまさん、先ほどは。」くま「オヤ増さん、サアお上りな、仇さん、増さんが來なすつたョ。」仇「オヤ増さん、サア此方へお出でョ。」トいふうちに、おくまもろとも増吉は、仇吉が側へすわる。そも増吉が出立を、こゝに畧して記すときは、まづ素貌に薄化粧して鮮かに、髪は初みどりにてすきあげ、毛すぢすきとほりてうつくしく、割唐子に結び、本鼈甲の短きかうがい、六寸ばかりにて、兩方の端の角にこしらへたるをさし、野代の櫛に丁貝と明珠にて、おもとを彫り入れた、政子の形なるをちよいト差し、衣裳は、

絲織の藍二筋、媚茶の茶丸の裏を付けたるを、二ッ對に重ね、もつとも黒繻子の通し裏衿、上著下著と同斷、繻絆の衿は鼠繻子に、白絲と媚茶にて、花の丸を浮織にせしを掛け、袖口は縮緬絞りのちりめん、三寸程奥の裏袖、折り返しに附けたるは、とき色ちりめんなり。腰卷はちりめん極細かきむきみ絞り、裏は藤色ちりめん、ゆもじは極薄淺葱の風織ちりめん、帶は黒の唐繻子に雨龍の丸く飛び〳〵に、織り出せし九寸巾、唐棧御本手縞を、鯨にしたるを結びし姿、實に座敷を盛んに勤めし時をも、思ひやられてゆかしけれ。

增「幸さんお出でなさいまし、たび〳〵お人を有りがたう。どなたも。由さん今日やァ。」トいひながら一座をずういと見わたして、しとやかにあいさつをして仇吉にむかひ「仇さん有り難うヨ。早く來ようと思つてゐたが、兄さんが來て居てネ外に二三人連衆が有つて、やつと今出て行つたヨ、それからやう〳〵來たヨ。もう〳〵幸さんと聞いたから、來たくつて〳〵。」幸「また增さんが嬉しがらせをいふヨ、サァマァちよいとあげやせう。さういつても能い内室になつたなう。」仇「オャ氣障な、增さん女房さんだと、かはいさうに、ネエ私ァもう女房はきついきらひだよ。」幸「おつなところで急腹だな。」增「此の子はとかく苦勞性で、他のことまで氣にしますわ。」幸「身にひきくらべて、なんでもねえことまでも、はらの立つものサ。コウ仇吉、手めへ此の頃ァ女房もちに色が出來たな、どうで色が活業だから、まんざら堅くは出來めえが、

折角弘まつた仇吉といふ、名前にかならず疵を付けるなヨ。」ト、いはれてギックリ仇吉が、思はずお増と目を見合はせ、胸にあたるをまぎらかし、仇「とんだ古び者だネ。」増「すつかりあたつてビツクリだらう。」仇「陰陽師身のうへ知らずとやらサ。」幸「ナゼ。」仇「おまへさんは内室さんはないのかえ。」

幸「コレ仇吉、手めへにも似合はねえ、そんなあまくちで、幸さんを追ひ拂はうとは料簡違ひだらうぜ、おれは足が遠くつても、辰巳のうはさは日に幾度か、聞かねえことは月に算へるほどもねえぜ、まさか手めへの善し悪しを、知らずにくらす幸さんだとおもふか。ハテ及ばずながら、斷うなつて、ひいきに思ふ心からは、どうぞ出世をさせてえと、陰ながら案じて居るは、始終手めへをおれがものにしやうといふ程勝手はいはねえ。コレ串戯にもおとつさんと、不斷其方が心易く、まんざら他人にしねえと思やア、たとひ色男にそひてえとか、まじめに亭主をもちてえとか、いふ日になつても逃げはしねえ、相談相手になる氣だぜ。ホイこれはしたりわれながらわりい酒だ。」トいひながら、ころりとこけて高いびき。新孝に孝壽樂を始め、由次郎さへいつしかに、此の座をふらほら立ち消えして、仇吉増吉お熊の三人、何かさゝやくその時しも、七ツ坊主の拍子木とともに、座敷の道具をはりて、旧風に慕る衣帶、しやら解けにくき苦界の風姿、縁の有るのを誠といはんか。他の意見や義理詰に、思ひ切つたり慎んだり、出來れば戀の情もなく、又實直きに取り直せば、仲人あらぬ中なりとも、一

旦契る男女の情、離れて操にかなふべきか、逢はぬ昔とあきらめても、手輕く止めてしまはるゝものにてあらば、なか／＼に頼もしからぬ浮世ならずや。とはいへ誠をたて通せば、たがひの運の開がわるく、出世の棧道踏みはづし、玉の輿にも乘る身分を、味噌こしさげて豆腐屋へ、通ふたぐひはまだなこと、命を捨てる惡縁の、あるを思へばなか／＼に、かりそめならぬ男女の中、むすびはじめぞ大事なれ。かかりし後も仇吉は、戀ぞまさりし丹次郎に、一日逢はねば千秋の、思ひをこゝに增吉が、情に折々逢ふことの、數かさなりてゆかしさは、男も同じ物案じ、今日は首尾して二人づれ、去頃かけし願込の、日朝さまへ禮まゐり、人目しのべど目にたつを、まぎらかしたる枝藏の、間を行けばいとゞなほ、見送らるゝも恥かしく、お客と行けば顏しかめて、這入るもいやな新道の、さもあやしけなる仕出料理やの、二階へこそはかけて入る。兼てなれたる家内の樣子は、くだ／＼しければくはしくしるさず。さて仇吉は隔てたる、ふすまの明きしをぴつしやり立てきり、仇「オ、あつい。」ト帶を解く。丹「たいそうせつ込むの。」仇「オヤあつかましい、さうぢやアないわネ、心遣ひをして、知つた人に逢ふめえ／＼と急いだから、汗が出るものを。」丹「〇〇〇〇〇〇〇。」仇「おふざけでないョ、氣恥かしい。」ト、云ひつゝ丹次郎の羽織をぬがせ、袖だゝみにしながら、仇「そんなにわるくはないねえ、紋もよく染めたねえ。」丹「ム、甚く能く出來た、是れをば大事にしねえぢやアならねえ。」仇「ナ

ゝまたこしらへるわネ、大事にせずといいが、米の字に知れちやアわりいから、増さん處へ預けてお置きナ。」丹「さうヨ、そのつもりだ。」トいひながら〇〇〇〇〇。仇吉は笑ひながら、丹〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇、〇〇〇〇〇。」〇、〇〇〇〇〇、これも唄妓のしたゞの子か、鄰家で唄ふ一中節〇根曳の門松、

上音へわしがなじみは三重の帯、長い夜すがら引きしめて、あづかるものは半ぶんの、主はわすれてゐさんすか、すぎし月見は井筒やで、そこいくまなき夜とともに、のみあかしたる面白さ、いよのうき身にくらぶれば、いとゞおまへがいとしいと、えりにつゝふし忍びなき。下略

仇「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」丹「〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、」仇「アレサア

さういふことをおいひだヨ、人をば思ひいれいぢめておいて、にくらしい。」丹「そりやアいいが、ひもじくなつてきた、はやくなんでも喰はしてくれりやアいい。」仇「おまへはよつ程手まへ勝手だヨ。」丹「ナゼく。」仇「なぜといつて、たつた今、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」丹「〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇。」仇「〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇、丹「ふん何が來てもいいといつて、米の字が來たらどうおしだヨ。」丹「ナニ構ふものか、どうでもいゝどきようなことを言てゐらア。」仇「ウ、噓ばつかり。」トいふところへ、下女「お肴が出來ました、上げませう

か。」丹「ナイ〳〵、はやく出してくんな。」（これよりしばらく、酒食のたのしみありてうち、○○○○○○○、やゝありて、）仇「それぢやァ急度、そのつもりだョ。」丹「承知だ、そんならさきへ出て、石屋の門に待つて居るぜ。」仇「ナ、マァお待ちよ、○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○。」丹「また眼を悪くしちやァいけねえぜ、今度ァモウ日朝さまも、お聞きなさつてはくださるめえ。」仇「目がわるくなると、おまへのせえだから、一生取付いてはなしやァしねえョ。」丹「その口をわすれなさんな。」トいひながらはしごを下りる。茶屋「オヤだいぶおはやいお歸りでございますネ。」（丹次郎はかんぢやうをわたし、おもてへ出る。仇吉は二かいをおりかゝるもこはごは用心する。）丹「ハイ毎度お世話さまで。」茶「イエモウどういたしまして。」ト、につこりわらひ、「目が短うございませう。」仇「ハイナニさうでもないが、どうもだゝを言つてこまらせやす。」ト、何かわからぬのろけを言つて、出でる拍子に米八が、米「オヤ丹さん。」トいひながら、丹次郎が羽織をぐいト引つたくる。さて是れから仇吉米八兩人の、大喧嘩拾遺の三の切、三冊出來いたし候。

梅暦餘興　春色辰巳園卷之六　終

# 辰巳園第三編序

良弼の名將義貞も、勾當内侍に惑ひて、淫行のそしりあり。佛弟子の難陀も、美女に春心の迷あり。されば凡下の愛情は、迷海の深きに溺れ、戀の山路の木の根に躓れて、なほ春情の離れがたきを思ふ。他の意見や教訓で、思ひきらるゝものならば、親兄弟の勝手によくとも、亦其の道の不人情、出來た情人ならどこまでも、捨てぬが實意捨てられぬが、縁の橋間や棧橋に、紡ひし舟の假枕も、すゑを通し矢切れぬ木場、たがひにはなれぬ仲町と、噂も嬉しき春の梅、秋の尾花も詠めに倦かぬ、其の全盛を聞書きして、長く續きし梅暦、枝から得他の辰巳の園、穿ちといふにはあらねども、遠く望みし富士が根の、雪より白き唄女の肌、ちよつくり内所に思はくも、まんざらでなき筆の綾、鄰家あるきの梅が香ならで、路方へだたりし金龍山下、辰巳よりはるかに猿の花押、淺艸に居て婦嘉川の、世界はすこしおし強な、二人船頭汐先爾、骨を折つても乘切れぬ、新地の端の鼻元思案と、笑ふは郭外岡目のわる口、狂訓亭の野暮な氣で、能くも綴りし辰巳の三編、推量の一條も、まぐれ當りでさしをつく、自惚未可通の婦客はおろか、地獄の沙汰も作料次第で、書くが戲作の活業なれど、櫻川とか壽輩とか、其の名があればその人の、おかげで趣向もする樣に、よみ給ふのは素人分別、近來門人さ

へ川はぬ春水、巧拙ともに筆一本、たゞし此の書の脇艪といふは、清元延津賀の校合のみ、外には河岸も突かざるよしを、いふも以來の爲永と、賴みに依つてをこがましくも、序文のやうなることをしるすは。

乙未の春如月

富が岡連の

一松舍竹里述

# 梅暦餘興　春色辰巳園　巻之七

江戸　狂訓亭主人著

## 第一條

丹「ヤお米か、何處へ行つたのだ。」米「私よりおまへは、何しにこゝの宅から出たのだえ。」トいひながら、無理に脱がせし羽織を取つて、彼の料理やの軒下の、泥水へ投げ込みて、駒下駄で踏みにじる、丹「コレこの女ア氣が違つたか。」ト、丹次郎も氣色をかへて、米八を引きとらへ、料理茶屋の下座敷へ、連れ行きて引きすゑる。米「サア羽織を、泥だらけにしたが悪かア、どうでもしておくれ。私は顔へなすられた泥から見れば、仇吉さんのこせへて著せた、羽織ぐらゐを泥にしたとてつまらないわ。」丹「ナニあの羽織が、仇吉のこせへてよこした羽織だと、コウわるずゐも程があらァ。今の羽織は三孝が、下谷の旦那にもらつた羽織だが、今日行く處の旦那へは、すこし遠慮な紋所だから、取り替へて借してくれろと、先刻途中で取り替へて著たのだア、何とも三孝に言ひわけがねえ。」米「言

ひわけがなくば、私が三孝さんに逢つて、あやまるからそのまへに、おまへは三孝さんに逢つて、仇吉さんがこしらへてよこして著た處を、米八が見て泥の中へ踏み込んだから、三孝さん傾つたのだといつていぢめるつもりにしかけたから、そのつもりにしてくれろと、いつてお置きな。しかし三孝さんが實正に、旦那にこせへてもらつたのならば、其所あたりに隱れて居て、この仕打を見て居たならば、さぞくやしからう腹がたたうが。」丹「コウ〳〵米八、マアおめへはどうしたのだ。なるほどおれも今までは、すこしぐれゑの浮氣な沙汰を、されたこともあるだらう、何もそんなに、著た衣類ぐれゑなことまで、其樣に顏に筋を出して、腹を立つことはねえぢやアねえか。それほど愛想がつかしたくば、どうも氣の毒だから、いつそ思ひきつて切れようわな。」トいはれてぐつと米八が、せき立つ胸をおししづめ、今丹次郎がこの一言、いよ〳〵爰に仇吉が、隱れて居るに極まつたりと、思へば心に計、わざと色氣と笑ひをふくみ、さもしただるく寄り添ひて、米「さういふことならば、私があやまるから堪忍おし。」ト丹次郎をひきよせ、手をとりて、見かへる此方の中じきりは、いつしか障子を立てきりて、茶屋の内所の客と見え、男女の聲のいりまじり、かしがましくこそ聞えけり。また仇吉は二階より、下りかゝりしが米八の、姿を見るより裏ばしご、おりて表をさしのぞく、其の四疊半へ丹次郎と、米八がつかみ合はざるばかりにて、入り來りしゆゑ今さらに、前後案じて佇聞けば、彼の

米八が中音にて、他へきかせる下心、それと知らずに立聞けば、さもうち解けた風情にて、米「誠にどうすれば、こんなに惚れるもんだらうねえ、私アもう／＼、どうも座敷に出て居ても、風と思ひ出すと逢ひたくつて／＼、立ちきれない時があるよ。私が此様に迷つて居たら、さぞ他が陰で、わらつて居るだらうけれど、おまへもまた私をかはいがるやうに、他人をかはいがる氣づかひは、ないと思ふと、妬心をやく譯もないが、和合い時のことをおもふと、ツイ他人には、指をさされるもいやだ、どうぞいつでも斯うして居たいと思ふと、誠に氣はづかしい事も忘れて、夢中になるヨ。ア、アレサくすぐつたいヨ、アレ。」丹「コウ／＼米八、おめへどうぞしたか。」米「どうもしないが、だれか覗きはしよいかネ。しかしくやしいほど私やア迷つたヨ。仇吉さんも此様に、かはいがつておやりか。」トいひながら、丹次郎にしがみついたる姫蔦の、白き衿元掛香の、梅が香かをる米八が、色をふくみしその姿、また仇吉のおよばざる、笑顔愛敬千金の、價も實にをしからぬ、風情に男も仇吉が、歸り行きしかまだ爰に、忍び居るかもうち忘れ、丹「おめへばかり惚れたやうに、恩にかけることもねえ、此方も迷つて氣抜のやうに、どうぞはやく引込んで、二人が同道に堀の内さまへでも、參るやうにしてえと、思つて見たり、その時は眉毛を落して、丸髷に結つて、さぞ秀美な年増になるだらうと思ふと、今ツから樂しみだわ。」米「イエ／＼、仲町を引いても元服はしないヨ。」丹「なぜ／＼、また他處

へ出て浮氣をする氣か。」米「何がくやしくつて、引込んだくれゑで又出るものか。」丹「そんならなぜ島田髷で居ようといふのだ。」米「それだつても、おまへが新造が好きだものを。島田でゐたら、はやく見捨てもしめえかと、はかないことまで思つてサ。」丹「ナニつまらねえことを言はア、おいらはまた早く元服でもしたら、少しは他の目につくのが止んで、氣がをさまるかとおもつてゐらア。」米「ハイハイ、おほしめしは有りがたいが、マアいいかげんに聞いてをりませう。それはさうと二三日の中に、山谷まで同道に行つておくれな。」丹「延津賀さんの宅か。」米「ア、、吉原へ行つて此糸さんにも逢ひたし、いろ〱用が有るから。」丹「また少し、幼年なじみの色の顏も見たし。」米「おまへおやアあるまいし。」ト跡はしばらく言葉途切れて、米「ナニエ。」丹「氣がかはつていいといふ事ョ。」米「おふざけでないアヽレお待ちョ。」トあくまで和合き二人の樣子、立聞きしたる仇吉が、せきにせいたる羽織の始末、こらへかねては胸の火の、ぱつともえたつほむらより、髮のかざりの鼈甲も、十二の角と振り立てて、驅け入る勢ひ丹次郎は、さすが二人に面目なく、表のかたへ逃げ出して、前後思案の付かざるは、是れぞ戀路のならひにて、他見の評論あるべからず。さて米八は眼のふちを、ほんのりとせし上氣の顏、びんのほつれも仇吉が、目にはさはりししどけなさ、齒を喰ひしばりてすつかりと、膝付き合はして腹立ち聲、仇「モシ米八さん、今ちよつとうけたまはつたが、私が紋の付いた羽織が

お氣にさはつて泥に踏込んで、まだ倦きたらねえで、だいぶ丹さんに洗ひだてをしなさるが、せう
でもつれて兎や角と、もめたあげくは丹さんが、いつもしみ〴〵離れがたない兼言の、つもる仇吉丹
次郎と、命をかけた二人が中、お氣のどくだが米八さん、どうでおまへにはない縁だと、思ひきつて丹
さんは、私におくれな。」米八はせゝらわらひ、米「御念の入つたごあいさつだが、マアよしにしませうよ。他の
亭主を盗んで置いて、知れた時にはもらはうとは、なるほどおまへはいいおしだ。旦那や座敷で、食
傷する時もあらうに、盗み喰ひまでこせつかずともいいぢやァないかえ。」仇「オヤ米八さん、私が何
を盗んだえ、あつたなことをおいひでない。丹さんはおまへの亭主か知らねえが、私はおまへを丹さ
んの、内宅さんだと一度でも、引合はせられたこともなし、ひろめをしたと沙汰もきかず、この頃ま
では何もしらず、二人で落ち合ふおざしきの、跡ではおまへに丹さんの、事も咄してのろけようと、
おもつた時があつたくらゐ。そのいちだん〳〵妬心を、おまへがおこす口ぶりから、やう〳〵氣がつ
く私がうつかり、勝手をいへば私の色を、おまへに取られてる様な、ものだと思ふが隠れてゐる、
ふしように料簡してしまふから、此の後丹さんは私一人でかはいがるヨ。」

さも〳〵米八が、丹次郎にしつぶかくなせしは、仇吉に氣をもませて、意趣を返すはかりごと、
今また仇吉が丹次郎と、さも深くちぎり合ふことを口にいだして、はゞかしとおもはぬは、これ

亦米八に、心をせかする手くだなり。猶その爭ひのらちあかぬは、色をあきなふ全盛の、互にはしたなしと思はれじと、用心するゆゑかくのごとし。

米「そりやァおかたじけ、どうぞ澤山かはいがつて、遣つておくれといひたいが、マアよさうヨ。どうで男の名聞だから、色も戀もするほどの、男でなけりやア私もまた、惚れて苦勞はしないから、まんざら止めろといふやうな、野暮をいふ氣はないけれど、おめへのやうに遠慮なく、つらあてがましくされて見ちやァ、なんぼ弱氣な溫厚でも。」仇「コウ／＼米八さん、その面あてがわからねえヨ。私のはうでこそ丹さんは、おれがものだとおめへの仕うち、是れ見てくれろといふやうな、ことがいくらもあつたけれど、だん／＼樣子をきいて見りやァ、私よりかは前へ、色になつたさうだし、丹さんだつても、おめへを捨てちやァ、すこし義理が惡いとか、いふやうなはなしを近ごろきいたから、ア、わりいことをした、ほかに男も無え樣にと、思つて見てもこの道は、もめる每度に深くもなり、意地にもなつて丹さんも、私を戀つて日に一二度、顏でも見ねえその晩は、ろく／＼寐ねえで案じてゐると、いはれて見れば此方もねこそぎ、身をいれて苦勞をする氣の二人が中と、言つたらおめへは猶の事、上氣くなるでも有るだらうが。」米「コウ仇さん、さうふて／＼しく出かけた日にやァ、世間も渡るに氣樂なものだが、そんな人情しらずには、口をきくのはむだなわけだ、こはい女もあるもん

だ。」ト、言ひはなして立ち上れば、仇吉も憤然となり、米八が衣裾をとらへて、引き止める折から、
鄰家で踊の地歌、稽古と見えて足拍子、

〽とめた　〽はなせ

〇とめてよいのは朝の雪。

## 第二條

腹立ちまぎれに立ち出づる、帶背をとつて仇吉が、うしろの方へ引く手をば、二足三足小戻りし、拂ふ手前は米八が、きそくのはずみするどくして、よろめく仇吉爪づく米八、たがひに落す簪は、火入にあたつて二本とも、をれても折れぬりんきの角、あらそふ風情を先刻より、知つてはゐれども其の中へ、仲人りかねつゝ、料理やの、夫婦は氣をもむ許りなり。此方の二人は今更に、はしたないとは知りながら、止りかねたる胸と胸、手と手をとらへてはてしなき、折から障子の外よりして、此處へかけこみ二人がなかへ、割つて入りたる一人の女、二人顏を見合はせて、仇米「延津賀さん。」津「アイ仇吉さん米八さん、出過ぎる女とお思ひだらうが、マアこの喧嘩は、わたしにおくれな。ハテ野暮らしいといふではないが、色も香もあるおふたりが、てんでに花をちらすやうな、しうちはいやなことぢやアないか。米八さんとはしよ手からなじみ、仇吉さんはお增さんのお宅で、此間おちかづきになつ

て、閒もないけれど、東西ともに勝ち負けを、つけてはすまぬ關と關、他見の關もはゞかりも、捨て地金の喧嘩だから、いらざるお世話とおいひだらうが、元をたゞして見る時に、始終さばけて相談づくに、解けてはなしをしない日には、肝腎の男の意地、どつちへしても義理がわりいと、氣が付いたときは右も左も、止めて思案をしなければ、ならないやうにならうぢやアないかえ。さうして見ると、思ひもよらねえ處へ、團扇があがることがあるまいともいはれずか。何にしてもおたがひに、緣の有るのを誠として、堪忍するのが色のたのしみ。どうで戀路といふものは、邪魔や他見に遠慮があつて、男も女も氣をもんで、苦勞をするのが身の樂しみ。自由になると澤山さうに、なつておのづと愛想づかしの、出來るがいくらもあるならひ、いづれにしても今日はマア、わたしにあづけてお歸りヨ、どうぞさうしておくれヨ。」ト、右と左を見かへれば、女の性の常として、淚にじみし花紅楓、鳴呼丹次郎はあやかりものかな。やゝしばらくして、仇米「せつかくおまへの御深切だから。」延「とくしんしておくれかえ。」米「マアともかくも、私はおまへの言葉をたつて。」仇「愚癡な育ちの私だから、心はどうも解けないが、延津賀さんの御あいさつにめんじて。」延「いやみをいはずにマアお聞きヨ。アノ詞升がした刈萱の狂言ネ、女心のねたみから、男に家を捨てさせて、石堂丸の身の難儀、生者必滅會者定離とやら、佛さまのをしへではあらうけれど、めん／＼苦勞をする處は、今日どうぞ安ら

かに、くらしてときたま樂しみに、色も戀もするがよいぢやァないかえ。手前勝手なやうだけれど、腹を立つたり喧嘩をしたり、とりこし苦勞した日には、壽命が縮まるばつかりで、座しきの邪魔にもならうぢやァないか。マァ何にしても米八さん、おまへは先へお歸りヨ。こんなことが世間へぱつと知れでもすると、よくないわネ。」米「そんなら今日は、おまへの言葉にしたがひますが、あんまり私が氣がいいから、年中他にふみつけられて、らちあかずだといはれますヨ。」鳥「あんまりさうでもありますめえ、男の著てる羽織さへ、泥水へふみつけたがら。」米「顏をふみつけるより罪が輕いヨ。」長「コレサ米さん、どうしたもんだな、仇吉さんもマァだまつておいでヨ、サァ米さんおまへのといふのに、情がこはいねえ。」米「アイそんなら、萬事おねがひだヨ。」鳥「ム、ヨ承知だヨ、兩方ともにたてをやるぜ、下手に番附へ出して見な、御看官が合點しねえわな。仇吉さんなりおまへなり、ひけをとらせるさばきはしないヨ、マァお歸り。」トせり立てられ、心殘して仇吉へは、只會釋してかへりゆく。跡には茶屋の女房が、米八を送り出で、また奧ざしきへ顏を出し、延津賀に向ひ、女「姉さん大きに有りがたう。」鳥「大きに有りがたうぢやァねえヨ、こんな時ははやく其處へ出て、何とか角とか別をつけるのが、茶や舟宿業の役だわネ。いかに年がわかいといつて、夫婦ながらぼうせう〳〵ばかり、いつしるることもねえ。」女「それでも私は、丹さんか米八さんにつらまつた時は、ほつと思ひ

ましたわ。」米「何のびつくりする事があるものか、たかが焼餅喧嘩だァ。色をしたとつて、跡のへるもんぢやァあるめえし。しかし仇さんにやァ丹さんも、餘程吸ひとられたらうノ。」仇「オヤ大違ひ、まことにそんなことにないヨ。たゞ氣をもむばかりだわネ。」米「氣をもみッくらでは、どつちかといふと、米さんが餘計だわネ。」仇「ム、竹蝶吉とかいふ子のことかえ、そりやァほんの小僧ぢやァありませんか。」米「どうして〳〵、歳はいかないけれど、どんなに如才のない子だらうと、いふと私がけしかけるやうだが、モウ〳〵おとなしい顔をして居て、男を嬉しがらせる大名人、その癖丹さん一人をあてにして、少しも實正の色はしないヨ。」仇「オヤ油斷のならねえ、また一ッ氣障がふえた、いめえましい丹さんだなう、いつそ思ひきつて切れようか。」米「サア〳〵はやく切れておしまひ。」仇「イヤイヤ、どうもさうはならない、くやしいねえ。」米「それお見な、何にしても私と同道に、増吉さん宅までお出でな、今日はどうしたか、奴を出稽古の處までよこさねえから、聞きながら行つて、お増さんの智慧もかりて、マァ何とか濟ましかたをしずばなるまい。誠にいやな役だねえ。」仇「堪忍おしな、其のかはりもしも此の事が。」米「成就したらば、お禮參りに二人連か、チット油濃いの。」仇「何サさうぢやァないよ、おまへに急度恩をかへすといふことサ。」米「マア兎も角も、出かけようぢやァねえか　それとも丹印でつかれて歩行けずは、おいらの肩へでもつかまつてあゆびナ。」仇「いやだヨ

お津賀さんふけえきな。」与「いいおやァねえかさういつても。實にいやだヨならば、何も喧嘩をするわけもあるめえ。」仇「それだッても、せつかく私がこせへた羽織を、泥水へふみこんで。」与「ナニサナ、今妹が（これはこのれうりやの女をさしていふなり。）すぐに洗張屋へもたしてやつたが、しみも疵もなしにきれいになるとヨ。よしそうならねえといつて、金をかけりやァまた出来るもんだから、いとひもしねえが、折角こしらへて着せて、のゐけようといふ所を、泥へ入れられたから、そこがくやしからうと思つて、はやく直しにやつたから、米の字はしらずか。そりやマァ堪忍して、サァ同道においでな、サァ〳〵。」ト、引き立てられて仇吉は、やう〳〵に立ち上り、四ッに折れたかんざしを一ッに寄せ、与「コレお見今折れたかんざしの、この紋をお見、米八さんのも私のも、同じやうに丹さんの紋だヨ。」延「二人ながら何でそんなにのゐくなつたらう、おいらはまたそれ程いいともおもはねえが。イヤそれよりかまのかんざしも、二本ながらおいらにまかせて置きな。」ト紙に包んで懐中し、胸にをさめしこの喧嘩、まだこれなりに済まざるを、知れども中へわけいりて、月日をさきへ延津賀が、さしあたりたる當座の作略、猶又仇吉米八が、再度の出合ひ大喧嘩は、つゞく巻にてよみたまへ。

さても〳〵延津賀といふものが、こゝへ出でしは山谷より、婦多川へ出げいこにて、弟子中六歳の順番にて、よりより稽古の宅は違へり。此のれうりやも妹分にて、通ひ稽古の弟子中なり。

扠も仇吉延津賀は、彼の料理屋をうちつれて、出でてお增が方へ行く、向うの方より櫻川の、由と壽樂と二人連。仇「オヤ由さん壽樂さん、何日お歸りだえ。」由「きのふ日がくれて歸りやしたが、イヤ仇吉さんに、壽樂がこんど出來た色のはなしを、しねえぢやアならねえ。」仇「オヤさうかえ、土産をさきへよこしておいて、一ト晩のろけばなしにおいでな。」壽「聞人をたんと集めておいてくんな。」由「すこし怪談めえたはなしだから。」仇「田舎で出來た色ごとなら、いづれ獵人の娘かえ。」由「あたらずといへども遠からず。」延「近いとわたしも聞きにいくけれど。」仇「よしかお津賀さん、きかない方が仕合だヨ。」由「ちがひなし／＼。」壽「サア／＼でえぶ風のわりい請だ、行かう／＼。」仇「ハイさやうなら、また後ほど。」由壽「そんなら後にヨ。オイ／＼米の字によろしく。」仇「しらないヨ。」

梅曆餘興　春色辰巳園卷之七　終

# 梅暦餘興 春色辰巳園 巻之八

江戸 狂訓亭主人 著

## 第三條

宮薗ぶし上書へきいて小ひなが胸いたみ、癪と涙をおしづめ、不粋なこたへおや有るまいし、面中の諸わけをば、知らぬ野暮でもあるまいし、無理言ひかけて氣をもたせ、おまへの心がすまぬかいな。口舌するのが樂しみか、無理は男のつねなれど、いひわけするは女子だけ。中畧 米八「あの子はいつでもふく精出してきらふよなア、しかし、むかしから男といふものは、むりをいふに、極つてゐるものかしらん。」トいふは米八丹次郎、かのごぞんじの中裏に、さし向ひなる口舌のなかば、丹次郎が言分を、聞き果したる跡と見え、まじめになつて米八が、米「そりやアどうもしかたがないのか、おまへのお云ひの通りだが、色なら色らしく、なんぼ私のやうな、見る際もねえものだつても、[illegible]丹さん。」トくやしさうにちからを入れ、「ようく考へて見ておくれな、一番初手はどうしたつけ、それからどうして

これまでにした、どのくれゑつらい思ひをしたといふことまで、とつくりと考へて見たうへで、わちきが無理か、仇吉さんが尤もか。」トいひかけしが、少し落付いたやうす、胸をさすつて、米「トいふのもやつぱり、此方が無理かえ、これほど苦勞くげんをした者に、またも此の心勞をさせても、向うに勝を取らせる料簡になつた人の心だもの、事をわけていへばいふほど、結句にくしみを掛けられたがるやうなものだ。實正に私ほど、はかないものはまたと有りはしまい、唐琴やの宅に居てからいろいろ苦勞して、此絲さんの情一ッで、やう／＼住みかへに出てからこのかた。」めに一ぱいなみだをうかめ、「是れッぱかりも、ほつといふ息をついたこともなく、いやらしいが今日が日まで、あすこゝの客人に、地金で逢つたことはなし、骸一ッを此の人より、丹次郎がことなり外にはどんなことがあつても、穢くしめえと心ひとつで起請を書いて、錠をおろした胸のうちが、氣はづかしいやらくやしいやら、此の七場所の唄妓衆も多い中で、お客とらずに人並に、端手な達引その外も、藤さんといふお客があるから、出來るはずだとくるしい噂を、もし丹さんが聞いたなら、わるく思ひはしまいかと、苦勞したのも自惚から、その苦をやう／＼切り抜けて、ア、うれしいとおもへばまた、此樣な事でやつぱり泣くやうなことが、出來るといふはマア、どういふ因果な骸だらう。これから思へば、仇吉さんはうらやましいほどはらが立つョ。幸さんといふ、立派なお客を取つてゐても、丹さんはまた別者にして、間夫は唄妓

のうさはらしと、樂しんでゐられる體を、また輪をかけてかはゆがつて、樂しませて遣る男の心は、おいらと逢つて苦勞のねえだけ、愚癡がなくツて、世帯じみずにおもしろからうし、手のあることは客取だと、評判の仇吉さんだものを、ァ、無理はねえ〳〵。」トすこし邪見な振。米「ァ、引ム、。」トためいきをついて、「なが口上でごたいくつだらう、あんまりしやべつて口が酢くなつた。」ト、いひながら火鉢の側へ行きて、鐵瓶の湯をついで一口のみ、横にころりと倒れて寢る。丹次郎は始終だんまりで、米八がいふことを聞いて、だん〳〵と考へ見れば、そのいふことにひとつも無理はなし、前々からのことを思ひいだせば、またかはいさうにもなり、わが身ゆゑには、つらい思ひをいくたびとなく氣をもませ、其のうへ色女のくらうまでさせては、いかに女房の米八でも、義理がわるいと、心の底にかんがへれば、考へるほど不びんになり、わが身のいたづらを改めようごと、心を取り直して見ても、今さらにまた仇吉も、捨てられぬ義理もあり、というて此の儘にして置いては、あゝいふ一途な氣性の米八、どんなことをしようもしれず、トいろ〳〵と思案をしてゐる。同じ思ひは米八が、いろ〳〵のことをいうて、それなりに寢轉んではゐれど、あまりはしたなく言ひ過して、丹次郎が實正に、腹を立ちはしまいか。何ともいはずだんまりでばかりゐるのは、合點がゆかすと考へて居る。凡そ男女のなからひほど、世に樂しみなることはなけれど、たがひに凝れば愚癡になり、腹の立つこと悲しいこ

とが、絶えぬならひの多くして、末とげがたきものなれど、はじめよりして誠をたゞし、逢はばなかなか浮薄なことはあらずして、まことはかはらぬ夫婦の情、添ひとげられぬことやはあらん。今や浮世の婦女子を見るに、浮薄にして誠なく、いたづら男にそゝのかされて、逃げかくれするかとおもへば、今日はたちまち心かはりて、その男を見もかへらず、さらばあやまちをあらたむるかと、頼もしくおもふに左にはあらずして、慾に迷ひ情にひかれ、その日／＼に變りゆく、不義不實のことのみなり。嗚呼悲しいかな此のたぐひは、不殘その親の所爲にして、及ばぬ願ひを娘にも、見ならはすればおのづから、身を穢すを恥とせず、貞女兩夫にまみえずと、をしへはあれどなか／＼に、それにかなはぬ世の中なれば、縁にまかしてかはりゆく、枕の數は是非なくとも、慾にまどひて世をうらやみ、錦をまとはんその爲に、心をけがすことなかれ。いつも作者が筆癖ながら、身にはつゞれをまとふとも、心のいさぎよからん娘は、これ千金の美人といふべし。かかる意見はさておいて、彼の丹次郎は風と立つて、押入の戸を明け、抱卷を出して米八が、裾の方からそつとかけてやり、また火鉢の側へ行つて炭を續ぎ、銅壺の蓋をとつて見て、そとへ出でてゆく。米八は始終丹次郎が、どういふ仕うちをするかと思へば、寐もやらず、かんがへて許りゐるところに、丹次郎が今小夜著をかけてくれ、表の方へ出で行きしは、どういふ心かとまた案じられ、取つ置いつ思案をしてゐるうち、丹次郎に歸

つて来る。つゞいて跡より酒屋の子僧、よ「ハイ持つてまゐりました。」丹「すイ〳〵、すぐにもつて来たな、こいつァ有りがたい、其處へおいてくんな。」トいひながら、丼鉢を火ばちの際へもつて来て、玉子をこはして入れておき、唐銅の平鍋へ、鐵瓶の湯をすこしいれて、鰹節をたんとかいて入れ火ばちへかけ、陶器の燗でうしへ、今もつて来た酒をうつし、燗どうこの湯を、かはいらしい猪口で三ばい殘しててうしをつけ、玉子を鍋の中へ落し、そのほか小道具をよろしくならべ、丹「すイ〳〵米八、コウ米八すヤ寝入つたのか。」トそつとゆすぶりおこし、「およね〳〵、これさうたゝ寝しちやァわりいぜ、風をひかァな。サァ〳〵かんができすぎるヨ、起きて一くち呑みねえ、いつものたま子のたゝつこみといふやつを、ちよいとやらかした。」この玉子のことをいつこく玉子ともいふ。「オ、〳〵、とほつた〳〵。」かんがとほつたといふことなり。トいひながらてうしを出して、 のなかへ入れ、蝶足の大きな膳のうへに、いろ〳〵こまかなる瀬戸物をならべ立てゐる。また小夜著のうちには米八が、丹次郎のしうちをつく〴〵見れば、たゞかなしく、腹のたつまゝ言ひ過ぎて、元は主人でありしもの、もつたいないと氣がつけば、さすがに今は氣のどくになり、何と云つたらよからうやらと、急には起きもあがられず、殊に丹次郎が心にも、わるいことをしたと思へばこそ、あのやうに心づかひをして、きげんを取つてくれるかとおもへば、また女氣の張弱く、何にもいはず泣いて居る。丹「サァ〳〵、玉子ももうにえたァ、すイおよね。」トい

ひながら、抱巻の衿をもつて引きおこす。米八は一ぺん釜でゆでたといふ顔、まぶちははれて、前髪はしだらなくさがるのを、きれいな細い手で、ちよいと上へなでて、抱巻を取つて引つかけ、しだらのない帯を取つてはふり出し、細帯の儘かいまきを羽おつて坐る。丹「おめへ、今朝の儘の著類だらう、皺になるぜ、ちよいと著替へればいい。」米「ナニよいョ。」トいひながら、わるがみを出して涙をふく。丹「なんだまだそんな顔をしてゐるのか、モウいいぢやァねえか。」米八ははなをつまらせてなみだごゑ、米「丹さん、はゞかりながらやうじ箱をとつておくれな。」丹「ハイ〳〵。」ト取つて出す。米「ハイはゞかり。」ト取つてずつと立つて、縁側へやうじをつかひに出る。丹次郎は最前の、てうしの酒を丼へあけてあとをよく洗ひ、また酒をいれてどうこへ入れる。下戸のしらざるこのしまつ、さくしやもとより餅ぐみなり、なんとこゝろをもちゐるにあらずや。この時米八は、やうじを使つてしまつて、火ばちの際へすわる。丹「サァ〳〵、てうどいい、前のがとほりすぎたから、また今燗をかけた。」ト、いひながらどうこよりいだす。米八はにつこりとして、米「こりやァもうごちそうだねえ。」丹「イエもう何もございません。」トわらひながらいふ。米「サァひとつたべよう。」トてうしをとる。

これより酒事の中も、すべていやみなせりふあり、ずるぶんともに行きわたりたる米八なれど、さすが女の情なれば、とけてもつれて思ひ出す、りんきの言葉はくどけれど、此の道の好女好男

はかならず推し給ふならん。

## 第四條

丹「ドレ、おれがついでやらう。」米「なァによいョ、またおまへについでもらつて、呑むところか、仇吉さんが見て、どなりこまれでもすると、あたり近所へ外聞がわりい。」丹「これさ米八、おめへがさういふと、ついまたおれも、請けこたへをしねへぢやァならなくならァな。さうすりやァ今のやうに向うへ勝をとらせるのなんのと、心にもねへことまで、おめへにいはれるしか。先刻のやうに、おれがつよいことをいつたのは、心にはねへことだけれど、おれが方でつよくでもいはねへと、いつまでもはてしがつかねへからだァな。おれもわりいとおもへばこそ、おめへに羽織をはがれて、泥水へいれられて、蹴たり踏んだりされて見れば、羽織はをしくはねへけれど、まんざら外聞がよろしくはねへわな。それでも手めへが腹を立つたは、無理でねへとおれが心で、氣の毒だと思へば、くだらねえことでもして、手めへの機嫌を、直させようとおもつて居るのに、まだそんなことばかりいつて、其様おめへ、おれをこまらせたといつて、どうも仕かたが有るめへぢやァねへか。それともにおれのはうから、氣の毒なら身を引けと、いはぬ許りでいぢめるのか。」米「何お前をいぢめるものか、それだけの罪があるから、おまへもいはれるのだらうぢやァないかえ。」ト猪口の酒をのみほして、下に置

き、「そしてまた、為方がないとお言ひだが、仇吉さんと切れてせへしまひなさりやア、何もいさくさはねえわけだアネ。」丹「サアそれだから、いろ〳〵とおれも、男が手を付いて、あやまらねえばかりにしてゐるぢやアねえかナ。わが身ながら考へると、あんまり働きがねえよなう。男らしくもねえ一人前の野郎なら、たとひ女房があらうが、何があらうが、妾てかけはあたりめへ、色は幾人したとつても此方のはたらきしでえ。それにひきかへおいらなんざア、久しい跡からして、おめへの厄界何ひとつしおいたこともなく、斯うして世話になつてゐて、どのつらさげて斯ういふ事になつたかと思ふと、實正におれが心にあいそがつきて、いつそのことに何も譯はねえ、おれひとり坊主にでもなつてしまやア、雙方靜かに納まりも付くし、もつとも左様いふとをかしいが、お蝶もおれぢやアするぶん苦勞しねえでもなし、あいつの前へもわけてよし、また一ッには先だたしつた、唐琴やの義理ある兩親へ、第一番の言譯だから、おれ一人この世を捨ててしめへさへすりやア、いさくさはいらねえといふものだ。只一途にきれてしまへばいいといふけれど、おめへもおれぢやアいろ〳〵と、苦勞くけんしてくれて、色の達入情の出入、引かぬこゝろのおめへだから、なにもかも呑みこんでゐるだらうから、切れるきれぬのいりわけも、承知の上の難題を、立てる日になりやア今の通りよ。それより外に智慧のねえ、一疋前無えおいらだから、言譯のしやうはねえ。」ト、思ひつめたる丹次郎が顔、ぢつと

見つめて米八は、眼にもつ涙はら〳〵、鼻紙で顔をふいて、「丹さん堪忍しておくれよ、これぢやァなるほど、私があくまでわるいのサ。何もおまへに難題をいつて、困らせるのいぢめるのと、さういふわけぢやァあるまいぢやァないかえ。かういつたつておまへもまた、それほどまでに私の前へ氣の毒だと思つてくれる心なら、たとひ氣やすめにもおまへの口から、おれがわるかつた切れてしまふから案じるなと、たつた一口云つてきかしてくれるがいいぢやァないかえ。たとひさうおいひだつて、私の方でもそれをまた、さきぐりもしはしまひぢやァないかえ。もつとも私も、羽織をあんなにしたのはわるくもあつたらうし、おまへに外聞もかかせたらうが、それはもう〳〵あくまでも、私のわるいことにもしろ、私とおまへが對でゐる處へ、踏みこんで來たればこそ、こんなさう〳〵しいわけになつたらうぢやァないかえ。斯ういふとわるいけれど、私とおまへと對でゐるかけを見ても、はらの立つのを我慢して、かげでおまへにうらみをいへばといつて、そこが色のかなしさには、すこしは引けを取ることが有るので、義理といはうぢやァないかえ。其のかはりにはおまへにまた、一入いかはいがられる達入ぢやァあるまいか。私と仇吉さんとあつち此方なら、おまへもそんなに愚痴をいつて、わたいにこまらせるやうなこともいひなはるめえ。さうよきれてしまふといつて、戀の諸譯も達入も、もちやくちやにしてさう〳〵に、切れてしまつて女房の、仇吉さんに心の中を、休めさし

てやりだらうが、何をいふにも私がやうな、ぐうたらな行きとゞかねえものだから、しかたがないわね。また私のはうが色ならば、初手に色と名も付きもしまい。マァともかくも丹さん、だん〲私がわるかつた、どうぞ堪忍しておくれよ。そりやァもう私も、あゝ云ひ出して千代元の仇吉と出合ひしれうり屋のこととしるべし。家内までさわがして見れば、この儘じみ〲と、消えてしまふやうには、土地がらだけにならないからね。丹さんどうぞ斯うしておくれな、これからは私もモウ、すこしも氣障はいふめえから、どうぞこの近所の宅や、又こゝの宅へ呼んだり、今まで行つた内へ行く事はよしておくれな。諸方へ顔出しもならねえと思ふほど殘念だから、トいつておまへだつても、私がこんなにしたから、切れたといはれちやァ、なるほど男も立つまいから、まるできれておくれとはいはないよ。また私も是ほど苦勞して、いいやうにされるといはれるも悔しいから、どうぞ丹さん聞きわけて、このことばかりは承知しておくれな。おもひやりのねえやうに、よしておしまひとはいはないかはりに、急度さうしておくれよ。私もまた願がけをしても、もうこのことをいふまいから。しかしおまへばかり、ひたすら賴んだといて、はたにしやくりては多し、仇吉さんが承知しねえことは、おまへの心にも爲方も有るまいけれど、ハテそこがおまへのかはいがる人のことだから、どうでもならうぢやァないかえ。聞きわけてさへおくれなら、今夜にもおまへが、仇吉さんに逢ひにいつて、よく〲ことをわけて、私

の頼みを言つて聞かして。トいひかけてなみだごゑ、なみだをふいてうるみしごゑの、おもひれあり。「そしてせつかく、こしらへて着せてお遣りの羽織をば、あんなにした言譯を、ようくいつてあやまつておくれな。それで承知してさへおくれなら、今のとほり。しかしまたていぢよチごひをするのぢやァないが、増吉さんの宅や、千代元へちよつとでも行つておくれだト、ついまたわたしも、だまつてゐられなくなる、といつて何も私がさわいだくらゐ、仇吉さんやおまへにやァ、こはいこともをかしいこともあるまいけれど、そこが私のおたのみだから、私のやうなものでも、今までの好身に、顔を立てさしておくれな。ネモシ丹さんお願ひだヨ。ト、和合に出たる利發の米八、丹次郎がいふべき事も、右をいつて左へ釘を、ぐつと一本ぬき差しならぬ當座の理詰に、丹次郎はあげ足のとりばもなく、心の中では仇吉も、にくくはなけれどまた米八が、言ひまはしを聞いて見れば、なぜこんなに利口に生まれて、うつくしい中によわみがあつて、またあるまじき女なりと、心のうちでは賞めてゐれど、わざと手がるく、丹「なにもそんなに聞きわけるの、聞きわけめえのあやまるのと、いふわけもあるめえぢやァねえか。いいやァな米八、案じることはねえ。手めへの氣のすむやうに、近いうちにやァおれがするから、なんにもいふことはねえ。案じなさんな、マァだまつて見てゐるねえ、氣のやすまるやうにしてやるよ。」米「アイ。」トいつた許り酒を吞んでゐる。こゝろの中では、しかし丹次郎が、あんまりさばさばとしたあいさつゆ

ふ、どういふこゝろであゝいふのか、延津賀がいひし事も、ぎつくり胸に當つて見れば、どつちへも團扇はあがらず、おもひも付かねえところへ、團扇があがることもあらんといひしこと、今さらおもへばお蝶といふこぶもあり、もし又ひよつとほかにも、あやしいことでもあるや、それならばあのやうに、いひもせずいはれもせぬにと、いろ〳〵にさきぐりをして、とつおいつあんじて見れば、なかなかに油斷のならぬことぞかし。まづともかくも和かに、機嫌をなほしておだやかに、何くはぬ顔に日をすごし、そのうちひそかに、氣をつけて見るにしかずと、心ひとつに請けごたへ、やう〳〵思案を定めても、兎に角涙はとゞまらず、氣より病のさし起る、癪をおさへてゐたりける。

白妙の妹が衣に梅の花いろをも香をもわきぞかねつる

梅暦餘興　春色辰巳園卷之八　終

梅暦餘興 春色辰巳園 巻之九

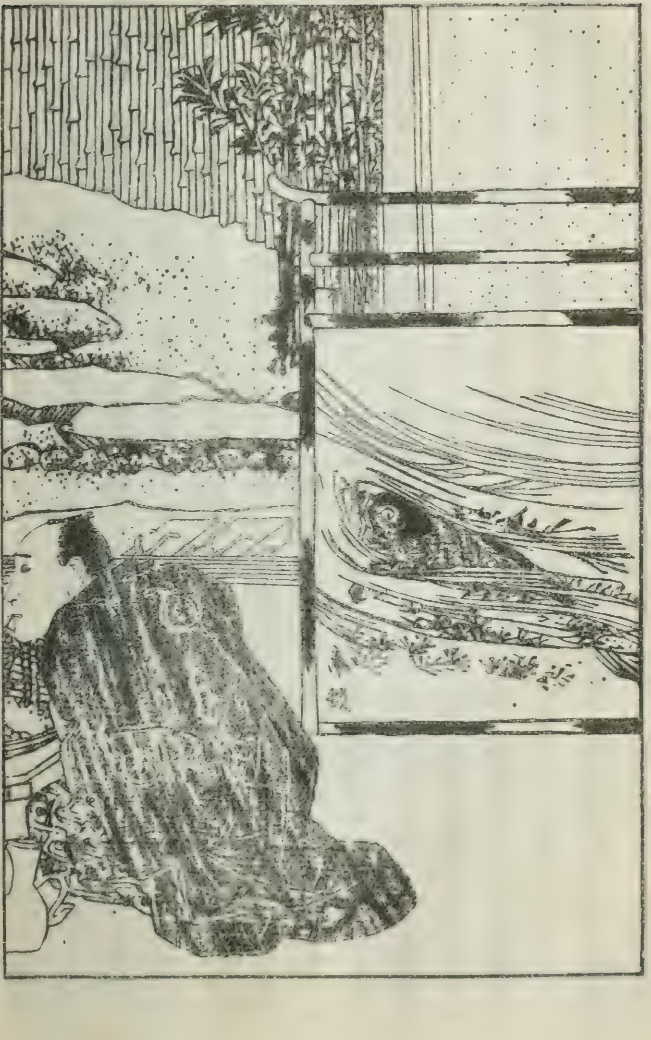
江戸 狂訓亭主人 著

第五條

やゝしばらく有つて、米八は涙をふき、米「マア丹さん、とにかくも今度のことは私がわるいヨ、ふつとした言ひがゝりで、おまへにも腹をたたして、實正にわるかつたヨ、堪忍してひとつお呑みなサア。」ト猪口をやる。丹「嫁がしうとだの、おらア寐やアしねえぜ、かいまきをかけますといいヨ、何し酒屋へ行くことは出來ねえの。」トわらひながら猪口を出す。米八もわらひながら、しやく〳〵をしてやる。丹「サア仲直りに。」ト猪口を出す。米「丹さん、おまへほんたうに機嫌をなほしたのかえ。」ト猪口を取りながら、おつと顏を見てゐる。丹「まだおつかねえ顏をして、他の貌を見るよ。もういいかげんにしねえヨ、執念深え。」米「ナゼこんなに苦勞するだらうねえ。」ト惡紙で顏を押へて泣く。丹「もう〳〵いゝ〳〵、是れから苦勞をさせることはやアねえよ。そんなにいつまでも泣いてばかり、又しやくか

強くなるといけねえ、サア〳〵もう一杯呑んで寐ねえな、ほんにまつくらになつた。」トいひながら、あんどうを出し「イヤほんにあしたは、日朝さまの御命日だ。」トいひつゝ、燈明をあげる。米「丹さんわたしは目をわづらつたことはないよ。」丹次郎は、わるいことをいつたとおもひしが、しらぬかほで、丹「ナアニ、目をわづらはねえといつて、上專寺へおまゐり申すから、さう云つたのだァな。」米「さうかえ御深切だネ。」丹「また三度目か、喧嘩のおなじみはごめんだ。」トいふところへ、路次をばた〳〵かけて來る足音、やがてこゝの障子をあけて、女「ハイ今晩は、米さんは此方かえ。」丹「ハイどなた、オヤお春どんかサアおあがり。」女「ハイ有りがたう、米さんはこちらかえ。」米「オ、此方だが、なんだか今夜ァちつと。」女「おさしかえ。」米「いつもの癪サ。」女「さうかえ、そりやァいけねえネ。」丹「お客かえ。」女「ハイなァに、新川の安さんがお出でなすつて、一寸ひとくちとおつしやるのサ。」丹「そりやァお氣の毒だネ。」米「すヤお春どんかえ、今日はもういけないよ、ちつと二三日呑み過ぎたもんだから、しやくがおこつてせつないから、堪忍しておくれ、わるくお思ひでないやうに、よろしく。」女「そりやァわるうございますね、源さんと安さんだから、ようくさう申しませう、さやうなら。」米「アイ有りがたうごめんよ。」女「イエもう。」丹「よろしく。」米「ねえさんによろしく。」女「ハイ〳〵。」ト出でて行く。米「しかし氣のどくだねえ。」丹「ナアニ、今夜ァもうあゝ言つてやつたから、やすみねえなァ。」米「さうサねえ、

あした行つていひわけをしよう。」丹「それとも安さんとやらァ、いかねゑおやァわりいなら、どうでも。」米「オヤいやだよ、奸心の損料を貸す處もあるかえ。」丹「なんだとべらぼうめえ、そりやァいいが、サア衣類を着替へてしまひねえ、オヽ／＼しわだらけだドレ。」米「〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇、さうでなかアしこゐがいいと見えるねえ。」トわらふ。丹「ようくいろ／＼なことをいふの。〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」米「〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。もし仇吉がきくものならば、其の心にいかならん、斯かる寂しき中にこそ、金にかへざる樂しみあり。また表向いやみなく、誠の遊びは龜本のお客に、闇のさんといふ座敷にて櫻川新吉「トキニ旦那、だれぞお呼びなせえますか。」通客闇「ム、今さういつてやつたから來るだらう。何でも今日はばり／＼する、立者ばかり呼びにやつたが、うまく來てくれればいいが、どうも目ぼしいと思ふのは、さしがありたがるにはこまるて。」新「ハテナ、おめへさんが賞める唄妓は、だれ／＼だらうネ。」闇「野暮なわけだが當てて見さつし。」新「まづおめへさんの、氣にいりさうなものはト、ヱ、難波屋の小濱、福田やの民治、西の宮で仲吉、それからトエ、。」闇「もういい／＼、うまくあつた、あんまりふしぎだ、おれがさういふのをきいてゐたな。」新「ナニ／＼、とんだことを。程のいいは十人が十人、だれが氣も逆ひません。まづ當時流行ッ子の中で、この三人ヲのけて能いからわ



通客人情を
新考とうる

たくしが申したのサ。」圓「そんならそれはいいが、おらア其方に逢つたら、何をかいはう〳〵トおもつてゐたッけが。ム、さうおもひ出した、このあひだ久しぶりで善孝に逢つたら、由次郎や壽樂、三孝がことなんぞのうはさが出て、幇間の樂屋ばなしで、まことにをかしかつたが、またよく〳〵考へて看ると、氣のつかはれる活業だよなう。イヤしかし何家業もむづかしいもんだ。此間文亭といふ友達が來て、はなしたッけが、女八賢志といふ繪本を、狂訓亭は丹誠して、八犬傳といふ讀本にならつて、その始末に似ないやうに、そのおもむきの似るやうにと、大ほねををつてこしらへたら、八犬傳に似せてかいたと言つて、わるく評判をする看官があるといふが、作者は同じ事にならねえやうに、おもむきの似る樣に〳〵と、こしらへる苦心をおもはねえで、似せてこしらへたといふ看官は、どういふ見識で本をよむものかしらん。そんならばと言つて、何水滸傳と名を付けて、水滸傳に似せるやら、唐土の男を本朝の女に書きなほしたのは、無理があつても解らねえとはおつなものだ。」新孝「イエしかし、何ごとも運次第なものでごぜえます。今被仰る本の作者がかいた梅ごよみなんぞといふものは、中本始まつて以來の、大當りださうでございますが、狂訓亭爲永春水といふ名は、梅暦といふ外題ほどは、看官がしらずにしまふから、大畧夢中でよむかとおもやア、すこし惡い所があると、ヘン楚満人改狂訓亭か、この作者はおらア嫌ひだ、なんぞといはれるから、何でも愛敬がなくッて

はいけません。」關「新孝、其方も少し狂訓亭びいきだの。」ト理に落ちさうなはなしの所へ、だん〳〵はこぶ山海の、美味珍膳は場所がらの、献立いはんかたもなし。二人はすこし世の中の、噂もしあきて新孝は立ちッ居つ、新「そりやァいいが、大ぶ長いおしたくだ、みんながどうしたのだらう。」トいふ所へうち連れだちし三美人、小濱仲吉民治をはじめ、尾花やの娘分お岩、少し太り肉なれども、あざやかにいやみなく、成田やびいきの江戸氣性、五分でもすかぬ當時の利きもの、岩「關さん、よくいらつしやいましたね、私やァ誠に今日はモウ〳〵、大變に急用があるのだけれど、おまへさんと聞いたから、マアちよつと、お顔を見ないと氣になるから、驅け出して來ましたヨト、恩にかけることもないが、マア此間はどうなすつたのだえ、あんまりおみかぎりだねえ。」仲民小「今日は有りがたう、新さんたいそうまじめだネ。」新「すこしめかして、色の方を身にしみようと思つて。」仲「よしかお聞きー、私どももその氣で、化粧に念を入れておそくなつたら、今こゝのおかみさんにしかられたッ。」新「おれが來たと聞いたら、化粧するそらもなく、驅け出して來るはずを、三人ながら揃つておそいとはどうもあやしい。」小「それぢやァだれがおまへの色かしれないヨ。」民「新さん私だネエ。」新「いやいや、そんなあまくちは請けねえ。そまりやすいは褪めやすいと、手裏翻す意趣返しがいやだ。三人ながらおれが色だと、どうで此方ばかりだから、きめておくはうが氣が丈夫だ。」關「コレサ〳〵新

孝、猪口はどうする、お岩ばうにさしねえナ。」新「今まづ色事の出入を片づけて。」岩「いや／＼、新さんの猪口は請けないョ。」新「はてな、お岩さんに何も遺恨を請ける譯はねえはずだが。ハ、ア知れた小槌やの御連中の時の一件かえト、まじめに言譯をする程わりいか。」岩「わりいかいいか知らないが、過ぎたことをいひはしないから、關さんどうぞお願ひだから、新孝さんにあしたの朝まで、藝づくしをさせて下さいましョ。」小「ア、能いことをお言ひだ、私もお願ひだョ。」民「私も。」仲「私も、みんなが。」新「ム、ウそして、三絃を出さずに仕まはうと思つて、さううまくいくもんか。おれが苦しむくれゑなら、三味線やすみなしといふ事を、しねえぢやァならねえから、その氣で、あつ〻〻〻つォ、あつい。」岩「オヤどうおしだ。」新「火入へ手を突つこんだ、ア、あつい／＼。」三人「いいきびいいきび、意地わるを言つたから直に罰が當つたのだ。」新「違へねえ。」團「三味せんのばちが、新孝に當りやァ、新孝の當てぶりをお岩ばうが望むし、仲吉民治小濱といふ加勢はあるし、新孝今日は其方がまけるぜ。」新「ところが旦那の御本陣、なりをしづめて英氣をやしなふと、いふを後立にして。」團「イヤ／＼、おらァほらが峠の大和勢で、まづ／＼しばらく日和を見るつもりだ。幇間の藝をしねえのは、砂糖のあまくねえのと同じことだ。このあひだ引込んで、さつはり出かけねえが、文亭連中の定めたとほり、金を遣つて、行きとゞきのいいのが色男、座しきを達者につとめるのを、唄妓の立

者といふを、手本にするつもりだ。サア〳〵思ひれさわいだ〳〵。」ト、浮きたつ座敷ぞ遊びなれ。

## 第六條

傾城禁短氣に、男に數多く合はぬを好く人多きより、素人を手續もとめて買ふを、白人を買ふといひしより、白人たちまち、貴女にまさる床かせぎとなりしかば、また色茶屋の娘分といふものをこしらへて、懷子と名づけ、金滿の男を釣るの論をしるして、好色の發明を説きしこと嗚呼奇なるかな、誠色情の極意といふ、契情を第一とし、唄妓を第二とし、其の外の情人は格別、少しも金を費すならば、身分に應ぜし色里に遊びて、死金を遣ふことなかれと、嗚呼がましけれど、筆癖に悪まれぐちをしるすのみ。されどたでくふ蟲とやら、其の好き〳〵のあそびくせ、他見でおよばぬ事ながら、意氣な姿の婦多川に、おもひ辰巳の風俗も、さぐりかねたる作者の當推、元來彼の地へ一日も、いたらぬ野夫の不穿鑿、まぐれあたりのさしは有りとも、聞書噂のすぢにはあらず。色の世界の風情を、つづれば萬一實錄そのことを、書きもしたかと道理をつけて、必ず心にかけ給ふな。それはさておき仇吉は、彼の千代元で米八と、出合ひし喧嘩のもつれをば、清元延津賀がはからひにて、その座はやうやう歸りしが、心のそこの解けかねて、いかゞはせんと胸だくみ、ものおもはせし米八が、丹次郎との閙言や、どうしていしゆをはらすべし、斯くなさんかと思ひ詰め、待ちに待つたる丹次郎が、かか

るべしとは知らずして、此の程米八と談じ合ひし趣を、仇吉にも得心させんと、思ひて來りし千代元の奥二階、思案に違ひて仇吉が、腹立ち紛れの手強きあいさつ、なか〳〵相談どころでなければ、當座の出たらめ丹次郎も、よんどころなくけんどんに、ことばづかひのあら〳〵しく、丹「手めへもまた、あんまりよくも有るめえぢやァねえか。何の米八がなんと云はうとも、打遣つておいて、跡でどうともなることぢやァねえか。もつとも折角こしらへて、おれに著せた羽織を、いきなりにあんなにしたは、米八が一生のあやまりョ。それだからおれだつても、手めへをわりいとはいはねえわサ。あくまでもあいつが落度にして、言ひ張つて押し付けてしまつたればこそ、斯うしてすぐに出て來て逢ふ譯だァな。何もおらァおめへに、いひぐさを言つてやりこめられに來はしねえぜ。わざ〳〵呼びによこして、おたげへに斯うしてきうくつな思ひをして、いひてえ事をいふのを、聞きに來る事もねえといふものだ。」ト急腹のかんしやくでいふ。仇「なんだネ丹さん、そんなに腹を立つことはないわねえ。私だつてもおまへを苦勞して、呼びにやつて云ひぐさをいふの何のといふこともねえけれど、ツイ〳〵おまへの顏を見たもんだから、あの時のくやしいことを、胸にわすれる間がなかつたもんだから、いひだしたんだァネ。何時にねえ、そんなに額へ筋を出して腹を立つて。」トすこしかんがへ、「丹さんおまへは心が變つたね。」トはな紙で顏をおさへてなく。丹「コウ仇吉、オイあだ吉さん、おめへもち

ういいかげんにしねえな、心がかはるのかはらねえのと、素人かなんぞのやうにおもしろくもねえ。折角此方はこつちと思つて、米八をば云ひてえことをいつて、無理でまるめてしまつておいて、呼びによこしたのをさいはひに、どうしてゐるかあの時は、宅へ歸つて行つたかしらん、さぞ心おもしろくなくくらしてゐるだらうと、考へてばかり居て、案じてゐたのはこつちの自惚。斯うして來て逢つて見りやア、おいらの想ふ半ぶんも、深え心はちつともなし。けへつてさかねぢを喰はして、人をやりこめてその上、心がかはつたのとあへたりもんだり、いいやうに青二才の小倅ッ子にやア、ちやうどいい云ひぐさだなう。變るかはらねえと、つまらねえことも程があらァ。」ト、風といひがゝりの喧嘩ゆゑ、米八が云ひしことをはなさんとおもへども、つよく云ひいでしゆゑまけをしみに、丹次郎は米八とも、ひどく喧嘩をしたやうに噓をついて、仇吉をもまづ劒のみで、氣をひいてみる。仇吉は亦つひぞなき、丹次郎が腹を立つての云ひぶんは、推當米八にくるめられ、是れを手にして離別れんとの、手段にてもあらんには、今更きれて人のおもはく、ふがひないといはれんもくちをしく、千代もとへ對しても、外聞わるくまたひとつには、米八へもひるみて切れたといはれて、女が立たぬとおもへば、またなんの因果か毎々になき、丹次郎が腹だたしき風情も、何處にかすごみがあつて、ひよつと機嫌を直したならば、またどのやうにいとしからんと思へば、直にもあやまつて堪忍してもらひたけ

れど、爰も一ツは戀の意地、最う一ぺん言ひ張つて、男の心をきたへつけ、もしし損つたその時に、どのやうにもあやまらん。萬一きかずば島田髷、根からきつてもわびごとの、ならざる事はあるべからずト、さすが手とりの仇吉が、しばらく前後思案して、涙ぐんだる目を拭ひ、顔を半分衿にいれ、しよんぼりとせし其の姿、雨の柳に喩へては、さびしさ過ぎて似つかはしからず、梅も櫻もおよびなき、風情と思ふ丹次郎、しがみ付くほどかはゆけれども、爰が男の辛棒と、惚れた心をとり直すは、齒を喰ひしばる戀慕の情、二人が底意同じけれども、それとは知れぬ他心、たがひにさぐりてはてしなく、溜息をつくばかりなり。

○風與した情人の仇吉が、かくまで深くなりしこと、是れ米八が氣苦勞のみか、作者も共に難儀の蒲尾、どうして納まることやらんと、まはらぬ筆のなが／＼しく、拾遺の卷も三編にて、まだ目度たしに至らねば、板元は憤然となり、ヤイ狂訓亭のおほだはけ、愚癡をならべた此の草紙、何日まで後を引續るのだ、二編で終ると思ひの外、三編出してまだ三冊、たらぬなんぞと貸本屋の、衆へいひわけなるべきか。又貸本屋さまがたも、看官のお得意さまへ、四編でいよ／＼目度たしに、納まりますといはれうか。だれでも腹が辰巳の園、今日までもとめてくだされたは、まぐれ當りの梅暦の、かをりで保ちし餘慶なり。それになんぞやまた永き、永代談語と外題をいだ

して、まだ殘編をひきずるのかと、言葉もせはしき極月の、小言は懸取同樣にて、鄰家へきこえて氣の毒ながら、販元さんの御立腹、重々共に御もつとも、重なるといふ由縁につきて、今一編の御勘辨、いかに拾遺は梅暦の、喧嘩許りの抜書でも、書林作者の本意の喧嘩は、おもしろからぬ事なれば、まづ貸本屋さまへお詫言、失禮しごくのおねがひながら、看官のお娘さま、お女中樣を一同に、この仲人におたのみ申し、すぐに續いて賣り出します、四編目滿尾の御評判、いとをこがましき樣なれど、そのかはりには此のつゞき、喧嘩の大尾仇吉と、彼の米八が奇代の達引大騷ぎ、うつて變つて二人が中、姉妹とてもおよびなき、信身辛氣の愁歎場、色の諸譯や情の極意、泪の笑顔につこりと、ひらくや春の梅暦、吉日良辰辰巳の園、全本かぞへて十二冊、兩三日に相揃ひ、日かげとともにうらゝかな、詠めにそなへ申すになん。

# 梅暦餘興 春色辰巳園卷之九 終

# 辰巳園四編序

それ梅ごよみと辰巳の園、合はして通計八編は、これ八陣の列位に等しく、色の諸分の六韜三略、一編毎に意味深長、魚鱗に備へて當つて看れば、鶴翼に構へてとりつゝみ、丸めてだます圓月備へ、横に行くなる鴈行あれば、せつに懸けたる長蛇の備へ、放矢虎蹈のかまへはおろか、破軍の劔先言語で、あやなすあれば信實に、極意をあかす情もあり。しかはあれども色の道は、彼の孔明の八陣に、取り圍まれたるものに同じく、引くにひかれぬ義理と意地、年季を入れていつまでも、出られぬ北門請出されて、身を保つたる生南門、彭僴と金の掛引あれば、夜討朝掛の嫌ひなく、すきを伺ふ忍びの術、客をおびくは日文の迎へ、船宿の出丸、閨房の籠城、後を付けたる二の目の備へ、あるを知れどもゆん手右手に、心のとゞく場數の巧者、漉返紙に書く紅筆は、赤き心の矢文に似たれど、油斷はならぬ人情反覆、孫氏あやまつて城を落せば、これを則ち軍威といふ、妓女誤つてお客に惚れれば、これを則ち間夫といふ、間夫も則ち損子なり、嗚呼おそるべし戰場と閨上、將奢る時は卒怠る。客奢る時は身傾く、愼んで以て野暮に老い込み、はやく子孫の後榮を計る者は、心の軍師の采配に依り、是非は大將の氣質にありて、可否は通と不通の理論を待つのみ。

未の陽春

金龍山人

爲永春水誌

金龍山下に寓居して、金龍山人と號し、草庵といへば、まだ風雅めけど、風流なることすこしもなし。九尺二間の寝所を借宅して、狂訓亭と自稱するは、拙作の主意勸善の教訓、他に異なり、戯同文章前後して、筆に狂ひの多ければ、教へといふ字を狂ふとし、響をきやうと訓ますなり、おのれがあいはしめ亭號なり。一に爲永春水とは、四澤に滿つる御ひいきを、願うて替へたる戯作の晉智、以前楚満人と呼ばれし時は、多く門人に筆をとらして、自作の草紙まれなれば、巧拙ともに本意にあらず、悔こふみより已來は、實に予が手に綴りしものなり。このことわりを改名と共に、四方の御ひいきさまがたに告げて、いよいよ御顧を偏に願ふことになん。

東都戯作者　金龍山人狂訓亭爲永春水

# 梅暦餘興 春色辰巳園 卷之十

江戸 狂訓亭主人 著

## 第七條

慾ふかき人の心と降る雪はつもり／＼て道をわするゝ、と詠ぜし歌のそれならで、知れたる道に踏み迷ひ、義理の立札善惡の、辻の榜示のしるべさへ、讀まで勝手にわけ入るは、戀のやま路の難所なり。されば たがひに張り合うて、ひかぬ氣性の仇吉が、今は遠慮もあらばこそ、諺にいふ無法とやら、人目もいとはぬ心となり、意地づくなれば丹次郎に、はなれじものとおもへども、儘にならぬが男のこゝろ、うたがひ合うて稍しばらく、しらけてつきもなかりしが、色のいきぢと仇吉が目尻をあげ、仇「オヤ丹さん、おまへどうしたんだえ、何もそんなに腹を立たなくつてもいゝぢやアないか、何も米八さんが、あゝしてくれねえでも、よささうなもんだといつたゞらう、たいそうなことでもいひはしまひし、そして又心が變つたのぢやアないかゞらゐ、言ひもしさうなもんだアネ。いつにねえ物

のいひやうをしなはるもんだから、さう言つたつて大層に、きざでもなんでもないぢやァないかえ。そんなことをそんなに腹を立つて、氣障がつてもよさうと思つても、切れようと思つても、私やァまたきざに思はれれば猶のこと、あくまでも付きまとつてやるからさう思つておいでよ。悪女の深情とやらで、こんな執念深いお岩のやうなものに、ほれられたがおまへの不調法といふもんだァネ。」トわざとべつたりしつこくいふ。丹「ウ、それだやなんだの、今いふ通りおれを呼びによこして、そんなくだらねえ、洒落本に有りさうないひぐさをいつて、退屈の腹なほしに、しようと思つてのことか。」仇「そんならマァひまな時、聞きにこよう。」ト、きせる筒へ煙管を入れ、煙草入と一同に持つて立つ。仇吉はあわてて、丹次郎が著物の裾をつかまへながら、仇「ア、モシ、なんだネ丹さん、そんなに言つて歸らずとも、腹の立つことを思ひの儘に、言つて聞かしてお歸りな。」丹「エ、よしねえな、をかしくもねえ、おらァ何にも腹を立ちにやァ來ねえから、サァ／＼はなしな／＼。」ト鼻であひしらつて、つかまへてゐる裾を拂ふ。仇吉は猶もはなさず、だまつて泣いてゐる。丹次郎はつかまへられながら、是れもだまつて立つてゐる。仇「丹さんマァ坐つておくれよ、どうでもいいから今一ぺん、とつくりと聞いておくれよ、丹さん後生だから。」トいひながら、仰向いて丹次郎が顏を見つめ、うるむ眼元よ丹次郎が、實正に腹をたちしとこゝろえ、びつくりせしゆゑ顏は上氣せて照々と、形も容も厭ひなく、

最う是れぎりになる事かと、思へば胸もはりさくる、思ひに誠あらはして、泣きはらしたる眼もとにも、どこやらあだな仇吉が、斯くまでわれをしたふかと、思へばひとしほ不便になり、哀れ催す折もをり、何所の宅か知らねども、杵や何某が名取の妙音、彼の古き唱歌紅葉狩、

（上ドり）〽チ、チン／＼みすてたまふかァ、つれなやと（合）たもとにヽすがりとゞむれば（カヽチ、チヽ）チンさすがァ、岩木にあらざれば（合コチヽヽ）ろよわくも引きとめられて。（ドヽ）

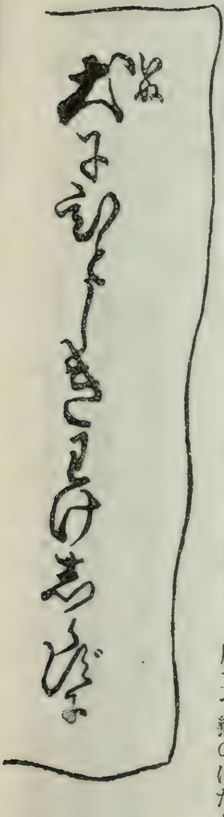
丹「サアそんなら坐るから放しねへな。」仇「それだつても放すと。」丹「飛びやァしねへ。」ト、笑ひながらその儘まゝすわる。「サァ何だ。」仇吉は默つてうつむいてゐる。丹「エ、何だといふのに、坐つてくれろといふから坐つたのに、解らねえ女だぜ。」トいひながら仇吉の、亂れた鬢の處を平手でぴつしやりとぶつ。仇吉はぶたれながら、丹次郎が膝へしがみ付いて泣く。丹次郎は仇吉が、何といふやらとひとつくらして見た處が何ともいはず、膝にもたれて泣いてゐる故、丹次郎も又何ともいはず、懷から手を出して、びんのほつれを上へなでて遣つてゐる。仇吉は顏をあげて、仇「丹さん。」丹「何だ。」トやさしくいふ。仇「どうぞ堪忍しておくれな、エ、エ丹さんかんにんして。」ト淚をふく。丹次郎はそれなり轉り寢轉び、いつぷくつけてくれと、きせるづゝと煙草入をはふり出す。仇「丹さん機嫌を直しておくれか。」ト貌を見る。丹「しれたことヨ。」トわらつてゐる。仇「きつとだヨ。」丹「搔卷をかけて、酒の燗をすればい

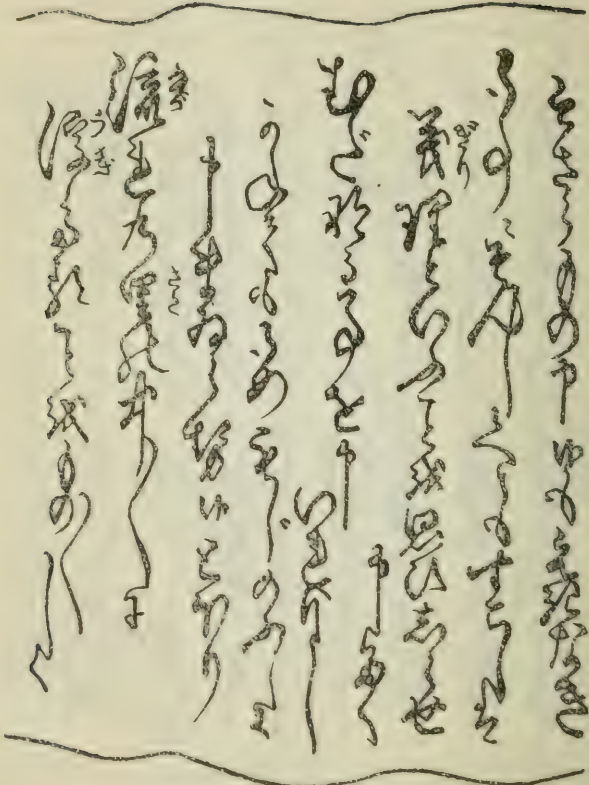
い。」とわらふ。仇「エ何だエ。」丹「なァによ酒でも呑まうといふ事ョ。」仇「ナニさうぢやァあるまい。何だかおいひだから氣になるよ何だえ、エ丹さん。」丹次郎はわらひながら、丹「ナァニ樂屋落ョ。」仇「されだから何だといふにネエ、おいひョウ丹さん。」丹「エ、しつつこい、何でもねえと云つたらいいぢやァねえか。」このかいまきのことは、三編にしるせしごとく、丹次郎が米八のきげんをとりし夜のことなり。丹「またおれがじれつたくならァな。」トわざと丹次郎は、つよくばかり出て氣をひいて見る。仇「さうかえ、それぢやァ堪忍おしよ、ッイくどくなつちやァおまへにじれさせるねえ、私がわるかつた／＼。丹さんァノ癇をあつうくしてもらつて、一ッ呑まうぢやァないか、おまへいやかえ。」丹「ナァニマァ、和合から先へして、酒はあとにしようぢやァねェか。」ト、仇吉が笑くぼの入る頰ッぺたの所を、ちよいとさゝるでつゝく。仇吉はにつこりわらつて、仇「アレサおよしョ。」丹「ナニよせ、そんならよさう。」仇「エヽニリ、さうぢやァないわねえ、ほんとに丹さんは、今日はどうしたんだらうねえ、腫物へさはるとやらのやうだョ、どうしたらよからうねえ。」ト涙ぐむ。（親かたいしゆの氣をとること、かくのごとくしふせつならば、いかばかりよろこび給ふらん、嗚呼いろをとこ程、もつたいないものはなし。女みやうりにつきずとも、あごで蠅をおはさるやうに御用心御用心。）丹「よしか嘘よ、ナニそんなに腹を立つ物か。そしてそんなにおいらが、腹をたつのが氣になるか。」仇「アヽ。」丹「ほんたうか。」仇「アイ。」丹「ソレ前髪さしが落ちらァべらぼうめ。」ト引きよせて、「泣きむしめ。」仇「それだつても、わちきはもう／＼今日のくれるゝ、びつくりした事はねえものを。」

丹「ナゼ。そんなに、びつくりしねえでもいい事よ、蟲の毒だぜ。」仇「傘灸でも、この逆上はさがりさうもないよ。」丹「まゝよ女房の角も生え次第だァ。ナア仇吉。」仇「うれしいねえ。」トしがみつく。

かくありしゆゑ米八が、得心づくで丹次郎に、表向をば仇吉と、きれたといふを人目のみつゝしみくれよ、出合も今まで逢ひしその宅は、遠慮してくれ、此の土地をはなれて逢ふはぜひもなしと、事をわけたる頼みさへ、なか〳〵以て仇吉に、いはれぬこの場のしぎとなり、たゞ米八と喧嘩して、今仇吉に逢ふごとくいひなしたれば、何ごとも手違ひとなりけるなり。他見でいへば丹次郎が、ゆき届かざるに似たれども、色をも香をも知る人ぞ、知るべき戀の業なりかし。

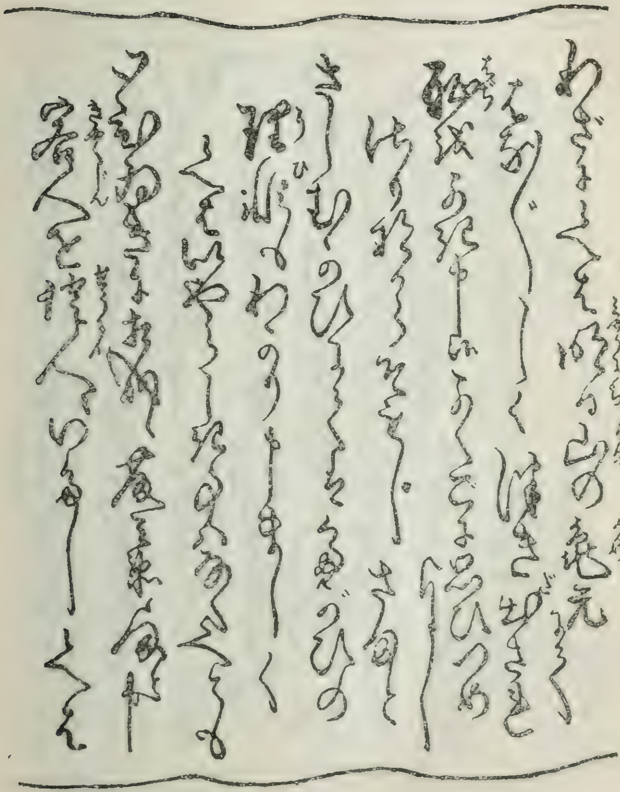
さて米八はおとなしく、暫く樣子をうかゞひしに、丹次郎はともかくも、仇吉かたでは遠慮なく、他知れかしとせぬ許り、文の便りも待合も、幾度となく米八が、耳にも目にも懸りし故、今はこらへず仇吉へ、恥を與へん覺悟にて、態々おくる一筆は、惡態書の前後なく、腹立つ戀のはたし狀。

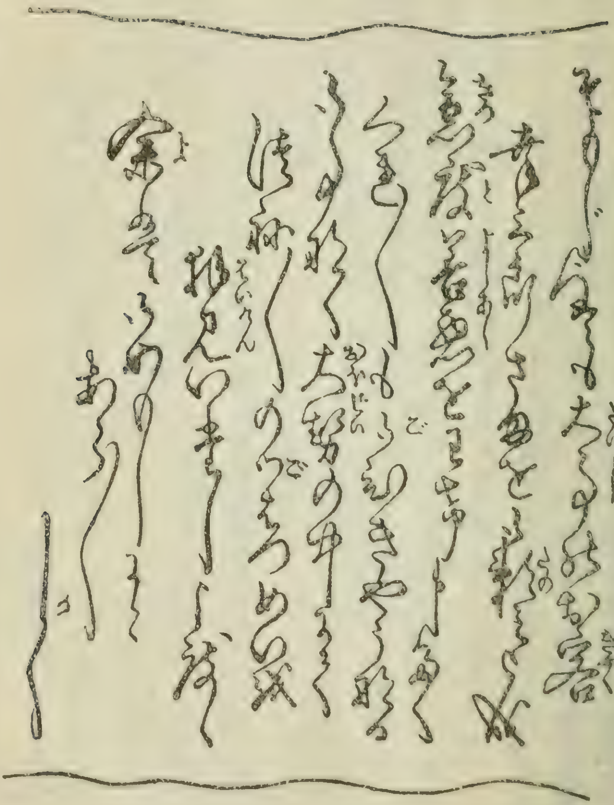


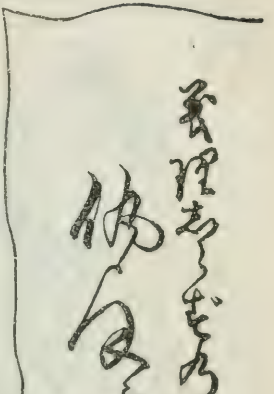


とがめし　みてこまります
丹次郎とわけては　くるわ
なおし　ぬね
苦労遠慮のことくいやらしく
りくみせる心をせうよ
とおもふらくりしてくれ
くだいのかし男のことはまく
そのつもりのこはれをがゞり
なりともかならずきのびくれ

うちぎりてこそ情(なさけ)のうらしいふを
かしこのまつく人あつまるかぐ
てくろびのうち又世のおけくる
いとけのさくも江(えん)のあまく
おもしろりやうようじおもだうりかな
かゆまの浮きつるまうけりたるまはる
男まんあまたあつめ
後(ご)陀(ぢ)のやうよおかいにんまの
つーまりてあきかし来








見るよりくわつと仇吉が、犬といはれし口をしさ、文を摑んでかけ出づる、折から使は立ち帰り、丁度入り来るその人は、今少し先刻「仇名」やの娘分、お喜世が方の使にて、仇吉を呼びに来りしが、仇吉が留主ゆゑ近所へゆきて、今また返事を聞きによりしなり。米八が使をば、母が取次ぎしゆゑ、仇吉は此の人を米八が使と思ひ、仇「承知いたしましたとさう申してくんな。」使「ハイ／＼」と立ち出づる。仇「オイ／＼、これをもつて行つてくんな、そしての、どうもわかりかねますから、いづれお目にかゝつて、くはしくわけを承りませうと、さう申しておくれ。」ト、米八が文を仇名やの使にわたし、仇「おひねえべらぼうだア。」ト獨言。使はふしぎに思へども、文をたづさへ帰り行く。このつかひを仇吉がしらさ

るはいかゞぞや。これは仇名やの人にあらず、ついでにたのみし人とするべし。これは扨おき惡口は、彼の龜本の座敷には、今日もにぎはふ大座、武家のお客をもてなしか、女中衆まじりの樣子にて、太夫唱妓はいふもさらなり、善孝由次郎、壽樂三孝とり持ちとて、さゞめきわたる一間には、櫻川新孝が、好まれし座しき藝のはり出し。

一　山王祭汗の一曲　はらをかゝふるをかしみなり。

一　團十郎が蠅を追ふ振

一　關三が蚊を打つ風情

一　梅我が蚤をおさふる容形

一　鈴が森千人長兵衞　いづれもをかしき當振なり。

此の賑ひにはひきかへて、此所ははなれた小座しきに、彼の仇吉とさしむかひ、座したる女は年のころ、二十五六才の年增にて、色白く痩せがたちにて、眉毛の跡青く、愛嬌あるその風情、是れ仇名屋の娘分お喜世とて、今仲町に成駒や、ひいきも強く情も強く、はでで小意氣な深切もの、かんざしで前髪を搔きながら、喜「仇さんお聞きョ、今日は私も志呂喜の月宿で、誠にいそがしいけれど、ちらりときいたお前の噂、米八さんとのいきはりづくで、浮名も義理も構はずに、今日は是非とも黒白を、わけてじきようをさだめると、覺悟の喧嘩の出合といふは、山の龜本と太夫衆のはなしをきいて、驅

けて來たが、マアおまへや米さんの發明にも似合はねえ。殊に今日は幸さんの約束があるぢやアないかえ。米八さんも藤兵衛さんが、何か談じるわけがあつて、今にもこゝへ來なはるとのこと。まだ幸さんが來なはらざア、私と一同にちよつとお出でョ。店衆だからもらひひきも自由になるし、爲にもなるからマアお出で。」ト、いはれてさすが仇吉も、ひいきにならねば立ち難き、活業といひお喜世が深切、名にし仇名の娘分に、引き立てられて心まちに、待ちたる相手の米八が、心にかゝれど爲方なく、うち連れたたんとするところへ、櫻川善孝。善「お喜さんちよつと。」喜「オヤ善孝さん何だエ。」善「ちよつとお前を、お近付にするお客だから。」喜「オヤさうかえ、仇さんちつと待つておくれ、今參るから。」善「オヤ仇さんか、お客でなかァお出でな。」仇「ありがたう、今少し急に用が。」トいひさして、心のそこの落ちつかねば、いつにかはりしあいさつゆゑ、善孝はお喜世と倶に座しきへゆく。此方の間より米八が、米「仇さんちよつと。」仇「オヤ米八さんか、私やア犬と名をつけられたから、もう仇吉とはいふまいよ。」米「私やア犬とはいはないわ、犬のやうだと言つたのサ。」仇「犬でも猫でもかまはねえ、どうでおまへのいふとほり畜生だから、人間のいふことはわからねえから、私の思ふとほりにするから、さう思つておくれ。○○○○○○○、○○○○○○○○○○、必ず構つておくれでないよ、いらざるお世話の猿まつだ。」米「ナニ猿だえ、さるでも私やア盜人はしねえョ。

お前のやうに、他の亭主を盗む大膽はしねえよ。そんなに陰でりきんでも、旦那や幸三さんに此の始末をきかれたら、尻尾をまいて縁の下へでも、逃げこまざアなるめえ。」ト、いはれて思はず仇吉が、米八めがけてむしりつく。此方もくやしき無理酒を、呑んで來りしその勢ひ、たがひに恥ぢいとはばこそ、喰ひ付く仇吉ひつかく米八、實に煩惱の犬と猿、心の駒下駄縁側に、あるのをとつて仇吉が、立つを米八引きすゑんと、小膝をついて仇吉が、腰帶つかんで引き反せば、引かれながらに米八の、首をはつしと駒下駄で、打てばばつきり鼈甲の、折れて飛びちるかんざしよりか、仇吉が手の駒下駄を、見るよりその手をしつかと取つて、米「こりやァ仇さん駒下駄で。」仇「アイぶつたのが惡いかえ、犬といはれた意趣返し、又斯うして。」トふり上げる、その手を取つて突き倒し、上に乘つたる米八がさいはひ牀の釣花生、片手にかけて引きかへせば、水はざつぶり仇吉が、顏より胸へたら／＼／＼、米八は飛びのきて、米「犬でも人の見る前で、つるみやァ子供か近所のものが、用心水桶の水ぐらゐは、あびる遠慮もあるものだ。」ト、今はたがひに色氣もなく、顏に紅葉のちるのみか、座敷をけちらし仇吉が、また駒下駄をふりあげる、折から後の隔紙を、明けてかけ入る善孝新孝、左右へわかれて米八と、仇吉を押しわけ、新善「モシマアどうした間ちがひだえ、當時日の出のお二人が、場所もお客も遠慮なく、此のごうどうを起すとは、よく／＼ふかい腹立が、兩方にあるにもしろ、立派な二人の

名に疵が、ついたらお客の疵にもなる、こゝの宅でもすまねえわけ、マアなんにしてもわたしらに。」善「是非はともあれ座敷をかへて、新孝其方は米さんをつれて。」新「ホンニさうだ、サア米さん、いづれ兩方の顔の立つ仕かたもあらう、こゝは。」米「アイ有りがたう、だがどうでもう、斯うなるからは此の土地を。」仇「善孝さん、折角の御深切だが、私やアもうどうしても。」ト、たがひに聞かぬ爭ひを、善孝新孝仇名やの、お喜世も中へ立ち入りて、殊にお喜世は仇吉が、間ちがへて使にわたせし文をとり出し、此の座にて燒き捨て、いろ〳〵となだめ、猶またその夜米八が、洲崎に行きし仇吉が、後を追はんと走せ出せしを、千葉の藤兵衛が引き止め、(このわけは梅ごよみの編にもしるしてあり。)櫻川一同が立ちあひで、雙方引けにならざるやうに、中直りをさせ、また仇吉は藤兵衛が、立派にわけを立てて一旦緣を切らせける。此の時丹次郎は勘當ゆるされて、身分全くをさまりける。(このをさまりは梅暦の四編にあら〳〵記したり。)此の次の段より、梅ごよみ四編のつゞきなり。

## 第八條

されば婦多川に、取り殘されし仇吉が、千々に心をくだけども、儘にならぬが浮世の義理、母と宅とをすておきて、ふりこみ行かんと思ひしが、米八お蝶の二人が側に有るのみならず、今は大家の若隱居、武家に歸參の丹次郎、容易く逢はれんやうもなし。殊には千葉の藤兵衛が、それ相應に顏をた

て、わけをつけたる表向、それを彼是いひ出しては、恥を知らざる未練ものと、そしられんことはいとはねど、まだ眞底は離れやらぬ、二人が中はすゑかけて、捨てる不實はせぬ男と、かねて思へばあちらでも、かくして日々の文のつて、送る小遣衣類まで、過ぎにし恩をかへさんと、こゝろづかひの深切は、うれしいやうで仇吉が、結句心のもめるたね、紙一枚をもらはずとも、日に一度づゝ顔を見て、くらしたいのが蟲のせい、それがかうじて戀やみと、いふにはあらねど持病のつかへ、夜ふ深したる無理酒の、氣がねがこゝに積りては、癪といふ字の勢ひつよく、臥し倒れたる病の牀、次第におもる看病は、繼しき母の情なく、今は旦那も足遠く、幸三郎が便りもなければ、內外ともに不都合にて、折々おくる丹次郎が、小遣のみが心あて、殊に藥よ針按摩と、物入多きこの節は、酒も自由に呑みかねる、さもしきくらしとなれば腹だたしく、日ごろの娘が辛苦もおもはず、慾の眼に角立てて、母「どうだの仇吉、けふはチツト我慢をして、お飯でも喰つて見ねえか。」　仇「どうして、さつぱり其樣な氣はないものを。」　母「そりやアどうで、自身の好いたことをするやうな事はねえのさ。それだから不斷おれが言つたのだア、チツト體をくるしめて、お客や旦那をよく勤めろ、さうすりやア餘計に物ももらはれるし、五日や十日引込んでも、困るやうなことはねえと、いはねえことか馬鹿々々しい。うぬは心がらで、癪でもせんきでも起すがいいわ、親の咽口まで干しやアがることもねえ。」ト、いは

れて仇吉くるしさも、腹たつまゝに打ちわすれ、起き直りたる牀のうへ、仇「母御そりやァあんまりだアね、こんなにわづらつてゐるものを、空病でもつかつて居やァしめえし、其様に口ぎたなくいはずといいわな。」トいひながら、胸をおさへて顔をしかめ、「そして私が、何でおめへの咽口をほしたことがあるエ。」母「ほさねえことがあるものか、此の節はなんでくらしてゐるとおもつてゐるのだ。コレあのろくでなしどのから、手めへの小遣くらゐはよこしもしたらうが、それがどこの足しになるものか。酢のこんにやくのと追ひつかやァがるが、おれに甘え酒の一杯も、呑めと言つたことがあるか。おらァ今日で十日ばかりといふものは、みりん酒を一ト口なめやァしねえわ。それに手めへはいつも酒を喰らふ癖に、今度の病氣になつてからは、甘い物ばかり食ひたがつて、越後やへ許りもいくら取られたと思ふ。おれがいろ／＼都合してゐればこそ、斯うしてゐられるわ、是れから先どうしてくらさうと思ふのだ。」仇「どうもそれだといつて、しかたがねえやァな。そのうちもう死ぬだらうから、あんまりいぢめねえでくんな。」母「ナニはやく死にてえと、親不孝めえ。コレその死にてえといふは何だ、業さらしな。此の土地にゐて男をだまして、うぬが身のしんまくでもするがほんたうだのに、二人も三人も、女の喰付いてゐる奴にあつくなつて、あげくの果てにやァ棹先につゝかけられて、引汐に沖の方へとおし出されて、まだ氣が付かずにうか／＼と思つて、右も左も取りうしなつて、あた

り處がねえといつて、親に突き當りやァがることもねえ、死んでしまふも氣がつえゝ。コレ手めへを骨を折つてそだてたのはな、老體つて寐酒の一杯づゝも、呑まして貰はうと思ふから、丹誠して人に目につくやうに、こざつぱりとした形をさせておいたのだァ。うぬが生まれたまんまで、人に賞められるやうになつたと思ふか、ふさ〴〵しい。親が食ふと食はねえのさかひになりやァ、女郎にも賣つて立行をつけねえけりやァならねえわ。」仇「おめへの機嫌の能いやうにすりやァ、女郎にやァおとらァ。」母「ナニ女郎におとる、コレ手めへの好きにやァ隱れしのんでも、寐たり起きたりするおやァねえか。」仇「それだから、ひよつと此の病氣が不仕合によくなつたら、一生奉公でも年一ぱいでも、おめへの手切にどうでもしねえ、とても死ぬまで和義和順に、暮すことはならねえから、緣でも切つたらお前もおれも、仕合が直るかも知れねえ。いつそさうしておくれな、アイタ、、、、。」ト、腹立つまゝに惡態も、じれて前後かまひなく、いへどさすがは女氣の、目元に涙胸には癪、さしこむ奴があるゆゑに、氣隨氣儘も言ふならんと、思へば母は猶怒り、母「なんだ此の女ァ、緣を切つてもらひてえと。押しの強えことをぬかすなエ、うぬをそだてるに、いくらものが懸つてるとおもふ。大勢の兄弟の小兒の中で、義理のある奴だと思ふから、何もかも一番骨を折つて、人並にしたのだァ。どなたのめへでもだれが何と云つても、親の威光だァ、うぬが自由にさせるものか。ふさ〴〵しい煩つて

ゐやァがるから、料簡してゐりやア、好きな惰話を吐きァがらァ。」仇「料簡も勘辨もいらねえから、殺すともどうともして、お前の腹を愈るがいい、何の面白くもねえ、何ぞといふと親が食ふと食はねえ境だの何のと、おいらァ極幼年い中は、おめへの世話になつたらうが、まんざら親の厄介にばかりなりはしねえ。何のおいら一人が喰ふよりか、幾千宅へ徳をつけたかしれやアしねえ、そんなに恩にかけられることもねえ。」母「恩でねえと此の畜生めが、モウ／＼堪忍ならねえ。どうでふて寝の持病をば、藥ばかりで治さうとは、今まで此方の馬鹿律儀だァ、斯うしてくれる。」と言ひながら、病み勞れたる仇吉の、衿髪つかんで牀のうへ、我猛者老女の金こぶし、肩骨脊骨のきらひなく、どッしどッしとつゞけ打ち、手づよく當れど心の中、萬一病氣が能くならば、まだ引き出す金のつると、心を用ゐし打擲も、うたるゝ身にはいと苦しく、また悔しさに涙聲。仇「もつとぶちな／＼、親もすさましいやァ、鬼ばゞアめ、子のおかげで、母御々／＼と、他人にいはれるのを有り難いと思はねえで、少し業金がすくねえと、やかましくばかりいつて人いびりめ。サア／＼早く殺しな／＼。」ト、くやしさあまつてお八重が母の名なり。手にすがる折から、天口窗よりぱつと飛び入る一團の陰火、座しきに落ちればたちまちに、烈々としてもえ上る、さも恐ろしき火の車、前後に立ちし牛頭馬頭の、鬼はお八重を引きとらへ、彼の火の車へ載せんとすれば、仇吉は起き直り、今まで爭ふ不和なれど、さすが女の

やさしくも、殊に母子の情合に、恨みをわすれ母の裾、かよわき力に引きとゞめ、仇「アレ母御おあやまりョ。モシ〳〵どうぞ母御を、堪忍してくださいまし。」鬼「イヤ〳〵ならぬ、其所はなせ、これまでつくッた此の老女が、罪の地獄へさか落し、途中も苦痛の火の車は、娘の色香にたぶらかされし、数多の人の胸の火の、一つに寄りしほむらとは、しらぬ凡婦の慾悪非道、善道ならずして著る錦は、三途河の岸までいたらず、奪衣婆の俗にいふしやうつかのばゝアのことなり。手をまたずして、自らうしなふことをさとらず、むさぼる財は右を得て、左を失ふ身の分限、知らぬ愚かな人畜生、心の修羅道つくらして、恩義をわすれ眼もくらむ、暗穴道もまのあたり、近きにむくふぞ仇吉も、これより心をあらためずば、母もろともに地獄の責、慎みをらう。」と突きはなされ、身の毛もよだつ恐ろしさ、ものすごけれど仇吉が、親とおもへば捨てられず、我が病をもうちわすれ、仇「どうぞ今度は母人を、かんにんなさつてくださいまし。」ト、さし出す手さきをぱつと立つ、火えんに焼かれおもはずも、ハツト一ト声さけびたる、わがその声におどろきて、見れば病の牀の上、ひや汗ながす身の労れ、夢とおもへど眼前に、まだ見るごとき火の車、枕元なる埋火の、火壺にわが手を火傷せしか、なほ火ほとりのしたりけるが、此の日お八重は切通なる家に行き、にはかに邪熱のつよく発し、たちまちむなしくなりけるが、これより家内傷寒を煩ひ出し、親兄弟はいふにおよばず、すべて仇吉が身の汁を、すゝらんとせしやから

は、日を經るまゝに世を去りて、影ものこらずなりしとぞ。

この物語は嘘らしけれど、作者幼年き頃ほひに、專ら噂ありしことにて、勸善懲惡の一助なれば、こゝにしるしていましめとはなせり。卷をひらくの兒女童蒙、他の振見てわが心姿を、正す手本となしたまへ。なんと子ども衆合點かく。

梅暦餘興　春色辰巳園卷之十　終

# 梅暦餘興 春色辰巳園 巻之十一

江戸 狂訓亭主人著

## 第九條

同じ流れの川竹も、北の世界の山谷堀、船宿多きその中に、名も高橋屋と聞えたる、家の内儀にお染とて、女ながらも意地つよく、情も深き深切者、妹となせし延津賀の、頼みによつて手軽くも、わが棲ばしより乗り出して、こゝに小舟は和哥町の、河岸より上りて仇吉が、家をたづねて病気とも、しらねば表の格子戸明け、染「ハイチツト御免なさいまし、仇吉さんの御宅は此方かえ。」トいへども宅には仇吉が、聲さへ弱る大病の、なか／＼返事もあらざれば、しばらくしても答へなし。お染はさすが不遠慮に、おもひながらも爲方なく、障子をあけてさし覗き、染「どなたもお留守かえ。」ト言ひながら奥の方を見れば、牀に伏したる女の様子、それと察して上に上り、染「御免なさい。」ト「モシ仇吉様にはお前かえ。」ト、いはれてやう／＼仇吉が、重き枕を少しあげ、仇「オヤお出でなさいまし、さつ

ばりぞんじませなんだ。」ト、いひつゝ、お染が貌見れど、見なれぬ人ゆゑ少し考へる。お染はそれと心付き、染「はじめて參つて、なれ〱しいとお思ひだらうが、私やア堀の延津賀が姉で有りますよ。」仇「オヤ。」ト、すこしおきかへる。染「アレサ、さうしてお出でョ、誠にたいそう鹽梅がわるいのだネエ。」仇「ハイモウ〱、久しく斯うして居りますから困りきります。」ト、いひながら片手をついて、仇「マヅはじめておめに。」染「ハイお心やすく、お津賀もよろしく。トキニマアどうしてそんなにおなりだえ。此樣なこととは知らず、アノ子が此の頃中、お前の事を夢に見て、何だか氣になるから、行つて樣子を見て來たいと言つてゐるが、手まへでもひさしくすぐれずに居て、やう〱起きると毎日毎日月ざらひだの、牀開きだの、名弘めだのト、すこしも日間がないゆゑ、どうぞ私が他所行に、おたづね申してくれろといふ故、今日は此方の辨天さまへ、お參り申しながら參つたが、そしてマア看病は、母御でもしなさるのかえ。」ト、いはれて仇吉は泣きながら、母の死去りしより、親類も病人のみにて來らず、日に二三度近所鄰家の者が來りて、藥の世話などしてくれる事、哀れに不自由のことを、くはしくはなしければ、お染も不便と涙を催しける。

因にいふ、彼の增吉など居たらんには、仇吉を介抱すべき深切者なれど、これも今は嫁入して、芝崎の方へ、母もろともに至りしゆゑ、問ひ來ることもなかりしとぞ。そも〱人の身のうへほ

ど、哀れにはかなきものはなし。何事も定めなきが不斷なれば、若き時に老人る事を思ひ、花あるときに下枯の野を思ふべし。いつも盛りといふ事は、天地の間になきものぞ。慾より人にだまされやすく、跡にて悔しきこと多し。何事も愼みて、身を守ること城のごとくになし給へ。

○世の中は今日ばかりこそ同じけれ昨日は過ぎつ明日は知られず

かくてお染は達引ある女なれば、仇吉が不都合なるを察して、金子など小遣にとて與へつゝ、山谷に歸りて仇吉が、難儀の樣子を咄しける所へ、久しぶりにて米八が、延津賀の方へ來り、仇吉の病氣難澁の噂を、聞いて歸りしとぞ。また婦多川には仇吉が、次第につまる困窮は、一人身なから病氣のゑ、只何事も人頼み、藥取から勝手元、深切らしく片手間に、見舞ふ裏家の姥かゝも、喰ひかせぎとかすり取り、爲になる人まれなれば、物入多く此の程は、家内の雜作道具まで、書入れたりし利付の金、借りたる者は兼てより、此の仇吉に執心にて、其の癖強慾非道の曲者、森羅殿橋の鬼九郎、今日も見舞と催促を、兼ねて戀路の嫌らしく、坐り込んだる牀の側、鬼「どうだ仇さん、今日は大分顏色がいいの。」仇「ハイありがたう、ナニどうもいいかと思ふと、折節さし込むからどうもいけないヨ。」鬼「イヤ〱、それでも今はとんだ顏いろがいい、そしてマア髮化粧して、いつも座敷へ出かける時よりうつくしい。しかしお前のその病氣は、始終男の思ひだせ。マアさしあたつて他人よりは、おれ

が思ひ許りでも、出來不出來が有るはずだ。」ト、いひながら仇吉の手を捉へ、鬼「誠にきれいな手だナア、チツトモ病人らしかァねえぜ、ヘ、どうもたまらねえ。コレサ仇さん、此間中から言ふ通り、どうぞおれが頼みを、ム、と言つてくんねえ。さうすりやァ是れまでの借した金も返すには及ばず、毎日の入用も、殘らず俺が見繼いで、晝夜の看病もおれがするぜ。エ仇さんエコウ。」〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、仇「〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、こんなに久しく煩つて、骸がよごれきつて、モウ／＼、私が身で私があいそのつきる樣に、穢れて居るものを。おまへも少しは何とか思つておくれでも、直にあいそのつきる種だわネ。」鬼「イヤ／＼、他人はしらずおいらはモウ／＼、今言ふことを聞いてくれりやァ、死ぬまで愛想は盡かさねえ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇、仇「〇〇〇〇〇〇〇〇。」ト著物の前を確り合はせ、仇「マァお聞きよ、こんなに煩つて居るのを、おまへかはいさうだとおもつておくれなら、どうでもなるけれど、私が死んでもかまはねえと、いふやうな氣ぢやァいやだヨ。」鬼「ナニどうしておまへを殺していいものか。いふ事さへ聞いてくれりやァ、醫者を幾人かけても、物入がいくらかゝつても、構はねえ、是非全快くしねえぢやァおかねえわな。」仇「サアさうおもつておくれなら、私が全快くなつて、座敷へでも出られるまで、氣長に何もかも待つておくれな。」〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、

〇〇〇〇〇〇〇手を拂ふを、拂はせじとする鬼九郎が、指をポツキリ逆にとれば、鬼九郎は、アイタ、、、エ、いてえひどい事をするぜ、コウ仇吉さん、いい加減にしねえな面白くもねえ、小兒をだますやうに爰までござれ、甘酒しんじよか、其の手をばマア喰ふめえ。おめへがひん〳〵達者になつて、座敷へ出るやうになつて見ねえ、お客が來るやら旦那が出來るやら、おいら達が側へも寄られるものか、そのとき金をおれに返して、よろしくお斷りだらう。それぢやアおめへはよからうが、おれがあんまりばか〳〵しい。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇合點で、病氣の中を見續ぐといふ、おれが深切をむそくにして、追ひ拂ふ料簡なら、此方もその氣でよしやせう。よす日になりやア用立つた金の日數も先月ぎりだア、日限が切れりやア道具やを呼んで、とりこはすといふことは、大家さんへも斷つてあらア。人に怪我をさせるほどいやがるものを、無理に彼是いふよりか、貸したものを取るはうが、勘定がよからう。六兩三歩といふ金を出したら、〇〇〇〇〇〇〇〇〇。どうで女郎も同ぜんに、男の數をおぼえた女を、箱入娘かなんぞのやうに、したふといふが我ながら、狐にばかされたとおなじことだ。嫌はれたのが身の仕合、傾城にふられて歸る福の神、眼が覺めて見りやア有り難え。イヤ仇吉さん、お氣の毒だが今から直に、古道具やを連れて來てこの造作を引きはらひやすヨ。ヤレ〳〵機嫌よく、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、六兩三歩たて投げにする所だつけ。ドレド

レ障子隔紙の手輕い奴は、道具やをよびに行く足で、ついでだから持つて行かう。」と、中じきりを外しに蒐れば、仇吉はくやしくも、世間の手前恥かしければ、口惜しながら手を合はせ、仇「どうぞ拜むから、道具を賣ることは最う少と、待つておくれな後生だから。」鬼「後生も情もおめへしだいサ、其方に情がなけりやァ、此方もその氣サ、いつまで待つてゐられる物か、最う今月も半月過つたァ。」トいひながら、がたぴし外す邪見の鬼、這ひ起きすり寄り仇吉が、鬼九郎の裾にとりつき、仇「どうぞマァ料簡して、せめて最う二三日待つておくれな、急度どうかするから。」鬼「エヽ、はなしねえ。」ト手をはらひ、行くをやらじと引き止めれば、鬼「そんなら心にしたがふか、金を返すかどつちでも。」仇「サァ兩方ともにいやではないが、なにをいふにも私が病氣、全快りさへすりやァおまへの心に。」仇「コウ〳〵、おなじせりふでやらずとも、少し新手なあいさつが、ありさうなものぢやァねえか。そのやさしいなりかたちが、煩つたゆゑ猶の事、かはいらしいと思ひの外、慾にかゝると病人には、似てもつかねえその力、裾を捉へて引き寄せる、同じ力を肩へかけて、引き寄せられりやァ忽ちに、この鬼九郎は節分同然、佛心になるものを、鬼にするのは心がら、モウ〳〵色氣はやめにする。サァ造作を取り拂はうか、金をわたすかどうするのだ。」ト、取り縋りたる仇吉を、突き倒して表の方へ、隔紙かゝへて立ちいづる、後のかたの裏口より、障子も明けず聲たかく、「その金は、たツた今私が返

ヘエ、マアお待ちな。」ト、いはれてびつくり鬼九郎、思ひがけねば仇吉も、共に驚く許りなり。

## 第十條

時に障子をおし明けて、静かに入り来るその女は、戀の敵と仇吉が、常に妬みし米八なり、衣類も容も立派なれど、上着は態と目だたぬやうに、つやなし結城の五ほんて縞、花色裏のふきさへも、たんとはださぬおとなし仕立、素人めかす風俗は、なほ温厚に意氣なりけり。まづ仇吉にあいさつしながら、布團の上に伴ひ介抱して、米「仇さんお氣にいるまいが、マァ此處を私にまかしておくれナ、今に後でいろ〳〵咄すから。」ト、なだめながら鬼九郎に向ひ、米「アイモシ、お前が仇吉さんに借した金は、何程だえ。」鬼「おまへはたしか、仇吉さんとは色の意氣地で、敵同士と噂にきいて、折節は貌も見知つた米八さん。」米「アイ、人の噂も七十五日、過ぎたむかしは兎も角も、今ぢやァ實の兄弟同然、其様な事は打捨つておいて、マア其の金は幾らだえ。」鬼「エハイ、何少しでござります、たつた六七兩サ。」ト、鼻であしらふあいさつは、これ米八をあなどりて、大金の為に出来まじと、思ひてかくは言ひけるを、米八は懐中より、金子とり出し紙に被せ、小判をならべて七兩を、鬼九郎へさしつけ、米「證文があるならばお返し、無かァ請取をおくれ。」ト、いはれて悔り鬼九郎、鬼「ト云ふならおまへが立て代へて、この大金を私へ。」米「アイ、仇吉さんでも私でも、はかない活業した代り、勿體ないほど錢金を、遣つた事もありますのサ。病人を付けこんで、いぢめなさるお

まへの腹とは違ひます。サア請取をよこして、はやくお歸り。」仇「イエそれではどうも、私の心が濟まないから。」米「アレサ仇さん、何ごとも跡でお言ひよ、マアこゝは私に任してお置きといふのに。」ト、眼まぜでをしふる米八が、心の底はしらねども、氣をもみしゆゑ今さらに、またもさしこむ胸前を、おさへて牀に伏し沈む。鬼「アイそんならこれが證文サ。」ト、不承々々にさし出せば、米八はおし開きて、米「オヤこりやア六兩三歩だネ。」鬼「エイ左樣サ、利は初手にお貰ひ申しましたから、七兩では壹歩お返し申します。」ト、いへば米八莞爾笑ひ、米「よいヨ、煩つて居る仇さんを、くどいたお禮にお前にあげるヨ、サア〳〵早くお歸り。」と追ひ出されて鬼九郎、恥をしらざる強慾者、叶はぬ戀の不首尾には、壹歩の金も取り徳と、彼の七兩を懷へ、いれてこそ〳〵逃げかへる。跡には靜かに米八が、仇吉の側へすり寄り、米「仇さん、さぞ私が今のしうちを、出過ぎた仕方とお思ひだらうが、堪忍してマアお聞きヨ、そしてたんと切ないかえ。」ト、徐々と脊中を撫でて、「オヽ〳〵、誠にやせたねえ。」仇吉は心の裏、今日米八が此所へ來し、その善し惡しはしらねども、さし掛りたる手詰の難を、すくひし上に此の介抱、いぶかしながらも嬉しくて、仇「米八さん、誠にマアどうして來ておくれだ、これも夢ぢやアないかねえ。」ト涙はら〳〵米八が、貌をながめてありければ、米八も仇吉が、まけぬ氣性を知る故に、心の中を察しやり、眼をうるまして貌さし寄せ、米「アレサ仇さん、其樣に

氣をおもみでないよ、何ごとも縁づくだわネ。定めておまへの心ぢやア、私をにくいとお思ひだらうが、わる氣で來ない私が心、どうぞ是れまでの事は水にして、心置きなく思つておくれな、全體私が來るよりは、丹さんを見舞にと思つて、今日まで延ばしたけれど、まだなか〳〵に歸る沙汰もなし、おまへの病氣は重いといふし、ことに母御も死去つたといふ噂、なんでも大そう難儀して、御在でだといふ事を聞いたから、ぶしつけだけれど、かはいさうで〳〵ならないゆゑ、今日はモウ〳〵案じられて、たまらないから來たんだァね。」ト、さもうちとけしあいさつに、仇「米八さん、どうぞ今までの事をば、實正に堪忍しておくれな、そして丹さんは、遠國へでも、お出でのかえ。」米「ほんに急ぎの旅だから、此方へしらせる間がなかつたらうねえ。アノ丹さんはネ、親御さんが道中で、大病だといふしらせが來たもんだから、俄に旅支度をして、京都へ立つてお出でだヨ。それからまた日數が過ぎて、飛脚が來て、病氣はいいが御用筋が手間どれるから、丹次郎は濟みしだい同道して歸るから、案じるなと手紙がきたから、何日歸るか知れないよ。」仇「オヤ〳〵さうかえ、だうりでさつはり便りがないと思つて、實はお蝶さんとやらと、お前を恨んで居たが、罪だッけねえ、そのばちで此樣に鹽梅がわるいと思ひますわ。」米「ナニ〳〵、決してさうではないヨ、おまへの間のわるいのだヨ。また能いことも來るサネ、今日は私も覺悟をして、おまへがうち解けておくれなら、

一晩止宿つてゆる〳〵と、いろ〳〵の噺もしようし、看病もしてあげる氣だから、お蝶さんによくのみ込ませて來たから、その氣でおいでな。」ト、あたりを片付ける。　仇「アレサ米さんおよしョ、お前の著物が汙れるわネ。私やア宅をはき出して、きれいにするのが好きだけれど、斯うして寢てゐるから、モウ〳〵何かがごみだらけでいけないョ。そしてマア、私が第一冥利がわるいわネ、其樣にやさしいおまへとも知らずに、迷つた横戀慕、是非丹さんを自由にしようと、無理がかうじておまへと喧嘩、なか直りはしたけれど、今さらおまへに、貌むけもならぬ私が無法なしかた、おもひ出しても勿體ない。他の噂の草履打、それを根葉にも思はずに、斯うして見舞に來ておくれの、お志に對しては、恥かしくつて死にたいョ。」ト、いひつゝ後はむせかへり、わつと泣き出す仇吉が、涙の雨かばらばらと、降り出したる空ながめ、引窓しめる米八が、　米「オヤ此のひぼは、どうしたか誠にかたいねえ。」仇「ア、どうかして工合がわるくなつたョ、今裏のおばさんが來たら、しめてもらふから、マアさうしておいておくれ。」米「板の間だから濡れてもよいねえ。」トまた仇吉が側に居り、煙草をつけてやり、米「仇さん、誠に不躾だが、延津賀さん所で噂を聞いて、さぞ困つてお出でだらうと思つて、出て來たから、今のお金もはじめッから、おまへの小遣にするつもり、まだ持つて來たのがあるョ。マア當時入用の物を、私が居るうち殘らずお買ひな、宅へ歸ると亦おひ〳〵によこして、おまへの今

快くなるまでは、どんな事をしても見續ぐから、必ず〱氣を丈夫に持つておいでよ。」ト、紙に包みしその儘、仇吉が手にわたす。これもおよそ三四兩あり、はいたゞいて米八にかへし、仇吉 仇「誠に有り難いが、こんなに澤山はいらないわネ、そして寐てばかり居るから、何もそんなに入る事はないヨ。」米「それでもおまへ、他人を頼んで、何かの用をたしてもらふに、金錢がないと自由が出來ないわネ、マア取つてお置きヨ。」トいひながら、表の障子を明けて外を見る。これは知人でも通らば、用事を頼まん心なり。所へ丁度貸本の荷を脊負ひたりし若い者、これ櫻川の甚吉なり。米「オヤ甚吉さん、久しぶりだの、何ぞ新板が有るなら、貸りようぢやァねえか。」甚「ヘイそれは難有う。」ト格子をあけて荷を下し、甚「お前さん、どうして此宅においでなさいますえ。今日も親方が、さくら川ぜんからをさしていふなり。早く場所を廻つてしまつて、仇吉さん所を氣をつけて、用をたして上げろと、云ひつけましたつけが、お鹽梅はどうでございますか。」米「オヤさうかえ、今日は少しよいヨ、おまへ宅へ行つたら、私がよろしくとさう云つておくれヨ、由さんにも。」甚「ハイ〱。」トいひながら、貞操婦女八賢誌といふ、繪入讀本をいだし、甚「これが評判のいい新板でございます。」米「さうかえ、だれが作だえ。」ト作者の名をよみ顔をしかめ、「イヤ〱、私やァこの狂訓亭といふ作者はどうも嫌ひだヨ、楚満人と名號つた時分から見るけれど、どうも面白いのは少ないものネ。」甚「イエ〱、それはみんな弟子や素人の作つたのへ、楚満人が名許り書いたのでご

ざいます、この八賢誌をマア御覧じまし。」米八はこれをかり、外にもいろ〳〵かりて、米「仇さん、夜伽をしながら本を讀んで聞かせるヨ。」仇「嬉しいねえ、甚さん善孝さんに、昨日は有り難うと言つておくれヨ。」甚「ハイハイ今日も御用があるならば、さう仰しやいまし。」トいへば米八は、米薪炭すべて世帯について、入用のものをたくさんに、いひつけてもらはんと金をわたし頼む。

甚「ハイ〳〵、それぢやア直に行つて言ひつけまして、また晩程參ります。」ト荷物をしよつて歸りゆく。米「仇さんちッとお見な。」トいへど仇吉答へなく、枕に凭れてうち伏し居る。米「仇さん、たんと惡くなッたかえ。」仇「イ、エ。」米「私が何かに出過ぎると思つて、腹をお立ちか。」トいへば涙の顔をあげ、仇「イエ〳〵、どうして勿體ない。實は藤兵衛さんや善孝さんのお世話で、一旦丹さんと、きれいに別れたつもりだけれど、何の因果かわすられずに、泣いてばッかりくらして居れど、また丹さんも相かはらず、逢ひこそしないが文のつて、かはらずくらすか無事でゐるかと、問ひ音信のやさしいのが、あの人さんの不斷の氣性、どうぞ死ぬまで縁をきらずに、居たいと思つて居たけれど、おまへの今日の御深切、思つて見るほど私が罪、空恐ろしい心の底、お祖師さまでも神さんでも、にくいと思しめさないお方は、ひろい世界に有りますまい。是れから急度氣をいれかへて、丹さんのことといつたら、夢にも見まいと思ふから、どうぞ米さんさう思つて、今までの事をば堪忍して、其のかはりには此の病氣で、どうで死ぬからその時は、未練なやうだが臨終には、おまへと丹さんと一同に

來て、いとま乞ひをしておくれな。さッぱり思ひきるといふ言葉の、露の干ない中、やッぱり愚癡な執心とお思ひだらうが、よく〳〵な願ひと思つて、丹さんにもどうぞ頼んで來ておくれな。ト、身も浮く許り涙の瀧、ながれの里の洒落た氣も、實に迷へば素人より、まさる思ひは米八も、苦勞人だけ仇吉が、心の中をおもひやり、これも涙に伏し沈み、しばしこたへはなかりけり。

梅暦餘興 春色辰巳園卷之十一 終

# 梅暦餘興 春色辰巳園 卷之十二

江戸 狂訓亭主人著

## 第十一條

やゝ有つて、米「モウ／＼、其樣な悲しいことをお言ひでない、おまへの氣をなぐさめようと、思つて來た私まで、泣いて許り居ちやいけないわネ。」ト鼻紙で涙をふき、上田にあらで土佐小の紙を、四五枚とッて仇吉が手に渡し、米「サァマァ涙をおふきヨ、いつそ眼のまはりが腫れたヨ、ヨウモウお泣きでない、是れから氣をかへて、二人で思ひれのろけばなしでもしようわネ。」仇吉も莞爾泣きわらひ、嬉しさうに起き直る。此のうち甚吉が言ひ付けし、商人よりいろ／＼の物をもち來り、酒肴等も來りしかば、鄰の子どもに、裏の内儀を賴んで呼び寄せ、飯ごしらへ勝手元をしてもらひ、日もくれければ、油その外の小買物、殘らず行きとゞきて後、内儀は戸〆りをなし、いとまを告ぐれば、米八は小仁朱を一ッ紙にひねつて、禮を言つてかへし、跡には亦さし向ひ、米「仇さん、チット三味線で

も出さうぢやァないか、騒々しくつて悪からうかねえ。」仇「ナアニよいョ、どうぞ弾いて聞かしておくれな。併し絲がどうなつてるか知れないョ。」ト、牀を出るを米八は押しとゞめ、米「アレサ、さうしてお出でョ、私が出すから、何處に有るからとさうお言ひな。」ト をしへにしたがひはこより三味せんを出し、米「ヲヤ久しくお出しであるまいのに、よく皮がたるまないねえ。」ト 絲ばこよりいとをいだし、それ〳〵の絲をのこらずかけ直し、てうしをあはして、米「近所で何とか思やァしまいかね、病人の側で來て、三味せんをひくやつもねえなんぞと。」丹「ナニ近所だッても、唄妓の宅だから、煩つて居たとつて、三味線はひくと思ふのさ。」米「トマアこじつけておくのか。アノちよつとお聞きョ、此間堀のお津賀さん所で兼さんと可造さんと、ドヽ一をこしらへたり、誹諧をしたりして居たッけがネ、其の中可造さんが斯う言ふドヽ一を弾つたョ、私やァモウをかしくッてならなんだわ。」仇「オヤさうかえ、はやく弾いてお聞かせな。」米「カウサマァ、がうぎにいいといふのぢやァないが、をかしいからョ。

トン へ町役する身のはかなさ辛さ。○詞「オヤ大屋さん此間は。」ム「こなひだぢやァねえおめへマア店賃はどうする、三月たまッて居るぜ。」○「ヘエイエなか〳〵麁畧には致しませんが、誠に此の間は不都合でござります、どうぞ來月まで。」浄るり清元のおそめ久松へ あれ又あんな無理いうて、そんなそのよないひわけな ドヽ一へどうしてまた地主へいはれうか。

仇「オホヽヽヽヽ、誠に皮肉な唄だねえ。」 米「ドヽ、は、やけに此様なのがいいぢやァないか。」ト三味線を下におき、燗をかけた燗徳利を出して袴にいれ、 米「少し呑んでおみな、薬にさし合ふかえ。」 仇「ナニお医者さまが、 少し呑む方がいいとお言ひだけれど、なか〳〵呑む気はなかッたが、今夜はおまへのお蔭で、大そうに気持がよいから呑んで見たいヨ。」 米「それぢやァ私もうれしいねえ、サアお上り。」トついでやり、 米「お医者さまは何所だえ。」 仇「アノお玉が池の、谷玄桂さんといふおいしや様だヨ。」 米「オヤ〳〵、それぢやァ丹さんのおやしきの、御殿へお出でなさる方だヨ。」ト、たがひにやさしきその風情、いかなる前世の因縁にて、かく睦ましくなりしやらん。それ聖人のをしへに、信あれば四海は残らず兄弟なりと、また聖徳太子の書かれし史に、一河の流れをくみ、一樹の陰にやすむも、みな〳〵此の世ばかりの縁でなく、前の世よりの約束ぞと、教へ給ひしことを思へば、仮そめに心やすくなりし人も、深き縁のありけりとおもひて、いさゝか腹だたしき事ありとても、我とわが心を諫めて堪忍し、一生和合くまじはるこそ、誠の人と賞めらるべし。かくて米八仇吉は、泣きつ笑ひつ夜と共に、かたり明かせし過ぎ越し方、そも仇吉が嬉しさは、何にたとへん方もなし。是れよりして後米八が、五日に一度、七日に一度問ひ来り、その間使にて、口のあふべき見まひ物、誠心つくす看病に、さ許り重き大病も、漸々に快気く、今は髪のひ湯にもいり、そろ〳〵みがく身だしな

み、久しく日の目も見ざりしゆゑ、たゞさへしろき仇吉が、物すごきほど美しく、病みあがりとてたよたよと、雨の柳の露ふくむ、うるはし過ぎて氣味わろし。此の頃やう／＼丹次郎も、旅よりかへりて米八が、始終のはなしを聞くにつけ、不便とおもへど義理として、仇吉方へ見舞はんとはいはれもせねば、其の儘に打ちすておかんと思ひしが、米八はりんきなく、ぜひ／＼行きてもらはねば、たがひに打解けかたらひして、姉妹同然とちかひたる、仇吉がおもはく恥かしければ、これまでの事は寬もかくも、是れからさきはどうあつても、見續いでやらねばならぬわけ。亦仇吉が心根も、察して見れば哀れにて、見捨てられずと頼みければ、丹次郎も心の底は、あんじ煩ふことなれば、幸ひとして家を出で、半年ぶりにて仇吉が、方へたづねて來りしが、土產物さへ米八が、持たせてよこせし品々を、仇吉が前へいだし、　丹「誠にひさしくこねえうちに、大きな目に逢つたなう、それでもよくさんねに、起きるやうになつたけの。」トいへども、いつに變りたる仇吉が其の風情、はや涙ぐむ女の情。仇「生きてお前に逢はれようとは思はなんだが、　米八さんのおかげで、命を助かりましたわ。」ト、膝へ涙をはら／＼／＼。　丹「なぜ泣くのだ、おれが不沙汰をして居たゆゑ、心よからぬ米八に、見續がれたのが悔しいか、もしさうなればおれが留守中、米八がはうからよこした金だけは、おれが內證でおめへにやるから、外でこしらへたつもりで、米八に返しねえな。」　仇「イ、エ、そりやア成程金は外

でこしらへて、段々にも米八さんにかへすけれど、米八さんの恩はわすれないョ、たとひおまへと愛想づかしが出來ても、米さんとは縁をつないで、深切を盡しますわ。」丹「その心で居てくれりやア、おれも是れから浮薄でなく、イヤこのマア土産ものをそつちへ片付けねえ、これでも米八があれのこれのと、おめへに嬉しがらせるつもりで、選りわけてよこしたのだ。」仇「どうすれば米さんのやうに氣がもたれるだらう。」ト泣いて居る折から、來がけに丹次郎が、此宅へと誂へおきたりし、酒に肴に蒲燒の岡持、裏口より運びいれる。仇「オヤ／＼大そうにいろ／＼と、およしならいい。」丹「なぜ。たま／＼來たから、ゆるりと呑んでもいいぢやアねえか、それともさしでもあるなら直にかへらう。」仇「ア、どうぞさうしておくれな。」トいへば、丹次郎は直に顏色變り、仇「ドレ、そんなら達者で居な。」ト立つをひきとめ、仇「ア、モシ丹さん。」ト繻絆の袖をかみしめ、淚を零して、仇「さしといつては外にはないョ、義理の柵情の綱で、圍つた主は米八さん、おまへをこゝへ少しの間も、止めては濟まぬ人情づく、腹をたたずに機嫌よく。」丹「突き出されてくれろといふのか。」仇「アレ、どうしたらよからうなう。」ト、暫く泣き倒れ、仇「丹さん、マア下に居て、私が心の苦しみを聞いておくれよ、ヨウ丹さん。」トいふ折節に入相の、鐘にちりくる花ならで、いつしか降りつむ春の雪、風に破れし緣頰の、障子よりしている雪吹。丹「オヤ雪が降つてきたさうだ。」仇「エ、ドレ。」ト障子を明け、

仇「ほんにマア、大層に降つて來たヨ、寒いからマア燗をあつくして、一ツお上りな。」ト酒をあたへ、ある。丹「旦那か、お客が來たら逃げ出さう、マアそれまではゆるくやらかせ。」トいへば仇吉は、丹次郎を白眼みつけ、仇「丹さん、私が明りをつけるから、表の戸や二階をよくしめておくれ、最う何も出る用も、這入る用もないから、すぐに鎖もかけてしまつておくれな。」丹「ばかアいひねエ、宵にからしめられるものか、そしておらア直に歸らア。」仇「ナニかへるものかネ。」丹「今早く歸れと言つたぢやアないか。」仇「さうは言つたけれど、日はくれるし此樣に雪は降るし、どうして歸されるものかネ。ひよつと途中で、怪我でもして御覽な、第一米八さんへ、私がすまないといふばかりか、私も苦勞になるからおとまりヨ。」丹「イヤ／＼歸る／＼。」トいひながら、諸方の戸をしめる。仇吉はあかりをつけて、酒肴をならべ「ホイ今日は甲子だつけ、大黒さまへお燈明をあけるのを忘れた。」ト火をうつける。丹「ナニきのえ子だと、甲子に逢ふと緣がふかくなるといふぜ。」仇「そんな事を思ふやうだと、樂しみだけれど、何に付けても悲しくなるよ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇。仇「〇〇〇〇〇〇〇、猶もの思ひだわネ。」丹「そんならよさうか、酒はどうだ。」仇「アヽ、モウ丁度燗が出來たヨ。」ト、是れより暫く杯ごとありて、丹次郎は雨戸をあけ、丹「ヲヤ／＼大變に積つたぜ、こりやアおひねエ。」仇「寢るにやアしづかでよいけれど、一人々々に寢ると、さむいからいけないね

え。」丹「○○○○○○○○○○。」仇「○○○○○○○○○○、さうしてはどうもマア米八さんへ對して。」丹「いいかげんにじらしねえな。それとも久しく來ねえうち、深くやくそくでも出來たなら、○○○○○○○○○。」仇「そんな氣なら、此樣に泣きはしないわね。」丹「エ、べらぼうめえ、米八だつてまんざら野夫をいふものか。」仇「サアそれだから猶のこと。」丹「合つてゐるかァ、手めへは構はず寢てしまへ、おらァ道中で手めへの事を、夢に見て樂しみにして、歸つて來たのだから、○○○○○○○○○○。」仇「後生だから、嬉しがらせずに思ひきらしておくれヨ。アレサ風をひくわね、うたゝ寐をおしでない、サァ牀をとつてあげるから。」ト、○○○○○○○○○○、別に牀をとつて仇吉は、離れて寢る。丹「コレサ仇吉、最ういい加減にしてくんねえ。」ト、○○○○○○○○、○○○○○○○○、まだ去りやらぬ好いた同志、これよりまたも深くなり、義理も意氣地もしりながら、思ひきられぬ仇吉の、風情はくはしく承知して、ゐれども更に米八は、ねたむ心のあらずして、時節たづねて仇吉と、和合き隨にお蝶をも、伴ひつれて一夜二夜、三曲などの連彈に、三姉妹ともいふごとく、常に行きかひなしけるが、仇吉は勝手に座しきをつとめ、丹次郎の仕送りにて何不足なくくらす中、終に丹次郎の種をやどし、米八へ對し面目なくや思ひけん、丹次郎へ一封の文をおくり、婦多川の家をその儘に捨ておきつゝ、風と立ち退きて行方知れずになりければ、丹次郎は

言ふに及ばず、米八お蝶等は、實の姉妹の思ひをなせし人、よしやさなくとも、深切なる生質の二人なれば、八方に人を出し、これをたづねさせ、また加持祈禱と神佛に祈念して、さがしけれども更にとの風の便りもなく、漸に月日を過せしかば、今はこの世に亡人と、あきらめるにはあらねども、彼の丹次郎へ送りし文に、懐胎を恥ぢて身を隠す趣を書き、多分世を捨てる文章なりけるゆゑ、家出なしたるその日をば命日と定め、追善廻向怠りなく、跡懇に弔ひけるも、近日仇吉の行状正しければ、他心にて亡命せしにあらざること明らかなれば、殊に不便とおもひけり。

## 第十二條

後五百歳、廣宣流布の誓ひにもれぬ繁昌は、實に尊き法の場、伊氣加美とかや稱えたる御寺へ、貴賤群集する十月中の二日の夜より、終夜參詣ひきも切らず、數萬の中に米八お蝶も、かねて信心なりければ、今宵の籠りを心がけて、さそひ合はせし女連は、かの千葉に住む小梅のお由（藤兵衛の女房なり）由が手に住む唐琴屋の此糸（今は半次郎といふものの内室となり）女ばかりは如何なり、さりとて下女や家來をつれるも、亦氣づまりにて樂しみならずと、後生は付けたり保養の心、無據藤兵衛は、このさいりやうに頼まれて、萬の世話をなしけるが、お蝶が腹に出生なし、八十八といふ男の子、今年三才になりけるを、乳母に抱かせ伴ひしは、これ米八が作略にて、お蝶は年もゆかざれば、かはゆがるのみいくぢはなし、米

古石場

八も子は持たざれど、子煩惱にてありけるゆゑ、八十八を祕藏にする事いはんかたなく、元來發明なるお蝶が願ひにて、米といふ字を名に付けんと、丹次郎と相談して、八十八とは號けしなり。八十八の字を一ッによせれば、米といふ字によまるゝと、思ひ付きたる名なりけり。かくのごとくにお蝶がすれば、また米八も身にかへて、八十八をいとほしむことふかく、今日もこれをば連れたるなり。さればお蝶と米八は、いとむつましくもの語りをなしつゝ行くにも、三年以前に失せたる人を思ひ出して、米「ネエお蝶さん、斯うして大勢で歩くにも、仇吉さんの事を思ふと、誠にかはいさうでならないヨ。」蝶「ア、ネエ、此のうちへ仇吉さんも、一併に來たらさぞ嬉しがるだらうに、どうもかはいさうだねえ。」ト、はなしながらにゆく道も、啻さへおそき女の足、はや生髮へ來りしころは、黄昏にぞなりにける。お由此糸藤兵衞等も、とも〲にはなしながらゆく事としるべし。さしもに廣き境内に、あつまりきたる講中の、羣をなすこと幾千萬、いとさわがしきその中に、かう〳〵とせし山門は、千尋の梢をはるかにこして、夕日に照りをそへたりけり。藤兵衞は、まづ休息すべき茶屋を見たてて、ためらふ折しも、山内俄に物さわがしく、崩れ立つたる人なだれ、東西南北いり亂れて、女子どもの泣き叫ぶ、聲のしきりに聞えしが、彼の八十八をいだきし乳母は、田舍ものにてありけるゆゑ、辨へもなく逃げ出して、藤兵衞等にはぐれけり。そも此のさわぎは何事ぞと、おもふにははじめは講中の、仲間喧嘩が枝のさきて、大喧嘩とは

なりしとぞ。その紛れに盗賊などの所爲にあるらん、刃物をふりて男女をおどしければ、酒亂せし醉人い亂れあるきてこんざつし、總くづれとはなりしなり。此のまぎれに彼の乳母は、逃げゆく人に突き倒され、終に八十八を見うしなひ、さうどうは程なくをさまりけれども、をさまりかねし乳母の役、またお蝶米八その外も、しれぬといふては濟まぬ事、といふは常體お蝶が歎き、米八は殊さらに狂氣のごとく足ずりして、山内はいふに及ばず、裏門の外表門の畑道までさがせども、それかと思ふ物もなく、乳母は前後を驅けあるき、同じく泣いて尋ねあるくのみ、途方にくれて爲方なく、今はなか／＼夜中には、知れまじきかと打寄りて、涙ながらに相談の、時しも誰やら聲々に、迷子だ／＼ト、いふを聞くより驅け出す米八、迷子といふを若しそれかと、立ち寄り見れば紛れもあらぬ八十八なれば、抱いて居たる人に向ひ、米「これはモウ、有り難うぞんじます、ツイ先刻のさわぎではぐれましたに、誠にたづねあぐみました、サア母へお出で。」ト、さも嬉しさうに抱きとる、（おてふのことを八十八にはあねといはせ、米八のことを母といひ習はせしなりけり）迷子の世話せし人々も、おのがさま／″＼わかれゆく。お蝶と乳母も付きそひて、よう安堵と思ふうち、小兒は亦も泣きいだし、我を抱いたる米八を見て、ふしぎさうにあたりをきよろきよろと見まはし、小兒「母人さんへ行かうヨウ、おッかさんヤア引。」トしきりになけば、乳をふくめ菓子をあたへてなぐさむれど、なか／＼泣きやむ氣しきなければ、蟲でも出てはなるまじと、藤兵衛が

さしつに、門前なる茶屋に宿をかり、支度などなしながら、よく〳〵見るにこの小兒、八十八の貌にたがはねども、衣るゐは八十八の衣類にあらず、されども家の定紋の、重ね桔梗を付けたるは、ふしぎといふもあまりあり。乳母は小用をやりてのち、著用前を直しながら、うは「オヤ〳〵、こりやアお坊さんではございませんさうだ。」米「なにえ。」うは「これ御覧じませ、をんなのお子でございます。」みな〳〵「エ女の子だとエ、マア。」ト彌あきれて貌見あはせ、溜息をつく許りなりしが、稍あつて藤兵衞は、藤「オヤ〳〵、今夜は此の子を八十さんだと思つて、夜を明かすがいゝ、夜があけたらば爲方もあらう。殊に私が胸に、少し考へ付いた事もあるから。」ト、其の夜は爰に明かしつゝ、翌朝御堂へ參詣するに、かの小兒はいつしかなじみて、米八の手をはなれぬに付けても、八十八が事案じられてお蝶が心を察しつゝ、くよ〳〵と氣の毒がれば、お蝶はまた米八をなぐさめながら、小兒にむかひ、蝶「坊の名はなんといふえ、いゝ子だネエ。」ト、いへばかはゆきことばにて、小「およねといひます。」蝶「エお米さんといふ名かえ。」小「アイ。」おてふは米八にむかひて、蝶「姉さん、この子はおまへとおなじ名だヨ、マアどうした事だらうねえ。」ト、ふしぎを立つる折しもあれ、五十歳に近き夫婦のもの、向うの方より來りしが、米八の抱きたる子を見つけ、老人「ヤレ〳〵、これはマアさぞ御厄介でございましたらう、何方さまか存じませぬが、あり難うございます、私どもが案じましたとは違つて、誠にあな

た方の御介抱になれば、これが仕合でございます。サア〳〵お米や、伯父の所へ來なヽ」ト、老人夫婦が手を出せば、老女の手にぞ抱かれける。此のとき藤兵衛は八十八のことを、老人にはなせば、老父も手を打つておどろき、老人「さやうならば御安心なされまし、其のお子は只今後から、此の子の女親私どもの爲には姪でございますが、おしつけこヽへ連れてまゐりますと、申したばかりではわかりますまい、昨夜この子の母が、此の子をつれて、四名川大町の宅を出て、こヽへ參詣いたしまして、喧嘩のまぎれにこの子を見失ひまして、やう〳〵群集の中から、あなた方のお子とは知らず、寸分此の子の貌に違ひませぬゆゑ、泣くのをすかして連れ歸る道より、すや〳〵寐いりましたゆゑ、その儘牀に寢かしましたに、今朝曉方に目を覺して、母人さんが居ないと言つて泣くのみならず、着物の紋はおなじ事でも、染色はちがひますゆゑ、それからさわぎ出して、よく〳〵見れば男の子、家内中が狐にでもばかされたかと、膽をつぶしましたが、姪も少し氣の付いた事があつて、私どもより先へよこして、たしかに似た貌の子ゆゑ、間違つたのだらうと、雲をつかむやうな事をあてに、こヽまで參りました。しかしこれもお祖師さまの御かげで、他所へ行かずに、知れやすいやうになつたのでございませう」ト、語るも聞くもふしぎにて、辿る所へ八十八を、脊中におひし一人の女、喘息き來るは仇吉なり。米八お蝶は、夢かと許り驅け出して、右左よりすがりつき、米「仇吉さんかえ。」蝶「八十

ばうかえ。」仇「エ、米さんにお蝶さん、お米坊も一所にかえ。」ト、こゝに寄り合ふ八九人、しばらくあきれて居たりける。わけて仇吉米八お蝶の三人は、途中といふさへ忘れつゝ、手に手をとつて泣き悲しみければ、藤兵衛と仇吉の伯父は、いろ／＼にすかしなだめ、まづ五六ちやうの駕籠をやとひて女連を残らず乗せ、まづ何となく仇吉が家へと至りけるが、そも姉多川を立ち退きて、伯父夫婦の世話となり、伯父も繁華の地をはなれて、四名川の大町に隠れすみ、女の子どもに三味線を指南へて活業となし、丹次郎の種を出産し、その名をお米となづけしも、米八が實意わすれぬ爲になせしとぞ。是等の事を聞くにつけ、三年此の方の心づくしを推しはかり、また仇吉も、米八お蝶の深切、追善廻向の事などを聞いて、身に染みわたる思ひをなせり。かくて藤兵衛は、伯父夫婦に仇吉のことを改めて頼みおき、其の夜は四名川の宿へ、仇吉をも伴ひて、賑しく酒くみあそび、さゞめき悦ぶその中にも、米八お蝶は、世に望みの満足りし心地して、嬉しさたとへるにものなし。さて翌日は、仇吉を大町へ送り、いづれも宅へ歸りしが、藤兵衛は仇吉のめづらしき節義、八十八お米と二人の貌の似たりし事、これ丹次郎の種に相違なく、腹はかはれども、丹次郎の貌に似たる子どもゆゑ、ふしぎの再會も出來たりとて、終に丹次郎にすゝめて、近き所へ仇吉親子、伯父夫婦をも引きうつらせ、米八お蝶は朝夕に往來して、ながく樂しみさかえけるとぞ。

この一回は、梅暦辰巳の園兩編二十四巻目の大まきなれば、なほ三冊にもなるべきを、版元は書肆の、長幕に倦き給はん事をおそれ、是非を論ぜず書き縮めよとのもとめに應じ、おほく略して筆を止め、やうやくに滿尾せり。これを察して、女兒童幼の、愛顧を願ふのみ。

梅暦餘興 春色辰巳園巻之十二 大尾

# 春抄媚景 英對暖語

# 春色英對暖語の序

本朝古者稱レ花者梅也。櫻稱レ花者中古以來也とぞ。されば梅を花の兄とも敬ふか。西行櫻の名は高くも、園位の實に愛せしは、梅をもつて勝れりと好みしならん。そは求來顧の梅を證とすべし。彼の櫻實の、酒の醉ひは醒すとも、梅の能におよぶべきか。先づ理窟に其の功をあげつらへば、古今醫統に曰く、梅花初放時、收レ之陰乾治、小兒痘疹不出不起者泡湯與之、速出速起。さて是れのみか、詩歌連俳、風流文雅の、題的とせられ、諸史にもはなるゝ事なきゆゑに、好文木とも稱ぶにこそ。抑梅は軒の垂氷のふと〳〵しく、冬の心地も、未だはなれがたきに、一輪の匂ひ窗より零れ入りて、やゝ春めき、或は片山里の、折りかけ垣に覗ゆるも、やさしとは、鬼貫が續の文などとかぞへていふ時は、千萬言に猶盡きじ。盡きせぬ最屓の、餘光にすがりて、此の書の作者狂訓亭が、梅ごよみから、辰巳の園、著の花と、こじつけて、彼の鶯の枝移り、彌其の香を實に傳へて、愛讀願ふ英對暖語、夫れ英に對して、暖かに語ると讀み給はゞ、花に由縁の外題といふべし。永代と稱ぶ橋に因めば、長物語の拾遺別傳、發端でなく續編ならず、同じ時代の前と後、例の馴染の米八仇吉、新妓の於房に、口をかけ、引いての後の、增吉をも若がへらせる、若葉の春、梅に實入を

幾千代も、壽ぎ祈る文永堂が、好みに應じて先生の、綴り上げたる新奇妙案、一日梅野の天神より、下向に連れだつ、路遊に唆かされて序文の代作、姚華庵も花に因縁ありと、しば／＼乞はれて筆を採り、兒女童男達へ、此の草紙は、面白いといふ、證人となり、拙き言の葉竝べつゝ、最屓連の隨一、かよふ神の花押を、しるすものは、東都台下の好男子。

賞梅亭の主人が蓮池の小隱

于時天保八年丁酉春三月吉辰

姚華庵戯述

# 春抄媚景英對暖語 卷之一 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春水 著

## 第一章

谷七郷の繁榮に、神も利益を増鏡、榊葉照らす神前に、軒を並べて太鼓の音、題目念佛さま〴〵に參詣あるを待道場も、をさまる御代の御恵み、徳の餘りに後生の用心、現世安穩二世三世、始終勝手の宜き様に、凡夫の願ひかけまくも、賢き宮居佛の出張、文箱地藏に色觀音、夫婦石やら和合神、子安子育媒人と、娘孃どもや壯人に、惚れられ易き御縁日、自由自在の街の賑ひ、種々かはる四季の景色、そも冬枯にいたりては、何所の夜見世も寂しくなり、亥刻も告たぬに商人も、植木もそろ〳〵引けてゆく、燈火まばゆき町竝を、二個連なる少女と息男、往來の人を氣を付けながら、後になりまた前に立ち、囁き咄し歩行りつゝ、娘「エ文さん、實正に今の事を極めておくれな。」男「なにも其様に疑はずとも能いぢやアねえか。」娘「イヽエ〳〵、お前は浮薄だから油斷はならないョ。觀音さまの方

へ往きやァ、菊本のお豐が一番好風だノ、額堂の際の福島が能いの、神明樣の地内ぢやァ、誰が仇だの、廣小路では誰だのと、年中諸方の娘のことばかり、言つてお出でぢやァないか。」男「なんのつまらねえことをいふぜ、只能いといつて賞めたぐらゐで、其樣にやかましく言ふことがあるものか。何ぞとりとまつて、斯うしたとか何とかいふことでもありやァ仕めえし。」娘「それだッても、何も他所の娘を、意地にかゝつて賞めずと能いわネ。私やァ嫁にやられるのが否だから、何となく鹽梅いわりい風俗をして、他人にも勞症のやまひが、發るだらうなんぞと言はせる樣にしたもんだから、中代地の伯母さんが、かはいさうだといつて、其身の家へ連れて往つておくれのだァネ。私の母人は根性がわりいから、他所へ出すのを否がるのに、代地の伯母さんが父に左樣いつて、保養をさせにとまりがけに連れて行く、病氣がつのりでもした節には、とつて歸しが出來ねえ、死んだ母人に遺言をされたから、私の身のことは代地の伯母さんが引請けて、世話をするといつて、今の母人をやり込めて、私を遊ばせにつれていつておくれのだァネ。それでなければ、今夜も斯うして出られやァ仕ないわネ、それにお前は平氣でお在でだョ、憎らしい。」男「オヤノ\、お前は涙をこぼすのか、何も泣顏をせすともいいぢやァねえか、しかし其の愁へ貌もまたかはいらしいョ、ドレ涙を拭いてやらう。」ト寄り添ふ。娘はちよいと脇へ外して、襦袢の袖で眼を拭きながら、娘「アレサ他人が看るわネ。」男「なぜ涙

を拭いてやつたといつて、能いぢやァねえか。」娘「それだつて、小兒ではあるまいし、人形ふして涙を拭いて貰ふものが有るものかネ。」男「其樣に否がるならば、離れて歩行かう。」ト、遠くへ隔てて歩めば、娘も所爲とすねて遠くへはなれ、つん／＼と歩行く向うより、醉狂人らしき人、三人ばかり來りしが、娘の前へ立ちふさがり、●△×「ハイ引／＼。」ト大きな聲にて驚かせば、娘はビックリ逃げ出して、男「女さんお待ちといへばネエ、私をば打捨つて、さッ／＼と往かずともいいわネ。」ト男のいたへかけてゆく。なまゑひたちは高わらひ、●△×「アハ、、、、／＼、好男めが向う側の方へ、連で不有風俗で往きやァがる奴サ、いまいましいアハ、、、、／＼。」ト行き過ぐる。好男は立ち止まつて、男「それ見ねえナ、怖がる樽に氣を強くするからの事だァナ。」娘「それだッて、お前がいぢめる物ナ。」男「ナニ俺がいぢめる物か、お前こそ此方を否がつて、離れて歩行くからョ。」ト笑つて居る。娘「ア、引ビックリした、ふけえきな折助だ。」男「アハ、、、、今逃げねえで左樣言へばいいのに、後で力んでもはじまらねェ。」娘「可笑しかァないョ、憎らしい。」ト○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○。男「○○○○○○、○○○○、○○○○○○○○○○○。」娘「○○○○○○○。」男「○○○○、○○○○○○○○○○○○○。」娘「○○○○○○○○○○○○○。」娘「○○○○○○○。」男「何だかさつぱり解らねえ。」娘「○○○○○○○○○、○○○○、○○○○○○○○、

○○○○○○○○○○○、○○○○○○。」男「○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○。」娘「○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○。」男「○○○○○○○○○○○○○。」娘「○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○。」男「我儘許りいふぜ。」娘「ホホ、、、、、、、愛想が盡きたかえ。」ト莞爾笑ふ美しさ、少し下品のもの言ひなれど、その人品は賤しからず、隨分諸人の好く風俗、何所の誰か知らねども、いと睦ましく行き過ぐる。此の外種々の戀咄、聲色物眞似辻小路に、看るもの心を付ける節は、身の善し惡しの鏡となる、世間の姿ぞおもしろし。爰に一人の息子有り。しかも同夜のことなりしが、右にしるせし娘の顏を、辻の燈火に幾度か、見とめたりけん立ちどまり、供につれたる小僧にむかひ、息子「長松や、今の娘はお雪によく似て居たナウ。」小「ハイ故人りなすッた御内室さんに、少許も違ひません。」ト、答へに息子はいとゞ猶、名殘をしげに見送りしが、本意なくも立ち去りし。是れなん辰巳の園に記したる、增吉の情人にて、宗次郎といふ者なり。さて此の夜よりは、はるかに月日も立ちて後、心にしたふこと出來て、戀が窪の郭へかよふこととなりしが、いまだ其の意を得ざれども、今日もおもむく夕暮に、金曾木へかゝりし折しも、俄雨に爲方なければ、格子戸の三枚立ちし軒下に驅け込みて、しばらく晴間を待ち居たりしが、いよ／＼雨は強くなりて、はや暮れ掛る空の

色、眞黒にこそなりにける。ときに格子のうちにては、中音に男女一代八卦といふ本を讀みながら、女「わからないかえ、寔にこまるねえ、これより大きい聲をすると、外へ聞えるわネ、サア耳の際でよむからよくお聞きョ、エ、ト葉の運ダッけネ。」

葉の運の生まれの人は、出家侍は苦勞あり、町人百姓はよし。生まれたる所には住ますして、一族のうちへやうしなどにいたることあり。他人にあはれまるゝ性にして、諸事くらうたえず、一たび身上を崩すとも、またよき事あり、兎角他人のあはれみ多く、あやふき時にのぞみ、思ひもよらぬ人に救はるゝことあるべし。

宗「なき人の。」トよみかけし様子なりしが、其のよみ聲は止みて、女「ア、引くらくなつて、よみよめないヨ、マア燈火を付けてからのことにせう、母人お前は裏の方をしめておくれ、私が表の戸をしめるから。」ト、格子の所へ來り外面を見て、女「オヤノヽ、大へんに降つて來た、空が眞ツくらになつて。オヤお前さんは花衣さんの宗吉さんであらッしやるヨ。」ト 宗さんの宗といふは、客におなじ名のあるゆゑのことになりしよぶしいさゝしたまはれ、といふこの女まりのものにてありしならん 宗「オヤ誰人だか。」女「マア此方へおはひりなさいましな、先刻から其處にお出でなさいましたのかえ、さぞお困りなさいましたらうネエ。」ト、格子戸を明ける顔を見て、宗「オヤオヤ、誰だと思つたら、菱屋の内に居た増吉様だノ。」女「ハイマア此方へお這入りなさいましョ、誰も

御遠慮なさる樣な人は居りません、私の宅でざます。」宗「左樣か、それぢやァ少し置いてくんな、今に駕籠やが通るだらうから。」ます「モシお急ぎ被成なら、此の前にかご屋がありますから、母人を呼びにやりますヨ。マア奧へお出でなさいまし、サア／＼。」トすゝめられ、宗次郎はやう／＼さしきへ通れば、母親も出てあいさつをなし、增吉は菱屋に居たりし時分、宗次郎にひいきになり、心づかひもして貰ひし身ゆゑ、麁畧にせず、火をおこして湯をかけ、箱火鉢のまはりを拭きながら、ます「サアやう／＼お火がおこりました、マアお溫りなさいまし、雨のゆゑか誠に寒くなりましたヨ。ホンニマア知らない事と申して、此の寒いのに外にお出でなすつて、さぞお冷えなさいましたらう。」ト、やさしくいふ增吉の樣子、元來內唄女には立派過ぎた女なりと、評判されし美艶しき容儀なるが、わづか見ざる中に、いよ／＼麗はしくなりて、まだ里より出でて間もなき事と見えて、家內貧窮らしきには似ず、相應なる衣裳にて、衿白粉を濃く付け、仙女香を貌へうすく付けたれども、全體色白く肌目の細かき生質なれば、夜目にはいとゞ綺麗なれば、宗次郎は思はず見惚れて、心の中に思ふ樣、以前菱屋のもとへ通ひし時分は、是れほどの美人とは心付かざりしと、感じ入つて忙然たりしが、宗「思ひがけない雨で、おもひがけなくお世話になることだが、長く居てはわるからうから、モウおいとまにいたしやせう。どうぞそれぢやア、今左樣云つた駕籠屋を、御面倒でもたのんでおくんなせえな。」

ます「ハアようございますわナ、そして最う今ぢやァおまへはんは、郭中へお出でぢやァありますまいネ、お宅にはうつくしいおいらんが、御内宝さんになつてお在でなさるし、しかしそれだけ早く、お宿へお歸りなさりたからうけれども、たま〳〵はおそくお歸りなさるのも、癡話の種になつていいぢやァございませんか、今にお茶が出來ますわネ。」ト、笑ひながらいふ貌、愛敬ありていよ〳〵うつくし。宗次郎も笑ひながら、宗「ナァニ大違ひなはなしだ、最う先達花衣は死んで了つて、今は只獨身者だァネ。それだから此のごろは、諸方の青樓へあそびに往つて、宅へはろく〳〵かへつたことはねヱわナ、今日も實は何屋ぞ、能い樓へ行かうと思つて出て來たんだァネ。」ます「オヤさうそばッかり、どうして花衣さんにわかれて、半日も承知してお在でなものかねえ、おまへさんがたのこそ、實にいのちがけで御夫婦におなりなさつたものだものヲ。」宗「それだッても、死んで仕まつたものヲ爲方がねヱ。」ト さすがにかかる時になりても、思ひいだして涙をおとして、すこしことばもとぎれるそのすがた、さもあはれに見ゆる。 ます「オヤうそぢやァございませんか。」宗「ナニ〳〵うそなものか。」ます「エ、實正にでございますかえ。」宗「ナニ面白くもねえことを、嘘をいふものか。」ます「オヤ〳〵左樣でございますか、おかはいさうに。さぞおいらんが悲しくつて、死ぬか否であらしつたらうネエ。」ト、いふ時藥罐の湯が煮え立つ。ます「母人いいお茶は。」せ「ソレ近邊から來たのが、佛さまにあるヨ。」ます「オ、ほんに左樣だッけネ。」ト佛壇よりして、大袋に入れたる

茶を出して煎じるは、法事についてもらひしものとおもはる。宗「ほんに長居をしてもいいのかネ。」母「よう御ざいますとも、娘と私より外に、誰も居りませんから、寂しくつてなりません。實は親父が亡去りまして、やう／＼昨日が三十五日でございましてネ。」宗「ヤレ／＼、それはお力落しなことだネ、そりやアさぞお寂しからう、そして何かえ男の子はなしかえ。」母「ハイサモウ、何もかにも子と申しましたら、お増ばかりでございますゆゑ、寔にモウ／＼心ぼそうございます。」トいひつゝホロリと涙の雫、いつはりならぬ母子の風情、たよりなげなるありさまを、寔と思へば不便さと、さすがに聞き捨てかねしゆゑ、宗「なるほど、それおやアさぞこゝろ細からう、しかし不躾ながら、お増ばうにいい亭主か世話人でも出來たら、お前のくらうはあるまいがネ。」母「ハイそれがお前さん、お増は否だと申しますし、それにまた此度親父が死去りましたに付いて、物入がございましたから、折角前々月年季の明けましたのに、また少しの間でも親方へ遣はしまして、金子の少々も借ります相談を。」増「アレサ何だネ、母人さんたま／＼ならばいいが、始めてお出でなさつた旦那さんに、其樣な外聞のわるいことを、おはなし申さずとも能いわネ。」ト

はづかしさうに、母の口を留めるといへども、とまらぬはいよ／＼烈しき雨の音、あられとなりてやバラ／＼／＼、軒端に當り戸に打ちつけ、さも物すごく風そひて、かすかに聞ゆる夜駕籠の

聲も、空行く鴈の音にまがひて、いとゞ寂しく哀れにて、しん／＼とこそ更け渡る。

## 第一章

そも／＼男女の思ふ中も、私情を自由にするに等しく、他目に見てはそしりもすれど、かならず逃れぬ因果の業にて、凡夫の勝手といふにもあらじ。再説彼の宗次郎は、思はざる家に雨宿りして、あやしくも赤縄のつながる月下冰人事なるか、あられまじりの雨風に、歸るもならず／＼歸られず、長の方ひッそりと、往來の人も絶えたる樣子なれば、當惑して居たりしが、先刻よりの物語に、前後の事を考ふれば、全く氣兼をするにもおよばぬ家なりと、心を落ちつけ、此家に一夜をあかす氣に料簡して、宗「それぢやァ今夜ア、どうぞとめてお貰ひ申さう、どうもだん／＼と雨の音が、おそろしくなつてものすごい樣で歸られない。」母「よろしうございますとも、それに私はまたあいにくと、此夜は此の裏の奥に用がございましてネ、貴君を御馳走も出來ませんから。」宗「オヤそれぢやァ、私が此所に。」母「イ、エ何ようございます、他の用ではございません、裏の家に百萬遍がございまして、是非通夜をいたしてやらないければなりませんが、晝間ッからこれが一人では、留守は出來ないと申しますし、また裏の家へは此間中、此方へ通夜をして貰つた義理がございますから、纏らないと自己勝手になりますから、どういたしたらばよろしからうと、母子が困つて居りましたのでございます、な

りませうならば見ぐるしい宅でも、どうぞ御堪忍なさつて、一夜お休みなさる樣にお願ひ申します。夜具もさぞと思しめしませうが、お增のをば私が丹誠で、綺麗としたのをこしらへておきましたから、マアそれでも無理に著てお休みなさる樣に、ナウお增。」トいはれて、娘はまだ何心も付かざりしが、俄にハットはづかしく、赤らむ貌もかはゆらしく、心の底の嬉しければ、增「オヤほんに、お前は裏の家へ往くんだッけネ、それぢやア私は宗喜さんを無理に。」母「何だな此の孃は、ぞんぜえなものの言ひ樣をして、宗さんなんぞと、お友達を見る樣に、氣を付けて口を利きナヨ。」宗「ナニサ母御ヤ、あれが里の癖だァナ。そして雨に降りこめられて、旦那あしらひをされちやア迷惑だ、其樣な氣がねをしなさんな。」母「ハイ、それでも餘り、お心易だてを申しますからサ。」增「ハイ〳〵、それぢやア旦那さまにお願ひ申して、無理にお留め申して、郭のおはなしでもいたしませうねえ。」ト笑ひながらいふ。母は帶などを〆めかへ、裏の家へ行く支度をして、數珠を佛壇から出して居たりしが、母「ア、どうぞ左樣おねがひ申しな。兎てもモウこの大降では、旦那も何處へお出でなさることもならないから。」トいふ中に宗次郎は、小粒を一角紙に捻り、また南鐐二ッを、手に持つて居たりしが母に向ひ、宗「それぢやアネ母御、これは餘り少ないが、わざッとお近付になつたしるしの土產だョ、お增ばうはなじみだから、跡でまアゆるりと相談して、ほしがる物を明日買つてやりませう。」ト、い

ひつゝ金をわたして、宗「それからネ、兎ても御厄介になるものだから、もうひとつお願ひがありやす、お前の今行く先のお家に、男衆があるだらうから、使賃をやつてネ、どうぞこれでゝト またかねをわたし、「酒を一ト銚子、殘りは肴を何でもいいから、こしらへさせておくんなせえ。寔に面倒なことをお氣の毒だがお願ひだ。」且「ナニどういたして、面倒なことはござりません、よくは出來ませんけれども此の一軒隣のが仕出し屋でございますから、私が直にあつらへて參じますが、これはいたゞくわけではございませんから、どうぞ其御許へ。」宗「ナニサ〳〵、誠にすけないけれども、マア取つて置きなせへ。何れ跡で又、少しの相談相手にはなりやせう。」且「まことにありがたうぞんじますが、マア御土産なんぞが入りますものか、左様ならばお禮を申して、お預り申します、お増よくお禮を申しておくれ、そして氣を付けて上げ申しなヨ、アレ鉦の音が聞えるから、私は直に藤木へ寄つて行くヨ。」仕出しやのことゝなるべし。ト、そこ〳〵にして出でて行くを、娘は立つて見送りながら、ます「アレサ母人、傘をもつと横にさすと濡れないわネ、アレサ右の手の方へだよ。」ト、燈火をさし出し佇み居る。宗次郎も立つて來り、宗「ヤレ〳〵、とんだ厄介になるがいいかナウ、母御へ氣の毒だ。」ます「ナアニ私の母人はネ、誠に氣が役に立たないから、他ばかり便りにして、何でもおど〳〵して居ますわ。」宗「そりやア其のはずサ、おめへは情人を力にするだらうから、氣が丈夫だらうが、母人はお前ばかり便りにする

のサ。」ます「オホヽヽヽヽ何様いたして、私に情人なんぞが出來ますものか。」宗「なぜ出來ねえ。」ます「なぜと被仰るけれども、私やァ他人とは心もちが違ひますものチ。」宗「ハテナ何様違つて居るンだえ。」ます「マア 私が他人と違つて居ると申しますのはネ、不斷斯う思つて居ますわ、よくマア他の人は情人に切れたの、止めたのと云つて居られるものだ、一度でも情人になつたらば、モウ〳〵何様なくらうしても、どういふむづかしいことが出來ても、お飯を食べない様なことがあつても離れまい、それがならないくらゐならば、最初ッから情人を仕ない方が能いかとおもつて居りますから、今まで其の人を見くらべて居ても、どうももう一人でも、頼もしいと思つた人はございませんヨ。また在りましても、その人を如在なく、立派なおいらんや唄女衆が、早く情人にして居るから、私なんぞは、なか〳〵齒は立ちませんヨ。」宗「あんまり左様でもあるまい、其様に身を卑下する者は、かへつて色が出來易いものだ。また實に情人のないのが譃でなくば、誠に事情の有る人を、相手にこしらへてやるけれど、今までの情人が、やかましくいふだらうからいけねえ。」ます「オヤ〳〵、實正に何もありは致しませんヨ。」ト笑つて居る。宗「それ見ねえ、それだからまじめなはなしは出來ねえ、茶にして笑つて居るものチ。」ます「イヽエ、寔にモウ〳〵、これまでおいらんも知つて居さつしやるが、少しでもいやらしいことなんぞを、したことは神さまかけてありはいたしませんヨ。」宗「それが

實正ならば、おれが一人世話をして遣らうが、隨分情人になると、實があり過ぎる程あるけれども、
男が惡くッては否か。」ます「すネ、、、、、男は私が望みがありますから、所詮出來ませんわ、そ
れだから諦めて仕まひますヨ。」ト少しすねる樣な言葉遣ひにて、宗次郎の貌を惚々と見ながらいふ。宗
「ハテナ、たとひ何樣な男だといつて、お前が惚れたといふのを聞いて、否といふ男はありさうも
ねへものだ。」ます「イ、エ、まだ言ひ出しは仕ませんけれども、左樣言ひ出すと直に恥をかきますか
ら、心で惚れて心で意見をして、あきらめるが能うございますヨ。」ト恨みがましくいふ。宗「ナヤ
ナヤ、がうぎに悟りをひらいて居るなう、自己はまた惚れた女が出來ると、たとひ向うは何と思つた
といつて、なか／＼あきらめるの、言ひ出さずに仕まふのといふことはならねへ、是非恥をかくまで
も、言ひ出す氣だが、左樣すると猶の事、氣障だといはれるだらうネ。」ます「オヤ／＼、お前さんな
んぞに惚れられる女は、それこそマァ寔に能い月日の下とかに、生まれた運とやらでございますヨ。
それだから花衣さんが、お前樣の御内宰さんになつたといふ、噂を聞いた節は二階中（ひしやの二階をさしていふなり。）
何樣に羨ましがつたか知れやァしませんわ。モウ／＼それは大さわぎでございました。」宗「ヘ、さうま
くいふぜ、誰が此樣な不粹な野郎に、かまひ人があるものか、花衣もほんの義理で、此方許へ來たの
だから、直に離別るやうになつたのだァナ。」ト、話の折節仕出し屋より、二ッ物と酒をもつて來り、

裏口をあけて、仕出し「ヘイ大きにおそなはりました。」ます「ハイ是れはお世話でございます、とんだはやかつたヨ、雨でお困りだらうねえ。」仕出し「ハイどういたしても、お平なんぞは冷めましたらう、どうぞおあたゝめなさつて下さいまし、そしてこれがお鈞でございます。」ト錢を出して、仕出し「しけでございますが、此のお天氣だから、モウ今晩は早仕舞にいたすつもりで、おまけ申して上げます。」ます「オヤ左様かえ、それはおほきに。」仕出し「ヘイ左様ならば。」ト立ち出づる。雨の音ばら／＼／＼、鉦の音カン／＼引。仕出し「ア、引大變に凄い晩だ。「八ツ九ツに來る客はア何所の。」ト、いふ唄の後は夜風に紛れて聞えず。ます「オヤ／＼、御酒も溫めて來たさうだ、サア直にめし上りませんか。」宗「ハイこれは御面倒さまで、左様ならば始めようかネ、サアお前も直に。」ます「ハイお湯をかけて置いてから、サアお酌を致しませう。」宗「アイどうぞ一ツ、ヤレ／＼マア久しぶりで、増吉さんのお酌で吞むなウ。」ます「オホ、、、、、何時でございましたツけネ、花衣さんとお前はんと、喧嘩をさしツて、夜通し○○○○○○○○○○○○、私とお粂さんが、三味線を彈き續けに、夜を明かしたことがありましたツけネ。」宗「左様だツけノ、そりやアいゝが、此の酒を母御にも吞ましてえものだ。」ます「ナニ母御も私も、酒は少しも給べませんヨ。」トこれよりしばらく、さかづきのとりやりあるそのふぜいはよろしくさつし給へ。

斯くて後、いよ／＼兩個は戀ひ慕ふ情は、たがひの眼元に顯はれ、誰がすゑたる關もなければ、

只遠慮に時刻をうつすのみ。

○そも〳〵此の宗次郎は、米町の大商人福徳屋宗左衛門の二男にて、甚だ放蕩なりしが、近頃女房を持つて別家せしより、神妙にくらしけるところ、其の女房お雪と言ふは、菱屋の内證新造花衣と、いひしものなるを身請して、女房になせしなり。その戀女房に死去れてより、俤のみ目にちらつき、近所にお雪に似たる娘の在りしゆゑ、それをせめてはと言ひ入れたりしに、其の女には情人のありと聞きて、せん方なくも思ひ止まりし所、またもや彼の娘を縁日の夜見世に見かけ、益戀しく思ひ居たるうち、その娘は仔細あつて、郭へ身をしづめしと聞きて、此のほど折々通へども、いまだうち解けたることもなく、貌の似たるに迷ひつゝ、今夜もそれへおもむく途中、此の家には宿りしなり。

春抄媚景 英對暖語卷之一 了

# 春色英對暖語　卷之二　梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水　著

## 第七章

爰に何所の裏家か知らねど、お柳といふ娘あり、其の歳齢は十八九、少し勇肌には見ゆれども、實意は厚く浮薄なる行狀なんどはなかりしが、此の程文次郎といふ、男の爲に心をうつして、終には勘當をうけ、伯母の情と媒人の俠客ゆゑに、願ひも叶ひ、彼の文次郎と新世帶とはいへ、男も勘氣の身の上、元手も少分きことなれば、嬉しき中に苦勞なる、活業の助力と相談して、花水橋の河原において、竝びし葭簀の茶見世を借りて、寔に夫婦の倶かせぎ、色氣は自然に備はれども、心は陰鬱に女房氣の、うら恥かしき我が心、折節出づる昨日の娘氣榮煮に長屋の内儀が指圖をしたり、笑はれたりするも苦樂の浮世なるべし。斯くて月日をやう〳〵に、過せし中に思ひきや、文次郎の身の上に、不慮なる災ひをかふむりて、無實の罪も其の當座に、言ひ解き兼ねたる事やありけん、辻小路の調所に

呼び止められて、其の身は知らぬことながら、何か落度となる筋ありて、其の故に他人のなしたる所爲を引き承けて、金を濟ませねばならざる由を使にて、我が家へ告げてよこしければ、お柳が驚きいはん方なく、其の中には使と僞り、少々の金をかたり行きし曲者ありなどして、何事も年のゆかざる女氣に、途方を失ひ歎きしが、斯かる折にも友達の好身を捨てず、聞き傳けてたづね來り、お柳をなぐさめ伴ひつゝ、彼の調所へ詫言に行き、また仔細をも聞き糺して、兎も角も力にならんと相談をなし、彼所に至り内々ながら、文次郎に對面させて貰ひ、長くは咄もならざれば、そこ／＼に談合なし、又友達に伴はれて、わが家へ歸る道すがら、相談するより先だつは、金の多分に入る事ゆゑ、當惑なしたる弱輩同志、お柳を眞中に連れだちながら、●「ネ、ネヱ、どうしたら宜からうナァ。」△「左樣り、友達のよしみだから、是非算段をもする氣だが、七兩といふ金を、明朝までと言つては出來めえだやアねえかネ。」●「誠によわるナア、そして先刻取りによこした金も、文さんは知らねえだやアねえかネ。」りう「ア、少しも其樣な事はないと言ひましたわネ。」●「足元を見て、騙りに來やアがつたのだネ。」りう「あの節お前達が、誰か一人居ておくれだと、取られはしなかつたらうねエ。」●「そりやア此方等が、其の場に居りやア思入たゝきくじいてやらア。」△「イヤ其樣なふてえやつらだやア、此方かたゝきくじかれるかも知れねえ。」●「そりやアさうと金の都合はどうしたらよからう。」りう「いつそ私が、

身をどうかせうかねえ。」▲「そりやア左様すれば、二十兩や三十兩は、直に出來るけれども、左様した日にやア文さんが、歸ッて來た時に、おいら達がすまねえ、そしておめへもかはいさうだ。」●「それもあすの朝の間には合はねえぜ、モウ亥刻過ぎの鐘が聞えらア。」▲「ホンニ一丁目の拍子木を打つなう。」トいひ「今ッから、私が女郎屋へ、すぐに往つても間に合ふまいかネエ。」▲「つまらねえことをいひねえ、まご〳〵する中には、夜が短いから、おきに子刻にならア、どうして相談も掛合も出來るものか、マア何にしても、今夜ア別れてあしたの朝のことにしよう。」●「左様サ、おいら達もあしたまでに、一兩でも二兩でも、出來るだけ算段をしようから、なう左様ぢやアねえか。」▲「ム、そのつもりでお柳さんも、宅の道具も疊も賣つたら、三兩や四兩は出來るだらう、それでも身を賣るよりはましだぜ、左様して一兩ぐれえたらねえのは、どうかなるだらう。」トいひつゝ、お柳を路次口まで送りて、別れ立ち歸る、其の深切ご賴もしけれ。お柳は今さら心細く、我が家へかへれば、鄰裏茶屋の二階の奥ざしき、鶴賀加賀八太夫が妙音に、いと珍らしき昔もの、

上書へわしをふり捨て縁切るとは、よう書かンしたさりとては、卑怯なしかたあんまりな、かなしさ過ぎてなかれもせぬ、私や氣違ひになりさうな、あれは誠かうそかいなう。へ書いたものは反古にはならぬ、どううろたへて下さんしたと、縋り付いてぞ泣き居たる。長吉も涙の目をしばたゝき、

男「此の起りは戸平がしわざ、結んだ伊勢講の場の手なぐさみ、旦那へ入れる十両の金、ふと合はせ
たが身の因果、其方の年季も此の六月が切り、一勝負やつて見て、仕合したら借銭も片付けてと、
思ひの外に十両は、さらりととられ、又も戸平に二十両、證文を書いて借りたが月も限れ、其方と
縁を切つたらばと、さしつまッたゆゑ。ト言
りう「アヽ否な辻占だ、金ゆゑ縁も切れるとは、夢にもどうぞ見たくないと、おもつて居てもさしかゝ
る、朝の金をどうせう。」ト心の内に獨言、宅へ這入れば留守居の老女、老「す、お柳さんお歸りか、丁
度よかつた、先刻から待つてお出でなさるお客がありますヨ。亥刻を打つたらおそくなると、案じて
お出でなさいます。」りう「オヤ／＼左様かえ、どなただか。」トいひつゝ客の顔を見て、面目なげにさ
しうつむき、りう「文さんの母人さん、寔に面目も御さいません。」ト、氣の毒さうに見えければ、老女
は客へあいさつし、老「それぢやアお柳さん、私やアモウ歸るヨ。また野郎が朝早く買ひ出しに出るか
ら、朝の仕かけをしねえぢやアならねえ。」りう「左様かえありがたう、そんならお休みヨ、またあし
たどうぞ。」老「ハイ／＼。」ト出でゝ行く。跡には例の母親が、母「イヽエモウ、氣の毒なは私の方がや
ふやま、實は兩方の親達が、義理といふ字を、隔てた心のあるゆゑに、勘當した文次郎、私は何のそ
れほどにせずとものことと思つても、亭主の兄の娘を嫌つて、おまへと斯ういふわけ、私の爲に實子

の文次郎だから、あまやかすといはれるがつらいゆゑ、マア時節もあらうとその儘にしておく中、うすうす聞いた今度の大變、伯父が何所でか聞きつけて、おまへと縁を切らせたら、勘當の詫も仕ようし、無實の罪の金も出して、すませるなんぞといふけれども、それも親身な心でもなし、實は伯父の娘が文次郎をしたふのが、種になつて病氣だといふはなし。」トいひながら、なみだをおとすは、女おやのくせならんか。實は文次郎の母は、お柳と縁を切らせんと思ひ、たづね來りし所に、お柳は文次郎の爲に、苦勞する事大かたならず、今もその難儀の所へ、逢ひに往きしと留守居に頼まれて居たる、長家の老女が物語、文次郎の故に身を苦界にしづめても、今度の難を救はんとて、千々に心を惱ますよしを、細かに話されしかば、倩思ふにお柳の身も、我が子にまさる家をすて、不足なきくらしでもする事か、手なれぬ業を朝夕に、憂しともおもはでまた更に、辛氣な難儀驅け歩行く、心のやさしさを、思へばあはれに感心して、

母「ナウお柳さん、實は文次郎を家宅へ歸したく、お前と縁を切らせようと思つて、此所へ來たのだけれど、お前が苦勞をしておくれの樣子、委しく聞いて看れば、なか〳〵縁を切るどころではない。たとひ親子が一生逢はず暮せばといつても、お前と縁は切られぬ義理。お前もどうぞ此の末とも、和合く活業しておくれヨと、いつた所が先刻お前の留守にも、委しく聞いた金の手支へ、どうしたらよか

うやら、當座の凌ぎ金の才覺、僞にも緣を切らしたら、出來も仕ようがそれもまア、急には出してく
れもしまい。」ト溜息をつき、やゝしばらく途方にくれし嫁姑女、兎に角なみだのかわく間なく、泪を
付き合はして居たりしが、お柳はいとゞ悲しさに、今まで知らぬ胸先の、痞へは癪の所爲なるか、齒
を喰ひしばりてこらふる風情、年はもゆかぬ娘氣に、親の手元をはなれつゝ、間もなく連れそふ男の
災難、誠ある身は憂き事も、他に增りて案じも深く、さも哀れげに見えけるゆゑ、母はいよ／＼お柳
を思ひ、我が實子にもまされる如き、恩愛の深くなりければ、勝手に付いて緣切らせんと、來りし事
の恥かしく、今は神に祈りても、嫁になさんと願ふならんか。母「アノお柳さん、今夜歸ると明朝、
またといつては出にくいから、お氣の毒だが何れにも、金は都合をするほどに、今宵はおまへの所へ
止宿つて、ゆるりッと相談をしたいねえ。」りう「ハイどうぞ、左樣だと嬉しいことでございます。私
の氣では夜があけたら、此の身を女郎にしても、文さんを見つぐ心でございますが、何をいつても年
がいかないゆゑ、他人が馬鹿にしていけません。お前さんが力になつておくんなさると、氣が丈夫で
ございますから、この事の濟むまでは、どうぞ此方にお出でなさつて下さいまし。」ト、誠を顯はすお
柳の心は、母のごとくに思ふの深切なるべし。

作者曰く、そも／＼此の一章は、をさな子どものよみて、さらに面白からぬことなれども、人情

の誠は、かかる節に知らるゝものなれば、心よからぬすぢなれども、綴りてお柳が實意を、看官の娘御にうつさんとすればなり。但し信實なるお柳は、かくのごとき災ひあるはいかにぞや、是れその男には貞實なれども、はじめに我儘にして、親にそむくの罪あり、このゆゑに自然と年ゆかぬ身にて、かかる難儀の苦勞をすることありと知るべし。

落ちぶれて袖になみだのかゝる節他人の心の奥ぞ知らるゝ

## 第四章

さてもお柳は終夜、憂きを重ねて泣き明かす、其の曉につかれはて、うと／＼ねむる折節あれ、文次郎は門口より、隱れて忍ぶわが家の中、お柳をひそかにゆり起して、文「オイ／＼お柳や、これさこれさ、コウ／＼はやく目をさまして、支度をしてくんなな。コレサおいらと一伴に、此所を逃けてくんな、サアすぐに帶でもしめねえか。」トいはれてビツクリお柳ははねおき、りう「オヤ文さんかえ、どうして家へかへられたエ、さぞ難儀をおしだらうねえ。」文「ナニ／＼、宅へかへつたのではねえ、先刻の所にあづけられて居る所へ、畠山さまの、御屋しきの衆がお出でなさつて、今の中はやくこゝを立ち退け、同類のやうではあれど、寔は知らぬ其方の災難、不便におもつても表向ではゆるされぬ、一旦逃けて姿をかくし、他人をもつて申しわけをしろとの御内意、それでのがれて出て來たのだ。外の

者に見つかると、もう今度は除れはならぬ、サア否か、いやならどうも爲方がねへ、おいらばかり遠くの田舎へでも逃げて往かう。」ト、いはれてお柳は引きとゞめ、りう「サレサまアお待ちな、そんなら私も一同にまゐるヨ、おまへまア此の母御さんにも、左樣お言ひか。」文「ナニ母人さんが何所に。」トいへばおりうはあたりを見まはして、りう「オヤ〳〵、これぢやア私が寐入つた中に、歸つてお仕まひかねえ。」文「なんのつまらねえ、そんなことをいつて居ずとも、はやく此所を逃げるのだヨ、うじ〳〵して居るとまた捕まるわナ、エヽ、埒のあかねえ、サアおいらア先へ往くぜ。」ト、せき立てられて娘氣の、心わく〳〵周章へまはり、これもあれもと風呂敷へ、包むに餘る親の慈悲も、今はその甲斐あらずして、やうやく櫛笥小鏡を、持つ間おそしとせり立てられ、まだあけ方の朧かげな、たよりに二人ははしり出で、花水橋を一さんに、東をさして急ぎつゝ、平井の方へ落ちてゆく。はや其の頃は朝日かげ、高く登りてあかるくなれど、身の分解はまだくらき、繩手にかゝる時にいたつて、堤のかげより五六人、顯はれ出づる破落戸的、左右より飛びかゝり、●「おたづねものの文次郎、おのれが身ばかり逃げることか、此の場にたつて娘まで、つれて立ち退く横道者。」▲「兩人ともにふんじばれ。」●「うごきやアがるな。」ト大勢に、とりかこまれて二人は悲しく、別けてお柳はおそろしく、りう「どうぞ御免なさいまし、文さんはすこしも知らないことでございます。それだけれども、お金は後日拵へて、上納つてしまひま

す。」●「イヤ／＼、其樣なことを聞いては居られねえ、野郎をはやく繩をかけろ。」ト、いふより早く一同に、文次郎をとつて押へ、ぐる／＼まきにしばりつゝ、元の路へ引き立てゆく。跡に殘りて二三人、お柳を捕へ傍の、辻堂へ引き連れゆき、既に無體になぐさまんと、迫りよられて身を縮め、柳「アレヨウ引人殺し／＼。」ト聲を立つれば何人か、お柳の耳に口をよせ、「コレサ／＼、此の子は夢でも見るのかえ。」トいはれてお柳は心付き、見れば平井の土手ならで、轉寐したる我が家に、起してくれるは文次郎の母なるゆゑ、さては夢かと思へども、覺めて猶さら胸せまる、案じは同じ母心、お柳の夢を聞くよりも、いよ／＼我が子の苦になりて、すくふ手段を談合の、節しも世間は巳刻ごろ、かかる歎きのありぞとも、しらで長家の娘の聲、折も節とて氣にかゝる、稽古の節も清元か、にごらで高き一調子、

〽思ふこと、叶はねばこそうきことの、戀と義理との二筋を、たゞ一筋に男ゆゑ、かかるなげきといふやらん、まかせぬ戀のぜひもなく、〽哀れなるかなおしこそ、由なき事を仕いだして合身の罪科をすて札に、〽名のみ殘して消えてゆく、死出の旅路や町々の、木戸は冥途の一里塚、あしたの露と玉の緒の、珠數に願ひは未來のちぎり、それを心のちから草合

柳「母御さん。」ト涙ぐんで顏を見る。母「ホンニ否な辻占だねえ、しかし文次郎の心に覺えのないこと

だから、今にあかりが立つだらうわね。」
「南無妙法蓮華經〳〵、へたのむ手さへもしばり繩、縋さしいる〻懷の、もれてながる〻涙橋、
へ泣いてあふ夜の睦言を合
玉「どんなに悲しい苦勞をしても、お飯のたべられないことがあつても、つらいとは思ふまいとぞんじましたが、此樣なことがあらうとは、夢にも知らずに居りました。」母「その夢さへも氣にかゝる今の時、私はこれから金の才覺、ぜひ〳〵都合をするほどに、氣を丈夫にもつておいでョ。文次郎が馬鹿だからおまへにまで、餘計の苦勞をかけるのだ。」ト、いひつゝいそぎ立ち歸る、義理の母親それにさへ、世事もいはれぬ胸ぐるしさ、涙でばかり見送る娘、またもきこゆるとなりのこゑ
へおほこ娘のあどなさを、思へば不便と母始め、なみゐる人々諸見物も、一度にふらす涙の雨、溜邊の水や增るらん。
母「餘り氣をもんでは、また癪がおこるから、マア心を落著けて居なョ。」ト、見返る母も目に涙、跡を案じて後髮、引かる〻思ひ路次口を、力泣く〳〵わかれしが、前生よりの定數なりけん、金の才覺火急の難儀、萬事さし支へて悔しくも、お柳は郭へ身を沈め、文次郎の災難を救ひけるとぞ。彼の宗次郎がその女房に、似たるをもつてしたひこがれ、素人の節より思ひそめて、此の程郭に心當の出來し

とは、此のお柳のことなりけり。されば宗次郎の情は、なか／＼に屆くことにはあらず、只俤になりみて、あしくされるをいとはずして、四五度通ふ途中において、彼の雨宿りに增吉に再會ひ、はからずも戀々の情をおこし、はてはたがひに、二世を契るの深きにいたる。嗚呼男女の中ほど、あやしくも悟りがたきものはあるべからず、緣のつながるが誠にて、是非の論はなしがたくぞ思はる。されば浮世の機關は、忽ちかはる人の身のうへ、昨日の生娘今日ははや、そまる苦界の郭なまり、隠れて上りし文次郎、初會の牀の何氣なき風情と見えておもひの外、いとしめやかに子刻過ぎの、しんしんとせし睦ましごと、お柳も今は柳川と、我が名をやう／＼承知えし頃なり。文「ユ、コウおいらん、今さらいつてもはじまらねえが、此方が氣がきかねえ許りで、他人のした罪をなすり付けられて、既に命にもかゝはる所を、お前の深切を盡したお蔭で、災難を除れたのみならず、商ひの元手まで、拵へて貰つた理だ。何でも精を出して、三年の年を半年にも詰めて、早く家宅へ歸る樣にと、氣をもむけれども、何樣も思ふ樣にはならず、斯うして來ても翌日、猶々鬱氣ぐ種になるけれど、四五日も貌を見ねえと、死ぬやうな心持だから、ツイ隠れて今夜も上げて貰つたが、此方へ來ても、何も斯うといふことは、ねえかなう。」やな「オヤ何も斯うといふことは、ないかとはえ。」文「エなに外ぢやアねえが、お前の娘で實家に居た時節に、惚れて氣をもんだ衆中が、澤山あつたが、今斯うなつたのを聞き

傳けて、さぞ來るだらうと思つて聞くのサ。」やな「オヤばかゝしい、誰が來るものかね、又ましや來たからといつて、出るものかね、必ず／＼其樣なことを思つてくんなますな。」文「マアお思ひでないといふ事サ。」文「アハヽヽヽヽヽ、何だか言葉が、まだほんたうに出來ねえなう、併し今は女郎業の言葉が、おかしの樣ではねえといふから、餘りざんすのありんすのと、いはねえ方がいいのだらうノ。」やな「ア、何だか私にやア、覺えにくい言葉が、幾等もあつてこまるヨ。」文「ソリヤアいいが、何樣も愚痴をいはれねえ義理だけれど、後生だからどうぞ間違への出來ねえ樣にしてくんなヨ。」やな「何の間違ひがえ。」文「ナニサ、お前は隱して居るけれど、アノそれ菱屋の、花衣といふおいらんを請出して、女房にした宗さんといふ息子が、死んだ花衣に似て居るといつて、しきりに來るぢやアねえかナ。」やな「ア、此間中、四五度桐屋の茶屋から、おくられて來たけれども、私が滿足に會釋も仕ないから、其の後少しも來やア仕ないヨ。」文「それ見ねえな、誰が來ても出ねえなんぞと言ひながら、家に居た時分、お前の所へ媒人をたのんで、貰ひにかゝつた宗さんぢやアねえか、その宗さんに最初から、出てくれずともいいぢやアねえか。そして立派な身上といひ、能い男だから何樣して、かまひ付けねえ樣になるものか、先の花衣といふおいらんも、惚れて女房になつたほどな好い男だものヲ。」やな「ヲヤ／＼、其樣なことをお言ひでない、なるほどそれは、出たのはわるくもあるだらうけ

れども、また斯うして此郭へ這入つて見ると、お客がないのは何よりか恥だわネ、たとひ好漢が來ようが、金持が來ようが、それに心がうつるくらゐならば、お前の爲に此樣な所へ來るものかネ、私やア斯うして居ても、不動さまの晩に植木を見に出て、それから廣小路の裏へ往つて、寢た節や何かの事ばかりを、考へたり思ひ出したりして居るのに、何が悔しくッて他の人と、情合なんぞをする物かネ。それより明日お前お歸りならネ、母御さんに昨日の禮をよく言つておくれヨ。」文「オヤ昨日母人さんが何をした。」やな「それ御らん、おまへは母人さんほど、今ぢやァ私をかはいがりはしないヨ。」文「なぜ〳〵。」やな「母人さんは私を案じで、モウ此方へ來ても、幾度か文をよこしておくれで、昨日は寐卷の小袖をこしらへて、來ておくれだわ。」ト立ち上り、小袖を出して男に見するも、よく〳〵思へば、哀れにかはゆき女心ならずや。なほ睦ましき情は、次の卷を見て評あるべし。

春色英對暖語卷之二　了

# 春色英對暖語 巻之三 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春水著

## 第五章

おさらばとそむけしかほのむき玉子きみぐ絲の切れにきられずと、故人蜀山が後朝を詠たる洒落、その戯れも人情を、よく穿ちたる自然の妙言、實にや娼妓の別路のみかは、千差萬別諸人の、品こそかはれ戀衣、著かへんとする曉の、思ひは同じ憂きことならんか。爰に金脅木の町に、わび住居せし彼の増吉は、はからずも嬉しき雨の月老人にて、結びし夢のまだ覺めず、宗次郎に添寐して、前後も知らぬ屏風の外、母は通夜よりいつしかに、歸りて勝手の業を調へ、朝飯までも拵へ終り、膳部を並べて何やらん、菜も傍邊の小鍋立、喰べるばかりになして置き、其の身は帯など結び直し、間へ挾む巾著の、中へ小錢と珠數一連、しやんと用意をして後に、中音にて娘を呼び起す。母「お増やお増や、最う目をさましなヨ、アレ安樂寺さまの、巳ノ刻のお勤めがはじまつたわな」 ま「アイ今

起きるヨ。」トいひながら目をあいてみれば、宗次郎とまくらをならべてゐたるまゝなれば、さすがにはづかしく、氣の毒に思ひゐる。由「それぢやァ私は、日慶寺の清正さまへ、お參り申して來るから、跡でお飯に仕なョ。何もかもこゝへ出して置いたから、食べるばかりだョ。」ます「アイ。」の返事を背後に聞いて、裏口いづる母親の、洒落たる慈悲といふべきか。

作者曰く、日慶寺といふは、小塚原町なる日蓮宗にて、清正公の由緒あり。お增の母親その寺へ參るとあれば、法華の信者なる事いはずとも知れたり。然るに前夜百萬遍の念佛に行きしとは、前後怱忽の筆に似たれど、前板梅ごよみの末に、仇吉が心やすく、出入りする增吉のうちの段をよみ給はば、此の母親の氣質も、大概は推量せらるべし。法華宗にて、百萬遍の席へつらなりしは、老女の付合ひよき、長家なみの義理一遍、九十九萬九千九百九十九遍には、お題目を唱へしならん、かならず法謗罪などと、評したまふことなかれ。

さてまた增吉は、母に呼びさまされて面目なく、何とやら氣の毒にて、貌見らるゝも恥かしと、もじもじして起き兼ねたりしが、さいはひなるかな氣をきかして、母は其の儘出で行きし樣子に、オッ卜溜息を吐き安堵して、しかづに宗次郎の貌を見れば、勞れたると思はれて、猶すや〳〵と寐て居るを、しばらく詠めて莞爾と笑ひ、また枕により添ひて、靜かに貌を押しつけて、目の覺めない樣に、密と夜著を脫け出でんとする節、宗次郎は增吉の、帶をとらへて放さず、目をねむりしまゝ笑つて居

る。よよ「オヤ〳〵、お目が覺めましたのかえ。」宗「ナニ今目が覺めるものか、先刻ツから起きて居たハけれど、母御が裏から歸つて來て、間が悪いから、寐たふりをして居たのだ。」よよ「オヤ何様せう、それぢやア私が今側へ、何いたしたのも御存じでかえ。」宗「知らなくツてサ。」よよ「お氣の毒なことを致しましたねえ。」宗「左様サ、爪の形をしたり、白眼め付けて打つ形を仕なさつたから、氣の毒なはずサ。」よよ「オホヽヽヽヽ、嘘をお言ひなさいねえ、どうして戲行にも、其様な勿體ないことが出來ますものか。」宗「それぢやア、私が目をねむつて居る中、何をしたのだエ、知らないだらうと思つて居なさる所で、目を覺してゐたといはれて、今のやうに氣の毒がるのが證據だアナ。」よよ「ナアニ左様ぢやアございません、あんまりお前さんか、かはいらしい貌をして被寫入るから、ツイ何したのでございますヨ。」宗「ツイどうしたのだえ、それをしつかりと言つて御覽なせえ、サア何をしたのだえ。」よよ「オホヽヽヽヽ、お前さんも意地が悪いねえ、ツイ○○○○○○○○○○○、○○○○のでございますヨ。」ト笑つてゐる貌の、愛敬こぼるゝ如し。宗「イヤ最少寐ても能いぢやアねえか。」よよ「それでもモウ、巳刻過ぎだと申しますものヲ、イヤ私が起きまして、お前さんのお手水の、湯や何かをとりますから、そして御膳を召し上りましな。」宗「交膳でか。」よよ「どうぞお願ひ申します、アレサ顔を洗つて參りますヨ。」ト笑ひ顔にて○○○○○、○○○○○○○○○○○○○、寐貌を直し

髪を撫で付け、口を漱ぎなどして、男に愛想をつかされざる用心なるべし。此の身だしなみは、自然素人にまされり。頓て増吉は手ばしこく化粧して、著物を著かへ、一際あざやかになりて、再度宗次郎の枕元に來り、多葉粉を吸ひ付けて出し、ます「サア最うお起きなさいましなねえ。」宗「どうしてどうして、今日は中々、首が上りさうもねえ。今ッから斯うぢやア、○○でもなると、○○するだらう、わりい孃だゼ。」ます「オヤ私が惡いとおつしやるのかエ。」宗「左樣サ、おまへのお陰で今朝は、○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○ ○ ○○○○○○○○○。」ます「オヤノヽマア、其樣な言掛をおつしやるョ、○○○○○○○○○○○○、○○○○○、○○○○○○○○○○。」宗「そりやア今まで仕た、何所かの人のせゐだから、此方の知つたことぢやアねえ。」ます「アレ又、其樣な憎らしいことを被仰るョ、何樣して私に、今まで其樣な事がございますものか。其の證據は昨夜おはなし申して、そしてアノよく御存じぢやアありませんか、其の節お前さんも左樣だらうと、得心しておくんなさつたのにねえ、まだ疑ッてお在でなさるのかえ。」ト すこしうつむきてうるみごゑになる。宗「なんだ、モウ泣聲をするのか。」ます「イ、エ。」宗「サアノヽ、左樣まじめになるなら、モウノヽ戯言もいふめえ、ドレ起きよう。」ト 夜著のまゝにておき上るゆゑ、増吉は宗次郎の上著と帶をとつてさし出す。宗次郎はこれをとらず顏をしかめて、宗「アイタ、タ、、、。」ます「オヤ何樣かなすつたのかえ、鳩尾でございますか、私が押して上げませう。」ト ○○

○○○○○○、○○○○○○○○
○○○○○、○○○○○○○。宗「ナニ其所ぢやァねえ。」ます「オヤ左様でございますか、アレドッサリ
いたしました、オホヽヽヽヽ、をかしいねえ。」ト、暫くうち臥してありけるが、顔をあげて、ます「お
まんまを上ると、今日は里へお出でなさるのでございますかえ。」宗「ナァニ、最う郭には何も用はね
えツナ。」ます「それでも昨夜は、お天氣のわるいのにさへ、出ていらしツたぢやァございませんか。」
宗「ヒウ／＼、此様なものが出来ちやァ、何所へ往くにも及ばねヱ。」ト言はれて増吉は眞に嬉しく、
ます「それぢやァ今日は、居續していらしつて下さいましョ。」宗「エまさか左様もなるめえ、大そう
に能い日和ぢやァねえか。」ます「お天氣がよくツても、宜うございますわネ。」宗「それだつて、それ
ぢやァ餘り内御を、ふみ付けにする様でわりいわな。」ます「ナァニ、そりやァかまひませんヨ、しか
しモウ此様なきたない宅に、お置き申したいといふのが、私の無理でございますネエ。」ト　またすこしなみだをも
よほしてふさぐ。宗「ナゼ其様に、悲しさうな顔をするのだ。」ます「それでもつく／＼考へますと、心細くな
りますものヲ。」宗「なにが心細いのだ。」ます「イヽエ他所のことではありませんが、昨夜からのこと
を思ひ出しますと、悲しくなりますからサ。」宗「なぜ、今さらに後悔するのか。」ます「イヽエ、なま
なかお前さんに、少しの間でもやさしくしてお貰ひ申したのが、思ひのたねでございます、すゑ／＼
どんなにおしたひ申したとて、最う一度お目にかゝられるか、是れ限りになるか知れませんものヲ。」

宗「なぜ、何所ぞへ往つて仕まふのか。」よね「アレ左様ぢやアございません、おまへさんが今に、お歸りなさいますと、最う再度私の様な者の所へ、お出でなすつて下さる道理はございませんから、それを思ふと實は昨夜、お目にかゝらなければ、此の思ひはあるまいかと存じます。」ト、さも力なげにいふ柔弱の風情、宗次郎はいよ〳〵かはゆさまさりて、宗「何をいふかと思へば、つまらねえ先繰し苦勞をするぜ、其の事ならば、少しも心配をしねえがいいわナ、お前はマア兎も角も、母御の氣心も知らねえで、言ひ出すも不躾だと、遠慮して居たが、斯うして互に打解けた上は、思ふことを言ひ出して見よう、もしそれでわるかア、またお前の心持を、包まずいふがいい」ト言ひながら、布團の脇に置いたる鼻紙袋より、七八兩ありし金を出して、内二分程を殘して金入に入れ、跡はのこらず紙に包みて、増吉にわたし、宗「サア氣に障るか知らねえが、此方の心持では、はやくわかる方が、能からうと思つてするのだぜ、マア斯うしなな、この金を母御にあげてノ。」よね「エ。」ト大金ゆゑ取り兼ねて居る。宗「マア聞きなヨ、これでの、昨夜ちらりと聞いた母御のことだから、借でもあるなら拂ッたり、入るものは買ひもするがいい、もしも餘計に借金があるならば、跡からおひ〳〵此方がすまして遣らアナ。そして今日ッからの活業は、萬事引受けて仕ようぢやアねえか。今ッから歸ッて、ヤア二タ月か三月の、入用を持つて來て渡して置かう。左様したらばまた、主人の方へ往かずともよか

らうぢやァねえか。」トいはれて増吉は、有りがたき宗次郎の深切に、思はず手を合はしてなみだなが
ら、ます「實正でございますかエ。」宗「まだ疑るのか。」ます「イ、エ、餘り勿體ないやうで、夢ではな
いかとぞんじますヨ。」宗「しかし母御をはじめ、誰も不承知をいふものはねえかノ。」ます「何様いた
して、誰が何と言ひますものか、たとひ此の末に何様な不自由をしても、難儀をしても、お前さんの
お心さへ、變つて下さらないことならば、私の身は何様な苦勞な事が有つても、いとひはいたしませ
んヨ。」宗「實に其の氣ならば、幾日までも此所に置きはしねえ、家内へ連れて往つたらば、母御が氣
をつめるだらうから、是非好建な家をこせへて遣るわナ。」ます「アノウ私の様な者を、此様なにかは
いがつて下さるくらゐで、先達中おいらん達の、惚れさしッた節はないさ。」宗「ナ、イ、また過ぎた事
をいふヨ、おいらんでも何でも、モウ〳〵此の孃より他にかはいい物はねえ。」ます「オホヽヽヽヽ、
アレマアひどい事をなさるねえ、オヤ母人がたしか。」宗「ナニ〳〵、何様してまだ歸るものか、往來
ぢやア一里の上あらアナ。」
戀しさは、増兒の鏡それならで、互にうつす胸と胸、合うて別れのつらければ、歸り支度も立
ちつ居つ、送りて出でて引き戻す、戀慕のきづなむすぼれて、解けしなき身にあらねども、卑下
する心に案じられ、兎角放してかへしともながるを、男も幸ひに、今日も彼是れ夕暮になれど、

此の家を出でざりける。畢竟二人の始終はいかに。彼の和歌町に住居ひし風情は、既に梅ごよみの餘興に出したれど、猶その間に唄女となりし節の事は、噂ばかりしるして置いたり。されば是れより、宗次郎の身の上の續き、増吉が和歌町にいたるまでは、定めて種々の趣きあるべし。夫はおひ〳〵に穿りて著はすを待ちたまへ。亦曰ふ、すべて此の卷は、梅暦に記したる前後と、同じ月日とのことを、拾ひ集めて綴り出したれば、其の心得にて、よませたまはんことを願ふ。されば増吉の、金曾木にて宗次郎に、身を寄せる段は、米八仇吉が、辰巳に流行はるゝ節よりは、七八年以前の事なり。さて次の條下より、四五六の卷は、いまだ米八が辰巳に在りし節、その同じ部屋に新子で、ちよいと顏のみ出させ、何か物思ひの有るよしを、米八に告げたるおもむきをしるして、看官にはまだ何とも、わからぬ樣になして、畫にあらはし置きたる、生娘風のお房が和歌町にいたらざりし節の、物がたりを綴り著はす。そも〳〵山東翁京傳先生の、繁榮なりし時代、人情を穿ちたる妙作、名高しといへども、わづかに紙數三十丁か、四十枚にて全本とせり。今予が綴る冊子は、編を續ぎ卷をかさねて、やうやくに始終を全くす。その中にしも、此の英對暖語は、梅ごよみと合してよみたまはんには、まづ發端蕾の花より、梅ごよみ、次にその餘興に出せし辰巳の園、さてこの卷にうつりてよむべし。さればとて、長編を悉くよまねば、解しが

たき事にもあらず、本編は凡そ六十冊を、一編三巻にて二十編あれども、外題のかはる巻毎に、めでたし〳〵のをさまりあり。此の故に說き終りて、又發し盡して後に、絶まることなき浮世の人情、浮世とともに、ながく愛翫なしたまはば、作者もまた永久幸甚なりかし。

## 第六章

建仁寺垣結ひまはして、築山泉水の春景色は、さし繪にゆづりて文にならべず、主人は大町か米町の息子、病身ゆゑに當分若隱居して、樂なる身のうへ、今日は親類の娘、去る御屋敷にお小性を勤めて居るが、宿下りに來り、兩親ならびに家内に居る、妹娘と四人つれ立ちての客ゆゑ、常になく賑やかなり。宿下りに來りし姉娘は、年十八歳名は紅楓、妹娘は年十七歳なれども、仔細あつて十六歳と言ひならはしてあり、其の名はお房、姉妹二個とも發明にて、美麗しき姿は繪に圖いたる如し。父は正庵といふ醫師、母はおたよとか呼ばれて、正庵の後妻、紅楓のためには繼母、お房の爲には實の母なり。されども心だてやさしく、なか〳〵紅楓に隔て心などはなく、物やはらかなる生質なり。但し正庵は醫業に賢才なれども、世事に疎きゆゑか關光らず、藥取を待たせて、他見を上手にせざる人なれば、兎角貧しくなり行かんとするを、親類より見繼ぎて、活業を助けると思はれたり。既に此の別莊の若隱居、峯次郎は甥なれども、正庵はかへつて、これが爲に、世話になる事常なりと知るべ

し。さて春の日の閑麗なれば、庭の花を見せながら、酒を出して正庵夫婦をもてなし、茶を煎じこしらへて菓子をならべ、紅楓とお房をなぐさめ、遊びに時刻を過しけるが、此の別莊は番場の町の續きゆゑ、庭のかゝり廣けれども、鄰へつゞく建家なれば、門付の義太夫など、いと近く聞ゆる。

語る〽さして入りにけり。あとに求馬はたゞ一人、文のへんじをとやかうと、しあんに小首をかたむけて、しばし小かげに彳めり。かくとはいさやしらにぎて、えんの絲ゆふゆひ合はす、人めをそつとこしもとさえだ、としやおそしとはしりより、ものをもいはず求馬が顔、うらめしさうに打ちながめ　唄エ、聞えませぬ求馬さま、アノいぢわるの岩藤が、目顔をしのびまろびねの、其の睦ごとのたび／＼に、そなたをのけてそもやそも、外に枕はかはさぬと、言はしやんしたその時の、其の一言をたのしみに、思うてゐるに胴慾な、つれないわいなとばかりにて、かこつも戀のならひかや。下畧

ふさ「すヤ／＼最う少し語ればよいのにねえ。」もみぢ「オホヽヽヽヽ、それぢやア爰へ呼んでお聞きなねえ。」岑「イヤ、門イにしては美音いものだ、藝が身を助ける程の薄命とはあのことだ。」トはなしの中に正庵は、わすれて居たることを、思ひ出したる風情にて、正「イヤ御酒の機嫌でわすれて居たが、今の開善提所へ參つて來よう、今日は御仕職が待つて居るはずだから。」たよ「ほんに私もお房を

つれて、お墓詣りをいたして來ませう。」岑「す、左様だノ、おれは其を打つので思ひ出したが、丁度其方の大事の日だの。」たよ「それだから、お房をつれてちよつと。」ふさ「オヤ〳〵なぜえ、母人さん私や否。」たよ「これはしたり、お前が小兒聞かはいがられた、祖母さんの命日でございます、否だなんぞと勿體ない、ばちがあたります。」もみぢ「母人さん、私も御供をいたしませうか。」たよ「イヽエ、お前は待つて御在で、また足が痛くなるとわるいヨ、昨日終日歩行いたので、昨夜いたみが強かつたのだから、マア少しでも休めるがよいよ。」ふさ「それぢやァ姉さん、待つてお在でヨ、歸りに嫁菜を摘んで來て上げるから。」ト、お房は正庵夫婦に伴はれ、程遠からぬ寺參りに、打連れてこそ出で行きぬ。後に紅楓は何とやら、座配不沙汰なさしむかひ、常から心に惚れてゐる、血すぢの縁の岑次郎、久しぶりにて倩々と、見れば思へば此の節の、田舍源氏に畫いたる、光氏よりも慾目とて、まさる男の形姿に、飛び立つ心を幾度か、心で叱つて縁側へ、出でて櫻の花の枝、氣をちらさんと詠むれば、花に露そふ濡心、ツイ座敷をのみ見かへる折節、岑次郎に側に置いたる本を讀みて日がさむ。

時雨する稻荷の山の紅楓葉は青かりしより思ひそめてき

紅楓は我が名を呼ばるゝおもひにて、言ひ寄るしほと岑次郎のそばへ近付き、もみぢ「オヤ〳〵、其の御本は何でございますか、歌の撰集でございますか。」岑「ナニ、ナニ、種々のことを集めた隨筆さ

もみぢ「左樣でございますか、只今およみ遊ばしたお歌は、和泉式部とやらのでございますね。」トさすがに大家の給仕へ、御前勤めのありがたさは、勸學院の雀ならねど、風雅の道も聞きおぼゆるぞゆかしけれ。半「すヤ／＼、能くマァ詠人を覺えてお出でだネ、感心だ。それぢやァさぞ、お前の詠んだお歌にも、秀逸がございませう、何樣ぞ少々お聞かせなさいな。」もみぢ「イ、エ何樣致しまして、私には其樣な事は出來ませんョ、只お奥で衆女さんの被仰るのを、聞き覺えて居つたのでございます。」半「ナニ／＼、左樣ではありますまい。」もみぢ「イ、エほんたうでございます、それだから口先で歌の事を申しても、其の意味は少しもわかりませんョ、只今のお歌の意味は、何樣いふわけでございますか、教へて下さいましな。」半「エ何樣して、私にも知れはしません。しかし歌も、各々の身に引きくらべて考へると、思ひ／＼に判じて見るのサ。」もみぢ「すヤ、それぢやァマァ今、貴君のお心では、何樣判じて被爲入いますエ。」半「大分むつかしくお聞きだネ、マァ私の勝手をいふとネ、時雨に紅葉した紅楓を見て、今紅葉した、美しいのを見付けは仕ない、青葉であつた時分から、頓てさぞうつくしくなるだらう、何樣ぞ其の時には、一枝手折つて樂しみたいと、待つて居たといふ心持サ、マァはやくいへば、お前がお屋敷へお上りでなく、家内にお出での時分、銀杏髷や茶せんでお在での時から、惚れて居たと申すことサ。」ト言ひながら引き寄せられて、紅楓は兼て惚れ込んで、心にしたひ居たれ

ども、まさかにハツト驚かれ、ぶる〳〵と身を震はし、顔赤らめて膝に縋り、無言つて居る。峯次郎は、また手をはなし脇へ寄り、正座として、峯「これはしたり堪忍しておくれョ、戯行だから。」トいはれて紅楓は、本意なき風情にて涙ぐむ。峯「オヤ〳〵、泣くほどに腹をおたちか、わりい事をしたツけネ。」もみぢ「イ、エ、それで涙をこぼしはいたしませんョ。」峯「ナァニ左様でなくつてサ、そりやアなるほど私がわるいのサ、お前の心の中では、先刻語つて來た淨瑠璃の、求馬さんの樣なのか、お屋敷に出來て居る所へもちかけて、今の樣なことをされては、其の人へも濟まず、悔しいはずだけれども、兄姉同然の中だから、堪忍しておくれな。」ト、いへば紅楓は恨めしさうに、峯次郎の顔を詠めて居たりしが、兼ての心を今告げずば、何日の時にか叶へんと、〇〇〇〇〇〇〇、もみぢ「峯さん、何樣ぞ其樣な事を、被仰らないでかはいがつて下さいましョウ。紅楓の歌は私が、心も同じ思ひでございますから。」ト恥かしさうに顏と顏、はなれがたなき蔦紅楓、峯と紅楓の對もよき、花に勝れし其の艶しさ、拙き筆に盡すことあたはず、此の後の情は、看官の身に引きあてて、察したまへといふ。

斯くて此の日は、正庵夫婦も、寺より歸りの遲くなりければ、峯次郎の進めにしたがひ、親子四人この別莊に止宿つて、また〳〵酒くみかはして樂しみけり。

此の次は古今奇代の眞情をあらはし、紅楓の貞實よりあやしくも、お房が岑次郎を戀ひ初むる一條、誠に面白き珍趣向なり。

春色英對暖語卷之三　了

# 春色英對暖語二編序

昔永代橋を始めて架し、往來を安からしめて賜はりし比、おの聲や戴いて踏む橋の霜と、吟じたるは其角が國恩教諭、扨其の橋の名に依つて、永く榮ゆる永代團子を、下戸の作者が廿日に、假用一題號けし英對暖語は、美言で丸めて艶畫で製本し、上箱の細かき眞情、意氣な娘と澤山添けて新孃もつき出しに念を入れる精製ゆゑ、まだ生娘選ひにかけ、青樓に仕込みて、二三篇能く盡く吐くも、看官の口あたりが、美味くないされとする底意なれば、拍子をいふ採る曲章の類にあらず、頓て續篇も續紀ならば、日本一の氣味談話の柔團子は散き味も、ひねと嫌ひ、他の作者が上手の風で、著したる談話し、米澤町の粉米、草團子の青き趣向、絲切團子の薄切なる、著述といふが發明るべし、さりながら狂訓亭が、製する談話は、遠國他國の看官に、土產として風情が變らず、分解み易くして、胸につかへねば、兒女童幼達のよみいこなれて、よろしく勸善懲惡の、一助ならんと云爾。

于時天保八丁酉年

端午の節句、柏餅を喰ひ過して、葉許り多き戲言を並べ、英對談話二編目の序文に換ふるは、

江戸人情本一流の元祖

春色英對暖語二編序

狂訓亭老人　爲永春水誌

# 春色英對暖語 巻之四 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春水著

## 第七章

常に聞く哀れにかへて嬉しさは月待つ今日の入相の鐘、と風雅に詠みしは誰やらん、其の月ならで桂男の、情に引かれ止宿られて、暮るゝも樂し春の夜の、夢かとぞ思ふ戀衣、うつり香残る梅の露、含みし情はこまやかに、兼言頼まん心のそこは、穂にあらはれてなまめきける。それとは知らねば正庵夫婦は峯次郎の言葉に隨ひ、戀の湊と思はねば、碇を下すいさり舟、子ゆゑに釣られて居たりけるが、はや告げ渡る初夜の鐘、はるかに聞ゆる下屋敷の時廻り、チヨン／＼チヨチヨン。正「サアモウ戌刻だらうだ、子どもは寐なせえよ、自己も寐るから。」ふで「アレ、まだ私は、寐むくも何ともございませんから、最う少しお咄を聞いて居りますわ。」「イヤ／＼、朝が起きられないヨ。」ふで「イイエ、明日ははやく起きますから、マア貴父さん、お先へお休みなさいましよ。」正「ナニ／＼、此の子

どもは最う、芝居の噺がはじまつては、兎ても寐はいたしませんから、貴君と私は、前へ伏せつて仕まひませう。」丹「ナ、左様なら左様ヨ。」ト てうづばへたつてゆく。 峯「それぢやァノお房や。」ふさ「アイと申すのにねえ。」ト、わが儘を言つて居る。峯「アノウ、幾日までも峯さんをいびらないで、最う少し聞いたらネ、早くお寐ヨ。」 ふさ「アイ私ばかり聞きはいたしません、姉さんの方が芝居のおはなしを聞きたがつてお出でだものヲ。」 丹「イ、エ、姉さんよりはお前は、ひつゝこいからわるいョ。」 ふさ「ハイ、それぢやァ今に直に伏せりますヨ。」 丹「アノウ峯さん、私どもの寐る所は何間だエ。」 峯「ハイ、只今お三に牀を敷べさせて置きました。」ト 下女をよびて正庵ふうふをねまへいれる。 後に二人月雪花、餘所の見る目もあらんには、さぞうらやましきことならんか。峯「お前がたは、今度の菊五郎の累をごらんか。」 峯「イ、たまだ見ませんヨ。」 峯「オヤ左様かえ、見せて上げたいねえ、誠に此度の累は、何様にこはいだらう、此の以前の四ッ谷怪談のお岩よりは、モウ〳〵〳〵ものすごいとも何とも、たとへ様のないおそろしい顔だわ。」トいひながら、四邊を見まはし氣味わるさうにいふ。お房も怖くなりて、春後を見かへり、ふさ「オヤ〳〵、こはいと被仰つて、何様な風情でございますえ。」 峯「何様な風情といつて、なか〳〵はなしにしても、氣味がわるい様だヨ。」 ふさ「アレサ、こはくツてもよいから、はなしをしてお聞かせなさいヨ、ヨウ兄さん、姉さんも左様お言ひなねえ。」ト いひつゝだん〳〵に、米次郎のそばへすりよつてくる。 米「其様ならば

話して聞かせようか、かならず怖がつて、さわいではいけないヨ。」ト、いはれてお房は少し氣味わるく、峯次郎の貌をぢつと見つめて、身に力を入れる。此の思入娘の子の癖を知らぬ人にはわからず。ふさ「イヽエ、何樣してもこはがりはいたしませんわ。」ト わらひながらこはいもの みたしのふぜいなり。 峯「左樣ならばはなさうネ、まづ音羽屋が例時のとほり白い衣類でサ。」 ふさ「ハイ。」ト返事をしながら、いよ／＼そばへ寄り添ひて、ふさ「それからエ。」 峯「みどりの黒髮を左右へ振りわけてア、引、何だか目前にちらついてならない。」ト小聲になり、顔をしかめていふ。 ふさ「なにか見えますのかえ、姉さんもつと此方へお寄んなさいヨ。」 峯「ナニサ、今見えるといふのではないが、思ひ出すとちら／＼見える樣に、すごいよいふことサ。」 ふさ「それからエ。」 峯「其所で當才の赤子を、しどけなく斯ういふ身になつて抱いてネ。」ト眼をすゑて、顔色を變へ中腰に立ち上る。 ふさ「アレ最う氣味がわるうございますから、此のお噺し遊ばさないでも宜うございますヨ。」 ふさ「アレサお姉上さん、氣味がわるくッても、[illegible]ございませんから、聞いてお出でなさいヨ、ヨウそれから何樣なりますエ。」 峯「それからマア下座で、幽陰太鼓ヤドロ／＼／＼／＼ト、物すごくならすと、柱にかけてある着類が、ぶら／＼動き出すと、峯「幽靈が斯ういふ顔をしてネ。」ト眉毛を上げ眼を見はり、峯「うらめしや與右衛門どの。」トいひながら、峯次郎は首をながくのばして、ヒヤ引ト立ちあがれば、ふさ「アレエ」ト峯次郎に飛び付く拍子

に、袖が燈火にさはり、ぱッたりと消えて戀路のやみとなる。折しも二個はいとゞ猶、ものおそろしくて、峯次郎にしがみ付ければ、峯次郎は手をさし延ばし、紅楓と思ひお房が手を握りしむれば、お房も今年十六才、春の心をめぐみたる、實生にあらで桃の媚、櫻の莟匂やかに、間違へられしと知らされば、轟く胸を押し鎭め、握りかへしつ握られつ、氣味のわるさも何所へやら、今は闇こそ幸ひと、はなれがたなき蔦かづら、お房はさすがに身をふるはし、赤らむ顔もくらがりの、他に知られぬ嬉しさを、後に何とか言うてよき、事なるものかと初戀の、放心れて離れず居たりしが、峯次郎はやうやくに心付き、峯「それだから咄すまいと言つたにだァナ、餘りさわぎが強いから、燈火を消してお仕まひだ、マァお三に燈火でも付けてもらはう。」ト手をたゝく。三「ハイ。」トこたへて出で來るお三。三「オヤ、オヤおあかりが消えましたか。」峯「ム、、油がすけなかつたと見える、ちよつと付けてくんな。」三「ハイ。」ト勝手にはしり行き、さつそくあかりをてらせば、二個ながら居所を直し、たがひに顔を見合はせて、もみ「ア、引 私はモウ〳〵、何樣に膽を潰しましたらう、それにお房さんが、袖であかりを消してお仕まひだから、猶のことこはくッて、何樣仕ようかと思ひましたわ。」ふさ「オヤ〳〵、私も姉さんが、こはがる貌を見て居る中に、ワァッとお云ひだから、びッくりして立つたひやうしにあかりが消えましたァネ。」峯「イヤ〳〵、誰の所爲でもない、わたしがわるかつた、しかし怪談ば

なしも、今のくらゐ情がうつりやア、林屋正藏もかなはせねヱ。」もみ「ホヽヽ左様でございますヨ、貴君なんぞがお屋敷へおあがりで、落語でも遊ばしたら、さぞ衆人さんが、およろこびだらうと存じますわ。」峯「どうして／＼、お屋敷へは上手な藝者が、いくらも上るだらうから。」もみ「イヽヱヽイヽヱ其様に藝者が上りはいたしませんヨ、清元延津多といふ娘と、坂東三津代の娘のお歌といふが、折節上るばかりでございますわ、男達は召した事はございません。」峯「すヤ／＼、それぢやア殿さまは、女ばかりお好きだと見えるネ。」もみ「オホヽヽヽヽ、何様でございますか存じません。」峯「イヽヱ、何様だかよく御存じだらう、左様いふお主君さまでは、お前の様なうつくしいのは、直に御側へ召すだらうから、大變だネ、左様なると誠に。」もみ「エ。」峯「お前はお仕合だと申すことり、イヨツふけえきなこつた。」ふさ「オヤ何がえ。」峯「エあかりがサ、又暗くなつて來た。」ト、まぎらかしていふ。もみ「オヤそれは、何所のお屋敷にもある事でございますが、私なんぞは何様御主人さまでも、其様なことを御意遊ばすと、夫れをしほにいたして、直においとまをいたゞきますわ。左様してなかなか私どもの様なものが、其様なことは大丈夫ございません。」峯「イヤ／＼ないとはいはれないのり。」もみ「アレまた其様な疑り深いことをお言ひ遊ばすヨ、私は其様な浮薄者ではございません、たとひ一度でも。」ト放心と言ひかゝれば、峯次郎はエヘンと咳ばらひをして、眼で知らせる。紅楓も

氣が付いて、お房の顔をちよいと見る。岑「アレサ、戯言に言つたのだから、言解には及ばないわネ、左様一途に腹をお立ちでは、お氣の毒だ。お前の潔白な心は知ッて居るけれども、ツイあさな馴染の心易だてから、今の様なことも言つたのサ、堪忍しておくれ。オヤ／＼お房さんも、化物のはなしを聞いてから、大分お鬱氣だネ、少しねむくおなりのかえ。」ふさ「イ、エ、まだねむくなりはいたしませんヨ。」ト、以前にかはりて言葉もちがひ、恥かしさうにいふ。岑「左様ならよいが、モシおねむくは御遠慮なしにお休みヨ。それとも私と○○○○○。」ト笑ひながらいへば、お房もわらッて居る。心のうちは姉の紅楓がなくばと思ひ居るならんか。岑「アハヽヽヽヽ、否だと見えて笑つてお出でだネ、男といふ者は意地のまがつた物で、否がられると猶のこと、左様したくなるものだヨ。」トわらひながら、子どもあそびの心もちにて、お房の○○○○○○○。お房は恥かしさうに、袖に口をあてゝうつむいて居る。紅楓はクワッと胸にさはれど、さすがにそれとも言ひかねて、かはゆらしき眼に角を立つて、岑次郎を白眼み、不承々々に立ち上り、も「ドレ私はちよつと小用に往つてまゐらう。」ふさ「アレお姉上さん、私も御同作に參りますヨ。」も「イ、エ、わたくしは一個で參るからネ、お前は後で岑さんに、多分かはゆがつてお貰ひナ。」ふさ「オヤ／＼、否な姉さんだねえ、私やァ岑さんと、何でもありはしまいし、をかしいね。」も「オヤそれだから、誰もなんでもあると言ひはしないヨ。」

ミ「ア、ア、たつた今あんなことをお言ひではないか、私やア因人さんに左様申すヨ」ミ「ハ、左様お言ひ、でもこはくはないヨ、サア今左様いつてお出でなさい」ト、はら立たしさも耐すれぬ、世間知らずの奥勤め、こゝが生娘の生根なるべし。

折からつゞる鐘の音は、寝よとてひゞく亥ノ刻の夜廻り、カチ〳〵カチ〳〵、はるかに聞ゆる夜そば賣り、聲もかすかに風の間に「いもつなぎ生蕎麥でござい、そばウ〳〵引」

## 第八章

ミ「アレサ紅楓さん、其様に腹を立たすと能いわネ、此の位いことで、其のやうに憤然になつては、ちよいと戯言もいはれねエ、如才もなくつて何様したのだネ。」ト 眼かほでしふさげる、 もみ「私は、斯ういふ生得でございますから、貴君は戯言の氣で遊ばしても、何様も私には左様思つて居ることは出來ません。」ト すこしなみだぐんでいふ ミ「それぢやア私がわるかつたから、堪忍しておくれヨ、ア、引モウ〳〵此後決して、戯言といふ事は仕ますまい。」もみ「ナアニ、遊ばすなではございませんが、私の眼に懸るところでネ。」ミ「ヲツト〳〵、其様な野暮をお言ひでない。」ふさ「オヤ〳〵、お姉えさん峯さんの御内室さんでも在るのかえ、をかしいねえ。」ト いふもにはかのいろけから、やきもちやくと見えたり。 ミ「なんでも能いヨ、打捨つてお置きなヨ。」ミ「コレサ〳〵、お前たちは何様したものだネ、つまらない事で、姉弟喧嘩をおしなされ

よ、モウ〳〵兩個が和合くおしョ、それでないと私が第一氣の毒だ、サア〳〵機嫌をよくして寢ませう、そして寢て居て私が本を讀んで聞かせよう。」ふさ「オヤ嬉しいねえ。」もみ「何の本でございますエ。」米「エひよくの紫といふ人情本サ。」もみ「オヤ、私はお屋敷で、始まりの所ばかり見ましたわ、草雙紙の樣になつてをりましたネ。」米「左樣サ、二種にして發板したがネ、中本の方は前後六冊で、めでたし〳〵に滿尾つてるから、早く分解つて面白いヨ。」ふさ「オヤ、それぢやァ始めツから卷末まで讀んでお聞かせなさいヨ。」もみ「オホ、、、、、、お房さん左樣お言ひでも、一冊も聞いてお在での間に寐てお仕まひだらう。」ふさ「イ、エ〳〵、今夜は容易には寐ないヨ。」もみ「オヤなぜえ。」ふさ「なぜでもサ。」ト何か心に一物ある樣にいへば、紅楓も何れ油斷はならずと、用心するも戀の慾、互にいどむ峯次郎、嗚呼好男子には何がなる、前世の善因によつてなるか、但し羨むべからず、滋陰降火湯の症とならんことを。それはさておき婢女のお三は、一間へ牀を三ツしきならべて、ありあけの備へも、煙草の火もこと〴〵く調へ、三「サァお休み遊ばしませんか、お牀を延べました。」米「オイ左樣か、それぢやァ直に寢よう〳〵、サア〳〵お房さんも紅楓さんも、一同にお休みなさい、おいらァまだ忘れたことがある。」ト、○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○娘は

小川場へゆき、緣側にて目をそゝぎ、お三の案内に引かれて〇〇にいたる。岑次郎は兼て心に思ひ付きしことゝ見えて、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、本を竝べて置き、「サア〳〵はやくお休み、お二人ながら、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇私が〇〇〇〇〇〇。斯うしないと、お前達が本を聞くのにも都合がわるいから。」トいはれて二個は、それそれの思はくあれど、顏色に出さず、何心なき風情にて、〇〇〇〇〇〇〇〇、何れの瀬をや越えてゆく、心なるかと姉娣、戀には他人の中隔つ、岑次郎の〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇本を、聞きつゝ、いつしか寐入りける。

唐朝玄宗の、愛妃大眞を右になし、毛延壽にへつらはざりし、西施を左に置く、さも〳〵岑次郎が巫山神女が夢のさま、描き寫に說く事あたはず、看官よろしくこれを察したまへ。猶これより其のあくる日の事をつゞらば、同じ幕の永きに、倦きたまはんことをおそれて畧す。此の後紅楓は元のおやしきへ上り、お房は父の正庵がもとへ立ち歸り、春より夏の中旬まで、さしてときしるすほどのこともなし。

されば岑次郎は、病氣保養の爲にとて、別莊に住居ひしが癖となり、又此の程は紅楓お房の事なぞより、何となく心の煩はしき日の多ければ、只別莊の閑靜なるを好みて暮しけるが、餘りに閉ぢ籠り

て氣鬱ます〳〵はれやらねば、物の本など取り出し、彼是とよみあする中に、漸う讀みかゝる昔語の法華傳、

「釋の安珍は鞍馬に住あり、一年心願によりて、紀の國熊野山に参詣せんとて、支度を調へ、往き行きて紀州日高の郡にいたる。こゝに一人の寡婦あり、安珍其の家に旅宿りす、彼の寡婦、安珍の美麗なる容色にまよひ、これをいざなふ。」

ト讀みかゝる所へ、兼て心易く出入する、洒落の友人木儀といふもの、庭の方より縁側に來り、磯「へイ此間は御無沙汰いたしました。」豊「オヤ磯こうか、ヨウマア何樣すれば、其樣になまけて居られるだらう。其の轉宅も此の節は、靈房町へ引ッ越したぢやァねえか、最うちつと精を出して來ねえな。但し夏非町のに苛められたので、少し體が弱りの方かノ。」磯「へ、、お前さんぢやァ在るまいし、御代参を待ち焦れたり、お宿下りをこせついたり、又その手續きへ手を出したり、よくマア精がつゞきますね。」豊「何をいふか、少しも覺えがねえ。」磯「へ、、私ゃァ證據を以ていふのに、まだ喰ひかくしかねハ、、、、。今日はモウ、櫻餅ぐれえぢやァ承けやせんぜ、何ぞ美味え物を、平岩か武藏屋へ、あつらへて参りませうか。」豊「殊によつたら、御馳走もしようか、何の事だか少しもわからねえ。それよりは頼んだ本を持つて來てくれたか。」磯「エ、。」豊「エ、ぢやァねえ、肝心の渡世をなまけて、

情人ばかり持出すから、續本もわすれて仕まふし、新板をもつて來れば、三日切しといふ所を、二十日ぐらゐ打捨つて置くぜ。」「ナアニ左様でもございませんが、今日はお前さんの被仰つた本は残らず持つて參りました。しかし淨瑠璃本の見料は、むかしから極つて、安いにはおそれますぜ。」「ナニサ、今日は大分世帯染みたことをいふノ、何様しても、御内室さんが出來た所爲だぜ。」「誰も其様なことを、懺悔を引きましたか、まだなかなか家内へ入れはいたしませんがネ。」「そりやアおまへと請けさせる口ぶりだノ、マア本を出しねへな。」「ヘイ左様ならば、道成寺現在鱗、日高川入相花王と、淨瑠璃は二種でござります。それから元享釋書と、マア如斯でござりましたね、これが種に何ぞ出來ますいかね。」「ヨウ左様ョ、此間狂訓亭の門人で、尾張の一之宮の、篠永春蝶といふ者に頼まれて、二個で道成寺を、當世の人情本に、こしらへ直さうといふやくそくをしたのさ。」ト、いひながら、元享釋書の巻中で、安珍の傳を讀みかゝる。折しも垣根の外より女の聲にて、「峯さん今に寄つておくれヨ、そして新板があるならはやくお貸しな。」「ハイハイ、只今參じます。」ト、いふ、「今は小梅の湯へ往くから、後でも能いョ。」「ハイ、それじやアマア、直に本を上げて置きませう。」ト庭口より木戸をあけて、駆け出しゆく。跡に峯次郎は、日高川の淨るり本をあけて、渡場の段をよみながら考へて居る。

「たとひわたしで下さつたとて、そなたにとがも難儀もかけまいに、おもふ男を他人にねとられ、私はゆかねばこがれ死、しぬる命はをしまねど、只今一度恨みが言ひたい、つらい悲しい身のうへを、ふびんと思ひその舟に、乘せて下され渡してたべ、慈悲ぢや情ぢや功德ぢやわいノ。これぢやこれぢやと手をあはせ、をがみつわびつ身をもだえ、泣きさけぶこそ道理なれ。」峯「ハテ、隨分よく出來た淨るりだが、何樣も娘の人情の樣でねえ書き方だ。しかしこれでいいか知らん、これから見ると歌舞伎の道成寺は、うまく書き直したものだ、前後の野暮な所を捨てて、所作事から鐘入の、おそろしい所を見せる趣向は、妙にうまく出來た狂言だ、それを燒き直して、見物をびつくりさせた女清玄は、故人南北が一代の手柄だ、何でも今樣に淸姬をしても、花道から蝶にうかれて、出て來る御所風白拍子のすがたは、どうも諸人の目に付く場だから、是非あの風俗をば見せてえものだ。」トしきりに工夫も、物事にこり性なりける峯次郞、六月十日の暑き日も、わすれて一間に案じ入る、其の緣側へものかげの、ひらりとうつるに驚き見上ぐれば、今心中にうかみたる、彼の道成寺の白拍子の姿その儘、庭よりして緣の上にとび上り、莞爾としてたゝずめば、思はずハット峯次郞、あきれて其所へうち伏したるが、白晝のことゆゑ氣をとり直し、心を鎭めてよく見れば、これ伯父正庵の娘にて、例のお房なりければ、やう〱に安堵して、峯「オヤ、お房さん、如何して來たこだ

エ。」ふさ「アノウ、お祭にたのまれて、出ますからまゐりました。」丹「オヤ〳〵左様か、よくお出でだッけね、寔にびッくりした。」ふさ「オヤなぜでございますえ。」丹「エ今丁度、其の形容の風を拵へて居た所だからサ。」ふさ「オヤ〳〵左様でございますか。」丹「そりやアいいが、マアその衣裳を脱いで、チット涼みなな、あつくッてなりやアしねヘ、ドレ浴衣を出してやらう、そしてお供は誰が来たのだえ。」ふさ「イヽエ、今日は母人さんも、誰も来ませんが、お祭に出るものが、大勢舟で河岸まで来ましたから、衆人は此の先の別荘へ、往くのでございますゆゑに別れて、此所へ船頭さんに送つてもらつて、只一人参りました。」丹「オヤ其の船頭は何様したえ。」ふさ「お臺所から直に帰りましたヨ、私やアお三殿に左様いつてね、所為お庭へ静歩廻つて、兄様を驚かさうと思つて、出しぬけに爰へ参つたのサネ、、、、、。」トわらつてゐる。お房が今日のうつくしさ、いつぞやよりは百ばいにて、ことにはでやかなるまつりの小袖、道成寺の娘がたなれば、そのふうぞく姉のもみ[illegible]お小性の姿にまされり。丹「そりやアマア、軽々しいことだつけナウ、それだがやア帰りは、おれが送つて往かさアなるめえ、連が在るとはいひながら、よく一人で来たねえ、嘸母人さんが案じてお在でなさるだらう。」ふさ「イヽエ、母人さんが後から此所へまゐるはずで、衆人に頼んでよこしましたヨ、万一今夜母人さんが、来ておくれでないと、私やア兄さん このことばは、せけんのむすめこどもが、すこしとしうへのをとこをうやまつていふことばにて、貴賤とも大かたかくのごとく、そのこゝろにてよみたまへ。しかしながら、年の多くちがふ目上をば、伯父さんとうやまひ、伯母さんとよぶたぐひ、今に始めぬ事なるべし。水滸傳にも友達をよぶに大哥アニイといふ事多し、いはでもしり給ふことならんか、(一)

所へ止宿る積りで参りましたわ。」豊「どうしてノヽ、其様なかはいらしい娘を、此所へ留められるものか、アハ、、、、よしかうそだ、止宿に思人かはいかるがいいか、それぢやア否だらう。」ふさ「オホ、、、、、何様して私を可愛がつておくれなものかね、兄さんのかはいがるのは、お屋敷の姉上さん許り。」豊「ナヤノヽ、とんだ事をいふナウ、何様して、其様な事があるものか、誰が左様いつた。」ふさ「オホ、、、、、私やアよウノヽ知つて居りますわ、其の證據にはお前さんかね。」豊「どうしたえ。」ふさ「アノウ、三月桒人で止宿つた節、お前さんが私を、可愛がる僞行をおしの時に、姉さんが一途になつて、腹をお立ちの折節、困りきつてお謝りぢやアございませんか。」豊「ナア、ニ嘘ばツかり、そりやアいいが汗がしみるだらう、早く浴衣を著かへな、その衣裳をばお三に干させるがいいわネ。」ト、立ち掛りて衣裳を脱がせ、浴衣を著せかへながら、手拭で衿の邊を靜かに拭いてやる。ふさ「ハイあり難う、其様に汗は出ませんヨ。」豊「ほんにさうだ、肌目細かな所爲か、汗は出ない様だ、○○○○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○、○○○○○○○○。」ふさ「オホ、、、、、何處致して、私の乳は、まだ此様に胸へ引付いてありますヨ。」豊「ナニナニ、紅楓さんよりも乳房が大きいやうだ。」ふさ「ソレ御覧なさいな、姉上さんをお可愛がりの證據は、其様な事まで知つてお在でだヨ、○○○○。」豊「ナニサ、それも著物を著かへる節に見たのだ。

す。」ふ「うそをお吐きなねへ、それとも姉上さんにいゝ、おかまひでないに逢ひなくちは、○○○○
○○○○○○○○○○○○。」ト、恥かしいのを思ひ切つていふ、その顔の愛らしさ、峯次郎はなほ
ゆくもしたはしく、峯「ヲヤお房ばう、お前さア本氣で、其なことをいふのかへ。」ふ「○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○。」ト寄り添へば、峯「急度かへ。」ふ「アイ。」峯「ヲヤ/\、お
氣味がわるい様だ。」トいひながら、はづかしがるおふさのかほをさしのぞく。をりからにしやうじのそとにて、番「若旦那さま/\、もし/\お目覺に
でも御覧じますか。」ト、いはれて峯次郎は目を覺し、峯「ヲヤ/\、何時の間にか轉寐をしたやつさ。」
番「なんだか面白いお夢だと見えて、寐言に笑ひ聲がおこりました、アハヽヽヽ。」ト笑はれて、
心に惜しき夢のさま、忙然として居たりける。

春色英對暖語巻之四 了

# 春色英對暖語 巻之五 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春水 著

## 第九章

磯「モシ若旦那、何様なお夢を御覧じましたか。何でもマア餘程嬉しい所を看てお在でなさいましたネ。」岑「ナアニ、其様に嬉しくもねえ、少し氣にかゝる夢を見たのサ。」磯「イヤ、私やアお前さんに、お目にかけるものがあつて、持つて参りましたが、急度夫れに違ひないと存じます。」トいひながらちひさく紙につゝみたる、かみくづのやうなるものをいだし、磯「モシ是れを御覧じまし。」岑「すやなんだ、紙屑を見るやうなものだノ。」磯「エマア、その名前を讀んで御覧なさいまし、岑次郎お房心願成就を祈り奉り候 願主お房、ネモシ妙なものでございませう。」岑「なんだこりやア、何様したといふのだ。」磯「何様したぢやアございません、たしかにこりやアお房さんが、お前さんに惚れて願がけをなすつた縁結びに違ひございません、此間夕立に降りこめられて、雨舍りをした夫婦石に、種々結び付けてあつたのを、いたづら

に解いて見たら其の名前、殊に私が正庵さまへ、本をお貸し申しに參る毎度に、お房さんがお前さんの事を、いろ〳〵と數度お聞きなさるから、何でもわけが在ることゝぞんじて居ましたら、案の定彼の房女さんが、お前さんを戀ひしたつて、夫婦石へ願がけとは、ありがたいことぢやァございませんか。」峯「なんのつまらねえ、廣い世間だから、同じ名の男も女も、幾人もあらうぢやァねへか。」本「イヽお前さん、左樣おつしやるけれども、この手はお房さんの手に相違ございません。私はよく知つて居ります。」ト、噺して居たる其の所へ、下女のお三は勝手より、鴈皮紙の文袋へ、入れたる手紙を持ち出でゝ、三「ヘイ正庵さまからお使が參じました、そしてお使はお手紙を置いて、歸つてしまひました」ト差し出す。手紙を取つて、峯「ハテナ何だか知らぬ。」ト上書を見れば、

峯次郎どの　　　　伯母より

――――

峯「何の用だか、伯母さんの手紙をおよこしなさるとは、今までなかつたが珍らしい事だ。」ト狀袋の封じを切つて、中を取りいだしてビックリなし、口の内にてよむその上書、

峯次郎さま　　　　こがるゝ房より

峯「ハテナ、思ひがけないことだ。」トいふ中、目早く見てとる本儀が笑ひながら、本「ソレ御覽じな、

此の縁結びの筆と其の文と、同筆だから奇妙でございますネ、イヤ併し、旦那の情合な見物して居てもつまらない、また上りませう。」トいとまごひをする。岑「マアいいわな。」ト止めるを、機轉きかして本磯は、庭の方より歸り行く。跡に岑次郎はいぶかりながら、讀みて見る文の文句、前後そぐなはぬ書きぶりも、歳のゆかざるあどけなさ、ゆき屆かぬが愛らしく、當世は何事も、咄しをする樣に、一ツ書の文章が、流行ると知るべし。

---

御わらはもかへり見ず、申し上げ度きことの山々なれば、わざ／＼しめしまゐらせ候。時しの御障りもなく御いらせのよし、何よりか御嬉しくぞんじ上げまゐらせ候。今さら申し上げ候も御恥かしく候へども、いつぞや彌生の御節句の後、わたくしの御姉さまの、宿おりの時御まへさまの所へとまりにまゐり、まことに／＼ありがたく、其の折からいろ／＼の御咄を遊ばし、梅幸の御化の御はなしは、殊におそろしく、たゞ今も思ひ出しまゐらせ氣味がわるく、ぶる／＼とふるへて怖がりまゐらせ候。あの時に驚かされ候うて、思はず御ひざにとりすがつて、しかもあかりが消え候をりしも、御前さまに手を

にぎられ候事、実に／＼御うれしく、いまもわすれまゐらせず、朝夕御なつかしく御したひ申し上げまゐらせ候。

男「イヤ／＼、それでは彼の時紅楓だと思つて握つた手は、お房の手であつたか。道理であかりが付いてから、以前に進つてお房の風情が、いやらしく見えたツけが、それゆゑか知らん。しかし手を握りかへした様子は、なか／＼初心の様でなかつたが、斯うして見ると油断のならねえものだ、しかしかはいい心の娘だわな。」ト獨言をいふ障子の際、婢「オヤ、お房さまのお文でございますか。」男「エお三か、びつくりした何ぞ用か。」婢「イ、エお茶が出来ました。」男「左様か、夫れおやァ都鳥でも出してくんな。」「ハイ出しましてございます。」男「よし／＼、それから行水を遣はしてくんなよ。」「ハイ今日はお風呂を涌てました。」ト立つてゆく。

しかしその時に、御手をにぎりかへし／＼いたゞらば、嬉しきはすゑのゑとは思しめさず、いやらしきものと御さげすみもあらんかと、案じ居りまゐ、

峯「どうも感心にゆきとゞいた云解の文だ、これぢやァ紅楓よりも、嘸おもしろからうか、イヤ／＼其樣な氣を出しても濟むめえ、エ、引何だ此の文は、マアよまずともよしと、大そうに長々と書いたことだぞ。」ト文句をとび／＼によむとしるべし。

それよりお別れ申し候うても、只々お懷かしく、何事も手に付きませず、お貌の拜したく、先月も母を誑かし候うて、お寺參りと申し久助を供に致し、お家の近所が久助の宿にて候故、其の宅へ遣はして休足を致させ、私一人で貴家へ上り候へども、いつぞや夜の時のおやさしさは少しもなく、そしらぬお顏ばせにていらせられ候へば、まことにまことにお怨めしく存じ上げ參らせ候。過ぎし夜のお戲れは、歲のゆかない私と思召し、おなぶり遊ばし候とは露しらず、諸方の神々さまへお願がけをいたし候うへ、めうと石さまへも、お前さまと夫婦になられ候樣、一心におたのみ申し上げ候うて、

（此のすゑはりやくしてしるさず）

ツ「アハヽヽヽ、夫婦石さまがをかしい、併し其の氣でなければ願がけも出來ねえ。左樣して見れば、本儀が持つて來た此の緣むすびも、いよ〳〵お房に逢ひはないとおもはれる。また先に立て近所へ來たといつて、一人で來たのも其の心持であつたのか。左樣とは今まで知らずに居て、夢といひ緣結びといひ、また此の文の屆くといふは、不思議なわけだ。深く考へて看ると、道成寺の本を讀んで居ながら、お房が道成寺の姿で、祭にたのまれて出るといふ、夢を轉寐に看て居て魘される、文が來るなどとは妙なことだ。もしやお房が淸姬の樣な、心持にでもなつて居はしないかと、思ふも餘り自惚か知らん。何にしてもマア、わるくねえ心持だけれども、他人と違つて房女では、紅楓へ知れでもすると、言譯も出來ねえ義理、とはいふもののお房も實に此の文の心いきで、居るのを捨てて置いたら、間違が出來ねえものでもねえ。」ト、獨言を口の中に言ひながら、思案とり〴〵長き日も、暮れて涼しき庭もせに、二ツ三ツ四ツ飛ぶ螢、思ひある身は何となく、哀れになり氣も淸みて、少し寂しくなりければ、蚊帳をつらせて寐もやらず、松の木梢を月陰に座敷へうつさせ、千草にすだく蟲の音を、友と聞きつゝ更け行く夜半の鐘かぞふれば、はや子ノ刻、しん〳〵とせし折しもあれ、門の戸けはしく敲く音して、トン〳〵〳〵トン〳〵〳〵、確かに聞ゆる女の聲、○「モシどうぞ、早く此所をあけて被下いまし、トン〳〵〳〵、アレサどうぞ峯さん、此所を明けさせて下さいましヨ、トン〳〵〳〵

どうぞ後生だから、早くあけておくんなさいヨウ、モシ〳〵どうぞお賴み申します。」ト、悲しき聲は淚にくもり、夜風につれて物すごく、さも哀れに聞ゆれば、下女も下男も目は覺めれど、何とやらんおそろしければ、身をちゞめて息をこらし、わな〳〵ふるへて居たりしが、いよ〳〵門を打ちたゝけば、峯次郎もこは〴〵ながら、寢間より自ら手燭をともし、部屋の入口にて、下女下男を呼び覺し、三人連で前後を、見廻しながら木戸の内より、強身を聲にふくませて、峯「其所をたゝきなさるナア誰だえ、先刻から聞けば女の聲だが、合點がいかねえ、今時分此方へ女の來るといふ、心あたりはさつぱりねえことだ。門違ひだらう、わたしどもぢやアあるめえ。」ト　すこしはらだたしくつよさうにいふ。　女「左樣いふお聲は峯さんでございますネ、私やア紅楓でございます、どうぞマア、はやくこゝをお明けなすつて下さいまし。モウ〳〵怖くッてなりません、どうぞはやく。」ト、言はれて二度峯次郎、おどろきうたがひまご〳〵して、下女と下男に貌見合はせ、直には木戸を明けざりけり。

# 第十章

再說峯次郎は、心をしづめて外面の樣子をうかゞひ、其の聲を聞くに、確かに紅楓と思はるれば、こは〴〵ながら男に言ひつけ、木戸を開くを待ち兼ねて、倒るゝ如く驅け込みながら、紅「どうぞ後を早く、おしめなさつて下さいまし。」トいふを半分聞きかけて、木戸しめさせる用心も、常體なら

ぬことなりと、心付いたる主從二人、まづ紅楓をば早々に、奥の座敷へ伴ひゆき、しばらく、裏表に氣を配り、何事もなき樣子ゆゑ、またく一間にいたり看るに、紅楓は猶も身をちゞめ、ふるへて隅に居たりしかば、峯「ア、引ヤレ〱肝を潰したァ、ヱヽコレサ紅楓さん、マァ何樣したのだか、利害をはなしなさい。娘子どもの身で、此の寂しい所へ、夜中に一人で驅け出して來るとは、何か餘程、大變なことが出來たのだネ、何樣いふわけだか、其の仔細をはなしてお聞かせヨ。何で今頃おやしきを出て來たのだか、よく〱の事と見える。サァ氣を鎭めて、始末をおはなしヨ、そして大そうに息ざれがするぢやァないか、水でも上げようかえ。」ト種々と介抱しければ、やう〱と氣も安堵いたる風情になりて、峯次郎の側近く進みて、言はんとしても娘氣の、何かに付けて恥かしく、もぢ〱せしが思ひきつて、紅「峯さん御堪忍なさいましョ、よくお寐臥でいらッしつたらうのに、こんなに夜更けて、おさわがせ申してからに、何樣私がわるいからのことでございます。」峯「なにも私に、お前があやまる事はなささうなもんだがネ、何だかさッぱりわからない、何樣したといふのだえ。」紅「イイヱ他ではございません、去頃私が、宿下りに參つた節のことが、氣にかゝりまして。」ト すこしかほをあからめてはづかしきおもひいれなり。 峯「宿下りの節のこととはエ。」紅「アレサ、其の節貴君が、だん〱御意見をなすつて被下いました故、ツイお詞に任せて、爲方なしにおやしきへ、上るやうにいたしましたけれど、何

樣いふ悪緣でございますか、モウ〳〵片時も、貴君をわすれますことがなりませんのに、ちよつともお目にかゝることの出來ません奥勤め、彌思ひつのりまして、御奥の御用も手には付きませず、毎日毎日泣いてばつかり居りました所へ、先日貴君が御定口まで御出で遊ばしたと、聞きました節のその嬉しさは、モウ〳〵〳〵飛びたつ樣にぞんじましたけれど、御奥へ出て居る身では、直にお目にかゝる事もなりませず、じれつたくッて〳〵、何樣いたさうかとぞんじます中、モウお歸りあそばしたと承ッて、おもはずお次の衆に、涙をこぼしたのを見付けられました。」岑「マア〳〵、其樣な過ぎたことは何樣でもいいが、今夜の仕儀をはやく言つてお聞かせな、それが第一だわネ。」ト問はれて紅楓は今夜、お下屋しきの垣根を越して、此所へ逃げ來りし始末を、くはしく物語るその次第は、ながくしければ畧していはず、次の條を讀みたまはば、岑次郎の言葉書にて、大概は推察したまふべし。

岑「イヤハヤ、そりやア大變な分解だ。左樣ならば殿さまの伯父さまが、お前に惚れて、無理を言ひかけることが度々でも、誰でも夫れを、意見も小言もいふことが出來ないのだネ。」もみぢ「はいそれだから、今夜お下屋敷へ衆人さんと、お蟲干の品を仕舞ひに參つて、明日は直に奥さまがいらッしやるから、お待ち請けながら止宿になりましたのを付け込んで、御殿の御緣頬から忍び入つて。」岑「よくマ

ア夫れを引つぱづして、逃げられたッけねエ。」もみ「イ、エ、それは萬一どうかされますと、生きて貴君にお目にかゝることは、出來ないと思ひつめた一心で、垣根をばやう／＼くゞッて出ましたけれど、おそろしい田甫を見ますと、またこはくなつて、足がすくみますゆゑ、跡へ歸らうかとぞんじしも、傍輩衆は私の否がるのを知りつゝ、わざとその伯父御さまへ、とりもつ樣にいたすから、味方になつてくれますものはなし、どうで貴君に逢はずば、死なうとぞんじつめたものゝ、途中でまたこはいことが出來ましたらば、舌を喰ひ切つて死ねばすむと、心を定めて驅け出しましたが、一生懸命の心を、神さまが不便とも思召したゆゑか、たつた一度、お下屋しきから此所へまゐつて、其の節にうす／＼覺えて居つたのを心あてに、田甫道をはだしで逃げて參りましたが、貴君のお心では、女のくせに太い根生だ、おそろしいと愛想をお盡し遊ばすだらうと、またそれが苦勞になりますよ。」ト、涙をこぼすその姿は、羽衣をかくされたる天少女の風情もかくやと、峯次郎が心の嬉しさいはん方なく、峯「ナニ／＼、其樣な心配をおしでない、元はといへば此の三月、私がいたづらから、今夜お前に此の樣な、難儀もかけたのだわネ。何でもかでも殿さまさへ、麁略になさることの出來ぬ伯父御を嫌つて、命を捨てるほどの辛苦をしても、私に貞操をつくしておくれのお前の心ざしを、あだやおろそかに思つてなるものかネ。昔の松浦佐用姫も、また清姫の一念も、本物に書いてあるはなしで、な

かなか今のお前の深切には、およびもねえことだと思ふわネ。」もみ「オヤ私が、鬼のやうな心だとおつしやるのかえ。」峯「エナニエァ、引、清姫といつたのが耳にさはつてか、ナニそれは、今日日中讀んだ本があるから、ツイ左樣いつたのだが、男をしたふ一念は、たとひ鬼になつても蛇になつても、憎いといふ道理は少しもねえ。また此方も安珍の樣な、氣のきかねえ事をするものか。此方が女にとり付いて、放れめえといふ料簡だァ。○○○○○○○、○○○○○○○○○○。」もみ「オホ、、、嘘ばつかり、貴君は全體婦多川の、唄女とかいふ意氣なのでないと、お氣には入らないと聞いて居ましたものヲ、どうして私のやうな、おやしきの野暮な風で、お氣には入りませんのサ。」峯「これさ／＼、そんなにすねるものではないョ。」もみ「○○○○○○○○。」峯「何の／＼、お三はモウ表を〆めて寐てしまつたァナ。イヤ／＼しかし、戯行どころでもねえ。これからァよく、お前の料簡も取り極めた上でなければ、放心としては居られないが、斯うして來なさるくらゐでは、たゞ當座に否な人の云ふことを、遁れるばかりの事でやァあるまいネ。何ぼ年が重かない身でも、覺悟をしてお出でだらうねエ。」もみ「覺悟とおつしやいますのは。」峯「サァそれは、母人さんの思はく、親父さんの腹立や、何かの事を、まんざら考へずに、お出でもあるまいと云ふことだわネ。」もみ「ハイその事は、氣にも懸りますけれど、貴君の御本家の、御厄介にばッかりなり勝ちな、兩親の事でござい

ますから、他の人と違つて、貴君の方へ私が、替つて居るにはやかましくも、申されまいかとぞんじます。」岑「イエそりやア、今夜逃げてお出での事は、私の方から知らせて上げたらば、嘸こそ喜びなさるわけ、腹も立ちなさるまいが、其の跡で直に、私の女房にするとも言つてやられず、幾日までも止宿ちやア置かれず、またお屋敷からも、むづかしく言つて來るだらうし、といつた所が其の時、お前を手放して餘所へやるのは、何分否だから、其の節になつて、お前が氣をしつかりと持つて、私の顏を立てておくれでないと、男が立たねへわけだが、まさかに卑しい氣質のお前だから、サヽといつた節、何所までも言條を立て通す心かえ。」もみ「ハイそれはモウ、覺悟をいたして居ります。」岑「左様ならば私は腹をするゐて、始終のことをしてあげるが、此の義理だから、斯うなつたからのと、決れッこはさせないヨ。」もみ「ハイ誠に嬉しうございます。」ト岑次郎の顏を見つめる。しばらくあつて、岑「アヽ引何だかねむくなつた、モウ夜が明けるか知らん。」もみ「イヽエまだ夜が明けますには、間がございませう、私が起きて居りますから、貴君は少しお横になつてお休み遊ばせ。」岑「イヽサ、私が寢る位ならば、お前もお寐な。起きて居るのはお屋敷から、追手でも來るかといふ用心だわネ。今まで沙汰もないから、其の氣配もあるまいから、お前も此所へお休みな、ヤア左様おしヨ。まさか夜の明けるまで、起きては居られないわネ。」ト、言はれて紅楓は何とやら、うら恥かしき小夜衣の、

濡れてはあれど改まる、戀のほころび縫ひ初める、針の筵にあらねども、進みかねたる花臥座や、へりに付きたる紅絹の、貌にうつして赤らめながら、胸に浪打つ初心、下萌え出づる草ならで、萌葱の蚊帳も濱と呼ぶ、その濱千鳥啼く音さへ、今は嬉しく笑顔して、寄り添ひたさをそれぞとも、はずみを見せぬおとなしさは、實に奥勤めのたしなみが、斯かる節にもうせやらで、殊さらゆかしく思はるれ。岑次郎は笑ひながら、岑「何をもぢ／＼して居るのだえ、初めて來た宅ぢやァあるまいし、其樣に遠慮で居ずともいいぢやァないか、頓て夫婦になつてお見な、否でも朝夕一緒に、居なくッつてはならないわナ。」もみ「ナニはにかみはいたしませんが。」ト後は何やら口の中、疊の塵の傍邊の、反古をひねくりうじ／＼と、蚊屋の中へも這入らねば、岑次郎は立ち上り、岑「ドレマア、最う一度戸じまりを見て、能く用心をして來よう。お前も小用にでも往つてお出でな。」ト庭の雨戸や緣がはの、出口戸口を改めに、座敷々々を過ぎて行く、跡には紅楓が何心なく、机の際に落ち散りし、手紙をとつてよく見れば、何處やら見覺えある手跡、合點ゆかずとくり返して、名宛を見るよりびッくりし、もみ「思ひがけない姊の文、而も心を盡した文章。」ト、小聲にいつて口を押へ、ホロリと淚を落して文を卷きこみ、懷中へ隱して居る所へ、岑次郎は手燭をもつて寐間に來り、岑「ヤレ／＼、ねむくなつた／＼、サア／＼おまへもはやくお休み、小川にまだ往かないネ、サア此のあかりをもつてお出で、私やァ先

へ倒れるヨ」ト、蚊屋の中へむぐりこむ。紅楓はこれを幸ひと、手燭をとつて雪隠へ行き、静かに足音をかくして一間にいたり、彼の文をとり出して、長々しきをはじめより、すゑまでくはしく讀み終り、知らぬ風俗にとたしなみて、見てもさすがに娘氣の、前後案じて包み兼ね、しよんぼりとせし其の姿、またも苦勞の増すかゞみ、うつし心の男の氣を、恨みて見ても相手は妹、わけて義理ある母の秘藏子、また左なくとも女氣は、誰しも同じ思ひにて、戀しと思へば、命も捨てるならひなるのに、現在の妹が、斯くまで慕ふのを、何さまたけがせらるべき、とはいへ姉妹二人して、一人の男を夫には、添ひとげられぬ浮世の義理、峯次郎の心のそこも、いかゞあらんかはかられずと、いとゞ涙にむせながら、蚊帳の外にて打臥せば、峯次郎は不審しく枕を上げて、峯「オヤなぜ又泣くのだねえ、〇〇〇〇〇〇〇〇悲しいのかえ、夫れ程否ならば、〇〇〇〇〇〇〇〇」ト 紅「アレまた其様な事をお言ひ遊ばすヨ、〇〇〇〇〇〇〇〇、否なくらゐならば、此の様に夜道を迯げて、我が身ながら恐ろしい心になつて、此所へ參りはいたしませんが、今となつて見ると何様もね。」峯「否になつたといふのかえ、何が氣に障つて否だといふのだえ。」紅「勿體ない、衆人が戀ひこがれて居る貴君に、お艶しい言葉をかけられて、何否になるの何のと、申す事がございませう。否所ではございませんが、貴君のお心根を考へましたり、妹の心を推量いたしたりすると、しみ〴〵悲しくなりますヨ」

ト言はれて、岑次郎は不思議の顔色、岑「何だとえ妹とはお房さんの事かえ。」もみ「ハイ妹のお房が、心を盡した此の文をよみますと、かはいさうになりまして、涙が零れてなりません。」ト、聞いてはハツト岑次郎、何と言譯なすことも、證據の文を紅楓の手に、とられて見ては隱されず、面目なうしたひ、氣の毒さうに、岑「オヤ夫んならば、其所にあつた文を御覽じたのかえ。」もみ「ハイ殘らず讀んで見ましたが、誰しも戀しい貴君の事、妹のおしたひ申すも無理ではございませんから、かはいがつて遣はさつて下さいまし、私は何樣でもよろしうございます。」トいひつゝ又泣き伏せば、岑次郎はいよ／＼氣の毒に、蚊帳を出でて紅楓の泣顏を、着物の袖にて拭いてやりながら、岑「コレサマア、是れには譯のあることだから、泣かすともいいわな。」ト、いふ時しも眞夜の刻鐘、ボーン／＼と

春色英對暖語卷之五　了

# 春色英對暖語　巻之六　梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水著

## 第十一章

淨心誠觀といふ書に、四百四病は以二夜食一爲レ本、三途八難は以女人爲本などと意見を、むかしから數々ならべてありといへども、それと悟れぬ戀の道、ものの哀れはこれよりぞ知ると、いはれて見ればまたさらに、振り捨てるばかりの世の中ならんや。樂しんで淫せずば、これも人界の行路なるべし。但し迷ひて身を失ひ、家を亡ぼす事は、用心なくんばあるべからず。とはいひながら男女とも、迷ふが實意の證據となれば、唯一概には言ひ盡し難からんか。さても峯次郎は、お房の文を紅楓に讀まれて、面目なく氣の毒なれば、只やさしくのみ會釋ひて居る。もみぢ「アノウ峯さんえ、私が身に引きくらべて見ますと、お房さんのこがれるのも、無理ではございませんヨ。私の方は何樣でも宜しうございますから、どうぞ妹と夫婦におなり遊ばして、行末ともに可愛がつて遣はさつて被下い

まし。」トいひながら、いよ〳〵なみだをこぼして、さしうつむいてしよんぼりとしてあはれげなり。岑「其樣なすねた言をいふもんではないわナ。彼の嬢と夫婦になるくらゐならば、此樣に苦勞をするものかナ。お前といふものが在る所へ、あの嬢が文をよこしたといつて、何も嬉しい理もなし、元來此方は何にも、思ひ寄らねえ事だから、他人が見てもかまはねえ氣で、其邊へ捨てて置いたのだ。」もみ「イエ〳〵、それは貴君の嘘でございます。全體やさしいお心で、ナニ是れほどにトふみを出してひろげながらお慕ひ申すものを、よそ〳〵しくなさるお氣がございますものか。たとひマア貴君が捨てる思召しでも、私が此の文を讀んで見ますと、姉の心が思ひやられて、幾程わたくしが貴君に惚れて居ても、こがれ死をいたしますればとまうしても、あきらめなければなりません。義理のある姉でございますから、此の後貴君がやさしいおことばを遣はさらないと、夫れこそ私を恨むに違ひございません。左樣いたしますと、違つて居る母へ對しても、すみませんから、何樣ぞお聞きわけ遊ばして、お房さんと御夫婦に。」岑「ナニ〳〵、義理があるの何のといつた所か、只腹違ひと言ふばかり、夫れに今の母御さんととなへる者も、元はお前の父御さんに圍はれてゐて、其の中に出來たお房さんだから、同じ姉妹でも、其所には少しわけある中、まして故人の母人さんへ對して、お前を麁畧にして濟むものかネ。それだから是非お房さんも、お前に義理を立てずばなるまいぢやァないか。」もみ「イ、エ、それは常々こそ、お房さんも私を姉と立てては居りま

すけれども、此樣な節になりますと、なか／＼跡へさがる氣の嬢ではございませんから、其所が腹がはりだけ、何樣も義理を立てて遣らなければなりません。」男「ナンノ其の義理づくを言へば、彼の房女は今日始めて文をよこした許りで、此方から返事をしたといふ譯でもなし、お前とは先だつての事もあり、夫婦の約束は、以前からしたぢやアないか。しかしながら私ばかり、此樣に思つて居た所が、お前の方で其樣に氣が變つたのでは、何樣も爲方がないのサ。」もこ「アレサ貴君はマア、おはいさうな事をお言ひ遊ばすョ、お屋敷でさしかゝつた難儀が、出來ましたとは申しながら、第一には貴君へ貞女を立つて、夜更けもいとはずに此方へ參る位で、心の變るの何のといふ、浮薄がございますものか。眞實私の心は、貴君をおしたひ申して、此樣なかはいらしい文を、よこしましたお房さんの心根が、不便でなりませんし、また貴君のお心を、お察し申してからのことでございます。」男「そりやアマア、お房さんが私の樣な者でも、萬一物好に、こがれてくれまいものでもねえが、此方に少しもその氣のねえのだから、爲方があるめえ。」もこ「イエ／＼、それは謔でございます。貴君も手を握つたり、抱いたり成さるくらゐで、まんざらお否でもありますまい。婦もよく／＼嬉しいと思つて居ればこそ、其の事を此樣に文にまで書いて、貴君へよこしたではございませんか。」男「ナニサ、そりやア大間違たわナ、くらやみになつた節のことで、おいらも今日はじめて、其の事を知つたのだ。マア

マァ何にしても、斯うして居ては蚊がさしてならないから、蚊帳の中へお這入りョ、その始末をはなして聞かせるから、サァ此所へお出でョ。」　もみ「イヽエ私は這入りますまいョ、却つて思ひの種でございますから。」ト口にはいへど心には、何樣ぞと思ひし今までの、氣をとり直す胸苦しさ。お房を思ひ義理を立て、始終を考へ煩惱を、こらふる思案ぞおとなしけれ。峯次郎は少し癇癪の風情にて、峯「何樣しても、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、なにも〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、無理なことでも仕ようぢやァなし、只お前を蚊に喰はしちやァ、私が後で伯父さんへ、濟まないからの事だアネ、サァサァ性を強くしないで、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」もみ「ハイ。」　峯「ハイと許りおやァいけねえ、サァ／＼お前が寢ないと、氣にかゝつて私まで〇〇〇〇〇〇、お否でもあらうが、マァ蚊にさされない樣にしておくれナ。」　もみ「左樣ならば臥せりませう、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、心さへ淨ければ義理は立ちますネ。」ト、いひつゝ團扇で蚊をはらひ、峯次郎とともに、〇〇〇〇〇〇〇たれども、横にならず行儀も崩さず、正座として居るゆゑ、峯次郎は〇〇〇〇〇〇、　峯「サァ／＼〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、少しマァ氣をお休めョ。」　もみ「ハイありがたう、左樣ならば御免遊ばせ。」ト峯次郎よりは、はるかにはなれて〇〇。そも／＼紅楓の心には、お房への義理ばかりでなく、所詮姉妹にて、一人の男をしたふも、末賴もしからず、思ひのいよ／＼増さゞる間に、諦めらるゝものな

らば、却つて終の歎きも、あるまじきかとの所爲なれば、姿は放れて寢ながらも、戀しく思ひ、念ひ、また、岑次郎に寄り添ひて居るならんか。されば男の料簡にも、暫く爲方もなき樣にて、何時とはなく、うと〳〵寐りけるに、紅楓も眠らじと愼みしが、これも勞れの出でたりけん、すや〳〵と寐りつゝ、

かひなしや照る日くるしき道のべにかざすとすれど薄き袂は　曇花院宮

楊貴妃は素面にて、天子に近く仕へ、紅粉を汚らはしと嫌ひしとか。されにはあらねど此の紅楓は、天然の美質、いにしへの小町姫にもまさるべし。今宵は紅も白粉も施さずして、猶常よりも潤色しく、實に夏の美人を眞の美人と賞めるこれならんか。扨もしばらく過ぎて、はや曉ちかくなりしころ、紅楓は風と眼をさまして見れば、岑次郎の○○○○○○○○○、○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○、いかゞはせんと思案をしても、兎に角はなれて姉にと、○○○○○○○○○、○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○。此の始末をば先刻より、知つて居たるか知らざるか、○○○○○○○○○○○○○。此の時紅楓は目を閉つて居る。岑次

郎は惘りしたる様子にて○○○○○、峯「ホイこれはしたり、○○○○○○○○○○○○、おれも餘つほど○○○わりい、此様な節に目を覺すと、また愚癡をいはれるのだ。」ト獨言を言ひながら、○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○。もみ「○○○○○○○○○○。」ト恥かしさうにいふ。峯「オヤ〳〵、お前は目を覺してお在でか。」もみ「ハイ先刻から、よくぞんじて居ります。」峯「左様か、よく突き飛ばしもなさらなんだネ。」もみ「何様いたして勿體ない、其様な事が出來ますものか。そのくらゐならば先刻申す通り、苦勞いたして參りはいたしません。」峯「その苦勞をして來て見たところが、私が心を浮薄だと思ひ違へて、否におなりだらう。」もみ「○○○○、○○○○○○○○。」峯「○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○。」○○○○○○○○○○、紅楓は○○○○○○○、もみ「アレマア、其様に姉を、こはがつていらッしやるのかえ。たとひ斯うして私が、お側に居つても心さへ、正しくして居りましたらば、このくらゐなことは能いではございませんか。」峯「そりやア餘り無理だわネ。」もみ「なぜでございます。」峯「なぜと言つて、よく考へて御看な。つらからば只一途につらからでとやらで、○○○○○○○、○○○○○○○。」もみ「私も、それはおなじことでございますが、義理のある母と姉でございますし、前後を思案いたしても。」峯「それお見な、其様に分らねえ事をいつて、自己にこまらせるのだ。」もみ「アレサ、それだから私

は、これで思ひ切りますから、お房さんに色能いお返事を遊ばして下さいましな。」ト、ホロリと涙をこぼし「モゥ〳〵今までのことは、夢だと諦めて仕まひますョ。」岑「そりやァ左様でもあらうが、私は左様は出來ないわネ、なるほど正直を言へば、お房さんだと言つても、私の様な者の所へ、うそにも文をおこしておくれだから、まんざら憎くはない心持サ。夫れだけれども、何様した因果か、否がられるだけお前の方は、猶の事思ひ切られない。」ト〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。もみ「エ、モウ、そんな艶しいことをおつしやると。」岑「エ何様したとえ。」もみ「モウ〳〵、義理も人情もいらなくなつてまゐります。」岑「さればねえ、こまつたものだ。」もみ「何様いたしたらようございませう。」岑「左様サねえ。」ト平氣でゐる。もみ「〇〇〇〇、〇〇は平氣でいらッしやるよ、〇〇〇〇〇。」

## 第十一章

短夜なれば忽地に、明くるもわびし葛城の、神ならなくに寝亂れし、髪のほつれも憎からで、いとどかはゆき紅楓の姿、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、障子にうつる日影をながめ、もみ「モウ餘程、遲くなりました様でございますねえ、此のやうに日が陽盛とあたりますものヲ。」岑「ナニ此の庭は、東南をうけて居るから、曉方から此のとほりだわネ。しかし臺所ぢやァ、モウ先刻に起きて居る様子だ。」もみ「〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。岑「ナゼ、〇〇〇

○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○。」ふみ「アレ又左樣な事を被仰る、左樣ではございませんが、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○、それをお三どんに、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。」岑「左樣サ、先刻お三が煙草の火を持つて來て、○○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、勝手へ立つて行つたッけが、さすがに此方も氣の毒だッけ。○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○。」○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、ふみ「オヤ〳〵マア、何樣致しませうねえ。」ト○○○○○○○○○○○○。岑「○○○○○○○○○○○○○、奉公人にまで知られて見りやァ、此の後お前に心變りをされた日にやァ、何分私の貌が立たねえから、其の氣で覺悟をしてお在でよ。」ト、いふ折から婢女のお三は、障子の外縁側にて、三「お淨水を汲みましてございます。」岑「すイ〳〵そしての、お飯を早く給べさせてくんな、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○。」○といへばもみぢは、きのどくなことをいふとおもふかほにて、男のかほをみる。三「オホ、、、、ホ、○○○○○○○○○○○○○○、珍らしいことを被仰いますねえ、御膳は最早さつき出來ました。」岑「お菜があるめえノ。」三「ハイ今朝ほどはなにもございませんが、たまごを厚燒にいたしました。」岑「其奴は奇妙だ。」三「○○○○○○○○○○○○○○。」ト笑ひながら、臺所の方へ立つて行く。

ミツ「サア紅楓さん、お前マア淨水をつかつてお仕まひ。」モミ「マア貴君お先へ。」ミツ「マアお前さ、先へ遣つてお仕まひナ、左樣しねえと、またお三に笑はれるから。」モミ「ナニヤなぜでございますへ。」ミツ「なぜといつて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」モミ「アレモウ嘘ばつかり。」ミツ「ナアニ嘘ならばこれを御覽なせえ。」ト懷中鏡を、袋戸棚より出して紅楓にわたす。紅楓はこれを手にうけて貌をうつせば定なる、モミ「オヤノヽ、貴君もお意地のわるい、早く敎へてくださいませんから、ほんとうにしりませんヨ。」ト うろたへて、ゑんがはへ立ちいで、くみてありし湯にて、ていねいに顔をあらひ、かひなどしてかの鏡にて、びんのほつれをなでつけてゐるすがた、たとへるにものなきうつくしくしどけなきこい十六ふたり。それで男女の戀情は、誰も同じ思ひなれども、〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇あるものなりとぞ。されば紅楓は、姉お房の文を見て、いさゝかその心を改めんとなせしが、峯次郎にその憐みのあるべきや。〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、今朝は昨夜とかはりつゝ、食事もすみて一ト間の中、更座敷でも縁がはの、方の障子を明けさるは、忍び隠るゝ紅楓の家、其の用心をするなりけり。峯「どうもやすいかお粂さん、これは紅楓のをさな名としるべし。お屋敷の方は、さぞ大さわぎだらうが、此後を何樣したものだらうノウ。」モミ「左樣でございます。」ト少し當惑して鬱氣ぐ。峯次郎も安心ならねど、紅楓に深く苦勞をさせまじと思ふゆゑに、力を付けて、峯「ナニむづかしいことはねえが、お下屋敷から驅け出したといふもの

だから、向うの役を勤める番人がすまねえから、さぞ尋ねるだらうし、また親御さんの方へ人が往つたらば、これもビックリなさるだらう。マア第一親達に、苦勞をかけては私が濟まず、といつた所がうか／＼と、お前の宅へ歸して置くのは、お屋敷から使の來た節、一旦連れて行かうなぞといはれると、是れも大變な難儀の理窟だから、容易く宅へもやられず、此方へ止めて置いては、跡で伯父さんにいはれた節に濟まず、何樣したらよからうか。」もみ「誠に私ゆゑで、貴君へ多分と御苦勞をかけて、お氣の毒でございますネエ。いつそ只今からお屋敷へ參つて、昨夜逃げました譯を、明白に申し上げて、おいとまを願ひますか、またひどい目に合つて、殺されますかいたしませうヨ。」ト　おろ／＼なみだをおとしていふ。　丹「なんのつまらねえ、其のくらゐならば、昨夜驅け出して來るにも、およばないといふものだ。私も斯うなつて見りやア、今更後へ引くものかネ、男の意地だから、是非女房に貰はねえぢやアならねえ。お前もモウ、極意を落著てくれるがいいぢやアないか。」もみ「それはモウ、私は女の身で、夜中に貴君をお慕ひ申して參る程だから、死んでもお側に居りたうございますが、只貴君へ萬一、御難儀がかゝらうかと、それが案じられてなりません。」丹「なんのそりやア宜いわネ、何樣な難儀がかゝつて來たといつて、此樣に美しいものに、嘘にも惚れられた日にやア、是非苦勞も難儀も覺悟だわネ。お前さへいいとはねえければ、京大坂へ連れて往つても、夫婦になる氣だから、左樣思つて

おくれなネ。」とみ「ハイ。」ト、また涙を落す。丹「サヤ〳〵また泣くのか、其様に泣かすともいいれネ、夫れとも萬一、遠國へ連れて往かれでもしては、大變だと思つて、それが苦勞で悲しいのならば私はあきらめて、お前の勝手のいい様にして上げるわネ。エ、これさお柔さん。それだから泣かすといいぢやアないか。」とみ「イ、エ、わたくしの泣くのは、其様な氣ではございません。」丹「そして何にだえ。」とみ「アノウ他ではございませんが、今の様に貴君が被仰ると、嬉しさあまつて悲しくなります。私風情の事に付いて、萬一夫婦になられないければ、京都までも連れて往つて、夫婦になつて被下いますとの、お言葉が實正ならば、寔に勿體ないとありがたくツて、涙がこぼれますヨ。」ト膝の際に居て、簪にて團扇の繪を撫取る仕形をして、折節貌を上げて、丹次郎の貌を惚れ〴〵と見る。丹「なんの、いいかげんに世事をお言ひな、お屋敷の殿さまにでも惚れられやア仕まひし、私に惚れられたといつて、其様に嬉しくもあるめえ。」とみ「アレほんたうに最う、姉の義理も世間も、いといません氣になりましたから、何様ぞかはいさうだと思召して、お見捨て遊ばすなえ。」丹「ナニ口先で左様いつても、油斷はならねえ。」とみ「アレサお疑ひ遊ばすならば、何様なことでも致しますヨ。命でも貴君へならば、惜しみは致しません氣になつて居りますものヲ。」丹「ドレそんならば、よく氣を落着けて、其の證據を見よう。」とみ「オト、、、、、アレサ確かお庭を久助どんが、掃除をして

居る樣でございます。」岑「ナニ〳〵、彼奴は少し耳が遠いから構はねえ。オヤ〳〵衿白粉のはげた跡が、白粉よりは白くつて、肌肉の方が綺麗だ。お前には濃い白粉よりは、則り仙女香の方が恰るぜ、誠に汗を一ツかかないから、かはいらしい。」トいへども、紅楓は返事もせずに居る。此の節庭の垣根のそとにて、二三四人の子供の聲、子ども「ヤア引ィ衆人が來て見な、お祭だ〳〵、早く來て見なといへば。」ト、いふ聲聞いて岑次郎は、ビツクリなして障子の方を見れども、障子は〆めてある故、一向に庭も外も見えず、お三はあわたゞしく驅け來り、咳ばらひをしながら次の間より、三「若旦那さまえお客でございます。」ト、聞いて岑次郎は立ち上り、うろたへて、岑「ナニ誰人がお出でなさつたと。」三「ハイアノ、色銀町の御新造さまが、お房さまをお連れ遊ばして。」岑「エ、ナニ伯母さんがお出でだと、そりやア大變だ。」ト後の方を振り向き、岑「コレサ、はやくお隠れヨ、母御さんがお出でだといふから、マア奥の四疊半へ早く〳〵。」ト、いはれて紅楓は驚天し、まご〳〵しながら奥の座敷へ逃げてゆく。跡に岑次郎は帶を〆め直し、次の間へ出でて、岑「コウ〳〵お三。」三「ハイ。」岑「昨夜のことを云ひはしめえの。」三「イ、エ何樣いたしまして。」岑「よし〳〵、それぢやアマア安堵だ、サア此方へお連れ申しナ。」三「ハイ只今お房さまが、衣裳を何かお直し遊ばして、此方へいらつしやいます。」岑「ナニ、衣裳とはなんのことだ。」三「イエアノウ、お祭の姿形でいらッしやいました、たしか

道成寺の踊のやうな著類でございます。」ト、いふを聞くより峯次郎、またも昨日の夢の後かと、あやしむ所へ入り來る伯母、娘お房の手を引いて、座敷へ通りながら、丗「ヤレ／＼、あつかつた／＼」峯「オヤ／＼伯母さん、よくお出でなさいました、さぞおあつかつたらう、オヤお房さん、たうとうお祭に賴まれたのかえ、イヤァお立派／＼、しかし此の形では、なほ途中があつかつたらう、サアサァお浴衣を上げようから、早く汗の染みないうちに、その衣裳をお脫ぎ、大そうによく出來たねえ。」トいひながら、心の中のいぶかしさ、夢に見たりしお房の姿、それに少しもかはらぬ出立、何樣した事かと考へる、胸には紅楓の落著も、かてゝくはへて會釋も、前後することこそ道理なれ。伯母は未だ屋敷より沙汰もなく、一向紅楓のことは知らぬ樣子にて、丗「モウ／＼、急になつて是非といふから、仕方なしに出す樣になつたから、誠に私が一人で、せはしい思ひをしたか知れやァ仕ないヨ。漸々今日連れて、出られる樣になつたのだわネ。」峯「左樣でございますか、先だつて其樣なおはなしも、承つたけれど、伯父さんが堅いお氣性だから、止めになつたのかと、おもつてゐましたのに、それでもマァよく出る樣になつたねえ、お房さん嬉しからうネ。そして寔によく似合つた、正眞に白拍子の娘風だネヽ、伯母さん餘程うつりがようございますネ。」ト賞められて、いとゞ嬉しきお房の心、思はくあればはづかしく、ふさ「寔に野暮な形でございますから、兄さんがお笑ひ遊ばすだらうとぞんじまし

て。」米「ナァニ何樣して〳〵、お屋敷の姉さんも。」ふさ「エ。」米「イ、エサ、お屋敷の姉さんより、人がらがよくツて、其の中に好風な所があつて、かはいらしい。」母「ナニ〳〵、それを恥かしがつてネ、ヤレ此樣な形では、兄さんに笑はれるだらうのなんのと、種々なことをいふわネ。リアノ〳〵マア浴衣を著かへて、小許風をお入れ。」米「オ、眞に三や〳〵、其の浴衣を二ツ出して、伯母樣とお房樣にお上げ申しな、そして久助に、早く風呂の湯を涌かさせなヨ。」ト、手あてやさしく會釋ひながら、兎に角氣になる紅楓が事、伯母とお房に長居をされては、大變なりと案じても、お房は何樣か足がいたいの、蟲がかぶるのと、伯母へなぞをかけて止宿りたがる風情なれば、いよ〳〵心を惱ましける。

○いかに世界の好男子たち、此の苦勞を愼んで、用心せずばあるべからず。讀んでは何の事もなき樣なれども、その身にとりては、いかに其の節の心配ならんと察したまへ、なか〳〵壽命の毒なるべし。むかしよりいふ、それ女色は骨を削る小刀なりと、實に身の用心したまへといふ。

○さてそれより續き物語は、猶六冊に著はして、出板いたし御覽にそなふ。此の六冊の中には、永代談語のおもむきなし。後の六卷を看て、其の外題にかなふ意味を知るべし。

春色英對暖語卷之六　了

# 梅曆拾遺別傳の序

梅の木に、なほやどり木や梅の花、とは世に知られたる蕉翁の秀句、それならなくに此の冊子は、寒梅の一ツ二ツと、漸うかぞへし小枝なりしが、暦といふ字を假用りたる故か、年毎に開く卷の花、辰巳の園に色香をまし、北方に若枝を繼ぎて、惠の花の薫、いよ／＼ゆかしと御ひいき厚く、今は一株の大樹となりし故、梢にあらず根元でなく、程よき所へ屋どり木の、何やら分解らぬ花を咲かせ、よく／＼看れば目に馴れし、婀娜に由緣のお増が傳、かの中裏の小窗の鉢植、一りんの蕾を出して置いたりけるは、お房がことを根分の一種、同じき庭に植ゑならべても、一鉢別に詠めても、視倦きぬ樣に枝ぶりを、丹誠したる英に對して、暖氣の春の軒、日永の節の語り種と、なし參らせんと外題にも、其の意を籠めし英對暖語、こゝに至りておなじみの、唄女を呼び出し莞爾の、笑顔をひらかす梅が香や、新著の魁花えびら、當ることを意中に翻案し、諸冊子に勝つ事を、千里の外にはかり、臥龍梅の智畧をかりて、また／＼三編の高覧を備へ侍りぬ。

東都人情本一流の元祖

爲永春水誌

# 春色英對暖語 巻之七 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春水 著

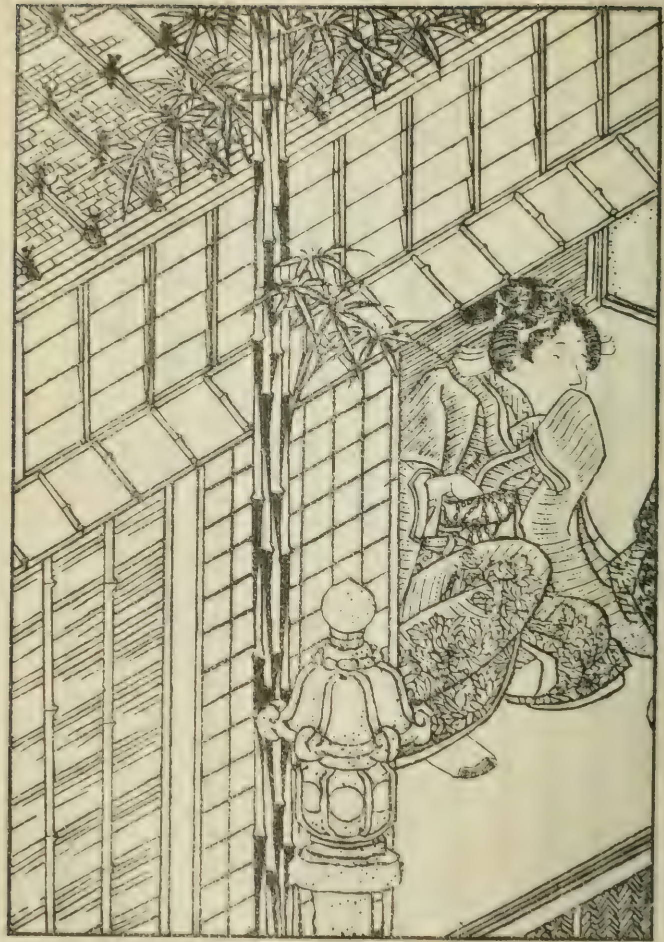
## 第十三章

再說岑次郎は、思ひがけなき其の所へ、お房母子に問ひ來られ、紅楓と倶に周章てつゝ、頓て其の座をとりつくろひ、何氣なき體には看せたれども、紅楓を奧へ忍ばせ置いたるゆゑ、心配いはん方もなく、能き程に會釋ひて、少しも早く歸したく思ふ所へ、お房の父正庵の許へ、紅楓の勤め居たる屋敷より、使にても往きたるか、お房の母も、唯今急に歸宅いたすべし、勿論路を急ぐに、お房の斷の衣裳といひ、足も遲きものなれば、岑次郎の宅へ止宿て貰ひ、母のみ歸り來る樣にとの、急使を越しければ、母の驚きお房の悦び、岑次郎の當惑、窃かに彳聞く紅楓が迷惑、四人の心種々にて、狂訓亭の筆にも說き分けがたし。母はとるものもとりあへず、お房を殘して、そこ〳〵に歸りゆきしゆゑ、お房は跡にいそ〳〵と、嬉しながらも恥かしく、言ひよるしほも何からと、煙草を吸ひ付けてさし出

し、ふさ「ハーイ。」トいひながら、峯次郎の貌を偸と見て居る。峯次郎は、これをとつて呑みながらも紅楓が透見をしては居ぬかと、後へ氣がねをするばかりか、今夜の始末を何として、姉妹顏を合はせぬ樣に、はからふべきかと、胸をいためて在る所へ、お三は縁側より障子越しに、三「お風呂が涌きましたから、誰樣ぞ入湯ませんか。」峯「オイ／＼、サアお房さんマア風呂へお這入り、左樣すると汗がヒれて涼しくなるヨ。」ふさ「ハイ有りがたう、マア貴君お先へ被爲入いまし、私はお後でよろしうございます。」峯「ナニ／＼、マアお前おはひり、私は今仕かけた用があるから、それをして仕まつて這入るから、其の開先へマア這入つて、そして緩りとお三に洗つてお貰ひ。」ふさ「ハイ有り難う、ナニモウ洗ひましても、どうで綺麗にはなりませんヨ。」峯「どうして／＼、その上に美麗しくなられてたまるものか、それこそ世界の男は不殘見惚れて死んで仕まはア。」ふさ「オホ、、、、私が化物ではございますまいし、其樣にわるく被仰らずと能うございます。」峯「ナニ／＼、わるくいふのではございません、實正サ、お屋敷の姉さんも、お前にはかなはない。」ふさ「何樣いたして、私が姉さんにかなひますものか、それだから貴君は、姉さんをかはいがつてお出でなさいますわ。」峯「ナァニ、私やァ紅楓さんのやうな、お屋敷ものは寔に嫌ひサ。」ふさ「イ、エ、それでも貴君は人品のいいのが、お好きだと申すことだから。」峯「マア其樣な、つまらない事をいはずとも、早く湯へおはひりヨ。三

か待つてゐるだらうから。」ふさ「ハイ〳〵、寔に私をば邪魔になさいますねえ。」ト笑ひながら、いやみをいひつゝ、着替へた浴衣の姿にて、お房は風呂場へ立つて行く。宗次郎は奥の間へ行かんとしたる次の間に、待ち設けたる紅楓が泣顔、すがり付いて悔しさうに、もみ「貴君はマア憎らしいねえ、それでござりますから、昨夜私が寝ても。」宗「コレサ〳〵、其樣な愚癡をいはずとも、マア〳〵はなれ座敷へでもお出でヨ、何かの相談をするから。」もみ「ナニ此所でも宜しうござります。其の樣に妹を怖がらずとも、能いぢやアござりませんか。」宗「ナニサ、怖がるのではないが、お前の居ることが知れては、私が叔母御さんへ對して濟まず、そして外にも用があるから、マア此方へお出でといへば、悪い事はいはないヨ、何もかもお前の爲だわネ。」ト、無理に手をとり引き連れて、小庭の方より庭下駄をはかせ、其の身は緣がはの上草履をはいて、生垣を越え裏座敷へ連れてはひり、母屋の方から、見ゆる向の障子をしめきり、築山の方は明けて、風をうける樣になして其所へ安坐らせ、宗「時にマア今夜の所を何樣せうねえ。」もみ「ナニ私やアお房に逢ひませうヨ。」ト、腹を立つてふさいで居る

宗「マアレサ、左樣無理をいふものではねえ、其の位ならば、此樣に氣をもみはしないわネ。」もみ「それでも今私が隠れて見て居りましたらば、寔にモウ〳〵かはいらしい貌をして、お房にじやうだんをいつて、傍へ引き寄せてお在で遊ばしたぢやアござりませんか。それだから私が隠れて居ると、



お房も貴君へ文の御返事を、お願ひ申さずには居りませんものチ。」米「ナニノヽそりやア彼の娘が、たとへ何と云つたればといつて、最う斯うしてお前とふかく云ひかはした上は、其樣な浮薄な噺ぢやアないわネ、今にもお屋敷から人が來るから、正庵さんの方から、何とか云つて來るか來ないでも、始終隱しとげられる理でもないから、是非お前と私の身の、覺悟をして居ないければならない中で、嫉妬どころでもあるまいわネ。」もみ「夫れでは何樣いたしませう。」米「ナニ何樣と云つて、外に爲方がないから、今夜はマアお前一人で、この座敷に寢ておくれな。」もみ「エ、そして貴君は。」米「エ私やアマア、お房さんをよく寢かして、それから夜中に知れない樣に、隱密と此所へ來るわネ、もしも獨りで氣味が惡くば、私が來るまでお三をよこして置かうか。」もみ「イ、エノヽ、左樣して置いて貴君は、お房さんと○○○○○○して、夫れでは餘りでございます。」米「ナニサ、左樣わるく推量してはいけないわネ。」もみ「それでも貴君、お房さんが小兒では在るまいし、○○○○○○○○○○○、○○○○ございませんか、左樣おつしやるから私が氣にかゝりますわネ。」米「これはしたり左樣をかしく聞くからわりいわナ、只私が用のある風情をして、○○○○○○○○○○、○○○來るといふのだわネ。あの孃の目を覺して居る中に、私が居なくなると、不思議に思ふだらうから、それで左樣言ふのだ、かならずあしく思つちやアわるいヨ。○○○○○○○○、○○○○○○○○

〇〇〇〇〇〇、何様して他心が出るものかナ、よく考へて御覧なせへまし」トいひながら、〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、ちよいと仰向かせ、「此様な美しいものに思はれて居て、また他に何の願ひがあるものか。」「誠に貴君は、小児をなぶる様なことを被仰つて、だまかしてお置きなさいますが、私はこウ。」トいひかけて、後はやう／＼口の中にて、「思ひ切らうとぞんじたのに、貴君が無理に。」「エヽニ嘘ばつかり、〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、何でもマア両方の魂が、自然に側へ寄つたのだわネ、夫れだけれども〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、何様ぞと思つて居たお前だから、〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇為方がねへ。」「イヽエ、それを少しも貴君がわるいと申すのではございません、たゞ私が心を取り直さうとぞんじましても、思ひ出すとなか／＼、お側をはなれる事も出来ませず、また今になりましては、姉の心がかはいさうでも、あの子の嬉しがる様に、貴君がなさるのは否でございますョ。」「そりやアマア大丈夫だから、少しもお案じでない。」「急度でございますかネ。」「嬉しいお前の志を何様して疎相におもふものかナ。」「それでもマア、これから日の暮れますには、よつぽど間がございますし、又日が暮れましても、あの子が臥せります時分までは、どのくらゐ久しうございませう。」其

の間に貴君が、おとなしくしていらッしやれば能いけれど、お房さんは惚れて居ますのに、貴君も手を握つてお遣りあそばす程だから、何樣も油斷はなりませんが、誠に後生でございますから、性悪をなさらないで下さいましョ。」岑「ナニ〳〵、これから晩まで、宅にばかり居られるものかネ、今朝寺島から、是非來てくれろと呼びによこした所もあり、また増見先生のお宅で、今日は萬葉集のお講釋が有るから、これこそ少しの間でも伺ひ度いから、往かなければならず。」もみ「オヤ、それではお座敷にはお房さんばかり、此所には私ばかりの所へ、何ぞこはい人でも參つたらば、何樣いたしませうねえ。」岑「ナニ誰が來るものかネ、また何が來たといつて、其の時にやァ私が出るわナ」もみ「オヤオヤ、貴君は他所へお出で遊ばすではございませんか、其のお留守へひよつとお屋敷から人でも。」岑「ナアニサ、お房さんの前をば、今の樣に嘘をついて、木戸を出て隱れて、庭の開戸から此所へ來て居るわネ。」もみ「イヽエ、それでもあの孃が發明だから、氣が付いてこゝへ參ると大變でございますヨ。」岑「そりやァ仕やうがありやす、私が内に居ないと、田甫の方から悪漢が來てならないから、表座敷の方でおあそびと、お房さんをば入口の六疊の間で、お三と遊ばしておいて、庭の雨戸の方から、此所へ來る中木戸も、何も〆めて仕まつて、そして私が此所へ來て居れば、知れやァ仕ないヨ。」もみ「オホヽヽヽヽヽ、夏でございますのに其樣に立て籠めて。」岑「ナアニサ、此所は此の儘で〆めは仕

ないから此様に涼しい風が入るから、何様な事をしても汗も出は仕ないよ、酔しお前は上品だのに、肌目が細かいから汗なんぞをおかきではないネ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、平氣で汗も出ないネ。」ムベお「アレヤァ、其様なお憎らしい事を〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」ト莞爾笑ふかはゆらしさ、今はじめて見る顔にはあらざれども、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、此の節お房は湯より上りて、様がはに来りしと思はれて、軒に釣りたる風鈴の短冊を口ずさむ

立田川紅楓みだれてながるめり渡らば錦中やたえなむ

ト讀む聲聞いて峯次郎、紅楓もビッタリ〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

## 第十四章

往古新羅といふ國に、金歌といふ大富人在り、其の先祖を尋ぬるに、旁色といふ人なりしが、弟は大いに富み榮えたれども、兄旁色は貧しくして、衣食を他人に貰ひて、其の日をおくれども、弟は兄を養はず、甚だ不道の奴なり。然るに他人にも情深き者ありて、旁色をあはれみ、田地を一畝ばかり與ふ。これによつて旁色は、蠶と穀の種を弟に求めければ、他人の思はくをおそれて、米の種と蠶を

兄に與へたれども、ひそかに蒸して渡したれば、米も蠶も益に立つべき道理なし。しかるに旁色はこれを知らず、時節を待ちたるに、彼の蒸して與へられたる蠶の中に、いかなる故か一つの蠶が生じて大きさ牛の如し、弟はこれを妬んで、密かに兄の蠶を殺す。奇なるかな是れより、百里四方の蠶飛び來つて旁色の家に集まる、おもひめぐらすに、殺されし蠶は、其の王にてもあるならんかといふ。此の節四鄰の人々集まりて絲を繰り、旁色には少しも與へず。されど旁色其の人々にもあらそはず、さて稻も只一莖を生じたるが、その稻も他に異りて、穗の長さ二尺餘り、米の實りしことおびたゞし。こゝにおいて旁色は此の種をとりて、來年蒔きおろしたらば、さぞ能き米を得るならんと思ひ、常々かの稻を守りて居たる所に、忽ち烏一羽來りて、稻穗を喰ひ折り、銜へて山のかたへ飛び行くを、旁色はいかりて烏を逐ひながら、五六里ばかり山に上りしが、烏は山中にて追迫められ、岩石の罅にかくれて、入つて出でざれば、旁色は忙然と彳む中に、日も暮れ徑も黑らねば、烏の逃げ入りし、石の側に休足して居たりしが、夜半に月の出でて明らかなる時に及びて、赤衣を著たる小兒、石の陰より顯はれければ、何所ともなく多勢の小兒出で來りて、戲れ遊ぶ。彼の赤衣の小兒手に金槌を以て、集まりし小兒に向ひ、「汝等好むものあらば我に願へ、望みのものを與へん。」といふ。こゝにおいて多くの小兒、おの／＼その好む所の品、酒肴餅、又美服なんど口々に願へば、かの小兒は赤衣の

袖をふり上げ、金槌にて地を撃つまねをすれば、他の小兒の願ひし衣食悉く備はり、衆皆悦んでこれを食し、または著かざり、久しく遊びて立ち去る。赤衣の小兒は、金槌を石の罅に插みて消え去りける。旁色は此の始終を見て、大きに喜び、ひそかに其の金槌を取つて我が家へ立ち歸り、試みに金槌を撃ち振れば、金銀財寶心の欲するまゝに打ちいだしければ、忽ち新羅國第一の福人となり、弟は次第に貧乏人となり、兄を羨み畑に居たる烏を追ひかけて、山中にいたりしが、兄の噂に聞きし石の側にいたれば、おそろしき鬼どもあらはれて、弟を捕へ、金槌を竊みし者なりとて、ひどき目に合はせ、山を追下しけるが、それより怪物のごとき貌となり、衆人に笑はれて死しけるとぞ。彼の旁色が正直なるによりて、金槌を自然とさづかり、弟は兄を妬み、麁略にしたる咎にてかくのごとし。此の金槌のことを、撃出の小槌とは號けしとかや。虛實は知らねど兄弟など、かならず〳〵麁末にすることなかれ。兄を敬ひ弟を憐み、正直に身をつゝしまば、打出の小槌に等しき幸ひも、自然さづかるものと知るべし。ふさ「オヤ〳〵おもしろい事を書いた本でございますネエ、これは岑さんお前さんがお書きなすつたのでございますかえ。」岑「エ其の本かえ、そりやァ私が、種々の書物の中から抜き出して、所爲と文章を俗に直して、小兒のなぐさみに、させようと思つてこしらへた本サ。其の打出の小槌の話はネ、酉陽後集といふ書の中にあるはなしサ。」ふさ「左樣でございますか、私も是れから姉

上さんを、麁末に仕ますまいねえ。」岑「ア、左様サ、姉さんもお前も和合くおしョ、それでないと第一わたしがこまるから。」ふさ「オヤなぜでございます、姉さんとお前さんと私と、同宅に居や仕まいし、なぜ私と姉上さんと間がわるいと、お前さんがおこまりなさいますねえ。」岑「それだつても、是れから後何様いふことで、三個同所に居まいものでもないョ。」ふさ「何様して姉上さんとは、同居にお在でなさるだらうけれども、私はお前さんの側に居ることは出來ませんョ。」岑「オヤそれでもお前昨日の文に私と一所に居たい様なことを、書いておよこしではないか。」ふさ「エ、。」ト少し顔を赤くして、ふさ「オヤ〳〵、あれはモウ此以前他人に頼んだのでございますが、昨日お前さんの所へとゞきましたエ、寔に憎らしいねえ。」岑「オヤそれぢやァ、文をおよこしの節と、今とは心が變つてお在でのかえ。」ふさ「イ、エ左様ではございませんが。」岑「たゞ否になつたのかネ。」ふさ「イ、エ、否になりますくらゐならば、思ひ切つてお恥かしい文が、上げられますものでございませうか。」トいひながら、綺草紙を開けたり疊んだりして居る其の姿、岑次郎が心には、姉の紅楓とくらべて、樂しみに評して見れば、姉の紅楓は時雨に色付きしながめ、お房は雪の中の梅の、南枝に蓄がほころびし如く、何れもおもむきかはりて詠めはかはらず、深くも我を慕ふが嬉しくて、義理も世間も知りながら、不覺いたづらな心となり、紅楓の前をはゞかりながらも、其の情にごうつりける。されど日中は他へ行

くふりをして、お房の側にながくも居ず、ひそかにはなれ座敷へ至りて、紅楓の心をなぐさめしが、永きその日もはや暮れて、夜食はお房と座を同じうし、日中は他へ往きしおもむきにせしゆゑ、お三がはからひにて、紅楓と雑交膳にて食事をなし、其の心配いはん方もなく、やう／＼と初夜になりしゆゑ、蚊帳を釣らせ、臥具を調へて、三「サァお房さん、夜が短いから今夜は早くお寝ョ、今朝母御さんが、明日は祭連中と、何所のかお屋敷へ往くんぢやァないかえ。」ふさ「ア、左様でございますョ、それぢやァ早く、お邪魔にならない様に臥せりませう。」ト少しすねていふ。三「オヤ誰も、お前を邪魔にする物かネ。」ふさ「イ、エ、それでもお前さんが、まだ荘屋様とか何とかへ、お出でなさるから、それで早く寝ろと被仰るんでございますョ。」三「ナニ／＼、何様してモウ／＼、今夜は何所へも往きはしないのサ。」ふさ「嘘ばつかり、それぢやァ〇〇〇〇〇〇〇下さいまし、それはお否でございませう。」三「よく種々な事を言つていぢめるなう。」ふさ「ナニ左様ではございませんが、〇〇〇〇〇〇〇何だか氣味が悪うございますものヲ。」三「ドレ／＼、其様ならば〇〇〇、又化物ばなしでも仕ようかネ。」ふさ「ほんたうでございますかえ、嬉しいねえ。」三「又袖で燈火を消してはいけないヨ。」ふさ「すネ、、、〇〇〇〇〇、燈火はございませんものヲ。」三「左様かネ、ドレ／＼何ぞこはい噺を考へて、おどかして上げよう。」ふさ「アレおどかしては否でございますョ、驚かさないでおはなし

なさいヨ。」岑「それだつて、化物噺のこはくないのは面白くもなんともないわナ。」トいひながら、やがて〇〇〇〇〇〇〇、浮世の雜談化物のはなしに、時刻をうつせども、お房はさらに〇もやらず、はや寅ノ刻の鐘ゴウン〳〵引　岑「オヤ〳〵アレ最う寅ノ刻がなる、〇〇〇〇、おいらもモウ〳〵今の噺で、大そうに勞れたから、〇〇〇〇仕ないければならない。」ふさ「オホヽヽヽヽ、嘘ばつかり、身にしみてはなしてお聞かせでもなくツて、私がそれから〳〵と申しても、半分〇〇つてお出でだから、しまひには何だかわからない事をお言ひだものヲ。」岑「左樣か、そりやアものの言はれない節もあつたのサ。」ふさ「エ。」岑「ねむくなつてならねえのを、我慢をしてものを言つて居たから、少しは言葉のわからねえ事も有つたらうわネ。」ふさ「をかアしいねえ。」ト岑次郎の貌を、嬉しさうに看て莞爾笑ふ。岑「サア〳〵、モウ能い加減にして寐なといへば、情のこはい子だなう。」ふさ「それでも、私が寐るとお前さんが、また莊屋さまへ往つてお仕まひだ物ヲ。」岑「ナニつまらない、夜半に何所へ行くものかナ。」ふさ「イヽエ、それでもお前樣の、お出でなさる莊屋樣の別家には、美しいかはいらしい、お小性の樣な娘子がお在でだから、それでお前樣が日中から、往きたがつてばかりお出でなさいましたわ。」トいはれてびつくり岑次郎、岑「エ何をいふのだネ。」ふさ「オホヽヽ、アノウ日中ネ、風呂から上りました節ネ、お前さんが何所へかお出でなすつて、私一人で轉寐をいたしたら、お屋敷の

姉上さんのやうな娘と、お前さんと咄をして入らつしやるのを夢に見ましたのサ、ドレ／＼最うふせりませう、萬一意地のわるいことをして、白晝の御本のやうに、兒さんのばちが當ると、わるうございますねえ。」ト笑ひながら、背後を見せてやう／＼に寐入りし樣子。峯次郎はつく／＼と、お房の言葉を考へ見るに、白晝はなれ座しきにて、紅楓と内々物がたりをなして居たるを、風呂より上りて庭に立ち出で、障子ごしに透見をせしものなるべし、それと知りつゝ日中より今まで、一向しらぬ顔にて○○○○、いとつゝしみのふかき心なるか、また以前に姉と此の身と、情念あるを知つて居るゆゑ、所爲と其のことを口へ出さず、知らぬ顔にてわれを側へ引き付けおき、紅楓に物おもひをさせ、我が内心に苦しむを、推量してあやつりしか、歳に似合はぬ戀の意地、油斷もならぬ才智にして、憎らしきほど面しろき、情の手とりと感心も、これ愛著の迷ひにて、賞めるはいさゝかあやまりならんか。さて是れより紅楓がかたへ、いたりての口舌、さぞかしなるべきなれども、夫れは畧してこゝに說かず、看官よろしく推して、若し本意なく思ひたまはば、紙を綴ぢ足して、はなれ座敷の段を慰みに作りたまへ。左もあらば後日にこれを追加して、其の儘に板行すべし、これも珍らしき春のあそびならずや。

親疎の隔てなく、右の段をしるして送り給はば、その出來の巧拙を選みて、かならず追加の板行

となすものなり。



春色英對暖語卷之七　了

# 春色英對暖語 卷之八 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春水 著

## 第十五章

彼の楠屋にておなじみの米八が、まだ中裏に在りし頃、同じ部屋に身を寄せし、お房といへる新子一義妹を問へば、則ち此の卷の前にしるせし、正道一寮お房が、故ありて此所へ奉公に來りしなり。毎日さまたげ米八が、今日は常にもかはりたる、ひまといふのみならずして、他の朋輩どもは皆外へ出拂ひ、いと物寂しく只一人、古き繪本を讀みながら、肱枕して居たりける。よね「エ、もと何所までか昨日讀んだッけ。」ト、本を繰り返して小聲によむ。

千早振る神代のむかし、瓊々杵尊の御后は、大山祇の神の御息女にて在しけるが、其の始め尊とただ一夜の御契りに、御懷妊ありしゆゑ、尊はこれを疑ひたまひて、我が種の子にはあるまじと仰せければ、御后此花咲屋姫は、これを恨み憤りたまひ、無戸室戸のなき家なり。を造り、其の中に入り、譬

ひて仰せられけるは、貞女といはるゝ證據もなければ、命もさらに惜しからず。されど證據の立たざるときは、尊の御恥ともなることなれば、姫ごぜの身の荒々しきをいとへども、これ見て誠となしたまへ、はらめる子が尊の御たねならずんば、火に燒けて母子ともに死ぬべし、また尊の御胤にちがひなくば、火も燒くことはかなふまじと、妊身のまゝにて、火の中に坐したまへども、さらに御身につゝがなし。これぞ末世の貞女鏡、富士權現と祝はれたまふは、咲屋姫の御ことなり。下はりやくす。米八はこのところまでよみ終りてまたひとりごと。

「オヤ〳〵、斯うして看ると、神さまの時代から、女といふものは悔しい事が絶えねえもんだ、ほんに女が何の樣に氣をもんでも、男の方で疑つたり、他心でも出された日にやア、苦勞する甲斐もない樣なものだ、しかし此のお姫さまのやうに、火の中へ飛び込んでも、誠をあらはす氣になつたらば、一心の屆かないことも、有るまいかと思つても、仇吉さんもその氣で、實意を盡した節は、丹さんも憎くは思ふまいしア、引、モウ〳〵安心のならねえもんだ。左樣かと思へば、此の頃來たお房さんが年もゆかないであの苦勞、まだ逢つたこともないが、其の姉さんとの義理づくで、姉妹ながら引き別れて藝者の勤め、最初は一人の男を、姉と妹で戀ひしたつて、今では兩方が義理を立つて、心には惚れきつて居ながら、二個ともに男を突き出して、辛防して居るといふは感心な事だ。左樣すれば

またあいにくと、その男が問ひおとづれて、思ひ切らずに艶しくするといふゑ、嬉しいやうな當人の身にとつて看たら、さぞつらからう。今日もたしかに其の人だらうが、あの孃の正直な心から、何と返事をしてかへるか、いらざる人のことまでが、身につまされて案じられる。」と元來實意な米八が、姉とも思ふお房のことを、獨言して居る所へ、泣顔かくして力なく、明けて來るのも後髪引かるゝ、思ひやう〳〵と、二階へ上りホット溜息を突いて、米八の方を見やり、まだしも便りと心に嬉しく、ふさ「オヤ〳〵、姉さん御一人かえ。」ト側へすわる。これはお房が米八を、姉とも頼みし言葉にて、常にいふ姉上さんの輕薄にはあらず。米八は起きかへりて、よね「オヤ房吉さんか、早く歸つて來たネ。」ト言ひながら、お房のかほを見て、よね「何樣したのだ、また泣貌をしてかへッたネ、岑さんとやらかえ。」ふさ「アイ。」ト返事の言葉とともに、こらへて歸りし溜涙を、はら〳〵と、膝に落してさしうつむく。よね「アレサ此の孃は何樣したもんだネ、其樣に涙をこぼしてから、何ぞ別に悔しいことでもあつたのかえ、誰ぞにいぢめられでも仕たのかえ、そして小藤さんは何樣したのだえ。」ふさ「今おかみさんが、用があるといつて下に居ますヨ。」小藤といふは、房吉の相子(アイシ)なるべし。よね「左樣かえ、そしてお前は何を泣くのだか、其のわけをお咄しヨ、誰もいぢめたのではないかえ。」ふさ「イヽエ、誰もいぢめはしませんが、今日はアノ岑さんが、毎度になく腹を立つて、此の後最うこがれ死をすればといつても、

此地へは來ねえ、これが一生の貌の見終めだといつて、直に歸つて行きましたものヲ。」よね「オヤなぜだねえ、例時やさしい人ぢやアないかえ。」ふさ「アイ、それが一途に腹を立つたのは、私が姉さんに義理を立つて居るのを、左樣ではない斯う言ふ場所へ來たから、心が變つて其の人へ、實を盡したりかはいがつて貰つたりするのだ、それでなければ是れほどにする心を無にして、他聞よく此方を斷るのだ、左樣したらばさぞ終がよからうと、誠にいやみをいつてかへりましたヨ。」よね「左樣かえ、しかし男のこゝろぢやア、それも尤もだわネ、隨分いやみも言ひさうなものサ。」ふさ「それでも、私が姉さんの方へ對して、何樣も岑さんと、はなれずに居てはすみませんから。」よね「サア其の義理は解つてあるけれども、お前が岑さんの方を立派に斷つて、姉さんの亭主にさせるとか、情人にして通させるとかならば、岑樣もお前をば娣にして、正然と世話をするとかしてくれるだらうけれども、姉さんの方ではお前に義理を立つて、岑さんを斷りを言つて見れば、何の事はねえ、お前と姉さんに突き出されて、男の顏の立つ目がないわネ、マア姉さんの、心のそこは兎もかくも、お前が今岑さんを斷ッて居る心のうちは、始終何樣仕ようと思つて居るンだエ。一旦は惚れしたけれども、此の節は愛想が盡きたから、斷つて仕まふといふ料簡ならば、其樣に泣いて氣をもむわけもあるまいし、左樣かといつて、はなれずに居ては濟まないから、義理を立てゝるといつて見りやア、何だか極りがわるいぢや

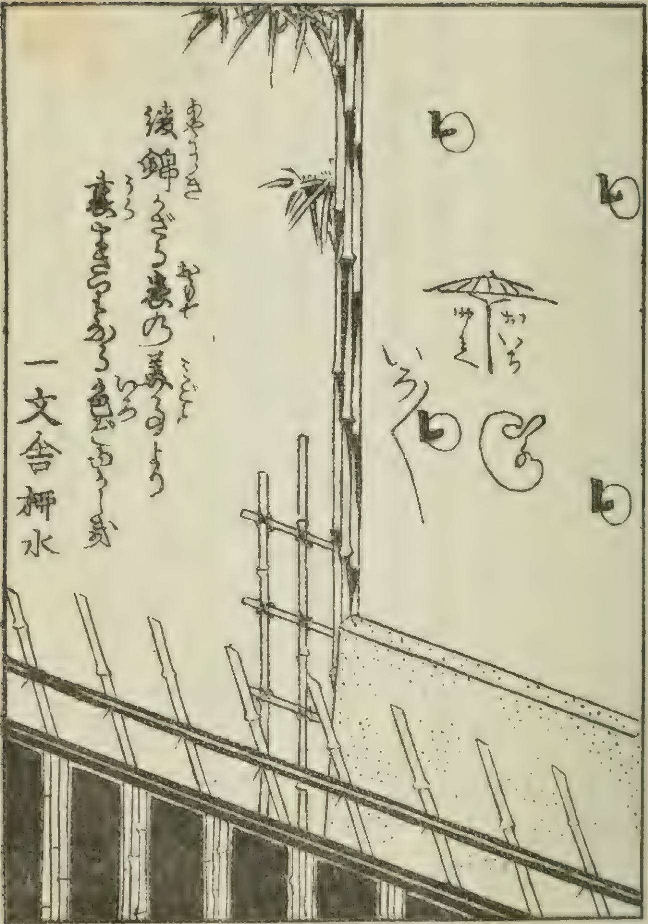
ないかえ。」ふさ〽それだから、何様したら宜からうと、苦労でなりませんわな」よね〽それが解らないと言ふことだァネ、彌お前が姉さんへ、義理を立てる気ならば、お前に岑さんにうつくしくわかれて、是非姉さんと、夫婦になつてお貰ひな、左様すれば岑さんも、お前に彼是と言ひも仕まいし、お前も左様して其の中に、頼もしい人を見立つて、便りになる様におしよ。其の方が安心だァネ、左様じやァないかえ。」ト、いへどもお房は無言にて、畳のおもを捻り居るゆゑ、米八はさすがに苦労人、そも／＼お房が、心のほどを考へ看れば、其の實は表に切れて、内々ははなれともなき戀の癖、されど誓ひし離別の對談、姉へ立派に言ひ切りしことか、心にあるゆゑに、二の足をふむものならんと、推量して莞爾と笑ひ、よね〽エ房吉さん、斯うして私が様なものでも、姉だと思つて萬事をおはなしたから云ふがネ、お前の心はマア斯うだらうネ、アノウ此間中からの噺では、極意の所は岑さんが、姉さんと音信不通の様になつて、そしてお前の母御さんの方をも、納得する様にしておくれならば、トツト義理がわるくつても、岑さんと夫婦になり度いのだネエ、左様かへ左様だらうネ」ふさ〽アイ、實意の所は左様でございますが、迚ても其様な勝手は出来ませんから、何様ぞ両親の方を、睦ましくなる様にして、姉さんも私と同宅に和合くして、岑さんとくらして居られれば、それで宜うございますよ」ト、うちしをれたるお房の體、身に引きくらべて米八は、しばらく考へ居たりける。

さてお房が、此の所へ來り、藝者となりしは、いかなるゆゑぞと尋ぬれば、姉の紅楓が一件よりして、父正庵と峯次郎の兩親と不和になり、意地づくなれば、これまで正庵が借りたる、峯次郎方の金を返濟の爲に、お房を此所へつかはして、半金を調へたり。また其の中にて姉娘、紅楓ばかりかお房まで、峯次郎と譯ある由を聞きて、父正庵は以ての外に腹を立ち、ことに後妻が義理を辨へ、紅楓をいたはりて、お房を早く藝者の勤めに出せしかば、女房ながらも義理あれば、紅楓をも戀が窪へつかはして、同じく藝者には出せしとなり。されば親と親とが不和になり、緣者の好身を斷つ程のさわぎなるゆゑ、紅楓は親と姉へ對し、お房は姉と親へ對して、たがひに義理立てるのみか、姉妹共におとなしき性質なれば、身のいたづらを悔み、此ののち峯次郎と、内々にても情を通はし、離別れざる節は勘當すべし、といはれたるを恐れ、又左なくとも峯次郎の、親達と以前の如く、正庵が音信のまじはりをするやうにならざれば、いかにしても、峯次郎と夫婦になる事は叶はずと、娘心の正直に、思ひつめたれば、姉も妹も峯次郎へ、まづ離別して居ると知るべし。しかはあれども其の極意は、深く惚れ込んで居る故に、手づよくは斷らず、たゞたゞぐだぐだと埒のあかぬ風情は、次々の卷を見て、其の餘儀なき人情を、察したまはんことを願ふ。

よね「エ房吉さん、お前が其の氣ならば、何もむつかしいことはないわネ、折があつたらば、私が姉さんに逢つて、能ッくはなしをして上げようではないか、何ぼ親御達が、不承知の事だといつても、お前達を此樣な所へよこして置くくらゐで、惚れた男と會合をさせねへなんぞと、其樣な無理なことがあるものかネ。左樣言ふと不孝のやうでわるいけれど、自分の好いた男に身をよせて、其の上に親たちを、麁末にしないでやしなひさへすれば、能いぢやァないか。」　ふさ「ナニそりやァ、米八さんのお言ひの通りに、私の母人の心もちは、其樣にやかましくもいふまいけれども、何樣も姉さんが、お屋敷に居た野暮な癖がうせないから、お前さんのお言ひの樣に、うち解けてはくれませんヨ。」よね「すヤそれだつても、今ぢやァ仲の町で、新參でも評判の高い、お粂さんぢやァないかえ。」ト いふは、かの紅梅の名を、おくめとよぶゆゑなり。これよりつゞきをよみてくはしくわかる。「それだからいつまでも、御小性じたての野暮らしい、時代娘子や賀茂川染の、くどい模樣を言ひもしまいわネ。及ばずながら私が請合つて、兩方の胸のはれる樣にして上げようわネ。是非近日に、此糸さんの所へ逢ひにゆくから、何所ぞの宅へ姉さんを呼んで貰ッて、お粂さんの胸も聞かうし、お前のことも委しくはなして、苦界の中を過す間の、うさ晴らしとなる樣に、して上げようぢやァないか。」ト左も賴もしき米八の、言葉にいとゞ悲しきは、他人にすれざる娘の人情、嬉し涙にむせび入る。新孃の身には儘あることか。

## 第十六章

何なりこのめ春雨ふり袖の新造まじり居續の客。●「エコウ、蜀山人は何樣も、此樣な事は感心だなう。」▲「左樣ヨ、それでもまた古風だとか、野暮だとかいふが、此方等が樣な俗ぶつには、早く狂歌と解つていいぜ。」●「併し今でも、千種庵だの、文亭だのといふ人の歌は、此の歌の風ではないが、上品のうちに面白みがあるぜ。」▲「左樣サ、コウ〳〵こゝにも文亭の歌があるヨ、オヤ〳〵この二枚折は、何時こしらへたか、大分おもしろい畫や、狂歌が張つてあるの。」●「ム、餘程集めるに面倒であつたらう、それは左樣とお粂さん、お富さんは直に歸るだらうかノ。」くめ「イ、エ、何樣して、今日は遲いヨ、山屋の内室さんと二個で、繪積山へお出でだから、日の暮方になるだらうわ。」▲「そりやアをさまらねえ、それぢやア何樣仕よう、間に合はねえナウ。」●「左樣ヨ、今流行らねえから、此の孃達はとても知らねえワナ。」くめ「オヤなにをえ。」▲「ナァニつまらねえ三味線だが、今夜急に入るから。」くめ「左樣かえ、そりやアわるいネ、何だか私なんぞは、當時のものさへまだろく〳〵に、覺えないからいけませんワ。」●「ナニ左樣でもあるめえが、此方の姉御か、保里の延津賀さんでなければ、知らねえもんだからいけねえ。」くめ「すャ、今度序があつたら、私を延津賀さんと、ちかづきにしておくれナ。何かを教へて貰ひたいヨ。」▲「承知々々。」●「ナニ頼むと直に教へてくれらァ、そ


一文舎柳水

して何でもよく知つて居るぜ。」▲「サアそれぢやァ保里へ往つて、こしらへて來ようぢやァねえか、サア立ちねえナ怠慢ぜ、お前と文嘉さんは、屛風の張交を見たり、歌や誹諧の古いのを見ると、腰がぬけるぜ。」●「ヘンちげへねえ、しかし張交や腰張で氣をもむのは、女を張つてさわぐよりいいぜ。」▲「知れたことヨ、お前に戀慕られて堪るものか、サアノ＼往かうノ＼。」●「ヤレノ＼急迫え人だ、其の氣でよく彭開になつたナウ。」ト、いひながら立ち出づれば、くめ「左樣ならば。」二人「アイ宜しく。」くめ「また後にお出でな。」▲「アイまた來ます。」ト出でて行く。あとにお粂は張りまぜの、屛風も節の氣なぐさめと、上下見まはす書畫の中に、文亭が詠みし一首の歌、

逢ひ見るをいのちと聞けば幾春も花にかたらん齡をぞ思ふ

くめ「オヤノ＼此の歌は、此間中峯さんが集めて本になつたのを、貸しておくれの中にもあつたが、歌の心は知れないけれど、逢ふを命とは、能く人の言ふことだ。縱ひ幾春過しても、一念で是非和合く一日でも峯さんと、夫婦にならずにはおくまいと思つて居ても、今逢へば親と妹へ義理を立つて、いやらしい返事は夢にもいふまいと、たしなんで見ると、逢はない方が氣がもめないでいいと、考へて居る中に、何樣ぞ今日等は間がいいから、尋ねて來ておくれならば、何樣なに嬉しからうといふ氣が、胸へ出て來るを、わすれることのならないのは、何の因果であるやらと、姿は婀娜な、戀が窪の

藝者となれど、心の中はまだ去りやらぬ娘風、御殿育ちの物堅い、操の帶のたてやの字、町方風の慣らぬと、見ゆるもゆかしき生根ならんか。されば獨りでくよ〳〵と、鬱ぐ折しも裏口の、障子を明けて酒屋の小僧、小「ヘイ今日は御用はございませんか。」くめ「アイまだよいヨ、また夕方に廻つておくれナ、今日は姉上さんが留守だから、用があつても今は知れないから。」小「ハイたしかお祖師さまへ、お出で被成いましたね。」くめ「ア、よく知つて居るネ。」小「ハイ今朝早く、雷音寺前へ使に參つた途で、お目に懸りました。」ト、言ひながら後へ振り向き、小「ヘイお粂さん許りでございます。」ト、いふゆゑお粂はあやしく思ひ、表の方をさし覗けば、心にたえぬ峯次郎が、酒屋の御用をひそかに賴み、案内をさせたる樣子ゆゑ、胸をドキ〳〵して佇む。小僧は峯次郎に、わかれてかへり行けば、前後を心配しつゝ内に入り、峯「此間は久しくお目にかゝらないが、おかはりもないかネ。」くめ「ハイ有りがたう、何樣してマア、今日お出でなさつて下さいましたエ、サアお上んなさいなねエ、寔にモウモウ、今もお前さんの。」トいそ〳〵せしが、心で心を叱り押し付け、くめ「まづ此方へお上んなさいよし。」ト。氣のない顏をして言へば、峯次郎は胸に障り、峯「イ、エ上りますめえ、其の癖この敷居を跨ぐまでは、大そうに苦勞して、心やすくもねえ酒屋の丁稚にまで、手をさげて賴んで來たが、尋ねられて御迷惑な樣だ、直に歸りませう。」ト、顏色かへて表へ出づるを、慌てて引き止め、くめ「アレマア

待つて下さいまし。」ト涙をうかめ、くめ「何様信實憎いと思しめさないで、浮世の義理が邪魔をして、少しの間の別れの夢を見ると、堪忍をなさいまして。」ト、峯次郎の顔を見上げて、涙をはら／＼と落せば、峯「モシお粂さん、場所がらへ來て、最う如才なく新手なことをお言ひだネ。」トせゝらわらふ。くめ「エ、なにを申すのが新手でございますかぞんじませんが、マア腹をお立ち遊ばさないで、お歸んなさつて下さいまし。」峯「それ見なせえ、それが如才のねえあいさつといふものだ。」くめ「なぜでございますエ、何と申したら宜からうか、私には言ひまはすことが出來ませんものヲ。」峯「なるほど御發明なお粂さんだ、思入れ男に氣をもませて、世間の他人にも彼是と、浮名を立てられた私を、否になつたからといつて、まんざら唯突き出すも、寐覺がわるいと思ひなさるから、嬉しいやうなわからないことをいつて、體よく突き出すのだ。隨分お前のうつくしいのぢやァ、好きな自由が出來て、好み次第の情男も、幾等か來る土地の事だから、私の樣な野暮は、最う振り向いて看るも否だらうけれど、まさかに左樣したものでもあるまいわネ。」ト、言ひ捨て出でんとすれば、すがり付き、身をふるはして止むる節しも、障子の外にて三味線の、門付ながらさえたるばち音テン／＼。

浄るりへ御領分のせり合ひで、お二人の親御さまはすれ／＼、ひなどりさまと久我さまの、妹脊の中をひきわくる。

くめ「御無川でございます。」ト、いふも涙のしをれ聲、其の身に當る淨るりの、文句も丁度いもせ山、お顏見ながら添ふ事の、ならぬ因果が悲しやと、心でいとゞくりかへす、歎きは顏に顯はれて、いぢらしくもまたかはゆけれ。男は元來おとなしき、息子氣質の實明もの、引き止めるのを幸ひに、火鉢の際へ膝を寄せ、丹「紅楓さんぢやァねえお粂さん、其樣にお前がやさしくすれば、いよ〳〵私の思ひの種だ、つらからば只一筋につらからでと、昔の人の口眞似をいふ樣だが、先だつての一件から、親達の音信不通、義理に迫つてお互に、他日は別れた其の日限り、出合はない風をしても、私がお前をたづねて會つたは、今日で三度目だが、毎度でも否な顏をして、來てくれずともいいといふ、風俗に見えるけれど、それにもかまはず斯うして來た、今日の心もちは、彌お前の心が變つて、親のいふことを大切に守つて、道を正しく私を突き出して、身を改める料簡ならば、それを無法に腹を立つといふは、此方がわるいから、其樣な無理も言ふまいわネ。併し私も野暮らしいが、未來までの女房だと、思ひ極めたお前に見捨てられて見ると、心細くツてならないから、不實い樣だが是からァ、心使ひになる娘を尋ねて、何樣かするより他に爲方がないから、お前も其の氣で如才もあるまいが、出來た相手を見付けて安心をする樣におしョ。併し何樣ぞ、始終は元の通り、親類になつて、突合をばしたいものだネ。」ト、いはれてお粂は涙に咽び、くめ「左樣被仰るのは、少しも無理ではございませんが、

最う左様なさると是れ限りで、時節を待ちます樂しみも、末の頼みもなくなりますから、私は直に死んで仕まひますョ。」岑「オヤなぜ其様なことを言ふのだエ、お前が私を突き出すのも、親孝行から發つたことと、實は私も承知して、愚癡をいつたは戀のよく、お互に是れぎりぢやア、心がゝりになるわけだと、相談づくの料簡を、何と聞き違へて、死んで仕まふなんぞといふのだエ。」くめ「イヽエ何も聞きちがへはいたしませんが、今貴君が、一生の女房と極めて置いたと、被仰るのを聞いて居ながら、其の事のならない様な因果な私、兩親に虚實はない中にも、今の繼母さんが義理づよく、娣よりも私の方を、かばつてくれます萬事の世話、父御さんの腹立も、始終は是非とも和げて、私と貴君と、同居になられる様にするからと、くれ〴〵實意を申してくれますけれども、意地ツぱりな父上さんでございますから、なか〳〵私が、貴君のお側に居るやうにはなりませんョ。またそれが何様かして出來ますと、お房さんに對して濟まず、第一あの子も、かあいさうでございますから、何樣ぞ私が死んだ後では、お否でも私の親達へ、ほどよく貴君が人を入れて、お仲直りをなすつた上、お房さんを女房にお持ちなさるやうに、お願ひ申しますョ。左様いたすと繼母さんも、本心はうれしがりますし、房女も何樣にか、よろこびますョ。」ト涙ながらの言の葉を、聞いてさすがに岑次郎も、目に

涙をごうかぬける。

春色英對暖語卷之八　了

# 春色英對暖語　卷之九　梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水著

## 第十七章

みのむしの音を聞きに來よ草の庵、とは彼の芭蕉翁の旅舍の吟なりけん。爰は何所か知らねども、驛路の鈴の音近く聞えて、寐覺わびしき草の家あり。垣根も破れてまばらなる、軒端ながらに梅が香は、主人ゆかしく春風に、往來の人も見返りて、彳む花見時節なれど、田舍は花も珍らしからずや、いと物寂し柴折戸を、ひらいて庭の竹縁より、上る内から障子をあけ、くめ「岑さんかえ、寔にモウモウ寂しくッて、こはくッてなりましなんだから、身をちゞめて居りましたヨ。日の暮れるまでお歸りでなくば、何樣いたさうかとぞんじましたわ。」岑「今ッから其樣に寂しがつては、田舍に住居をすることは出來ねえヨ。そしてこれから後にも、お前一人で、此所に夜晝居ることもあるわな。」くめ「イイエ私は否。」岑「それだッても、此方が家内にばかり居られるものかネ。」くめ「ナニ何所へでも同道

にありますわ。」米「どうして〳〵、其様な平氣なことを言つてなるものか、親達の方も、主人の方もかまはずに、二人で逃げて來たのだから、今にも追手が、尋ねて來るも知れねへ日陰の身で、うか〳〵か他所へ出られるものかネ。」くめ「それでもお前さんが、他所へお出でで、お歸りでなくば、何様いたさうかと、先刻も泣いて居りましたものヲ。何様ぞ後生でございますから、何處へも往かずに下さいましョ。」米「馬鹿な言ひなさんな、此様な可愛いものを置いて、他所へ往つたからといつて、長く居られるものか。」くめ「ア、レ其様な事をお言ひでも、お前さんのは嘘でございます。」米「なぜ嘘だェ。」くめ「すヤなぜとお言ひだけれども、眼前私の姉の情人に、おなりなさるくらゐ、浮薄でお出でだものヲ、何様して油斷がなりますものか。」米「ナァニそれは無理な言ひぐさだョ、あれは全體お前の手だと思つて、握つたのが誤りで、此方の心に何もないのを、お房さんが料簡違へで文をよこしたのだから、何も情人の戀のといふ譯もないわナ。」くめ「イ、エそれはマア、あかりの消えた節は、人違ひをなさつたかも知れませんが、あの文を御覽じてから、お房さんをかはゆくおなりのに違ひはありませんョ。それだから私をだまかして、別座敷へ押し込めて置いて、庭の方の雨戸をしめて、莊屋樣へ往くと言つて、出て來るとお言ひで、私をば久ァしく一人で置いたッきり、お出でないから、小庭の方から密と覗いて見ましたら、お前さんはお房さんの側に、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇

○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、寔に餘念なくして、御座でぢやァありませんか。」米「オヤ／＼マァ、大變な嘘を吐くねえ、何樣して其樣な事は、夢にも知らねえ事た。そしてあの時分は六月の事で、裸で居ても溫氣苦しい節だものヲ、○○○○○○○○○○○か。能いかげん惡推許りいふ。」くめ「イ、エ、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○、○○○○○○○○○○、お言ひぢやァありませんか。」米「何時其樣な事をいつた、サアそれを言ひな、嘘ばッかりいふぜ。」くめ「オヤさうぢやァございません、左樣お言ひでございます。其のときしかも私が、○○○○○○○○○○○○○、ナニ／＼その○○○○○○○○○、其樣に恥かしがらずといい、○○○○○○○○○○○、人品が惡いと思ひもせず、かはいいとこそ思ふが、愛想の盡きる氣遣ひはない。遠慮も恥かしいも、厭はない氣になつたのが、猶かはいいとお言ひぢやァありませんかえ。」米「アハ、、、、何をいふかと思へば、そりやァ別座敷で、お前に左樣言つたのだア、暑くッても寒くッても、○○○○○○○○○言つたのサ。」くめ「オヤそれだから、お房さんにも其の通りにお言ひでございます。」米「イヤハヤ惘れた嘘ッ吐きだ。」くめ「イ、ヱ實正でございます、それだからお房さんをかはいがつて、○○○○○○、お縁側の方から忍んで見て居りましたら、白拍子の姿がよく似合つて、かはいらしいから、何樣ご著替へて見せておくれ、そして其の儘で、側へ

寄りたいからとお言ひで、お前さんが手傳つて、あの孃の浴衣を脱がして、何だか小さい聲でお言ひで、嬉しさうに笑つてお出でなさいました。」豊「エ、モウ、いい加減に嘘を吐きなな、揚阿町に少しの間居たら、誠に人がわるくなつて、嘘ッつきになつたからいけやアしねえ。」くめ「アレマア、私の申すことは、何でも嘘だと仰しやるヨ、憎らしい。しかも其の時お房さんが嬉しがつて、お前さんに何と申しました、私はよく覺えて居りますヨ。」豊「何をあの孃がいつたことがあるえ。」くめ「アレ其樣に、知らない風をなさらずと宜しうございます。其の節お房さんが申したには、其樣に今かはいがつておくんなさッても、姉さんにやかましくお言はれなさつたらば、直に私をば捨ててお仕まひなさるだらうから、左樣なさいますと、道成寺の清姫の樣に邪祟きますと申したら、お前さんが、清姫よりうつくしいお前に、取り付かれれば本望だ、殊に此の姿が路考でも、大和屋でも叶ふものか、其方で取り付くよりか、此方が取り付くとお言ひ遊ばして、○○○○○○○○○○○、其の時はモウ／＼悔しくつて／＼、隠れて居るのが知れてもかまはないから、其の場へ驅け出さうかとぞんじましたけれども、左樣いたしたら貴君が、猶々依怙地におなり遊ばして、あの孃の方をおかはいがりなさるだらうとぞんじましたから、堪へて居る悲しさは、マア何の樣でございましたらう。」豊「すや・泣くのか、思ひもつかねえことを。たとひマア、其樣に似合つたことが有つたにもしろ、それは最う

過ぎた迎島のはなしで、今更いふ程の事でもないわナ、モウ〱かならず、お房さんのことを云つてくんなさんな、誠に迷惑だヨ。」くめ「折角戀しいのを、わすれようとお思ひの所を云はれると、お忘れなさる事が出來ないとおつしやるのかえ。」ふさ「寔にモウ、お前の野暮にもこまるヨ、些たア洒落た氣に、なりさうな物だなう。たとひ少しの中でも、唄女にも出たぢやアないかえ、餘り素人の樣だと云ひてえが、お屋敷の堅ッくるしいのが失せねえから、玉紬の半衿ものはうつらねえ、何樣しても世話女房よりは、侍元おかるの方が、持前だからこまるなう。コレサ泣顔を止して、御宿下りの風俗でもして見せなヨ。いまだにあのときの姿が、目にちら〱して、わすれられないから。」ト○○○○○○、莞爾と笑ひ、くめ「アレ最う、種々のことを被仰つておなぶりだねえ、何樣ぞ私やアお房さんの樣に、婀娜にはなられませんヨ。」ふさ「アレサ則り、おかるの樣なのが好きだといへば。」くめ「○○○。」ふさ「何だな、此所は田舍だから、○○○○○○○○。」トいふ折節に、何所やら田舍には、似合はぬ音〆の三味線に、淨るりの聲ほのかに聞ゆる。

へ野暮な田舍の暮しには、機も織り候賃仕事、常の女子といはれても、取り亂したるしん實が、合へやがて届いて山崎の、ほんにわたしが、合あるゆゑに、へ今のおまへのうきなんぎ、堪忍してとばかりにて、跡はなみだの花の雨、へ我もそなたの二親に、聟おやといふてあひたいと、人目なけ

れば抱き付き、詞にいろをやふくむらん。
よね「ヲヤマアミネさんえ、愚痴を申して、お前さんに恨みをばいふものゝ、お房さんは遠くへ離れて居るでだから、さぞ悲しからうけれど、私はマア斯うして御同席に居るから、不足を申すと罰が當りますねよね「さぞ不自由だらうけれど、辛抱をしてくんな、今に何様かして、本家へ帰る様にする、何所でか誰かつて居る浮るりだやアねへが、親里へ早く往つて、聟だとか嫁だとか、極めて仕まひ度いもんだネ」まつ「ヘイ、ヱヱ左様致すと又。」よね「斯うして日中も仲よくされないといふのか。」まつ「ヱヱサアネ、、、ネ、アレサア左様だやアございませんヨ。おまへさんが、御家内へお帰りなさると、お房さんがまたお側へ、まゐるやうになりますから、それが苦労でございますわね。」よね「ナニノウ、そりやアモウ氣遣ひなおしでない、丈夫だから。何様してあの娘は浮氣だから、以前に情人が出来て居るのサ。今かに今頃は其の情人と、稲荷横町邊へ宅をこしらへて、自業で唄女をして居るに、極まつてゐるだらうと思ふヨ。」くめ「どうぞ左様だと、私も心がおかれないで宜うございます。」よね「ナニたとひ左様でないと言つても、此方なあの中に居ないのを付込にして、何だの角だのと難をこしらへて、お房さんをば突き出して仕まはアネ。其所へ往つちやアお前が姉だから、あの娘の歯は立たねヘヨ。」ト、互に勝手な言の葉を、先刻よりして聞きたりけん、障子をがらり姉のお房、米次郎とお米〔紅園のことなり〕の間へ割つて

入り、さも悔しさうにお粂にしがみ付く。くめ「オヤ何様してマァお房さん。」ふさ「ア、參つたがわるいかえ、お前の戀しいも、他の戀しいも同じ事だわネ。何様で私は峯さんが、突き出すとお云ひだから。」ト云ひながら、悔し涙をはら〳〵、お粂の手先を喰ひ付いて泣く。くめ「アレ痛いョ、マアお放しな、わけを申すから。其様に腹をお立ちでは、物がわからないわネ。」ふさ「ア、何様で私はわからないョ、姉上さんの情人を、私の情人か亭主に仕ようと申すのだから、無法で解りませんのサ。それだから峯さんも、私を捨ててお前と斯うして、同居におなりなさつたから、お前さんは本望だとお思ひだらうが、私はもう捨てられた身だから、生きては居ないョ。とても死ぬくらゐならば、お前と同席に死なうと覺悟して、此所へ參つたから、お氣の毒だが左様思つておくれ。」ト、いふより早くお粂の貌へ、しがみ付かんと押し倒すを、お粂も腹立ち振り拂ひ、退かんとすれど放さねば、くめ「アレ峯さんえ、何様してはなしておくんなさいョ、アレ引峯さん引。」ト、一生懸命の聲を出して、叫ぶ其の身の高聲に、自然と目をさまして汗びつしより、轟く胸を押し鎭め、四隅を見れば田舍めく、茅の軒端もあらばこそ、最初に峯次郎の來りしも夢と思はれ、抱へられたる姉分の、お富が留守のことのみが、今朝にかはらぬ揚阿町、男藝者の歸りし後、轉寐せし其の間の夢か、まほろしの峯次郎といひ、姉のお房、いかなる心にて居ることぞ、もしやかはりし事はなきかと、覺めても夢に等しき悲し

み、泣き腫らしたる眼の上の、重くおぼえて鏡をとり出し、鬢のほつれを撫で上げて、我が泣貌を鏡にうつして、亦も姉に逢ふ心地、溜息を吐いて居たる節、奥の方にて稽古の淨るり、へねぐらをはなれなくからす、かはい／＼のめうとづれ、先はいそげど心は跡へ、御家の安否いかがぞと、あんじ行くこそ道理なれ。

くめ「ヲヤ／＼、あの淨るりの前文の句をば、夢の中に聞いて居たさうだ。何様してマアあんな夢を見たやら。」ト、思へば何か氣味わるく、轉寐したる其の側に、建てて置いたる衝立の、墨繪は前の北齋が、筆をふるひし田家の梅、お粂はその繪をつく／＼と、ながめて又も獨言、胸を撫で下しながら、

くめ「ヲヤたしか今夢に見た田舎は、此の繪に書いた様な家だッけ、ア、ほんに、庭に植ゑてあつた梅も、此の木によく似て何様か梅の香が、まだ匂ふ様だ。」とかたはらを、見れば袂おとしの匂ひ袋が、落してありしもをかしけれ。

## 第十八章

むかし戀が窪の墨町に、新綿屋とか呼びなして、いと賑しき青樓あり。其の家の脇に路次ありて、郭家は多賀屋とか家名せし、萬屋の路次際なり。其の奥の方にうなぎやの、いと／＼繁昌なす家の、評判されて流行し、豐月とか家號を付けたり。此所の座しきに酒を汲み、何かひそ／＼囁くは、土地

に見なれぬ辰巳の唄女、梅ごよみにておなじみの、彼の米八と新子の房吉。よね「ノソレ能いかえ、左様でもねえ今にお前の姉上さんが、此所へお出でで、萬一お前を見て、氣に障りでもした節には、和合と咄をしたくも出來ないから、すこしの閒はづしてお出で。」ふさ「ア、それぢやァ左様仕ませうネッ。」ト兼て女中にたのみしと思はれて、お房は豐月の別家へ身を忍ぶ折から、此所へ來る者は、揚阿町の藝者お条毎度立ち入る茶屋の女中に、呼び出されて誰なるか、なじみのお客と主家へは口をかけられて、三味線入らず常住の衣類で、くるしからずと言はれしゆゑ、ちよいと著替へし半衿つき、女中の案内に來て見れば、心覺えなき人にて、たしかに辰巳の唄女風、いぶかしながら米八にむかひ、座付のあいさつをなさんとするを、手も下げさせず米八が、よね「サアく此方へお出でなはいヨ、アレサ不躾ながら、お互の身でありますわネ。」くめ「ハイナニ、それで宜うございますヾヅお初にヨ。」よね「ハイお初にお目にかゝります。私は以前此里に居りました、米八と申しますものでございます。今日おほしめし寄らないことで、お目にかゝりますが、何様ぞかならずお心おきなく、久しいおなじみだと思つておくんなさいヨ。」くめ「ハイ有りがたう、何様ぞこれからお心易く、お願ひ申しますッ。」ト、元來弱性な氣質といひ、まだ里なれぬ娘心、此方も里の唄女だと、意氣地を爭ふ心もなく、萬事になれし米八の、言葉と品にてらさるゝ、恐れといふにはあらねども、只おとなしき持ちまへなれば、遠

慮がちにて言葉少なし。よね「イエ私もどうぞ、お心易くお願ひ申しますョ。」ト、これより盃のとりやりなどなした後、よね「トキニお粂さん、私はチットするきやうなことで、お目に懸りますがネ、マア言ひ出して見ませうが、くれぐ\も御遠慮なくなさつて、お前の胸をもうち明けて、私に聞かしておくんなはいョ。アノウ実に不躾だがネ、お前の苦労をおしの峯さんとの中には、今もやア何様なさいましたエ、相かはらずお逢ひかえ。」ト、思ひがけなく言ひ出されて、合点がゆかずと思ひながら、邪智心なきお粂ゆゑ、正直に、くめ「アノ峯さんとは、余儀ない理でわかれましてから、チットも逢ひはいたしませんョ。」トいひながら、はや思ひ出す男の上、涙を落して鼻をかむ。よね「ヲヤ、それおやア今では便りもせずに、実にはなれてお仕まひのかえ。」くめ「イヽエ左様ではございませんが、ひよんな私のいたづらから、親達にまで苦労をさせまして、峯さんの父上さんと、私の親達と、親類の縁も切るやうな、さうどうが出来まして、それのみならず義理のある、姉をも苦労の中へやられる様な、かはいさうなことが出来たのも、みんな私から発つた事とぞんじましたから、何程恋しいと思ふ峯さんでも、母や姉へ対して、放れずには居られませんから、私はうつくしく離別れて、是非姉にそはせたいと思ひますけれども、これも峯さんが私どもの両親と、何様ぞ和合くなる様になれば、宜うございますが、それが出来ないと姉も、私と同じ様に峯さんと、夫婦になられませんから、実に因果な

縁でございますヨ。其の中には岑さんが、他へ氣が替れて仕まひますと、姉も私も苦勞をいたし損だから、マア何樣ぞして兩親に隱して、岑さんの心をとり止めてと、思ひますことも有りましたけれども、左樣いたすと姉を出し拔くやうに思はれますと、姉へ對して義理も立たず、第一私を大事にしてくれます繼母へ、すみませんから辛抱して居りますが、何樣ぞ婦多川に居る姉が、其の氣が付いて岑さんと、縁をつないで居てくれますと能うございますが、これも急度、意地の強い子でございますから、私へ義理を立てて、急度左樣はいたしませんヨ。オヤ私としたことが、おまへのお言葉にあまえて、マア長々と此樣なことを申してから。」よね「イヽエ何樣して、左樣は思ひませんヨ。はじめてお目にかゝつたけれど、今のお前の御口上で、お心いきも義理立も、よく解りましたわ。房吉さんのお噂で、かね〴〵うけたまはつた、お前のお身の上、さすが御奉公のお行儀とやらが、今でも付いてまはるのだねえ。其のお心に違ひなくば、及ばずながら私が、お前とお房さんに得心させる思案があるから、何樣ぞ意見に附いておくれヨ。」ト、はなれ座敷の方に向ひ、よね「房吉さん〳〵、サア〳〵此所へお出でョ。」ふさ「アイ。」ト言ひつゝ一間より、飛石傳ひに八疊の、座しきへ來りお粂の側、たゞ俯いてやう〳〵に、ふさ「姉上さん誠にお久しう。」ト後は涙に何事も、いはぬは言ふにまさりたる、姉もさすがに同じ胤、母はかはれど骨肉の血すぢ、思はす膝をすり寄せて、くめ「お房さん、よくマア今日

は来ておくれだつけねえ、寔にモウ〳〵懐かしかつたヨ。」ト、これも涙のしめやかに、手に手をとつて顔見合はせ、しばしは言葉もなかりけり。

これよりたがひに實情をかたり合ひ、ツイ米八をさし越して、うち解け過ぐるむつまじさも、道理と思へば利發の米八、かへつてこれをよろこびて、前後を合はす三ツがなわの、咄をくはしく記さずとも、よろしく看官の推察をねがふ。さてお糸は夢に見たるおもむきをも、つゝまず米八とお房に語りければ、お房はいとゞ氣の毒に、姉のきげんを取りなほす、風情も見えてしをらしく、漸う笑ふ顔と貌、梅と櫻に桃の媚び、孰れおとらぬ花くらべ、豐月の席上に、いと賑もしくうちとけて、肴を染める杯の、重ね言葉も女子の常、盡きると思へば又はじめ、過ぎ越し方まで物がたるは、よろしく察したまへといふ。

よね「トキニマア、お糸さんも房吉さんも、よくお聞きヨ。さしあひらしい事だけれど、お互に斯うして何もかも、隔てし心ない中だからいふがネ、エヽお糸さん。」 くめ「ハイ。」 よね「オヤまじめになつてリ。」 くめ「ホヽヽヽ、左様ならばア、といふのかえ。」 よね「ア、左様サ。」 くめ「オホヽヽヽ、をかしいねえ。」 よね「アレサまア、笑つて居ずと私の云ふ事をお聞きヨ。他の事ではない峯さんの事ネ、幾月までも兩方が、義理づくをならべて、堅ッくるしいことを云はないでネ、此後お前達が、平氣に

洒落て樂しむがいいぢやアないかえ。」二人「どうぞ氣を取り直しませうヨ。」よね「マアお粂さんも房吉さんも、よウく考へて御覧ヨ、何樣で男といふものは、何樣に此方が氣をもんでも、長い月日の中には、是非一人か二人、情人をこしらへずには居ないヨ。また男が浮薄を仕ない氣でも、此方が血道を上げて惚れた人なら、誰が心も餘り變りはないから、他女も惚れて何事なくはして置かないヨ。それだからお粂さんも房吉さんも、野暮な事を云はないでネ、兎ても兩方が縁があつて、岑樣に惚れたもんだから、他人に手だしをされるよりか、何でも姉娣が和合くして、他に浮薄をする間がない樣に、二人で思入責めるが能いぢやアないかえ。」ト、いはれて二個は貌見合はせ、二人「オホ、、、、米八さんが戯言ばツかり。」よね「イ、エノ\、戯言ぢやアないヨ、實は私も身に覺えがあるから、左樣いふのだわネ。はづかしい事たけれども、房吉さんには噺して知つてお在での、丹さんの事で考へたから云ふわネ。（これは梅ごよみといふげだいの本に、くはしければよみくらべて知りたまふべし。）何でも勝負のない樣に、白地にはなし合つて、和合くおしョ。其の方が氣がもめないで能いヨ、それにしてもお粂さん、お前が此里に居てはいけないから、何樣かして辰巳へお出でな、ネエ房吉さん。」ふさ「ア、左樣だと、何樣に嬉しうございませう。」よね「左樣おしだと、私も相談相手になつたり、なられたりするから、是非左樣おしョ。お前達さへ得心しておくれならば、折節をもつて岑さんには、私が改めて中へはひつて、談事をした上で、三人の

氣のやすまる樣にして上けるから。」ト いふ所へ蒲燒を、二皿三皿もつて來る。米「サア〳〵、これでお飯をお上りな。」ト、これより暫時食事の間も、猶くはしく、始終の事を語らふ折節、うなぎにあらで誂へは、彼の情人の峯次郎、思ひがけなく此の豐月へ、入り來る連は清元常八、當時若手の流行子、いそ〳〵として開戸より、座しきへこそは通りける。

○畢竟此の後の模樣はいかに、久しいものだが人情の、極意をつくす新趣向が、モシ澤山にあるぞえ、あるぞえ、と古風な口調で筆を休め、直に續編も稿を全くなすものなり。

春色英對暖語卷之九 了

そも〳〵橋の始まりは、當時より千二百餘年のむかし、人皇三十七代孝徳天皇の大化二年、法相宗の開山なりける、道昭和尚が工夫にて、山城國宇治川に、はじめて橋を架してより、國家の自由をなさしむとか。さてまた船の始まりは、橋よりはるかの以前にて、人皇十代崇神天皇の五年七月、諸國に勅して造らせらる。されども其の製くはしからず。十六代の帝應神天皇の五年、伊豆國にて造り出せしが、國用の益おほかりしとぞ。其の節はじめて造りしは、日金山の楠にて、長サ十丈餘にこしらへたり。漕ぎかへるやすの御船の綱手繩など引きとめぬ別れなるらん、とは隆清朝臣の戀の歌。松をかざりし家根船とは、續き唱唄の文句にて、送り迎への辰巳船、摩利支天河岸走らする、猪の牙の船は其のむかし、明暦萬治の年間に、押し送りの長吉といふ者が、舟を藥研のかたちに作り、魚荷を積んで押し來るに、矢よりも早き風情を見て、三谷舟の船長が、偶と考へ付き、通ひ路急ぐ川船にこれをつくりて乘せ申さば、誰さんばしにもよろこびならんと、家職に念入る兩國の、笹屋利兵衛といふ人と、淺草御門の外河岸なる、玉屋勘五兵衛といふ人が、造らせ初めてお客を乘せ、元押し送りの長吉舟より、思ひ付いたる小舟なれば、長吉船といふべきを、略してちよきと呼びならはし、今又猪牙とし文字に書くは、小船の形が、猪の牙に似てあるからの、こじつけなりなどと、諸君子御ぞんじの事を、再度古事つけて、枝川の名もろくに知らざる、素人脇鵝の狂訓亭、乘つ切つた汐の落らをし

新嫖にあらで新る、作意はなかく〳〵思ひをよらねど、馴染の河岸へ持相付け、毎度込み合ふ大棧橋、新著の数々、彫つてくれろと八方から、口が懸つて居るにも構はず、歩行を貰つて魁し、大島屋引大島屋引としかいふ。

江戸　人情本一流の元祖

狂訓亭　爲永春水誌

江戸　爲永春永　著

## 第十九章

君と相向うて轉相親しみ、君と雙び栖みて、一身をともにせんと、聯ねし戀の唐詩や、別けて和ぐ國の名に、自然なる男女の中、睦まし過ぎて口舌となり、かならず心易だてより、千話の喧嘩もつれては、又意地づくにて暫時の、離別もまゝある習ひにや、彼の米町の大商人、福徳屋の二男宗次郎は、亡妻お雪を追慕する、心の迷ひ晴れやらで、顔ばせ似たるお柳をしたひ、傾城柳川となりしを、年ひとして通ひけれども、なか〳〵に心に任せる遊びにあらず、面白からねど佛の、隠れた女房にかはらねば、それにほだされ五七度、通ふ途中に増花と、いふにはあらずも憎からぬ、お増と縁を結びしより、忽ちこれに心うつり、頓て金曾木の家を仕まはせ、我が家より往來の都合よき、新道に相應なる、造作つき賣居なるを買ひ求めて、お増と母を其所へ引き移らせ、何不足なく世話させて、

朝夕心をなぐさむる、遊仙窟となしけるが、互に和合過ぎては、ついした事から宗次郎の、心變りにあらねども、拗強ねて女に物思ひをさせて、其の氣を引いてみる類も男の癖なるが、此のほどさらに宗次郎は、お増の許へ足踏せず、さればとて、又月々の見繼に不自由させることなく、使をもつて入用の金は、折々送り届け、小遣なんどにさし支へることは、一日もあることなし。さればはじめは母親も、戀の悋氣のいさかひなれば、今にも元のごとくならんと、一日々々過す中、はや三月程立ちしゆゑ、さすがに心安からず、或時娘に向ひつゝ、母「ナウお増や、旦那はマア何樣しなさつたのだらう〳〵、よもや〳〵と思つて日を送るうち、最う彼是百日足らず此宅へお出でがないが、何をマア腹を立たせ申したのだえ。左樣かといつて朝夕の事には、不自由のないやうに、使をばよこして下さりなから、其身は少しも、貌出しをなさらないとは、何樣も不思議な事だねえ。此の前文を上げた節も、返事はおよこしでないのかえ。」ト、聞かれてお増は母親に、案じをさせじと是れまでは、戀しい顏も悲しい心も、隱して何氣なかりしが、今は思ひに絶えかねし、折節夫れと問ひかけられ、包みかねたる眼に涙、ホロリと膝に一ト雫、置いて哀れな秋の風、身にしみ〴〵とかこち顏、うるみし聲を紛らして、増「ナニネ、お前も知つてお出での通り、私やア宗喜さんに、腹を立たせる樣な、しうちを仕た事はないけれども、去頃お出での節に、郭に居た時分の咄が出て、種々女郎衆の噂や何かをした折に、

私がツイ好三さんといふ、お客の事を、程の能い實のあるお人だと、いふ噂を仕たらば、ヲヤそれから何だの角だのと、否みを言ひ出して、其様に心に思ひ込んで居るくらゐならば、好三さんの世話になるがいい。道理で好三さんが、以前は随分茶屋や女郎屋で落ち合つて、心やすく仕たッけが、私を世話にする様になつてからは、途中で貌を見合つても、物も言はねえ様になつたのは、以前私と好三さんと、情合が有つたからの事だらうと、思ひも付かねえ嫉妬を言ひ出して、腹をお立ちだわネ。その好三さんが、菱屋の楼へ来る時分は、清瀧さんといふ女郎衆と、深い中になつてお在でで、私なんぞはなか／＼、何様も仕たのではないわネ。それだけれども寔にモウ、悔しい間の悪い事はネ、お前の留守の節、私が格子戸を明けて、外面を見て居る所へ、其の好三さんといふ人が、此所の前を通りかゝつて、私の貌を視て、ヲヤといひながら立ちどまつて、久しく逢はねえ、今じやア仕合が能いといふはなしを聞いたが、さぞ樂しみだらうの何のと、戯言をお言ひで、笑ひながら行き過ぎる所へ、宗さんが丁度摺れちがひにお出でだッけが、其の節から兎角好三さんの事を、疑ッてお出でだわネ。夫れが段々足の遠くおなりの基だから、私が文にも、くはしく言譯を書いて上げたけれども、只宗さんの腹が癒えないのだノ、それは成程矢先がわるいから、門口へ立つてはなしをした好三さんとやらを、折節此宅へ出入でもさせるやうに、一度は疑りも仕なさりさうなものだが、母の此身が付いて

ち居るし、お前の氣質も知つてお在でで、不斷にも似合はず、此樣に永く來ずにお在でのは、何樣もそれ許りでは有るまいヨ。」增「左樣サねえ、たしかに宗喜さんを、しやくる者があるだらうと思ひますわ。」母「何卒して、くはしく其の理解の立つ樣にして、氣をもみたくないものだナウ。」增「ナニ私やァ考へて置いた事があるから、彌宗喜さんが來ておくれでない樣だと、幾月も斯うしては居ないヨ。」母「それだつてもお前、左樣はならないやな、斯うして來ずにお在ででも、不自由のない樣に、仕送りをしておくれだから、此方の勝手にもならないヨ。」增「それでも今の分では、活かしたり殺したりされる樣なもので、寔に氣が落著かないわネ。」ト、母子が心をなぐさめかねて、憂き月と日を送り居る。又宗次郎は何ゆゑに、お增母子を養ひながら、絕えて久しく其の家に、至らざるぞと尋ぬるに、疑心暗鬼を生ずるたとへ、風とした口舌が疑ひの、發りとなりて餘所ながら、聞く每々に心にさはるお增のうはさ、されども當時は是れぞといふ、落度もあらず生得は、情の深き宗次郎ゆゑ、母子を見捨てることはせず、只月日を過せしなり。されども惚れたる中なれば、自ら心をとり直し、三月ぶりにてお增の許へ、問ひ音信れんと我が家を立ち出で、今宵もあやしき緣日の、夜見せをぶら〳〵素見しながら、歩行る植木の目移りに、秋の七草風そよぐ、萩に桔梗に女郎花、まねく尾花の手元にも、似たる麥湯の娘が世事を、聞き流しつゝ行く、此方は辻講釋の一トくさり、「されば

御座船は、内裏の湊、組板が瀬にさしかゝり、絶景いはんかたもなく、四方をながむる折、まきれ」わつらいん「オヤ〳〵、辻講釋か、野暮な奴だナア、聲色にでもすればいゝ」●「無理なことをいふぜ、聲色つかひと、かうしやくと同所になるものか。」かうしやく「はるか向うの山の端に、白雲ひらめくと見えしが、觀るうちに薄墨色と變じ、一文字に廣がるやいなや、暴風海上に落し來つて、忽ち逆浪を吹き上げ、汐けむり陰々として、天を突くがごとく、明光々たる月かげも、はや黒雲のうちにかくれていさ

△「オヤお月さまが、雲の中へほんたうにかくれて、暗くなつて來た、足元のあかるいうち行かう行かう。」●「ナヽ〳〵宮常が此席へ出て居るぜ。」△「ドレ〳〵、ナニ宮船だナア。」●「アヽ、左様さ、此身も宮船の方が贔屓だぜ。」△「ヘヽ宮船の方で有りがた迷惑だといはア。」●「イヤ宮船よりか、今の御座船は迷惑だつたらうナア。」△「また講釋か眞平だぜ。」●「ドレ其樣ならば、宮船の伊八を一段やらかしながら行くべいし」

「逢ひ初めてより一日も、烏の啼かぬ日はあれど、お顔を見ぬ日はないわいなア」しげ〳〵逢へばお宿の首尾、あしきは胸に知りながら、好いたが因果束の間も、側はなるゝがいやましで。」

△「エヽコウ、好いたが因果といへば、新道のお増とかいふ女は、何樣も好いた風だナア。」●「ム、あれか、あれは戀ひ窪の菱屋の内に居た時分から、評判の女だア。」△「オヤあれでも女郎衆か。」●「ナア

ニ、菱やの内唄女だけれども、仲之町の見番よりか、藝が上だといふ事たッけが、何樣しても面が美麗しいに、藝が能いからはやく郭をも出たと見えらァ。」△「客人だッても、唄女の身請は出來めえやァねえか。」●「ナニそれは又、何樣か方があるだらうわナ。」△「今ァたしか、福德屋の旦那が、世話をして置くぢやァねえか。」●「左樣だらう、郭に居る時分には、自己が知つてる好三さんといふ人が大そう惚れて居たッけが、何樣したか。」●「オヤそれが情人か。」●「エ何樣だかそれは知らねえが、隨分その好さんといふのも美い男だァナ。」△「なんでも男の能いのは、一割德だナア。」●「ナニノ、、女郎唄女に惚れられる樣だと、何樣しても夫れ故に、友達や何かに、不義理をする事が出來るから、則り不男の方がましョ。」△「をとこがわるくつて、不義理をしちやァ何樣だ。」●「アハ、、、、、、べらぼうめえ、それぢやァ箸にも棒にもかゝらねえのだァ。」△「エコウ左樣いへば、女もうつくしい奴は、何樣しても油斷はならねえナァ、アノ新道のお增なんでも、それしやの上何だから、今でも情人があるだらう。」●「とんだ他嫉妬だぜ、併し何樣も娜娿な女だから、油斷はならねえのサ。」ト、前後構はず高調子に、咄しもて行く夜の道、宗次郎はからずも、彼の人々の後脊から、聞きつゝ歩行みてお增の噂、よもやと思ひ捨てたりし、好三の名さへ、お增の事にならべて、彼是言ひ立てられ、またも疑ふ氣色のわるさ、向けたる足を引返して、其の夜はお增の許へいたらず、折節奢りに立ち寄り

し、魚半とか呼ぶ小料理屋へいたり、障子を明けて、宗「こなひだは御不沙汰を仕ました。」ト言へば、女房お鯛は立ちいでて、女「オヤ〳〵旦那、マア何様なさいましたか、まことに此間は、お遠々しうございますねえ。」宗「何だか用ばかりおほくッて行けやせん。」女「何でございますか、情婦まはり許りしてお在でぢやアございませんか、オホヽヽヽヽヽ。」宗「ナニ〳〵。何様して其様なことならばいいが此の節は。」女「やつぱり情婦でおいそがしいのでございませう。マアお上んなさいましヨ、お前さんがお隠しなさいましても、情婦でおいそがしい證據をばお目にかけます。先程も菱屋のおいらんの所から、お文が參つて居りますヨ。」宗「エナニエ、おいらんの文とは、少しも覺えのない事だ。」

## 第二十章

再説宗次郎は、魚半の女房が、郭の文を預り居る由を言へども、更に信とせず。宗「また内室が久しぶりだから欺がうと思つて、其様な事をいふだらう。」女「何様致して、旦那を欺かして濟みますものか、マア二階へいらつしやいまし、出してお目にかけますから。」宗「オヤ何をえ。」女「アレサ、お馴染から參つたお文を、出して上げますと申すのサ。」宗「それだッても此の頃は、郭へなんぞは足を向けた事もないから、文の來る様な、心當りは少しもないから、譃だらうといふのヨ。それでなければ人違ひだらう。」トいひながら、二階の階子へ上り中段にて、宗「それはいいが何ぞ出來るかネ。」女「ハ

イ今晩はお肴が澤山ございますョ、それに明朝はやくといふ、仕出しのお誂へがございますから、何でも出來ます。只今半助が湯から歸りますと、直に上げますョ。」宗「左樣か、それぢァ誰ぞ呼びてえもんだノ。」女「ハイ左樣でございますか、誰ぞ好い唄女衆を、只今呼んで上げませう。」トいふを聞きながら、二階へ上る折から、魚半が立ち歸りて、酒肴も早速出來て出すと知るべし。女「サア御覽なさいまし、御由縁さまのお文でございます。」ト、いひつゝさし出すを、宗次郎は不思議な事と、手にとり看れば我が名當、封おし開けばかの郭にて、五六度行けども打解けざりし、柳川よりの文なれば、合點行かずと繰りかへし／＼つゝ、餘念なく視蕩れて居るもあやしけれ。

○文の文句は、何と書き送りしか知らねど、定めて過ぎし麁畧を詫びて、宗次郎を招くの願ひを認めしならんか。

○又曰ふ、此の草紙の初編にしるせし如きの柳川（娘のときの名はお柳。）が、今になりて宗次郎へ、文を送りしは何故ぞ。これ則ち其の業體に馴れたる心から、素人の料簡とかはり、情人文次郎へ、操をば捨てずといへども、身の爲に客がなければ、主人のまへに對しても、傍輩の侮りも悔しければ、今は一人なりとも、馴染の客を餘多よびて、全盛をあらそふ氣になるは、なくて叶はぬ人の意地なり。此ののち柳川の行狀を、よみ給ふの看官、處女お柳のときの心にて、評したまふ事なか

れ。

な「何様でございます。お人ちがひにしては、餘りお文に御念が入り過ぎますねヱ…、、、、、、。」宗「アハ、、、、、、イヤ内室、唄女がなくば幸ひにして、今夜アマア歸りやせう。それともモウ來るならば、氣の毒だから、お座敷の代をば遣つておくんなせヱ、明日宅へ一寸勘定に來ておくれヨ。」な「オヤモウ直に、お歸んなさいますのでございますか。」宗「左樣サ、わすれて居た用を思ひ出したから。」ト、俄に料理やを立ち出でしが、實にも自由な街の賑ひ、木戸に待ち合ふ辻駕籠を、雇うて乘るも價の高下、厭はで頼めば忽ちに、宙を飛ばして戀が窪の郭に至り、彼の柳川を相かたとし、座敷に遊ぶ其の風情は、以前に變りし事もなければ、文を送りたるに似合はぬ仕方を、いといぶかしく思へども、まづ何氣なく其の儘に、ふしどへ入りて只一人、寢轉びて居ても起きて居ても、夜はしん〳〵と更けわたり、廊下の足音さへ、たまさかに聲のするは、夜蕎麥賣と按摩のみなるゆゑ、宗次郎は呆れはて、只一通りの文を得て、麁忽にいそぎ來りしを、後悔なして眠りもせず、心よからぬ其の所へ、しづかに廊下の足音して、しとやかに障子を明けて、座敷に入り、燈火を掻きたて、屏風を少しひらきし、枕元にそつとすわり、やな「さぞお寂しうございましたらうネ、堪忍しておくんなまし。」ト小聲にていへば、宗次郎は貌を上げ、宗「イヤおいらんか、何だか力なささうだネ、情人と喧嘩でも仕てお

出でか。」やな「イ、エ其樣なことならば、今まで此座へ來ずには居りませんわ。モウ〱鐘四ツ時分から、何樣に氣をもんだか知れやァ仕ません。」ト言ひながら、煙草を吸ひ付けて、宗次郎にあたへ、襠を脱いで衣桁へ掛け、牀の端へ乘りて宗次郎の貌を視て、只何となく愛敬を含み居る顔色、仇敵も忽ち心をひるがへして、味方となるべき其の風情、宗次郎は元來、戀しき亡妻お雪に似て、したひしお柳のことなれば、他人の看るよりは百倍の美人と見るならんか。されども以前ふり付けられたる同然のことありしを思ひ、柳川の心底もわからねば、言葉ずけなに樣子をうかゞひてうち解けず、折から、寅ノ刻の鐘はるかに聞え、二階を廻る拍子木の音、柳川は周章へて、○○○○○○、嬉しさうに莞爾と笑ひ、やな「一昨日の文を御覽なすつてから、私の惡かつたのを堪忍して、おくんなましたのかえ。」宗「ナニ最初から、お前のわりい事は少しもないが、何樣も私が知己も同樣の中で、お前の恥かしがるのを遠慮もせずに、度々來たのを、惡い事をしたと氣が付いたから、我慢をして久しく來ずに居た所へ、今夜不圖してお前の文を、魚半の内儀さんに届けられたから、折角わすれた心もちが、忽ち再發して、明日までも辛防が、出來なくなつて來たから、呼びに遣つた唄女もやめにする、呑みかけた酒も止して、魚半から直に駕籠に乘つて來たけれども、萬一人違ひの手紙ではないかと思つて、今も讀み直して居たのサ。」ト、左もおとなしき男の言葉に、柳川はいよ〱氣の毒なる風情に

て、やな「サヤ左樣でございましたのかえ、堪忍しておくんなさいましョ、それはどの深切で、來ておくんなましたのに、夜の更けるまで一人置き申してから、寔にモウお氣の毒ざます。あいにくと客人が落ち合つて其の中に。」宗「文さんとかいふ情人が、放さなんだのかえ。」やな「サヤ、其樣な事が有りますくらゐならば、未練らしくお前はんを、呼びやァ仕ませんよ。今夜來さしつた客人の中に、寔に氣むづかしいお客があつて、其の癖主人では、ひどく請の能い人さますから、腹でも立たせると、直に何の角のといはれるが、悔しいとおもつて勤めて居りイしたら、其の圖に乘つて、思入無理をいひちらかして、たうとう歸つて往きましたヨ。彼裏ならば、はやく腹を立たして仕まつて、此所へ來ればよ宜うざました。」宗「左樣かえ、それは骨折り損だッけネ、マア〳〵早く寐てお休みなせえ。」ト只何氣なき挨拶に、柳川は身をすり寄せ、やな「アレサ、貴君は私のいふ事を、茶にしてお在でなんしては悔しうござます。心がらとは申しながら、此間の文も傍輩に隱して、貴君の所へ屆く樣にするのには、何樣に氣をもみましたか知れませんわ。折角斯うして來ておくんなます位ならば、兎てもの事に過ぎた私の行屆かないのは、堪忍して、何卒機嫌よく、私にも安堵させてお呉んなまし。」ト、情を含んで宗次郎の、顏視て居る風俗なれども、實は我が顏へ今光照くせし燈火の、うつるを以て十分に化粧せし、實麗さを宗次郎に看せて、男の心を誘引ふ料簡か、自惚らしき所爲に似たれども、これ契情のお

もむき、色情を活業ふの人情なり、素人に比して評すべからず。此の時宗次郎は、柳川を思ふ情合の十分なれば、さしたる事もなき所爲をも、深く喜悦して、宗「はじめ否がりきつた私を、俄に呼ぶ氣になんなすつたのは、定めてさしかゝつた、用があるわけでもあらうが、縦ひ情人の仕送りを、言ひ付けられたからといつて、夫れを吟味だてをする氣もなし、また立派にお前の心當にならずとも、少しの力にはなる氣だが、マア何樣いふ料簡で、急に私の所へ文をよこしなすつたのだエ。」やな「なるほど、私が此地へ來るより早く、深切に尋ねて來て、おくんなました貴君を、

○柳川の言葉、すべて素人の語多し、いまだ馴れざるゆゑなり。

麁畧にばかりしてお歸し申して、今になつて勝手がましく、呼び申したいといふは、モウ／＼無理の此の上なしざますが、實は此地へ來ました當座は、見知り越しにも知つたお方に來られると、其の度毎に家内に居た節の事を思ひ出して、氣はづかしい悔しいこつた、友達や知つた者にまで、嬲りものになるのかと思ふと、來てくんなましたお客の善し悪しに拘らず、只知つたお方に出るのが、面目ない事だとばかり思ふ一途な料簡から、深切なお前樣をも、何卒來てくれさつしやらなければよいと、澤山さうに麁末にして、お歸し申したのを、今になつて後悔しても濟みませんが、考へて見ますと其の當座、此の二階中で貴君を噂をして、賞めない女郎衆はないやうざました、それを私は餘所々々し

く、放心として居ましたが、今日此の頃になつて見ますと、他人は深切と不實な事が、段々と分解かりてから、過ぎた事でも悔しいと、おもふ人の仕方が、耳へ這入つたり何かして、其の時分に傍輩衆さ貴君の事に付いて、意見を言つてくれました事まで、身にひし／＼と當りますから、なほ／＼呼び申したくなつて、兎てもモウお出でなます様にはなるまいと、悲しく思ひましたけれども、中場町の不動さまへ、心の中でお願ひ申して」ト いひながら、急に身をおこして、はるかにみなみのかたをふしをがむ。

○すべて柳川の言葉に、いつはりがましき事なく、以前は素人の、野暮なる娘の料簡ゆゑ、宗次郎をあしく仕たりといふ、分解もつともに聞え、たゞ其のうちに情人とは、離別もなさじかと思はする言葉のまじりしは、宗次郎を呼び逢はせんとするの意味なるべし。そは次の巻にて、情をこまやかになすものなり。

春色英對暖語卷之十　了

# 春色英對暖語 卷之十一 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春水 著

## 第二十一章

我もしかなきてぞ人に戀ひられし今は夜ぶかにねをのみぞきく、と詠みて男の心をやはらげ、再度睦み語らひし、貞女の事はむかしより、例にも引く大和物語の鑑あり。悋氣嫉妬を愼みて、男を守らば、自然恥ぢて浮氣も止むものなり。爰にお增はそのはじめ、郭にありて情人なく、父母を大事に奉公し、家に歸り母を養はん爲に、宗次郎の世話をうけて、母子しばらく安堵せしが、わづかの間も離別れて居る、やくそくごとか因緣か、何の道理なき口舌より、今は隔てしもの思ひ、程よく母には氣休めを言つて置けども、便りを案じて神だのみ、常々信ずる妙見宮へ、夜每々々に參詣し、今宵も同じ時刻なるが、拜みを上げて立ち歸る、路の眞中宗次郎に、ひしと行き合ひ顏見あはせ、増「オヤびつくり致しましたわ。」宗「妙見さまへ參つたのか。」ト、唯何氣なく言ひなして、行き過ぎんとする袖を

ひかへ、増「アレマア旦那、ちよつとお寄んなさつて下さいまし、何卒お願ひでございますから。」ト、いはれてさすが振り切つて、別るゝ程の科もなし、生得やさしき宗次郎なれば、立ち止まりて物和かに、宗「なんぞ用が有るならば、今少し急ぐから、明日でも宅へ行かうヨ。」増「左様でもございませうが、又入らつしやつて下さらないと、私ばかりか母人が、お案じ申して、夜もろく〳〵臥せりませんものヲ。何卒お否でも、此所でお目にかゝつたが私の僥倖、貴君の御不肖と思しめして、マアお寄んなさつて下さいましな。」ト、言ひつゝ眼には涙をうかめ、しよんぼりとせし哀れな風情、袖をはらつて別れもならず、據なく連立ちて、宗「サア夫れならば同伴に行かう。」ト、並んで歩行む戀の路、他所目に羨むお増のすがた、婀娜なる色香にさそはれねど、往來はそしる仇口も、互の心に種々の、思はく起る戀の情、隔たりしより遠慮がち、言葉すけなく氣の毒さうに、頓てお増の家に至り、敷居も高く、母親の、前に恥おつゝ、宗次郎、宗「母御御無沙汰を仕ました。」ト、奥へ通ればお増の母、母「ヲヤヲヤ旦那、マア何樣なすつたか、寔にモウ〳〵、お増と兩人で、毎日々々お噂ばかり申して居りました、それにお増が、我儘者でございますから、急度貴君のお氣に障つたことが有つて、此所へお出でなさらないのだと、私が娘に叱言を申してネ。」トいひながら、茶を汲んで出し火鉢をそなへ、母「アア引ヤレ〳〵、よくマアそれでも、今夜お出でなすつて下さいましたネヱ、ヱお増や、お前は其所で

お目にかゝつたのかえ。」増「イヽエ、妙見様の前でお目にかゝつて、無理にお連れ申したンだアネ。」トいひながら、手に持ちし珠數を、お祖師さまの前に置き、火鉢の際へ坐り、増「旦那、お前様マア、御用がございませうけれども、今夜は何卒御ゆるりと、お在でなさつて下さいましな、種々おはなし申したい事がありますから。」宗「左様か、實は急な用もあるけれども、邂逅の事だから、今夜ア此宅に居ようヨ。母御お世話でも、横町の鰻でも左様いつてくんなな。」増「オヤ私やア、今鄰家へお肴を誂へましたヨ。」宗「ナニ能いわな、兩方あつても邪魔にはならねえ。」トいふ節、お増は宗次郎の顔をぢつと見る。是れは確かに、柳川のことを聞いて居るゆゑ、其の身と柳川の事に引當て兩方といふが耳にとまりて、男の顔を視ると察すべし。さてこれより酒肴も來りて、久しぶりなる酒もりに、時刻もうつる其の中に、此のほど疎遠にせられし事を、彼此と母は宗次郎に言ひいだせど、お増は一言も恨みをいはず、よき程に會釋ひて、宗次郎の心をやはらげる様にばかりして居る。今夜夜通し手くだを盡して、つめひらきをするか、只情合にて引戻すかの、胸算用をすると思はれ、言葉ずけなに愛敬を含み、子ノ刻頃になりて、つひに臥戸に入りけるが、母も二階にて寐しづまり、世間も密となりし頃、宗次郎の機嫌を窺ひながら、お増はいふも氣の毒さうに、増「アノネ。」宗「なんだ。」増「ナニ申しますまいヨ。」宗「ナゼ、なんだか左様いふがいいわナ。」増「イ、エ、それでも萬一お前さんが、腹

をお立ちだと行けません物チ。」宗「ナアニ、斯うして來て見れば、則り可愛いお前の所爲だものチ、何でも腹を立ちは仕ないから、左樣いつて聞かせたな。」增「左樣ならば言ひますがネ、かならず氣に障てておトんなさいますなえ。」宗「ナニ氣に當ては仕ない、久しく來ずに居た中、情人が出來て其の方の世話になりたいとか、其の人の女房になりたいとか、いふのならば不承知だが、縱ひ何樣な事でも、此の身と離別れてさへ仕舞ふといふのでなければ、お前の望みの通りに仕て遣らうが、此樣に惚れて居るのを、止めてくれろといへば決して出來ねえ。」增「そんなら其樣な嘘許り。」トロにはいへど心には、嬉しさ限りあらばこそ、益いとしき情合は、深くなれども此のほどより、考へ置きし料簡を、いはねば誠も屆かずと思案して、增「ナニ戲言にも、情人の戀のといふはなしも仕はしませんヨ。斯うして半年近く、此所へお出でなさらない中も、一日の間も不自由のない樣にして、おくんなすつた御恩を、おろそかに思つてすみますものか、其のかはりに、夫れ程胸が一倍の惱みでございましたわ。」宗「そりやア左樣だらうが、此身が勝手で來ずに居たからといつて、女房や母を喰はせずに置かれるものか。」增「サヤ女房とはえ。」宗「この可愛い女房の事ヨ。」トお增の笑凹の所を、指にてちよいとつく。增「ホ、、、、、嘘許り、お內儀さんには、柳川さんとかがお成りのだから、所詮私が何と思つても、及ばない事でございますヨ。」宗「ナニ誰が其樣な事を言つて聞かせた。」增「誰がいはずと

も、自然に知れますわ、それにはじめをいつて見ますと、其のおいらんの所へお出での途中で、雨の降つたのが、私の慊倖になりましたのだから、柳川さんの方が、縁が先手でございますわ。それだから、私は、おとなしくして居て、お前さんにまるで捨てられさへ仕ないければ、宜うございますョ。」

宗「ナンノ捨てゐくらゐならば、相かはらず世話もしては置かねえわナ。尤も久しく來ないから、お前の耳へ種々なことが、聞えもして居るだらうが、實に終始は、お增を女房にと極意を定めて置くから、當時の所で付合ひ、女郎買ぐらゐをしたと言つて、必ず麁情く思はねえがいヨ。」ト、いはれてお增は涙を落して、枕に俯き泣いて居る。宗「オヤ女郎買には往きながら、此所へは來ねえといふのが悔しくつて、泣くのカエ、エこれサ。」增「イ、エ左樣ではございませんヨ、お前さんが內證に、苦勞してお在での中で、私たちが斯うして遊んで活業して居つては、冥利が盡きもするし、萬一お前さんが、御本店の事や何かで、彼是澤山苦勞をなさるやうな節になつても、少しは私が心ばかりでも、お前はんの手足にならないでは、恩返しも出來ず、またお側にも居通されない樣になつては、他の思はくも悔しうございますわ。」

お增が斯くのごとく言ひいだしたも、其のゆゑはいかにといふに、當時宗次郎の本店、相場ごとにかゝりて、大層なる損毛し、世間の評もあしく、かへつて出店の宗次郎より、多分の金を本家

へ入れ、其の外借金を引請けて、濟方などして宗次郎の身上も、餘程のいたみとなり、世間へのかざり、意地づくの樣になりて、柳川の許へ通ひ、金を費す事までを、くはしく聞きたるから、女の狹きこゝろより、後々の用心宗次郎を深く思ふに付いて、安閑として居まじき由を、遠慮しながら漸うといふゆゑに、その言葉しかとわからずと察したまへ。

宗「なるほど、内外のことをくはしく聞いて、深切な心からは、さぞ取越し苦勞も仕たらうが、まさか福德屋の身上に、ひずみが見えたからといつて、お前たち母子を養ふほどのことに、差支へも仕まいと思ふが、それとも夫婦の情合を思つて、始終のためと、心付いたことが有るならば、マアはなして見なな。」 增「オヤ嬉しい、お前はんがいつもの樣に、肝癪をおこさないで、左樣仰しやるとまことにもう／＼、安心いたしますわ。」

ト、これよりお增は、わづかなりとも、宗次郎の身の費をいとひ、婦多川の唄女となつて、末々相應の益に立つべき、所存をかたりければ、生得花美を好む癖あるゆゑに、其の望みにまかせ、お增を立派なる唄女となして、樂しみとせば一しほならんと、承知するは、まだ歳若き料簡のみならず、此の節は柳川に、ふかく心うつり、又一方には、身上もいたみし折節なれば、まづお增のいふにしたがひける。

増「ア、レサ柳川さんと、お間違へのかえ。」宗「ばかァ云ひなさんな、此の嬢にますかはいいものがあるものか。」増「實正にまた、遠くなるのを幸ひに、來ずにお在ででは否でございますョ。」

## 第二十二章

淵は瀬と、變るならひといひながら、思ひがけなき縁不縁、すゑ遂げられぬ戀ならば、最初から結ばであるべきものを、儘にならぬが定まりか、嫌ひし人が好きになり、好いたる人が否といふ、程ならずともはじめの様に、戀ひこがれぬに異しけれど、添る間に又も慕ひより、はなれぬ中と結ばる縁の、あるを思へばなか／＼に、男女の縁の善し悪しは、他見で評のならざるものか、再説お増は宗次郎の、末を案じて深切に、はなれがたきを堪忍して、鶴が岡なる和歌町へ、唄女となりて出でし所、入り來る客の評判よく、忽ち中裏の指折と數へられ、繁昌いはん方もなし。それより後は宗次郎の、心ます／＼浮薄になりて、柳川の色香をのみ寵愛しけるが、柳川もまた、文次郎の事は如何せしか、此の頃は一向宗次郎を、切にもてなしければ、元來年季も長からねば、宗次郎もしきりに、戀情のつのりし節ゆゑ、竟に柳川を身請して、閑かなる新道へ家をこしらへ、婢女一人を付けて置き、お增にかへたる遊び所と、なして樂しむ男の心、以前にかはりてあやしけれ、殊には柳川も、過ぎし娘の憂き苦勞を忘れて、義理を捨てたるごとく、宗次郎に身を任せしぞ、本意なき人情ともいふべきか。同

じ身分と案えたる娘お勢、せ「お柳さんもゥお起きかえ。」ト、裏口の障子をあけて顔さし出し、りう「イヤ大そう早く化粧が出来たねえ、何所ぞへお出でか。」せ「イ、エ、何所へも行きはしないがネ、今朝はもゥ先刻起きたわ。お冬が買物に遣つたから、例よりも餘程早いよ。」せ「左様かえ、私も毎度よりか早く起きたから、お前を起して、遊ばうと思つて来たンだァネ。」りう「それは大きに御苦労様だつけネ、何卒お遊びなすつて下さいまし。」せ「オホ、、、、、、、ホヽサ遊ぶのを恩にかけるのではないが實正にお前は、友達にお困りぢやァないか。」トいひながら上る。りう「サァ此座へお出でな、ネ、ヽ友達といへば、裏のお秋さんは何様したかお聞きか。」せ「ア、昨日聞いたがネ、何様しても田舎の分限の方へ遣られるとサ。」りう「オヤ〳〵可愛さうだねえ、新さんとやらの行方は知れないのかえ。」せ「ア、何所か、遠くの田舎の方へ、金の都合を仕に行くといつてネ、出て行く節にお秋さんに、小遣なんぞも置いて行つたさうだけれども、両親が邪見だからネ、なか〳〵其の位な事に頓着はしないトサ。」りう「オヤ左様かえ、慈愛さうだねえ。お秋さんの心中は何様だらうネ、浮世に苦労のないものはないといふけれど、其の中にも、一旦斯うと思つた人の行方が知れない、在家が知れても逢はれないといふ苦労は、十人寄つても一人有るかなしだわネ。」せ「左様でもないよ、能く聞いて見ると、各々に戀しい人に別れて居るものや、據なく縁を切らないければならない、といふ中も在るわネ。

りう「ア、それも左様だがネ、別れて居ても縁さへあれば、情人に逢はれるといふのは、まだ頼みがあるけれど。」ト、過ぎし事を思ひ出してか、涙を眼にうかめ、りう「まことに私の様な悲しい身の上は千人に一人もあるまいと思ふわネ。」ト、膝にホロリと置く露は、萩よりも猶しなやかに、只何となく哀れなり。せ「オヤ〳〵、何を思ひ出して其様に大仰だ。そしてマア、涙をこぼすほどの事が、お前の身にもあるかねえ。旦那といへばあの通り、好い男でやさしくツて、萬事に氣がお付きなり、斯うしてお在でだから、何にも苦勞はありさうもないもんだがネ。實正に長屋中で、お前の事を羨ましがつて居るわ。私なんぞが、お前の旦那の様な人の世話になるのだと、それこそはモウ〳〵、何にも他に望みはないヨ。」りう「他見でお看ならば左様だらうがネ、又私の身になつて看ると、斯うして居るのが本意でもなし、今になつて看ると、兩方に義理があつて自由にもならず、夫れを身勝手にした所が、思つて居る人の心も知れず。」トいふ折から、大根を馬に付けて賣り歩行く馬士が、新道を通りながら鼻唄を唄ふ。

〽今は何様いふ心で居るか、聞いてくんなヨ先の胸。

せ「オヤとんだ辻占だネ。それぢやァお前も、今の旦那の外に深く思つて、お出でのお方があるのかえ。」ト聞かれてお柳は心づき、なみだを拭ひ、りう「ナァニ左様でもないが、過ぎた事を考へ出して見

ると、各に悲しいことや、はかない譯が有るものだねえ。」ト、他の噂を身に引當てゝ、しみ〴〵とせしお柳が心は、何ゆゑなるぞとたづぬるに、

初編に記せし彼の文次郎は、兎に角に薄命のことのみうち續き、便りにおもふ母親も病死して、勘當のわび事の綱も切れ、文次郎は田舎の親類を心當に、母の縁なればとて頼もしく、下總の小見川といふ所へ行きて、久しく音信も絶えて、縁の切れたるが如く、さてお柳の身は、兩親共に亡き人となり、今は伯母をもつて、母とも里ともたのみとすることなれば、此のほど宗次郎に身を寄せて、一度郭を出でさへすれば、又文次郎にも逢ふ手段もあるべしといふ、伯母の意見にしたがひ、一ツには憎くもあらぬ宗次郎なれば、まア今の身となりしなり。しかれども折節文次郎の事を思ひ出し、善し惡しにつきて、心を痛めるおもむきと察したまへ。

「そして生死も知れはしないから、毎日紅白粉をつけて、髪かざりを仕ながら、心は尼にでもなつた氣で居るわ。」ト、前後亂るゝお柳の風情、和合い同志とてお勢は咎めず、倶に愁へを含みつゝ、

「イヤそれでは先達、私は人に聞いたが、お前の本宅にお在での時分に、情合のあつた文さんとやらが、何様かおしだといふ噂があつたが、其の後少しも便りはないのかえ。たしか船中で怪我をおしではないかえ。」「アヽ、それだから、其の時それ限りになつて仕まつたかと思ふやうな事もあり、

又其の後逢つたといふ人もあるから、寔に氣に懸つてならないヨ。」トはなしの折から、表の方に人の音して、男「ヘイ少し御免なさいまし、お柳さんのお宅は此方でございますか。」りう「ハイ誰人でございます。」ト、中敷居を明けて貌見合はせ、りう「オヤ〳〵安さんかえ、寔にお珍らしいねえ、マアお這入りなさいな、よく此所が知れましたネ。サア此方へお上んなさいな、誰も居ませんよ。」安「左樣なら一ッぷく呑んで參りませう、御免なさいまし。」ト表裏遠慮し、氣を配りながら宅に入るは、文次郎の友達にて、お柳も別けて心易くせし人なり。りう「誠に久しくお目に懸らないネ、今日は何樣して此所をお通りだ、此の頃おやア此の近所にお在でか。」安「ナアニ則ち以前の所だがネ、今日は些と頼まれた事があつてネ。」ト、何かお柳に用あり氣と、見てとるお勢は如才なく、せい「私やアまた往つて參るヨ、お前さん御ゆるりとおはなしなさいまし。」ト裏口より出でて行く。後にて彼の男は懐中より手紙を出し、安「これは文さんが、賴んでよこしましたが、何れ後日お返事をして、遣つておくんなせえ。兎てもモウ以前の樣な、中になりてえといふ心でもあるまいが、先月田舍から歸つて來て、店をもつと直に煩ひ付いて、寔に困り切つて居るのサ。」ト、聞くよりハットお柳が胸、ドキ〳〵しながらまた悲しく、りう「エ、文さんが、田舍から歸つたとえ、嘘ぢやアありませんか。」安「ナニどうして嘘をいふものかネ。しかし文さんも左樣言つて居るのサ、誠に久しく便りもせずに置いたから、死んだと思

つて居なさるだらう、縱ひ何樣いふ身になつて居やうとも、少しも恨みはないが、深く言ひ交した事もあり、それぎりにしても義理がわりいから、何卒不沙汰にして居た難儀のわけや、何かをはなしてくれろと、賴んでよこしなすつたのサ。」

トこれより文次郎の、難澀してありし事など、くはしく物がたり、當時濱崎町といへる場末に假住居なし、殊に病氣にて居る由をこまやかにはなし、宗次郎などに聞かせじと遠慮して、手紙を渡しそこ／＼に立ち歸る。

りう「左樣なら安さん、寔におそう／＼で。」ト、送つて出づる門の口、何時の間にかは宗次郎、裏口より立ち入つて、火鉢の際にある手紙を、手にとり上げてくりかへす。お柳は後をかへり見て、ハツト思へど心をしづめ、笑顏をつくりて、りう「オヤお前は、ハア何時の間にお出でなすつたか、さツぱり知れましなんだヨ。」そう「びつくりしたらう、情人のお文が來て。」りう「ハーイサ、思ひもつかねえ時分になつて、手紙をよこしましたわ。」ト、手づよく平氣で答ふれど、さすがに當座の氣の毒さ、自然と顏を赤らめて、淚ぐむこそ道理なれ。

作者曰く、そも／＼お柳の所爲を、淨瑠璃本の娘や、合卷のお姫さまと、同じ心得にて評をしたまふ事なかれ。たとひ情人のありといふとも、流れにしづみし後の身は、素人とならべて論じが

たし、又二心ありといふにもあらず。たよりなき女の身には、種々にうつり變るも、やむ事を得ざる所爲と察し、善惡共に婦人ほど、あはれに悔しきものはあらじと、深く心にとめてよまれたまへかし。

春色英對暖語巻之十一了

# 春色英對暖語　巻之十二　梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水著

## 第二十三章

昔松葉館の瀬川は、美麗にして孝女なるのみかは、風流にしてまた勇氣をかね、後に悟道を得て、佛門に入り、再法庵といふ小庵をかまへしが、其の壁に多くの歌を書きつけて、自他のいましめとなししが、其の身の邪淫戒を、業のごとくせし昔をとがめて、笑ふ人ありしかば、

池水に夜な〳〵影はうつれども水もにごらず月もけがれず　　瀬川

右の如くに詠みて答へしかば、笑ひし人の恥ぢて感服したりしとぞ。されば閨房の秀として、婦人ながらも男子に勝る決斷の才智ある者、今も猶なしとはいふべからず。彼のお柳は文次郎の送りし文を、宗次郎に押しひらかれ、少し面目なき様なれども、また隱すべき由もなければ、まづ宗次郎の言葉を待ちて、臨氣應變の答へをせんと、煙草をくゆらして傍に扣へ居たりければ、宗次郎は文を讀み終

つて、宗「お柳、この手紙の返事は何樣する料簡だ。」りう「何樣すると被仰つても、私の勝手な返事が出來ます身ではありません。」ト、涙を眼に浮めて溜息を吐いて居る。宗「其の身の自由になるならば、マァ何樣せうと思案を仕て居るのだえ、かならず遠慮なく心の中を言つて視な。此の手紙の旨趣では近頃は音信不通にして居た樣子、最初の約束を違へて、今の身になつたのを恨む文體で見れば、少しの間でも勤めの身、殊に此の手紙の人ゆゑに、身を沈めた噂も聞いて居るから、此身が眼をかすめて不義いたづらをしたといふ理もなし、いはば當時でも勤めの身、實正の女房に仕て居ないから、まんざら此身が恥をかく、といふほどの事でもないから、何樣でも相談づくに仕て遣らうぢやァねえか。」りう「たとひ過ぎた事にしても、マァお前はんの氣に障る理で御座いますのに、左樣お言ひなさいますと、寔にモウ何とも申されません程、面目なうございますが、何卒堪忍なすつて。」宗「いとまをくれろといふのか。」りう「イヽエ、なに左樣では有りません。」宗「インニャ左樣だらう、又其の心でも無理とは思はないから、正直に言ひなな。」りう「なんぼさばけて仰しやつても、自惚らしうございますが、私の樣なものでもお前はんが、慈愛いと思つておくんなさらないければ、郭を出して此樣に樂をさせて置いても、おくんなさりも仕まいし、私もまた負惜しみの樣でございますけれども、他のお方と違つて、實家に居た時分から、彼是と思つておくんなさつたお前はんだから、心を入れ替へて斯う

して、世話をしてお貰ひ申したので有りますものヲ。」宗「サア其所は分つて居るから、此の手紙を觀ても、愚癡は言はないツナ。しかしお前は何とか、返事をせずばなるまいと思ふから、何樣せうといふ料簡だと聞くのだわナ。」りう「サア其のやうに仰しやるから恩を忘れた樣な心と、思召すかは知れませんが、今私の心を白地に申して見ると、實はお前樣に堪忍して貰つて、」宗「堪忍しろとは、是れぎりにして女の方へ、遣つてくれろといふのだらうノ。」りう「ナニ左樣してお貰ひ申したからといつて、私の極本意といふのではありません、理窟を言つて視ますと、彼の人の勝手身の不祥で、問ひ音信も久しくせず、私には十分の憂き苦勞をさせて、今更何も不足をいはれる道理はありませんが、友達の來て咄しましたのを聞いて視ますと、段々の薄命で、遠くの田舍まで流れ歩行いて、便りをする事も出來ない程の難儀が續いて、命が保つたのが、まだしもの僥倖、今此土地へ歸つて來て、店を持つより早く病氣付いて、友達の世話になる許り、看病する人もなくつて、今日が今日に困つて居ますと聞いてから、正直は過ぎた最初の約束や、何かの事を思ひ出して、慈愛さうでなりませんヨ。」ト堪へず涙にむせかへれば、宗次郎は勘辨して思案を定め、宗「惚れた此方の勝手には、少し否な心持だが能く／＼考へて看ると、女の身にとつては、實に仕にくい義理だらう。愚癡をいへば、此身をまんざらに思はないからと、口で言つても心の中は、元木に增るうら木なしと、いふのだらうと察しもする

が、マア斯うして不自由を、させない樣にして置く此身が方を、いとまを貰つて、一旦約束した男の難儀を見繼ぎたいといふ心は、實に女の達引ともいふ仕方だと、賞めはするものの、其の始め振り付けられてさへ、五度七度通つたほどの執心で、今は朝夕此の通り、和合くして居た此身がこゝろを、俄にさつぱりと改めて、今直にひまを遣るから、些とも早く彼方へ往つて、遠慮なく介抱をして遣るがいい、併し正直未練がのこるぜ、此の美しい顏が見納めだと思やア、寔に鬱氣いでならねえ。」ト、いはれてお柳は身をふるはせ、しがみ付いてと思ふ程、嬉しい男の心いき、こゝに至つて文次郎の、在るを却つて恨みわび、邪魔な樣にもなる心、今更宗次郎に離別るゝは、何より惜しき胸の中、迷ひて前後正體なく、涙にくれて居たりける。

嗚呼宗次郎が言葉、男らしくなき言分と笑はれるか、又人情と推量したまふか、只放心と讀みたまはば、決斷の惡きやうなれども左にあらず、正直未練が殘る、此のうつくしい顏が、見納めかと思へば鬱氣ぐとは、女を蕩かす好男の極祕にて、今離別れる女まで、斯くの如くかはいがらる用心の、一言を出せし事、野暮に賞めていはば宗次郎は、君子の風ある人と評すべきか。

斯くて宗次郎は、下女の歸りしを幸ひに、酒肴を調へてお柳に與へ、又小遣の金も持ち合はせたるを遣はし、お柳の伯母を呼びて、家財までを殘らず與へて、お柳にいとまを遣はせしは、類まれなる

男氣なり。此の時お柳は文次郎の事を、深く心に忘れず活業し居たる所へ、友達の持ち來りし文といひ、思ひ染めたる男の大病、爰ぞ兼ての實情の、盡し所と覺悟を極め、宗次郎の前を、體よく遑を貰はんとの底心にて在りし折から、丁度來りし宗次郎の、情も深く意味を含みて、遑をくれたる丈夫に、さすが女の情なれば、その情ある計らひと、言葉の艶優に心亂れ、離れともなくなりしかど、早宗次郎は清潔く、切れ離れたる挨拶して、別れの杯をなしければ、胸苦しき程未練が發れど、爲方なくも氣を取り直し、宗次郎に恩義の禮を述べて、涙をば止めけれども、せめて此の夜を俄に立ち去るおもむきを、近所の者にも告げ、跡にて宗次郎と其の身の、惡しき噂や評判をされまじき爲に、いの友達のお勢お秋などを呼びて、宗次郎の難有き志をも、物語りていとまごひもなしたき由にて、其の夜は此の家にとゞまりけるゆゑ、宗次郎は立派に別れて行くを、お柳は奧齒をかみしめて、歎きを隱し見送りつゝ、さて友達の娘をよび寄せ、俄に此の家を仕舞ひ、伯母の許へ行くはなしより、宗次郎の情深き計らひを、涙ながらにはなしければ、せい「オヤ〳〵、それではモウ明日は直に、伯母さんの方へ行つてお仕舞ひのかえ、折角此樣に馴染んだのにねえ。」あき「そしてマア宗さんのやうな、能い旦那といふは滅他にないヨ、惜しい事たねえ。」せい「ア、そして何所の國にか、以前の情人が手紙をよこしたのを見て、腹も立たずにうつくしく遑をくれて、その男を見續いで遣れなんぞと、深切

にいふ人が在るものかねえ、寔に勿體ない様だわ。」あき「寧そ文さんとやらは、モウ止しにして宗さんの方におしナ。」せい「すホ、、、、、、、、左様もなるまいけれども、私でもお秋さんでも、宗さんとは知己になつて居るし、お酒も同席に給べたり何かして、何様しても贔屓に仕たい様だが、お柳さんの心では、最初に惚れた男だから、文さんとやらの方が、能いとお思ひかも知れないが、今の咄を聞いて察ると、何様も宗さんの方が慈愛いねえ。」あき「エお柳さん、文さんとやらに深い義理もおありだらうが、宗さんの嬉しい心の所に免じて、今までの通り斯うしてお出でな。」せい「ようく考へて御覧よ、今もお前の口からお咄しの様に、やさしい男といふが、モウ一人と在りはしないヨ。マア其の文さんとやらは、何様なやさしい好男か知らないが、私ならば宗さんの方が、何程かはいいか十倍だと思ふわネ。なぜならば、お前が最初から、情人の在るのも承知で通つて、振り付けられても腹を立たず、程過ぎてお前が文を送つて呼べば、又お前の所に通つて、身儘になる樣にしてお上げで此様に樂にさせて置いてから、氣に障る事が出來ても、やかましく言はずに綺麗に離別れて居ながら、未練が起るの、美麗しい貌の見納めだのといふ愛敬を言つて、色氣があるかと思へば行儀よく、大丈夫して別れて、正然とお歸りおやァないか、私やァ今お前がその咄をおしの節、聞いても涙が零れたわ。」あき「ほんに惜いしお方だねえ、私は宗さんの様な、旦那の世話になるのだと、何様な情人でも

離別れて其の人の世話になるわ、ねえお勢様左様ぢやアないか、お柳さん必ず後悔おしでないヨ。」ト意見も友の好身にて、遠慮のないのが頼もしけれ。其の後お柳は義理を強くし、彼の文次郎の許へ尋ね行きし所、一時ばかり先に病死して、はかなき體の中へ行き合はせ、悲しくもまた悔しくて、涙も出でず呆れしとぞ。

## 第三十四章

淵は瀬と、變るたとへは有りながらも、只一日の榮枯盛衰、夢よりも猶はかなき身の上の浮き沈みは、古今に珍らしからぬ事ながら、かの宗次郎は本家の損失、借財其の外の散財に卷添へせられて、竟に出店を立てがたく、本店と倶に分散し、親族ちり〴〵になり行きて、宗次郎はわづかに覺悟して遍立寺門前といふ所に店を借り、知己の人に出で會はざる用心なし、當分何といふ活業もなく隱れ住み、昨日に變るはかなさは、筆にも記かれぬ形容なりしが、斯くなる事と兼てより、推し量りしにあらねども、お増は和歌町に唄女となりて、思ひの外に全盛の、達者ともてはやされ、座敷のたゆる間なかりしゆゑ、次第に都合よく、引越し行きたる當座のみ、宗次郎の見繼を貰ひしが、其の後には却つてお増の方より宗次郎の方へ、少々ながらも身上の、助けとなる様に小遣を送り、折節の音信さへも、自身に行き通ふ事も稀にして、今零落れてはお増の心に、一日も油斷のならぬ世帶氣質となり、

出精して宗次郎を養ふ所爲にのみ係り、日を過せしが、いかなる因果の業なりけん、母娘とも大病を煩ひ、久しく宗次郎の方へ見繼ぐ事もならず、宗次郎もその時節より、胸を痛める持病發りて、だんだんに病重り、藥の手當もおもふに任せねば、日に增して難澁し、哀れさ言はんかたもなく、近所の情にやう／＼と、一日々々を送りつゝ、命のあるを悔むほどの、困窮とこそなりにけり。

花の雪雨に成り行くうらみかな

看官宗次郎のはかなきを見て、本意なく思ひたまふらん。去れど人界の喜怒愛苦、定めがたきが常ぞかし。奢りを愼みて、災害を防ぐ心がけこそ專一なるべし。さても宗次郎は、いまだ運の盡きたるにあらざりしや、さしたる藥も用ゐしことなけれど、又日を重ねて快きかたにおもむきしが、お增の方はいよ／＼重病となり、中々人事をも、わきまへぬほどなりと聞えしかば、其の身のやまひが治るに付けても、途方にくれて居たりし所へ、門の戸を音信れて、女の聲「モシ少し御免なさいまし、アノ宗次郎さんの宅は此方でございますか。」宗「ハイ此宅でございますが、誰人でございます。」女「左樣被仰るのは宗さんざますネ。」ト、戸を明け家内に入る姿は、いとも幽艶しき花の笑顔を、御納戸の高祖頭巾に半分隱し、上り口に腰をかけて、女「旦那、お前はんマア何樣して急に、此樣な姿におなんなすつたのでございますえ。」ト、少し涙聲にて言ひながら、頭巾をとる顏見て驚く宗次郎、宗「オヤオ

ヤ誰だと思つたらお柳か、マァ此間へ上るがいい。」ト言ひながら、頭巾をとりし頭をながめ、「ヱヽ、なんだ、比丘尼になつたのか。」トいへば、お柳は足の塵埃を拂ひて、宗次郎の側ちかく膝をすゝめ、りう「私が此の姿になりましたのは、お前さんに暇をお貰ひ申して、伯母さんの方から、直に文次方へ參ると、二時ばかり以前に、死去つた所でございましたから、お前さんへ不實な願ひをして、義理を立てようとした甲斐もなく、またお前さんに對しても、面目のない譯でございますが、今になつて見ますと、却つて心の底には、潔白なやうに氣が安くなりましたわ。實正にお前はんに、お別れ申すと其の間もなく、此樣に髪を剃つたのでございますわ。」宗「左樣か、なるほど其の後伯母御に途中で出合つた節にも、其樣なことを言ッたつけが、實は何をいふかと、氣にも留めずに仕まつたが、それが實說ならば、定に力落しだなァ。」ト、いはれてお柳は悔しくも、言ひ說きかたき過ぎし日の、義理の離別の意氣地だてを、何樣言ひ直して宜からんと、暫時俯き居たりしが、りう「アノゥ其樣なことを申したならば、お氣にさはるかも知れませんが、今日斯うして私が來ましたのは、深い心で參つたのだから、それを一ツの功にして、過ぎ去つたことは捨てて仕まつて、何卒私の思つて居ることを言ひますから、マァ聞き濟んで下さいましな。」宗「なんの事だか知らねえが、今此の通り零落して、見る影もねえ身分だから、聞き濟むの濟まねえのといふ、勢ひもねえから、何を言つても言ひ榮えも爲ま

いが、マアはなして聞かせなナ。」りう「ナニ外の事でもないがネ、お前さんのやさしいお心に引かされて、一旦誓つた事では有りますけれども、義理といふ字をわきまへずと、約束を違へまいと思つたばかりで、死ぬほどお別れ申すのが否なのを、思ひきつて出て参ると、今申す通りの事、それから直に斯ういふ身にはなりましたけれど、何卒して御恩を報じたいものだと、朝夕にお前さんの方の事を心にかけて、何ぞ私の身に叶ひさうな御用もありませうかと、他所ながら御様子を、うかゞつて居りました中に、夢を見る様なお家の成行、寔にモウ／＼悔しいほどお案じ申しましたけれども、なかなかはかない女の身で、何と思つても及ばないことだと、悲しくばかりなりまして、せめては何卒お前様の、お行方をお尋ね申して、寸志の御恩がへしをと、諸方をお尋ね申して、やう／＼と知れましたわ。」ト、辛苦に窶れし男の顔を、案じ入つたる深切は、自然と顔に顯はれて、眼にもつ涙の露含み、化粧はせねども生得の、雪の肌の艶々と、照りそふ顔に黒髪を、おろしてあれど何とやら、まだ散りうせぬ花の香の、ゆかしくこそは思はるれ。宗「なる程、感じ入つた氣性の生得も有るものだ。先だつて文次が文をよこした節に、此方も侠客らしく、立派に暇は遣つたけれど、つまる所は、手前に一番狂言をかかれたのだ、いま／＼しい不實な女だと、悔しく思ふこともあつたが、今日斯うして零落の此身を態々、尋ねてくれるのを考へて看ると、惚れたの慈愛いのといふは、はやくいへば浮薄な穿鑿

で、ほんの表上の色戀で、娘子どもの當座の花、その素人の所爲をば、さらりと違へたお前の仕方、文次が難儀困窮を聞いた節は、何不足なくして置いて遣る此身を捨て、零落れた男へ達引をする心で、暇をとつて出て行つて、その男が死ねば、盛りの花を無理にちらした其の姿、傾城奇人傳とやらにでも、載せられる行跡だが、賞めることも出來ねえ今の身の上で、お前に逢ふも外聞のわりい事サノ。」りう「イ、エ左樣ではございませんヨ、お前さんの御身上のわるくなつたのは、御本店の所爲でございますと、世間でも噂をして居ますわ、そしてマア情深いお前さんだから、何かに付けて御損の行く事が重なつて、今の樣にお困りのでございますヨ。」半「左樣思つてくれれば、恥も少ない樣なものの、先づ一通りの者はいくぢのねえとか、働きがないとかいつて誹るのサ。」りう「他人は何と申しても、私は一旦お前さんに、苦界の年季も拔いてお貰ひ申して、また其の上に我儘な願ひも、聞いておもらひ申した大恩は、たとひこれから後には、死んでものをいはずに仕まひましても、跡を弔ふまね事も出來て、此の姿をしましたも、糺して見れば殘らずお前さんのお蔭でございますから、何卒私の罪亡ぼしに、お否で有りませうけれど、何ぞ相應なお益に立つて、恩返しの出來ます樣にして下さいましな。」ト、勤めせし身といひながら、約束したる男の方へ、半途に行きし行爲などを恥ぢて、さすがに惚れたる情をも、言ひそゝくれし女の誠、尼の姿はいとしけれ。半「實に嬉しい心さしだ、けれど

も此のとほり困窮のなかだから、なか〳〵彼是と相談も出來ず、また獨身のさみしいのを、朝夕氣を付けてもらへば、それに越した倖はないけれども、恥かしい事だが、活業も出來ない仕儀だから。」りう「ナニネ、その困つてお在でなさるのを、くはしく聞きましたから、二度とはお目にかゝり悪いのを、堪忍してお貰ひ申して、推して參つたので有りますヨ。それだから先刻も、お氣に障るかも知れませんがと、前書を言つたンでございますわネ。」ト、いひつゝ懐中より取り出すは、花の緣の色も濃き、桔梗袋の巾著に、入れたる金を包みし儘、男の前にさし出し、りう「昔ならばお前樣の、二日か三日の小遣にも、足りないので有りますけれども、マア御病氣のしやんと、快氣るまでの足しになすつて下さいましな。私もお前さんの看病をして上げながら、些たァ手助けになる事を仕ますわネ。そして此のお金もお前さんに貰つた新道の宅を片付けたり、私の著物を挪つたりした代を、集めたのでありますから、他人のものぢやァ有りませんヨ、これほど有りますが、少しの間はいいぢやありませんか。」ト、

　包みし紙を押しひらけば、二十兩にも餘りし金、女の行爲には丹誠の、思ひやられて神妙なり。

宗「そんならば、僅かの間世話になつたのを恩に著て、これ程までに零落れた此身を、わざ〳〵尋ねて見繼ぐ心で來てくれたのか。」　りう「サア體よくいへば何樣か、私が義理と實意を盡す樣でありますす

けれども、心底いへば世を捨てたすがたに似合はず。」トいひながら、顔を赤らめて後は小聲になり、

りう「なんの因果かお前様の、あくまでやさしいお心が、したはしくつて、朝ばん戀しいなつかしいりが、忘れることが出來ませんから、斯ういふお身におなんなすつたのを、不實な樣だが私の身には、幸ひにして、來たので有りますヨ。」ト、いふは猶さら奥ゆかしけれ。

○さて是れからが柳川の、戀の實の極意にて、素人のおよばぬ古今の奇談、また增吉がおとらぬ實情、すべて婦人をことごとく、辰巳につどへて新手を盡す、英對暖語の總卷軸、五編にいたりて滿尾とせり。

又曰ふ此の草紙第三編の卷末、豐月亭のつゞきも、五編目に說きしるせば、此の四編の卷中に說き殘したるを、宥したまへと願ふものなり。

春色英對暖語卷之十二　了

# 英對暖語五編序

恵の花の咲き添へしより、彌其の香を高くせし、梅ごよみの四編揃ひ、辰巳の園に色ぞ濃き、三十冊の新案は、能くも穿ちし狂訓亭、實に先生にあらずんば、奈何ぞ是れまで作らんと、讀む度ごとに人々の、評判有りしは眼前、又もやこれに輪をかけて、英對暖語と題せるは、同じ續きの十五冊、全本四十五卷となる。是れぞ人情一家言、三都は勿論海内に、噂を纒穂の梅の外題か、流行るも書賈の爲永と、旨味を特より知るものは、花の御江戸に虚名をうる、外に類なき田分の水上、文盲の棟梁たる、

淺草堀多原の醉客

平亭主人銀鶏

# 春色英對暖語　巻之十三　梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水　著

## 第二十五章

元亨釋書に、光明子沙門を戀慕して、浴室に窺ひし事を記したり。俗書には千人の垢を清め、功德によつて阿閦佛を、眼前に拜みたまひしと、媚びてしるす佛法の、いつはり多き俗説をも、信ずる者はお柳をもつて、佛戒を破りし惡人と誇るならんか。その野暮なる偏屈を捨てて、能く人情に通じなば、お柳を當世稀なる、節義の美人と賞すべし。されば宗次郎の、難澁になりしをいとほしく思ひて、尋ね來りし所在は、縦ひ色情の迷ひありといふとも、利慾によらざる俠客の業、くれ〴〵も狹き料簡の、評をすることなかれ。既に其の日も入りはてて、殊にちら〳〵雪降り出し、寒さは肌を切るが如し。柳「オヤ〳〵、雪が降つて來ましたヨ。」宗「左樣ヨナウ、困つたもんだ、さぞ寒からうノ、マア火でも澤山おこして溫らせよう。」柳「ナニ私がおこしますヨ。」宗「それぢやア此の爐の中へ、炭を

入れてくんな、イヤ炭があればいいが。」柳「炭屋へ左樣いつて來ませうかネ。」宗「エイヤ、今まァ發す程はあるヨ。其の中に炭屋が來るだらう。」トいふを聞いて、柳「オホ、、、、、、夜炭屋が來ますかえ。」宗「オ、眞ニ、日が暮れたツけノ、餘り放心れて夜晝が分別らなくなつた、アハ、、、、、、。」柳「オヤ何におうかれなすつてエ。」宗「此の可愛らしい愛敬に放心れてサ。」柳「アレサ謔許り、何故愛敬があります物か、今日來ますのにも、頭上が氣になつてなりましなんだけれども、髮の生えるまで來ずには居られませずか。」宗「ナゼ。」柳「なぜとお言ひだけれども、病氣でお在でなさるといふ事を聞きますと、モウ／＼半時安堵いては居られませんから、思ひ切つて驅け出して來ましたけれども、嘸見るも否であらつしやるだらうと、悲しくなりますわ。」ト、恥かしさうに消玉の手拭の新しきを、帽子冠りにして笑ひながら、柳「これおやァ田樂を燒く、女木偶の樣でございますねえ。」ト四隅を見廻し、柳「鏡は何所にありますエ。」宗「ナニ鏡があるものか、女が居ねえ家だものヲ。」柳「オヤそれでも。」宗「硝子鏡もないヨ、そして鏡を見ねえでも能いわナ、相變らずその素顔の美麗しいのは少しも申し分はないわナ。」柳「アレ又、直に其樣な氣休め許りお言ひなさるから、憎らしうございますわ。」宗「ナニ／＼氣休めな物か、實正だァナ。左樣して居ると、些とも姿を變へた樣には思はれねえ、それで最う少し、巾の廣い帶を〆めるといいナウ。」柳「アノウ帶も衣類も、伯母さんの方へ遣つて置い

たのは、まだ餘所にありますから、今でも取りかへす様に出来ますヨ」トいふ時しも、隣家の老女、戸を明けて、老女「表へ行くが用はないかえ、オヤお客がありますのかネ。」宗「すヤ姑さん何度有りがたう、何卒それぢやア、序に向うの藤本へ、酒と肴を三人前程、あつらへておくれな。そして佐倉炭を一俵持つて来いと、薪屋の家へ左様いつてくんなせえ、それから。」トいひながら、上り口へ出でて銭を二百文ほど隠して、老女に渡し、宗「これは雪が降るのに、お頼み申すから賃銭だヨ。」老女「ナニナニ、何様してこんなにマア多分は。」宗「アレサ、此間中から賃銭が、大分借りになつて有るわナ、又上げるけれども、まアそれを取つて置いておくんなせえ。」ト、無理に小遣を取らせるも、元来の旦那風が失せざる故、今貧窮の身となりて、他人を頼みて買ひ調へ物をなし、又其の使賃などを遣はすは、行き届く人の癖にて、金を溜めて番をして、臨終する有財餓鬼には決してなき事なり。老女「ハーハー左様なら、マアお預り申しませう。」ト、戴きながら出でて行く。梅「すヤ、私が今夜居ましても、近所で何とも言ひは仕ますまいかネエ。」宗「そりやア言ふのサ、アノ奥の獨身者の宅へは、大そうに美い女が来て居る、羨ましい事だと、評判をするには違ひないから、成るだけ他人の目に懸らない様にしてくんなな。」梅「なんだねえお前さんも、私が此様な姿で居るから、否がつて其様な事ばつかりお言ひなさる、だヨ、今に直に髪の延びる様に、願がけでも仕ますから、少しの間堪忍しておくんな

はいナ。」宗「ナニサ左樣思ひなさんな、實はお前がいよ〳〵、此身と同居に居てくれるのだと、寔に嬉しい樂しみがあるョ。」柳「噓ばつかりネ。」宗「うそぢやァない實正サ。」柳「オホヽヽヽヽヽ宜い加減なことをお言ひなさいまし、何が樂しみになりますえ。」宗「エ其の樂しみといふは、マア當時の所では、故人路考の女鳴神を、側に置くやうな心もちで居るし、又だん〳〵月代が延びかゝつた所では杜若の女清玄の、すごく美麗しいのを視る樣だらうと、それが樂しみだョ。」柳「イ、ェ何樣して、それこそ愛想をお盡しなさる基でございますわ、いが栗頭上になつて御覽なさい、何樣に憎らしく見えるか知れませんわ。其の節はマア、何樣したら宜うございませうねえ、寔に苦勞でありますョ。そして女鳴神は坊さんではありませんわネ。」宗「ナニサ、切髮で居るのは知つて居るが、先刻御納戸縮緬の、頭巾を冠つて來た時の姿は、まるで路考が女鳴神で、花道を歩行く風の樣だつたから、左樣いつたのョ、何でも角でも、迷はせに來たお前が、後悔をするだらうが、堪忍しなせえ。」柳「ア、レサ、○○○○○○○○○○○○。」トいふ中に、鄰家の老女が歸り來りて、返事を云ひ入れて、其の家に歸り行く。酒肴炭なども持ち來り、これより二人が差向ひにて、久し振なる酒盛に、樂しみ左こそと思はれて、いと閑やかに、話聲さへ聞えずなりぬ。柳「宗さん、目をお覺しでないか、モウ〳〵大雪になりましたわ、私ゃァ小用に參つたら、路次を歩行くに、足の甲まで雪が隱しますョ。」宗「オヤ

オヤ左様か、それは困つたらう、まだ降るかえ。」柳「ア、降るか位の事ぢやァありません、細格子の様なのが、さツ〱と降つてるますョ。」宗「ドレ、それぢやァ起きて見ようか、ア、詳し、縁側の雨戸を明けて、庭を見るといふのでないから、詰らないナウ。」柳「それは何様でも宜うございますが、眞暗なのには困りますねえ。」宗「エ左様ョ、それだが今此の窗を明けると、明光が少しはとれるョ。」柳「すヤ〱、鄰家の方に窗がありますのかえ、私は昨夜は些とも氣が付きませんだッた。」宗「ナニノ、長屋並だと、此所に窗所ではないが、此家は一番奥で、はづれが稻荷さまだから、横手に窗が明けてあるのだわナ、それでも雨か雪が降りでもした節は、家内が他家よりあかるいから、マァそれだけが徳用サノ、アハヽヽヽ、儚いわけぢやァないか。」柳「ナァニ、又今に何様でもなりますわね。彌〱お前様の運が、ひらくのが遲ければ遲い様に、其の節は覺悟をして、無理にもお金をこしらへますわ。ドレマァ火をこしらへませうね。」宗「ドレ此身が打ち付けて遣らう。」トこれより二人して、朝飯の支度など調へて、火鉢の際に向ひ合つて安坐り、お柳は清姿艶麗たれども、手拭をもつて首を包むぞ、本意なき心なるべし。柳「お前様マア、薄命におなんなすッてから、最初の間に、さぞお困りなさいましたらうね。」宗「左様サ、貧乏するのも氣樂でよからうと、茶にしてかゝつて見たが、朝夕の事には餘程よわつたョ。何の造作もなからうと思ふお飯が、一度でも味く出來たことはなし、お菜と

いへば何を煮るにも手重しか、寔に泣き出しさうな心持だッけ。それはいいが、昨夜はさぞ薄著でさぞ寒かつたらうナウ。」柳「イ、エ寒くはありましなんだが、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇に、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」宗「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」柳「〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」宗「マアそりやア何様でもいいが昨夜の殘り肴で、お飯を給べて仕まふ方がいいぢやアないか。」りう「ア、左樣いたしませうね。」ト莞爾笑つて、宗次郎の貌を見る。宗「ナゼ他の貌を見て笑ふのだ、此身の顔が何樣かしたのか。」りう「イイエ左樣ぢやアありませんが、久しぶりで一膳で、お飯をたべるのが嬉しいから、笑つたンでございますわ。」宗「何卒末永く、左樣思つてくれればいいが、働きのねえ此身だから、直に愛想が盡きるだらうと、それが苦勞だア。」柳「お前さんさへ、お見捨てなさらないきやア、死んでも私の心は變りませんヨ。」宗「それでも、情人が手紙をよこしたら、又直に逃げて行くだらう。」ト、いはれてお柳は顔赤らめしが、忽ちに涙を浮めて氣の毒さうに、柳「その事をお言ひなはると、面目なうございますが、それは私が慾に掛つて、元を忘れて不實な奴だと、いはれるのが恥かしいと、狭く料簡をしたばつかりで、大事なお前樣の側を振り切つて、出て行つたのでありますわね。其の時でからがお前さんは、

私が義理づく許りで、別れると推量して、おくんなすつたおやァ有りませんか、何卒其の事は言はないで下さいましな。此度斯うして來ましたからは、一旦此の世を去つたも同然な姿を、又も勿體ない佛樣に、罰を當てられて死んだら、其の時までの事、何でも最一度お側に居てと、思ひ詰めて來たのだから、堪忍しておくんなさいヨ。」ト火ばちの中へ書くのゝ字、男の心の角とれて、まるくもなるらんふぜいなり。

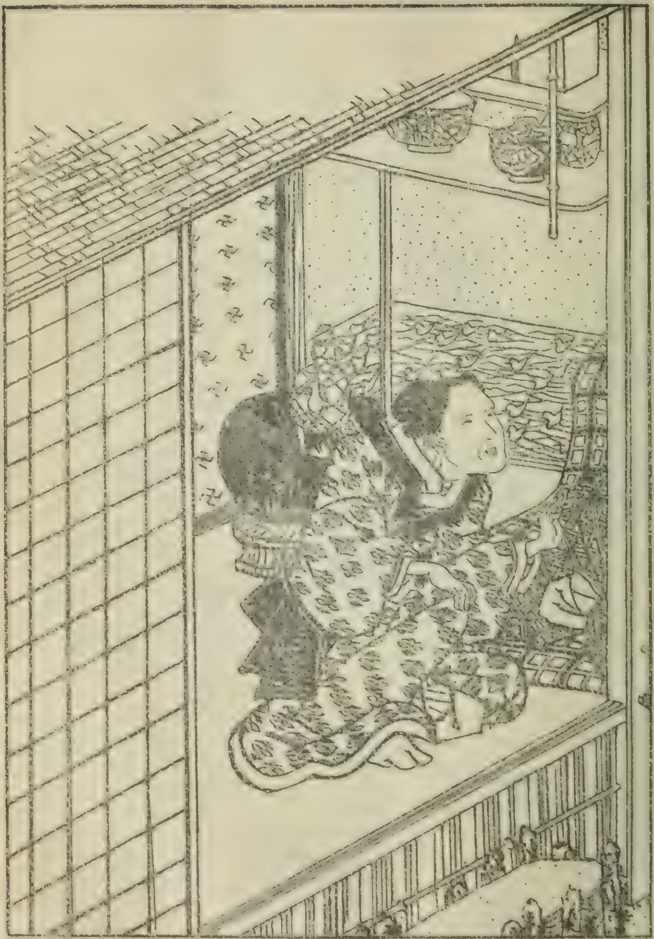
## 第二十六章

逢ふは別れの始めとは、知れた事でも悟られぬ、人種々のもの思ひ、多かる中に戀の路、片時はなれぬ濃い中を、問談合の上ながら、別るゝ辛さいかならん。男の爲とて氣を勵まし、側を隔たる覺悟の健氣も、親身はさすが不便さに、止める心も慈悲の情、お柳の伯母は淚をうかめて 伯「ナウお柳、お前の承知でする事だから、かまふ理はない樣なものの、能くマァ思案を仕直して見なヨ。萬一それが間が惡く行つた日には、折角苦界を早く出離れた甲斐もなく、殊には場所も急迫いといふ家へ、再度の勤めを永くする樣だと、何樣もあんじられる事ではないかえ。永い月日にお前の身に、間違でも出來た時は、草葉の陰の兩親へ、此の伯母の付いて居たといふ、言ひわけが立たないといふは義理一遍、實は此身が產んだ娘と思つて、心便りにして居る私が、何樣も心細くッてならないヨ。」トいひつつ膝に露集、さも悲しげなる其の姿、見ればお柳もあきらめし、心をよわらし倶なみだ、しばらくし

をれて居たりしが、りう「伯母さん、お前の心の中では、私が是れまでの行狀といひ、又此度の料簡をさぞ浮薄な心だと笑つてか、腹を立つてかお在でだらうねえ。」伯「ナァニ左樣ではないが、年も行かないお前が、餘計苦勞をするから、病氣でも出ないければいいと思つていふのだョ。それに一旦思ひ込んで、姿をも替へた身で、また女郎衆になるといふのだから、佛さまへ對してもわるからうし、友達衆や知己人に聞えても、をかしな噂をされは爲まいかと、案じもするわナ。かならずわるく聞きなさんなョ。」りう「アイナニ、わるく聞きはいたしませんョ。それだがね、私が今までの仕方を、餘り心の定まらない女だと、お前に思はれるが恥かしいから、その理害を言ひますがね、アノゥ素人で、家内に居た節の心持と、餘儀なくつても女郎になつた節の氣とは、是非とも料簡を改めないければ、抱へた主人も、自分の上も立ち難いから、爲方なしに否な行狀も、譃僞りもいはないければ、又其の土地で恥をかいたり、不自由をする事が出來るから、堅い約束をした事も、勤めの爲には不實を承知で竟他の人へ實らしく爲ないければ、身分が立たないから、彼是噂をされるやうな事があつたり、憎まれも仕ましたがね、正直にいへば文さんなんぞも、家内に居た時分と違つて、私の身の上を思ひやりもなく、來ても無理な事を言つて、私に困らせたり、泣かせたりする樣な事ばかりで、少しも早く身儘にしてくれる料簡もなければ、自分が出精して、可なりに家でもこしらへる氣になつてくれれば、

私も苦勞をする張合があるけれども、友達と諸方を遊び歩行いて、活業もせずに田舍へ行つて了つて久しい間音信もせず、心細くもなり、萬事の都合がわるいに付いて、今の宗さんが最初、深切にしておくれのを、文さんへ義理を立つて、振り付け切つて居たけれども、又あやまつて文を上げたらば、直に來ておくれで、始めの事を咎めずに、其の晩からして私の身の事といつたら、何一ッ不足のない樣に氣を付けて、其の上年季も拔いて、十分世話をしておくれの所へ、アノ文さんが田舍から歸つて來て、宗樣のこしらへて、私を置いておくれの家へ、文さんが文をよこして、其の文を宗さんに見られた節の、私が面目なさは、マァ何樣な心もちだか、今思ひ出しても、總身へ汗が出る樣でありますよ。」鳥「なるほど左樣だらうヨナウ、其の時に宗さんのなさり方といふものは、勿體ない事だから、ならう事ならば、文さんの方は手切にしてと、私がお前に意見をしたを聞かないで。」りう「ナニネ、その時私が、風跡のいい宗さんの方へ付く樣な氣だと、又宗さんがそれほどに、私を慈愛がりもしないから、思ひ切つて別れて、文さんの方へ行つたンでありますわ。」鳥「其樣ならば、其の時直に尼にならふと、此の宗さんの方へ來ればよかつたのにナウ。」りう「オャ何樣して左樣なる物かネ、其樣なしだらのない氣性の、宗さんぢやァないヨ。私もまた其樣に、氣の定まらない事をしたのではないわネ、實のない事をいふやうだが、一旦姿をかへたのは、文さんの追善とやらを、弔ふばかりでもないヨ。

柳再度



あの通り立派に暇をおくれの宗さんへ對して、私がまご〳〵しては外聞が惡し、兎てもモウ思ふ樣にならないから、坊さんになつたんでありますわ。それだから姿は變へても宗さんの恩は、何樣も考へれば考へる程、有り難くツて懷かしくつて、忘れられないで居る最中に、思ひも付かない宗樣の薄命を聞いて、悲しい中にゆかしい念が、屆く時節が來たのだと、思ひ付いて此の家へ、驅け込んで來たんだから、無理ぢやァないと思つておくれな。」伯「ハイ〳〵御尤もでございます、ハ、、、、、、何でもマァ坊さんになつて、世を捨てたお前に、還俗をさせるのみか、身を沈めて見繼ぎたいとまで恍惚れさせるから、餘程よりか如在のない宗さんだナウ」りう「オホ、、、、、、伯母さんが憎らしい事許りお言ひだヨ、實正に私が宗さんに、くるめられて嬉しいから、再應奉公をする氣になつたといふ樣な事ではないヨ、中々宗さんも、私を左樣させて能いといふ、心持は少しもないヨ。何でもかでも左樣してから、宗さんに精を出させて、是非元の通りの、身上の人にして上げないければ、悔しくつてならないヨ。」伯「ナニそれだといつても、宗さんのお家の潰れたのは、親御さんと兄御さんの方で、大變に商ひの御損があつて、其の卷添に合つて、わるくなつたのだといふ噂だから、おまへの爲では無いぢやァないか。」りう「イヽエそれは左樣だがネ、去頃中のことは兎も角も、當時斯うして私が宗さんと、同居に苦勞をするのは、恩になつた恩がへしの、心もちで達引に、再度髮を生やしたの

で、兩方が惚れたの戀しいのといふ、意氣な事でも何でもなく、私の心は宗さんの、零落れてお在でのを、何樣ぞ見繼いで先達中、我儘をした身の言解、罪亡ぼしにもならうかと、及ばずながら私の持つて居た物を、宗さんに入れて暮して居るのに、世間の人は種々の事をいつて、宗さんを笑ひぐさにしたり、私の事を狐だの狸だのと、惡くいつて洗湯へ行つても、他人が私に斧後指をさして噂をするから、何卒その人達の貌を、見返す樣にしたいと思ひ込んで、お前に話すのだわネ。此間中から宗さんに、其の事を少し噺し出して見たがネ。」伯「左樣するが宜いとお言ひのかえ。」りう「イ、エ何樣して何樣して、宗さんのお言ひのにはネ、ナニ世間で何と言つたからといつて、氣にかける事があるものか、いらざる他嫉妬だァ、貧乏して居ても、此の裏ャ表の者に世話になりは爲まいし、身上を仕舞つて喰ふや喰はずの中へ、其方の樣な美い女が、驅け込んで來るのは本望だ、悔しくは僞をしても見せるがいいと、左樣言つておくれだァネ。」伯「アハ、、、、何だヨ此の孃は、此身の前に其樣に自惚とか、惚惚とかをいつてからに、それぢやァ思ひやられるナア、鄰家で惡くもいはれる筈だヨ。」りう「オホ、、、、、、アレサ伯母さん、お前だから遠慮なしに、ツイ左樣言つたのだわネ、堪忍しておくれよ。」伯「ナニ謝る事もない、壯年中は其の位な氣でなければ、損だァナハ、、、、、、ア、引笑つても淚が零れてならない、それは左樣と、何樣しても先刻左樣いつた所へ行くのかえ。」りう「ア、宗

さんには、極めて仕まつてからに、左樣いはないとあの通り、實意の深い氣だから、たとひ此の儘朽ち果てればといつて、私を奉公になんぞ、出しておくれではないから、何卒お前が二見屋の家へ行つて、委しく私の身分の事を咄しておくれな。戀ケ窪に私が居た時分から、二見屋の主人が知つてお在でだから、隨分相談をしておくれだらうと思ふヨ。」ト咄の所へ、宗次郎が歸り來たれば、お柳も伯母も涙かくして知らぬ貌、男の爲にかくの如く、丹誠を盡すお柳の意氣地、豈佛戒を破りしとて、罪とするに至らんや、當世稀なる娘といふべし。

春色英對暖語卷之十三　了

# 春色英對暖語　卷之十四　梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水　著

## 第二十七章

娘分「ヲーヤ此の子ども達は、何様したもんだヨ、棧橋へ出て遊んで居てからに。」坊さんの小じよくおきん、おぎん。きん「ナニサネ、いま十助どんが、遊戯におほきな海老を釣つたといふから、見に来たんでありますヨ。」ぎん「アレサ言譯して遊んで居るとも、杉の間のお客の方へも行つて見なよ、アレお八重どんの聲で、お銀を呼ぶぢやァねえかヨ、それまたお狐さんが出て来たこれは十四五にて、いおといふ子の仮名おサァ〳〵はやく引込ね、なといふのに。」ト娘ぶんに叱られて、笑ひながら棧橋より、鋪石を飛び〳〵引込む折しも、此の島屋の棧橋へ、乗り付ける一艘の家根船、お菊は、「オヤお客だヨ。」トいひながら、船の中をこゞみて覗くは、かねて心當りのお客を、待ち居る折からなればなるべし。船宿の若衆が、河岸番と挨拶などは畧してしるさず、もつともなじみにあらぬお客と見えて、お菊も知らぬ人なり。さてこの客も、杉

の間の座敷を見物のよしにて、此の土地へは始めてなれば、萬事初心のおもむき、船宿と娘分まかせの様子と思ひの外、二見屋のお柳といふを名ざしにて、藝者は乙吉小六などと、別けて評判宜きを選み、すべて温厚にして、如才なきとりまはしは、奥ゆかしくも思はれ、此の大榮樓の娘分、お百お夏お増をはじめ、女中のおせきおよしおいそなどが、風情を見聞きして、感心するくらゐにて、なかなか恥かしからぬ人品なれども、只島屋へははじめてなれば、酒の席を中座して、海の景色に心をなぐさめ、安房上總の山をながめ、富士の絶景筑多千葉浦、其の外西南の遠山をたづねて、教へらるゝはおとなしく見ゆるも憎からず、但し俠客の男女には、向かぬ風ならんか。娘きく「オヤお力どん、お柳さんは何様したンだえ。」りき「アイサ其の事で來ましたわ、今實はネ。」きく「アレサ、お柳さんに左様言つておくれ、いつもの様に我儘をお言ひのは、今日はお止しなせえ、マア何でも私に欺されたと思つて、おもひれうつくしく化粧をして、早く來て禮をお言ひと、左様言つておくれ。」ト笑ひながらいふは、今來りて料理を好み、酒をもとめ酌とる娘を、お柳と名ざしせし客の好いたる風ゆゑに、お菊がかくの如くいふと察したまへ。されば二見屋の女中も、それを推量して、急ぎ歸り行きしが、程なくお柳を送り來る。そも／＼此のお柳は、彼の柳川が事にして、一度世を捨て佛門に入り尼となり、また恩義を報いん爲に、佛の戒めを破り、宗次郎の貧家に尋ね行き、久しき開其の儘に止まりしが、

兎に角宗次郎の病氣治り兼ねて、彼の二十兩の金も遣ひなくして、途方にくれる時節になつて、漸うと全快しけるが、其の頃又増吉母子は、長き煩ひに必死の惱み、幾度となくありければ、苦痛にこつて夢中のごとくなり、近所の見る目も、氣の毒なる程にてありしかば、宗次郎のもとへ便りもせず、宗次郎も心にはわすれねども、其の身の病の治りかゝりし所へ、お柳が尋ね來りて、二三月立つと再發して、他をかへり見るいとまもなかりし中に、お増の方は、其の母親の數年來、不通になせし先の夫の種にて、産みし男の子お増の爲には胤がはりの、兄源兵衛といふ者尋ね來りて、母とお増の大病を見て、種々と世話をなし、源兵衛も其の頃は都合宜しからず、砂村の方に假住居して在りけるが、當時母の極難澁を捨て置かれず、相談の上母子共、彼の假住居へ引き取りて、實意の看病怠らず、此所に月日を過せしとぞ。斯くて宗次郎の方にては、病氣の治りし後、お柳は男の爲に身を捨てて、再度の勤めは二見屋へ、七十兩の給金にて、唄女とこそはなりしなり。さて島屋の娘分、お菊がとりもちて、座鋪をかへたるさし向ひ、お柳は聲も他聞を憚り、りう「宗さんよく來ておくれだねえ。」トいひながら、宗次郎の衣裳の立派なるを、倩と見直して、柳「そしてマア、あれから後少しは、都合のいい樣になりましたのかえ、お目にかゝつて嬉しい事は何よりだけれども、お前樣がまた此樣に、程のいいなりをしてお出でだと、又少し氣になりますねえ。」トいへば、宗次郎は莞爾笑ひ、宗「まア／＼

それは些とも案じなさんな、兼てお前の賴みの通り、此身の爲だから、約束を違へてなる物か、何でも世間へ恥かしくない樣になるまでは、お互に辛防して、問ひ音信も仕まい、時節顏を見る樣だと、樂しみにはなるけれども、却つて未練がおこつて、兩方が爲にならないと、思ひ切つて居たわけだから、なか〳〵お前が此の身になつて、拵へてくれた金で、衣裳を著るの洒落るのといふ、奢りは仕ねえわナ。」柳「ナニサ、衣裳をおこしらへのは、隨分宜いけれども、それでまたお前さんが、何所かお出でだと、私が我慢して逢はずに居る甲斐がないからサ。」宗「ナアニ、何樣なおもしろい所が在つたといつて、遊びになんぞ行くものかな。今日來たのは、お前にも悅ばせる事があつて、急に出て來たのだヨ。」ト懷中から胴卷を出し、鼻紙帒の小菊の紙を、枕元にひろげ金をならべて、宗「サアこれで、當時借りの方を付けな、それとも少しは殘つて、お前の小遣にでもなればいいナウ、二十兩あるが此樣な事ぢやア行けねえか。」柳「オヤ私の方の事よりか、お前樣家業の都合は能いのでありますか。」宗「エ商賣はまだ、多分利潤もないけれども〳〵、何樣もお前を斯うして置くのが、氣になつて〳〵ならないから、何卒鍬で引ツくり返す樣な事をして、些とも早く此所に置きたくないと思ふ中に、不圖した事で進められて、荏柄の天神樣の、富の札を買つたらば〳〵。」柳「花とやらでも當つたのかえ。」ト笑ひながらいふ。宗「ナニサ千兩のに當つたのヨ。」柳「オホ、、、、譃許りお言ひなさるな、何樣し

て其様な事が。」宗「アレサ、嘘だやアねえわナ、それだけれども丸札を買つたのでないから、三割だけの金だわナ。」梅「オヤ實正にかへ。」宗「左様サ、それでも二百五十兩たらず取つたのだヨ。」梅「オヤ〳〵嬉しいねえ、それから直に此方へ來ておくれいかえ。」宗「ナニ當り番付の出た翌、直に來て咄さうと思つたけれども、金を請取らない中は、何様間違つて、樂しみにさせた甲斐もない様に、なる事があるまい物でもないと、大事をとつて咄しにも來なんだが、今朝金を請取ると直に驅け出して來たがノ、此場で一ッ思入があるが、それを一番當てゝから、お前を本宅へ連れて行く様にせうか、商ひの方はマア段々にして、お前を出すのを前に仕ようか、その相談を付けようだやアないか。」梅「ナアニ何様でモウ私やァ、此土地へ來たもんだから、兎てもの事に一度は、花々しく全盛をしてから、他人にも嬉しがらせて、お部屋でも惜しがるくらゐに、金もまうけさせて、引込みたいヨ。またお前様も、新法家業の所で、折角お金が手に這入つたのだに、辛防拙く私が側に居たいなんといつて、商賣の邪魔になつては行けないヨ。私はまア死んだ氣になつて、もウ少しの月日は辛防して、お前様の顔を見ずに堪へるから、其の氣で家職の都合をよくなさいな。」トいふ時宗次郎は、お梅の顔を白若詠めて居る。」梅「アレサ何だねえ、私のいふ事の返事もおしでなくつて、何を白眼み付けてお在でなさるンだえ。」宗「ナニ白眼み付けは仕ないが、久し振で逢つたら、又別段に美麗しく見えるから、料簡な

逢つて來たのサ。そして髪がよく其樣に、結はれる樣に早く延びたナゥ。」柳「ナニまだ、箕ヤかもじで出來るのでありますわ。」宗「左樣か、何樣してもお前には、唄女風の方が似合ふ樣だ、おいらんの節よりか、なほ人が惚れるだらうナゥ。」柳「アレサ、其樣な事をお言ひでない、縱ひ誰が何といつてくれようとも、モウ／＼何樣しても、お前樣で一生苦勞をする覺悟で居ますから、慈愛さうだと思つておくんなはいョ。」宗「ナニ幾まで斯うして置くものか。」宗「ナニサ、それが辛防でありますわネ。」宗「何樣して／＼、辛防が出來るものか。」柳「アレサマア實正に。」宗「エ。」柳「辛防して、以前の樣な立派な御店を、拵へる樣にして、精出しておくんなはいョ。」ト、いと睦まじく語らひける。

## 第二十八章

再說宗次郎は、漸々に僥倖直りて、商ひも繁昌し、再問の店は說法津といふ所にて、炭薪の問屋なりしが、此の度不圖も二百兩餘の金子を得て、彼のお柳の許へいたりし所、家再興を勵まされて、ますます出精の心になりたれども、增吉の方も、捨て置かれる義理にあらざるゆゑ、また／＼行方を尋ねしかども、兎角にわかりかねて、只母子大病の薄命を、近所にて知つたるのみ、病中に緣者のはからひにて、田舍へ引きとられしとか、慥かには知らずといふ者ばかりなれば、いよ／＼案じらるれども、爲方なく、まづ思ひ立つたる金まうけの筋あれば、下野の方へおもむき山を買ひて、材木を切り

出す事にかゝり、彼の地に至り兼てより心得たる所爲なるか、思ふ通りの値うちよかり、猶餘計いふき材木を切り出しければ、大きによろこび、萬事拔目なく、川出しの差圖をも計らひて、其の身は只一人にて歸り路に、駒木の諏訪へ參詣し、松戸より柴又村へ出で、帝釋天王に詣でんと心ざしけるが、途中にて日の暮れかゝりしかば、心急ぎて柴又村へかゝりし所、はや黄昏れて田甫には、耕作する人もなく、ねぐらにかへる羣烏、はるかに二ッ三ッ遲れ行くなど、哀れに見ゆる折しもあれ、何時の程よりか付け來りけん、二人の惡漢横路より、前後に立ち塞がり、△「オイ此の道を通るにやァ、酒代が入るぜ。」●「たんとは入らねえ、懷中のを殘らず置いて往かッし。」ト立ちかゝられて宗次郎、びッくりせしが氣を勵まし、悪「なんだ、珍らしい事をいふナァ、一日置きに通る路で、酒代も茶代も出してたまるものか、人を見そくなつたかべら棒めえ。」△「なんだ此の野郎めえ。」●「エ、面倒だァ、たゝき殺して仕まへ。」ト、いふより早く前後から、組みつき蒐るを引ッぱづし、くゞり拔けるを引き戻されて、よろめく足元、△「べたこ。」ト、其の儘突き倒すを、倒れながらに宗次郎、腰の脇差拔打に、拂へば跡へ飛び去る白徒、背後にかゝりし一人が、何とかしてや足なすべらし、傍の溝へ踏み込みながら、猶も帶脊を放さぬ強氣、宗次郎は一生懸命、逆業ながらも脊後の方を突けば、運よく白徒の手先を丁度突き破る痛みに、●「アイ引ッ。」ト手を放せば、得たりと突立つ宗次郎、前の方より木の枝にて、なぐ

りかゝるをうけ損じ、額をうたれて目もくらみ、又よろ／＼となる所へ、溝から上る一人が、足くび摑んで引き倒す、一人は前よりつゞけ打ち、叩きすゑつゝ懐へ、手をさし込めば宗次郎は、氣をはげまして盲打ち、振りひらめかす刃には、さすがの二人もてあまし、元來彼等は刃ものもなく、出來心の盜人なりけん、思ひの外に甲斐なき働き、去れども二人と一人ゆゑ、やゝともすれば宗次郎、危くなる事度々なりしが、一聲叫んで切り込む白刃、眉間をはつりて一二寸、さつと流るゝ血汐の樣を、見るより一人も氣を奪はれ、ひるむ透間に宗次郎、片息になつて逃げ出せば、それ逃すなと我猛者の二人、無二無三に追ひかくる。宗次郎もなか／＼に、再度の勝負は思ひもよらず、命から／＼足をはかりに驅け出したる向うの方、森の間に茅の家根、七八間見えけるゆゑ、心嬉しく走り付き、柴戸の明いたる家を幸ひ、こゝを便りに驅け込みしが、氣を張り打ち合ふ節とは違ひ、心のゆるみに勞れをおぼえて、敷居に爪突き俯きに、どうど倒れて起きかねれば、此の家の内にも驚天し、居所を飛び退く一人の女、女「アレエ兄さん引／＼。」ト、呼ぶ聲聞いて宗次郎は、氣の毒に思ひ漸うと這ひ起きて、宗「ア、モシ／＼、何もお驚きなさる者ではございません。何卒水を一杯呑ましておくんなさいまし、惡漢に出合つて逃げて參つた者、決してお家へ御迷惑をさせ申しは致しません。」ト、いふも苦しき息切れの樣子、風情と言葉に、左もあるかと推量すれど、油斷をせず、手燭をさし出し遠くから、

明りに透し詠めつゝ、女「今水を上げますから、マア其所へ腰でもお掛けなさいヨ。」ト、いふ物ごしは藪ならず、鶯の音の麗はしき、聲許りかは姿まで、茅家の住居にそぐはぬ風俗、茶碗に水を汲み來り、片手に燈火をさし出しながら、怖々水を盆に載せて、女「サアお上ンなさいまし。ヲヤお前さんは宗さんでございますネ。」宗「ヱ、、左樣いふお前は增吉だネ、ヲヤ〳〵何樣してマア此所に。」增「私よりかお前さん、マア何樣して此所へ、お出でなすつたのでございますえ、サア〳〵此方へ上つてお くんなさいヨ、何樣にお前さんの事をお案じ申したらう。アレサ何を考へてお在でなさるこたねえ、今夜なんぞお前さんが、夢にもお出でであらうとは思ひませんから、今日は母御さんが、お前さんの安否をお聞き申しに出て往きましたわ。サア此間へお出でなさいな、何にもお心をお置きなさる樣な宅ではありませんヨ。」宗「左樣かナウ、何だか夢を見た樣な心持で、まだ此身には合點が行かない。」增「ホンニ私にも、前後を何樣お噺し申したら、お前さんに能く分解るだらうかと、考へて居りますわ。今マア何樣して其所へ、驅け込んでお出でなすつたか、ヲヤ耳の際に血が付いて居ますヨ。」ト、明りにてよく〳〵見て、增「ヲヽ〳〵、コレ肩の所にも血が流れて居ますわ、氣味のわるい。」ト四邊を見廻し、增「何所も怪我をなすつたのぢやア有りませんかねえ。」ト案じて宗次郞の、顏をながめ溜息を吐けば、宗「ナニ〳〵、切られた覺えもなし、怪我もしない積りだが。」ト其の身をかへりみて、宗「ア、

しかし、ひどくぶたれる事はぶたれたヨ。」ト、これより盗人に出合ひたる始終、切りぬけて逃け來りし事までを、くはしくかたり、懐中ものなどを取り出して改め、宗「ア、引ひどい目に逢つた、能くそれでも何かを、取られずに濟んだのが、思へば不思議だヨ。」増「さぞ怖うございましたらうねえ、あぶない事をなすつた。お前さんは寔に、柔弱だと思つて居ましたのに、二人なんぞと、よく切り合ふ事が出來ましたねえ、劔術を知つておいでなさるのかえ。」宗「どうして／＼、何を知つて居る者か、そして切り合つたなんぞといふと、大層に働いて、芝居を見る樣に、立派な事だと思ふだらうが、中中其樣な事ぢやァねえ。」増「オヤ夫れでも、先は盗賊だから、則り拔身で出ましたらうのに。」宗「ナァニ、何樣してそんな立派な盗人が出て堪るものか、ほんの出來合の追ひ落しだと見えて、喧嘩じかけの荒かせぎサ。向うに刃ものがないから、犬おどしの脇差を拔いて、たゝき散らして逃けて來たのだ。そりやァいいが、知らねえ家に永く居られも仕まい。」ト、立ち上るを増吉は引き止め、増「アレマァ、今夜は此所で、夜を明かしてお出でなさいな、今ッから何樣して、お歸りなさられるものでございますものか、不用心でございますわネ。そして知らない家と仰しやるけれども、此の宅は私の母人さんの、實正の子の宅で、私の爲には胤がはりの兄さんが、私と母人を置いてくれるのでございますから、何にも御遠慮な事はありませんヨ。先刻お前さんが、驅け込ンでお出でのとき、誰だか知れず

怖かつたから、所爲と兄さんが近所に居る風俗をして、兄さん〳〵と呼びましたけれども、實は兄さんは新川の親方へ、歸參の出來る樣にと、帝釋さまへ願がけをして、毎晩水をあびて參詣に行きますから、明日の朝でなければ歸りませんョ。」

トこれより母子の長病にて、何事も夢の樣にありし事、兄の世話にて砂村に引込み、其の後帝釋天へ、病氣の平癒を祈らん爲、また此の村に良き醫者の在るよしにて、知己の者の世話にて、此の所に假住居するのも、兄源兵衞といふ者、當時浪人中の凌ぎなれば、物入すけなきやうに、斯かる田舍に母子三人時節を待ち、病氣もやう〳〵五七日以來全快して、今日ひさしぶりにて、湯にも入りたる由を告げければ、宗次郎はやうやく安堵の思ひをなし、扨その身の上の事は、ほどよく噺し聞かせ、當時だん〳〵と、仕合もなほるべき次第を告げたれども、お柳の事はさすがに明かしかねて、隱し居たりしが、實に一年餘りの別れなりしかば、互に盡きぬ問ひ答へに、早くも亥ノ刻のかねの音、野風に吹きおくられて、物寂しく、まがりがねの渡舟を呼ぶこゑ、木精にひびきて遠くきこえ、しん〳〵とこそなりにける。

梅「ヤ私は先刻から、氣が付きましなんだが、お前樣空腹はありませんかえ。」宗「ナァニ松戸で少し早かつたけれども、夜食を多分喰べたから、腹は減らないが先刻の一件で、寔に勞れたョ。」梅「ホヽ

二左樣でございませうねえ、それぢやアモウ直に、お休みなさいましな。私が足でもさすりませうから、左樣なさつたらば、些とはお草臥が拔けませう。」宗「ア、それぢやア寐かしてもらはふが、草臥の拔けるよりか、力が拔けないければいい。」增「オヤなぜでございますエ。」宗「エ左樣老實に聞かれては行けないぜ。」增「オホ、、、、それだつても何だか解りませんからサ。それはよいが夜具が何樣も。」宗「ナニ〳〵、其樣な心配をせずとも、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、寢かしてくれればいいわな。」增「オヤ何の邪魔になる事がございますえ。」宗「言葉咎めをせずとも、早く寢かしてくんなな。」

春色英對暖語巻之十四　了

# 春色英對暖語　卷之十五　梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水著

## 第二十九章

木のもとに旅寐をすれば吉野山花の衾を著せる春風、と詠まれし圓位の歌ならねど、手織木綿のいと重き、夜の臥間も添寐する、花の笑顔に心うつれば、綾錦とも著心よく、朝寐過せし宗次郎、お増は何時か起き出でゝ、久しぶりなる化粧も、昨夜を恥らし身だしなみ、見違ふばかりによそほひて、朝飯の支度も調へば、しづかに宗次郎の枕元に寄り添ひて、増「モシ宗さん／＼、モウお起きなさいませんか、巳ノ刻過ぎでございますヨ。」トいひながら、宗次郎の顔の上より覗き居る。宗次郎はやうやうと目を覺し、宗「ア、引、寔に草臥れたから、夜の明けたのも知らずに寐たヨ、オヤ／＼モウ化粧が出來たノ、其樣に美麗しくなつて見せられちやア、今日は此所を立つて往かれないぜ。」増「アレ、其樣な事をお言ひだからやア、否でございますヨ。病氣が治つて、今日初めて白粉を付けたンでありま

すわ。それもお前様が愛想をお盡しだらうと思つて、今朝早く起きて淨水を遣つたのでありますヨ。昨夜は髪も散亂れて居ますし、何時間にも顔なんぞを化粧た事もありませんから、お前様に見られるのが、何樣に恥かしかつたか知れませんわ、サアお起きなさいましなねえ、アレサオホ、、、、、、マア御飯をお上んなさいましヨウ、私は早くおきて、お前様のお起きのを、待つて居ますのだから、待ち遠で行けませんヨ。」宗「ハイ〳〵、左樣ならば起きませう、何樣も爲方がない。」トやう〳〵に起き上る。増「お前様今朝は、何ともございませんかえ。」宗「なにが。」増「アレサ、昨日お痛めなさつた所は、痛みは仕ませんかと申す事サ。」宗「ナニそれは何ともないが、お前のお蔭で首が重くつてならねえ。」増「オヤ私が何をしましてエ。」宗「〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、此方も心がらだから爲方がねえ、ドレ〳〵思ひ切つて出かけませう。」増「オヤ何所へお出でなさるんでございます。」宗「ナニサマア、牀の中を出ようと言つたのサ。」増「オヤ、私は又直に、何所へかお出かけなさるのかと思つて、びつくり仕ましたから、お聞き申しましたのサ。」宗「ナニ〳〵、今日はマア此所に居て兄さんに逢つて禮も言はないければならず、そしてお前をも、直に連れて往きてえから、其の相談も爲ないければならない。」トいひながら、帶を〆め勝手へ出で、顔を洗ひて元の座へ來れば、お増は其邊を片付け膳をそなへて、増「すぐにお飯をお上んなさいな、何にもお菜がないから行けませんネ。」

宗「ナニ〱、何もいらない、オヤ何だ鯰か。」增「アイサ、鯰の素燒にしたのを、鄰の子に買つて來て貰つて、煮たのでございますヨ。お前樣には、此樣な物は喰られるかなんだか知れませんが、餘り何もありませんから、爲方なしにそれを拵へましたわ。」宗「これは奇妙だ、誠に美味さうだナア。オアお前もたべなな。」ト、これより和合く食事も濟みて、火鉢の際にさし向ひ、前後の事を種々と相談し、兄源兵衞も帝釋天の參籠より、他所をまはりて、其の日は遲く歸りしかば、夜に入つてまた〱談合極め、其の翌日母は後より呼び寄せるつもりにて、宗次郎お增は二人連にて、婦多川まで歸り來りしが、まづ知己の者の方へ落著き、俄に店を借り家財を調へ、只一日の中に世帶をこしらへて、衣食の手當にいたるまで、何不足なくなしたれども、お柳の方へ知れては濟まぬ義理ゆゑに、何事もひそかにはからひ、宗次郎の足も近からねば、母を引きとりて後、また〱座敷を勤め、男の世話を薄くせんとて、こと〲く宗次郎の、雜費とならぬ樣にはからひしが、さすがに和歌町にて、再度の唄女となりし故、如才なき客のとり扱ひ、傍輩の評判もよく、全盛日々の繁昌に、いつしか宗次郎との中も人が知り、又お柳の事も宗次郎と、深き中と聞き出したる者ありて、竟にはお柳と增吉の耳へはひり、互に氣をもみさわぎしが、宗次郎は二女の心を和げるやうに、兩方へ實を盡し、さて雙方ともに、少し嫉妬の氣の薄らぎし節、增吉へはお柳との中を、はじめより語り、お柳へは增吉との中を包

ますはなし、兩方に請けたる恩もあれば、全く浮薄の事にあらずと、よく〳〵得心させけるゆゑ、お柳も增吉も恨みなく、たがひに文の問答をなして、二人とも宗次郎を大事にしけるが、其の中に增吉の兄なりける源兵衞も、親方へ歸參し、頓て其の大家の支配人となりしゆゑ、增吉が唄女の勤めを止めさせて、宗次郎の合力を請けながらも、家再興の大切の中なればとて、其の費えを助けしとぞ。さて其の間に增吉は、宗次郎にすゝめて、お柳を二見屋より下げて貰ひしが、お柳も增吉へ義理を立て、宗次郎の本宅へは足も入れず、增吉も同じく其のごとくなれば、宗次郎は二個の美女を持ちながら、本宅は男世帶にて日を過しける。

さて此の頃仇吉が、心やすく增吉のもとへ、遊びに出入りし事は、梅ごよみ辰巳園にしるしてあり。されば梅ごよみ發端の年月が、宗次郎增吉お柳なんどの、彼是とせし時代より、丹次郎米八の話は、後なりと察したまへ。なほ增吉の婦多川に住まぬやうになりし頃が、峯次郎お房紅楓などのはなしなれば、此の英對暖語は、梅暦辰巳園の前中後と、數年ながくまたがりし物語なり。爰においてまづ、宗次郎の事を大畧して、此の編に書きをさめ、また梅美舟の巻にいたりては、十二の卷にしるしたる、豐月の座しき續きとなせり。前後雜記る筆癖を察して、よみわけたまはん事を、いつもながらくどく告げ申すになん。

再説宗次郎は、一度女色にまよひしに似たれども、もと實氣より起りし因縁にて、其の實意が前にも通り、お柳お増の助けを請け、再興したる家業繁昌、朝日の登る勢ひにて、今は親と兄とが、滅したりける家業よりも、十層倍の金持となりけれども、油斷なく出精し、最早是れまでなりと思ふ時節になりて、分散せし兄の子をもらひて、家督をゆづり、萬事支配人に守らせ、其の身は小梅といへる所に、隱居所をこしらへ、彼のお増お柳の二女を同居させ、奢りもせねば吝くもせず、程よき世話をなすこそは、足ることを知る君子ともいふべし。

〽同じ江に、住めば嬉しき契りなり、夫れは津の國生田川、これは東都の隅田川、おもひくらべん戀の山、富士と筑波の中々に、合よう似たく心もなりも、まさりおとらぬ桃櫻。ト、中音に語る二挺の三味線、三の絲が切れて語り止め、柳「オヤ絲がないヨ。」増「オヤ／＼、モウ一かけもなかつたかえ、何樣も爲方がないからお繼ぎな。」柳「モウよして、又明日にせうぢやアないか。」増「アヽ、それぢやア、左樣せうネ。」ト莞爾笑ひ、増「アノウお柳さん、お前は何とお思ひだか知らないが、此の淨瑠璃の樣な事があつたら、ほんたうに困るだらうネエ。」柳「ア、ねえ、それだから此間も、ソレ宗さんが左樣お言ひぢやアないか、大和物語とかいふ昔の本に記いてある事で、二人の男が兩方とも違い男で、何も角も勝り劣りがないから、生田川とやらの、水の中に居る鳥を、箭で射

つた者の情人にならうといつたら、兩方一度に、其の鳥を射當てて、爲方がないから兩方へ義理を立つて、其の娘は直に川へ身を投げて、仕まつたといふ事たねえ。」増「オホ、、、、、、、それでも宗さんは平氣でお在てだねえ。」柳「それだつても、お前も私も足り不足を言ふ樣だと、宗さんもお困りだらうけれども、私もお前もお互に和合くして、朝晩此樣に押付き合つて居るから、苦勞なしでお在でのだわ。これでも何方か一人、嫉妬をして御覽な、夫れこそ面倒だけれども、お前も私も左樣いふと、自惚らしいが素人と違つて、種々苦勞をして來ただけ、野暮をいはないから、男も樂だと思ひますわ。」増「眞ニ左樣だョねえ、併し私やア考へて察ると、宗さんは浮氣な事は少しもないネ。」柳「エア、イ、エ左樣でもないョ、去頃お前がお咄しのを聞いて察ると、些たア多情な事もありますわ。最初に私が郭へ出た節、續けて私の所へお出での途中で、お前に逢ふと直に情人におなりだアないか、ホ、、、、、。」増「オヤ〳〵、それはお前が振り付けてお在での節だアネ、それよりかお前が後に文をもつて、宗樣をお呼びの節は、以前の事を忘れて了つて、文を見ると直に途中から、駕籠でお前の所へお出でぢやアないか。」柳「アレサ左樣お言ひだと、私が面目ないョ、モウ〳〵過ぎた事を言合なしにせうネ、オホ、、、、、、。」

## 第三十章

百年の苦樂他人に依る、女の身の上の悔しきことは、今さらいふも古めかしけれども、生まれし時容の善きにつけ、惡しきに付いて口惜しく、腹立たしき事のあるものなれば、常に他人の爲に恥かしめられ、又はそねまれる所爲の、用心を仕たまへかし。爰にお增とお柳の二人は、實の姉妹よりも睦まじく、宗次郎も又兩個を愛して、陰と日向の會釋なく、衣類其の外のものまでも、お增お柳を同じ樣にして與へけるが、此の程お柳は何となく煩ひつきて、次第に重き病となり、日々に食事もすゝみかねしゆゑ、宗次郎は大いにおどろき、醫師よ藥と心配して、手を盡しければ、お增も元來やさしき生得、殊に姉妹の如き中といひ、且は義理ある事なれば、晝夜の看病なほさりならず、介抱しけるゆゑ、お柳は其の心ざしの悝を、しみ〴〵と嬉しく思ひ、朝夕氣の毒に胸をいためて、柳「アレサお增さん、マア藥は煎じておくれのは、後でも能いから、些とお休みなさつておくんなさいヨ。其樣にモウ私の事に許りかゝつて、苦勞をして、又お前が鹽梅でもわるくおなりだと、私もこまるし宗さんもお困りだから、何卒お前は折節氣晴らしをして、身に障らない樣にしておくれな。兎角私の病氣は、急に全快は爲ないと諦めて居ますから、其樣におまへが深切に氣をもんでおくれだと、かへつて私が氣の毒になるから、どうぞマアかまはないでおくんなさいヨ。」增「ナニノ、其樣に遠慮をおしでなくツても能いわネ。斯うして姉妹の中よりも心易く、一生二個が同居に活業さうと、言ひ合はしたもの

を、お前なり私なり、一身も同様だと、常々に思つて居るのだワネ。それだからお互に、世話にもなつたり、世話も爲たりするのが當然の事だわネ。お前が聽て達者になつておくれの時に、萬一私が煩へば、またお前に看病をして貰ふわネ、左様して見れば、何にも恩もないといふものだヨ。其様な遠慮に氣をもむと、なほ病にさはるから、平氣でお在でョ。」ト言ひながら、多葉粉を吸ひ付けてお柳に渡し、増「サァ一ぷくお上りな、今日は宗さんが、お前の病氣を案じて、お醫師さまの事やお薬い善悪もあらうかと、それをよく觀察てもらふとお言ひで、松智山の觀光さんといふ、上手な人相者の所へ出てお在でだヨ。」トいひながら、お柳の體を倩見れば、此のほどは顔の肉も落ち、もの言ひさへも力なく、常々氣性の我慢づよき元氣もよわりて、兎に角に涙をもよほし、盗汗を流しさも哀れなる風情ゆゑ、さすがお増も苦勞人、察して心を付けて見れば、過ぎし日頃のお柳の身の上、再度の勤めの苦界の心配、他人にいはれじ笑はれまじと、張を通せし意地づくの、勞れも爰にあればこそ、眠れば夢の多き由、醫師も肝症の、勞症のと名を付けたれば、萬一快氣もせぬならば、さぞ悲しくあるならんと、胸に思へば色にも出でて、ついホロ／＼と眼に涙、お柳に見せじと顔そむけ、次へ立たんとするを呼び止め、柳「アノお増さん、昨日お醫師さまが、最う見放したのかネエ。」増「どうして其様な事はないヨ、ナゼマア其様な事をお言ひだ。」柳「イヽエ、それでも宗さんが、アノお醫師さま

た、尋ねに出てお出での樣子といひ、今お前が私の顏をしけ〴〵と見て、淚をお零しのは、私の命が保たないだらう、慈愛さうな事たと思つておくれだから、夫れでお泣きのに違ひないヨ。」トいひつゝ、淚にむせいつて泣きながら、柳「未練な樣だか、最う些ッと生きて居たいもんだネヱ、此樣にお前がやさしくしておくれだから、猶の事死にともないヨ。」ト、いはれてお增も泣聲になり、增「アレヨ、其樣な心細い事をお言ひでない、私が淚を落したのはネ、嘸お前の氣性で、取り亂して寐てお在でのは否だらう、些ッとも早く髮でも結つて上げる樣に仕たいものだ、嘸じれつたくお思ひだらうと思つて、ツイ淚が出たンだわネ、必ず取越し苦勞をおしでないヨ。」柳「イ、エ夫れでもネ、お醫師さまは何といふか知らないが、何でも此の十日ほど以來へはネ、少しとろ〳〵と眠ると、枕元へ何者か來て、早く死ねといふ樣な事をいつてネ、私の胸へ釘か針かを、突き通す樣な夢を見て、目が覺めると油の樣な、汗が出て居るものヲ、何樣しても全快る事はあるまいと思ひますわ。」ト、枕を濡らす淚の雫、さも哀れげに歎き伏す。お增は種々なぐさめて、力を付ける深切は、いと頼もしき實情ならずや。斯くて宗次郎は、お柳の病氣を是非とも、一旦は全快させんと、丹誠するも只恩愛の情のみならず、お柳は再度の勤めまでもして、家再興の大功あれば、其の義理にも麁末にならず、神佛に祈り、人相の易者のと氣をもみ步行きしが、疑ひ心あれば、暗に鬼の姿も見ゆるといふ、譬への通り、松智山の相

者觀光は、他行して家にあらざれば、爲方もなく歸り道にて、大鷲束味と云ふ易者の許へ立ち寄り占ひを乞ひけるが、此の易者は、兼て宗次郎の身の上、當時お柳とお增を同居させ、右左に置きて樂しむ事をくはしく知り、いと口惜しく思ひて居たる所なりとぞ。夫は何故といふに、いまだ增吉が和歌町の唄女なりし頃、深く心をかけていどみしかども、增吉は上手に言ひ退れて得心せず、又お柳が二見屋に居たる時、大榮樓に呼びて遊びしかども、是れも振り付けてつれなくせしが、いかなる愚癡の所爲にや、大鷲は野暮に戀ひ迷ひて、恨み居たりしが、兩女とも宗次郎に、身を寄せてゐる由を、知己の者よりくはしく聞きて、嫉ましく思へども爲方なく、宗次郎をも他見ながら知つて居るゆゑ、無理なれども面憎しと、そねみて在りし所へ、それぞとも知らず宗次郎が來りしゆゑ、辯舌に任せて宗次郎を說きまどはして歸しければ、さすがに發明なる心にも、迷ひを生じたる時にして、いさゝか宗次郎に災ひある折からなれば、大鷲の言葉を寔と思ひ、心よからず立ち歸りて、お增の母親に相談して、お柳の病氣中は、お增を別に住居をさせて置きたき由を計らひければ、母親は氣の毒に思ひ、早速お增の方へ來りて、ひそかにお增を一間へ招き、淚ながらに囁きける。

此の時お增の母は、お增の兄の許へ同居して居たるなり。又因にいふ、大鷲と稱ばるゝ易者は、虛名賣にて福有なれば、妓女などに金を遣ひて、色情深き曲者なりしとぞ。

母「アノ〳〵お増さ、お前はマア何樣して此の頃は、其樣な恐ろしい心になつたのだえ。」ト、いはれてお増はビックリし、母の顏を從容詠め、増「オヤ〳〵母御さん、何をお言ひのだエ、私が恐ろしい心になつたとは、マア何の事たネエ。」母「アレサとぼけなさんな、昨日旦那が何所か往つて、占ひを看てお貰ひの節に、お柳さんの病氣は、お前が嫉妬で、祈り殺さうといふ惡心から、お柳さんが煩ふのだと、種々證據をならべて言つたさうだが、お柳さんの夢に、あやしいものが枕元へ來て、死ね〳〵といふのも、胸へ針を突き込むのも、不殘お前の所爲だと占つたさうだヨ。成程それは女の心で、嫉妬をするもない事ではないけれども、其樣なマア恐ろしい事をして見な、則りお前の身にも、それほどの苦しみを、請けるには違ひないが、なぜマア其樣な怖いことをするのだえ。」ト、いはれてお増は呆れ顏、増「オヤ〳〵マア、思ひも付かない災難を、言ひかけられるものだねえ、私やアお柳さんの病氣を、些とも早く快くして上げたいと思つて、毎日お晝過ぎまで鹽斷をして、清正樣を拜んで居るのに、其樣なことを言はれちやア、寔に悔しい事たねえ。」ト淚を落す。母「それでも其の願がけを、則り祈り殺すのだらうと、宗さんが疑つてお在で見れば、爲方がないから、マアお柳さんの病氣が能く治つて、お前の疑ひが晴れるまで、兄さんの方へ往つて、時節を待つて居るがいいわナ。」増「イイヽ私は否だヨ、今に宗さんが歸つてお出でならば、お柳さんの前で、能く私の胸をはなして、お柳

さんまでも私を疑つて、左樣だらうとお思ひならば、爲方がないから、その座で私は咽でも突いて死んで仕舞ふョ、左樣したらば、衆人の疑ひも晴れるだらうから。」ト、覺悟極めし娘の顏色、察して見れば母親心、案じ過してまた悲しく、母「ナニサ、其樣に氣の短いことを仕ては、猶行けないわネ。いよ〳〵お前の心に、其樣な覺えがないのならば、宗さんに能く其の趣を咄して、何所の卜者だか、其奴をも聞き糺して、仕樣があらうわナ。それには兄さんを賴んで、能く正しても貰はれるから、マア〳〵短氣を出してくんなさんなよ。」ト母子が咄しの次の間より、思ひがけなくお柳は立ち出で、

柳「お增さん。母御さん。」增「オヤお柳さんかえ、何樣してマア輕々しく、此所へ出てお出でだえ、牀の上にお在ででさへ、自由に身がお利きでないのに、能く此間へお出でだねえ。」母「アレサお前は冷えては惡いョ。」柳「ナアニ、最う直に全快るだらうと思ひますわ。」ト今までにあらぬ顏の色、さもうき〳〵せし容體を、不思議な事とお增は看とめて、增「ホンニマア、何樣して其樣に、急に元氣が出たのだらうネエ。」ト、お柳の樣子を見て居れば、母も同じく寄り添ひて、其の故を不審に問へば、

柳「ナアニ、他の藥で心持が、よくなつたのではないョ、一昨日お增さんのお友達の、婀娜吉さんが持つて來ておくれの、一粒金丹とやらネ、性に合ふか合はないか知れないから、服藥むなとお言ひだが、構はずに昨夜ッから、あの金丹を澤山つゞけて給べたら、今朝ッから段々に氣色がよくなつたの

でありますヨ。」　増「オヤ實正にかえ嬉しいねえ、お前がはやく全快つておくれでないと、私が身に、
柳「アレサ、それも今此間へ来かゝつて聞きましたわ、其の事ならば決して、苦労にしておくれでないヨ、縦令誰が何と言はうとも、私はちつともお前の事なんぞを、疑るの悪く思ふのといふ事はないヨ、此度の病氣も、お前が深切にしてお呉れだから、心強かつたのでありますヨ。」ト母とお増へ隔てなく、うち解けかたるお柳の體を、宗次郎は先刻より歸り来つて、のこらず見聞したりければ、お増を疑ひしを後悔して、氣の毒に思ひ、其の座へ立ち出でて、大鷲が易をもつて、まどはせし事を咄して、果ては笑ひを催しけるが、此の日よりお柳は一日々々と快氣して、元の如く達者なる身となり、お増を大事にすることも、母の様なれば、お増もお柳と片時も側をはなれず、また宗次郎も、兩女を寵愛する事ますます深く、頓てお増お柳の兩女ながら、同じ月より妊身になりて、お柳は女の子を産み、お増は男の子を産み、いづれも勝り劣らぬ容貌にて、うつくしく蟲氣もなければ、疱瘡も輕く、いとも目出たき家内の賑ひ、幾千代かけて榮えしとぞ。

春色英對暖語卷之十五　大尾

# 春色梅美婦禰

# 春色梅美婦禰の序

四方の諸君の惠み給ひし玉句をもて此の艸紙のはしがきに換へ、予が拙きを裝る。

白梅の香を張り入れる障子かな　玉枝

柴の戸はかゞりも付けず夜の梅　梅雪

よき中を人に見よとや梅柳　眞風

春雨や鄰もしらぬ小酒盛　蘿齋

春毎に咲きふさふべき花なればト、兼輔朝臣の梅の歌を便りに、亦も今年の新販発枝に高覽を願ふのみ。

江戸　人情翁　狂訓亭

爲永春水誌

# 春色梅美婦禰 巻之一

梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第一回

再應說を幾度となく綴るに似たれど、枝から枝の花と實を、またことゞく治めねば、根分穂の物語、猶說き殘せし一條を、又々爰にしるすになん。さても戀が窪なる豐月に、はからず落ち合ふ岑次郎、紅楓、お房の三人を、和合になす計らひは、名にし負うたる米八が、好意な萬事の計らひに、元來血緣の姉娣、つながる緣の岑次郎は、直に洒落れた人なれば、紅楓お房の兩女へ對し、程よく會釋氣休めも、他人が聞いてはなかなかに、得心すべき理由にはあらねど、姉も娣も心底から、惚れたが弱身の戀の癖、ついぐにやぐにやになりしかば、頓て米八は岑次郎に、紅楓の身の上の事を相談し、金の入用は岑次郎が、何ほどなりとも出すべしといふに任せて、其の道に馴れたる人を深くたのみ、岑次郎とは言はずに親元を抱き込み、漸うに紅楓を郭より引きとらせ、さて給金利分入用多分かゝりし事なれば、年季を短くして貰ひたるを僥倖と思ひ、男の爲に少しの間、姉多川の料理屋の酌取る奉

公を、纔かの金の足前に、氣樂に勤めさするよしも、娘が承知の上なればと談じ、さて中裏の中島屋の抱への表向にして貰ひ、自身番横町に家をしつらひ、自由に峯次郎に逢はるゝ様にはからひける。是れ何ゆゑなれば、兩女の親の偏屈なれば、峯次郎の世話にならざる心のほど、また親の元に置きては、面倒なることのみある戀路の中にして、お房にも義理あれば、紅楓を親元にも峯次郎の側にも置かれず、金に事を缺いての様に言ひこしらへ、如斯にはなせしとぞ。されどお房は姉の許に、同居とまではまだならず、此の後とても米八が、萬端實意の世話を便りに、彼の寄場に住居をして、内々峯次郎が客となり、口をかけて呼び出すのみか、部屋の得心あしからぬ様に、德を付けてつかはしければ、まづ姉妹兩女とも、其の儘に月日を過しける。

紅楓が戀が窪を出でて料理屋の唄女となることは、容易きことにはあらねど、夫れを委しくなす時は理窟にからまりて、婦女子の看官おもしろからず、依之只道理もなき風情に辰巳へ移り住むよしをしるすには、例の麁忽の筆癖とゆるしたまへかし。

○さてもお房は此の四五日風邪の惱みありければ、口の懸るを斷りて、寂しく部屋に殘り居る、友傍輩も在りながら、晝寐を仕たり下座敷、内所の用のあるもありて、暫時二階にしよんぼりと、鬱氣ぐ折しも貸本屋の、持つて來りし人情本、素人作の寫しにあれど、面白さうな書初に、借りて直さまよ

みかゝり、憂きを忘るゝなぐさみも、又氣にかゝる戀の癖。

ほんの文句「あとには一人寂しくて、寐られぬ儘に文七は、傍にある三味線を、手にとりあげて爪彈に。

うたへ見せやお部屋のかげ口に、うき名たつほど深くなり、義理も遠慮もわきまへて、義理な事とは知りながら、餘所の座敷に居るそらは、泣いてこがれて我儘に、お客を捨てゝぬしの側。

一間隔てゝ清川は、耳をそばだて心の中に、オヤ文さんが何節か彈いて居るさうだヨト、唄の文句をきゝわけつゝ、いとゞ心に繰りかへす、癡情も惚れたる人の常、ほんに唄といふものは能く作つたもんだ、身の詰りになる事は、百も承知で居るけれど、文七さんと落ち合つた、お客はいつでも麁略にして、後口では後悔するほどに、傍輩衆にも意見をされ、一座のおもはく何もかも、此の身の勝手と心を叱り、來ごとは來ても手に付かぬ。否なお客といふほどの、お方でないか酒機嫌、よく寐なますのを幸ひに、最う些と堪忍爲なましえト、誤り言も口の中、咳あの樣に寂しがる、人を其の儘置かれうかと、又騙け出して文七の、牀にいたりて身を寄り添ひ、清「文さんオヤもう三味線はお止めのかえ、なぜマア溜息を吐いて其樣に鬱情いでお在でだ、今日も文使の人がいふには、花里さんといふ女郎衆からも、主の所へ手紙が出るといふ事を聞きましたから、先刻までモウ〳〵

氣がもめて、悲しく思つて居たンざます。そりやアモウ私の樣なものざますから、ぬしの氣にも入らず他に發明な娼が出來さしツた日には、兎ても止して呉んなます樣にはなりいせんが、何卒私をまるで捨てて仕まはうといふ氣にならツしやらない樣に、後生ざますヨ。」文「ヘイ〳〵かしこまりたてまつりました。」濤「アレサおちやかしでない、實正に急度ざますヨ。」文「アイヨ大丈夫だから其樣な取越苦勞を仕なさんなヨ。」トやさしく言ふ。

お房はこれを讀みかけしが、身にもしみ〴〵引き比べ、戀の切なる心根は、誰もかはらぬ憂き苦勞、別けて此の身は姉といふ、人の最初から在るごとも、知らで思ひをうち付けに、いうて嬉しい挨拶を聞きての後に段々と、姉が結びし緣の絲、義理と世間の思はくを、恥ぢては否とも片絲の、切れねばならぬ姉の身、ことに母さへ隔てある、中の意味さへあるものを、奈何に戀しく慕へばとて、終遂げられぬ二人が中、他人の身にて在るならば、男一人を兩婦にて、かしづく事も世の中に、多く見聞きもする事なれば、恥かしからぬ所爲なりと、勝手にいうても過すべきが、扁屈心の母の氣に、なかなか許す事にはあらず、といへばとて今更に、離別れようとは言はれもせず、言ふも悲しい心の底、マア何樣したら能からうと、思案にふさがる胸の中、涙を落す冊子の上、文字も鈍染みてかすむらん。斯くて其の日も暮れはてて、出入せはしき路次の足音、明いて來るあり見板の、迎ひとともに驅け出

すあり、心の當ての名ざし客、寄場の噂もとり〴〵に、藥屋は貝の娘の寄合、たとへば年の嵩かさね
て、女房といはるゝ女でも、自然なるあどけなさ、夫を惡口にいふ節には、僞娘とか、おほかめものと
か、謗りて穴を並べ立て、再生の眉毛の逆立ちて、白歯がさびて鼠色、乳首がしなびて皺があるのと
憎まれ好きなお方もあれど、盛りの過ぎし花なりとは、心で承知の憂き勤め、其の身の口から老い込
みと、卑下する時は猶更に、見かすめられる花美な中、些と似合はしくない樣に、思ひながらも年壯
く、看せねば笑くぼも疵となる、由縁の色の別世界、眞の通人といふものは、則ち年增女を相手にし
ても「ナニまだ左樣はなりやァ爲まい。實に幾歳が正直ならば、以前へ歳をとるのだらう。此身が惚
つて居る眼から、壯年といふぢやァねえ、すべて其方のする事は、半分生娘の樣な行狀だものヲ、
何樣して歳經つたものと誰が察るものか。」などと賞めるを嬉しいと、おもはぬ娼妓唄女はあるまじ。
ふんざら艶語と知りながらも、まづ身をかざる助けとなれば、謗らるゝ言葉と同じく聞きて、腹立つ
氣隨のたはけもあるまじ。およそ業平の再誕と、賞めらるゝ美男なりとも、娘唄女にはいふに及ばず、
諸々の女中の不具をかぞへ、難批をかぞへ内密を謗る癖あらば、廣き世界一統の、好男子とは賞むべ
からず、夫れ能く用心をなし給へなどと、今さら言はずとも世間一統の丹次郎達、定めて御如才ある
まじきか、娘御さまがたも深く思案して、後に實ある情人を選みたまふが肝要なるべし。

ドゞ・〵程の能さそな氣の能さゝうな　それぢやたしかに情人がある

ふさ「すや米八さんお歸りかえ。私やアモウ寂しくつて、お前が戀しくつてならなかつたわ。」米「なんだヨ此の孃は、側のものに遠慮なしだなウ、衆女が此樣にお在でぢやアないか。」ふさ「アレサ八重吉さんも里吉さんも、その外も唯今がた明いてお出でだものヲ。」米「オヤ〳〵左樣か。そして直に歌がるたか。衆女さん大分御精が出ますネ。」八重「ハイ〳〵眞平御免成はいまし。」里「オヤ米の字お早かつたネ。先刻から房女が鬱氣の蟲ヤ。」米「赤蛙でもあるまいネ。」八重「オホヽヽ、眞蛇ぢやア尙惡からう。」米「アレサ其樣な氣障な洒落をいふと、梅曆の時分より中裏が面白くないと言はれるはネ。オヤ夫れよりか私やア大事の言傳をわすれたヨ。」ふさ「オヤ姉上さん誰にえ。」米「ナニサ則りお前にだヨ。」ト莞爾笑ひ、米「アノネ房吉さん、明日は無理に出勤しなヨ、ヨ承知か。」ふさ「アイ。」ト莞爾思入あるべし。

## 第二回

退れなば遁れも得べき身ひとつを、所爲あり顏に世を過すかなと、隱逸の人は悟りけん、夫は百年の餘を經りて、枯木のごとくなりぬる人か、廢人なら兎も角も、人並々に活業を、せらるゝ者が親族の、便りともなり彼是の、家職の勤め妻子の不便、捨てて其の身は易くとも、夫れをたよりとする人の、當惑難儀は如何ならん。然はいへ死別の節に臨めば、留められもせず留められぬ、娑婆の無常を

何といふとも、理窟を言はゞ、悟道の人も、あるべきなれど世の中は、迷ふといふが言意にて、悟り頓に萬事を消なすは、餘り可愛きものにあらず、只迷うて悪むの第一は、貪慾多慾の愚人の外、色情は主ある女の外は、少し迷つて看るもよし、これ偏屈なる野暮人を、和かにして他愛を、自然と生ずるものぞかし。こゝに峯次郎は紅楓お房の兩女とも、ほどよく同じ里に置き、彼の米八がはからひより、姉妹中に隔てなく、往來に兩女を導びなぐさめ、手許におかれぬ雙方親の、不和の間ある義理合が、却つて思ひを深くする、戀の迷ひの樂しみにて、迎島の別莊から通ひ、後に本家に住ひ、其所よりかはらず婦多川へ、行くを朝夕心にかけて、何不足なく日を送りしが、此の僅交の見なりける、德右衞門といふもの、本國奥州津輕なる、青森といふ所に古く住ひて、先祖よりの連綿と相續せしが、先達より大病にて、峯次郎の父を呼びに人をのぼせたるが、父も病氣なれば下り難く、ことに德右衞門方よりも久しく甥の峯次郎に、對面を爲すもなつかしくもあり、又存じ寄りの事もあれば、是非同道して下るか、父の名代を兼ねて、一人下るか致し呉れる様に、猶々今年十月十五日は、大事の先祖の二百年忌にあたれば、大法筵を勤め度し、兎に角に古郷に花を咲かする心得にて、峯次郎を下し呉れる様に、頼み入るとの飛脚到來なせしゆゑ、峯次郎は迷惑千萬なれども、父の名代先祖の祭祀、伯父の病氣見舞否ともいはれず、婦多川の方も心にかゝれど、是非なく兩女へ手當の金をあたへ置き、二度

三度の飛脚にせりたてられ、飛脚とともに鎌倉を發足し、歩行おも遠き陸奥の、青森といふ所に著き伯父の家にいたり、病氣の容體を尋ねしが、思ひの外に快氣なりしといふゆゑ、まづは安堵して悦びを述べ、鎌倉よりの進物土産を、親類の家毎に配らせければ、もの堅き田舎の人々なれば岑次郎に知己になり、その返禮をなすべしと、彼方に招かれ此方より問ひ寄られ、休足を四五日なせし後は、毎日々々親類の人達に應對するを、勤めの如く十五六日を過し、はや道中の日數をかぞへ入れては、四十日の餘古郷を放れしかば、鎌倉の方のみなつかしく、別けて辰巳の両女の事を戀しく思ひ、早く歸國に赴かんとすれども、來月の大法事を勤め、先祖をまつりて目出度く鎌倉へ歸るべし、實は遠國片鄙の不自由を其方に看せて、繁華の土地に生まれし有難さを心付かせ、奢りを禁める親と伯父との慈悲なれば、今暫時この田舍に在りて、山家の者の活業の體、又は海川に渡世をする者ども、艱難辛苦をも見物して、呉々も坐して喰ふ鎌倉の、町家の安樂を忝き事と發明し、家業を大事に親達へ、必ず苦勞をかけべからずと、いと／＼しぶき伯父の意見、聞き捨てにして歸りもならず、飛び立つ樣に思へども、道中案内記を數ふれば、百六十五里十二丁、容易き路にあらざれば心細くも悲しくなり、明渡しにして假住居と定められたる、別間に獨りくよ／＼寐轉びて、人情本の大古板を、爲方なしに繰り返し、退屈してぞ居たりける。峯「ア、引寂しくッて堪へられない、成程人間の一生といふもの

は、何日何時何樣な所へ往つて、日を送る事があるか知れないものだ。何程爺樣の古郷だといつて、今日日此身が百七十里も奥の、此樣な所へ來て、假令やア一月でも居ようとは、夢にも見ようとは思はなんだ。しかしお房が婦多川の唄女になつたり、お腰元の紅楓さんともいはれたものが、戀が仇の仲の丁の藝者になるかと思へば、自身番横町に住居をして、櫻川由次郎が朝湯の歸りに寄つて話でも仕たり、丁子屋の和十子が誹諧を進めて、遊ぶなんぞといふ身の上にもなるから、何でも人の一代は定まつた事はないもんだ。ア、今頃は姉娣ともに何をして居るか。」ト獨り言を並べながら、又心の中に過ぎし日を考へて、いとゞ猶あどけなかりし兩女の身の上、彼の別莊の座敷にて、芝居咄の怪談か、計らず結ぶお房の緣、思へば不思議な事であつたト、唯懷かしさの胸に塞がり、涙を催し居る折しも、障子の外に人音して、緣側に手を支へし樣子。「モシ若旦那樣、鎌倉の婦多川とやらから、急用だと申してお手紙が參りました。」房「エイナニ婦多川から此の片部まで手紙が來るしに、當惑てはない、ドレ／＼。」ト起き上れば、下女は障子を押し明けて、手紙をさし出し、勝手の方へ立つて行く。跡には胸も安からず、手紙の封を切る間さへ、忙はしげに押し開き、半ばより讀む其の文言。

扨とや先達お前樣にお別れ申して後、御姉上さんが氣ぶん勝れず、日に増して痩せおとろへ、いろ／＼お醫者さまを賴み藥をすゝめ候へど

も、一向にしるしもなく、私も看病油断なくいたし、神様や佛様へ御願がけも方々と致し候へども、なか／＼快氣樣には見え申さず、殊にお醫者さまも最早お斷りなされ候へば、實に悲しく涙許りこぼれ泣いて居り候。夫れゆゑおあもじさまもたすからぬ事とかくご致し、どうぞ息のある中、是非御前樣に逢つて死に度いと、あはれなる事を御申しなされ候へば、遠き所に御在で遊ばし、間に合ふまじくとぞんじながら、私も心ぼそく、御なつかしく存じ上げ候故、文にて申し上げ候。どうぞや少しもはやく御歸り遊ばし、せめて一言の御名殘をもあそばされ候樣、くれ／＼願ひ上げ候。心せはしく何事も、あらあらしたゝめ候へば、

---

米「エヽ、此樣な事があるかして、此の三四日胸さわぎがして、何だかいやな心持であつた。モウモウ後は讀むにおよばない、とても伯父御に左樣いはれる理ではなし、彼是暇をとつては死目にも逢はれないから、近所を見物の風俗で此宅を出て、それから直に鎌倉へ歸らう。」ト、手にとる物も取りあ

ハネ、伯父には元來他の者にも、知らさぬ樣に支度を調へ、濱邊の景色を見物と僞り、高森を走り出で、兼々聞きたる路の案内、仙臺の荒濱といふ湊から、船の便宜ありければ、七十里の東海上を、一日一夜に走らせ、平潟といふ所に著いて、直さま風の追手なりと、二十五里を半日に、銚子の湊に著き、夫より近道を早駕籠に乗り飛ばする如く、千里一時とあせりつゝ、忽ち婦多川の和歌町に至り、自身番横町の家の前に近づく折しも、櫻川由次郎唄女の米八、米「おヤ／＼峯さんかへ、能く早くマアお歸りなさつたネエ。アノモウ房吉さんが氣をもみ切つてもお在でだが、何樣もお粂さんの病氣が快氣ならないので、お前さんもさぞ苦勞になさいましたらうネエ。」峯「モシマア早く見てお上げなせまし」ト、いはれていとゞ峯次郎は、米八、由次郎に挨拶も、ろく／＼になさでうろたへつゝ、軒端に立も寄る折も節、お房の聲の悲しげに、房「アレョ姉上さんョ姉上さんヤ、氣をたしかに持つてお呉れヨ、お粂さアんョ。今に峯さんが歸つてお出でだらうから、マアそれまで氣をはりまして居ておくれヨウ」ト、泣聲になる房吉の、聲を聞くより胸せまり、狂氣の如く門口を、轉げ倒れて峯次郎、上りがまちに手をかけながら、涙に言葉も出でざりける。

春色梅美婦禰卷之一　了

# 春色梅美婦禰　卷之二　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第三回

再說峯次郎は周章てながら、家内の樣子を見まはせば、不便なるかなお粂は卽時、臨終のあり樣にて、姉お房の介抱も、甲斐なく悲しき涙の眼元。ふさ「オヤ峯さんかえ、最う些と早く來てお呉れならば能いにネエ、マア早く何樣かしてお呉んなはいヨ。姉上さん〳〵、アレサお粂さん、お前の戀しがつてお在での峯さんがお出でだから、氣を丈夫に保つてお呉れヨ。ヨウ姉上エさん。」ト、泣き聲にて呼び生けんと、あせるも血脈の誠にて、哀れはいはん方もなし。峯次郎も抱き起して、峯「オイお粂さん、コレサ氣をたしかに保ちな、あれサ峯次郎だヨ。田舍から驅け付けた深切に免じても、快氣なつて呉れないければ恨みだヨ。コレサ〳〵。」トうろたへて、理にもあたらぬ詞を出すも、實に親身の歎きから、愚癡も丹心と知られたり。お房は姉を峯次郎に、抱かせて置いて勝手に驅け出で、茶椀に水を汲み來り、ふさ「アノ峯樣、お前の手からこれを飮ませてお呉んなはいヨ、アレサ口から直に吹き

込みたくッては、飲みは仕ませんから。」ト言ふに任せて岑次郎が、お粂の口へ吹き込みつゝ、[illegible]ヤごッくりと咽へ通つた様だ。これぢやア何様か氣が付くだらう。」ト抱へて居ながら胸を撫で下して遣り、岑「お粂さん〳〵、オイコレサお粂、岑次郎だヨ。」ト、いふ聲お粂の心耳に通じ、去り行く魂にも徹へけん、眠りし眼をボッチリと開き、岑次郎の顔を従容と看て、粂「岑さんかえ。」ト只一言、いふも苦痛の息づかひ、消え行く其の身と過ぎ去りし、契りの事など思ひてや、涙をはら〳〵と落し、柔弱き手にて岑次郎の手にすがり、粂「どうぞ命のある中に、逢ひ度いと思ふ念が届いて、嬉しいねへ。」ト身を振はし、粂「折角此様に逢はれても、また直に別れるのは悲しいヨ。」ト、詞みじかくいふ中に、千萬無量の憂き事を、籠めて涙のいとまごひ、淺き縁か情ない、果なきお粂が身の果てと、不便彌増す悔み泣き、とても命はあるまじと、察しながらも氣をはげまし、岑「ナニ〳〵其様な悲しい心細い事を言ひなさんなヨ、最早此身が斯うして來たからには、何様な事をしても一旦快氣せずに置くものかな、能い薬でも飲めば全快るから、案じなさんな。」ト力を付けても、重病に勞れて臨終の際なれば、とてもかなはぬ命ぞと、諦めても悲しく思ひ、いとゞ涙にむせびながら、粂「イエ〳〵何様して、遁ても存命られは為ませんヨ。何卒迷はない様に仕たいものだと思つても、お前様に別れるのが。」ト、言ふも涙にくもりつゝ、はや合掌はせて覺悟の體。粂「お房が何卒慈愛がつて。」ト、いふも幽に眼を閉

おて、息も再度絶え入る風情、お房も倶にすがり付き、ふさ「姉上さんヤア引。」ト泣き出せば、峯次郎も狂氣のごとく、峯「オ、イ、コレサお粂ヤア引〳〵。」と、聲はり上げて呼ぶ側から、峯次郎の脊中をさすりて、●「峯さん、アレサ峯次郎さん、目をお覺しなさいヨ。モシ〳〵夢を看ておいでなさるのかえ。」ト、ゆり起されて峯次郎、目を覺しながら四隅を見れば、歸多川ならぬ陸奥の、青森の里の伯父の家、例も假居の別間にて、轉寝したる枕の元に、茶を持ち來りて呼び覺すは、伯父の娘のお京とて今年はたしか十七歳、片鄙に稀なる容貌にて、詞遣ひもさすがには、富有の育ち賤しからず、藝能の業に鎌倉の、傳手に便りて呼び下し、其の師匠たちに習ひたれば、自然なる都の風俗、はづかしからず覺えては、兩親の心は何卒して、繁華の土地へ住居はせたく、思ひ暮してありけるが、お京は此の節峯次郎の、鎌倉風の艶男、ものやはらかに正然した、姿に心をうつしてより、兎や角おもへど初戀の、うら恥かしさに言ひ出す、言の葉草もなか〳〵に、何と岩間の苔清水、男の心も汲みかねて、唯くよ〳〵と胸をのみ、痛めて日々を過せしが、兩親達の内心に、峯次郎を呼び下し、何卒馴染を重ねしうへにて、家督をわたし壻とするか、左もなきならば鎌倉へ、お京を送りて別家を立て、夫れを峯次郎にゆづりなば、お京の爲に頼もしき、所爲なるべしと陰言の、相談さへもありしかば、娘心の急がるゝ、戀の惱みの迫りつゝ、朝夕思ひを焦せしが、思案を定めて煎じ茶も、遠き便りに調へ下し

て、貯へありける清風といふ、名高き銘茶を煮花にこしらへ、峯次郎の居間へ持ち來りて、今晝寢し
て譫言せしを起したるなり。京「オホ、、、、、、峯さん、お目が覺めましたかえ、お京さんとやらは
お前さんの情女でございますか、オホ、、、。」と言はれて漸う起き上り、峯「ア、引寢苦しかつた。ヨ
ヤ大變に盗汗が出た。」ト手拭を取つて汗を拭ひ、忙然として居る。京「マア お茶でもお上になさいヨ、
何様な夢を御覧なさいましたか、顔色までお惡うございますヨ。お脊中をさすりませう。」ト、峯次郎
の脊後へまはり、肩へ手をかけ身をすり寄せて、脊を撫でにかゝる。峯「ナニ／＼お京さん、憚りだか
らお止しヨ、そして伯父さんが、お前に肩をもませなんぞすると、腹をお立ちなさるわな。」京「イ、エ
爺さんが毎度然う言ひますわ、峯は繁華所に育つた者だから、少しの間でもさぞ退屈だらう、倦きて居
るであらう。折節側へ行つて、氣を慰める様にするが能いと言つてお在でだから、今日もお爺さんに
然ういつて、お茶を拵へてまゐりましたヨ。アレサマア些とお肩をさすらせてお見んなさいヨ。其様
に障られるのも否かねえ、憎らしい。」ト言ひながら、笑みを含みて肩後から、横貌をさし覗く、お京
の顔の美麗しさ。田舎育ちと恥らひし、遠慮にいとゞ愛敬も、深き思ひをうちつけに、言はぬはい
ふに増鏡、合はせかゞみにあらねども、二個並びし顔と貌、似合ごゝろなる妹脊とは、互におもへど
峯次郎は、今も古郷の夢に見し、兩女の事を思ひ遣れば、衣通姫も楊貴妃も、かへりみる氣のあらざ

れど、粋な其の身の情から、すげなく振り捨てられもせず、殊によく〳〵慕へばこそ、歳も行かさる娘氣にて、それぞと悟らず品かたち、朝な夕なの心づけ、兼て定めし鎌倉の、兩女がなくば此方より言ひも寄るべきお京の容色、適れ惜しき娘なれど、後々のこと伯父のおもはく、義理ある女に疵つけて、末も遂げなく在られねば、春の心を押しつめ、種々胸をいためしが、漸うと思案して、峯「アノネお京さん、お前が私をマア憎いとは思はない樣だから、自惚らしい事を言ふがネ、腹を立ちは爲ないかえ。」ト、言はれてお京は嬉しさうに、京「オヤ何をお言ひでも私は、腹を立ちは致しませんヨ。夫れだから早くいつて聞かせてお吳んなさいましナ。」峯「ナニサ外の事でもないが、アノウお前は私と同作に鎌倉へ行く氣はないかえ。」京「オホ、、、私は隨分參り度いけれども。」峯「伯父さんが遣らないだらうし、お前も私の樣な男と、同作に路を行くのは否だらうネ。」京「イ、エ〳〵私はお前樣と同行にならば、何所へでも參りますヨ。アノウ此間も爺さんが戲言に、私へ然う言ひましたわ。今度、峯次郎が歸國る節、鎌倉へ同道に行かないか、往くならば當時中支度をして、來月峯次郎が彼地へ歸る節、同作に立たして遣らう、峯と夫婦になると、寔に能く似合ふだらうと言ひましたヨ。」ト思ひ切つて言ひ出せしが、さすがに恍惚子の恥かしく、顏に紅葉の夕映や、色づく木々の梢さへ、異なる國の人心も、變らぬ戀の路芝は、踏み心よき樂しみなれど、峯次郎は彌つゝしみ、峯「アハ、、、

ナニ伯父さんが、其樣な事を言ひなさるものか、そりやァ謔だ。しかしお前と私と情合も何も爲ない
で、堅くして連れ立つて往つて、鎌倉で諸藝を十分ならはせて、そして姿形容も又其の上に美麗しく
して、モウ〱鎌倉第一番といふ好男子を、お前の丈夫に看立てて上げたらば、伯父さんも安堵する
だらうし、お前も田舍の人を丈夫にするよりは、宜からうと思ふからサ。」ト、いへばお京は恨めしげ
に、岑次郎の顏をながめて涙ぐみ、京「イヽエ、私やァ否、外のお人と夫婦になる位ならば、何故に
鎌倉まで行きますものか。」ト、顏色あしく見えにける。

## 第四回

都へ來し旅寢の數もたどるまでむすび馴れたる草枕かな、ト詠みしは寒葉齋綾繼ぬしの秀逸なりか
し。爰に青森に久しく逗留せし岑次郎は、伯父の病氣も全快し、殊にお京の身の上までも、萬事岑次
郎にたのまれしゆゑ、其の意に隨ひお京を鎌倉へ伴ひ登る對談を定めしが、田舍育ちといへども都に
恥ぢぬ娘を連れる道中なれば、容易き事にあらずとて、心利きたる供の男を五人選み、岑次郎とお京
は通し駕籠同前にて、宿次の人足を雇ひ、實に大丈夫に心強き旅の空、はるけき路も苦にならで、一
人が故郷を遠ざかれば、一人が故郷へ近くなる、よしあし叱の山を越え、里を過ぎつゝ、日を重ね、程
なく鎌倉へ着きしかば、岑次郎はまづ萬事を捨ておき、頓て辰巳へ急ぎゆき、粂吉房吉に逢はんとて

小船をはしらす浪の上、折から此方の横合より、峯次郎の船へ漕ぎ近づく一艘の家根船、すだれを上けて、ふさ「峯さん待つてお呉んなはいヨ。峯さん引。」 峯「オヤ／＼房吉か、寔にマア能い所で逢つたなウ。オヤ女中も誰も居ないノ、只一人か。」ふさ「ア、私やアモウ／＼、お前はんが戀しくつて／＼ならない所で、今日和十さんがお前さんの、お歸んなすつた事を知らせて呉れましたから、種々と都合して一人でかけ出して、お前はんに逢ひに行きましたらば、例の所で此地へお出でだといふから、急いで追付いて來ましたわ。」 峯「然うか能く和十樣が、此身が昨日津輕から歸るのを知つたツけナウ。」ふさ「イ、エ和十さん許りぢやァありません、粂吉さんには櫻川の由さんが知らせましたとサ。」 峯「オヤ、それぢやァお粂も知つて居るのかナウ。」ふさ「ア、それだから私やア、お粂さんより先へ、お前樣にお目にかゝらうと狼狽へて出て來ましたわ。」ト、言ひつゝ峯次郎のかほを倩と看て涙をうかめ、ふさ「ナゼマア此樣に久しく遠い國へ行つて、歸らずにお出でなすつたらうネエ。憎らしい。私やアモウ死んでも了はうかと思ひましたわ。」 峯「ナンノつまらない事をいふぜ。マア／＼即時に委しく咄して聞かせようが、お前達の方で恨んで居る樣な事ぢやァないワナ。二三百里も遠い國へ行つて居たのだから、此方が懷かしくつて／＼、男泣きに泣いて許り居たわナ。マァ久しぶりだから目出度一杯やらかさう。」ト、これより峯次郎は房吉の船に乗り移り、一艘の舟をば歸して、一艘の舟にて其の船

宿にいたり、互に深き中なれば、絶えて久しき再會に、語る睦言さゞめごと、果てしなきまで聞えしが、枕元にて男の聲、「モシ／＼若旦那、サアお起きなさいませんか、モウお駕籠も出來ました。今朝ほどは早く御發足なさると、昨夜被仰つたが、却つて例より遲くなりました。お京樣／＼、サアお支度をなさいまし。」ト、言はれて目覺す岑次郎が、傍を看ればこはいかに、○○○○○○○○、お京も漸く目を覺し、岑次郎と同時に起き上り、顏赤らめて差俯き、恥かしさうなる身の素振、京「オヤオヤ何樣してマア、私は爰へ。」岑「エ、然んなら夢にお房だと。」京「エお房樣とは。」岑「エ何サ、エエお前がお房といふ名に名を改へた夢を見たといふ事サ。」京「オヤ私はお前樣の。」岑「エナニ。」京「アノお内妻樣になつた夢を見ましたわ。」ト、いひつゝ口に袖をあて、暫く牀に打臥して顏を上げずに居たりしが、此所は名に負ふ石橋の宿と呼びなす旅店の、奥に留りし夢にして、未だ鎌倉へは著せざる事なりければ、岑次郎もお京も胸を惱ましながら、此所より別けて路を急ぎ鎌倉へ歸り著きける。

へ夜見世の鈴も鈴蟲の、音にふり替る末の秋、宵に稻つみ思ふ事、夢に箕輪の遠砧。（中畧）

岑「ハテナあの淨瑠璃は何所だらう、珍らしい能い聲だナウお京さん。」トいへども、お京は俯向いて居るのみならず、眼に涙をうかめ忙然とせし樣子故、岑「オヤお京さん、また何をか思ひ出して泣くのか、ハヽア青森の爺さんが、お前を當地へ登せて置いて、後から直にお出での筈の約束で、まだ沙汰

がないから案じてお泣きのかえ、その事ならお案事でないョ、來月は古郷を埒明けて、此方へお登りだとサ。そしてお前にも美い男を丈夫にもたして、伯父樣も生涯此地に隱居するといつておよこしだから、少しの間心寂しからうが、辛防して待つてお在でな。」トいはれてお京は峯次郎の、顏を倩うちながめ、涙を袖にぬぐひつゝ、京「イヽエナァニ、田舍の爺さんは、來月是非とも當地へ出て來ると承きましたから、それは些もあんじはいたしませんョ。」峯「それでは他に何ぞ、泣くほど悲しい事があるのかえ。」京「イヽエ、お前さんこそ此の別莊へお出でなすつてから、鬱氣いでばつかりお出でなさいますものヲ。本宅の伯父さんが私を、この別莊へおよこしの節、迎島の別莊は、病身の峯が保養場だから、彼地へ行つたらば、何でも峯次郎を氣を付けて、大事にしてくれろと仰しやいましたから、私はモウ〳〵嬉しくつて、何でも心の届くだけ、お前樣の御用を滿足て上げようと、思ひこんで居りますのに、些ともお前樣は用を言ひつけてもお吳んなさらず、只否がつてばつかりお在でなさいますから、私は夫れが悲しうございますョ。何樣で遠い田舍者で氣が付きませんから、お前さんのお氣に入らないはずでございますが、何卒叱るとも打擲ともして、萬事を教訓て用を言ひ付けてお吳んなさいましナ。」ト在所に居たる其の節に、思ひ染めたる陸奧の、狭の細布胸合はぬ、男の心にあらずして、もの和かに戀衣の、模樣も見せし忍ぶ摺り、古郷の親も心の底に、ゆるして遠き鎌倉へ、

二個連れだつ旅の空、泊り〳〵の驛家で、幾度となく言ひ寄れど、解けぬ風俗する岑次郎が、賤しくて今はまた、伯父の心も古郷の、父の心に合絞り、隨落ごとは他見にも、推量さるゝ昨日今日、これほどまでに思ふのを、すこしは汲み分けくれそなもの、心がらとて釣らるゝも、庭のながめの筒井つゝ、ふりわけ髪の結なづけが、ありはせまいか此の身より、まさりし人が戀ひそめて、深くもきりのあるやらんと、兼て辰巳に二女まで、はなれぬ縁のありごとは、知らぬお京が戀慕の情、あはれと承知しながらも、楓とお房があるうへに、また此のお京と契りなば、これもつながる從弟同士、末の安堵なりがたしと、思案に暮れたる案じ顔。お京も溜息吐くばかり、惚れた生根を思ふほど、言はぬはこれぞ生娘の、いふに増れるものおもひ、涙の貌を洗ふとにや、勝手の方へ立つて行く。折しも降り來る春の雨、花の爲には父の恩と、いふか知らねど往來の人は、行きなやむが多くして、中にも年齢四十の上を、二ツ三ツも越したらんと思ふ尼一人、岑次郎が庭の垣にならびし、木戸の小家根の下へ立ち休らひ、晴れ間を暫時待つ貌なりけるか、雨はしきりに小止みもなし、いとわびしげなる風情なれば、岑次郎は看るにしのびず縁側より、垣を見越しながら聲をかけて呼び入れる。「モシ誰人か存じませんが、晴れ間も知れない空のけしきでございます。其所は軒の雫が落ちていけません、此方へ這入つてお休みなさいまし」ト聲掛けられて嬉し氣に、悦ぶ尼の形容、何となく氣高き風情のあ

か、顔の色も白やかに、艶々しく焚きすがれたる伽羅の香は、今も殘りて賤しげならず、由緒ありぬべき人なりければ、峯次郎は庭下駄をはきて、内より木戸をひらき、峯「サア御遠慮なく、此方へお出でなさるが宜うございます。」ト、やさしき詞に尼はよろこび、庭に入り、横緣に腰をかけて、丁寧に會釋しながら、尼「わたくしは、法恩寺村の近所の者でございますが、三圍の稲荷さまへ參詣致しましての歸り道、思はぬ雨に雨具もなく、難儀の所を情深い、お詞に便宜まして、暫時晴れ間の御願ひ、お邪魔を顧みず休足を致します。佐野のわたりの雪の日を、貧と福との違ひながら、御志は常世の君に、勝る情の雨の段、雪より深いお惠みと存じます。」ト、言ひ廻したる其の洒落は、不禮の言葉に似たれども、昔語りを引きごとに、主を賞する挨拶は、時頼朝臣を新作へたる芝居のおもむき、松下の禪尼と見ても、憎からぬ尼の風情に、峯次郎はゆかしく思ひ、煙草盆などさし出し、爐にたぎりたる蘆屋釜の湯を汲み、紫蘇の香煎をいれて尼にあたへ、峯「サアお湯を上げやせう、即時にお茶をこしらへるけれども、マアそのゆかりを一口お上んなせえ、そして其所は端近だ、最と此方へ寄つて、雨の晴れるまで寛りとおはなしなさいまし。私は常世の俤もないが、お前は故人中村大吉か、（中村大吉は歌舞伎役者の女形にて、古今にまれなる名人なりけり。）勤めた松下の禪尼より、まさつた風俗でお在でだが、定めて常體の尼法師ではお在でなさるまいネエ、奥ゆかしい様なお詞だ。」トいふ中尼は峯次郎の、顔を倩うち詠め、尼「モシ貴君

は當時目上に憂へがございますな、たしかにこれはお父上さまでございませう、然も目上に御兩人、ト言ひつゝ目を閉ぢ指を折りて、何をか算へ、尼「不躾ながらお一人は、伯父御さまでございませう。是れは早く御用心をなされまして、何卒愁へのない樣にしてお上げなされませ。」ト言ふにおどろく峯次郎。峯「ハテネ。それは思ひも寄らない事だ。勿論親父は病氣だが、持病の輕いのだから、何も其樣に苦勞にするほどの。」尼「イエ〳〵それは御油斷でございます。今日は、晝の内は無難でございますまいが、夜に入りますとお命の危い事がございます。其の時は早く當時までの醫者を止して、東のかのお醫師の藥をお上げなさいまし。然もなさらないと、御全快はございませぬ。また伯父御さまのかは、旅の路での御難儀がございまして、其の上日數十日のうちに、盜賊の御災難があつて、是れもお命に關る大變、たれをお救へなさいますには、三十里程の行程を、明後日あたりから、貴君が支度をなさいまして、お迎へなさらないければ助かりませぬ。其の代り然うなさると、當時貴君が種々と御苦勞になさる、御三人のお身の上も、御案じなさらずに事が熟談樣になりまして、三人御繁昌になりますから、必ず左樣なさいませ。」ト、言ひ出したる尼の言葉、疑はしけれど親父と伯父の、旅も病氣にもさし當る、事にしあれば空言とは、氣なしもならぬ大事の教へ、峯次郎は暫時言葉もなかりしが、峯「イヤ、これは思ひがけないことを聞きますが、お前は何樣して其樣な事を知つてお言ひなさるか、

實に奇妙な事たねえ。」尼「なる程お疑ひも御座いませうか、雨舎りの御恩返しと存じて、私の存じた道をもつて、お知らせ申すばかりでございます。御念ばらしに最う一事申しませう。今貴君のお心の中に、戀慕の情がありながら、遠慮してお在でなさることがございませうが、これも前世から定まつた御緣で、義理故彼是と愼んでお在でなさつても、兩方がお離別なさいますやうにはなりませぬ。」ト、心の底まで見貫く、神眼通の尼の一言、少しも違はぬ樣なれば、疑念を晴らし峯次郎、峯「なる程身に覺えのあるお前の敎道、實に感心いたしましたが、お前はマア何樣いふお方でございますネエ。」と、尋ねに尼も膝を進め、尼「ホンニ貴君のお心では、女の身にて仔細らしい、高慢な奴だと思召しませうが、何の緣でか人相の道を好みまして、若年時分から、精を出して其の業を習ひ覺えて、一ト通りの事は少しも違ひのない樣に、的當ることばを我ながら、女のいらざる無益の所爲と、途中棄てて仕舞ひましたが、兎に角覺えた業くれが、他の爲にも益になる時がありましたゆゑ、だん／＼尊い相學易術、辨へて察れば此の身の上も、及ばぬ願ひに心を痛め、苦を求めるの愚癡の念が、悟られました僥倖。」と、過ぎし事をも語り出でたり。

春色梅美婦禰卷之二　了

# 春色梅美婦禰 巻之三　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水 著

## 第五回

這れより暫時春水が、老婆心にてつゞる意見ぞと察し、尼の詞を假用て、兒女達へ教訓するを心得たまへ。然れば例の人情本の讀みくせならず、古き草紙を其の儘にうつすがごとし。再說彼の尼は、某次郎に向ひ、問はず語りの聞きぐるしく、言はずもがなと思さんが、一樹の陰の宿りさへ、他生の緣と聞き侍れば、ゆるして聞き解け給へかし。そも我が身の上は、幼き時に父に別れ、母と兒とに養はれ、世に便りなく活業せし中、母もほどなく身まかりしに、兒なるものの身もちよからず、心も惡しき不道人、酒と色とを過すのみか、勝負事さへ常の所爲、只一人なる妹をも、哀れとは思はずに、其の身の強慾非道から、此の身の十二になりし年、郭の娼家に賣られはべり。たまたま人に生まれ出て、幼き節より苦勞をかさね、他家の娘の花の春、正月小袖の羨ましと、思ふ間もなく川竹の、流れの中に沈められ、浮む瀬もなき悲しさに、淚で過す月と日は、夢のごとくに成長り、夜を晝とする勤

めの身、友傍輩や紋日の氣雜、苦しみ多き郭の常、歎きの數と客人の、逢ふさ切るさの其の中に、人相をよく觀察るお方、永く通ひてこの身を哀み、相學の事を深切に、教へられたる其の後に、自身で移す鏡の表、倩此の身の人相を、考へ察るに幾度か、慾目で見直し見改へても、自然に定まる運不運、面部の備へ我ながら、備はらさるを觀察めては、又爲方もなき因緣、一生涯を浮草の、憂きを重ねて開運せず、孤獨の相と悟りしより、悲しき中にも發明し、天をも恨みず情なき、人を咎める念を愼み、迷ひの雲のはれし後は、他人の榮えも羨まず、昨日と暮し今日と立ち、さりとも兎角、眉墨のいたづらしき髪化粧心細くも老いにけるかなと、詠まれし古き歌をさへ、今は我が身の上と諦め、最と恥かしき苦界の年の、明けるを待ちて其の節より、直さま姿を此の如く、改へて心も清々しく、緑を願ひし黒髪を、捨てて衣を墨染に、かはる浮世の吉凶を、心に止めねば氣も安く、一所不住の安樂さ、我が身の一代を知りたるは、人相を學びし此の身の德、幼い節のまゝにして、中年相を觀る事を、習はぬならば一生涯、及ばぬ願ひに心を苦しめ、叶はさる事に氣を懊まし、安堵する時はあるまじきに、數ならぬ身も陰陽の、道と五行の相剋を、學びしゆゑに貧しきも、苦にせぬ今の悦ばしさ。貴君も年の壯く在せば、まだ種々の苦と樂が、此の後とても在さんが、心を鎭め身を養ふ、事をたしなみ給へかし。長物語を申せし中に、雨は嬉しく青空の、日はまだ西に沒り給はず、又後日今日の御

嶋に参りなん。」と言ひつゝ、縁を這ひ下りて、飛石傳ひに庭を出づるを、半次郎は立ち上り、今宵は、
とゞめても、答へさへなく出で行きけり、世にも稀なる尼ならずや。是れより又例の詞書にて綴る、
半「イヤ奇妙な人が雨舎りをして、思ひがけもない事を聞かせられたが、何様したものだらう。何にして
も本宅の爺さんが、今夜大病になると聞いては、斯うしては居られない。伯父さんも道中に間違ひがあ
るといふではなしでは、捨てゝ置かれない事だ。」トいふ所へお京は立ち出で、京「兄さん、お見世の弁
助どんが参りました。」半「ハテナ、何ぞ用が出来たのか知らん、此所へ呼んで呉んな。」京「ハイ、只
今足を洗つて居ります。」といふ所へ手代の辨助は、勝手口から縁側の方へ出で来り、弁「ヘイ、御母公
さまから御口上でございます。」半「左様か、何の御用だの。」弁「イエナニ、御用と申すのでもございま
せぬ。御母公さまの仰しやいますには、今朝程から大旦那さまの御持病が、例よりは何分お悪い様子
で御座いますから、今晩は些とお見舞ながらお出でなさいまし。夫れとも貴君もお気遣しくば、明日
でもよろしうございます。多分お案じなさる程ではございませぬが、念の為にお知らせなさいます。
夫れに青森の旦那さまも、御道中で御病気で、何とかいふ宿に御逗留だと申して、御手紙が参りまし
たので。」いはれて扨はと思ひ当る、尼のをしへに符合の知らせ、胸轟かしてありけるが、半「ナニ人が来
ないでも、今日は今ッから爺さんの見舞に行かうとおもつて居た所だ、直に同道に行かう。お京さん

寂しからうが能く留守をしてお呉れよ。夫れとも寂しくッて行けないならば、私と同伴に本宅へお出でか。」菜「イ、エ、お傘さんやお鄰家のお繁さんと遊びますから、寂しくはございません、お留守を致しますヨ。伯父さんの御病氣が、何卒早く全快おなんなされば宜うございますヨネヱ、先刻のお咄の樣子では。」峯「エ先刻のはなしとは、ハ、ア お前もアノ尼の教へて呉れた事をお聞きのか。」菜「イエ委しくは聞きませんが、何だか種々と卜占の樣な事を申しました中に。」峯「ム、ヽ、お前の氣にかかるのは、伯父さんが道中でお煩ひだといふ事の、噂をお聞きのだらうか、それは私が今夜をすぐと、爺さんのお醫師さんを、症に合つたのと取り替へて、それから直に途中までお迎へに行くから、お案じでないヨ。」ト他の患へを忽ちに、察してやさしき峯次郎が、心立なら姿なら、申しぶんなき好男、但し浮薄でないゆゑに、惚れられもする惚れもして、皆それぞれに不實をせず、愛相盡かさぬ料簡なれば、他見で看るより苦勞も多く、凡そ程よき人と他人に賞められ、娘や唄女に惚れらるゝは、仲々心配のものにして、容易き事にはあらざれば、かならずしも羨み求めて、好色と呼ばれたがる事なかれ。又人情には少しも行き渡らず、衣裳形容と手道具にばかり氣をもみ、三文も錢の入る事には、友達へなすり付け、他見第一、口先暗愚驚しの若い衆當世の流行なり。嗚呼心底恥かしとは思はずや。流石に人情本でも讀み給ふ人々には、然ういふ樣なる氣障人なし、自然世間に通達し給ふゆゑ

か、夫れ信實の人情とは、何をかいふぞ、萬事實意にして察し心深く、物のあはれを知つて慎み立つ事なく、家業を精出し、折々は身分相應の樂しみをして、保養を心掛け、他に否がられぬ者をこそ、能く人情にゆきわたる好男とは賞すべし。いらざるお世話は置きにして、お京が惚れたる心の中を、再應しるせば峯次郎が、出でて行きたる其のあとに、遊びにきたるは鄰家の娘、お粂と稱ふ婀娜女。しげ「お京様、只今はお鍋どんをありがたう、モウ／＼今日は偏屈屋の老女様が、朝ツから母人様の所へ咄しに來てネ。」京「ヲヤ、偏屈屋とは何處でございましたつけネ。」しげ「ホンニまだお前には、咄した事が無かッたつけがネ、アノ米屋の家の伯母さんで、以前藤枠の御武家に、御老女を勤めて居たといふ老女さんだがネ、モウ／＼否な老女さんサ、夫れが面白くもない、他人のことを惡くいふ噂ばかりして居ますから、家内に聞いて居るのが否で／＼ならないところへ、お前さんが呼びにおこしてお呉れだから、能い幸ひに逃げ出して來ましたわ。」京「ヲヤ然うでございますか、御老女といふものは、根性のわるいに極つて居ますかネエ。」しげ「オホ、、、、然うでもありませんが、老女だからわるいものには、氣に合はないのでございませうヨ。」トいふ時しも、風がつたへて聞ゆる淨瑠理、「へまゝよ田舍も住みよかろとは、好いた同志の身の願ひ、うら山賤の手業さへ、何日おぼえて績はぬ、笑顔に愛もこぼれ萩。下畧

しゆ「オヤ〳〵美いこゑだねえ、そして何様も浄瑠理の文句には、モウ感心ことがつくつてあるねえ。」京「私には何様も解らない事がありますわ、田舎に生まれたものは、自然に野暮に育つから、悔しうございますヨ。」しゆ「オヤ〳〵、然うお言ひだがお前様を、田舎に育つたお嬢だといふものは一人もありませんヨ。私なんざこそ、繪土ッ兒の顔よごしといふでございますわ。」ト、正體もなき事をいふうちに、はや春の日も西へ沒り、入相の鐘しづかに聞え、もの寂しくぞなりにける。

是れよりお京が父の縡岑次郎の父の縡などを、續けて說かば其の道理は、解りやすかるべき事なれども、例の人情本の看官に、退屈をさせ申すやうになるべき事を恐れ、此の次の處はおなじみの、米八婀娜吉などのはなしに移りて、岑次郎の父と伯父との談は、後々著はして看せ參らせんと言ふ。

## 第六回

梅の花折らばこぼれん我が袖ににほひはうつせ家土産にせんト、素性法師の詠まれけん、實に花を惜しみ花を愛する深き心は、左こそあるらめ。寒梅の雪間に開くころよりして、立春の日數を算へ、花暦に其の季候を知る事をはかる風雅の遊人、又は物いふ花の手を誘引て梅見を樂しむ舟の中、洒落に杉田の遠路を好むもあれば、臥龍梅の草廬を問ふ古風振、古きも捨てねど新しき花を尋ぬれば、百

花園とも早年立ちて、新梅屋敷とは言はぬぞ、流行に遅れざる人と、喜久得が庭の梅、文好むてふ客人に、酒を嗜むうかれ男も、四季の詠めに缺くる事なき東の名所、こゝぞ浮名に隅田川の、甲斐あるけしき都鳥、我が思ふ人と同じ舟に、乗りても思ふ儘ならぬ、戀の諍から氣にならぬ、所爲もうしやの雁木に青く、人種々の梅見舟、堤の上より棧橋へ、下りる両個の手弱女の、梅の笑顔にまだ咲かぬ、櫻の目元ほんのりと、豔さし美人に勝りし唄女、前髪の斑々するを、細小き指にて撫で上げながら、お若「米さん、マアお待ちナネエ、根性の悪い、ア、苦しい／＼。」ト笑ひながら雁木を下りるは、例の駒娜吉なり。料理茶屋からかけ出し、戯れに路の前後を爭ひ来りし事と推察れたり。先に立ちし米八も、美しき顔を櫻色にして、彼のりゝしき眼元で、ちよいと脊後を振り向き、眞白なる歯を少し出して莞爾と笑ひ、米「オヤ／＼何だねえ、何も根性の悪い事を仕も爲ないのに其樣な事をお言ひだヨ。お前が足が遅くつて負けた癖に、ナホ、、、。」お若「夫れだつてもお前なんぞア、リアかけッ競だヨと、いふより早く私を突き除けて、先へかけ出した癖に、ア、引無術い／＼。」ト、胸をさすりながら棧ばしへかゝる。船頭二人舟より上り笑ひ顔にて、船「ア、モシ、おあぶなう御座いますぜ、何を其樣に喧嘩をなさるのでござります、サア／＼オッ卜危い。」ト、いひつゝ米八駒娜吉の手を引いて、舟の港坂の際にいたる。お若「サア米さんお這入りな。」米「ア、マア、お前先へお這入り。」お若「オヤ何故だ

エ。」米「なぜでもサ。」ト眞貌になつて彳み居る。あだ「アレサをかしいネエ、何故然うして居るのだネエ、エ米さん。」米「ナニネ、些と見て居ようと思ふ人が有るからだヨ。」あだ「何を看るのだえ、衆人は何樣でぶら／＼來る筈だから、打捨つてお置きな、私やア先へ這入るヨ。」ト言ひながら家根舟の家根裏へ、ちよいと手をかけて膝から先へ客間へ這入る。米八は舟の表に立つて居て、また、モウじれつてえヨウ。」ト何をか氣にしてじれながら、これも程なく舟へ這入る。船頭は家根越しに艫の方へ行き棹にて踈びし舟と小べりのあたるを乘り開く、一人は家根の内へ向ひ、あだ「米さん、何を其樣に肝癪をお發しなさるネ。後から衆人さんのお出でなさるまで、またお兩人でお樂しみなせえまし。お燗を付けませうか。」米「アイありがたうヨ、何最早寔に今日はネ、醉つて／＼いけないヨ、それだから些と醒してまた呑みませうヨ。ナウ婀娜吉さん。」あだ「ア、然うおしナ、それは能いがなにをお前たじれるのだえ、何ぞ氣に障る事でも有ツたのかえ。」ト聞けば米八は莞爾として、米「ナアニ、何も其樣なことがありは仕ないがネ。」ト笑つて居る。あだ「何だか寔に分らないヨ、モウ私やア又じれツ度くなるわネ、ヨウ米さん何だかお言ひなじれつたいネエ。」米「アハ、、、、、兩女でじれて早くお仕舞ひなせえ。」米あだ「ホ、、、、。」米「ナニサ、何も其樣に氣をもむ事もないがネ、丹樣がネエ。」あだ「エ。」米「ひよつとすると此所まで來る筈だからサ。」あだ「オヤ／＼然うかえ寔正にか、え、米樣嘘だらう。」

米「イ、エ實正サ。」あだ「なんだか譃らしい様だネエ、エ譃かえ實正かえ。」米「ア、ヒト笑つて居るぢやアないかね。」あだ「エ、モウじれつてえ、實正にお言ひなエネ。」米「夫れ御覧、おまへもじれるぢやアないかね。」あだ「それだつても、お前がじれつたい言ひ様をするからだわネ、實正ぢやアあるまいネ。」米「どうだか。」あだ「それ御覧な、則りじれさせる様な事をいふぢやアないかえ。」米「お前が其様に氣をもむから言はうネ。」あだ「ア、。」米「實はネ。」あだ「丹さんが来るかえ。」米「譃だヨホ、、、。」あだ「それ見たことか、譃だらうと思つたけれども。」米「けれども胸がどき／＼したかえ。」あだ「ナアニ、お前ぢやアあるまいし。」米「オヤ／＼否だネ、其身も私が然う言つたらば、顔色を變らしてじれつたがるぢやアないか。」あだ「イヤ大層にお言ひだヨ、まさか然うでもないわネ、お前も又何故其様な出たらめを言つたのだエ。」米「ナニネ、ちよいと鴈木に立つて居て見たらばネ、斯ういふ時に丹さんに約束をして、後から来て貰つた事も在つたッけと思つたから、お前をもじらして遣らうと思ひ付いて、然う言つたのさ。」あだ「左様かネエ、モウじれつてえ、併し何様も實正でもある様だわ。」米「ホヽヽ、、、相變らず疑ひのふかいねえ。」あだ「ナニサ、お前だつてもうたぐりの深い癖に。」米「そりやアやまた、似たものは夫婦ぢやアないか。」あだ「然うさ、お前と丹さんだわ。」米「私ばかりかえ、お前は夫婦ぢやアないのかえ。」あだ「そりやア夫婦の氣で居るけれども。」米「否にお言ひだネエ、夫婦の氣でないといへば、丹さ

んに言告けて遣らうと思つたけれども、マア堪忍して上げようネ。」あだ「ナニ堪忍して貰はないでも宜いヨ、堪忍しないのならば何樣おしだ。」米「丹さんの代りに斷うして上げるヨ。」トちよいと爪捻る。あだ「アレサ痛いヨ、お前が然うすると、此方も負けやア爲ないヨ、サア私が丹樣の代だヨ、コレ其方へ丈夫を爪ッて濟まふと思ふか。」米「オヤ〳〵否なおさん茂兵衛だ、角太郎さんの所なんぞへ、誰が行くものかホ、、、、。」あだ「ホ、、、、アレサ折角私が丈夫にならうと思つたら、お前が言紛て仕舞ふから行けないヨホ、、、、。」ト和合き同志が睦まじく、最初の恨み引きかへて、心底盡の姉娣、張りあふ意地の仇事も、解けてかたればなか〳〵に、素人の及ばぬ人情なるべし。米「それは左樣と、あんまり手間がとれるネエ。」あだ「ア、ネエ、ちよいと看てもらはうかネ。」舟「お迎へに行つて來やせうかネ。」米「何卒然うしてお呉れな、しかし行かないでも宜からうか、婀娜さんと私は寔に醉つてせつないから、先へ行つて舟に寐轉んで居ますと言つて來たんだから、あとで落著いて遊んで居るだらうヨ。」舟「左樣でございますか、私等も大そうに醉ひましたから、兩人ながらおいとまを貰つて、先へ來て一眠入り能い心持にやらかした所へ、お前さん方の聲がしたから、漸うに眼が覺めたのサ。お前さん方も衆人さんの來るまで、横になつてお在でなせえ、サアそして醉をさます藥をあげませう。これを少し上ると、又直に續けて呑んでも醉ひませんぜ。」米「オヤ〳〵ありがたう、梅の雫かえ、こ

おやア酒の毒消しには寔に妙だヨ」よね「ドレ私も貰はうヤ、ナヤ能い匂ひだねヱ。」米「サァお湯も二ッ汲みましたヨ。」あだ米「ありがたう〳〵、お前よく此の梅の雪をもつてお在でだッけネ。」米「ア、昨日やましろ河岸の旦那に、お貰ひ申しました。」米「すヤネヽ津藤さんは、久しく私達を呼んでお呉れでないねヱ。」よね「アヽ、その筈さ、衆藝人がはなれずに付いて居るもんだから、滅多に私達まで呼ばれる様には出來ないヨ。」米「ドレ些と横にならうや、お前もお寝轉びな。」ト、ちよいと横になる。綱吉も横に轉び、あだ「米さん、これをちよつと枕におしヨ、房吉様の擬箱があるヨ。」ト取つて遣る。よね「アヽ、能いヨ、お前のまくらにおしナ。」あだ「ナニ私やア遣れだヨ。」トいひながら、茶の口取をいれて來た、金平糖の菓子箇の、六角にこしらへた振り出し箱をまくらにする。兩女の美人の膝まくらき、石菖あやしみたまふべきが、梅暦にも辰巳の園にも、斯かる風情になる段取なし。何れの巻を讀みくらべて、合ふ事なるかと迷ひたまはん。夫は次の條下を讀み得て知るべし。

春色梅美婦禰巻之三了

# 春色梅美婦禰二編序

人情一家言の元祖、梅暦を辰巳園に開闢しより以來、惠みの花の四方に薫ひて、萬代不易の興味いよ／＼ふかきに、猶篇述す梅美婦禰、看官大人の高評好からん事を、板元は固より爲永軒中に至るまで、日本國中は太平一流、和語が通辭るほどならば、唐天竺の端土へも、御贔屓ねがふ米八が郷吉、實に古今の果報者、春鶯が生國ですら、米八の所行をしたひて、米吉と改名せし、歌妓の現に在るにて知るべし。はつか兎の毫の筆頭より、愛敬は世に婦佳川の、狂訓翁は大江戸の玉川なりけり。其處で尾張の春鶯も、身は御當地に壽美だ川、梅見の船の艫へなりとも、わりこんでもらひたさ、せめて師匠にゆかりの色香、萬代不易愛敬の、こぼれを此處に拾ひがき、是れでも序文の代作と、御邪魔ならじと願ふになん。

東都人情本一流の元祖、狂訓老人の門葉にて
尾張名古屋の好男子
今年よりして江戸ッ子の仲間入りする爲永連

市谷　芳訓亭爲永春鶯謹述

# 春色梅美婦禰　巻之四　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水　著

## 第七回

あだ「ネヱ米八樣、自分勝手だが、今日の樣にして來ると氣が張らないから、實に潤ひ過ぎるねえ、オヤお前の衿元の風體が違つた樣だね。」米「左樣かえ、否だねえ、向うの兼吉樣に剃つてもらつたがネ、最初に拔くとき、二三本拔き込んだ樣だと思つたつけ、私やアモウ衿元なんざア、無理にこしらへた樣なのは寔に嫌びだヨ。」あだ「ア、私もサ、それだがネ、お前の衿は何も否に剃つてありは爲ないヨ、恰好よく剃つてあるから、夫れで聞いたのサ。」米「左樣かえ、それに此の程は聞かれなくつて、お前と剃り合はないから、何樣も氣に入らないやうだわ。」あだ「然うかネ、此の頃にまた剃り合はうネエ。」米「ア、ドレお見せ。」ト婀娜吉の衿を撫でて見ながら、米「オヤ、お前のも例より些と恰好が違つた樣だヨ、誰に剃つてお貰ひだこ。」あだ「誰だッけかネ、忘れたこアノ何サ、お前が可笑しい孃だとお言ひのおとめさんか、無理に剃つて呉れたんだアネこ」米「ホ、、、否な孃だねえ、お前又太日中の

樣に、丹さんに衿をぬいてお貰ひなら能いのに。」あだ「オヤ、何日私が丹さんに、衿なんぞを剃つてもらつたらうねえ、其樣な事をしておくれの事は一度もないヨ、お前は毎度丹さんに、衿をこしらへてお貰ひか。」米「アヽ、其身の氣に向いた時は、何時でも剃つて呉れるヨ、今更お前は譃を吐くねえ。」あだ「すヤ何故エ。」米「それでも、丹さんが毎度然ういつたものヲ、婀娜吉の衿はお前のより、衿足が多分とある、お前のは法體衿だのなんのと、私を惡く言つたわオ。」あだ「すヤ譃をお言ひなネエ、ナニお前の衿足が惡いものかネ、そして私の衿を剃つてお呉れでなくつても、衿を見るぐらゐの事は有らうぢやアないか。」米「左樣サ、そりやア一緒に眠る時にはねえ。」あだ「オヤ否にお言ひだねえ。」米「夫れでも剃つて遣る時の事を、然う言つたものヲ。」あだ「左樣かえ、夫れぢやア言はうがネ、二三度丹さんに衿を剃つてもらつた事もあつたヨ。」米「それお察ナ、實は丹さんが其樣な咄を仕たことはないがネ、然う言つてお前を鏃いて察たのサ。」あだ「ホヽヽ、おそろしい米八さんだネエ、お前は左樣智慧があるから何樣も叶はない、夫れだから丹さんが、寔に〳〵お前には恐れて居るヨ。」米「よいヨ、今の返報を仕ようと思つて左樣は行かないヨ。それは然うとまア、房吉さん粂さんは何樣いふ料簡だらうネエ。」あだ「然うさネエ、何でも心の中ぢやア張り合ふ氣だらうヨ、姉娣でも何でも、此道ばつかりは爲方がないヨ、峯さんも兩女を意地娩はして察たい氣で居ると思はれるから、何れむつかしいのサネ

ど。」米「今日はお前も私も意地をはる料簡で、お互に依怙地な事もしたけれど、また斯うして寄ると何故最初ッから、斯ういふ鹽梅にして貰はなんだかと思ふやうだヨ。」あだ「ホンニ、それはお前の方に此とも無理はないヨ。何だといつても私の方が後手だものヲ、他人業にしてお察な、先の方へ肩を持つのが當然ぢやアないかえ、自分々々の勝手だからこそ、お前にも腹を立たしたり、此身も無法に氣をもんで、他人には後指をさされる樣に、心からで爲たんだわネ。私がお前だと、婀娜吉といふ字を見ても腹が立つて、風上にも置きたくないのだけれども、斯うして當時お互に便りになつて、和合く する樣になつたのは、何樣して〱、私に出來る事ではないヨ。みんなお前の心のをさめ樣が能いばつかりだヨ。それは私が言ふよりは、衆人が言ふ噂でも知れてあるが、實に丹さんも夫ればつかりは米八の料簡一ッで、斯ういふ譯になつたのだから、是れをわすれると冥利が惡いと、私に毎度言つてお聞かせだわ。」米「お前の樣に、然う行き屆いた事は言はれないものだわネ。私の心の治めの能いのぢやアないヨ、お前の料簡の能いのだわネ。私が又お前ならばサ、米八といふものが以前に在れば猶の事面白い、此方も和歌町では他も知つた體だから、如彼見る影もない米八風情に、張り合ひ負けをしては他人のもの笑ひだと、お前の心に思つた節には、私を突き出させる手段も、お前の智慧でよる所爲なら、何の造作もない事だらうけれども、其處が如在でないお前だから、私も他人に賞めさして

おくれで、お前も好意な心だといはれる様に、噂をさせるのは何様しても、私なんぞが及ぶ所ではないヨ、丹さんも然う言つて居るヨ。」ト、信實の咄に兩女とも、解けし心の猶やさしく、酒の癖とてうとうとと、眠るは隅田の太郎河岸、高瀬の船の行き合ひに、田舎詞の聲高く、なにをか言ふが耳に入り、目を覺したる米八が、船の中を見まはして、米「オヤ、まだ房吉さんも粂吉さんも來ないのかえ。」船どう「左様サ、まだでございます。」米「そして婀娜吉さんはエ。」船「オイ婀娜吉さんエ、私もたしかに聞きは仕ませんが、今日は津藤さんの催しで、櫻川のや榮次さん和十様、凡而唄女衆と太夫衆で、十人ばかり平清へお出でなさつた筈ださうでございます。何故またお前さんは、婀娜吉さんの事をお聞きなさいますのだネ。」ト言はれて氣の付く米八は、前後の事を倩と、考へて察れば去りしころ、山の喧嘩の折からに、櫻川善孝が仲人にて、婀娜吉と和睦なせしより、表向をば打ち解けたれども、まだしみ/\と寄り合うて、睦まじくせし事もなし、只他人傳に婀娜吉も、心の底は世の中の、義理を思うて後悔し、ならう事なら信實に、互の心を明かし合ひ、丹次郎の事は兩女して、相談づくになし度き由た、朝夕心にかけるとか、然はいへ互に意地くらべ、張り爭ひしを今更に、負けて此方が賴みもせず、誤り詞は婀娜吉も、言はぬはさすが他見を恥ぢて、居もする事か然もあらば、何卒打解け兩方が、賴もしづくになし度きものと、思ひし故にまさ/\しく、今此の舟に一座せし、夢さへ見た

ゐものなるか、縱ひ此の後何事が、あるとも此の身は心を定め、丹次郎の爲には戀の意地も、まけて一途に温厚しく、折もありなば婀娜吉と、今見し夢の睦まじき、風情を語る中となり、丹次郎にも安堵させ、世間の人にも賞めらるゝ、情の道の理知りと、なりなんもいざと此の節から、思ひ込んだる米八が、誠屆いて後々は、願ひの通りになりしとぞ。

此の一條は、いまだ辰巳の園の、卷の末にいたらぬ時節の夢にして、彼の卷に綴り漏らせしを、こゝにおくれてしるすものなり、看客これを察してよみたまへ。

再說米八は夢覺めて、猶忙然と考へ事をして居る所に、堤の上にて聲かしましく、房吉「ヲヤ〳〵、吉どん止してお吳れヨウ。」ト言ひながら、長命寺の前の上り口を驅け出して、鴈木の下り口に到る。其の後から、粂吉も續いて驅け來る、實に一雙の美人なり。船の中より米八は聲をかけて、米「オヤーヤ、房さん粂さん、何をして其樣にマア騷ぐのだえ。そして大層に遲かつたネエ。」トいひつゝ舟の先のところへ立ち出で、土手を看上げながら、米「三人で恍惚け合つて居るのだから、長いはずかネエ。」房「イヤ〳〵嘘をお言ひな、何恍惚けて居るものかネエ。」ト言ひながら、鴈木を下りて棧ばしへ懸る。粂「コレサ房さん、何で私を置き逃げにおしだネエ。」ト、驅け下りて先へ舟に乘りにかゝる。岸に佇む三美人、三幅對の花の貌、その畫像は國直子が、さし畫に摸寫せん筆にて知るべし。金

の波を樓から、見下す河岸に蘆の瀬を、切り開きたる新規の堀割、うしやの鳫木へ眞直に、乗るも嬉しさ自在の葭の、波間をかきわけて都鳥も遊ぶなるべし。

## 第八回

かへるさの道に關屋の里もあれや隅田河原のあかぬながめに、とは照高院御門跡、御下向の時、隅田川の船の中にて、よませたまひし御歌なりとかや。そも〳〵此の隅田川の説、むかし彼是と言ひぬれど、古のさまは知らず、今のなかめの風流なる、四季の風景和かに、流れに遊ぶ鳥の名の、都にまけぬ名所とは、都人も賞められしぞ、東八はむきの耳言にはあらず、實に絶景の眺めにて、猶更ものいふ花の堤に絶えず、舟と陸との遊び、雪月花の風流、三國無雙といふべきのみ。爰に彼の米八が乗りし家根船は、うしやといへる茶屋の鳫木にもやひありしが、米八は夢の覺めたる折しも、茶やに残りし粂吉が、房吉の脊後より驅け來りて、船に乗りしゆゑ、ふさ「アレサお待ちなネエ。」ト爭ひながら乗り後れ、急げばよろめく下り坂、船頭は飛び出して、「オットおあぶなうございます。」ト手をとつて船の中へ伴ふ。其の跡より船頭吉五郎、折詰を三ツ四ツ手に提げて、峯次郎の供をしてぶらり〳〵と堤を下りて、吉「サア旦那、御乗船なせえまし、おあぶなうございますヨ。」ト言ひながら、港板を押へる。峯「オイ來た。」ト手を出して、吉五郎の持ち來りし折詰をうけとり、峯「旦那大分お手間が取れま

したよ、トッとおあぶなうございます。」岑「アイ〳〵大丈夫サ、ドレ。」ト言ひつゝ渡板を引きよせる様に、手をかけてちよいと飛び乗り、見れば今先へ乗りたる粂吉房吉米八の三人ともに、寐たる風俗をして居るゆゑ、岑「オヤ〳〵、みんな寐た振をして居るのか、燕が巣を造けた様だ。」トいゝながら客の間へ這入る。「オホヽヽハヽヽヽヽ。」ト三人が一時に起き上る。米「オヤ岑さん、まことにモウ待ち草臥れましたわ、サア此所の眞中へお這入んなさいヨ。」くめふさ二人「サア此所へお出でなさいまし。」岑「ドレ〳〵如斯か、ア、チット窮屈だナア 引、酔つた〳〵何も角も忘れるやうだ。」米「今日は旦那お珍らしく大呑みをなせえましたネ。」岑「何様した事か、其様に呑みも為ないで強勢に酔ひやした。前後を忘れる様サ。イヤ忘れるといへば今の枝を何様した。」米「今の梅の枝かえ、水溜の中へ（これは船中入れる手桶の事なり）入れてございますよ、餘程能い木振だネエ。」岑「然うか、それは能くお心付かれましたネ。堀へ鳥渡寄るから、持つて行つて遣らうと思つて、折らせて來たのだが、喜久烏が庭の梅は、別に能い様に思ふから可笑しいものだ。」米「イ、エ、何様しても別に能うございますわ。」ふさ「アノ梅を慈愛がるものは、お祖師さまを信心するものだとサ。」くめ「オヤ〳〵、何だか些と解らない様だネ、ホヽヽヽ。」米「ホヽヽヽ、實に少しわからないネエ。」岑「折節如此わからない事をいふから可笑しいヨ。」ふさ「イヤ、それでも浄心寺のお説法で、然う言ひましたわ。」岑「そして梅を戀慈がる人といふも可笑

しい、梅を愛す人と言へば能いのに、御說法で然ういつたも無えもんだハ、、、。」米「アハ、、、、女中衆のお供をして步行くと、年中妙な言ひぐさを聞きますぜ、ハ、、、サア出しますヨ、宜うございますかえ。」峯「オイよし〳〵。」米「能いヨお出しナ。」舟「オツト來た。」ト水棹をとる。くめ「オヤ定さん、新規の堀割をお通りな。」定「ハイ〳〵、新規の堀割を通ります、眞實に此所から眞直に、堀の棧橋まで一漕に乘つて行かれるなら、何樣も餘程奇妙でございますヨ、ネエ旦那。」峯「然うサなう、成程山谷堀の衆人も活氣な事をしたヨナウ。」舟「左樣サ、それといふのも莊家さまだの、船がゝりのお役人樣だのが、お慈悲深い御心から出來ましたのサ、マア私等をはじめ向うへ來るものは、大きに宜うございます、向う越しの衆もよしサ、わづかの河普請の樣だけれども、幾程の人が悦ぶか知れやア仕ませんに。」峯「然うサなう、左樣言ふ中に此所が新規の堀わりだハ、、、。」米「サア粂吉さん、新規の所へ來たヨホ、、、。」くめ「オヤ然うかえ、實にねえ眞直だけ好情な樣だネエ。」峯「アハ、、、、本か繪ぢやァあるまいし、なんでも新しい事をば新板といふから可笑しいナウ。」ト言ふ折柄、船ははやくも金波樓の下の棧橋へ著きて、粂吉房吉峯次郎は、山谷堀の船宿、若竹のお津賀の處へいたる。米八は兼て峯次郎に、賴み置きし私用あれば、戀が窪にゆきて此糸に逢ひ、彼のおいらんの情人、作次郎の身の上の事などを、深切に尋問はせ、此糸のために郭外の事は、米八の身に承諾けて世話をす

るは、丹次郎と其の身の中を、此糸に首尾して貰ひし恩返し、これ米八が實情の、生實ぞと察したまへ。爰に又峯次郎は、兼て戀が窪の郭に、家業の事の用談ありて、若竹に粂吉と房吉を留め置き、只一人にて出で行き、若竹の二階には、姊娣二個がさし向ひ、退屈なれば四隅をながめ、ふさ「お粂さん寂しいねえ。」くめ「アヽ、退屈だヨ、下にも兼さんばかりだわ。」ふさ「すヤお津賀さんは。」くめ「アノ今ネ、司さんの所まで、急用があつてお出でだとサ。」ふさ「然うかえ、道理で靜ゥかだと思ひましたわ。峯さんも能い加減に歸つてお出でなら宜いねえ。」ふさ「すヤ〳〵、お前の樣に峯さん〳〵と、戀しがる者もないねえ。」ふさ「すヤ、何も戀しいといふのぢやア有りませんわネ、お前ぢやアあるまいし、只斯うして居るのが退屈だから、早く歸つてお呉れならば能いと言つたこだアネ。お前の樣にお屋敷者じやアあるまいし、何其樣にしつこく爲ますものか。」くめ「すヤ否な事をお言ひだ、何時私が濕濃くした事がありますヨ、其樣事を言つてお呉れでないヨ、氣障だねえ。」ふさ「すヤ大變に腹をお立ちだネー、そんなに怒心おなりで無くても宜いはネ、をかアしい。」くめ「ヨイヨ、可笑しくつても何樣でお前の樣に才智ぢやアないから、他に馬鹿にばかりされて居ますヨ。」ふさ「すヤ誰が馬鹿にしたえ。」くめ「アイサ誰だか當てゝ御覽な。」ふさ「何樣して知れるものかネ。お前に付いて歩行きは爲まいし。」くめ「アレお峯サ、姊のお前でさへもその通り、馬鹿にして言ひ込めるものヲ、他人は馬鹿にする筈サ。」ト、言ひ、

ばお房は憤然となり、少し膝を突き寄せながら、ふさ「オヤ、私には知れないから知れないと言つたのが、お前を馬鹿にするとお言ひのかえ、をかしいネエ。そんな無理を言ふもんぢやァございません。何程目上のお前だからといつても、餘りだねえ。」ト、言ふをお粂は聞くよりも、眼に角たてゝお房を見つめ、理害を言はんと座をすゝみしが、さすがに艷しき御小姓育ち、倩前後を考へれば、身のいたうらから兩親の、ゆるさぬ戀の私事、其の罰ゆゑに我が夫と、思ふ男を姉の爲に、爭ふ樣なる此の仕儀を、他人が聞きなばはづかしき、姉娣して戀草の、結びも遂げぬ所爲とや言はれん、たしなむ場だと堪へつゝ、顏をそむけて物言はず。お房も無言つて他所目をなせしが、不圖目に留りし鸚鵡石の古本を、手に取り上げひらきて見れば、正に是れ、

おのぶ　　岩井紫若

私ィ國さア、奥州父御ャ母御に別れ申して、お江戸さァ吉原へ姉樣の御在るとの事、夫れさア便りに女兒の身として難儀思へをして來申したには、海山物語の有る事だつて。

ト、讀み見て俄に心付き、宮城野信夫を其の身の上に、思ひ比べて恥かしき、姉へ不幸の我儘勝手、今更何と言解も、生中隔てゝ改まらば、腹立つ事も餘計ならんと、思案して早涙ぐむ女の情。ふさ「姉

上さん。」くめ「エ、何だえ。」ふさ「コレ御覧、此の時の芝居は、紫若が實に能かつたぢやアありませんかネエ。」くめ「オヤそれは梅我が死去る少し以前にした、白石噺のあうむ石だヨ。私やア先刻一人で讀んで泣いて居たヨ。實にモウ〳〵宮城野信夫の姉妹を、梅我と紫若の兄弟で勤めるのだもの、實にモウ情が移つてネ、見て居る中に涙が零れてネ、私やア顔が上げられない樣だつたわネ。實正にあれこそ姉妹はないネエ。」ふさ「アヽ、ネエ。」ト言ひながら、粂吉の貌を見れば、涙を膝へはら〳〵、心の底に知られねど、戀といふ字を他にして、察ればたしなき姉妹、澤山さうにせし事は、勿體ないと後悔の、姉を思ふ姉心、詞にそれぞと言ひ出さね、互に泣くが信實の、涙に顯はす和合、頼もしくこそ思はるれ。

春水曰く、右にしるす粂吉と房吉は、彼の米八と婀娜吉の趣意と同じ。然れどもお粂お房は、實の姉妹にして、戀爭ひの中におのづから血脈の信情あれば、その心底米八仇吉の旨と違ひ、情と義理の意味ある體を推量して讀み給へといふ。

又曰ふ、此の次の卷は、春も過ぎ卯月もたちて、皐月より六月にいたるものがたりなり。

春色梅美婦禰卷之四 了

# 春色梅美婦禰　巻之五　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第九回

毎年五月中旬より、郭中の茶屋一同に甘露梅を製して、正月の年玉に用ゐる。今年の夏製へたるは、翌々年の春の配りとす。其の製法の日は、見板の唄女手透なるが、懇意の茶屋へ手傳ひに寄り集まる事なり。然れば郭の四季を述べたる端唄にも、其の由を作れり。

うたへ卯の花の更衣、主の定紋染めさせて、紅さし指もくれなゐの、茶屋に藝者は梅巻の、承諾けて見せたり承けさせる、行きかふ人の其の中に、もしや夫れかと胸さわぎ。

これぞ流行唄郭の夏のおもむきなり。さて或茶亭の軒をうかゞひ看れば、則ち梅巻の賑しさ。お亀「アノチヨイト喜助どん、梅をおくれなヨウ。」ト言ひながら、仲之町の往來を看て居る風情、最も婀娜なる藝者なり。名を呼ばれたる手代はお亀に向ひ、喜「オヤ最う巻いて仕舞つたのかえ、大そう速いネ、又後で解けるやうぢやァ恐れるぜ。」かめ「オヤよしておくんなはいヨ、憚りながら甘露梅にやァ、妙を

得て居ますョ。」喜「それは其の筈サ、五十年から梅を卷きなさるだらう。」かめ「否ア、な喜助どんだナ、そしてマア私の年は幾歳だとお思ひだエ。」喜「大かた六十八九だらうと思つて居ます。」かめ「ア、六の字を捨つてサ。」喜「何エ、十八九といふのかえ、へゝ些とむしが能いネ、お猿半次さんの影法師、小文さんの唐人の俄時分に、升屋のお千さんを弘めッ子で、つれて出たのはお前だらう。」かめ「何だ此の禿大倉か、覺悟えて居ろ。」ト言ひつゝ梅の實をなげつける。當てが外れて、喜助の脇の所に居たる藝者の貌へあたる。梅を打ち付けられたる藝者は、肝走ッたる大きな聲にて、よし「お龜さん痛いョ、私に科はないョ、迷惑だネエ。」かめ「オヤお菅さん、眞平御免ョ、つい仕たンだから。」喜「大方内證で色事の意趣でもありやせう、アハ、、、、。」かめ「又此の老夫めた口を出すョ、無言つて引込んでゐてト二軒へでもお出で。」●「又夫婦喧嘩かえ、うるさいネエ。」△「毎度鄰近所の厄介だョ。」喜「何樣も喫はサ妬心で困りますテ、全體私に惚れきつて居ります。」かめ「何だと、其樣な大層な言をいふと口が曲るこョ。」喜「口が曲るのなら癇症だらう。」みな／＼「ホヽ、、、ハ、、、、。」ト笑ふ折柄、此の座にゐたる一個の藝者、往來を見ながら側に居る傍輩の藝者の袖を引いて、△「アレお邑さん、鳥渡御覽。」ト言ふを聞いてしづかに貌を上げるは、一心になつて梅を卷き居たりしゆゑなるべし。△「アレサ早くお看といふのに。」△「何だえ。」ト長を看る。△「ヨ、モウ最う通つて仕舞つたわネ。」ト顏を顰めるは此

の孃達の癖か。二「オヤ誰人だえ。」ト小聲にてきく。▲「山谷の文松さんサ。」×「オヤお鶴さんの墮落のかえ。」▲「然うサ。」イ「まことに好情で能い人だネエ。」▲「そして誹諧が上手だとネエ。」二「左樣かえ、オヤ山谷で思ひ出した、吉野の家へ使を遣らうヤ。」▲「三味線屋かえ。」二「ア、三絃は吉野に限るとねえ。」▲「ア、其の中にも、一中節と河東節の三絃は、彼吉野家に限ると、忠次さんや河洲さんがお言ひだわ。」トたわいもなき事を噺してゐる。そのかたはらにては、■「お玉さん、美音さんは此の頃些ともお出でなはんないネエ。」口「ア、聞いておくれな、憎らしいぢやアないかネ、昨日汁春亭までお出でなすつて、此方へはお出でなさらないヨ。」■「オヤ左樣かえ、何樣してそれが知れたのだえ、言傳でもなさつたのかえ。」■「イイエ鯉升さんと政次さんが堤でお目にかゝつたとサ。」■「なんとか言つておよこしのかえ。」口「アイサお聞きヨ、其の言傳がネ、アノウいづれ來春行くから、松の内仕舞つて居るがいいと、色唄妓連中にさう言つてくんなとお言ひだツサ。」■「オヤ私等の事をかえ、憎い口だねえ、そしてマア此の五月から來春とは餘りだヨ。」△「ナニサ然うお言ひなすつても、京町のには大戀慕で居さつしやるから、此の晦日か六月の朔日には、急度お富士さまへ出かけてお出でなはるヨ。」トいふ傍には何やらん、然も嬉しさうなる顏色にて、井「實正にかえ、欺かしちやア否だヨ。」口「ナニ欺かすものかネ、私は他人の事でも自分の事でも、投げやりにしたり程ばかり言つて仕舞ふのは嫌ひだヨ。其の代りお前私に

美味いものでも旨らないと合點しないヨ」ト笑ひたからいふのは、定めて馳走をさせる程の恩がありと察せられたり。

それ姦しと讀ませる文字の綾、いとむつかしき婦人の人情、なか／＼うかつに容易からず、元來今日は梅巻に、寄り集まりし唄女の數々、およそ二三十人の人々なれば、所存々々の事をはなし合ひて、梅を紫蘇巻にこしらゆる賑しさ、通客兼て知りたまふべし。

斯かるはかなき事なれども、また面白き物がたりの有りもやするかと思ふ通君のおいと察して、此の梅巻の日を聞き定めて遊びに來り、さま／＼肴などを取り寄せて、馳走する事も多くならはしとなれり。

若い女房「サア お潤が出來たから、些と氣をお付けな、あんまり精を出すと蟲が出るヨ」みな／＼「ハイ有難う、最う些とだから巻いて仕舞ひますヨ。」女「ナニサマア お休みヨ、まだ餘つぽど有るだらうわネ。」[illegible]「イ、エ不殘で一升ばかりでございますわ、夫れだから仕舞つてと申すのでございますヨ。」女房「寔に速いねえ、一斗五升の梅だから、何様に速くこしらへても、二日の餘日もかゝるだらうと思つたのに、大勢といふものは早い物だネエ、さぞ衆人がお勞れだらう。」●「オヤ紫蘇が足りませんヨ。」女房「オヤ左様かえ、喜助や清市さんが大の屋に居るさうだから、紫蘇をとつて來なヨ。」

「ハイ。」ト言ひながら出て行く。折から見世先へ清元富士太夫來かゝりて、富士「ヤレ／＼騒々しい事だぞ。」トいひながら多くのげいしやを見まはし、すこしやくしやのみぶりこわいろにて、富士「いづれを看ても山家育ち。」そめ「何だとえ、富士さん、悪くお洒落でないヨ、小野小町衣通姫といふ美人が居るわネ。」富士「そりやア何處に。」たみ「私だヨ憚りながら。」富士「ハイ／＼恐れ入りました、餘り手強くッて、モウ後の詞が出なくなつた。」たみ「オホヽヽヽ、富士さん閉口かえ。」富士「ハテサ、色氣のない悪口は。」たみ「好男のたしなみかえ。」富士「違へねえ。」たみ「それは左様と、お前は和歌水の旦那かえ。」富士「左様サ。即時に呼びによこすヨ。」たみ「なんぶん宜しく。」そめ「はやくお出でなネエ、お喜名さんが待つてお在でだから。」富士「ヘン色ぢやア有るまいし。」ト言ひながら行き過ぎる。ほどなく表を通りかゝる婦多川の米八此の梅巻の中にまじり居たる唄女に、知己の者あるゆゑ立ち止まりて、米「お袖さん此の間は久しく。」そで「オヤ／＼米八さん爰に久しくお目にかゝらなかつたネエ、マアお寄んなはいヨ。」米「ハイマア、鳥渡花屋敷まで往つて参りますヨ。」ト大勢の藝者にも、程よく挨拶して別れて行く跡にて、郭の藝者衆が何とか難癖付ける筈、少しは疵もあるべきを、賞める許りで謗り人なく、自然なる愛敬は、世界へ廣く行きわたりし、此の巻中は言ふに及ばず、梅ごよみから御馴染の、米八故と知られたり。そめ「ナウお民さん、何様してお米さんの様なものが、宅抱唄女にあつたらうか不思議だヨネエ。」たみ「オヤ／＼、宅抱唄女だからとい

つて、見世の唄女だからといつて、別に人間に變りがあるものかネヱ。」米「然うさネ、おいらんも辻君も、元は只の娘だから、別にされちやア惡い役に當つた人間が迷惑だヨ。」米「ナニサ、ヤひどく理窟言ひだネヱ、そりやア人間に種の變りもあるまいが、私の樣な愚鈍もあれば、米八さんとやらの樣な發明な者があるから、不思議だと言つたのサ。」トつまらぬ事を爭ふも、心隔てのなき故にて、氣に障るといふ事もなし。折しも五歳許りの可愛らしき、男の兒を脊負うて來たる女、門口から、女「お染さん、お民さん、和歌木へお座敷。」そめ「アヽヨ愛兒樣能くお使にお出でだネヘ。」ト此とお上こなはいよ。」そめ「坊すヤ〳〵お否かえ。」ト云へば、兒を脊負ひし女は氣の毒さうに、女「アレサ、お頭をふるものおやア。ござりいません、アイと被仰いまし。」民「乳母や、尾張屋の伯父さん所へ行かうヨウ。」女「アイ參りませう。」ト笑ひながら衆人へむかひ、女「然やうならば誰人も。」一同「ハイ〳〵左樣なら。」此の時お染は奥のかたを看て、大きなる聲、そめ「御内室さんえ、眞にモウじれつたうござりいますネヱ。」なか「ナアニ、早くお出でヨ、まだ大勢お在でだから、直に仕舞はれるヨ、お座敷が濟んだら、歸りに急度お寄りヨ、御馳走をするから。」二人「オヤ〳〵嬉しい、樂しみにして往つて參りませう。」ト立上り、跡に殘る唄女達に會釋して、たみそめ「ハイどなたも何卒。」△●×「早く明いたらお出でなねへ、待つて居ますヨ。」

斯くて長き日もはや未ノ下刻となり、梅も大概卷き仕舞ひて、婀娜と好意との藝者たちも、手を洗ひ帶を結び直しなどして、各指の先を眞赤に染めなしたるは、爪紅をさしたるよりも潤はしく、其の四邊を片付け、緣先をはうきにてはき出す折しも、諸商人の往來して、

「飴や芳飴名代々々。」「植木屋ァ〳〵。」げいしや「オヤ〳〵能い箱庭だね。」▲「ア、ホンニネエ、院へ紗の切を覆にして、螢を入れたら宜からうネエ。」●「ア、ねえ、然うしたら嘸涼しい樣だらう。」▲「オヤ最う行つて仕舞ふヨ。」●「憎らしい最うちつと見せれば能いのに。」▲「意地の惡い植木屋だヨウ。」

●「モウ近日に午の日だから、九郎助稻荷の御緣日へ行つてお買ひな。」▲「ア、然うせうねえ。」

毎月午の日、京町二丁目九郎助稻荷の緣日とて、小間物商人植木屋など、種々の見世をいだして賑やかなり。因に云ふ、抑九郎助稻荷大明神と申し奉るは、往昔保元年中より、今天保亥年まで凡そ六百八十餘年の舊社にて、舊地は田町砂利場のほとりに有りしとぞ。九郎助の名の發意を尋ぬるに、右大將賴朝卿の御治世に、下總の城主千葉介自胤の一族千葉九郎助といふ人專ら信仰せし故に、九郎助稻荷と其の頃の俗の稱へ初めしと言ひ傳ふ。然れば其の昔、廣々たる武藏野の端手、淺草の原の田家の者の、利益を蒙る事數々にて、中昔の頃までは、今よりもなほ名高き社にて、明曆の頃にいたり、益靈驗著く、感應神德擧けてかぞへがたし。爰に明曆二年

元吉原今の地に引き移りし頃、神社一字無之く、仍つて此の御神の徳を慕ひ、家内安全愛敬の護りを願はんと、則ち蒙御免り當地へ遷座なし奉り、郭中の鎮守の神と崇め尊信せざる者もなく、毎年七月二十一日當社の祭禮有之り、太兵衛といふ人始めて、練物踊等を出させしより、八月に至るまで郭中の諸所より、種々の思ひ付きにて、をどり狂言などを出して、郭の賑ひ十倍の繁昌なりしかば、毎年の稲荷祭を怠らず、面白き趣向の絶えざりしが、何時となく九郎助稲荷の祭禮に付いて、出し初めたる俄狂言の基を忘れ、たゞ俄の催しは郭の遊びの全盛とのみ心得たるは、いと本意なし。斯かりしかば、九郎助稲荷の神徳も漸々にかくれ、五町の町には町毎に稲荷の宮を勧請し、九郎助の名は郭外に知られたれども、里には却つて信心をわすれ、京町二丁目の稲荷と思ひて、年久しき開郭最初總鎮守と知るもの既に絶えんとせしを、當時の郭に好古の老人寄りつどひて、神徳を古代の如く尊み、靈驗を祈らせ、氏子の繁榮あらまほしと、再興なしたる九郎助まつり、月々賑ふ縁日の催しこそはいとめでたし。

右は戀が窪のむかしを、當時の郭に準へしるせしこの物がたりに因み、郭の茶亭一文舎がはなしを、其の儘に著はしつゝ、好古の諸君當世の流行子に告げ奉りぬ。

## 第十回

富士の高根を軒端にぞ見る、と詠ぜし歌の江戸自慢、その名残にや、今は猶數々移す夏の富士、多かる中にとりわけて、貴賤の羣集賑ひは、名にし負うたる北の里に、近き小丘の淺間の、宮居の側の細路次を、富士長家とさへ稱へ來て、五月の晦日六月の、朔日の日の參詣は、所がらとて炎天に、素貌の雪の美人も多く、大悲閣より引續く、馬道通の往來は、行き合ひ押し合ひ富士屋と山野に、入りて休足するも又、お山に緣ある心なるか。扨參詣の其の中に、唄女と見えたる風俗の娘二人、手に麥藁細工の蛇の笹に付いたるを提げて、同じく芥子細工の蛇のさし込みを、三ツ四ツ簪へつけて、前後に歩行むは、郭より出でし富士參りの戻り道、その序に觀世音へ廻りしと察えて、隨身門よりの四辻茶の角を北へさして、速足に急ぎ、小形扇にて胸の所をあふぎながら、先になりたる傍輩の唄女を呼びかけ、ふじ「アレサお夏さん、お待ちなねえ、寔に速い足だヨ。」なつ「イ、エ、私の足は早いのではないヨ、お前が遲いのだヨ。」トいふ折しも、三味藤といふ人來かゝりて、藤「モシとんだ論が始まりやしたネ、私が仲人に這入りやせう。」なつ「オヤ藤さん如麥さん、おそろひで。」藤「モシ毎度美麗でございますネ。」如「夫れだから彼の人が。」藤「あつくなつて居なさるも無理はないネ。」なつ「なんでございますとえ憎らしい。」ト扇にて打つまねをする。藤「トキニ最うお歸りかえ。」なつ「眞の信心參りでございます、夫れに今日は約束もありますし、はやく歸らないと見板がやかましくッてなりませんヨ。」

たゞ一はかない身の上でございますネヱ。」なつ「察しておくんなはいヨ。」梅「ハイ〳〵、お察し申しまする。」梅「早く引取ッて貰へばいい。」なつ「何卒宜しく。」ト莞爾笑顔のうつくしさ、いかなる人の花なりや、後の條下に委しく記す。○なつ「藤さんえ、お前はんは餘りでございますネ。」梅「何故ヱ。」なつ「何故ぢやァ有りません、三絃は今日入用のでございますわネ。」梅「先刻小僧に持たせて上げやしたつけ、夫れぢやァ大かた、お前と行きちがひになりやしたらう、約束を間違へるやうな實なしぢやァ有りやせん。」

作者曰く、這の藤といふ人は、實名吉野伊兵衛とて、鳥越四丁目木戸際の三味線師なり、諢名を不二丸といふ、洒落人にて、郭中男女の熟者たちをはじめ、大概此の人に三味線を誂へたのなり、近世稀なる三味線細工の上手なり。

なつ「イヤ夫れぢやァ、私の留守になつた所へ届いたんでございますネ、堪忍して上げませう、ト、、ネ、。」梅「ハイ夫れはありがたいネ、マァ弾いて御覧なせえ。何樣に弾き能くなりやしたらう。マァ絲卷にすこし疵が有りやしたから、取り替へて置きやしたヨ。」なつ「夫れは有り難うヨ。」梅「ちよいと榎木へでも寄りやせうか。」（名物のそば屋のことなり。）なつ「イ、エ然うしちやァ居られませんヨ。其の代り明晩松風亭へ行きませう。」梅「成程其の方が宜からうネ。彼の人も是非つれて往きやすぜ。」なつ「イ、エ、お前

様と如麥さん許りで澤山でございますヨ。」夏「ヘン甘味くいふもんだネ、彼の人ばかりで澤山だが、聞いて呆れやす。」ふじ「サアお夏さん、遅くなるよ、能い加減に恍惚情演なねえ、如麥さん、お前さんと私が迷惑でございますネエ。」如「アハ、、、違へねえ。」なつ「オヤ、夫れぢやア藤さんと私が情人の様だネエ。をかしなお富士さんだヨ。」藤「アハ、、、承けて居て然う思はれちやア詰らねえ、夫んなら何れ松庄で。」なつ「かならずともに。」藤「お夏待つて居るぞいナウ。」ト 役者のせりふのまね。 如「イヨ紀の國屋ア引。」なつ「アレサ戯言ぢやア有りません。急度でございますヨ。」ト別れ行く後見送りて、藤「お夏孃も、鵬居さんにやア餘程墮落ちて居る様子だナウ。」如「大キにサ、併し何様も婀娜な女だヨ。」藤「辰巳風で、郭の人品を等分に調合したといふ物だから、好意で下卑ないから當時の利きものサ。」如「三味線も能く彈くさうだが、一中節も巧者に語るといふこつた。」藤「諸藝くらからずサ。」如「イヤ此間仲之町で、婦多川へ往つた米八を見かけたつけが、何様も感心する風俗だナウ。唐琴屋の宅藝者の時分から、別段に評判も能かつたが、今ぢやア大達者になつたといふ噂だが、成るほど少しも言ひ分のない唄女だノ。」藤「然うサ、寔に名の高いものになりやした、イヤお富士も此の頃は明淨と能くなりやしたネ。」如「容儀も美麗し、歳の往かないに仕ちやア如才でない孃サネエ。」ト、咄しながら隨身門を潛りて、觀世音へ詣で、東谷の石段を下りて、三社の方へ歩行み、宮戸川の牀机に休らふ。此の時

までに巳ノ刻の鐘聲、辨天山より告げ渡り、炎宮堪へがたくして、奥山の樹下茂の枝に、凉風を待つ人のみぞ多かりける。

春色梅美婦禰卷之五了

# 春色梅美婦禰　卷之六　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水　著

## 第十一回

神社佛閣繁榮の名所多き其の中に、例も賑ふ參詣は、觀音大士の靈場にて、名高き美人の茶屋娘、愛敬で上手に客を招ぶ、程よき年増女も順ぐりに、絶えぬは道理老女から、三平自慢の女にも、夫れ相應に利益ある、老女の辨天お多福と、呼び習はせし辨才天、色の中店情の奧山、樂しみ多き境内は筆に盡させぬ壯觀なり。然れば西谷東谷、勝りおとらぬ茶見世の軒、喜久家といへる門先にて、互に行き合ふ三四人、何れも誹諧の友達と見ゆる風俗なり。その名を理喜象、來丸なんどといふ人、來「イヤこれは山谷の大將達如何。」象「ヤこれは女殺連の好男子方。」象「なんとマア、嚴しい暑サぢやアごぜえませんか。」象「實に仰せの如く堪へ難い暑氣サネ。」象「トキニモウ御歸庵のお心かネ。」理喜「ナーサ是れから富士參詣サ。」象「ハヽア、夫れぢやア何所へか、御通行のお戻りだネ。夫れなら今う一度山中お附合は如何。」來「山又山のお付合かナ。」理「ハヽヽヽとんだ山姥だ、然らばまづお足休めの

上の事サ。」ト喜久家の見世へ這入る。ちやみせの女房「オヤ理喜さん、是れは衆君達も能う入らつしやいました」ト茶を汲み出し、煙草盆を運び、それ／＼に挨拶をする中、客は新たに掛りし軒の提灯、扁目の名をよみ又額面を看ながら、理「ハヽア面白い發句の額が出來やしたネ、六花庵の讃で幅が大きに出か。」喜「これは何所から掛けやした。」女房「ハイ六花庵と被仰いますのは、新堀の御方で私どもの御客様でございます。」喜「ハア然うかネ、何れも面白い句だ。」理「トキニ理喜先生は、山内の仙とも謂ひつべき仁だが、未だ廬談ばかりで、實錄の隨落絕えてなしといふ事だが、何樣も不働な事だネ。不佞抔が奥山へ、日々に這入り込んで居ようものならば、楊弓場茶店を始めとして、凡そ境内の娘子共は、門並隨落させて人種を盡きさせやすぜ、アハヽヽヽ、併し左樣女に氣をもませるも罪かネ。」喜「いや大そうな御託宣が出た。」理喜「何とも挨拶に困るネ。」女「モシ理喜象子が心意氣で、一句うかみやしたら」喜「ハテネ、何といふ秀逸だか、早く承りませう。」喜「ハヽヽヽ、文付けやひとりも出來ぬ娘の子サ、アハヽヽヽ、何と秀逸でござりませう。」喜「とんだ晉子のもおちだネハヽヽヽ。」理「ヘンそねむな／＼、能有る鷹は爪を隠すと、むかしから言ふとほり、何れ色情師といふものは、世間へ仰山とさせずに、深情を催すのが極祕サ。燕雀なんぞ大鵬の心を知らん、奥山に隨落在る事をサ。」喜「イヤハヤ大壯な事を申し上げるナウ。然う言へば此方もまだ言ふ事がありやす。まづ足下の

色情といつぱ。」藻「ハヽヽヽヽヽ、何だか古風な言ひ出しだなア、鳴物師でも頼まうか、物語にでも
なる樣だ。」糸「まづ暫く東西〳〵。」如「頃は彌生の始めつかた。」理喜「こなたの亭には雛鳥の。」如「コ
レサコレサ然うまぜつ反しちやア行かねえ。」藻「時候の所はまア止してネ、早解りになせえ。」如「然
うサ、左樣いたしませう、エヘヽ〳〵、まづ理喜象子がさる矢場の娘に大恍惚で、其所の宅へしけ込
まうといふ心底で、住所を聞いた處が、よく〳〵貧窮な客と見たものだから。」理喜「エ何だ。」如「マ
ア無言つて聞きなせえ。エヽ引、其故で能い加減に會釋つて猶豫を挨拶をして、本宅を些とも教導へ
ないさうサ。」理喜「モシ〳〵、お言葉の半途だが、彼の女の宅へは以前に行きやしたぜ。」ト眞顔になつ
ていふ。如「大方見世を仕舞つて歸る所を、送り狼でかネ。」理喜「やツかましい、モウ〳〵洗濯やの門
口連中には困るぜ。」女房「モシ理喜さん、大分誹謗くお言はれなされますねエ。」トいふ處へ、此の茶店
より程近き名代の手打蕎麥、鶺玉庵から十六七の可愛らしき娘出で來り、理喜象に向ひ、腰を屈め愛
敬を含みて、娘「理喜さん、お歸りに些とお寄んなはいましョ。」理喜「ナイお龜孃今に往くヨ。」娘「僞言
しちやア否でございますョ。」と言ひ捨てて、あどけなく驅け出してゆく跡にて、理喜象は高慢らしく
友達に向ひ、咳拂ひをして、理喜「へヽこあの通り、論より證據十目の見る所、十指の指さす所、好男
の本家本元はこれで被御座。」糸「イヤ悃れた狂氣だ、足へ灸でもすゑなせえ。」トこれより理喜象を、

大勢にて居め遊びしが、はや黄昏の景色となれば、茶人茶店を立ち出でて、隨神門より美味路を北の方へと歩行りけり。往來は群集の富士詣で、境内は靜けき猿寺の、長屋に假の一人住み、心は洒落ても浪人の、不自由多き判次郎、緒岸より此の所へ引移りしも、此糸が意地と情、實心に、隱して見繼ぐ憂き苦勞、嘸かし心を痛めるならんと、思へど當時は何事も、任せぬ身なれば爲方なく、情の合力を塵器には、せじと朝夕氣を付けて、勝手元から小遣も、詰めて費えを厭ふ故、流石に全盛此糸が、手當に不足あらざるほど、前後をはかりて安堵させん、心がけにて衣類をば、恥かしからぬをたしなみて、實においらんの間夫なりと、他人も羨む衣裳の好み、常々心を用ゐれば、自然と好風なる身の拵へ、元來女に好かるゝ風俗、土地柄として近所にも、有娜なる年増女美麗しき、娘もおほき軒並で、朝湯の歸りに寐起きの笑顔、互に挨拶重なりて、いつしか心易だても、惚れた情から馴染も早く、氣詰りもなき判次郎の、宅のゑ出入る五六人、何れも年齡十八九から、二十六七の婦人と察したまへ。

「判さん。今お起きか、昨日私が少しおそく起きたらば、晝過ぎまでゝ寐られちやァ丈夫になる晉が迷惑だ。今ッから氣を付けないと、困るのなんのと他人の事を惡くお言ひで、自分は何だねえ、いゝ先刻辨天山の午刻をうつたわね。私なんぞは最早毘沙門さまへ、お百度をあけて、歸りに百觀音さまの地内で、久アしく遊んで來たんだァネ。」判「ナニノ一朝ばかり、世間並に起きたといつて、

其様に自慢をする事があるものか、そして今朝のお百度は、彼情人の爲に百度参りをしたのだから、何も賞められるほどの朝起でもないわナ。」今「すや譃をお言ひな。何其様な事で毘沙門さまへ参るものかねえ、母人が。」判「此言を言ひません様に、情人と何所へ参つてもやかましく言はれない様に、そして何卒富の札を拾つて、それが突留めに出まして、三百兩當つて、それで二個が十分、美服を著ます様にと願つたのだらう。」今「ホヽヽヽヽ、ナニ其様な勝手な事を御願掛けにするものかネ、お前はんぢやアあるまいし。」トいふ折しも浴衣を抱へて、風呂から歸り來る娘 長口より、●「オヤ何だエ、朝ツから夫婦喧嘩をして。」今「すヤ、今湯にお出でのか、遲い事だねえ、ハヽア昨夜は何だネ、夫れぢやア、今朝は起きられない筈だ憎らしい。」●「オヤノヽヽ、偶他人より先へ起きたと思つて、其様な事をお言ひでない。一年中朝寐坊の辭に。」ト言ひながら判次郎の貌を見て、●「判さん便りがありましたかえ。」今「オヤ誰の便りがえ。」●「アレサ郭からサ。」今「然うかえ、私やアまたお好さんのことかと思つて、悔しかつたわ。」●「オホヽヽヽヽ、とんだ他嫉妬だネエ。」今「ホヽヽヽ、たれだつても衆女が、此様に判さんを慈愛がつて上げるのに、情人にもならないで折節來る廣耕地のお好さんなんぞに、情人になられちやア、間尺に合はないわネ。此糸さんは實正の御内儀さんも同様だから、爲方がないが、他の女と情通をおしだと合點爲ないヨ。」今「お前とならば能いといふのかえ。」ト入り

來たら又一個の馴娜者。「判様、今朝は私の所へ來て御飯をお上りな、美味い物があるから、」●「イヤミヤ、わたいの處でもネ、今朝は判さんの好きな、餡かけの御豆腐をおっ母人がこしらへたから、お茶のお飯をあげるといつて、今私が湯から歸りがけに呼びに寄つたのだァネ。」●「オト、、、、茶飯を焚いて判さんをお呼びでは、判さんが念佛講の坊さんの樣だネエ。」●「オヤ私も判さんも、お茶の御膳が好きだから、母人がわざ〳〵焚いたのだわネ。念佛講なんぞと否なことをお言ひでないヨ、今日はお富士さまだわネ緣起のわりい。」●「ホ、、、、〳〵。」

## 第十二回

姦しと、讀むとはいへどもうら若き、女同士は自然、言葉に花も愛敬も、あれば流石に憎からず、娘一人に聟八人の、たとへにあらで判次郎の、獨居を問うて朝夕に、寄り集うたる馴娜者達、今日もかはらず遊びに來り、雨の降る日のつれ〴〵とて、腰を居ゑたる長咄し、各意種々の方言ごしらも、興ある色の世事愛相、いづれも劣らぬ娘の中に、お園といふ茶店の娘、まだ年齢十六七、いと温厚しき風俗なるが、判次郎の側にありし中本を手に取り上げ、そい「オヤ判様、此の本は面白さうだネエ、そしてまだ彫刻にならない草稿らしいが、寫本のかネエ、オヤ繪も出入つてあるヨ。」判「ナニ、それは販元にすこし故障があつて、板行に出來ないが、寔に面白く著作つた本だヨ。マア鳥渡讀んで御覽な

その「然うかえ。」ト言ひながら、他の娘の種々なる咄に耳に入れずして、五六冊ある中本の、上中下を選り出し、外題をはじめ序文と口畫、殘らず念入れ讀む風情は、人情本の博覽にて、梅暦と春告鳥をば、諳記で文句をいふ娘なるべし。

その「オヤ好い題號だネ。春色乙女雛形。オヤ〱此の作者の名も、例の人とは少し違ふ樣だネエ。エ判さん、此の字は狂詠舍かえ。」判「然うサ、さすがに人情本通だ、能く讀んだの。」その「ホヽヽ、博識だらうネ。狂詠舍爲永春曉作、オヤこれは狂訓亭といふ作者の連葉かえ、エ判さん。」判「ナニサ、その爲永といふ作者の連中は、弟子か師匠か些とも無差別だヨ、山谷堀の若竹のお津賀さんの、挨合つた條下が澤山あつて、春水の著作つた所よりか、お津賀さんの草稿の方が、面白いといふ事だヨ。」その「オヤ〱、それで中本の中に、爲永津賀女と名が出してあるのかネエ。」ト言ひつゝ、首畫と本文の間の條下を讀む。美艷仙女香、ふけとりぐすり。初みどり「ホンニ仙女香の白粉と、髮垢の藥を貰つて貰はうヤ。」ト口のうちにていひながら、これより本文にかゝる。看官其の心得にて讀ませたまへかし。仇にこそ、散ると見るらめ君にみなうつろひにける花のこゝろを、と古人も今の世も、戀の心にかはりなく、互に思ひ思はれて、終にうき身を果すもあれば、つらい悲しい辛苦を凌ぎ、行末とげて睦ましく、樂しむ夫婦も稀には有るが、凡そ戀路の中々に、哀れは寔に底意も知れ、惚れた性根も顯はれて、頼もしき事限りなけ

れど、仕合悪き縁と縁は、哀れな事も口惜しき、所謂も堪へて惚れた同志、倦きも倦かれもせぬ身にて、親の無慈悲や世間の義理に、妨げられて其れ限りに、離別れて浮名の立つ類は、はかなく悔しき戀ならめ。月に村雲花に風、春とはいへど更けて行く、朧月夜の陰寒き、踏みも忍びて或家の、門に窺ふ艶男、戸口に寄りて佇めば、早くもそれと知りたるか、掛金の際に立ち寄る人氣、表の男も察してか、聲をひそめて戸に口寄せ、清「お夏か。」なつ「アイ清さんかえ、お待ちよ。」トいひつゝ、戸を明け出迎ふは、唄女姿の一個の娘、歳は二八を多くは越えじ、寝まきの儘のしどけなく、花の顔ばせ月の眉、雪の膚は白粉も、およばぬ色の愛敬もの、人迷はせの笑凹はあれど、今宵は憂きに沈みてや、涙の眼元露けき袂に拭ふさへ、哀れにこそは思はるれ。忍びし男も涙ごゑ、清「未練らしいが、實に頃日はなつかしかつたぜ。」ト四邊を見廻し、清「母人は。」なつ「ナニネ、今夜ア裏の奥の家へ通夜に往つて、酒を呑み過して寐て居るといふから、心配はないヨ、マア其戸を〆めて、鍵をかけておくれな。」トそれより牀のうへに伴ひ、なつ「マア何から咄さうか、種々と相談仕たい事が溜つて有るから、急にいはれないヨ。」清「左様言はれて察ると、悔しい事と腹の立つたのも、ぐにや〱となつて仕舞ふが、此身がお前に逢はれない樣になつて居るのに、此間母人が來て、藪から棒にお夏と、左樣言ふから、此の後は薩張と離別れてくれろと、お前の口上にして談じつけるから、おいらも男の端くれだから、腹が立

たうではあるめえか。それだけれども、未練らしく思はれるも、外聞が惡いと料簡して濟ましたが、心の中ぢやァ何樣なだらう、何でもお前の行狀を見て、其の上に覺悟を仕ようと思つて、胸をさすつて居たがナ。」なつ「すりや左樣かえ、マァ私やァその事は少しも知らないヨ、私やァ只此間、お前が私の所から借りて行つた金をかへさない一件で、母人と言ひ爭つてお歸りだから、夫れで腹を立つてお出ででないのだと許り思つて居たけれども、餘り久しく逢はないから、文をあけたのだァネ。それに母人が是非他人の慰者になれといふから、左樣なつちやァお前の顔も立たず、私も今まで席勤ばかりで通したのに、何も母人の榮華をするために、餘計の慾をかわきたくもないから、事に依つたらばお前と相談して、死んでも仕まはうかと思ふヨ。」ト涙を落して男の膝にすがりつく。淸「オヤとんだ事を言ふナウ、其樣に容易く死んでなるものか、何も死ぬほどの事でもねえわな。」なつ「イヽエ、それだがネ、先達中から經水久悶いから、母人に隱して醫師さまに看て貰つたら、妊身に違ひないと言ふからネ、何樣しても只平氣で家内にやァ居られないヨ、ナニ母人とはいふものゝ、些と許りの金で爺の手を放れて、十二の節から今の母人の手に著けられたのだけれども、最早今まで澤山活業いで置いたから、今私が家を出ても恩にかけられる理はないヨ、爺が死なずに居ると、今まで此の家に居やァ爲ないワネ。」淸「それだつて、親といふ名があるから、是非とも此方が下に付いて、萬事を爲ないければ

ならないかノ。先頃お前が咄した事が有つたッけが、幼兒い節に別れたといふ、姉さんの行方は、丈
だに些とも心あたりの所が知れないかナウ。」なつ「イヤ、モウ、少しは聞き出したがネ、其の姉さんを貰つ
た人が、田舎へ引込んで後に、段々仕合が悪くなつて、姉さんをば女郎衆にしたつサ。其れから私が
種々と人を頼んで、聞き合はして貰つたらネ、モウ其の女郎屋には居なくつて、今ぢやア遠くへ身請
されて行つたといふ事だから、迚ても私の力にはならないヨ。」丹「ハテナ困るナウ、お前も此身も親
身の縁のある人がないから、まさかの時に心細くツて行けねえ、腹變りの兄弟が在るのだけれども、
死んだ母人が不理窟な事を言つたので、此身まで日陰者になつて、成長くなつても音信不通だから行
けないのサ。」なつ「オヤく、お前にも兄さんか姉さんがあるのかえ、私やア始めて聞いたヨ。」丹「左
樣だらう、これまで誰にも咄した事がないから、夫れだけれども此身のは、現在立派な家の旦那か、
實の兄さんだつけが、今ぢやア根岸の方へ若隠居をして仕まつたといふから、尋ねても逢ふ樣にはな
るまいヨ。」なつ「それは左樣と淸さん、お前まア性根をすゑて、一ツ思案をしておくれな、私やアモウ
斯うして居るのが、沁々否でならないよ。」ト、思ひ切つたる顔色にて、詞に出さねど惚れた身には、
心の底も推量られて、不便彌増す男の情。丹「其樣ならば、覺悟を極めて此の土地を放れもする氣か。」
なつ「アヽ、萬一二個が添はれずば、否でも死んでおくれな。」ト、言ひつゝ涙をはらく、男も堪へ

ず涙に咽せ、背「それ程までに思ふのか。」なつ「ア、慈愛相だと思つておくれな。」ト、我から心を惱まして、戀には曇る胸の闇、何となる身かしら露や、無分別なる若い同志、哀れな事のみ語らひける。

狂訓亭門人　爲永春曉著

お園は判次郎の傍にて、右にしるせし人情本の、哀れな段に餘念なく、夢中の様になりし間、此家に集ひし娘達は、忍び足してお園を出しぬき、衆女こそ〳〵と立ち歸り、置き逃げにする戲れも、亦是れ遊びの常例なるべし。斯くとも知らず彼のお園は、本讀み終つて眼に涙、その「ア、引モウ〳〵かはいさうだネエ、オヤ私を置き逃げにして、衆女歸つたのかえ、憎らしいネエ。」判「ナニ只今、隱れる様にお前を置き逃げにして歸つたのだ。」その「オヤ然うかえ。」ト言ひながら、涙の眼元その儘に、笑顏をなして門口を、出づる折しも此糸の、内密の用を頼まれて、此所に入り來る辰巳の米八、丁度お園と摺り合ひける。

此の後又、いかに咄の續きがなるや、その新趣向を知らんとならば、第三編をよみ給へといふ。

春色梅美婦禰巻之六　了

# 春色梅美婦禰三編序

近江國坂田郡、筑摩の鍋祭は古くよりあり。此の社は稲食を司り給ふ。構取りて鍋に隱れたる祭がなし、祭祀にかならず靈應ましまして、是れを怖る。されば一度嫁したる女は、一枚をいたゞき、二度嫁する女なれば二枚を用ゐる、三度の婦人は三枚を用ゐる、神幸の後に供することなりとか。男あまた持てりし女は、とにかく見苦しと男の數よりへらして供すれば、たちまち神のたゝらせ給ひて、病むことすみやかなる故に、是非なく數の如くなして、祈れば病おこたるとかや。されば古人の秀逸に、

あふみなるつくまのまつりとくせなんつれなき人の鍋の數見む

と恨みたり。また發句には、

君が代や筑摩まつりの鍋ひとつ

と、こは泰平の世を祝し、また男女の道の正しきをいひたりける、愛でたき秀句と謂ひつべし。是れふりも猶めでたき教への絲は、春水ぬしの書なりけり。元づく所は孔孟も、同じ道なる事なれども、かの生まの持藥でも、鰻のかばやき程には用ゐず、ア、妙なるかな狂訓亭の、筆の幣、これ一流の風調か、濱の眞砂の數よりも、多き中にもこの直作は、たゞひなくまた新しき、うがちなる、美名に

の花の人情を、むすめ子たちにしらする僞の船ともならんと、問屋に代りひいき連、子供のときの疱瘡に、一皮むいたる面の皮を、またあつくしてしかいふ。

眞柴庵

東都　鷲　雪　識

鶯のこゝにもなくや梅見船　眞柴庵

醉ひざめを土手にあゆむや梅見船　爲雪

覗きこむ月にはづかし梅見船　長枝

春風にふかれながらや梅見船　梅雪庵

酒の香ははこび入りけり梅見船　柳雅

和かし人のはなしや梅見船　松塘

鶯のやさしき聲やうめみ船　吹雪庵

# 春色梅美婦禰　巻之七

梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第十三回

麥藁細工の蛇を片手にさげて、判次郎の門ぐちを這入る婀娜者。米「判さんお靜かだネヱ。」ト言ひながら、莞爾笑つて履ぬぎの所より奥を覗く。判次郎は中敷居の障子を明けて、判「オヤ米八さんか、サア此方へお上りな。」米「アイお獨りかえ。」トいひながら上にあがる。判「アヽ獨りサ、實に寂しくつてならねへ。時に大分早くお出かけだが、ハヽアお富士さまの歸りだネ。」米「オヤそんなに早かアありませんぜ、最早午時は餘つほどすぎましたヨ、お前はんはどうかしてお在でなはるネヘ。」判「エ最早そんなかネ、わたしやア今起きやした。」米「いま起きたぢやアありませんヨ、判さんお前はんもあんまり然うお仕だやアわるいヨ、私も丹さんで覺えがあるがネ、婦女が斷うやつて、お前はんを不自由のないやうにして置きなはるなア、並大體なこつちやアありませんぜ、夫れにお前はんが浮氣らしい事をなすつちやア、あんまり婦女が可愛さうだヨ、私がこんな意見がましい事をいふと可笑し

いけれども、自分で苦勞をして覺えがありますがネ、亭主も同樣に思つて居る男を手放して、可愛をして居るのは、モウ氣が氣なもんぢやァありませんョ、お前はんも些たァ娼女の心をも察してお見なはいな。」ト身に入れたる米八が、意見の言語に判次郎は、不審はれねば稍暫し、考へて居たりしが、判「米八さん、お前をかしな事を言ひなさるが、何樣も私にやァ解らないぜ、何かえ此身が何ぞ浮氣でもしたと思つて言ひなさるのかネ。」米「アレサお實似けでないョ、而も私が見屆けたからサ、それもお仕の事なら仕方もないがネ、娼女の顏をつぶす樣な事をお致ぢやァ、折角たのまれて居る私が、娼女にすまないから、何所までも娼女になり代つて、憎まれ口を利かなくつちやァならないから、どうぞヱ判さん、あんまり野暮な樣だけれども、世話をやかせないやうにしておくんなはいナ。」判「ヨウ米八さん、おめへが見屆けたと言ふからにやァ、まんざら種のねえ事でもありやすめえが、何所で私が何樣したのだヱ。」ト、少し腹を立ちし思入にていふ。米「アレ、お前はん腹をお立ちぢやァ悪いわネ、わちきやァほんの深切づくで、お話談をするのに、然う腹なんぞをお立てぢやァ、何樣も話談が落合はないわネ。」判「ナニ腹を立ちは仕やせんけれども、思ひも付かねえことを言はれたからツイ。」米「イヽエ、思ひも付かないとは言はれないョ、然うお言ひなら言ひますがネ、今私が來る時に、這家から出た十七八の、實情に可愛らしい娘は、ありやァお前はんの何だヱ。」判「アハヽヽヽアノ娘の

事をとやかう言ふのかえハ、、、、、、、。」米「アレサ、笑つて許り居ないやァ解らないョ。」判「ナニありやァ鄰裏に居る娘サ。」米「それがどうして來たのだエ。」判「いま湯の歸りだと言つて、ちよいと寄つて往つたのョ。」米「オヤ、それに何故あんなになみだぐんで、眼のふちをあかくして居たのだねえ。」判「エ。」米「お隱しでないョ、そりやァお前はんが斯うやつて、獨身でお在でなはるうへに、日前を能くして女小娘とお附合ぢやァ、是非左樣なるのは無理もないョ、そりやァお前はんの方ぢやァいくら堅くお仕でも、婦人の方でおとなしく致ちやァ置かないからネ、それでもお前はんの心ひとつで、程々に仕てあひしらつてお置きなはるのと、又そこへ恍惚け込むのとは氣の置き所ひとつでありますぜ。お前はんが何所までも、娼女が苦勞を仕なはるのを、可愛さうな事だと思つてお在でなはれば、他女が何と言つても其の方へ心の向くもんでもなし、よしんば義理づくで然ういふ譯におなりでも、そりやァ當座のことで、深く斯うといふ譯になる事ちやァありますまいと、わたしやァ思ひます、す。何も彼も行き屆いてお在でなはるお前はんに、こんな事を言ふのは出過ぎた事をいふ樣で、大きにお世話だとお思ひなはらうけれども、これも娼女とお前はんの事を、思ふからの事でありますからネ、惡くおもはないでおくんなはいョ。」ト、深實言語にあらはれて、行き渡りたる米八が、意見もさすが馴婦女、世の情も知りぬいた、辰巳風女と知られけり。されども判次郎は、お侯なき身の舊衣

とはおもへども、斯くまで思ひきはめし米八、今言ひ解くとも實情とせじ、折こそあらめと心をさだめ、判「何時にかはらねえお前の深切、ほんに親身も及びやせん、猶此のうへは心を用ゐて、お前や此糸の深切を無に仕ねえ樣に仕やせう。」ト、聞いて米八も心落居て、米「然う思つておくんなはりやア、私も言ひ甲斐があつて、どんなにか嬉しいヨ。」ト言ひながら懷より、一通の手紙と一包の金を出して、米「これは此間娼女から、お前はんにお屆け申してくれろと、よこさしつたのでありますヨ、然うしてネ。」ト言ひながら、四隅を見廻して、判次郎の耳へ口を寄せて何か私語き、米「ネ、然ういふ譯もありますから、今夜にでもちよつと往つておあげなはいヨ、そして今の譯は、手紙にも委細しく書いてありますとサ、それでもちよつと顏を見せておあげなはいヨ。」判「ムウそれぢやア、今夜にもちよつと逢つて、おめへの實意をもはなして怡悦ばせやせう。」米「ア、どうぞ左樣してあげておくんなはい、ドレ最う私やア往きますヨ、大きにおやかましう。」判「アレサ、まア能いわナ、いま茶をこしらへる所だ。」米「ナアニ、左樣しちやア居られませんヨ、地内の宮戸川に、御ぞんじのみづちや屋お客と粂吉さんといふ、唄女衆が待つて居ますから。」判「エそれぢやアお客先から來たのかエ。」米「ア、お客に待つてて貰つて來たのでありますヨ、情男といふものは、餘程可愛いものだネエホ、、、、。」判「違へねえアハ、、、、。」米「オヤ私やア、こんな氣樂な事ばつかり、言つて居てもすまない、それぢやア

まゐりますヨ、呉々も今言つた通り、浮氣は御無用だヨ。」判「大丈夫サ。」米「あてにはならない大丈夫だヨ、左樣なら晩にはきつと北郭へ。」ト言ひ捨て出で行くを呼びとめて、判「米八さん丈夫によろしくヨ。」米「オヤ丈夫とはエ。」判「アレサ丹さんの事だァナ。」米「嬉しいネエ、早く然うなりたいとサ、ホ、、、。」ト笑ひながら出でて行く。跡見送りて判次郎、溜息をホッとついて獨言、判「ア、あの孃も深切者だナァ、併し今日は何と思つたか、心にもねえお園の事を、浮氣でもして居る樣に言ひなけられて。」トいふ折から裏口より、その「嘸お前はん、外聞がお惡かつたらうネ。」ト、言ひながら判次郎の側へ居る。判「ア、驚怖した、お前先刻からあすこに居たのか。」その「ア、さつきつからのお話談は、みんなあすこで聞きましたがネ、判さんお前はんは何とお思ひなはるか知らないが、今米八さんがお言ひのにやァ、お前はんと私と、浮氣でもして居る樣に思つてお在でぢやァありませんかユ。」判「左樣ヨ、とんだうたがひを請けて、お前のめへも氣のどくだ。」その「イ、エわちきやァ嬉しうございますわ。」判「ユ。」その「お前はんは身ぶるひの出るほどお否だらうがネ、米八さんにあ、思はれてお見なはい、最早とりかへしはなりませんぜ、左樣して見ると、仕もしないことで他人におもはれるよりは、いつそのくされ實正に然うなつておくんなはいナ、斯ううちつけに女の口から言ふほどだから、よくよく思ひつめたのを、可愛相だとお思ひなら、どうぞわちきの心をもかみ分けて見ておくんなはい。」

トおもひつめたる娘氣に、はづかしさをも打忘れ、心のたけをぞ口說きける。

振り見よと月になびくや夏柳

## 第十四回

こゝに亦峯次郎は、青森より鎌倉に歸りて後も、兎角病氣を言ひ立てて、別莊にのみ在りけるが、父の病氣の知らせの使と倶に、本宅にいたりて看病し、其の節お京の父が道中まで出でし、病氣の由を知らせければ捨て置きがたく、俄に旅の支度をとゝのへ、抱への鳶の者二人と、手代をつれて路を急ぎ、第四日目の夜は奧州白河の此方なる、白坂といふ所に止宿りしが、青森の伯父の、途中より先へ登せし手紙の趣と違ひ、日數を多く旅宿に逗留してある樣に思はるれば、何とやら案じられて、峯次郎は連れて來りし人々にむかひ、（手代の名茂助、鳶の者小三次、今一人は捨五郎。）峯「エコウ茂助、此樣に遠くまで迎へに來て、伯父さんに逢はない樣では、いよ／＼病氣がむづかしいか、但し何ぞ故障が出來たかといふわけだらうナウ。」茂●「然うでございませうかネ。」×小三次「エモシ若旦那、昨夜止宿つた旅宿の噂だがヤァ、途中で間違がありやア仕ますめえかネ。」▲捨「左樣ヨなア、何でも彼の噂の盜人の樣な奴が、道中に居た日にやァ、油斷は出來ませんぜ。」峯「然うさナウ。」●「殊に若旦那の夢見が、毎晩惡いと仰しやるから、何だか氣にかゝりますネエ。」▲「明朝は暗い中に此宿を立つて、白河まで夜明方に行く樣にい

たしませうぢやァございませんか。」「然うサ〳〵、若旦那はお眠くツて、御迷惑だらうが、私どもがお供をして來て、途中のお役に立たない樣ぢやァ、歸つて大旦那の前へ申し譯がごぜえません、何でも明朝は眞暗な中に出かけて、盜賊を退治る積りで出かけやせう。」■「アハ、、、大分強勢なことをいふが、其の際へ行つて逃げ出しちやァいけないぜ。」「はゞかりながら此の小三次なんぞが、夢にも逃げた覺えはごぜえませんネ。」▲「イヤ逃げないとも言はれないぜ。」トいふ處へ、兼て誂へたる酒肴が來りしゆゑ、峯次郎は笑ひながら衆人に酒を呑ませ、峯「明朝早く起きるといつても、まだ初更には間があるだらう、ゆるりと呑んで寢るが能いぢやァないか。」×「ナニ〳〵一終夜くらゐ寐なくつても。」▲「呑む方が能いかノハ、、、、。」×「オヤ小三次さんが、逃げた咄しが今出たつけ、何處の喧嘩の時に逃げたナウ。」「ナニ〳〵茂助さん、それは捨五郎が出放題で御座えますア、はゞかりながら逃げるなんざアしねえ、其樣な卑怯な私ぢやァごぜえませんネ。」●「それでも今捨さんが商人で逃げたといつた物ヲアハ、、、。」×「ヤイ捨五郎、此身が何時逃げた事がある、何程友達の言ふ事でも、小三次が逃げたと言つちやア承知しねえ、サア逃げた證據を早く言やナ。」▲「アハ、、、其樣に立腹て、爲らねえでも能いやア、其方は逃げたのを忘れたか、然も此身と其方と無當に逃げ出して、其の上句に手を支いて泣きツ面をして謝つた事があるぜ。」「噓を吐きやナ、其方は逃けも仕たらうが、此身

やァ逃げた覺えは些ともねえぞ、手を支いて誤つたなんぞと外聞の惡い、何時此身が誰人に誤つたかサァ其の人を言つて聞かせや、若旦那の前で其樣な事を言はれちやァ、明證を立てねえぢやァ合點ならねえ。」▲「其樣に言ふなら逃げ出して誤つた事を言はうか。」峯「ハ、、、、夫れぢやァ小三ャ其方は逃げたに違へねえか。」×「ナァニ其樣な覺えは少しもごぜえません、捨が僞言でごぜえますアナ。」▲「アハ、、、、彌逃げた事を言はう。」ト、笑ひながら峯次郎にむかひ、▲「エモシ若旦那、お聞きなすつて下さいまし、小三次が手を支いて誤つた一件はネ、斯うでごぜえます、久しい以前に私も小三も、親父の前を仕損つてネ、些との間銚子の方へ漂泊きまはつて、遊びに行つて居た事がごぜえましたがネ。」×「ナンノ阿房めえ、夫れは古い事たァ。」▲「古くつても逃げたに違へねえや。」茂「マァマァ、小三さんに構はずに、若旦那と私に咄しておくんなせえ。」×「茂助さんが他人の事といふと、根を掘つて聞きたがるのだ、惡い癖だネエ。」峯「マァ構はずに捨五郎咄しなョ、小三は酒でも吞むがいい、サァ此身が酌をして遣らう。」▲「ドレその中に逃げ出した一件を、お咄し申しやせう。」●「東西東西。」▲「アハ、、、、斯ういふわけサネ、なんでも小三と私が銚子中を遊び歩いて、その果終に銚子の奴等と喧嘩をして、三人ばかりを強く打き擲つたのサ、夫れから後が面倒だから、其の日直に二人で驅け出して、此土地へ歸つて參りやした。所が途中で腹が空つて堪へられないから、居酒屋

へ寄つて一杯やらかさうと思つて、休むとネ、酒屋の亭人が、私と小三次を倩見て、お前方は、日中銚子の四郎親方の子分と喧嘩アして、立ち退くのぢやアねえか、萬一然うならば、早く一杯呑んで逃げなせえ、今も來た人の噂をきけば、お前方を追蒐けて、打ち殺すといつて、大勢友達を集めて、追蒐けて來ると言ふからネ、小三も私も青くなりやしたのサ。旅の事たから、此方は二人の外に味方はなし、向うは所の勝手を知つた奴等が、大勢來た日にやア叶はないから、夜通し逃げて歸らうと相談して、酒を呑んで居ると、最早追蒐けて來るといふ風聞さネ、夫れからお前さん、酒の代を拂つて其處を出ようとすると、酒屋で言ふには、兎ても眞直に逃げた時にやア、追手が追ひ付くに相違ないから、こゝから藪越しに二町ばかり行つて、左の方の杉林をぬけて何とかいふ原へかゝつて逃げろ、左樣すれば追ひ付くものはなからう、其の代りには、その原中へ折々狼が出るから、用心して行けと敎へやした。」丈「イヤアそりやア大變だ。」米「本街道を逃げれば、追手に取り卷かれるだらうし、間道へ蒐れば狼が居るといふし、飛車取り大手を喰つたのだアハヽヽヽ。」丈「成程夫れじやア泣くのも無理はないネウ。」×「ナニ泣きやア仕やせんがネ、正直は氣味が惡かつたのサネ。」米「アハヽヽハ、實心だネ。」米「それから何樣した、その藪越しに逃げたのか。」▲「何樣も仕方がございません、往來を逃げれば長脇差で、大勢が追つかけるから、否とも原を通るより外は道がないから、藪の中を

二三町をかけぬけて、杉の林を越えて向うへ出ると、廣々とした野原へ出やした。然うすると最早日が暮れて、月がきら／＼と日中の樣で、路を歩行くには能いが寂しくつて、何所ともなしに物すごくなつて、何でも怖い事が有りさうサネ、夫れから小三次が少し震へ聲になつて。」「コウ／＼譃ッことを言ひなえ、其身こそ此身を先へ歩行かせて、ぶる／＼ふるへながら、此身が脊後に跟いて來たぢやアねえかハヽヽ。」▲「イエモシ、それからが大變サネ、漸う其の原を一里餘も來ると、左右に細い河があつて、道巾の狹い所へかゝると、左の方の森の外路に、狼が而も二疋出て居るといふやつサネ、寔に小三も私も途中へ立ちずくみになつて、互に顏を見合はせて、暫時無言つて居やしたら、小三が言ふにやア、狼といふものは、義心とやらが強くつて、俠客氣なものだから、道理を詰めて賴めば、聞きわけてくれるといふ事を噺に聞いたが、兎ても脊後のはうへは歸られないから、狼に誤つて通らうと相談極めて、夫れから怖々ながら、私と小三と兩方が置き逃げを仕ないやうに、手を引き合つて、狼の居る二三間手前の所まで行つて見た所が、月の光と狼の眼の光で、戰慄としましたが、騷ぐと直に喰ひ付かれると思ひましたから、二人ながら其所へ手を支いて、小三が申しましたにはネ、エ、引狼さまにお願へがございます、私どもは、寔に親の病氣で夜通しに宅へ歸る者でございます、何卒お見退しなすつて此所をお通し下さいまし、定めてあなたのお在でなさる前を、以

前に挨拶もせずに通ると御立腹でございませうが、何卒親孝行の所に免じて、お通しなさる様にと願ひましたら、イヤ妙なもので、狼が聞きわけたとみえて、正然と蹲踞つた儘で、少しも動かずに居るから、ヤレ嬉しやと狼の前を、腰を屈めながら通り寛つて、能く／＼看ると、石の駒狗が森の入口に並べて在つて、森の中に何かのお宮がありましたのサ。」峯「ハ、、、こりやア能い落し噺だ、立派な侠客の二人が、石の高麗狗に手を支いて謝つた中が可笑しい、アハ、、、ハ、、、、」戌「ハ、、ハ、、小三さんの逃げる形を見たかつたナア。」×「イヤ彼の時のやうに弱つたことはなかつた、ハ、、ハ、、」ト互に笑ひ語合ひしが、其の夜は此所に休みつゝ、明朝は寅刻に起き出でゝ、白河の宿へ急ぐ折しも、彼の青森の伯父は、白河を夜立ちにして、白坂の方へ来かゝる途中、盗賊に出合ひ既に難儀の最中、峯次郎が迎へに行き合はせ、さすが吾妻の侠客の気性、小三次捨五郎が働きにて、盗人どもを追ひ散らし、伯父を救ひつゝがなく、鎌倉へ伴ひ帰りける。

こゝに盗難をすくふが本文なるべきを、畧してしるさず、旅宿の雜談をもつて、峯次郎旅行の前文の約に備ふるは、即ち人情本の用心なり。

春色梅美婦禰巻之七　了

# 春色梅美婦禰 卷之八　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第十五回

新の字を付けにし梅の花園も、早三十年の春秋を、過ぎて最初の庵主の名を、昔の事と鶯が庭、今も變らぬ俤の、残るもゆかし秋の野に、猶詠めある七草の、盛りを見にとて昨夜から、夜通し遊ぶ船の中、終夜引かせし四ツ手の網に、かゝりし魚の噂して、まだ調はぬ料理をば、承知で入りし平岩の新座敷、お客はたしか三人ほど、其の外二三人のお供の人あり、なにかがや／＼として、客人「夫れぢやァ兩女ながら、温順しくこゝに待つて居なせえ、丁度一寐入りすると、昨夜の勞れも直るだらう。」みな／＼「イヤ、夜通しだからさぞ弱りやしたらう、私どもも今曉には、舟の中で倒れさうになりました。」●「イヤ夜中に、冬瓜の引つかゝつて上ツた時は大變だつけナウ、誠に怖かつたぜ。」今「ホンニもの凄かつたナウ、雨はぱら／＼降つて來る、宵に咄した怪談の上句だから、實に果の首が綱へかゝツたのだと思ツた。」㊂「それに兩女が、悲しい聲を出して泣くものだから、河の水に響いて實正に化物が出るかと思つた。」〈「イエモシ、彼

の節は粂吉さんの顔も、房吉さんの顔も、何だか邪祟きでもした様に見えましたっけさ。」▲「然うですネ、イヤ夫れから今以て、少し氣味の悪い顔色に見えますぜ。」浮「アレサ否な事をお言ひでないはいますネ、私達が何も悪い事でも仕はしまいし、化物に邪祟かれる咎はありは仕ませんわネ。」●「悪い事の有り無しの道理ぢやァないわナ、大河の中なんぞには、非業な死に様をした妄念だの、又妖魔の類が有るから、成佛得脱せて貰はうと思つて、怨みのない人にも祟りつく事が有るさうサ。」▲「なる程、藪の中の現成庵が、船頭をして居る時分に、毎度夜船では、氣味の悪い事や哀れな事や、見たり出合つたりして、それから水死の亡骸を見懸け次第に、葬禮る心になつて出家をしたさうだから、實は夜中に河の中に居るのは怖い理サノ。」ト噺の中に、肴を三色ばかり持ち來りて、平岩の女中、●「まださし上げます程のものは出來ませんが、マァこれで一ト口召し上つてから、七草へ御見物にお出で遊ばしませ。」●「オヤ肴が出來たのか、夫れおやァ一杯ツ、やらかして行かうか。」「ハァいおのぎたない事だネ。」●「其様ならマァ吞まずに行くとするか。」▲「お前一人行くがい。」●「ナニ、夫れ見ねへな、天狗に吞みたがる癖に、サァ〳〵早く吞んで行かう。」「オヤ〳〵、七草を見にお出でなさるなら、私達も參りますヨ、何處か他處へお出でなさるとお云ひだから、此處に待つて居ると申したんでありますわネ。」▲「ナニ〳〵、百花園の七草は後刻の事だすナ、今は小梅のお下屋敷へ、御用を

聞きに行くのだから、役人さま達をお供して、こゝへ歸ッて來て、其の石部金吉郎さまだの、金株戸五郎さまだのといふ、御普請役の意地の悪い旦那方を、お前達へ頼んで置いて、其の間に此方達ばかり、秋の七草を見に行かうといふ、相談に極めて置いたのだアナ。」房「オヤ／＼、否でございますネエ、粂吉さん宜いかえ如斯事をおいひだヨ。」粂「ナニ／＼然うだとネ、其のむづかしいお屋敷のお役人さまに、衆人さんの事を十分悪くいつて、腹を立たせて困る様にして、意趣がへしをして上げますわ。」●「イヤ種々なわりい智慧を考へ出すぜ、今日は大事のお屋敷の旦那方だから、少しでも不首尾な事を仕出かすと大變だヨ。實は婦多川の粂吉房吉といふ、唄女が見たいといふお好みで、お前達を頼んだのだから、何卒おもしろく御機嫌をとつて貰ひてえ。」房「オヤ否で有りますネエ、其様に御機嫌を取つて、ハイ／＼とあやまつて居ますのならば、江戸唄女の姉上さんが宜うございますわ。私たちおぢやア、迚も物和かにしてお氣に入る様には行きませんヨ。」△「といふ處を承知して、我儘らしいのが面白い、餘りへイ／＼と敬はれるのは、嫌ひな旦那達だから奇妙だ。」粂「オホ、、、、、夫れぢやア何様しても叶ひませんネエ。」●「其の代り十分お骨折の禮物は仕やす、何分一座がお頼みだ。」△「イヤマア酒は止いにして、屋敷の方へ早く行つて來ようぢやアないか。」皆々「左様々々。」ト一同に、庭より下りて小梅なる、お下屋敷へ出でて行く。跡には粂吉房吉が、互に顔を見合はせて、婦「姉

上さん、誠に昨夜は怖かつたネエ。」糸「アヽ私やア何様せうかと思ッたわ、夫れに亦昨日の日中轉寐をして、誠にモウ〳〵否な夢を見て、氣にかゝッてばかり居たから。」房「オヤ何麽の夢を見たのだえ、私も實は氣にかゝる夢を見て、お前に咄さうと思ッて居たッけ。けれども聞かなかつたから咄さないがネ、姉上様のは何樣な夢だえ。」糸「ナニ則り峯さんの事でサ。」房「オヤ私も同じ事だヨ。」糸「私の見たのはネ、峯さんが何でも、他の娘を女房に貰ふ積りに極めたから、氣の毒だが姉娣ながら、然う思ッて離別れてくれろと、手輕くお言ひだから、私やアモウ〳〵悔しくッて〳〵、物も言はないで峯さんの膝へ喰ひ付いて泣いて居たわ。」房「オヤ私も則り然うだッたわ、先達文嘉さんの咄に聞いた田舍から來たといふ娘の噂、實正だらうと思ふがネ、お前は何とお思ひだ。」糸「ム、夫れは違ひない事だヨ、誠にモウ〳〵美麗しくッて、詞遣ひなんぞも優雅で、少しも田舍の者の樣ではないとサ、夫れだけれども彼程深切に私達を可憐がる峯さんが、其の娘を内室さんにして、私達をば突き出して、些とも構はないといふ樣な、不實な仕もしまいかと思ふヨ。」房「私も然うは思ふがネ、萬一峯さんの氣が變ッて、彌私達を捨てる樣になつたら何樣おしだ。」糸「モウ然うなつたらば、其の節は私一人覺悟しいの。」ト言いッ、泪を眼に浮め、糸「お前まで見捨てられる樣には仕ないから、左樣思ッて居ておくれ。」房「オヤ姉上さん、お前樣ばかり覺悟をするとはえ。」糸「ナニサ、今言はずとも宜いヨ。」房「イ

イエ、夫れでもなんだか氣にかゝるから、理害をお聞かせなさいヨ、そして姉上さんを見捨てるくらゐの峯さんならば、何様して私を見捨てずに世話をしてくれますものか、縦ひ亦何様いふ事でか姉上さんを突き出して、私をば後々離別る氣に峯さんがすればといつて、何夫れを其の通りに仕ますものか。」糸「ナニ〳〵、それは悪い料簡だヨ、私が不断思ッて居る事を今言はうがネ、必ず悪くお聞きでないヨ。」房「オヤ何をえ。」糸「ナニサ、他の事を思ッて居るのではないがネ、倩と考へて察ると、過ぎた日の事が漸々に氣恥かしくッて、お前にも腹を立たせるやうな事も、あつたり何かしたのを思へばおもふ程、他人の誹り種になつたらうと、誠に後悔だヨ。亦始終の事を料簡して見ると、義理も深い妹の慕ふ男を姉の身として温順なく、同じやうに戀爭ひらしく慕ッては、濟まないと心を叱る氣になつて、是非お前に相談のうへで、私の身を引いて、お前と峯さんを、夫婦にする様に仕ようといふ心願で居た處だから、峯さんにも其の事を委しくはなして、お前の事をば頼むから、然う思つてお呉れヨ。」房「オヤ姉上さん、何故其様な事をお言ひのだえ、左様お言ひのを考へて察ると、私こそお前様へ對し、峯さんへ對して心を改めないければならないヨ、そして姉上さんの覺悟をするとお言ひのは、何様せうとお思ひのだえ。」糸「ナニ何様も外に能い思案もないがネ、マア私の料簡では、末々の處が世間の思はくも悪からうから、身儘にならない中に、峯さんに別れて、翌日にも和歌町を出ら

れさへしたらば、すぐに尼寺へ願つて這入つて仕舞はうと思ふのサ。」といひつゝ、落す涙の雫、お房はこれを見るよりも、思はずワアット泣き出し、袂を口に押し當てて、聲もらさじとしのび音に、暫時詞もなかりしが、漸うに顔をあげ、房「姉上さん、今お前のお言ひの事も、先達中だと私のあるのを那麼にして、然うお言ひのだらうと推量して、恨みもするけれども、此の頃では斯うして姉妹が打解けて、萬事の相談をする樣だから、少しも此身勝手の心はないがネ、お前が其の氣にお成りだと、私も同じ樣に仕なければならない義理だわネ。亦義理ばかりでもなく、先達お前がおやしきにお在でのときに、おくれの書物の中に書いて有つた、歌のやうな心も出るわネ。」粂「すヤあの古い歌を集めて、講釋を書いた本の中の歌かえ。」房「ア、あのネ。」

萌えいづるも枯るゝも同じ春の草のいづれか秋にあはではつべき

粂「ホンニ考へて察ると、はかない樣だネエ。」トさすが唄女となりぬれど、元は醫學の娘にて、姉は武家にも奉公せし、昔が知れてゆかしけれ。

## 第十六回

これよりお粂お房の姉娣が津輕青森より來りしお京に出で合ふ奇談、四編目に面白く著はせり。

宮戸長屋の抜け裏を、堤の下へ立ち出づれば、こゝにも茶屋の三軒、編笠茶屋の數なるが、中に

立派な造作は、仲の町にもまさるべき住居にて、主は見えず店先には、十七才ばかりの娘と下女が二人程送り迎への繁昌は、其の頃案内の第一にて、堀から上る客人も、大半此店に立ちよるは、娘の容儀美麗しく、愛敬深き故のみか、彼の一つ家の古事を、思ひ出してもいとかたき、石の枕はものかはと、無理なる契りも願ふ氣の、放蕩男の多ければ、里へは行かでこの茶店へ、娘を挑りにわざ／＼とこゝまで通ふも多かりしとぞ。比しも文月燈籠の、中旬過ぎて三日めの、日もはや申刻西河岸の、見世先暑き時分なるべし。此の家の娘お園、今湯上りの素面にて、白地の湯衣の京染は、銀四十目餘の本眞岡にて、木綿といへども縮緬に、まさる價を厭はぬは、東育ちの癖にして、目立たぬやうに金銀の、かかる風情は花飾る、都にかはる好みの模樣、總ての化粧溫順しく、花美にはあらで何となく、男に好かるゝ姿なりしが、化粧をするを世話と思ふにや、花橘といふ、顏の藥の水を硝子の德利より、手の平へあけて顏へ付け、脣へ紅を付けて、黑繻子と紫の花絞りの縮緬を、腹合はせにしたたる帶を結び、茶簞笥のきはへ至る折しも、こゝへ入り來る客二個、尤も馴染の人と知るべし。お園は愛敬を含みながら、園「オヤ專さん、兼さん、お揃ひでマア、此程は何樣なすつたのでございますネエ、餘りお見限りおやァ有りませんかえ、モウ／＼影もお見せなさらないで、お憎らしい、何處へ戀女が出來たンでありますえ。」ト言ひながら、香煎湯を汲んで牀机に腰をかけたる處へ持ち來る。　專「ナニ

ます、私どもは足をちかく来るけれども、兎角お前が留守で顔を見せないのだものウ、ナニ専さん。」専「然うヨ、此間も節句の日に来た時、しかも櫻川に途中で逢つて、同伴に揃つたけれども、お前は堀の若竹へ行つたとかいつて、向う越しで平岩だとかいふ噺で、留守ぢやアないか。」京「ナニ然うでございますか、櫻川と被仰るは何方でございますか。」専「ナニ櫻川を何處のとは何の事だ、[illegible]」京「アレサ由さんか、二代目善孝 新孝さんか三孝さんか知れませんわネ。」皆「なるほど、こりやアお京さんの言もつともだ、専さんが櫻川とばかりいふから解らないのだアネ。」専「ム、然うか、なる程此の義は此方が麁忽だッけノ、ナニサ三孝と同伴にヨ。」京「ナニヤ何時頃でございましたッけネ。」専「ヨウおやうど刻頃サ。」京「ナニサノ\嘘ばッかり、其の時分はお前様は、小梅の小倉庵に、十八九の美しい[illegible]さんと、二十七八の浄瑠璃のお師匠さんらしい婀娜なお内室さんと、何だか面白さうにお遊びなさつてお在でぢやアございませんか。」専「エナアニ、何様して其様な覚えはねへ。」京「イヽエ、たしかにあのとき三孝さんが、お前様を見申したさうだけれども、何か他目を忍んで、隠れるやうにしてお在でなさつたから、三孝さんも御遠慮まうして、お目にかゝらずに来たと、此處へ倚つてお噂をいたしましたわな。」専「ナニ、それは三孝が人違ひをしたのサ。」京「イヽエ人違ひではございません、まだ證據がありますけれども、マア今日は申しません。」専「コウノ\専さん、お前は何様も済まない人だヨ、[illegible]

此身が節句の口の約束をしたのに、據ない用が出來たといつて、斷ッて置いてから、夫れぢやア彼の日には文字花と、新道の師匠を連れて、迎島へ行つたのだノ、成るほど友達よりは、文字花が大切でござえせう、以來はその氣でお交合ひ申しやせう。」圓「オホ、、、、、私が惡い事をいひ出して、お友達の中をわるくしては濟みませんネエ。」專「ナニ〳〵、それは少ともない事だから、疑られてもかまひはないが、兼さんの方にも私に義理のわるい事がありやす。」兼「オヤ〳〵、何が惡い事がありやすネ、こりやア聞き處だ、サア其の事をおいひなせえ。」專「しからば申し聞かせようか。」兼「イヤハヤ大そうな見脈だ。」專「汝先だつて二丁目の二階に置いて、酒興に紛らかして、某が相方の新孃を、横槍を以て走せ蒐り、思はぬ敗軍をうけさせたる遺恨、何の世にか恥を清めて、汝に返報けんと圖りしに。」兼「コウ〳〵、講釋だか芝居のせりふだか、解らない寐言で罪を五分々々に仕ようとは、むしがいいぜ、其樣な事は知らねえ〳〵。」圓「オホ、、、、、今日は何樣しても專さんが負けでございます、あぶなく私の留守の言ひわけに、まごつく處でございましたわ。」專「アハ、、、、、今日は大しくじりだ。」ト互に笑ふ門口を、これも何處のか福の神となるべき娘の十五六なるが、媚茶の大形の浴衣を著て、紅の花絞りと、紫中形の縮緬はら合はせの帶をむすび、通りかゝりて立ちどまり、むすめ「お京さんお暑うございます。」圓「オヤお峯さん、何處へお出でだ、マアお寄りな、オヤ今日は

例日よりか別して美麗しくおなりだネエ、それで他人迷はせにお出かけのかえ。」專「アレ又お園さん其様なことを言つて嬲つちやァ否でございますヨ。お前さんこそ迷ひ人が多くッて罪でありますヨ。」ト笑ひながら驅け出して行く。專「イヤ何樣も美い少女だ、お園さんにも負けない懐だぜ。」專「ホンに場所柄とは言ひながら、能い女が澤山だナウ。」專「お園さんあの娘は何だナウ。」專「人間サ。」專「エエ洒落なさんな、鼻の下を長くして見送る癖に、お前は急度あの娘の家を聞いて、尋ねてゆく底心だぜ。」專「ヘンン自分がその氣だから、其樣な惡推をするのだ、とはいふものの美い女だナウ、何卒心易くなりたいものだ。」專「ソリヤノ\、本性を顯はすやつサ。」專「夫れだつて、可愛らしいに違ひない娘だから仕方がない。」專「爲方はあつても向うで不承知だらう。」ト何か詰らぬ事をいつて居る中に、始終お園の美麗しき顔を見て心を惱まし、をりノ\障り文句のありと察したまへ。折しも來る五六人門口へ彳みて、△「オイお園さん鹽をくんな。」●「ムヽ此身にも鹽をくんな、サアノ\早くノ\。」□「ナニナニ、先刻茄子を漬けるときに、みんな遣ッて仕まつたとヨ。」園「ヲヤノ\、忠さん龍さんマア何でございますえ、お揃ひで鹽がお入んなさるとは。」△「はかなしや鳥邊の山の山送りさ。」●「アハヽヽヽ、何だかまた聞きとり法問をいひ出すヨ。」△「何でも能いからお京さん鹽をくんなといへば。」園「アレサ、今お富が奥から持つて來ますヨ。」ト、いふ所へ下女のお富は、鹽の入物を持つて來り、

萬「ハイ源さん吉さん、鹽を持つて參りました。」口「オイ／＼此身へさきへくんな。」ト「ナニ／＼、此身が先だ／＼。」ト各鹽を掌に請けて、左右の肩へ振りかけ、袖を拂つて家内へ入り、△「ア、引ヤレ／＼暑かつたナア。」口「それにまた施主が氣がきかないワナ、便々と經を讀んで仕舞ふまで、待たせやアがることはないワナ。」●「そしてマア地面の二十ケ所も在る癖に、饅頭にでもすればいいのに、あたじけねえ奴だぜ。」△「それだから地主さまになつて居るのだ、少し義理を辨へると。」ヨ「大屋さまか。」×「ヘン違ひない、一向に文盲だと店子か。」●「少し美味いもの喰ひでもすれば、裏店で一生終ひョ。」△「そりやアさうと、茶を呑んだら直に行かうぢやアないか。」周「アレサマア、今お茶の宜いのが出來ますヨ、お久しぶりだから、些とご緩りとなすつても能いぢやアありませんか、誠に衆人様が此の比ぢやア御辛防でございますネ。」△「ナアニ、家内へ歸らうといふのぢやアねえわナ、郭へ送ッて貰はうと言ふのだアナ。」周「オヤホヽヽヽ、左樣でございますか、私も餘り放心でございましたッけネ、堪忍なさいましョ。」●「ナニ／＼、送り榮えも仕ない連中だから、欺かして歸す方が宜からう。」周「アレサ、其樣な嫌味を被仰るもんではございませんョ、私はまたお葬禮にお出でなさつたお噂らしいから、御遠慮申して、お馴染のお言傳も申しませんのでございましたわ。」ト言ひながら牀の間の脇にありし状さしから、文を四五本とり出し、連中へ渡す故、●△口×「アハヽヽヽ、

盆前の書出しが届いて居ちやア、今日は殘らず初舞臺と仕ようぢやアないか。」幸「ホヽヽ、、、、、、、それぢや丁度能い家がありますわ。」幸「ナニ／＼新見世か。」園「イヽエさうではございませんが、海老屋の内が家内中揃つて、言ひ合はせた樣に女郎衆が美麗しくツて、お客を大事に仕ますわ。」幸「然うか、夫れは奇妙だ、何よりか大事にして貰ひてえ。」幸「アハヽヽ、、、、、、背と明方ばかりでは、振り付けられたといふたちだから、なるたけ能くして上げ申して貰ひてえノ。」●「サア／＼、行かう行かう。」ト、せき立てれば、下女のお富は支度して、富「サァお供を致しませう。」おそのへ「是れは／＼、御苦勞さまでございます。」幸「それぢやアお園さん、早く來ておくんなせえヨ。」園「ハイ只今直に上りますヨ。」ト、いふ聲を後に聞きなして、がや／＼騷ぎ出でて行く。跡の二個も何屋へか、馴染の方へ送られゆく。

此の茶店の娘は、二編目下之巻に記したる猿寺のお園なり。

春色梅美婦禰卷之八 了

# 春色梅美婦禰 卷之九　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第十七回

成るは否なり思ふはならずと、昔よりして戀種の、望み好みも緣と緣、互に因果のなす所か、但し浮薄か知らねども、義理と情を辨へて、不實の心は一點許りも、持たぬ男が戀故に、他の誹りも笑ひの種と、なるも承知でする樣に、憂身を窶すこそ異變しけれ。こゝに猿寺の判次郎は、此糸の情によつて、浪人中の不自由を遁れて、衣食の不足もなく、遊び活業の片手業も、氣を慰める好きの道、俳諧の宗匠となり、名を反補と稱びけるが、或時獨り徒然に、古き本を繰り返し、心をいましむ古人の金言。

そも俳諧者流の徒、社中と稱へて連をなす事は、その友達に交はる事、なか〳〵容易からざる實意厚情を選み、連中に加へ、何事も睦ましくするを誓ひて、反かざるの故に、社中と呼ぶとぞ。其の起原を尋ぬるに、むかし漢土の惠遠法師といふ人、庭の池に白き蓮花を植ゑて其の際の舍を白蓮社

と言ふ、此所に親友十八人を集會して、十八蓮社といふ、謝靈運といふ才子、此の社中ならん事をこふに、惠遠法師不承知なり。これ何ゆゑなれば、謝靈は才子なれども、心雜くうつり易き性得なるをもつて、社中に加へずといふ。さて日本にては山口素道といふ俳諧師、惠遠法師のむかしをまねて、俳友に此の事をなせしより、今はことごとく社中と稱へさわげど、少しも社中の賴もしげなし。今は社中は朝に斷金の交はりを稱へ夕に寇仇のごとき行ひあり、嗚呼歎かはしいかな、社中の名ありて社中の好意少しもなし、それ俳諧は其の徒に狎れやすくして、心底和ぎ睦まじゝなるものにはあらず。

ト讀みかけし本を下に置き、「なるほど違ひない事だ、今の俳諧は各々に上手の心持で、高くとまつて他の事を陰で惡く言ふ許りで、風流の心持は些ともないから、俗人の交會よりも賴みがたい事だ、しかし三千風が行脚文集に、

俳風混亂して、面々葉落々々になり、難文の鬪ひ返書の鬪止む時なし、漸う動いて靜かならんとすれば、密かに譏りやはらかに編す、しかはあれど、是れも俳繁の故なればならん。

「元祿年中に此樣な事を書いたから、後世の俳諧者の氣性に溫厚人はない筈だ。」ト寂しき儘に風雅なる樂しみさへも、理窟になりて欠をなし、「アヽ引、何だか氣がとぢふさがる樣だ。」ト獨言いふ折

からに、辨天山の亥の刻の鐘ボウン／＼。判「オヤモウ亥刻だ、爲方がない寐よう／＼。」ト夜具を取り出し、牀を敷く所へ驅け込み來る堤下のお園、裏口よりかけ上り、息をせはしく脊後の方を見かへりながら、その「判さん、はやく彼戸口をしめておくんなさいましョ。」判「ア、愕りした、何故今時分驅け出して來たのだ、亦伯父さんと喧嘩でもして出て來たのか。」その「イ、エナニ然うぢやアありませんが、今夜アノお前様に、是非逢はないければならない事があつて、驅け出して來たんであります、アア引怖かつた。」ト胸を撫で下して居るゆゑ、判次郎は茶を汲んで與へながら側に座居り、判「何が怖かつたのだ、途中で何様かしたのか。」その「イ、ヱ何様も爲ないが、今夜家内へ旦那の御内室さんが、大變に腹を立つて振り込んで來て、私とさしちがへて死ぬなんぞと言つて、モウ／＼寔にこはい顔をして大さわぎをやるから、私やアすんでに刃物で疵を付けられる所でございましたわ、夫れだからモウ跡にも構はず逃げ出して來たんでございます。」判「それはマア大變な事たナウ、そして家内には誰も居ないのか、不用心な事だ。」その「イ、エ、アノ其時刻前に伯父さんが來て居るし、下女も二人ながら居て、その御内室さんを取り押へて、なだめて居ますョ。」

抑お園が誘引茶屋を出せしは、鎌倉の大諸侯、大佛陸奥入道の御家中、小佛善左衛門といふ大身の世話にて、俄に僥倖なる身の上とはなりけるなり。然はあれども其の始めより、お園にいや

らしき事もなく、枕に近づく事はいさゝかもなし。只お園には後々にいたりて、妻子を世話にもして貰ふべき事もあらうかと、思ひ入つて此のたび斯くの如くはからひしなれば、必ず妾閨ひ女などに抱へしとは思ふべからず、娘に貰ひし心なり。併しながら今直樣、巨細しき事は明かされず、其の際に臨みて、自然に理害も解り、安堵する樣になるべし、先づ夫れまでは外面向は、我に關はれの體になし、見世を繁昌にするを專一と心がけくれよと言ひしとぞ。

判「そりやァ困つたものだ、何にしてもその御内儀さんが、今夜欺かして追ひ返して仕まはないければ、お前も堤下の家へは歸られないナウ。」その「ア、夫れだから、今夜ァお否でも、お前樣の所へ寐なしておくんなはいナ。」判「そりやァ何樣でも宜いが、只無斷つて此身の家内へお前を止宿たら、伯父さんも旦那も、むづかしく言ふだらうぜ。」その「ナニむづかしく言つたからといつて、私が否だと言ひ出せば、誰が何と言はうが爲方が有りませんわネ。縱ひ何樣な立身出世をする事があつたればとて、私やァお前樣の方の便りが切れる樣な事なら、堤下の見世だといつても、出して貰やァ仕ませんわ。最初にお前樣に相談したらば、是非然うして貰ふが能い、たとひ何樣なつても見捨ては爲ないとお言ひだから、茶店も出して貰つたのだから、毎時言ふ通りかならず惡く思つておくれでないヨ、ヨ判さん。お前樣は此糸といふ可愛いお方があるから、私なんぞは邪魔だと思つてお在でだらうけれども、

私やァ去頃米八さんとやらが、お前樣に意見をお言ひの時からして、不圖おもひ込んで、無理な願ひを言ひ出してから後は、何でも一生放れまいと、心を極めて思ひつめて居るのに、些たァ可憐さうだと思つておくんなはいましナ。」ト、涙をうかめて聲曇り、判次郎の膝へすがり付き、身をふるはして泣き入れば、判次郎はお園の脊中を撫でて介抱をしながら、判「コレサお園娘、泣きなさんな、何もお前を可愛く思はない事はないけれども、出世の邪魔をして此身の樣な者が、彼是さまたげになつては惡いと思ふから、可成程は遠ざかる心がけもするけれど、此樣な美艶しい、かはいらしいものに夫れ程に思はれて、なか／＼麁畧にする氣は無いから、必ず然うおもひなさんナ。」その「それも私が最初からわるいので、お前樣に恨みをいふわけでは有りませんが、何樣も戀しくツてならないから、お前樣の顏を見ると、無理を言つたりわが儘を言つて、便りにして居るのだから、堪忍しておくんなさいましョ。」判「そりやアモウ此身の樣なものを心頼みにする料簡ならば、何所までも力になつてと言つては自惚らしいが、及ばずながらも相談合手になつて遣る氣だわナ。マア何にしても今夜は此所へ止宿つて、明日の相談とするか。」その「アヽ、否でも然うしておくんなはいナ、嬉しいネエ。」ト莞爾笑ひ、亂れし髮を撫で上げて、島田の後髷の恰好を直し、その「餘り泣いたから、涙で顏が行けなくなりました。」判「ナニ／＼、泣いたら常住よりもなほ美麗しくなつたから、今夜何卒溫順しく寐られれば宜い

か、何樣もむづかしいもんだ。」その「イヤモウ、いつまでも愚痴を言ひは仕ませんわ、温順しく默つて寐ますからお案じでないヨ。」丹「然うか、それぢやァ此身とは物も言はないで、夜を明かしさへすれば能いのか。」その「アレサ、夫れぢやァ否でございます、其樣な意地の惡い事を言はないで、何卒私の氣の安堵る樣にしておくんなはいナネエ。」丹「氣の休まる樣には、今夜ふり込んで來た御内儀さんを欺かして、歸して遣れば宜からう。」その「イ、エ、ナァニアノ御内儀さんが腹を立つて歸らずに居ませうが、何樣せうが、わちきやァお前さんさへ見捨てておくれでなければ、他の事は少しも構やァ仕ませんワネ。」丹「マァ〳〵、何でもあしたの事サ、夜がふけるからはやく寐なせへ、丁度二三日止宿りの客があつて、夜着も布團も借りて置いたから、まさかに風邪もひかせないこと」ト言ひながら、間を隔てて敷布團、此樣な縁が唐草の、模樣もかはりし裏表、千種むすびの露いさゝか、浮薄ならねど惡衣、かさね〴〵のお園が戀情、その「オヤ〳〵、其樣にマァ間隔に寐ますのかえ、否だネエ。」ト 其の夜はこゝにやすみけり。このばいつゞきは第四、五日にいたりてくはしくとく。

## 第十八回

こゝに赤峯次郎は、病身を言ひ立てて兎角別莊にのみ遊び暮しけるが、父の病氣より本家に立ち歸り、出入りを仰せ付けられし御屋敷の御用、または商賣の仕入れもの、問屋の掛合ひ彼是と、手代の

及ばぬ事もあれば、終に本家に身を落付けて、萬事の世話をなす故に、父の病氣も平癒して、此の度を幸ひに、家督を岑次郎に渡し、青森より登りしお京を、岑次郎の女房に定めて、世間の弘めをなしけるにぞ、お京の父は大望の叶ひし樣に悦び、津輕には纔かの田地を殘して、別家の者に支配させ、先祖の菩提所へ付け屆けを、怠らず勤める樣にはからひ、其の餘の田地家屋敷は、悉く賣り拂ひ、有金共に合はせて一萬五千兩餘を、鎌倉に取り寄せ、お京が持參金として岑次郎に送り、五千兩をもつて婦多川の材木座に、隱居店をこしらへて住居ひける。此の時になりて岑次郎が、お粂お房の二人をば、如何になせしぞといふに、岑次郎の母は、お粂のことの樣子を聞き知りしゆゑに、親類の因を斷つて不通となりしお房の母に和談して、種々と談合ひ得心させて、お粂を婦多川より引き取り、柳川亭といふ寄合茶屋の株を求めて、お粂母子をばこれに住はせ、妹のお房をも、頓て宜しき樣に世話をなして、相應の方へも緣に付けてやるべしと、細やかに計らひけるが、此の節お粂も岑次郎の母へ對して、お房の事まではさすがに言ひ難く、お房の母は元來姉娣の二人とも、岑次郎とわけある事は知らず、お房をも後々身儘にしてくれるといふ、岑次郎の母の深切あれば、何事も其の意に隨ひ、まづお粂を連れて柳川亭へ引き移りしが、お房も意地つよき生得なれば、些とも未練なる事を言はず、姉のお粂をすゝめて母と同居させ、其の身一人和歌町に殘り、いよ／＼全盛に唄女をつとめ、ひそか

に岑次郎を招き、遠慮なき樂しみをなさんとはかり、才智をもつてお糸お京の二人をも押し付けて、岑次郎の氣に叶ふ樣にして看せんと、戀の意氣地を磨きたて、一際目だつ心の花實は、こゝに容易く解きわけがたし。

○さて岑次郎は、母が内々のはからひにて、父は知らずといへども、女親の情深くして、義絶したる親類、殊に目下なるお糸の母と和談して、お糸を其の身の妻にしてくれたる實意へ對して、まだ姉の方を斯う〳〵なりとは明かしていはれず、氣の毒とは思ひながらまづお房をば其の儘に捨て置きしが、櫻川善孝を賴み、別に一軒の家を新たに造作など指圖して貰ひ、西の宮の名目を借りて鶴次の姉分とし、望みの如く座敷を勤めさせて、家内の活業は岑次郎の許より、不自由なく計らひけるが、實に人情の赴く所は、諺にいふ無い物喰はうが有福の人の癖にして、岑次郎はお京をもお糸をも、可愛がらざるにあらねども、手放して置く房吉が、奈何にしても可憐く思はれ、家内の用事の間を見合はせて出かけるのみか、屋敷の用事問屋の用事、何によらず手代の役をも自身に勤める樣にかこつけて段々に募り、果ては五日三日づゝ家に歸らず、兎角和歌町へ至りて、房吉の許に居續けし、手狹な住居と奉公人への氣がねのないが樂しみとは、物好きながら、當人の心になれば尤もにもある事か。　作者いはく、糸吉が身を引きしときより、房吉もともに引きこみて、ひさしくいでず、このたびまた鶴次のいもとぶんにくみ

ていでるものなるべし。

ふさ「峯さん、お前今夜ア此方に居ておくんなさるだらうネ。」トわが家の出格子のそとから、ゆかたをかかへて居て声をかけるも、はやこつちに馴れたる風俗。峯「オヤ房吉か、恟りしたア。マア宅へ這入んねえナ。」ふさ「イヽエ、今いそぐから左様しちやア居られないヨ。今日は櫻川の善孝さんと、榮次さんが約束しておくれのお客で、私と大吉さん、鶴次さん菊次さんと、大勢で今平清へ行くンだアネ。」峯「左様か、大層に早いお客だの、夫りやアいいが晩にはおらア居ねえから、お前は則り西の宮に寐るがいい。」ふさ「オヤなぜえ、今夜ア此地に居ておくれなねえ。」峯「夫れだつて、俺も種々用があらアナ。そして今日で三日といふもの歸らねえから、母人さんはいいが、父御さんの前へ濟まねえワナ。」ふさ「フウム、それよりかお粂さんの前へすまないだらうネ。それぢやア能いから、モウ最う私の方へお出でない、憎らしい。」トいふ時しも、鄰家にて稽古の新内節。

へほれて逢ふ夜はありたけの、胸の奥底打ちあかし、ぢつと底心情見せ、對な肌著のひよく紋、若むらさきはお心の、もし醒めよかと氣に懸り、文言傳の返事さへ、来ぬとまつほの恨みわび、思ひもしほの身もこがれ。下略

峯「また其様な詰らねえことをいふヨ、此方が家の首尾を取りそこなはねえ様にしようといふのも、

間を見てお前の借りた西の宮の方の金を算段して、早く都合をよく／＼してえと思ふがなにだすネ、、下手にね
か家を出でもすると、なほ／＼お前に苦労を餘計にさせる様にならアナ。」ふさ「ハイ／＼、御尤もだ御
免なさいまし、ナヤそりやアいいが、今日おまへさんお宅へ御出でなすつたら、津藤さんに此間の事を
ネ。」房「また其様な方角違へを言ひ付けるヨ。徳町とやましろ河岸とは、何程道が隔つて居ると思ふ
ナ。」ふさ「オホ、、、左様かえ、私やアまた近所だとばつかり思つて居ましたわ。」トいふ後から御存じ
の和十、わかちやうの太夫、これは たらじのはやりツ子なり。 和十「格子情人は法度だヨ。」ふさ「オヤ悔りした、和十さん何所へお出
でだ。」和十「エ此宅へサ。」ふさ「オヤ／＼何ぞ用があるのかえ。」和十「ア、、峯次郎さんの所へ、情人から
文を届けられたから、ちよいと。」ふさ「オヤ和十さん、昨日の題をこしらへたが、何様も出来がわりい
から、間に合ふまいて。これよりか前に、お前のこしらへた方が能さそうだ。」和十「ナニ／＼、番数が
多いから、一人で考へると何時も同じ様になるから。」ト、障子をあけてはひりながら、和十「房吉さん、
おはひりだらうネ。」ふさ「イ、エ、私はモウ参ります、それぢやアネ。」ト格子へ顔を押し付ける。房「何
だ。」ふさ「アノウ。」ト後は小声にて「あしたの晩は急度帰つておくれヨ。」房「ウム、今夜は裏のお吉岩
女さんを留主に頼むぜ。」ふさ「ア、そしてネ。」トまた何やら考へて居る。和十は笑ひながら、和十「イヤモ
ウうるせえ子だぞ、能い加減にねたが事をお言ひなせえ、他所の人が笑ひやす。」ふさ「オホ、、、、夫

れぢやァまァ參らうネ、岑さん何も用はないかえ。」和「まだ未練が殘つて居るのだネ。」ふさ「ホヽヽアレモウうるさいネ。」和「オヤ〳〵、何方がうるさからう。」ふさ「ヨイヨ、おかまひでないうるさくつても。」和「ハイ〳〵、おかまひ申しませんから、隨分御ゆるりとおのろけ遊ばしませ。」ふさ「オヤ遲くなるからモウ參らう、和十さんハイ左樣なら。」和「ヤレ〳〵〳〵、漸くハイ左樣ならが出たノ。ドレ朝ッぱらだが、請賃の御馳走になりませうよ。」房吉のあと見送る。房吉は二足三足行き過ぎしが亦立お戾り、ふさ「アノウみねさん。」和「オヤ〳〵まだかえ、アハヽヽ。」ふさ「ヨイヨ和十さん、お前に然ういふのぢやァないわネ。」岑「なんだナ、其樣に幾度も呼び出して。」ト格子へ顏を出せば、ふさ「アノウ、今夜お前さん何方のお宅へお止宿んなはるンだネ。」岑「ナゼ夫れを聞くのだか、見世の用があるから行くのだァナ。」ふさ「夫れなら能いけれども、アノ今夜は姉上さんの方へ止宿つちやァいやでございますヨ。」岑「ナニ〳〵、何樣してお粂の方へ行つて居られるものか。そして今日は母人さんが、お京を連れて伯父さんの所へ止宿りがけにあそびに行くといふから、本宅へ歸つて老實になつて居ないと治まりが惡いわナ。」ふさ「ほんたうかえ、夫れぢやァ明日の晚此方へお出でゞも大丈夫だネ。」岑「何が。」ふさ「アレサ、またわたしの方へ來て、頭痛がするの氣色がわるいのと、お言ひぢやァ否だといふ事でございます。」ト笑ひながらいふ。折しも櫻川善孝、（次郎なり）ごぞんじの由　善「サア〳〵、路くさなくつて居

ちやア行かない、お急ぎだ〳〵。」ふさ「ナホ、、、善孝さんモウ支度をするのかネ。ヨ、さア〳〵遅いくらるだヨ。」ト言はれて房吉はかけ出して行く。善「由さん些とお上りな、和十さんも来てお出でだから。」善「ハイ有りがたう、ちよいと一ぷくいたゞきませうかネ。」和「善孝さん昨日は大きに。」善「イヤ和十さん、さぞ昨日はお勞れで。ホンニ目錄が私の所に屆いて居ますヨ。」ト、これより何か一ツ二ツはなして居る中に、寺町の巳刻の鐘ゴーン〳〵〳〵引。

春色梅美婦禰巻之九　了

# 序

蓮池庵の主人、近來一家の文法を起初て、一家言數十百部を著はす。予是れを讀了に、其の中間に笑的あり、喜的あり、憤的、愁的、誑的、悧的、逢的、訣的ありて、人をして讀了又讀了、擒つて手に在つて放すことを斷たざらしむ。その由は何ぞや。實に江湖上の、千般萬樣の事見聞きすると一樣無二なればなり。此の書を讀了、這の心を辨了、這の夫主を學び、此の小官家を倣ひ、這の大奶々を學び、這の小奶々を倣はば、人を善道嚮導くものにして、酸海中に入らしむる事なく、眞に一種の教諭書ともいふべきか。予日時肚裏に思ふ處をもつて、此の書の卷首に誌了。看官夫れこれを何といふや。

辛丑之秋日　　靜春主人

江戸　爲永春水著

## 第十九回

再說峯次郎の母親はお京を嫁とし、お粂を圍ひ女の如くするも、種々の氣配りにて、緣者の人々を說きつけ、亦峯次郎の父をも得心する樣になせし、慈愛を思ひ量らば、わが子ながらも峯次郎が母を大切に、孝行を父にも盡し、家業の事も油斷はあらじと思ひし所、此の頃は兎角家内に腰を落著けず、遊びにのみ出でしかば、お京は姑の機嫌をはかりかねて、心配ひをなせしかば、姑はこれを不便に思ひ、お粂の方へ伴ひ行き改めて姉妹の杯をさせ、お粂をも折節本家へ呼び寄せて、お京と竝べて遊びをさせ、何れも勝り劣りなく、愛憐がりしかば、兩女の悅びいはん方もなし。然るに折あしく峯次郎は、お粂が本家に來て居る時は、家内の用事なども調へ、お粂が家に歸り行く時分には、房吉の方へのみ行く樣になりしゆゑ、お京も母もお房の方は心付かず、お粂の方へばかり、峯次郎は行き遊び居ると思ひければ、さすがに女心とて、お粂母子を恨みけり。されば或時峯次郎の母は、お京を

連れて柳川亭のお粂が許へ至りしが、少し顔色をあしくして奥へ通り、座に直るを、お粂の母は挨拶しながら、お京を見れば泣貌にて居る故、怪しみながら會釋をし、夫れより二階に向ひ、お粂を呼べばこれをとゞめて、岑次郎の母、岑母「今日はお前に種々とお噺し申し度い事もあり、亦此の孃も此間中から兎角氣分が勝れずに、ぶら〳〵と鬱悄ぐ様子で困りますから、チツトまた此方へ置いて、お粂と二人が和合くして、此の子の病氣をも岑次郎に看病させたいから、連れて參つたのサ。そして今日は岑次郎は何所へか出ましたかネ。」くめ母「イ、エ只今化粧をして著物を著かへて。」みね母「アレサ、お粂の事ではございませんわ、岑次郎は何所ぞへ出ましたかと申すことサ。」くめ母「エ岑次郎さんかえ。」みね母「居ませんかネ。」くめ母「オヤ〳〵お宅ではございませんか、此間は久しく此地へはお出でないから、お粂も案じて居りますけれども、私が申すには何も案じる事はない、大畧お見世がおいそがしいから、夫れで此方へお出でなさるお閑がないので在らうと申して居りました。」みね母「ナニ〳〵何様いたして、家業の事を手傳ひでもする様ならば、申し分はないけれども、久しぶりで家へ歸つて間もないのに、旦那の（これは岑次郎の父をさしていふことばなり。）前を取直して、マア於京を嫁にする様にしたり、亦お粂の事も餘儀ないわけだと思ふから、此所の家をこしらへて、といつた所がお前方母子の衆が、恩がましくお聞きでないヨ。不殘岑次郎の爲にした私の苦勞、それを何ともおもはずに、遊んで歩行くも宜いけれ

ど、せめてのことに晝半日、夜は二更とか三更とか時刻を極めて、家内へ歸る樣にすれば、何にも用のない身分だから、私も此孃も氣はもまないが、他へ出たりといつたら、五日も七日も家へは寄りつかず、此方へ許り來て居ては、内外の者の所思も悪い許りか、私が世間へ聞えて濟まない、我が子の行儀、第一お京も可憐さうで、於粂女はよからうけれども、此の娘の心を汲みわけて、義理といふ事を思つたら、峯次郎が長居をせぬ樣に、お粂がしてくれてもよささうな物だと、私は思つて居るけれども、お前は譯有姉娘、マアお京よりお粂の方を、本家へも入れたい樣にお思ひだらうけれども、然うすると、私が猶の事、最初から苦勞をした效がなし、同じ縁者の娘で、お粂もお京も私の爲には姪の事だから、兩方ともに可憐い心に變りはないけれども、お京を嫁にしたのは、田舍の身上を仕舞つて、お京を峯次郎に添はせたいといふ親の願ひ、又賤しい心だとお思ひか知らないが、夫れに付いては、大金を峯次郎の方へ送られる義理もあり、四方八方の能い樣にと私が骨を折る樣にして治めたのだから、峯次郎が私へ對して、何程母でも少しは恩返しに氣を休めさせても能いぢやありませんか。」

トいふ中に、お粂は化粧をして下へ來り、伯母へあいさつをして後、お京には別してしたしくかたらひより、さもむつましくあいさつすれば、お京はもとよりおとなしく、お粂をまことの姉のやうにおもへば、たちまち涙顔をわらひがほにして、したしくかたらふゆゑ、峯次郎の母もうちとけて、それよりお粂とお京を下ざしきにおき、母親同士二かいへゆき、さけさかななどとりよせて、やはらぎながら峯次郎の、みもちのよろしからざることを、いろ／＼はなしける。此の時お粂お京の二人は、下座敷の中の間にて、三味線を出して遊ぶ。茶見勢の方は客もなけれ

ば、下女が茶簞笥の際に居るのみ。兩人は淨瑠璃をかたり居る。
上〽よしあしびきの、山めぐり四季の眺めは面白や。合梅がわらへば柳が招く、風のまに／＼さわらびの、手を引きそうて彌生山、合つくらふ花の仇ざくら、合〽ましは氣任に山吹も、見はてぬうちに合春過ぎて、はや卯の花とはながつみ。合〽そしてあやめ菖蒲やかきつばた、ほつそりと時鳥合あれ夕立にぬれしのぶ、すゞ風がえ。合〽鴈が屆けし玉づさは、合小萩のたもと合かるかやに、返事紫菀も朝貌の、合〽おくれ咲きなる怨みわび、露にもぬれてしつぽりと、合伏猪のとこの菊がさね、ヨイ／＼／＼／＼ヨイヤサ。〽よいやさへ行く初しぐれ、松も杖つく老の坂、上りテン／＼テン／＼。

ボツン 京「オヤ／＼いけないねえ、モウ絲がないヨ。」くめ「イ、エまだ此方にあるヨ。」ト、戸棚をあける。京「何樣しても、私やア義太夫聲が出てならないネエ。」くめ「ナアニ左樣でもないヨ、かへつて詞の所ヤ、しつかりとした文句のところは、お前のはしやんとしてよいヨ。」ト、いふをりから見勢へ客が來りければ、くめ「ハい被爲入いまし。」トいひながら茶を汲みに立つ。お京は側にありし田舍源氏の十二編をあけて見てゐる。此の時見世へ休みたる客は二三人連にて、何心なく岑次郎の婦多川に遊び居る噂をして、歸りしとぞ。

再說▲岑次郎の母●お粂の母●▲二階にて酒くみながら、女の子供のこと、岑次郎の身の上など、はなし合ひて居たりしが、下にて語る淨瑠璃を聞きながら、▲「オヤをしい所で絲が切れたさうだ。」●「ハイ、それに見世へ又お客がお出での樣子でございます。」▲「ハア左樣かネ、道理で止めたと思ひました、丁度老の坂といふ所で絲が切れたネ。」●「ホンニ左樣サ。」▲「アヽおまへもわたしも、モウ初老の坂をば、一ッ二ッ、越えて、今になつて見ると子どものゆゑに、兩親のことをおもひ出しますネ。」●「ホンニ左樣でございますとも。併し手前勝手に、マア親のことよりかと子どものことを案じますが、何樣も子どもは其の樣には思ひませんヨ。それだから親馬鹿とむかしから申しますが、ホンニ違ひないとぞんじますヨ。」▲「イヽエそれでも、まづマアお前は寔に仕合だわネ、お房ばうでもお粂でも、揃つておとなしいことをお見。何樣してあの樣な娘子どもは、當時はすくないヨ。あのマア岑次郎が娘ならば、何樣したもんだネ。マアひいき目でいへば、情人の一人や二人は、堪忍もするけれど、下に居る娘達と入り代つて御覽な、それこそあの性わるでは打捨つてはおかれないわネ。」●「オホヽヽほんに女の御子ならば、また放蕩もなさいませんわネエ。全體御生まれつきがおやさしいから、私どもの子供なども、かはいさうだと思召して、お世話を被成つて下さつたから、ツイ子供等も此樣なりましたので、實はと申しますと、お房やお粂が悪いからの事でございますわネ。」▲「イヽエ左樣では

ございませんョ、實は今日お京を連れて此所へ參つたのは、お前にも少し恨みを言はうし、またお粂にも義理を知らない仕方だといふ事を、意見と小言とならべて言はうと思つて來た所が。」●「すヤーヤそれは何樣いふ譯でございますか。」亀「サア私が推量には、岑次郎の此間中本家へ歸らないのは、お粂が此方へばかり呼び寄せて置くのだらうと思つてネ、迎へにお京をよこさうといへば、あの娘は姉さんの前へ嫉妬らしく思はれては、濟まないの恥かしいのと、内端なことばかりいふから、夫れで私がお京を連れて來て、岑次郎にもお粂にも思入小言をいはうと思つて居たらば、マア今しがた見世へ來た客人たちの噂では、此家へも寄りつかないあの子の不埒、悃れてものがいはれないわネ。左樣して見ると、此の末お京やお粂がかはいさうな事にもなるだらうと、寔にマア苦勞ぢやァありませんか。何をいふにも兩娘たちは、悋氣嫉妬といつたら少しもせずか、これにもまた困るねえ。何にしても先刻の噂をよく聞き糺して、是非岑次郎の心を入れかへるか、但し又、親をも兩娘達も思にないくらるならば、愈今度は勘當でもして仕舞はないければ、私も旦那の前へ對して濟まない譯、と言つた所が、左樣なると岑次郎故に苦勞させた娘たちに氣の毒なり、ホンニモウ〳〵私ほど子供で氣をもむ者もあるまいと思ひますョ。」ト、言はれて少し胸を痛めて心細く、他を思ふは身を思ふ、もしや岑次郎の心が變り、女郎か情人か唄女の爲に、勘氣を請けたら猶のこと、意氣地をたてる相手の女、定

ゐし男の身を憐み、是非ともみつぐ心となるべし。左樣なるときは二人の娘も、これまで苦勞をせし甲斐のなきのみならず、實情のお房お粂が心の底、命も捨てる不料簡を、出し兼まじき戀の愁、もしもの事があるならば、いかゞなさんと、胸を痛め暫く言葉もなかりしかば、心を推して物やはらかに、今「ナニネ、左樣した所がお前を始め、兩娘たちを困らせる樣な事は仕ないから、かならず〳〵お案じでないッ、サアマア氣晴らしに最う一ツお呑りな。」今「ハイマアお前さんこそお氣ばらしに、お重ね成さいまし。」ト又さかづきをめぐらしてうさをなぐさめゐたりけり。

## 第二十回

義理の柵、情のほだし、樂しみ深き色戀も、極意となれば面白みは、たゞ一分にして九分の苦しみ、身を亡ほすに至りては、互の實意も不實となり、他見で羨む樣にはあらず。然ればお粂房吉お京の三女が、思ひ〳〵の苦勞ありて、互に樣々の心配ひ止む時なし。さはいへ苦勞と難儀をするのが、戀の情とか、意氣地とか、迷ふは壯年き人の常、今更いふは愚かなるべし。扨もお京とお粂は見世前にし、往來の人の品定めして、遊び居る其の姿、花にも勝る美麗しき、笑顔にもるゝ愛敬の、自然なる人品にて、殊にお粂は唄女風にて、婀娜なれども賤しけなく、お京は元來位高きやうなる生得な、姑の好みにて幼少く化粧りし少女風、往來の人も立ち留りて、見惚れながら二女を賞めて行く故、

何となく恥かしければ、お京は壁の方へ向きて、狂歌俳諧の摺りものゝ、張りまぜの樣に張りたるを詠めて居る。書畫の大人の會日、あるひは俳諧の題を記したる月並の法條、その外番附など張りてあり。京「オヤ〳〵何れも綺麗な畫だネエ、その中でこれが一番能いねえ。」くめ「何れえ。」京「これサ、此の畫が寔にいいねえ。」

面白き鞠にうかれておもはずもほうとかけたる鶯の聲　桃江園主人

くめ「ア、、それは山しろ河岸の藤さんといふ旦那に貰つたのだヨ。毎年綺麗な摺物をお拵へだとサ。」京「オヤ左樣かえ、峯さんも狂歌をお詠みだネエ。」くめ「ア、その柱隱しは峯さんだヨ。」京「オヤ〳〵これがかえ。」くめ「イ、エ、それは文亭さんといふお方のだヨ、其の次が峯次郎さんのだわ。」京「道理で手が似て居ると思つたわ、畫は誰だえ。」くめ「畫はネ、英泉の弟子の英一といふ人が畫いたのでネ、あの額は國直と英泉と寄合書だヨ。」京「オヤ柳亭種彦といふ名が書いてあるネエ。」くめ「ア、あれはネ寔に久しい以前に、田舍源氏の作者が詠んだのを、峯次郎さんが覺えて居てお書きのだヨ、モウ二十年ばかりになるとサ。」

上野山花の吹雪はいとはねどあたりに簑の輪笠森もあり

くめ「それは能いが、峯次郎さんは今日でモウ幾日ほど、宅にお出でないのだえ。」京「ナアニ日中は

折節お歸りだけれども、夜は少しも宅へお歸りでないから、母御さんも此方へ許り來てお在でだらうと思つて、私ア當分姉上さんと、同居に置くとお言ひのだから、私やア寔にお前さんへ、お氣の毒でなりませんわ。」くめ「左樣かえ夫れぢやア先刻のお客達の、噂ばなしがないと、私も母人さんも疑はれる所だつけネエ。」京「ナニ私やア、少しもお前さんをわるく思やア仕ませんが、母人さんが父御さんの峯次郎の父をさしていふ。前へ濟まないといつて、氣をもんでお在でなさるのだから、必ず〳〵私を惡く思つておくれでないョ、姉さん。」くめ「ナニ惡く思ふものかネ、夫れよりか私やア先刻の咄だと、急度峯次郎さんが、婦多川の唄女か圍ひ者の家へ許り行つてお在でのだと思ふわ。」京「アヽ、急度然うだョ、憎らしいネエ、オホヽヽヽ。アノネ姉上さん、私やアまだお知己にならないけれども、お前さんのお姉御のお房さんとかお呼ひのが、和歌町とかにお在でぢやアありませんか。其のお房さんに、お前さんが能く頼んでお遣りなら宜からうネエ、私の方へ峯さんがお歸りでなくつても、此宅まで歸つてお在でだと、本家の用も早く間に合ふし、母御さんも案じが少ないのにネエ。」ト言はれてお粂は胸にギツクリ、只他所事に聞きなせど、實は姉の房吉が、外にはよもや峯次郎の、心を移す方はあらじ、然りとて今は引き別れて、此所と彼所と隔たれば、お房は却つて此の姉を、身儘になりて氣樂なる、事のみならんと羨むなるべし。兩個の母は、峯次郎の母その身の母 夫れぞとも知らず、知らせる譯にはあらず、

お房の事を今更に、母や世間へ知らるゝ時は、岑次郎よりお房より、第一他に笑はるゝ、誹りはわが身が先にして、淫蕩ものよ悪性な、姉と娣で一個の男を、戀ひ爭ひは何事ぞ、恥を知らざる親姉娣、互に慾から起りしことゝ、親類までの顔よごしと、いはるゝ元となりぬべし。兎ても角ても心を改め、お京を本妻お房を妾と定めて、此の身は尼ともなりなん、然もせざる時は、相互に一生心はやすまるまじと、思案を極めてあるごとも、知らねばお京は彼是と、さも睦まじく語合ひて、其の日は姑ともろともに、柳川亭より本家に歸り、只向に岑次郎の事を案じて、其の行先を問ひ尋ね、ひそかに其所へさがし行かんと、心を惱まし居たりける。其の後お粂は覺悟を極め、母とお京へ遺書をして、心強くも忍びやかに、我が家をはしりいで、早くも駕籠を雇ひつゝ、垂を下して他目を隱れ、尼寺さして急ぎけり。

果てしなく物思ふらん長繩手浮世は旅の前路なりけり　　尾州一ノ宮　狂花亭春蝶

頃は六月中旬なりけん、小夜更け渡る町小路、涼みに出でし人々も、臥戸に入りて門寂しく、往來も絶えたる折なるに、十四五人の若衆が、町の木戸際に寄り集まり、△「サア／＼、些とも早くやらかして仕舞はうぢやァねえか、段々に夜がふけらァ。」●「眞にモウ丑時だらうナァ、ヤイ／＼鐵ヤイ、地口方燈の棒を不殘抜いてしまやナ。」×「モウ片側は抜いて了つたァ。」△「然うかそれぢやァ此の大

方燈許りだァ、サア〳〵油のある中にやらかせ〳〵。」ト、木戸の上に高く組上げし大方燈の兩側に、二階の屋根の軒から軒へ、足代の如く拵へたる其の兩面は、仁田四郎が大猪を乘り倒す畫と、富士の裾野の卷狩の假家にかけし紋盡しを、さもいかめしく畫いたり。●「エコウ今年の畫は國直と英泉の畫揃あつて、評判が能いナア。」▲「それは知れた事ヨ、畫の修行が違はアナ。」■「併し地口方燈の役者の似貌は、貞重がうまく畫いたぢやアないか。國貞よりも能い位だぜ。」▲「さうよ、此の頃ぢやア人情本の畫も能く書くなア。」●「サア〳〵行燈の紙を下すぜ、能いか〳〵、地上には何もねえか、先刻氷水賣が水をこぼしやアがつたが、泥土になつちやアゐるないか。」「ナニ〳〵大丈夫だ、筵が敷いてあらア、氣配へねえから下しな〳〵。」▲「それ請取らッしヨ。ア、引いい風だナア、、、コウこの風が御神輿さまをかつぐ時分に吹いてくれりやア能いのに。」「ナニ日中は風が吹いても、暑さの強いので身にしみないのだア。」●「ドレ〳〵身にしみて片付けて仕舞ふぞ、ナア〳〵衆人が働かないか、モウ此とだぞ〳〵。」ト、大勢が祇園祭の方燈の、跡とり片つけ居る所へ、髮ふり亂して逸散に驅け出し來る一人の娘、譬へにもいふ夜目遠目、月の明りに貌の色、雪にもまさるうつくしきが、素足の儘に息もせはしく、背後の方を見返りながら驅け來りつゝ、若衆に突き當り、▲「オヤ眞平御免被成まし、ツイ急ぎましたから。」トいふを此方に居たる若衆が、見て笑ひながら、■「ナニ〳〵あやまらね

と能いやアネ、お前の様な美麗しいのに突き當られりやア、本望でごぜえやす。」ト戯言いふを、聞く娘は心ならざる體ながら、女「アノ鎌倉の尼寺へ參るには、何樣參つたら宜うございませう。」ト、尋ぬる返事もせぬ中に、足音高く地ひゞきさせて、たしかに娘の追手かと、被察れたる二三人が、はやくも其所へ近づきける。

畢竟此の娘の安否は奈何、亦追ひ來りし者どもは何者ぞ、其の委しきを知らんとならば、次の卷をよみたまへかし。

春色梅美婦禰巻之十　了

# 春色梅美婦禰 巻之十一

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水 著

## 第二十一回

そもく牛頭天王と申し奉るは、神代に御勢ひ猛き御神にて、素盞烏尊といへり。然れば人皇五十六代、清和天皇の御宇に、播磨國より山城國八坂の郷に遷座ありて、本朝武勇の尊神と崇め奉ること、いと古し。其の故は、清和天皇の貞觀十七年より、今天保十二丑年までは、九百六十六年になれど、猶それより古く、人皇十二代景行天皇の四十年に日本武尊東夷を征伐の御時、夷退治の大願を、素盞烏尊に祈り給ふとて、始めて東國にこれを祭り給ふが最初なり。その素盞烏尊の鎭座まします御社は、武藏國豐島郡忍の池の西北なる、根津大權現則ちこれなり。實に武運長久怨敵退散爲首除の祈りには、江武に於て根津權現に勝る神靈はあらじ、名にしおふ日本武尊の武勇にて、尊び給ひし御神なれば、素盞烏尊の神功は、申すもなかく愚なるべし。こゝに根津の社は、千七百二十二年のむかしより在せば、山城國なる祇園の社より古きこと、七百六十餘年の以前なり。亦牛頭天

皐と異名を稱へ申し、兩部習合の說にして諸書にしるしてあり。そも神代の遠き昔、素盞烏尊の、餘りに猛く荒々しく在しければ、天照大神の、御勘當をうけ給ひて、日本の國の中に住み給ふことかなはず、はる〴〵と琉球國までさすらへ、巨旦大王といふ人の、家に近づき宿を乞ひたまへども、巨旦は情を知らぬ財主なれば、嚴しく斷りて尊を入れず、却つて害し奉らんと計る。此の節は素盞烏尊も勘當の御身にて勢ひなければ、爲方なく其所を退き、蘇民といふ貧しき者の家にいたり、宿を求め給へば、蘇民はいと貧しといへども慈悲深き者なれば、尊を勞り御宿を致し、粟の飯を進め奉る折節、異國より暴疫鬼の押し來る事を察したまひ、蘇民が家の入口に茅の輪を造り神法を行ひ、這れを除け給ふ。其の翌日より一村の人こと〴〵く、疫病にて煩ひ死にけれども、蘇民の家内は障りなく、疫病を免れたり。斯くて尊は蘇民に別れたまふ節、仰せられけるは、此の後もまた疫病の流行る時あらば、蘇民將來子孫と書いて、門口に張り置かば、疫鬼の家内に入ること能はじと、敎へ給ひしといふ、實にも勇々しき尊の御功ならずや。後生いよ〳〵神力あらたに在す故、日本國中此の素盞烏尊牛頭天王武塔天神とも申し奉るを祭らざる所なし。別けて繁花の町々には、此所彼所にて、尊の神輿を修造へて氏子中を渡し、疫病を追ひしりぞける事を祈る。六月の祇園會は、三才子も知りたる事ながら、因に依つて爰に記せり。再說天王祭の神燈大行燈を、仕舞ひかゝりし其の所へ、周章てて逃げ來る一

人の娘、間もなく追ひ來る二三人、先に立ちたる一人は、出刃庖丁の研ぎすましたるを右手に提げ、
後に續きし二人の男は、三四尺許りなる棒を持ちて驅け來る　娘は若衆の四五人立ちし軒下の暗き方
へ隱れるを、若衆は早くも推して、背後の路次口へ入れて遣る所へ、近づく三人が、「[illegible]此
所を十八九になる娘が通りは仕やせんかネ。」△「エナニ娘が、今道を聞いたッけ、何だか息をきらし
て驅けて行つたァ。」兵「何所の方へ行きやしたネ。」◉「然うさ何所へ行つたか先に知らないが、此の
先の横町を曲つて逃げて行つたァ、まだ遠くは行くめえ。」半「さうでござえますかネ。」兵「憎い女だ
ァ盗人めが。」ト言ひながら驅出し行く跡後見送りて、壯年等が娘を隱せし路次に入り、小聲になりて
深切に、△「時にヤァ、危い目に合ふ所だつけナウ。」◉「さればサ、一人の野郎めは、ぴか〳〵光る刃物
を持つて居やァがつたぜ。」半「エコウ姉さんお前マァ何様したのだか、何でも餘程惡い事をしたの
か、彼奴等に捕まると殺されでもする様だぜ、刃物を持つて來た奴は大方お前の亭主だらう。」◉「何
でも恐ろしい面をして、追驅けて來やァがつたが、お前の亭主ぢやァないか。」△「縁があつて此様に
隱して上げた位だから、其の筋道を話しなせえ。」兎てもの事に、難儀を救つて向うへ渡りを付けて上
げやせう。」二「お前一人が逃げ出して來たのか、密夫も同作に逃げたのかえ。」ト四五人寄りし壯年等が
密夫抔して亭主に見咎められ、逃げ出したる様に推量なせしかば、其の遉に問ひ掛ければ、娘はいと

ど恥かしく、亦悔しければにや、涙ながらに身の上をあらまし咄して聞かせける。（これより暫くはなしを以前へもどして女のことばがきならず本文につゞりてこの女がにげきたりし譯をくはしくす。）千種にすだく蟲の聲、亦二ッ三ッ飛ぶ螢、夜風は涼しき田甫の畔道宙を飛ばする四ッ手駕籠、掛聲もせずはしりつゝ、往來よりは一丁ばかり、西の方なる森の中の、茅家の前へ駕籠を下して、かご虎「サア姉御此方へ出なせえ。」かご平「ヤレ〳〵足に正體がなくなつたア。」かご熊「コレ〳〵愚癡を言やるナ、肩と足を勞らかした代りには、今夜親方が樂しんだ跡おやァ此方等にも樂しませて、夫れから何所へか連れて行きやァ、一ト包になる品物だァ、有り難く思やナ。」トいふ中に早手を取りて、駕籠の中より引き出すは、月の光に潤はしき、色をましたる一個の美人、四邊を見廻し驚く風情、これ則ち別人ならず、彼の姉多川に居たりし粂吉が、柳川亭をも振り捨てて、尼寺へ行かんと、途中に雇ひたる駕籠の者共が、思ひもよらざる悪人にて、鎌倉へ行く路を違へて、かゝる所へ連れ來りしなり。くめ「オヤ〳〵こゝは道中の宿屋ではないねえ。」虎「知れた事サ、本街道をうか〳〵行くと、お前の家内からは追人が懸らうし、此方の胸算用も悪いから、田舎道を横筋違ひに此樣な所へ連れて來たのサ。サアまづ今夜ァ此家へ止宿ると極めなせえ、不斷は明いてゐる宅だから諸道具もなし火の氣もなし、不自由でいけねえが、其の代りには鄰家は遠し、往來の人は通らず、高聲をしても聞人はなし、何を何樣せうと遠慮は不入いのス。」

ト、勝手なる戯言を吐きながら、三人かゝりてお粂をともなひ、いと古びたる草の家の内へ引き入れ、燈火を照らし、兼て調へ置きぬるか酒肴など取り出し、お粂に酌を言ひ付けて、酒酌みかはす其の風情は、なか〳〵駕籠かきの體にはあらず。昔繪本の大江山、酒呑童子の有様にて、お粂をさながら我が物と、言はぬ許りの取扱ひ、頓て不法の行ひも、なしかねまじき樣なれば、お粂は怖さ悔しさに、物をも言はず居たりける。

虎「コウお粂其樣に鬱情いで居る事アないぜ、此身をば忘れてしまつたか。コレまんざら知らねえ顔でもあるめえが。」くめ「すや私やア些とも覺えて居ませんヨ、そして駕籠やさんに、心易くした事はありません物ヲ」虎「コウ〳〵、其樣に此身を安く下直に言つてくれる事はないぜ、まさかに此身も腹の中からの、駕籠かきではないわナ。これでも近頃まで深川通とも言はれて、一人や半分は和歌町に情人も持つて居た、藪やの虎さんだア。今ぢやア零落れて、此樣な所へ來ては居るが、内證まで駕籠卯を仕ては居ないぜ。以前其方が、粂吉と呼つて出た始めに、知己になつた事もあるぜ、其の時分から念かけて居たが、縁があればこそ、此樣な珍らしい所で出合はれる事が出來たのだ。モウ斯うして隱れ家まで見せた上からア、否應は言はせねえ。所詮此方は命がけでする仕事だから、覺悟して自由になるが能い。」ト憎々しくも手込めの詞、退れがたなきお粂の難儀、爲方なくぞ見えにけり。

斯くて三人の悪人等は、飽くまで酒食を盡しければ、虎八はお粂の膝を枕とし、其の餘の二人も酒機嫌に倒れて正體なかりしが、お粂は一生懸命に神佛を祈りつゝ、やがて其の家を逃げ出し、東西南北の當所もなく、右よ左と驅け走り、漸うに町家へ出でて、彼の天王の大行燈を仕舞ふ場所へ逃げ來りしなり。此の旨趣を壯年等にはなしければ、祭場の人々は齒をかみならし、

△「イヤハヤ、そりやアまアとんだ噺だア。それが實正ならば、今追驅けて來た奴等ア勾引だナア。」ト言へば友達も一同に ●「エ、コレ始まりから、其の譯を聞いて居たのだと、彼奴等を打ち倒して、こり〴〵させて遣る物ヲ。」×「脊後を追驅けても、モウ捕まへる事は出來めえか。」●「イヤ併し盗人猛々しいといふから、今に又、此所へとつて返して來るも知れないから、マア〳〵頭の宅へでも連れて行つて、止宿らせてやるが宜からう。」ト、

さしも實意の壯年氣質、俄に人々が頼もしく、お粂を介抱して、其の町内の頭だつたる、人の家にぞ伴ひける。

## 第二十二回

夜は更けたれども涼風に、働き安しと夏の空、星もきらめく銀河、自然と秋へ近くなる、冷氣を催す時刻なりしが、お粂を頭の家へ伴ふ若衆の、噺を聞いて立ち出づる、二十二三歳の婀娜なる女、此

の家の娘にて名はお稲といふ。お粂と顔を見合はせて、いね「イヤ粂吉さんかえ、マア何様被成たえ、サア〳〵お上りな。」くめ「オヤ〳〵小稲さん、寔にお久しうございますネエ。」ト互に挨拶をするを看て、此の家の主市郎兵衛、市「オヤお稲の友達か。」いね「ア、和歌町に居た時は姉妹のやうに為ただァネ。」市「ハア然うか夫れおやア猶更の事た、遠慮なしに奥へ行つて、娘と二人で、早〳〵マア休みなせえ。定めて労れもあらう。サア〳〵構はず奥へ行きなせえ。」くめ「ハイ有り難う。」いね「アレサ遠慮なくお上りな、私許りで誰人も外には居ないわネ。」ト無理に伴ふ奥の方、市郎兵衛は子分の若衆に向ひ、市「サア〳〵、餘り夜がふけるから、些とも早く休むが宜からう、殘つた片付け物は明日にするが能いぜ、又間違でも出來ると悪いから。」「ナニ最早殘らず片付けて仕まひやした、殘つたのは轆の枠ばかりだから、跡でもの事に片付けて仕まひやせう。」トいふ折から表の方にて、何やら物騒がしく若衆の聲にて、八「ヤイ〳〵逃すな〳〵、頭の家へ引きずり込むがいい。太エ奴だ。」●「はやく白刃を打き落さないと行けねえぞ、長鳶で叩き倒せ〳〵。」ト大勢騒ぐを聞き付けて、お粂を送り入れたる若衆も、得物々々を引提げ〳〵、木戸の方へ驅け出し行けば、市郎兵衛は驚きながらも、表の戸をしめ支度をして一腰を帯し、市「お稲ヤ此身が歸るまでは、鍵をかけて置いて、戸を明けるなヨ。」ト言ひ捨てにして市郎兵衛は、喧嘩の場所へ驅け出し行く。

斯くて市郎兵衛が驅け付けて見れば、前段に記したる籠虎籠熊籠平の三人が、お粂を追ひ蒐け來りて見失ひ、又驅け行きしがとつて返し、樣子を聞き付けて、若衆にお粂を隱せしならんと咎め懸りしが、爭ひとなりし事なれば、弱きを助ける壯年の、氣性も揃ひ祭の元氣、元來非道の惡者を憎み、腹立ちありける所へ、身の程知らぬ虎に熊、強しといへども人面獸心、また籠平も平らかなる奴にあらねば、天罰を恐れず、俠客の只中へ飛んで火に入る蟲同然、こゝに憂目に出で合ふは、疫病神を拂ひ清める、牛頭天王の神德なるべし。

●「ヤイ此の盜人めェ、女を勾引し損やァがつて、此方等に向つて懸るとは呆れた畜生だぜ。」▲「ナニナニ構はず踏み倒して繩で縛るが能い。」×「面倒だァ打ち殺せ〳〵」ト大勢集まりて刃物を打ち落し、頓て三人の者を、繩にてぐる〳〵卷にせしかば、市郎兵衛は、壯年等を和めて強くは打たせず、されどもあまりに、公を恐れざる曲者なれば、後々の見こらしめにもなるべしとて、門注所へ訴へ奉りしかば、聽衆の頭の糺させ給ひて、三人共に首を刎ねて、後々の惡人を懲らしめ給ふぞ難有けれ。這は併しながら日數も過ぎて、後の事と察し給へ。扨も其の夜の明けければ、お稻はお粂に食事杯を勸めし上、父の市郎兵衛に、終夜聞きたる由にて、お粂の身の上を委しく語り聞かせしかば、市郎兵衛これを聞いて笑ひながら、市「成程女子共とは言ふものの、餘り氣の狹い料簡を付けたものだナ

ても誰人も六かしく言ふ譯でもないのに、自身許り落度の樣に、二人の中で只一人、身を引いて尼になるなんぞといふ、不所存な事があるものかナ。そしてマア其樣な美麗しい顔で、夜道を一人步行きをするから、昨夜の樣なあぶない目に逢ふだらうぢやァないか。折能く夜中に、若い衆人が往來に居たればこそ、此家へ隱して貰ふやうにもなつたのだァナ。必ず氣を小さくもつて、親姉妹に歎きを懸ける樣な事を爲なさらないが能いネ。マア／＼二三日お稻と二女で、和合く遊んでお在でなせへ。其の中に自己が考へて、三方四方の治まりの宜い樣に落付けて上げるから、何でも私に任せて置きなさい」ト、市郎兵衞が深切に請合ふ許りか、小稻は姉妹が、久しぶりにて出會ひし如くに睦ましく、お粂の側を片時も離れず、實意を盡すにぞ、お粂も嬉しく心安堵き、市郎兵衞の詞に任せて、此の家に四五日身を忍ぶ樣にして居たりしが、柳川亭にては、お粂の母は遺書を看るより狂氣の如く、お京の許へも内々にて知らせしかば、お京は驚き悲しみて、母にも中々隱し置くことならねば、其の趣を告げるにぞ、これも同じく愕りして、詞も出でず周章て騷ぎ、早速柳川亭に至り、涙ながらに兩母同志、火急に相談を遂げて、心利きたる人々を頼み、尼寺の方へ遣はし、途中より聞き合はせて貰ひながら、尼寺まで聞き合はせけれども、一向に似寄りしこともなしといふ沙汰にて、尋ねに行きし人々も、手を空しく歸りし故、愈々歎き悲しみて、尼寺へ行くと遺狀をしたれども、海河へ抔沈みしや、

又は途中にて不慮の災難を受けて身を苦しめ、危き事に逢ひしは居らぬかと、案じ惱めど如何とも、爲方なければ両母は、神に祈り易者を頼み、種々すれど便りなく、途方を失ふ許りなり。然れば柳川亭の鄰家の者も、隱すとすれど聞き傳へて見舞ひに來る、各々實意の世話をして、彼是と尋ねに如在はなかりしが、お粂が家を出でしより、三日目の日中過ぎ夕立雨の降りて、往來の人も途切れたる折節、茶見世の戸を半分おろしてあるを、這入るは鄰家の内儀、一人の女を伴ひて、お粂の母に囁きすすめ、彼の女を奥へ通しければ、長屋の内儀も言ひ合はせしか、表と裏口より二三人入り來り、母なる人に挨拶し、各々ひそめき寄り合ひつゝ、一人が立つて茶碗に水を汲み來り、盆の上に載せてさし出すを、母は請取り鄰家の内儀が連れ來りし、女の前に備へつゝ、軈て水を手向けるに及びけり。是れなん降巫といふものにて、斯かる折には人々が、迷ひを重ぬる所爲ながら、又無理ならぬ女子達の人情ならんか。扠も降巫は生口と水向けられて、お定まりの言ひ出しも濟みし時、兼々降巫に問ひ上手と、噂をされる長屋の内儀樣、お可曾といふが膝を進め、べそ「アノウお粂さんかえ、エ違ひないかえ。」　ほかの女「アレサ、其樣な疑ひを言はずと、お粂さんらしいから何所に居るか、夫れをお聞きな。」べそ「然うかなウ、アノネお粂さん、お前マア母御さんが此樣に泣き明かして、苦勞にしてお在でだのに、何故便りをおしでないネエ、そして遺書と違つて、尼寺へも行かずに何所にお在でだ。」ト、問ひ

かけられて彼の降來は、さも悲しげなる聲音にて、生口なれども哀れなり。「今更後悔を仕ますがナア、家を出るより思ひがけない人達に、取り圍まれて幾世の難儀を爲ますにもナア、母さんや人の案じて下さる苦勞より、私が母樣を案じ煩ふ辛苦の悲しさに、ヤア何樣にか勝る辛さも怨めしい、人の障りに母樣の、側を離れる不孝の咎も、定まり事か何樣ぞして、今一度は顏を見合はせたうござるにヤア引。」●「オヤ〳〵お粂さんにしては、否な詞遣ひだネヱ。」▲「マア默つてお聞きョ。」ト、互に前後の内儀達が顏を見合はせて、氣味惡さうにして居る。お粂の母は始終顏に袖をあてて、泣いて言葉もなし。「それだからネお粂さん、お前も家内へ歸り度くおないならば、直に歸つて來られさうなものだネヱ。」「ヤレサア夫れはサア引、言はれませずと歸ることがなれば、悲しい目をば爲ませねど、右も左も怖ろしい人が、前後を用心して油斷を爲ねば、一足も出られる樣な、疎かな透間といふがない故に、飛び立つ程の悲しさを、從容と堪へて間を見れども、十日の間に出られぬと、さや一生涯母さまの、お顏を見る事はなりますまい。モシ然うなれば此の世を去るも同じ身を、哀れと思うて下されマア引。」ト、いふを聞くより一座の内儀、思はずワァッと泣き出し、涙の雨に夕立の、客齋嬰ある[illegible]りけり。

此の節になりてお粂の母、身を振はして歎き悲しみ、何卒お粂がつゝがなく、家内へ歸るやうに

なる、除をしてくれよと降巫に賴み、其の外種々氣をもみて、片時も忘るゝ事はなかりしとぞ。
嗚呼世の中の親心は、子故に迷へば賢きも、愚癡になるこそ哀れなり。

春色梅美婦禰卷之十一　了

# 春色梅美婦禰　巻之十二　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第二十三回

再說、お粂が家出して、行方も知れずなりしかば、柳川亭の母もお京が方にても、岑次郎の父には知らされず、彼是と内々にて周章て騷ぎしが、斯かる節になりても、猶岑次郎は家に歸らず、依之、兩方の母も愛想の盡きる程あきれて、岑次郎の事は先づ差置き、只お粂の行方をのみ案じ入って、苦勞に心も亂れし如く、涙にのみ暮れけるが、お粂の家出したる四日目の朝、兼々心易くせし逆旅大萬蝶が、柳川亭の門口から、萬「オヤ／＼大變に朝寢坊だネヱ、モウお客が來て休む時分だのに、お見世も明けないで。」トいふを聞き付けて、奥より出づるお粂の母「オヤ萬蝶さんお早いねヱ。」萬「ナニサ些とも早くなしサ。此の頃お粂さんの寢ばうにお母樣まで引摺り込まれて、朝遲くおなんなさつたのだ。ナアノ＼お粂さん、お起きなせヱ、萬蝶が急用があります。アハヽヽヽ。」「サア／＼遲い／＼。」ト、例のお株の元氣よく座敷へ上り、萬「オヤ／＼中の間でなし、是でなし、お粂さんは二階へお寢ン眠

かえ、それぢやァ朝遲い筈だァハヽヽ。」母「アレサ萬蝶さん、お粂は寐ては居ないわネ。」ト言ひながら眼に涙を浮めしを、萬蝶は早くも見とめ、萬「すヤ母御さん涙ぐんでお在でなさるネ、何樣かなさつたのかえ、そしてお粂さんはマア何所へお出でなのでございます。」母「ナニサ何所といふ當があれば案じは爲ないけれども、些とも行つた先は知れないから、モウ／＼私は苦勞になつて、癪が痛んでならないのサ。」萬「エ、實正の事かネ。」母「ナニ譃を吐く物かネ、今日でモウ四日目になるけれども少しも使りがないのだから、海川へでも這入りは爲まいかと、可憐さうでならない。」トいふも曇りて涙の聲音、遉に萬蝶も元氣を失ひ、母の側へ腰の拔けたる樣に動止坐して、萬「イヤそれはマア大變な事が出來たネェ、何樣いふ事で於粂子が其樣な氣になつたのでございますか。何でも深い譯のある事でございませうが、私も今から及ばずながら尋ねに出て上げようが、少しも心あたりはないのかえ。」トいへば、母はお粂の書置萬蝶に出して看せる。萬「是れでも鎌倉の尼寺の方へは。」母「影もないといふから途方に暮れるわネ、何樣ぞ仕樣はあるまいか考へておくれナ。」萬「ハテ困つたものだ、何樣も外に斯うといふ能い智慧はないが、此の上に是非在家を探して見るには、飯綱權現樣の法を願ふのだネ。」ト是より萬蝶は飯綱の御利益を委しく語る故、母は命も代りたく思ふ我が子の事なれば、亦其の相談に及びしが、母「マア何にしても峯次郎が、些とも家内へ寄り付かずに、何所へ行つて遊んで居る

か、此家へもモウ十日の餘も顔を出さないから、お粂も案じて居る最中、實家のお京が、峯次郎の母と同作に來て、此方に許り峯が居る様に思つて、恨みを言つた物だから、お粂も氣を揉み出して、此様な事になつたのだから困るわネ。お前は峯次郎に外でお逢ひの事はなかつたかえ。」萬「ナニそりやァ逢ひますとも、實は昨夜峯さんの所へ止宿つて、夫れからお粂さんに用があつて來たのでございますのサ。」母「ヲヤ峯が宅とはエ。」ト、言はれて萬蝶も心付き、萬「イヽ、ナニ何サ、峯さんのお宅じやァない、峯さんが常に心易くするお家へ行つて、其所に峯さんがお在でなさつてから、私がお目に懸りましたのサ。」ト遉に物馴れて如在なき萬蝶なれども、お粂の行方知れずといふ大變に、心驚きし故、峯次郎の隱してある房吉の家の事を、放心と言ひ出したる事なれば、言葉の差支へしなり。母は元來お房の事は心づかねど、峯次郎の放心れ居る所が在るならんと察して居たる事なれば、萬蝶に向ひ、母「アノ萬蝶さん、何様でもネ斯ういふ大騒ぎが出來て、娘の行方が知れなくなつた程の事だから、何も角も最早隱して物をする様にしては居られない事だわネ、マア峯の居る所を委しく聞かせておくれよ、夫れが出來ればお粂の家に居ない事を咄して、早く此家へ連れて來ておくれナ。」萬「何様も困つた物だ。」母「サア〳〵何故其様な事をお言ひだ、モウお前は峯に逢はれないのかえ。」ト問かれて暫時萬蝶も差支へしが、迚ても斯く六かしき騷ぎの出來た上は、何事も隱す道理もなしと思案を極め、

萬「實はお前樣に明かしては、些と惡い事だけれども、何樣で知れずにも濟みますまいし、第一差掛つてあのお子も、大變に苦勞をして泣いてお在でだから、夫れで私が今朝此方へ驅け出して來たのだから。」母「オヤお前何をお言ひのだエ、そしてあの子とは誰人の事だネ。」萬「ナニサ房吉さんの事でございますわナ。」母「オヤ〳〵お粂の事をお房が聞いて泣いて居るといふのかえ。」萬「ナァニ何樣して其樣な事を、彼地で御存じの譯はありやせん、私も今爰へ來てお聞き申したのだ物ヲ。」母「ホンニ然うだらうねえ、夫れにしては何故お房が泣いて苦勞をして居るのだらうネ。」萬「さればサ、峯次郎さんが腫物が出來て、十日程絶食同樣で、惡くすると命に係ると醫師がいふから、峯さんの苦しむのを見て、房吉さんは泣きながら看病して居なさるし、亦何程峯さんだからといつても、實家へ久しくお歸んなさらない中に、火急の大病だから差支へる事もあり、房吉さん一人で看病も出來ず、萬一の事があつた節、諸方へ知らせずに置いては濟ます、お醫師樣は治り難ねるといふから、其所で早くお粂樣をお呼び申したいといふ譯サ。」ト聞いて愈〳〵驚く母親、亦一層の苦勞の一件、呆れて詞もなかりしが、母「何樣して又峯次郎が不快いからといつて、お房の宅へ行つて牀に付いた物だねえ。」萬「ナニサ病氣が發つたから、房吉さんの所へお出でなさつたのではなしサ、房吉さんの宅に寐てお在でなさつて、夜中に痛み出して、急に大病におなりなさいましたのだから大變サ。」母「オヤ〳〵、それぢ

やァ峯次郎は辰巳へ行つて、始終お房の所にばかり居たかネエ。」峯「エ、マア然うでございませう。」
丹「イヤハヤ呆れた子共だナウ、他様に聞かれても親達が面目ない譯だ。」ト溜息を吐く許りなり。

是れより萬蝶は、お房と峯次郎の深き中なることをはじめ、姉娣の心々にてお粂の義理合ひ、房吉の意地づくの事まで、委しく話して相談に及びける。

○夕立や只時の間に他所の雨　　爲永春泉

斯かる縁のありぞとも、知らねどお京は發明にて、峯次郎の行方を早く尋ね出さば、お粂の行方も思ひの外に知れる事もあらんかと、彼の姉多川なるお房を尋ねて對面し、是れに問はば大方は居所も知れる譯となるべし。亦然なくともお粂の家出せし事を、姉なればお房に告げて、その料簡をも聞くにしかじと心付きしゆゑ、母の前へは内々にてその心を告げ、彼の姉多川の材木座に隱居せし、父の所へ行く趣にて、下女と小僧を連れて家を立ち出で、姉多川に至りしが、下女と小僧をば父の所へ待たせ置き、父にも隱して只一人、和歌町なる房吉の許へ漸うと尋ね行き、委しく聞きければ、此の節は家内に病人ありて、見板をも引いて居るとの事ゆゑ、先づお房の門口から、密かに内の樣子を伺へば、ふさ「アレサ峯さん、氣をたしかにもつておくれよ、ヨウ峯さん。其樣に苦しいかえ、アレ何樣せうなう、サア此のお藥をお上りヨ。」ト泣聲にていふお房の聲、峯さんと呼ぶ聲を聞きて、お京は悔

り胸騒ぎ、思はず表の格子をば、案内もなくガラリと引き明け、中敷居の障子を明けながら、京「御免なさいまし、お房さんのお家は此宅でございますか。」トいへどもお房は峯次郎の、病はけしくとり詰めし苦痛を勞り、前後をも辨へがたき程なれば、お京なりとも心付かず、入口の方を見向きもせず、ふさ「お咲さんおりよ様か知らないが、鳥渡アノ茶碗へ水を汲んでおくんなはいヨ、アレサ峯さん引。」ト呼ぶは、峯次郎が氣を失ひたる體と看る故、お京ははじめて來し家なれど、遠慮して居る所にあらねば、臺所の方へ走り行き、茶碗を探して水を汲み、峯次郎の牀の側へ持ち來りしを、お房は請取り口に含み、峯次郎の顏へ水を吹きかけ、泣聲にて、ふさ「峯さん〳〵。」峯「オイノ〳〵、案じなさんな。」京「峯次郎さん、お氣が付きましたかえ。」トいふ節、峯次郎は少し眼を開き、四邊を見廻し、峯「オヤお京は何時の間に來たのだ。」京「アノ只今參りましたヨ。まだお房さんに御挨拶も致しませんヨ。」ト言はれてお房は悔りし、ふさ「オヤわちきやァ、お鄰のお咲さんだと思つて居りましたヨ、お京さんでございましたか、眞平御免なさいましヨ。ア、引怖かつた、萬一これ限りにおなりならば、私やァ何樣せうと思ひましたヨ。」京「私も表から這入りながら、お前さんが泣聲で、峯さん〳〵とお呼びのを聞きましたから、胸がドッキリとして、案内もいたさず、お宅へ這入りましたヨ、堪忍して下さいまし。」ふさ「イヽエ何樣致して、私はまた逆上せて、夢中の樣になりましたから、お前さんだかお鄰の

お内儀様だか知れませんから、直樣に水を汲んでおくんなはいなんぞと、お遣ひ立て申しましたわ、御免なはいましヨ。」ト互に漸う義理合を述べる中にも、峯次郎に心を付けて、介抱に勝る藥ぞ兩人の實意、なか〳〵筆には書き寫し難し。彼是する間に、峯次郎の苦痛も思ひの外に治りし故、お房は安堵して、ふさ「アノ夫れぢやア、マア些と手を放しますヨ、折角お京さんが始めてお出でなすつたのだから。」京「イ、エ、モウ些ともお構ひなさいますナ、私は此の様な事とは存じませず、お前様に是非お目に懸らないければならない事が出來ましたから、急に參つたのでございますヨ。」峯「何故、母人さんが何とぞ言つたのか。」京「イ、エ、ナアニ然うではございませんヨ。私が内密でお房様にお咄があつて、參つたのでございますから、お前さんはマア氣をお揉みなさいますナ、亦御病氣が悪くなると行けませんヨ。」ト言ひながら、お房の側へ近づきて聲をひそめ、京「アノネお房さん、お前様も峯さんの事で氣をもんでお在での中だから、お知らせ申しては悪いけれども、捨てゝ置かれない事だから申しますがネ、未だ御存じではございますまいネエ。」ふさ「オヤ何でございますか、此の頃は峯さんの病氣にとり紛れて、何にも外の事は知りませんヨ。」京「イエ他の事ではございませんがネ。」ト是れより聲を低くして、お粂が遺書をして家を出でし始末を委しく物語れば、流石姉妹の事故、咄を聞く中にお房は胸を轟かし、眼には涙をうかめつゝ、顔色變りて泣き伏しける。

お京はこゝに岑次郎がお房と情合のあることを、始めて知りて驚けども、嫉妬の心はさらに發らず、なほ細やかに語合ひける。

## 第二十四回

こゝに亦猿寺の地内に、假住居せし判次郎は、彼のお園の驅け出して來りし一件にて、終夜彼是と相談して、眠りもやらず在りけるが、枕元なる方燈の、明るくなりつ暗くなり、消えんとしては亦明るく、夜風の音も何となく物凄く聞ゆる折しもあれ、誰とは知らず、靜かに枕元へ來るものあり。此の時判次郎は總身しびれて動く事ならず、最々異變しく覺えしが、朧氣なるもの枕元に坐して「サテ其許には初めて面會に及びますが、緣あつて不便に思召し下さるお園が父にて、小佛善左衛門と申す者、此の末共に、お園をお見捨てなさらぬ樣に、わざ／＼今晩お頼み申しに罷り越しました程の事、また先刻堤下の茶店へ推參いたして、お園へ不法を申しかけ、恥かしくも嫉妬の念にて、拙者が深い思案も知らず、お園に迷惑をかけ、夜中に其許までを騷がせまうしたる事、氣の毒千萬、兼々心がけいたして、拙者が死後の儀を、其許へお頼み申さんと、覺悟いたして居つたれど、拙者が絶命の一條今日に迫り、是非なくにはかに罷り出でお頼み申す。其の巨細は最長々しき愛著の愚痴、殊に混雜みましたる必死の難儀、久しく心配いたす利害にて、彼の堤下へ昨夜中參つて、お園に迷惑をかけ申し

たる彼の愚妻に、拙者が存生の中、得心致すやうに申し聞けては、さすがに武家の恥と存じて、家内をば立ち去るまじと思案をいたし、難題を申しかけ追ひ出しましたるは、拙者とともに命を捨しさせ申すまいと深き所存の底ぞとは、知覺り申さぬ女の淺はか、もつとも拙者が切腹の際に臨んで、他人に知らさず、親元へ遣はしたる遺狀の中に、記し置きましたるを、後日にて愚妻めが讀みますれば、心も解けて後悔いたし、お園をはじめ其許へも、お詫びを申して萬端の事を、お賴み申す儀と相成りませう。然もござりましたらば、胎内の小兒を、お園の乙といたし、お園を實子同樣に仕れと、業通もいたさうが、足らぬ所は其許より、宜しく解き分け下されヨコシト、細密に賴むと思へば眠りは覺めて、枕を上げつゝ、四邊を看れど、變る事なく、はや曉の鐘の音の、程近ければゴす〳〵と、陽の氣を發して告け渡り、頓て朝日の朗かに、閨中の雨戸へさし入りて、朝勤めのお經の聲は、本堂の方にて聞えけり。

扨爰にしるしたるお園は、小佛善左衛門が、以前浪人して在りしとき、圍ひ女にしたるお八重といふ者の腹に出生したる娘なり。未だ當歳の時、母と供に緣を切つて、大佛の家へ歸參して、父の家督を繼ぎけるが、父の死後に至りて、過ぎし年、父が一味のものを語合ひ、主君大佛の家を橫領せんと巧みたる事、家督を繼いで十餘年を過ぎし此の節になりて、漸々に顯はれる樣にな

らんとするを、ひそかに善左衛門に告げる者ありしゆゑ、其の身はすこしも知らざる事なれど、實の父がなせし舊惡、子として逃るゝ道もなし。元來國家の重役なれば切腹の覺悟を極めしが、其の身のなせし惡事にもあらずして、子孫を斷つは先祖への不孝なり、せめて血脈を殘さんと、過ぎ去りたる事を思ひ出でて、音信を絶やせし實子お園を夫れとなく尋ねいだし、茶見世の株を買つてとらせ、且女房の里も斷絶してなかりしゆゑ、死後にはお園と同居させて、わが種を産み出しなば、お園の姊か舍弟にして、育てさせんとはからひし事なりとぞ。

判「コウ〳〵お園さん、モウ日をさまさないか。巳刻だ〳〵。」その「アイお屋敷の爺さんは、モウ歸りましたかえ。」判「エ何だといふのだ。」その「オヤ私やァ夢を見たのかネエ。アノウ今までの旦那といふのは、私の實の爺さんだと言つて、委しく私に過ぎた節の事を言つて聞かせて、今夜其方の所へ行つた女は、義理ある母になるのだから、大事にして舍弟が生まれたらば、繼母と二人で守り育てて、先祖の跡を立てるやうに、してくれろと言ひましたわ。」判「ハテナ然うして來ると、此身の現に見えたのも。」その「エイ夫れぢやァお前はんも何か夢をお見のかえ。」判「然ればサ、何でもお前の爺さんだと言つて種々の事を賴む樣であつたが、夢の樣ではなかつたから、何樣も不思議な事だ。」ト言ひながら、雨戸を不殘くり明けて、四邊を片づけて掃き出さんとして、牀を敷きたる枕元の方を看れば、紙

に包みし小判二十兩あり。小佛善左衛門と書き付けてあり。愈々常事ならざれば、判次郎もお園も互に顔を見合はせ、溜息をつく許りなりしが、流石にお園は娘の情なれば、親とはきけども氣味悪く、前後を見まはしながら、その「判さん、何だか怖いネエ。」トいふ折から、縁頬の外にて、何の音か知らねど、ガタ／＼＼ガーア引、と響きわたれば、猶驚き、その「アレエ引。」と、泣聲になり、判次郎にしがみ付き、色青ざめて身を振はし、縮みあがる其の時に、障子の外にて猫のいがみ合ふ聲。ギヤア引ギヤア引ニヤア。判「なんだちく／＼しやうめえ、猫が喧嘩をするのださうだ。」その「オヤ／＼然うかえ、眞にもウ／＼何樣に恟りしましたらう。ア、引怖かつた。コレ一寸此の胸を押へてお案、何樣にマア動氣が仕ますだらう。」判「ドレ／＼」その「アレサ其所ぢやアないヨホ、、、をかアしいネエ。オヤ私やア些とも氣が付かずに居ましたわ、何樣せうネエ。」判「ナニ／＼何樣したいだ。」その「アノウ昨夜素足で驅け出して來る途中で怪我をしたさうで、足に血が付いて居ますわ。」判「然うか、些と氣に掛るナウ、ドレ看せな、痛みは爲ないか。」その「イ、エ些とも痛かアありませんヨ。」判「然んならば能いが、怪我をさせては濟まない大事のお娘子さんだから。」トいふ時しも、鄰家に住む娘の聲にて、今「判さん昨夜はお客さまでございますネ。」判「ヘーイ、エ。」今「オヤお隠しでない、可愛い人の聲が聞えますよ、お園さん、些と私の所へ來て戀情談けなネエ。ホ、、、。」その「オヤ私やア、只今來ましたヨ。」

ト言ひながら莞爾笑ひ、判次郎の顔を見て、嬉しさうなる姿は、千金にも代へ難く思ふなるべし。

春色梅美婦禰卷之十二　了

# 春色梅美婦禰五編叙

源氏は竪横の竝びあり。所謂空蟬夕顔は、帚木の竪にして、紅梅と竹川は匂宮の横なるなど、這は最正しき文法にて、企て及ぶにあらねども、僕が策子も横竪縞、鼠が捨たれば媚茶を織り入れ、それでも時代だと革色やら、紺桔梗やら染め込みて、えたいも分らぬやたら縞、爾れば米八婀娜吉が、辰巳の園にて結局ひ、はや雲がくれと思ひの外、英對談語に黄粉をつけ、最一つころげて梅美婦禰、又返え返る物語は、竪を横なる格子縞、筆もかすりに織り立てしは、恥を晒のあさ〳〵しく、末摘花と赤らむ顔を、潭の篝火あつかましく、近江の君ほど海口つても、女三の猫でニャアンにも、知らぬ作者が筆拍子。少女の卷の幼婦子等、みゆるし給へと願ふになん。

若紫の夫れならで横雲靉靆く曙の梅花の中にて筆を舐りて

爲永春水誌

# 春色梅美婦禰 巻之十三　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水　著

## 第二十五回

九時の拍子木の音コン／＼／＼／＼、遙かに聞ゆる物賣の聲、「蕎麥ィ／＼引。」「按摩ァ引。」ト宵の騒ぎに引き替へて、ひつそりとせし唐琴屋の、表座敷へ送りし客を、牀にをさめて次の間より、靜かに廊下へ立ち出るお園、胸なでおろしてホット息。折しも來かゝる雛妓此花（これは此糸の番たれしんなるべし）と見るより驅け寄ッて、花「すヤお園さん、治部さんは寐さしつたんざいますかへ。」その「ア、漸う寐かしまうしましたヨ。お前はんの前だけれども、娼妓も惡うありますヨ、宵に揚らしつたとき、鳥渡顔はなださしつたばかりだから、たゞでさへ六ケし屋の所へ、娼妓は見えず、可憐さうに此袖さん（これも振しんなるべし）が、獨りで困りきッて居なはるから、私が種々譯を言つて、やつとの事で牀へ納めたことでありますヨ。」花「私も急度然うざませうと思つて、氣を揉みきつて居ィしたけれども、あいにくと今夜ァ方〻が落ち合つて、爲方がないンざますから、お前はんに譯を頼んで、治部さんが強く腹を立ちなませ

んやうに、僞て貰はうと思つて、驅け出して來たんざいますヨ。」その「オヤ然うでありましたかえ。私やァまた、今夜ァ判次郎がお出でなはるやうな咄を、ちらりと聞きましたから、急度夫れでかと思ひました。」花「オヤ夫れを何樣して知つておいでなますエ。正直の所は、宵に初會が二軒あつたところへ、海老屋いと一文字屋のが、一所に揚らしつたもんざますから、お前はん所の座敷とも五軒ざませう、其所へまた寺内の（判次郎をさしていふ）が今方來さしつて、何だか眞な咄しでありますものを、娼妓も離れにくいのざませうから、察して進げておくれなまし。」ト言はれてお園はグツトせしが、わざと笑ひに紛らして、その「オヤ夫れぢやァ無理もありませんネエ、私も判さんに言傳をたのまれた事がありましたツけヨ、何處の座敷だか、序にお目に懸つて往きたいものでありますネエ。」花「ア、然うお爲なまし、アノウ薫さんの座敷の鄰ざますから。」その「オヤ夫れぢやァ奥の突當りでありますネ。」花「ア、あの角の六疊ざますヨ、然してお前はんお內が宜かァ、後刻まで遊んでおいでなましな、お前はんにあげようと思つて、取つて置いたものがありますから。」その「オヤ嬉しい。急度でありますかえ。又空言ぢやァ御免だネエ。」花「ナニ今夜なァ實正に美物ざますヨ。」ト、言ひながら驅け出してゆく。

什麼このお園が過ぎし夜に、判次郎方に止宿りし時、父善左衞門の亡き魂の、夢現となく現はれて、過ぎ來し方の物語を、二個に報知けたるのみならず、二十兩の金までも、枕のほとりに遺し

あるにぞ、是れに仍つて判次郎は善左衛門の妻お園の繼母に對面して、其の夜のことを物語り、遺言の通り取りはからはんと、實意をつくして相談せしかば、それよりさきに善左衛門の妻は、夫の自殺を聞くのみか、遺書までも屋敷より、屆けられて已にはや、お園を夫の子なる事まで、はじめて知りし上なれば、其の身の思ひ足らずして、我が子とも見るお園に對し、嫉妬の餘りはしたなき、事の數々の、しりしを、今さら口惜しく恥かしけれども、夫が自殺せしうへは、屋敷へとてもかへられねば、萬事を判次郎に賴むにぞ、判次郎も安堵して、屋敷へ歸參の叶ふまでは、先づ此の家にあるべしとて、お園にも更めて、母子の杯を取りかはさせ、かの二十兩の金を元手に、いよ／＼商賣におこたりなきやう、拔目なく世話をせしかば、母子ははじめに引きかへて、血筋の如く睦ましく、素よりお園は人愛よければ、日毎に客の絶え間なく、今宵も此糸の客を送りて、唐琴屋へは來りしなり。こは這のはじめに說くべきを、此所にちゞめて綴りしは、例の作者が筆癖と、看官よろしく察し給へ。

再說お園は此花に、廊下で別れてひそ／＼と、奥の方へと赴きつゝ、豫て夫れぞと聞き置きし、まはし座敷へ忍び寄り、樣子いかにと窺ふを、内にはたれとも此糸が、知らねば二個さし對の、何かもつれしはなし聲。此「モシヱ判さん、主やア何故そんなに浮氣ざますえ、私がこんなに氣を揉むのも、

些たァ察しておくんなましな。」判「コウそりやァ何を言ふのだな、此身がこんな身分になつてからは苦しい勤めの中からして、貢いでくれるお前の深切、ホンニ世事でも艶でもねえが、女房とも親とも思つて居るものを、勿體ねえ、浮氣らしい事なんぞがされようかされめえか、大概考へても知れたものだらうぢやァねえか。」此「イヽエ言ひなますな、私やァ主の浮氣を爲なます事は、宜ウく聞いて知つて居ますヨ。」判「コレサお前にも似合はねえ、何の事だな、そりやアてつきり誰ぞにしやくられたに違へねえハ、、、アハ、、、、。」此「モシ大概にとほけなまし。いかに私が癡婦だと言つて、是れまで馴染んで主の氣心も知つて居るものが、人のしやくりを眞にうけて、嫉妬らしい事を言ふ樣な私だと思ひなますか。主のためにさへなる人なら、百人が千人情女を拵へなましても、そりやァ男のはたらきだから宜うざますけれども、私に夫れを隱しなますから、浮氣だと言ふンざますヨ。」判「お前のやうに言はれると、何樣か此身が惡い事でも爲て居るやうに聞えるけれども、隱すにも隱さねえにも、實に覺えのねえ事だから、何分困る譯だらうぢやァねえか。そしてマァ誰がそんな事をお前に言つたのだか、夫れほどたしかに言ふからにやァ、何處の何といふ者といふ事まで、さだめて知つて居るだらうから、その女の名を言ふが宜いわナ。」此「ホンニ主やァあんまりざますヨ、そんなにしらをきんなますなら、言ひますが宜うざますか。」判「何卒速く聞きてえの。」此「アレマァまだざますか

えゝ夫れおやァ主やァお園さんは何樣爲なますのだえ。」判「エゝ　些ツトお見なまし、覺えがおあんなませうがネ。」判「アハヽヽヽ、何を言ふかと思つたら、とんだ點がひを言ひ出したの。尤もお園といふ娘は、知つても居れば世話も爲た事はあるけれども、全く然ういふ譯ぢやァねえ。あれは據ねえ義理合でこそ些と情女になんなましたのでござますかえ。」判「ナニ情女の戀いとそんな浮いた事ぢやアねえノサ。大かたそりやァ米八が何とか言つたのだらう。」此「イゝエ、米八さんはかりぢやァありません。尤も米八さんが往かしつたときも、其の孃と落ち合つて、主に意見を爲なましても、主やァ其のときもやつはり何のかのと、はぐらかしてばつかり居なましたぢやァありませんかえ。其の後米八さんが、私の所へ來なまして、判さんもあゝして手放して置いて見なませば、主は堅く爲なますつもりでも、然う許りもならないもので、其所が男の德ざますから、縱令些とやそつとの事はあつても、お前はんの顏さへ汚れずば、宜いと爲なまし。私も丹さんで覺えがありますからと、しみ〴〵と言ひなましたのを、私やァ泣いて嬉しうざましたヨ。然う言つちやァ惡うざますが、私が此の店へ出てから、今年で丁度七年ざますが、あのとほりの內證ざますから、米八さんにやァかぎらず、雛妓衆や唄女衆が、憎い仕置きに合ふたんびに、幸ひと私が斯うやつて座敷をはつて居ますから、口を利いて貰けてやッた人は、幾程だか知れませんけれども、今でも其の事を思ッて私の便りになつてくれるもの

は、米八さんばかりざますョ。此間も千葉の藤さんが來さしつて、お前も今年は年明だといふ事だから、夫れまでには何卒判さんを以前の身分にして、目出たく夫婦にして遣りたいと、米八にも薄々咄しも爲た事だと、言ひなますくらゐざますョ。ホンニ藤さんや米八さんが、種々深切に言つてくんなますにつけても、私やア一日も速く這郭を出て、主の側に居るやうになりたいと、永の年月指を折つて樂しんで居るンざますものを、今さら主がそんな氣で居てくんなましちやア、あんまり可憐さうでざますねえ。」判「そりやア一々道理だが、先刻から言ふとほり、這方に知らねえ事だから、爲方がねえ。夫れとも疑はしくば、お園を呼んで明りを立てて見せようか。」此「そんなら急度然うざますネ。嬉しうざます、夫れぢやア私がお願ひがありますが、叶へておくんなますか。」判「何だか改まつた言ひ樣だの、隨分此の身に出來る事ならするからマア言つて見ねえな。」此「しつかりすると言ひなませんぢやア否ざます。」判「アハヽヽ、夫れでも萬一天の川の鯉を掬つて來て濃汁に爲て喰はせろとか、天狗さまの玉子を取つて來て炮烙蒸に爲ろとか言はれると、とても出來ねえから、マア言つて見なと言つたのョ。」此「ホヽヽヽ、主やア餘程宜い氣ざますョ。私やア戯言ぢやアない。眞にお頼みがあるンざますから、腹を極めて聞いておくんなましョ。」判「鯉や玉子でねえならば、眞面に聞くから言ひなせえ。」此「夫れぢやア言ひますがネ、どうぞ私がお願ひだから、浮氣でなくお園さんと情合になつ

て進けておくんなまし。」ト、言はれて惘る、判次郎は、須臾言語もあらざりける。

## 第二十六回

此糸は目に持おし涙を膝へほろりと溢し、此「判さん、是れで私の胸の中をも推量しておくんなましな。」判「そりやァモウお前の深切は察しきつて居るけれども、お園の事を頼むといふのはどうも分解らねえナウ。やつぱり此身が何様かいふ情由があるとおもつて、とても然うなつた上なら爲方がないから、躱れ忍んでされるより、綺麗に爲て貰ふ方が寐覺が宜いといふ料簡で、今のやうに言つてくれるのぢやァ實に恨みだゼ。」此「イ、エ然う思つてくんなましちやァ、私の方こそ恨みざますヨ。お園さんの身の上は、深く頼まれた事があるこざますから、末始終私も姉娣の積りで居ますから、主も其の氣で見捨てて進けておくんなますなヨ。」判「何様も猶々分解らねえ。そして深く頼まれたとは誰に頼まれたのだらう。」此「その頼人ざますかえ。」ト言ひかけて少し欝氣ぐ、判「ソレ見ねえ出たらめだもんだから、早速頼人の名がおもひつかれめえ。」此「アレサそんなに疑ひなましちやァ罪ざますヨ。その頼んだ人といふのは、那の嬢のお爺さんの、小佛善左衛門といふ仁ざますが、主も大方知つてお出でなませうネ。」判「ム何様してマァ那の仁が。」此「サァ是れには寔に怖いやら悲しいやら、今も思ひ出しても凄然するやうざますがネ、五日ばかり跡の晩に、雨が大そう降つた事がありましたらうネ。

那のとき私やァ獨りで座しきに寢て居ますと、夢とも現ともなく、其の善左衞門さんといふ仁が枕元へ來なまして、モウ／＼悲しい身の上ばなし、段々樣子を聞いて見ると、私の爲にも義理のある伯父さんざますノサ。其のとき伯父さんが言ひなますにやァ、此身が死んだ其の跡までも、不便なのは娘お園、何樣いふ過世の因縁だか、判次郎を戀ひ慕ひ、他の男は持つまいと、處女心に思ひ込んでも、判次郎は何處までも和女に義理を立て通し、外面はゆるく見せかけても、心の錠は外さぬ樣子、是れも見上げた心ばへ。然ういふ情合と知りながら、枉げて賴むは子故の闇、和女が今にも郭を出て、判次郎と夫婦になつたら、否でもお園を引き取つて、妾とまではゆかずとも、せめて判次郎の側へ置いて、折々やさしい言葉でもかけてくれるやうならば、其の身は素より草葉の陰で、此身もどれ程嬉しからう。吳々賴むと言ひなますから、そりやァ私が請合つて、お園樣とは姊娣ともなり、二個で和合く判さんを、大事にするやうに爲ますから、必ず案じておくんなますなと言ッたら、伯父さんが手を合はせて、拜まつしやるやうざましたが、夫れ限り見えなくなんなましたョ。私もあんまり不思議ざますから、人を賴んで樣子を聞いて貰ひましたら、伯父さんの死なしつた事も、お園さんの身のうへも、夫れに違ひない事ざますから、主の心を聞いたうへで、私の胸をも明かさうと、夫れで先刻のやうに言ッたんざますから、何卒お園さんをも私をも、見捨てないやうに爲ておくんなまし。」ト眞實の

物語に、判次郎に言葉もなく、溜息ついて居るをりしも、廊下先より雛妓の聲にて、米「モシ姐さん、急用ざますから鳥渡来ておくんなまし。」米「オヤ何だナア、又初まつたかえ、今往くヨ、然う言つて置きなまし。」米「アレサ直ざませんと大變ざますヨ。」米「エ、世話しない、宜ウざますから先へ往きなまし。」ト言ひながら、泣顔を直して、米「夫れぢやア判さん鳥渡往つて直に來ますから、何處へも往かずに待つて居ておくんなまし。そして今の事も後刻までに考へて置いて、しつかりとした返事をお聞かせなましョ。」ト言葉を殘して此糸は、一間を出でんと爲たるとき、障子の外に忍び居し、お園とおもはず顔見合はせ、恟りせしか小聲にて、米「お園さんざますかえ。」その「娼妓堪忍しておくんなはい。是れでありますヨ。」ト物をも言ひ得ず手を合はせ、ふしをがみつゝ、泣き入れば、米「アレサそんな泣顔を爲て、誰ぞ見ると惡うござますヨ。夫れぢやア今の事を聞きなましたのかえ。」その「ハイ私やアお前はんの御深切は、死んでも忘れは爲ませんヨ。」米「ナニ、そんな譯ぢやアないかネ。ホンニ丁度宜い折ざますから、此の上襲を斯う著なましてネ。」と言ひつゝ、そつと脱いでお園に著せながら、耳に口を寄せ、米「ネ、宜うざますか。」と言はれて顔を赤らめながら、その「夫れでもそんな事を爲ちやア、何ほどお前はんにお氣の毒でありますもの。」米「アレサそんな心配が入るものかネ。何でも判さんが私だと思つて、種々な事を言はしつても、無口でさへ居なませば宜うざますから、思入可愛

がつて貰ひなまし。」ト言ひ捨てゝ、此糸は上草履までお園に渡し、其の身は素足ですご／＼と、表座しきへ外しゆく、心の中こそ頼もしけれ。

作者曰く、當時郭中の通言を聞くに、古代の郭言葉と違ひ、多くは素人の娘のごとし。今此糸も是れに倣へど、作者も深くは穿ち得ず、只通客の批評を俟つのみ。這は言はでもの事ながら、往古の事跡を今やうぶりに、寫しなすなる策子にあなれば、専ら流行におくれまじと、此樣な事をも言ふンざますョ。

お園は此糸の情にて、斯う／＼せよと教へられ、上襲までは著せられたれども、今更何樣やら間もわるく、燈火の暗きを幸ひに、座敷の中へ幾度か、入らんとしては立ち戻り、獨り心をいためしが、日頃戀しい其の人は、屏風の中に居るのみか、逢はれる智慧まで付けられながら、今宵の首尾を外してはと、思ひ切つて中に入り、上襲を脱いで行燈へ、屏風の上よりうち掛けつゝ、顔を背けて寄り添へば、夫れとも知らぬ判次郎は、寂しき儘にうと／＼と、眠りかけしが眼を覺し、此糸ならんと思ふにぞ、判「オヤ何時の間にか來て居たの、此身ァ思はず寐たさうだ。そしてマァ寒いかして、大そう顫へて居るぢやァねえか。」ト言へども無口つて居る故に、判「何だ物も言はねえで、ハヽァ分解つた、那方の座敷で何か腹を立てゝ來たのだな。コウ餘所で爲た千話喧嘩を、此身の所へ持つて來て、當つて

くれちやァ迷惑だぜ。エヽ、此糸、夫れともあれ程待つて居てくれろと約束を爲て置いたのに、此身が寐て居たから、夫れで腹を立つたのか、お前にも似合はねえ。餘り初心な事ぢやァねえか。コレサ何故無口で居るのだな、此樣に言つても物を言はねえなら擽るぜ。」ト、言へども矢張無口つて居る故、判「イヤハヤ強性な婦女ぢやァねえか、そんなに言はねえと爲れば、這方も意地だ、斯うやつて口を利かせて見せよう。」ト言ひつゝ、○○○○○○○○○、何樣いふはずみか連子より、さし込むあかりに顏見合はせ、判「ヤァお前はお園さんぢやァねえか。」その「判さん堪忍しておくんなはい。」ト言はれて恟り判次郎は、夢かとのみぞ思ひける。

是れよりお園は此糸が、深き情を物語り、いたづらならぬ身の言譯を、涙ながらにする程に、判次郎も今更に、最前此糸が言葉といひ、捨てがたきおもひあれば、其の夜を二世の事はじめ、深き和合とはなりしとぞ。

春色梅美婦禰卷之十二　了

# 春色梅美婦禰　巻之十四　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第二十七回

七字の利益あらたかなる、折の内の妙法寺へ、日毎の參詣羣集なす、祖師の光ぞ尊けれ。こゝにしがらきと家名せし、當地に名高き料理店の、門に佇む三人連。▲「トキニ梅舟さん、何れ折の内の歸りは、小川か此店がお定まりの建場だが、鳥渡一口氣をつけの、後は内店の拾匁とするとも、何樣ともいづれ御多分には洩れやすめえ。」●「イヤ拾匁と言へば、豐倉の内へ妙な妓女が出やしたぜ。」×「コレサお前は直に其の方へ心を赴かせてならねえ。マア其の咄は後段へ廻して、南里さんの說の通り、爰で一杯といふ道行がごく妙サネ。」▲「夫れぢやァ兎も角も、呑んでのうへの御分別とするが宜い。」と言ひながら、皆々しがらきの奧座敷へ通り、程なく誂への酒肴も出でて、三個は飮みかけながら、×「此邊ぢやァ竹の子と蕨の旬がすぎると、のつぺいと玉子とぢが座頭を持つといふ料理だから、兎角山家の體は外れねえ譯サネ。」▲「イヤ然う馬鹿に爲たものでもねえノサ。生肴も喰はせろと言やァ

ありやすけれども、這所へ来ちやア、やつはり無塩な玉子の方が、しやれて居やすノサ。トキニ春好さん、先刻ちよッぴり序びらきのあつた、豊倉の妓女といふのは、何ぞ夫れに就いて、一奇談ありやネ。」●「あるのないのと、其様なちよッかな譯ぢやアありやせん。寔に奇々妙々といふ因縁のある妓女サ。」※「何だかあんまり始めの言ひ立てが大そうだから、覺束ねえ咄だ。何れ眉毛に唾で聞くが大丈夫らしい。」●「ナニサ此の事においては、正眞正銘の實錄サ。」※「夫れぢやア其の他はみんな虚言だといふのか。」▲「すツト東西、マア何にしろ横槍を入れねえで聞くべしサ。其處で其の妓女が何様いふ因縁がありやす。」●「先づその女の素性といつば。」※「天竺にては玉藻前。」▲「そりや又はじまつた、梅舟さんも困つた癇の蟲だ。」●「全體斯ういふ性には、柳の蟲が一番だ。打捨つて置くと鼻の下を赤くして、線香や火鉢の灰を舐めたがるものだから。」▲「イヤハヤ何方を何様とも團扇の揚けやうもねえわけだ。寔に感心におしやべり遊ばすので、たうとう咄は立ち消えが爲て仕舞つたやつサ。」●「ナニ梅舟さんが交るから、ツイ脇道へ咄がはぐれてなりやせん。閑話休題、眞面に咄すから聞きなせえ。」▲「よし〱聞いてるから、さつ〱と咄しなせえ。」●「其處でその女の本國が北國で、當時西國に妓名をあらはして居るといふ筋だが、何と面白からう。」※「何卒義理にも面白いと云ひてえが、何分譯が解らねえから、此の御挨拶はお氣の毒ながら、他々へお頼みなすつて下さいまし

だ。」●「コウそんなに下卑さねえで、マア聞きなせえ。餘程珍説だから。」▲「夫れぢやア其の女は北國の山の中で生まれたのが、西國といふから九州あたりへでも往つて、名を揚げた譯かネ。」×「序に四國をもまはつて、猿となれば宜かつたものに。」●「イヤモウどれも〳〵咄の解らねえ手合だぞ。北國とは郭の事で、西國とは當時新宿の事を云ひやす。扨その女が北國の者で。」×「ソラまた分解らねえ。北國の者とは薄羽織になる紗とは違ひやすか。」●「何樣も然ういち〳〵講釋が入るやうぢやア咄がならねえ。者といふのは藝者の事だアな。」×「なる程、藝者が者かネ。夫れぢやア幇間は絽だらう。」▲「アハヽヽ、其處でその絽が何樣爲やした。」●「ナニ絽ぢやアねえヨ。」▲「ホイ間違つた者の事サ。」●「その者が情男をこしらへて。」×「ハテナちつと咄が聞けて來さうだぜ。其處で何樣爲やした。」●「先づその男の名は暫く說くべからずサ。」▲×「成程夫れから。」●「處で彼の藝者が、其の男に血道をあげて居るもんだから、男の方でも足駄を履いて首ッ丈ケ。」▲×「勿論その筈の事だ。」●「併し勤めの身で見れば、ひどい工面でなくつちやア、自由に逢ふ事も爲にくい譯だから、揚屋町のさる婆アさんの內を、內證で賴んで朝湯やお客にかこつけて、ちん〳〵鴨の小鍋立てサ。」▲×「甘いな〳〵。」●「それで知れずに居れば宜いけれども、目角の速い那の郭だから、中宿這入りをする事が、直に五町へぱつとして、親方の耳へも這入つたもんだから、郭中を追ひ拂はれの、當時這方の豐倉へ來て、

十匁となつたのだが、容貌がめつぽふ美いのに、氣前もので、隨分建引もあるといふのだから、寸志はあるめえ。」▲「逢へねえ。そして其の男は、やつぱり離れずに居るのかナウ。」●「ナニ這方になつてからは、まだ往かねえ様子だけれども、いづれ然ういふ燒木杭ぢやァ、消えきつて仕舞やァ仕ねえノサ。」×「そんなに美しいのを、夫れほどまでにするといふなァ、どんな野郎だか見て遣りてえものだ。」●「見たかァ何時でも見なさるが宜い。」×「夫れぢやァその男はお前の知つてる人か。」●「知つてる處ぢやァねえ。親子より兄弟より、最うちつと近い親類だものヲ。」▲「ハテナ、親兄弟より近い親類とは何だらう。そしてその男の名は何と言ひやす。」●「辱くもその情男と申し奉るは、斯く云ふ此身さまだが、何様だ是れから直に附合つてくれる氣はねえか。」▲「おきやァがれアハ、、、。」●「此身ァ大方こんな落ちになるだらうと思つて、眉毛をしめしてかゝつたけれども、やつぱり欺かれた奴サ。」▲「何でも今日の奢りは悉皆春好さんの持ちとするがいいアハ、、、ハ、、、。」×「トウそんな事を言ふ手間で、鳥渡後を見なせえ。すてきな婦女が來て居るから。」●「何處に〱。」×「ソレ向うの座敷に、ついたてで仕切ッてのソレ。」●「なるほど、こりやァ黒上々吉といふしろものだ。」▲「逢へねえ。獨りは極上品の、いい大家のお孃樣とも言ひさうな處女だが、最う一個のは、何樣見ても素人とは思はれねえ。然うかと言つて、旦那らしい連も見えねえが、何樣いふ譯だらう。」×「そ

んなに氣にする事もねえ。とても此の連中を見わたした所が、何れを見ても山家育ち、那の處女の氣に入りさうな首は一ツも見えねえ。マア此の中でけんのんなのは、此身ばかりだ。其の證據は先刻ツから二個の處女が、此身の顏を見ちやア・何だか嬉しさうに莞爾々々笑つて居るから。」●「なるほどお前の顏を見て笑ふ筈だ。餘程人並外れて妙な顏色な處へ、のつぺいの薄葛を、鼻の先へべつたり塗り付けて居るから、夫れで好男子の心意氣ぢやア、何分をさまらねえ。」×「エ實正か。」ト愕りして拭きながら、×「コウお前達も憑もしくねえ。然うなら然うと、速く知らせてくれたが宜い事サ。」ト言ひながら、少ししよげる。●▲「アハ、、、アハ、、、。」ト大笑ひになり、何かくだらぬ事を言ひ合ひながら、此の一羣は程なく立ッてゆく。折しも向うの座敷にては、房「お京さん、嘸お草臥れでありましたらうネエ。私やア久しぶりで、こんな遠路を歩行いたら、寔にがつかり爲ましたわ。」京「私もネ、駕籠なんぞに乘つて行くやうな氣ぢやア、信心にならないと、峯さんがお言ひだから、我慢をして歩行きましたら、寔に最う草臥れて〳〵。」房「ホンニ然うでありませうとも、お前はんは、別して内にばつかりおいでなはるから、其の筈でありますヨ。夫れにおまけに、お百度を踏んだので、猶の事ネエ。」京「アレサそんな勿體ない事をお言ひだと、罰が當るかも知れませんヨ。」房「ホンニ然うでありましたネエ。惡い事を言つたヨ、何樣爲ませう。」京「ナニうつかりお言ひのだから宜うございますワ

ネ。私やァ是れ程の思ひをして參つたのだから、屹度お利益があらうと思ひますわ。」房「そりやァなくッちやァなりませんヨ。」女「何卒一日も速く、知れるやうに爲たいものでございますネエ。」房「わちきやァこれが萬一知れないやうだと、生きちやァ居られませんけれども、さつき頂いたお籤の樣子では、近々に思ひがけない事で便りが知れるといふのだから、マァ樂しみかと思ひますわ。」ト言ふとき、表の方よりして二十八九の一個の婀娜女、駕籠の儘にて入り來りしが、房吉を目ばやく見つけ、女「すヤお房さん。」ト言ひながら、莞爾笑つて駕籠より出づるは、梅暦にてお馴染の、小梅のお由と知られける。

## 第二十八回

扨もお由は思ひし通り、千葉の藤兵衛の女房となりしより、流石に派手な商賣柄とて、夫につれて小口も利けば、和歌町の唄妓達にも、大孃と立てらるゝにぞ、房吉は下地より、米八の仕込み故、別けてお由の世話にもなり、贔屓にされし事さへあれば、夫れと見るより驅け出して、房「すヤ千葉の貴孃さん、お前はんも折の內さまへお參りのでありましたかえ、這處でお目に懸るとは、寔に不思議でありましたネエ。」由「私やァ先刻お前はん達が、お百度をあけてお在でのとき見かけたから、お房樣と言つたけれども、知らない顏を爲ておいでだネ。こんな婆ァに同道になられちやァ困ると思つて、

空耳をはしらせたのかえ憎らしいネエ。」房「オヤまア否にお言ひなはるヨ。正直の事些とも知らないンでありますものを。」よし「ホヽヽ、アレサ然う眞にうけられちやアお氣の毒だヨ。眞實はネ、先刻見かけた時は、何だか一心になつて拜んでおいでだから、態と聲もかけなんだけれども、屹度小川か這處に休んでおいでだらうと思つたから、私もお百度をあけたり何かして、歸りに駕籠の人を頼んで、氣をつけて貰つたら、丁度這家においでだから、寔に嬉しかつたヨ。」房「すヤ嬉しい。然うでありましたかえ。サアマア此方へお上んなはい。」ト、言ふうちお由は座敷へ通り、お京に對つて、よし「ヘイ貴女宜くお參りでございましたネ。確か這孃は岑さんの、ナウ房さん。」房「すヤ何樣して知つておいでなはいますエ。」よし「ナニ何處でかお見かけまうした樣だから。」京「オヤ然うでございましたかエ、私やアさつぱりお見それまうしましたヨ。」房「お京さん、此方は千葉の藤さんのお內儀さんでネ、私もお粂さんも、寔に最う種々お世話になりますわ。」京「オヤノヽ夫れおやア千藤さんのでおいでなさいますかえ。夫れではたしか私が別莊の方に居つたとき。」よし「ハイ七種を見に參つた歸りに、お寄りまうして御馳走になりましたヨ。」京「ホンニ然うでございましたネエ。私やア斯ういふ放心だから、寔に困りますヨホヽヽ。」ト此の內お由も酒肴を取り寄せ、杯の遣り取りありと知るべし。よし「ホンニ房吉さん、此間は岑さんが、御鹽梅がわるかつたさうだが、最う快くおなりなのかえ。」房「ハイ

寔にちよいとした事が大そうになつて、どんなに氣を揉んだか知れましなんだが、此の頃ぢやァ、段段快い方でありますから、其の方はマァ心配ひもありませんけれども、姉さんがとんだ事を爲てくれたので、寔に何樣爲ようかと、思つて居るンでありますヨ。」よし「姉さんとはお粂さんの事ぢやァないのかえ。」房「其のお粂さんでありますがネ。甚を言やァ私が悪いのだから、這所においでなはるお京さんにも、濟まない義理でありますが處を、かへつて此のお孃が深切に力をつけておくんなはるから、夫れで今日も折の內さまへ、お粂さんの事について、お參りを爲たんでありますがネ。お籤の表が大層宜いから、些とは樂しみかとおもひますヨ。」よし「アノウそんなら、お粂さんの往つて居る所はお知りでないのだネ。」房「ハイ夫れが知れて居るくらゐなら、氣を揉みは爲ませんけれども、一向に手がかりもないのでありますから、此樣に騒いで歩行きますのサ。」よし「オヤ夫れではまだお前がたの方へは、知らせてないと見えるネエ。」房「オヤ知らせてないとは、何ぞ手がゝりでもあつた事が、お前はんのお耳へ這入つたのでありますかえ。」よし「ア、ナニ私も委しい事は知らないけれども、此間亭主の藤さんの處へ、お粂さんの事について、相談に來た人があつたから、夫れで知つて居るノサ。」房「オヤそして何所に居るンでありますとえ。」米「此間柳川亭の老女さんが降巫を呼んでお聞きの時には、何でも怖ろしい人に取り卷かれて、逃げる事も歸ることもならないと言ひましたが、そんな所ぢやァ

ございませんかえ。」よし「ナニ一旦は怖いめにお逢ひださうだけれども、そんなに何時までも歸る事の出來ない譯ではないノサ。」房「オャ憎らしい降巫だネエ。あんな虚言を吐いて、母公に氣を揉ませてお錢やお米を取つて往つたンだヨ。」よし「そりやァ商賣だから爲方がないわネ。此方が夫れに迷つて氣を揉むのが誤りサ。丁度お前方が、可笑しくもない事を笑つたり、癪な事を言はれても、節を合はせてお客に金を遣はせても、夫れが唄妓衆の商賣で、放心れて深みへ陷るのも知らずに、金を蒔き散らすのはお客の方の誤りだから、降巫許りを咎める事もないワネ。」房「オホ、、、然う言へばそんなものでありますネエ。夫れはさうとお粂さんは何樣して居ますとえ。」よし「アノウお前は小稻さんといふ孃を知つておいでだらうネ。」房「ハイ浪花屋の小稻さんなら、寔に最う姉娣のやうにして居ましたが、那の孃は此の春年季が明いて、今ぢやァ四谷とやらのお爺さんの處に居るぢやァありませんか。」よし「其の四谷のお爺さんの所に、粂吉さんも躱はれて居なはるといふことで、其の人の名がたしか、市郎兵衛さんと言つたやうだヨ。」房「ア、私も小稻さんの咄で聞きましたが、そんな名でありましたヨ。そして大そう俠氣な方ぢやァありませんか。」よし「ア、夫れだから、藤さんも深交くしておいでださうでネ。夫れで此度の事も相談にお出でのだトサ。寔に奇妙なものぢやァないかネエ。」ト

彼の粂吉が鎌倉の尼寺へ、往かんとてやとひし駕輌が、惡漢にて身を穢されんと爲たりしを、不

思議に其の場を遁るゝのみか、彼の祭禮の壯年輩に、追手の難をも救はれて、市郎兵衛が方に頼はるゝまでの仔細具に物語り、

よし「エ然ういふ譯ださうだから、おいそれと柳川亭の母公の方へ、引渡してはお粂さんが厄にならうとまで思ひつめたのが、何にもならないで、只那の孃ひとりが馬鹿者にされるのも可憐さうだから、よく母公とも内々の相談をして、お前方の心の底をも聞いたうへで、納まりをつけないぢやァ、後日に何事ぞあつては宜くないといふ、市郎兵衛さんの深い料簡だ。ところが那の人ひとりの手際にも爲にくい譯もあるから、其所で藤さんのはうへ咄があつたのさ。夫れにまた幇間の萬蝶さんが、お前の母公に頼まれたと言つて、此のことで氣を揉んで居なさるから、是れにも規模を持たせるやうにと、萬蝶さんを中へ入れて、那の人から母公の方へ、渡つて貰ふ相談になつたのだから、まだお前達の方へは咄す間がないのだらうョ。」房「オヤ嬉しい事でありますネエ。私やァ姉上さんの行方が、何樣しても知れないときは、死んでも言譯がないとおもひましたョ。」粂「私も今のお咄で、癪が治まつたやうな、心持が爲ますわ。是れといふもみんな折の内さまの御利益かと思ひますョ。」房「ホンニ然うでありますねエ。夫れにつけても、今度の事は、私から起つたことでありますから、姉上さんの行方が知れたと言つて、のめ／＼顔を合はされた義理ぢやァありませんから、母公に苦勞をかけたり、お粂

さんに氣を揉ませたりした言譯にやァ、髪をおろして折の內樣の、お弟子になる氣でありますから、お前はんは末永く姉上さんを見捨てないで、和合くしておくんなはいョ。」京「アレサそんな心細い事をお言ひだやァ、否でございますョ。何卒此の事は千葉の貴孃さん、お前さんからお止めなすつて下さいましョ。」よし「ア、そりやァ房吉さん、悪い料簡だョ。お前の氣ぢやァ、義理を立てる積りであらうけれども、やつぱり人を騷がせる種だから、何でも三個が、心を合はせて、怨みッこいのないやうに、峯さんを大事にするのが上分別サ。夫れはさうと、お前達はたつた二個で、誰も連れないでおいでのかえ。」房「アノウお京樣が、內へ內證でお出でのでありますから、お店の人は連れられませず、爲方がないから、まはしの佐助どんを、賴んで來て貰ひましたら、何だか此の近所に鳥渡寄りたい所があるといつて、私達を爰へ送り込んで往きましたョ。」ト、言ふ時佐助は歸り來り、佐「嘸お待ち遠でございましたらう。イヤこれは千葉のお內儀さん、寔に妙でござえましたネ。」よし「オヤ佐助どん、今まで何處へ穴ッ這入りをしておいでだ。お內儀さんに然う言ふョ、ホ、、、。」佐「へ、、、とんだ情人に捕まつて、麥飯と小米團子の、御馳走に弱りきりました。」房「ホ、、、夫れぢやァねつから氣がないネエ。サァマァ此方へ揚ッて一口お呑りな、お前のお飯も來て居るョ。」佐「イエ今申す通りの譯で、日光責に合つて參りましたから、お前さん方のお仕度が宜くば、そろ〳〵お出かけなさいまし。

お駕籠も二挺拵へさせて置きやした。」房「オヤ然うかえ、私たちやァまだ足は大丈夫だけれども、こしらへたとお言ひなら、爲方がないから乘つて進げようネエ。」仇「へゝ負け惜しみを被仰るぜ。先刻來るとき、淀橋邊からして、餘程六ケしい歩行ぶりをなすつた癖に。」ふたり「ホヽヽヽヽヽヽヽヽ」ト

是れより三個は酒食も果てゝ、駕籠にうち乘り、婦多川へとぞ歸りける。

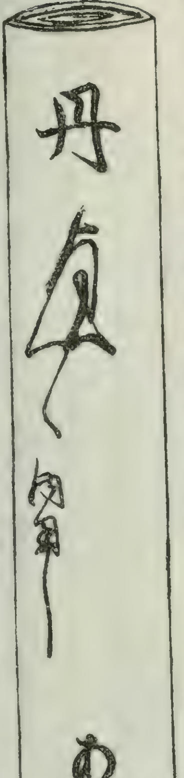
春色梅美婦禰卷之十四　了

# 春色梅美婦禰　卷之十五　梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

## 第二十九回

辰巳の園にて御承知の、那の丹次郎が侘住居せし、其の路次口へがた〳〵と、今湯歸りの米八が、驅け込まんとせし足元に、落ち散る文を手に取り見れば、



ト上書をなしたるが、はや封じめは解きてあれど、つけたる粘さへ乾かねば、今届きした丹次郎が、麁相で落せしものならん、如何なる文かとおしひらけば、

此の間御はなしの人參り候まゝ、急に〳〵御めもじのうへ、身のうへの事御相談いたしたく候へ

ば、小池の二階まで御出でのほど願ひ上げ〳〵。尤も彼のわけも候故、米印へは、先づ御沙汰なしにて、此の人と御一所に、鳥渡々々御出で被下べく候。大いそぎ早々めでたくかしこ。

ト小杉の鼻紙に書きたるは、豫て見知りし婀娜吉が、手跡に紛れあらざれば、米八は胸にギックリ、堪り兼ねたる例の癇癪、帶ゆりあげつゝその儘に、小池をさしてぞ驅け出しゆく。扨もその頃婦多川に、小池といへる料理屋の、其の奥二階に何やらん、しんみりとせし噺し聲。婀娜吉「丹さん今母公が云ふ通り、田舍の叔父さんが尋ねて來て、私の體を身儘にして遣りたいと言つて、七拾兩といふお金を出してくれたンでありますから、夫れで私が足を洗つて、素人にさへなりやア、又叔父さんの方で少し位元手を出して、母公と私が口養て居る程の小商ひでも、させて遣らうと言ふンでありますけれども、私やア、米八さんといふもののあるお前はんを、横取りを爲て、米八さんと顏を赤め合つたのを、今となつて考へて見ると、何樣も濟まない譯でありますから、爰で米八さんに一つの規模を立てさせた上で、私が身拔を爲ないぢやア、此の和歌町で婀娜吉と、ちつたア顏も知られた者が、あんまり意氣張のない唄妓だと、出た跡までも言はれ種になるのも口惜しいし、又那の嬢にも濟みませんから、此度の七十兩で、米八さんの身請を爲て進げる相談に、母公とも噺し合ひを爲て、今善孝さんを賴んで、中裏の親方に掛け合つて貰ふ積りに爲ましたから、此間も鳥渡お噺し申した通り、お前はん

は米八さんと同所になつて、何樣にも爲て取り續いておくんなはれば、夫れで私の顏も立つし、其の内にやァ又叔父さんと相談を爲て、私も身拔のなるやうになりやァ、米八さんと同居になつて、お前はんを大事にする事にもなりませうから、此の相談が出來た上で、米八さんにはお前はんの口から、私の心いきの通るやうに、宜く咄しておくんなはいョ。全體此の事を米八さんにもはやく咄したいンでありますけれども、那の通りの氣性だから、屹度私に義理を立てて、得心は爲なはるまいかと思ひましたから、事の究つて仕舞ふまでは、那の孃には沙汰なしの方が宜からうと、夫れで先刻の文にも米印へは沙汰なしと、書いて進げたンでありますョ。」丹「なるほどお前の心意氣は、極美しい譯だけれども、夫れ程までに爲ないでも、顏の立たねえ事もあるめえぢやァねえか。尤も此の事は、此身の口から何方を何樣とも言ひにくい譯だけれども、折角叔父さんが大枚の金を出して、お前を身儘に爲ようといふ金を、他の事に遣つちやァ。」あだ「イヽエ其の事は、母公とも種々相談をしての事でありますョ。ナウ母公こ」母「アイサ。元田舍の叔父といふのは、私の弟でございますが、少しの事から中違ひになつて、久しく音信不通で居りました所が、互に年を取るに隨つて、張り合ッた意地も拔け、兩方が懷かしく思つて居る所へ、今度鎌倉へ用が出來て、弟が登つて來ましたもんだから、昔の遺恨をすつぱり捨てて、娘の身拔に、大枚の金をも出してくれたンでございますがネ。尤も弟は、俠氣

なものでございますから、娘が米八さんに義理を立てる噺をすれば、急度此の嬢の顔の立つだけの事
は爲てくれようと思ひますから、何卒娘を人中で、流石は和哥町の婀娜吉だと、言はせるやうにして
下さいまし。」ト言はれて今更丹次郎も、止めかねたる折こそあれ、二階階子の口よりして、米八「婀娜
吉さん、お前はんの顔は私が屹度立てますヨ。」ト言ひつゝ、一間へ入り來る米八、後につゞいて櫻川善
孝。善「モシ婀娜吉さん。お前のお頼みの事は中裏へ掛け合ッて、首尾よく方をつけやしたから、安心
しておくんなせヱ、然うした處で、折よく米八さんに逢ひやしたから、一伍一什の物語をして、同道
に連れて參りやした。」あだ「すヤ然うでありましたかヱ、寔に有り難う。ホンニ米八さん、お前はん
の氣おやア、出過ぎた仕方だとお思ひでもありませうけれど、何卒私の心をも察して、不承しておく
んなはいヨ。」米「どうして〳〵、お前はんの心意氣を聞いちやア、自分の身が恥かしうありますヨ。
正直の事は、先刻湯から歸りがけに、お前はんの所から、丹さんの處へ行ッた文を拾つてネ、開けて
見たらば身の上の御相談が爲たいから、米印へは沙汰なしで、小池まで來ておくんなはいといふ文
言だから、斯ういふ事とは知らず、グット癪に來て、何でも私を出し拔いて、お前樣達が宜い事をお
爲のだらうと、思ひましたから、小池の二階へ往つて、思入れ言つて遣らうと驅け出して來る途で、
善孝さんが段々の噺を爲て、おくんなすつたゝでありますヨ。」ト言ひかけて、善孝の方を見かへり、

米「是れから私のおもふ所は、お前はんから言つておくんなはいな。」善「オツト吞込んで居やす。其所で婀娜さん、お前の心意氣を咄したら、よの字も大よろこびで、然うまで思つておくんなさる事なら、私の年季證文は、婀娜さんから熨斗をつけて貰ひませう。其のかはりにやァ、婀娜さんの身うけは私が爲るから、其の證文も請取ツておくんなさるやうに、和合へ這入つてくれろと、米公の頼みだが、何樣だらうネエ。」あだ「そりやァ私の方のを聞きわけてお呉れなら、又米さんのお蔭で、私が身儘になられる樣に爲ておくんなはれば、どんなに嬉しいか知れませんヨ。」善「夫れぢやァマァ米さんの證文を、七十兩と引替へにして持つて來やしたから、お前の手から米さんに渡しなせえ。」ト、年季證文を差出せば、あだ「夫れぢやア米さん、私の顔を立てて、貰つておくんなはるかえ。」米「屹度、恩に著て貰ひますヨ。其の替りにやァ、私の進げるのも取ツておくんなはいヨ。」ト懐から婀娜吉の年季證文を取りいだし、渡すに驚く一座の人々、豫て利發な米八なりとも、今さし蒐りて大金を、調達はなるまじきを、如何して婀娜吉の身の代金をこしらへしやと、更に疑ひ晴れざれば、思ひかねて丹次郎、丹「コウ米八、今となつちやァ何方の贔屓をするでもねえが、まづ婀娜吉が自分の身請を止めにして、お前を身儘に爲ようと言ふは、寔に見あげた心意氣。夫れをお前が素直にうけて、其の返禮に婀娜吉の身請を爲て遣るとは、意氣張づくに取ツちやァ其の通りの譯だけれども、婀娜吉の身請だつて

はした金では出來めえか、其の金はマア何樣して出來たのだヨ。」米「お前はんに借りましたヨ。」由「ヨ
ウ何を言ふのだエ、何樣して此身が其の金を。」米「アレサマア宜くお聞きなはいヨ。婀娜さんの志
か嬉しいから、一旦身請を爲て貰へば、私の體はお前はんの物でありませう。其の體を又借りて直に
以前の通りの抱女になつて、夫れで婀娜吉さんの身請を爲たんでありますから、斯うすれば婀娜さん
の顔も立ち、私の思ひも通るぢやアありませんか。」ト、言はれて皆々感心せしが、あだ「米さん、私や
アお前の利發にやア何樣しても叶はないヨ、夫れだけれども、折角私がお前はんを。」トいふを引き取
り善孝が、善「コレサあの字、お前の心もよの字の氣も、此身ア初手から知つて居るから、とても兩方
か意氣張で、お前の思ふやうにはなるめえと思つたけれども、由の喧嘩の其ののちは、表向は美事に
附合ッても、たけへに胸には一物が、あるであらうと思ひのほか、婀娜さんが今度の頼み、假令米さ
んは然うせずとも、是れで互の信實が、兩方へ知れ合へば、中へ這入つた甲斐があると、夫れで斯う
いふ譯に爲たが、お前の顔は立つたぢやアねえか。」あだ「夫れは然うでもありますけれども、米さんを
又抱女に爲ちやア、何樣も心が濟まないネエ。」ト獨り心を痛むる折しも、米「婀娜吉さん〳〵、アレサ
夢でもお見のかえ、大そうなされておいでだヨ。」トゆり起されて目を覺し、あだ「オヤ今のは夢であ
りましたかネエ。」米「轉寐をお爲のかえ。私やア今お由さんが、梅を見ながら迎島の、峯さんの別莊

へ大勢連で、往くからと言つておいでだから、お前を誘ひに來たのだヨ。」ト言はれて漸う婀娜吉は、人心地になりにける。

什麼婀娜吉が如何なれば、かかる夢をば見しぞといふに、以前婦多川にありしとき、男を爭ふ意氣張より、山の茶屋にて米八と、大爭論なしたるのちは、敵同士のごとくなりしが、ほどなく婀娜吉は病氣づき、いと〳〵難儀の其の折から、怨みを捨てて米八が、身に引請けて見繼ぎたる、其の深切の忘れがたく、今は丹次郎が世話になり、斯く安々とくらすにつけても、何とぞして米八に、昔の恩を報ぜんと、思ふにつけておもはずも、かかる夢をば見しものなるべし。

○此の時丹次郎は本家へ歸參し、お蝶と米八をば本宅に置き、婀娜吉をば別宅させて、皆睦まじく暮す事、辰巳の園の第四編に、委しく著はし置きたれども、首尾の前後をするにより、看官見惑ひ給はんかと、再び這回に記せしなり。

## 第三十回

扨もお京と房吉に、折の内のしがらきにて、小梅のお由が媒せしとほり、彼のお粂の身のうへは、市郎兵衛が引請けて、萬事藤兵衛と相談のうへ、幇間の萬蝶より、お粂の母へ言ひ入れさすれば、柳川亭の母親は、娘を一個拾ひしごとく、其のよろこび大方ならず、早速岑次郎の母にも報知けて、相

談に及ぶ程に、今度は名におふ藤兵衛と、市郎兵衛が世話なれば、女ばかりの料簡では、返答もなり難く、餘儀なく岑次郎の父にも報知けて、お粂お房が身の治まりを如何なさんと談合へば、父も昔は小金も使ひし通者の果てなれば、今更に叱言も言はず、此の上は藤兵衛と、市郎兵衛にまかする間、お粂お房の身の片付き、又岑次郎が此の末とも、放埓のなき様に、よく／＼きたへて下さるならば、金子のところは何程なりとも、此の方にて出さんなれば、見苦しくなきやうに、取りはからひを頼むよし、返答に及びしかば、藤兵衛と市郎兵衛は、種々と相談のうへ、迎島の別荘を修復して、先づお粂をば是れに移らせ、お房をも婦多川より引きとりて、柳川亭の母侶倶に、是れをも同じ別荘に住まはせ、お京は素より本妻なれば、以前の如く本家にありて、舅姑に仕ふるにぞ、是れより岑次郎も心をあらため、家業に精を出しつゝ、本宅と別荘に、替り／＼に寐起きして、みな睦まじくぞ暮しける。兎角する間に其の年も暮れ、又立ち歸る新玉の、梅咲く春となりしかば、かかる愛でたき身となりしも、藤兵衛夫婦と市郎兵衛が、一方ならぬ深切にて、厚き世話にもなりたる事ゆゑ、是れらの人をはじめとして、知己き人々を、梅見がてらに招かんとて、其の由を觸れまはせば、此の日迎島の別莊へ寄り集まりし人々には、

千葉の藤兵衛、小梅のお由、四谷の市郎兵衛、同じく娘小稻、丹次郎、お蝶、八十八おてふの子なり。米八、

婀娜吉、お米あだ吉のむすめなり。判次郎、お絲此糸の事なり。これより先に郭を出でて判次郎が妻となり、此の時は山の手邊に住むお園是れも此糸の情にて判次郎の妻となりしなり増吉ふた川のげいしゃ今はしろうととなる。清元延津賀、櫻川善孝、同じく新孝、萬蝶、和十、是等の人々を始めとして、なほ此の他にも太夫、唄女、大勢連にて入り來れば、彼の別莊には、岑次郎、お京、お粂、お房等は夫れと見るより出で迎へ、岑「イヤ是れは皆さんお揃ひで、宜く來ておくんなすつたネエ。」お由「お前はんが、みんなを連れて來てくれろとお言ひなすつたから、梅暦以來、お知己になつた人を、大方誘ひ合はせて來ましたヨ。」房「寔に嬉しいネエ。」粂「オヤ米八さん、寔に姑く。」米八「今日は、嘸おやかましう。お前はん此の方を知つておいでか。」ト、丸髷に結つて素人風になりし此糸に指をさす。粂「オヤ唱妓でありましたかえ、元服をお爲なすつたらネエ、お房さん。」房「ア、私も寔にお見それ申しましたヨ。」絲「嘸婆アになりましたらうネホ、、、。」粂「イ、エどんなに宜い御新造さまでございませう。」房「オヤお蝶さんも、お園さんも、宜く今日は。」蝶園「ハイ有り難う。お京さんも、お粂さんも、有り難う。」お由「オヤ／＼大層御丁寧だナウホ、、、。」房「オヤ婀娜吉さんはエ。」米八「今外方で、お米坊に小便を遣つて居るヨ。モウ／＼子持になつちやア、いくぢはないネエホ、、。」蝶「オヤ些と耳が痛いネエ。舞臺へ障るヨ。」あだ吉「イイヨお蝶さん無口でおいで。米八の嫉妬やアイ。」ト態と大きな聲でいふ。みな／＼「オホ、、、ホ、、、。」藤兵衛「イヤハヤ騒々しい。爰で此の人數が、一々挨拶を爲

やつちやア、作者が堪らねえから、先づ上へ揚つての事とするがいゝ。」ト、是よりみな／＼座敷へ通れば、豫て用意の酒肴を、所狭きまで置き並べ、心を盡せし饗應に、杯の數重なれば、果てはたがひの藝盡し、謡ひさゞめく梅の春、幾世かさねて老松の、末の末まで契り合ふ、歡びの聲笑ふ聲、ドウ／＼ドット此の家のうちに、納むる筆こそめでたけれ

梅暦より幾十巻か編數を重ねしを、這所に全く局を結べば、又首巻より繰り返し／＼、見させ給へと願ふになん。

販元　文永堂主人

春色梅美婦禰巻之十五　大尾

# 風月花情 春告鳥

# 風月花情 春告鳥初編之序

僕四十雀の不惑といふ歳なれど、澤邊の鷺に異ならず、野呂間として家事に疎く、戯作を渡世の活業に、風雅も洒落もあらざれど、人情ものを巧婦、それが家鴿の愛鵠となりて、果なき鳴を喜び鳥は、かの明烏を福果報の始めとし、今猶書林へ鵲の橋渡しとはなりぬ。されば鵯の一つより鶯へて、千鳥の數に滿つる中本、山鶏の尾のながながしく、後を都へつけて鸒の山と積み、翡翠の河より深き、看官の御贔屓を、空行く雲雀の高く仰ぎ、惠みに供ふ一趣向を、鶉うつらと翻案ふれど、毎時初音の手がらはなく、元來鶴の一聲に、寐りを覺す奇談も雉も、しるし兼ねたる短才は、鷹へにいふと燕雀の、鵬の覽をはづ、とはいへ拙著の外題をも、喚子鳥の得意もありてや、水鶏にあらで庭の戸を、たゝく知己さへ少なからず、いつも著述を鶺鴒なれど、稲負鳥いなみ難くて、夜を以て日につぐ隼の、はや故しらえは鵯の苦勞、鶸は脾弱き作者の文盲、夫を都鳥の謗たちは、鶚に穴を見出して、高く伺ふ鵜の目に、笑はれん事は、おそるれど、世活なれば鷲鷙つよく、鳩に三枝の禮もあり、また愛敬も在りますと、小陵鳥を賞めて日雀をえらみ、春告鳥を販元に贈り、四方にその音を傳へんと願ふのみ。

東都人情本の元祖
金龍山人狂訓亭
爲永春水誌

はつといふ名に客人はあくまでもあとをつけたる雪の中裏

故人三馬

故人の作りし敵討を、人情ものにかきかへたれば、白刃を抜かうといふ所を、握りこぶしの雨あられ、命を落す一段を、金のふくるしむ難儀におとし、たとひ死んでも蘇生る、すべての趣向今様の、道理にかなふを旨となし、むかしばなしか本にでもありさうなといふ、目前を除れめでたくつゝりし勧善懲悪。

江戸金龍山人　爲永春水

# ◎卷中の目錄

◎上の卷は郭の鶯

なくねゆかしき閨の戸に、思ひもよらぬ昔語は、まゝになりたき籠の鳥。

◎中の卷は藪の鶯

はつ音やさしき垣根越しに、もれて聞ゆるさゝめごとは、思ひがけなき巣立鳥。

◎下の卷は庭の鶯

音色うれしき圍ひの中に、情のこもる兼言は、木枝になれし庭の鳥。

三卷六章目次畢

# 風月花情 春告鳥 巻之一

江戸 爲永春水 著

## 第一章

さま／＼のこと思ひ出す櫻かな。その櫻節憂きことを、忘れさせんと勸められ、迎島の別莊より、うしやの土留木を二人連、おとなしき風俗の息子と櫻川新孝。新「若旦那、マア私にだまされたと思つて、例の所へ往つて御覽じまし。おめへさんにやア、急度お氣に入るにやア相違ごぜえません。此間も若竹の兼八が、貴君さんのお噂を申して、今度出來た薄雲さんを、是非貴方に出會はし申してえと、くれ／＼左樣申して居りました。」鳥「そりやア有り難えが、相方で出るか何だか知れる物かナ。」新「ナニ／＼だいぢやうぶでごぜえます。」トいふとき、乘り切りの船頭、小舟のうすべりをひろげ、舟「サアお乘んなさいまし。」新「サア／＼これは御苦勞、サア若旦那お乘りなさいまし。」鳥「アイ、汐があるから洲を乘り切るに樂だノ。」ト二人はのりてむかうへわたる。鳥「エヽ、コウ、此の洲へ犬が幾疋も來て居て、汐の干ける間平氣にあそんで

ゐるからをかしいナウ。」新「左様サ、江戸の方の犬は、斯ういふ世界は知りますめえ。」鳥「左様サ、犬の世界とはありがてえアハ、、、。」ト はなしてゐるうち、はさんばしにつく。舟 新「トキニ若竹へお寄りなせえますか。」鳥「左様ヨ、門口から聲をかけて往かう、そして師匠さんに往つて貰はう。」新「それだと宜うごさいますが、延津賀も弟子が多いから、直にいかれればようごぜえますが。」ト はなしながら若竹へ聲をかけ、すぐに總がくぼのくるわにいたり、かねてこゝろあてある、加田玉といふ青樓にこそのぼりける。そも／＼二階の結構より、その盛んなる繁昌なんどは、いはずと諸君の推にまかして、人情の要をのみしるす。扨爰に櫻川の、伴ひし息子といふは、大分限の祕藏にて、名を鳥雅と呼び、寒葉齋綾纖の門弟、好雅にして風流なり。さて相方の貴孃といふは、玉樓日の出の全盛にて、薄雲と名を知られ、二とは下らぬ立者なり。それ十二疊のざしきは綺麗に片付けて、衣桁にかゝりし仕掛の上著は、黑天鵞絨へ、金絲銀絲にて荒磯を縫はせ、重ねも同じこしらへなり。さて牀の間のかゝり、袋棚違棚すべて好みの造作ならんか。牀の掛物は、又平の古彩色せし時代の女繪、薄端の花筒に、いまだ何も生けざるは、一馬の弟子にておいらん自身に、花の來るを待つゆゑか。唐木の机に猩々緋をかけ、鯉丈が遊び細工にこしらへたる、硯屛時鳥の羽根のちり拂ひ、孔雀の羽根がありさうなるところを、女郎花の造り花をさして、小さき短尺に、

夕されば身は仇し野の女郎花まくらさだめぬ秋風ぞふく

といふ歌を、しるして付けたるは、たしかに歌堂文雄の弟子にてあるべし。伊勢物語と湖月抄いうへに、田舎源氏と諸國物語が載せてあり、大小の琴二面、尤もおいらんが調べると見えて、こまがかけてある儘立てかけたるは、今急に片付けたりと思はれたり。また次の間の八疊には、お定まりの蒔繪の簞笥、長持用簞笥、鏡臺蠅帳に至るまで、細々したる小道具を、うや／＼しく並べ、夜具は金襴の額縁の三ツ布團、おなじ夜著の裏は、もゆるがごとき緋ぢりめん、かかる手厚きありさまにては、定めて圍ひもありぬべし。なほ座付のさまをしるさば、倦きたまはんことをおそれて、こゝにはぶきて、おかた付けの後をかたらん。既に鳥雅はひッそりとせし牀に、只一人つれ／＼とせし所へ、新造薄菊寢卷を出し、きく「モシヘ、これをお召しかへなまし。」ト、中形ちりめんの花色うら、黒天鵞絨の半えりのかゝりし小袖をいだす。鳥「ナニ／＼これでいいヨ。」きく「それでも皺になると、明日見ッともなうざます。」鳥「もう寢たから面倒だ、堪忍してくんな。」きく「アレサ、それでもおいらんが、急度お牀著を上げまうせとお言ひなましたから、私が叱られいすものウ、貴君は著ものの皺になつたのは、實に嫌ひでお出でなますと、おいらんがお言ひなました。」鳥「今夜はじめて來たおいらが、著物の皺になつたのが、好きか嫌ひかおめへたちに知れるものか。」きく「すヤ、それでもおいらんが左樣お言ひなましたから、お著かへなましサア／＼。」ト、無理に起して襦袢まで脫がせ、殘らずた、

みて簞笥の引出へ入れ、きく「オヤまだ帯もおよこしなまし、そして此の帯をおしめなまし。」鳥「よくおめへはおいらを責めるなう。」きく「オホ、、、それでも私が叱られますものウ。」鳥「モウ／＼帯は御免だ、これはやらない。」トからかつてゐるところへ、彼の薄雲は、閙はしく座敷へ這入り、「薄菊さん、牀著を上げておくんなましたかえ。」きく「やう／＼のことで上げ申しイした。」鳥「モウ／＼此の子は、おいらをいぢめていけねえ。」きく「それでもぬしが情がこはくッて、まだ帯をおよこしなんせんものウ。」薄「オホ、、、全體女に世話をやかせなますのが、ぬしの癖ざます。」トわらひながらしんぞうに向ひ、「薄菊さん、ぬしはお茶がお好きざますから、煎じて上げなまし、濃いのが好きで居なますヨ。」ト言ひ付けながら、鳥雅の〇〇〇〇腹這ひになり、たばこを吞みゐたる脊中のうへへ、遠慮もなくぐいと寄りかゝれば、鳥雅はびつくり、鳥「オヤ膽を潰したア、とんだおいらんだ。」薄「オホ／＼ホ、、、わちきやァおいらんではありません、憎らしいおわすれなましたかえ。」ト言ひながら、嬉しさうに鳥雅の顔へ〇〇〇〇〇〇〇。此の時鳥雅は薄雲の貌を、しげ／＼と見れども、思ひ出されず考へながら、鳥「どうも見たやうだけれども知れねえ。」薄「そんなら和歌町の、お濱さんはどうなましたえ、これでは知れイせうネ。」鳥「ハテナ、それぢやァおいらのことを、知つて居るのだノ。」薄「知りきつて居りイす、おはまさんはどうなんした。」鳥「エどうしたか。」薄「オヤおとぼけでない、爲鳥とやらへうちをこしらへて、世

詫をして置きなましたおやァありませんか。」鳥「ナニ〳〵、それから何所へ往つたか、色男をこしらへて駈落ヨ、おいらこそ寔にいい面の皮だ、他にはなすも外聞がわるい。」薄「譃をお吐きなまし、おまはんに惚れきつてお出でなましたものを。」鳥「ナニ〳〵譃おやァねえ、疑ふならば新幸に聞いて見な、どうしたことか行方知れずヨ。」薄「オヤ〳〵ほんざますか、オ、嬉しいねえ。」鳥「なんでそんなにいふかわからねえ、なぜまたお濱が居ちやァわるいのか。」薄「なぜでもサ。」ト小聲になつて、鳥雅の耳元へ口を寄せ、薄「わちきやァモウ〳〵うれしくつて、はづかしい事ざますが、こんなに身がふるへるほどに思ひイす。」鳥「これサ、そんなに氣休めをいひなさんな、後でしかたがあるめえ。」薄「アレサ實正ざます、どうしておまへさんに氣休めがいはれイせう、眞實誠でおッすわね。」ト、はなしのところへ、新造薄菊が聲にて、きく「モシエお茶か出來イした。」薄「オヤ早く出來イしたね、寢に上げまうしておくんなまし、そして是れをしまつてお休みなまし。」ト、櫛笄を抜いてそこへなげ出し置く。薄菊は茶椀へ茶をつぎにかゝれば、薄「アレサ、その茶椀おやァわるうざます、アノ私の茶わんに仕なまし。」きく「アイ。」ト、薄雲の茶椀へ茶をつぐ。もつとも黒ぬりに金にて、重ね桔梗の紋をつけた蓋をせし湯呑なり。きく「ハイお茶、こゝへ置きイす。」鳥「イヤこれはありがてえ、ドレさめねえうちに。」ト言ひながら、湯のみのふたを見れば、其の身の紋とおなじことなり。左様思ひなが

らも深くはかんがへず、吞んで仕舞ひ、鳥「オイ〳〵薄菊さんとやら、どうぞもう一ッはいおくれ。」薄「ドレ私が。」ト土瓶をとりて、こぼれるほどつぐ。きく「それぢやァこの茶椀へわけて上げえせう。」鳥「左樣々々吞まれるものか。」薄「お殘しなましな。」きく「主はよく私の名を知つて居なますねえ。」鳥「實があるだらう。薄菊さんは氣が利いて居るヨ。」薄「ぬしは薄菊さんに氣があるとさ、それだから油だんはなりイせん。」きく「オヤ〳〵おいらんはあんな事を。」トさもきのどくさうなるかほいろをする。薄「薄菊さんも氣があるから、ぬしの來さしつた節、繪に書いた樣な客人が來なましたと、寧そ氣をもましつたヨ。」トいはれてしんざうは、いよ〳〵顏を赤くする。年は十六なれども、いたつておとなしきうまれつきの娘と見えたり。

## 第二章

薄ぎく「ぬしのことを、繪に書いた樣な客人だと申しイしたのは、私ぢやァありません、雲井さんでありイすものを。」薄ぐも「何でもようざます、はやく片付けてお休みなまし、兒女はどうしイした。」きく「アレ見なまし、兩禿ながら向うに居眠りをしてをりイす、怠慢いねえ。」トいひつゝ、櫛とかんざしをかみにてふき、箱へしまつてゐる。薄「起して其所を片付けさせなまし、癖になりイす。」きく「アイ〳〵。」ト立つて禿を起し、二人にて座敷を片付け、暇乞して休みし後にて、薄雲は上著を脫いで、ひよいとはふり出し、鳥雅の吞み殘したる茶を、ぐいと一口に吞み、そのまゝ側へ寄り添ひて、淚をはら〳〵と落し、聲をくもらせ

て、薄「モシエ鳥雅さんえ、それでもわかりイせすは、徳町の若旦那え。」鳥「ハイ徳町の鳥雅といふ名まで、くはしく知つて居るのかえ。」薄「ぬしは憶えて居なんせんも、無理とは思ひイせんが、ぬしに、始めてお目にかゝりイしたのは、今年で丁度三年あと、しかも九月の十三日、祭の夜よやの前の晩踊屋臺の手見せのあけく、あの衣裳でお座敷をし、お祭行事のお方がお頼みなんして、龍燈の斷えさんといふ、踊子と相方になつて、ぬしの所の二階のおざしきで、小町の役を踊つたのは、私でありイす。」鳥「ェ左様か、それぢやァあのときじやうだんに。」薄「惚れたなんぞと云ひなまして、からかひなましたそのあけく、お落しなんした藥入。」トいひながら、銀の毛ぼりのからくさの合口の、ちひさいくすりいれをいだして、「これ見なまし、ぬしは何ともお思ひなんすまいけれど、私やァもうその時に、どうぞと思ふ心から、萬一これぎり逢はれない様になつたら、ぬしのかたみと心付いて、慾氣はさらさらおッせんけれど、肌身に添へて持ちたきゆゑ、お貰ひ申しイした此の品を、朝夕はなさずもつてをりイす。其の後ぬしの噂をお聞き申しイしたら、和歌町のお濱さんと、深い中でお出でなんすと、くはしいわけを聞きイしては、とても年のいかない私なんぞが、何と思つてもおよばないことだと、悲しく思つてをりいすうち、種々の薄命で、たうとう斷らいふ身になりイして、なほなほぬしを戀しいと思ひイしても、恥かしらしく今さらに、文を上げ申すこともなりイせず、心でばッかり久しい間、お慕ひ申してをりいした。」ト、涙と

ともにいとながき、過ぎ越し方の物がたりに、鳥雅もすこし涙ぐんで、鳥「左樣いはれて見れば覺えもあるが、あんまり嬉しすぎて夢のやうだ。」薄「アレサ茶にしておいでなますナ、コレ見なまし、不躾らしいことざますが、よく／＼深く思ひイすればこそ、ぬしの定紋を私の紋に付けイして、重ね桔梗は重ねてまた、お目にかゝるを心のねがひ。」トいひながら、鳥雅の顏をぢつと見つめて、涙の笑貌莞爾とせしうつくしさ。薄「モシエ、どうぞ見捨てずに來ておくんなましな。」トしみ／＼といへば、鳥雅は薄雲の顏を見て、鳥「初會の身分で、だまされると思ふも自惚だが、今の樣なことをいつて、おいらが實情になつて通つたら、どうする。其の時は氣休めが後悔だらうぜ。」薄「それぢやア私が申しイすことを、うそだとお思ひなますのかえ。」鳥「サア虚か實か知らねえか、斯ういふことになることは、夢にも知らぬ昨夜の夢。」薄「夢にも思はぬ夢とはエ。」鳥「さればサ、今おめへのいつた、三年以前の祭の夢に、おめへと情人になつた夢を見たが、目がさめて少しふさいで居る所へ、新孝が來ておいらんの噂、此方も知らず新孝も知らずに、此所へ來て見ても、唯うつくしいおいらんだと、思つてばかり居た所で、おめへの方でそれほどまで、覺えて居てくんなさるとはありがてえ。しかしまア何にしても、迷ひの種をはじめたが、どうぞ氣をもみたくないもんだ。」薄「ほんたうに、夢に見ておくんなましたのかえ。」鳥「左樣サ、ふしぎではないかね。」薄「夢に逢ふと實正には、最う逢はれな

いといふ事ではありいせんか」 鳥「ナニ、ノ\／\、廻りあはずば仕方もねえが、今夜斯うして再會って見ればッ」 薄「もはや別れる様な、苦勞はありいすまいかねえ」 鳥「そりやァおいらんの心にあることだ、おいらが何と思つても、今までの情人に對して、義理や情だてをした日にやア、只一通りに呼んでくんなさりやア格別、まア氣休めにも今夜のやうな仕うちで呼ばれて見れば、ツイ此方も自惚で、どうぞ恥をかかねえ様にと、しげ\／\くれば、おいらんの邪魔にもなるといふものだから、是非この調子がくるふのサ、それだから氣をもみたくないといふのだわナ」 薄「オヤどうして私に、情人の何のと其様なものがありイすものか、實に心ぼそく思つて居りイす身の上さまずから、どうぞお氣に入らずとも、後生だと思つて來ておくんなましな、エ、若旦那さんエ」トすり寄る。鳥雅は夜著のはずれの方へ寄つて寝る。 薄「アレサ、其様にお逃げなますと、今に布團の下へおッこちなますヨ」 鳥「ナァにおいら許り墮落の方さね」 薄「アレサマア、此方へお寄んなましな」ト、むりに手をかけて引き寄せるか、よわき女の手しなやかなれども、かはゆいと思ふ一心に、總身の力を兩手に寄せて〇〇〇〇〇、 薄「サァこれで、其方へ寄つて見なまし、私も一連に引きずられておッこちイす」ト、笑ひながらいふ顔のかはいらしさ、釋迦も孔子もなか\／\に、愼みがたき美艶にて、愛敬こぼるゝ風情なれば、鳥雅の魂は、はや天外に飛びたるや、忙然として萬事をわすれたるがごとし。 鳥「サァもうよ

此方へ寄んなましな、意地のわるいねえ。」鳥「コレサ、せつねえわな、あんまりひどくするから咽がしまるヨ、コレサノ\ア、引くるしい。」薄「そんならお逃けなますナ。」鳥「逃げねえノ\。」薄「そしてネ。」鳥「なんだ。」薄「おねがひがあります。」鳥「なんだか早く言ひななサァノ\。」薄「アレヤァあしたはね、急度雨がふりイすから、そのつもりになさりイしな。」鳥「そのつもりにとは何のことだ。」薄「アレサ、あしたもお出でなさりイしな。」鳥「否々。」薄「どうぞお願ひさます。」鳥「ナニサ、ほかに否なことはねえが、そのうつくしい顔を見て、側にはなれずに長居をして見ねえ、直に命にかゝはらァ。」薄「私こそ、これから命が縮まりイすと、覺悟を極めて居りイすと、申しイしたところが、是れ限りでお出でなさりイせずば、どうしいせう。」トいふ中鳥雅はまた、心の中に風とお濱のことを思ひ出して、何所にどうして居ることか、他に男をこしらへたの、慾で影を隱したのといふ氣づかひは、決してないに極まつた女、さぞ苦勞をして居るか、萬一死にでもしたものなら、あれに對して浮氣なことが、少しもあつてはすまねえことだが、また今夜の此の女も、捨てられねえうつくしさ、殊に此方の自惚かは知らねえが、まんざらでもなく心のある樣子。どうした事かと胸に手を、置いても思案の外心、戀には智慧も分別も、出來ぬならひか風流の、才子も野暮もこの道は、案内知れぬ難所といふべし。薄雲もしばらく、言葉とぎれてありけるが、こゝろ付いて、鳥「オヤ主は寐なますのか

ネ、くたびれイすヨ。」[illegible]「モウ寝るものか、おめへこそ色男のことを考へて、ふさいでおやァねへか。」[illegible]「イヤ〳〵、嘘をお吐きなまし、ぬしこそうと〳〵目をおねむりなんすものを。」[illegible]「ドレ〳〵、それならば煙草でも呑んで、氣をつけよう。すヤ火が消えた、おまへの長い喜世留で、行燈の火を付けてくんな。」[illegible]「アレサ、油火は毒さます、お倉どんの部屋から、おくらどんとはやり手のことなるべし。貰つて來て上げ申しイせう。」ト、立ちに蒐るを鳥雅は引きとめ、[illegible]「モウ〳〵、それをかこつけに何所へか行かうと思つて。」[illegible]「アレサ、あんな邪推なことを、往けとおつしやりイしても、私やァモウ〳〵行かれイせん。」[illegible]「それでも客人が來て居るぢやァねえか。腹を立たしちやァ悪い。」[illegible]「おありがたうざます、外聞にもあると申しイしたいが、久しく病氣で引いて居りイしたに、みくになじみのお方もありイせんのか、今夜は却つてお嬉しうざます。斯う申しては、さも働きのないやうに思ひなませうが、ここになない世事を言つて、合鏡をすることは、今まで出來いせんものを。」[illegible]「今夜ッから世事をはじめたのかえ。」[illegible]「アレサどうしいせう、私がいふことを、一々上げあしとやらをとんなます。」[illegible]「上足も下足もないものか、足なんぞはこはがつて、おいらの方へ寄せもしねえ癖に。」[illegible]「それでもぬしが否がつても、遠くへおよんなますものヲ。」[illegible]「そりやァいいが、多葉粉の火はどうせう。」[illegible]「それ見なまし、兒女を起してとうにやりイせう。」[illegible]「そのついでに、あつちの客人の所へ左様いつてや

んな、今に寐かしてしまつて、ゆるりと樂しみイすから、待つて居ておくんなましと。」薄「アレ後生だから、其樣なことはいつておくんなますな、モウ〳〵此の後ぬしが來さしッた節に、たま〳〵客人がありイしても、ぬしの側をはなれえすことではおつせん。それとも居りイしてお邪魔になるなら、何所ぞへ參りいせう。」鳥「ナニ邪魔といふわけはねえが、何ぼ獨りで寐るのが否だといつて、心なく引きとめるは氣の毒だからヨ。夫れならばモウ〳〵何所へもやらねえ、モシ行かうとするとかうするぜ。」薄「ア、レサ、マア○をお解きなまし、アレサ私か。」トいひながら、筑前木博多の○を、キウ〳〵とたぐりいだす。鳥「アレそれだやァ猶しまるわな。」薄「オホヽヽヽ、マア少しぬしの骸を輕くしなましな。」鳥「サア。」薄「それ見なまし、直にほどけいした。」ト○を解いて、布團の下へ落して、ぶる〳〵と身をふるはして○○○、薄「三年の思ひで。」鳥「何が。」薄「なんでもようざます。」ト、莞爾とさも嬉しさうに笑ふ。

そも青樓の夜ぞ更けて、はるかに聞ゆる餅つき唄は、土手の北より箕輪のはうへ唄ひゆき、こねどりの音はしん〳〵たる、座しきの内にかすかなり。さて薄雲鳥雅の深情はいかに、好漢はよく知り給ふことなるべしと、その情を濃かにしるさず、よろしく察してよみたまへ。

風月花情　春告鳥卷之一　了

# 風月花情 春告鳥 巻之二

江戸 爲永春水 著

## 第三章

扨も鳥雅にははからずも、憂きをはらさんその爲に、何心なく登りたる、この青樓の薄雲は、藤このかりの美女にて、殊にその身を、戀ひこがれてありけるよしも、誠なるにや心を盡すもてなしに、深くもこれを思ひこみて、雨の夜雪のいとひなく、元來樂なる若隱居、迎島の別莊より、渡りに舟も自由にて、竹屋を呼ばす向う越し、今宵は晝より、誹諧のもよほし客にて、文亭を會頭とたのみ、閑月庵を催主にて、終日夜に入るまでかゝりしかば、客の歸りし後に、跡かたづけさせる頃は、はや亥刻の鐘かう／＼とひゞき、秋の夜寒の身にしみ／＼と、世間もいとゞ寂しければ、侍女お民といふに言ひつけて、牀をとらせ、夜學燈を枕元におき、歌書と繪入の讀本をならべ、獨り寐る夜の伽となし、侍女お民と下男を部屋に休ませ、寐ながら本をよみて居たりしが、兎に角寐兼ねて牀を起き出で獨り

言、鳥「ア、引寐られねえ〳〵、わりい癖がついたが、どうも爲方がねえ、今時分はどうして居るか、いめえましい、爰で案じてはつまらねえ、ドレ寂しいが出かけよう。」ト簞笥の引出の、著物を出して著かへ、次へ出ち出で、鳥「オイ〳〵お民や、おらア今から出かけるから、跡をよくゝまりをして寐やヨ。[illegible]民「ハイ何所へ入らつしやるか、モウ夜が更けましたから、途中がおあぶなうございませう、久助を起しまして、お供を申し付けませうか。」鳥「ナニ〳〵起さずといい、折角寐入つたらうのにかはいさうに、我が子なら供には連れじ夜の雪。」ト いひながら庭の方より、立ち出でんとするを見て、たみ「こゝから堤までも、田圃がございますから、不用心でございませう、私でもお舟へ召す所までお送り申しませう。」鳥「何のつまらねえ、手めへのやうな柔和をつれて往つたッて、化物の用心にも、盗人の防ぎにもなりやァしねえ。そして土手から、手めへを一人歸されるものか、それよりやァ近所の好漢でも呼んで留守にたのしむがいい。」ト笑ひながらいへば、お民は顔をあからめ、たみ「オホ、、、、若旦那さまの、とんだ事を仰しやいます、つひぞお留守に近所の若衆が、參つたことはございません。」ト はづかしさうにいふかほもかはいらし。そも〳〵お民といふは、地面の家守の姪にて、兩親にはやくはなれ、難儀をせし娘なるを、鳥雅の母親、そのはなしを聞きて不便におもひ、側に呼びて仕ひしが、鳥雅の兄の女房このお民を憎みし故、面倒なりとて、此のほど鳥雅の方の下女、病氣にて宿へ下りしとあるを、物怪の倖ひと

して、二十日ほど以前より、此の別荘へ遣はしおきたるなり。されば侍女とはいふものゝ、さすがつねの奉公人の如くにてはあらず、殊に貌容美艶しく、歳もやう〳〵十六歳にて、自然と人品すぐれ、髪化粧衣類まで、つくろふことはなけれども、色白くあざやかにてありしの爲、他に妬まれて、此の別荘へ本家から送りしとぞ。實に月を見るも、花を詠むるも、心ありて看ると、心なく詠むるときには、其の情大いに違ふとか。今鳥雅は、お民が主思ひに、やさしくいふをきゝて憎からず覺え、はじめてその姿を見るにはあらざれど、心あつてこれを見るに、衣類こそ麁服なれ、化粧もせぬ素顔にしおのづからうつくしければ、はからず春心を催し、佇と立ち止まれども、お民は何の氣も付かず、民「どう遊ばします、だん〳〵夜がふけますヨ。」鳥「ドレ出かけよう。」ト雨戸を押しあくれば、秋の木の葉ともろともに、俄に降りくる露しぐれの、風にばら〳〵吹きかゝれば、雪踏を直すお民は仰向き、庭へ手を出し、民「オヤ〳〵、雨が降つてさんじました。」鳥「ナニ〳〵、風で木の葉がおちるのだらう、雲がかぶさつてはゐるが、まだ降りはしまい。」民「イ、エ、此様に私の手が濡れましたもの

ト いふうちに、はやおほぶりとなり、雨戸をばら〳〵うつほどなれば、

鳥「オ、〳〵、こりやァいけねえ今夜は往くめえよ、さう〳〵其所をしめてしまひな。」民「ハイ。」ト雨戸をしめ、民「せつかくいらつしやらうと思召したのに、いけませんねえ。彼方でもさぞ、お待ちなさつてお出でなさいませうのに。」ト笑ひながらいふ。鳥「あ

ちらで待つとは誰がことだ。」たみ「ハイ薄雲さんのことでございます。」鳥「どうして知つて居る、誰ぞに聞いたか。」たみ「イヽエオホヽヽヽヽ、これからまだ夜がながうございますから、おさみしくツて、おしづまることは出來ません、お煎花でも拵へて上げませうか。」鳥「エ左樣ヨ、しかし手めへ眠からう、そしてマア薄著ぢやアねえか、これをその上へ引つかけや。」ト、今まで寢卷に著て居たりし、はな勝見の大形の縮めん、半衿のかゝりし小袖を、お民のうしろから掛けてやる。お民はびつくりしてこれを脱ぎわきへおいて、たみ「どういたしまして、まア勿體なうございます。」ト、いひつゝ立つて、次の間へ行くを呼びかへし、鳥「コレサ〳〵、遠慮せずとそれをまア著るがいい。そしてそれは直に、手めへにやるからいいわな。」トいはれて嬉しく手をついて、たみ「ハイありがたうぞんじますが、どうも勿體なうございます。」鳥「ナニ〳〵かまふことはねえ、直に著やヨ、そして其所の爐で火をこしらへて、釜をかけな。」たみ「ハイお茶を遊ばしますか。」鳥「インニヤ、茶はたてねえが、勝手へゆくと、久助が目を覺して氣の毒だ、おれも寂しいから、何もかも側でこしらへるがいい、先刻釜へいい水を入れておいた。そして九机の上に、豐島町の茶を置いたから、あれを入れな。」たみ「ハイ、清風軒のでございますか。」鳥「よく知つてゐるの。」たみ「ハイアノ豐島町の、伊勢屋吉兵衞と申すのは、此の頃は大そうによく賣れますと申して、評判がようございます。」トいひつゝ、茶の湯のどうぐをならべて、ちやをこしらへにかゝる。鳥「コレサ、その衣服を著

ねえか、寒いといふのに。イヤ／＼それよりかいいものがある、是れにするがいい、久しくわすれて居た衣服がある、といつた所が、行丈が間に合へばいいが。」トいひながら、錠をおろせし簞笥の引出より、取りいだすは唄女お濱に著せるとて、呉服屋へあつらへ置きしが、その出來ざる中に、お濱の行方は知れず、捨てて置きけれども、呉服屋の迷惑を察し、いづれたづね出して著せる時節もあらんかと、仕舞ひ置きしを思ひいだして、その衣服をとりいだす。そも好みに任せて、こしらへ置いたる衣裳の染色はいかにといふに、千筋の山まゆ縮緬の御納戸、裾まはしは引返し、極上紅の胴裏、紋はすが縫ひの重ね桔梗なり。裾へ銀絲にて、まことに細かに八藤をちらしに付け、下著は京縮緬へ藤色にて、吹寄の形を染めたる無垢、二ツ緋の紋ちりめんの對丈繻袢、白天鵞絨へ銀絲にて、三津五郎縞を縫はせし半衿をかけ、白の紋綸へ大極上々の本紅を、うらに付けたる蹴出し、媚茶の紋ごはくへ、黑絲と紫の絲にて、三津五郎縞を蛇腹ぶせに縫はせし、丸寸巾の帶、もつとも鯨合はせ、片めんは松葉色の勝山へ、金絲にて八ツ藤を、五分ほどの大きサに縫はせ、もつとも六七寸間に、飛び／＼に付けたり。さてこの揃ひし品を取り出し、鳥「コウ／＼お民、これを著て見な。」ト、行燈の前にならべおけば、お民は肝を潰して、鳥雅の顏をながめてゐたりしが、たみ「あなたはマア、今夜はどうか遊ばしましたか。」鳥「ナゼ／＼。」たみ「それでもあんまり、私をおなぶり遊ばすからサ。」鳥「ナニ／＼、

なぶるのぢやアねえ、そのかはいらしい顔へ、これを著せたらば、なほうつくしい姿になるだらうと思つてだ。サア〳〵ちよつと著かへて見せな。」たみ「イ、エどう致しまして、其のやうな大そうなものが、私に似合ひますものか、第一ばちが當ります。」鳥「つまらねえことを言はずと、マア著て見ねえか。」たみ「どうぞ御免遊ばしませ。」鳥「ナゼ、罰があたるものか、サア著ねえか、はだかにして外へ追ひ出すがいいか。」ト、笑ひながら立ちかゝれば、お民は恥かしく身を縮めて、逃げにかゝるを引きとゞめ、鳥「サア〳〵誰も見はしねえ、マアちよツと著かへて見せや。」ト責め立てられて爲方なく、たみ「左様ならば、マアそちらへいらしツて下さいまし。」鳥「ドレおれが手傳ツてやらう。」たみ「アレ御免あそばせ、私が一人で著ますヨ。」鳥「サアこのゆもじも襦袢も、そつくりと著かへて、帶も〆めて見せな。」たみ「ハイ寔にこはい様でふるへますヨ。」ト娘心の正直に、著馴れぬ美服を著ることを、嬉しさ怖さに身をふるはす、といふに等しき言の葉は、外聞作るよりゆかしけれ。お民が衣服を著かへる中に、鳥雅は蠟燭を出して燭臺へてらし、鳥「サア〳〵、爰へ來てよく見せや。」ト、いはれていよ〳〵恥かしく、もぢ〳〵するを手をとつて、明光へ引き出され、うつむく笑顔のかはいらしさ、雪よりしろき衿もとより、照らされてなほうつくしき、素顔にほんのり目のふちの、櫻色どる上氣の風情、今著せかへし衣裳には、久しくこめたる匂ひ袋の、しみて色濃きその薫、昨日今日には見ちが

へたり。これ深窓の娘なるを、衣裳のこのみに、洒落たる姿となしたるが如し。鳥「ドレヨ、其様に顔をかくさずと、こちらへ向いてよく見せな。」ト、あかるき方へ向はせける。

第四章

馬士にも衣裳の諺ならで、これは美人に錦を著せて見て、まだ足らぬのは髪のかざり、紅白粉の揃はぬが、をしき様でもつれ〴〵に、月花のたとへ思ひ出る、鳥雅の心には十分なるべし。鳥「とんだよく似合つた。そして肩あげのねえ著ものを著たら、大そうに形がおほきく見える、おつなものだ。」たミ「どう致して、私に似合ひますものか、今まで此の様な綺麗な衣裳は、著ましたことはございませんものをネヱ。」窮屈さうにしてゐたりしが、たミ「よごしますとわるうございますから、はやく著かへて仕舞ひませう、しわになりさうで心配でなりません。」ト立つを止めて、鳥「著て居てもいいわな、わるくなつたらまた拵へてやらァ。」たミ「エイこれはマア、どなたのでございますエ。」鳥「そりやアおれが、急にかはゆくなつたかはいらしい娘の衣類ヨ。」たミ「左様でございますか、それではなほわるくいたすと済みません、はやく著かへまして、お茶をこしらへませう、オヤお湯が煮え立ちました。」鳥「ハツ聞きわけのわりいことだ、かはいい娘に著せたのだから、どうしてもいいわな。」たミ「イヽエそれでも其のお方が、お腹をお立ちなさると悪うございますから。」ト、立ち上る手をとつて引き寄せ、

鳥「この娘が腹を立ちさへしねえければ、外にその著もので、腹を立つものはねえ、此の可愛らしい貌で、腹を立つたら嘸こはからう、サア腹を立つて見せや。」ト笑くぼの所を、指にてちよいと突く。お民は嬉しき様なれども、思ひがけなき俄の會釋、分に過ぎたる衣類まで、著せかへられし此の場の仕儀、いかなる心ですることか、たとひ當座のなぐさみなりとも、仕立て下しの小袖さへ、直にもくれんとする様子、よしや衣類はもらはずとも、賤しき此の身が若旦那に、もし見染れもするならば、下女にかはらぬ此の身の本望、殊にまれなる好男子、願うてもなき幸ひと、嬉しがらせて笑ふのか、何となさんと胸のやみ、年もゆかねば思案も出でず、只ぶる〳〵と戀風に、身をふるはして居たりける。鳥「サア釜の湯が煮立つたから、茶を入れな。」たみ「ハイ。」トいひながら、爐の際へ立つて行く、後姿を見てあれば、年より少し大がらにておしたてよく、何處やらお濱に似たる風俗なれば、鳥雅はます〳〵心によろこびゐる。お民は土瓶に湯を汲みわけ、茶をはうじていれ、湯呑に汲んで茶臺にのせ、鳥雅の前にさし出す、煮花も花の山吹や、實のなき戲言か知らねども、一枝折りて貰ひたき、心の願ひ七重八重、笑みをふくみてさし出せば、鳥「ア、引いい色に出た、ドレ〳〵あの菓子簞笥を出しな、そして手めへも呑みな。」たみ「ハイ。」ト、菓子入を持つて來る。その引出より極製の眞砂を、十ヲばかり紙にのせてやり、鳥「サアたべな。」たみ「ハイ有り難うぞんじますが、此の様に澤山はたべら

れませんッ」鳥「ナニそれ許り、何ぼ手めへがじんじやうでも、それがたべられねえ事があるものか、取りわけてやらずといいけれど、遠慮して喰はねえだらうと思ふから、わけてやつたのだ。たべるがいい、それが否なら外の菓子をやらう。」たゞ「イ、エモウ、どういたして、これでよろしうございます。」鳥「コレサ、其様に堅くして居ずといいわな、そして今夜チツト、手めへに聞きてえことがあるが、隠さずと正直にいつて聞かせや。」たゞ「エなんでございますか、どうしてあなたに、お隠し申すなんぞといふことは、少しもございません。」鳥「ナニ／＼左様でもあるめえ、大かた深く言ひ交した情人があるだらう。何所のだれだかそれをいつて聞かせな。」たゞ「オヤ／＼、何だかとぞんじましたら、若旦那がマアとんだことをおつしやいます。どういたして私が、そんなことがございますものか。寔に仕合がわるうございまして、幼年い節から、苦労ばかり致して居りましたのに、今年やう／＼十六歳になりますものヲ。」鳥「ナニ十五だといつて、十六だといつて、油断がなるものか。そして人並より容儀がいいから、だれでもたゞおくものか。それに手めへがやさしくツて、才発ときて居るものな。」トいひながらだん／＼にそばへちかよる。たゞ「ほんたうに、今まで少しでも、其様ないやらしいことはぞんじません。」鳥「それでも手めへを母人さんが、此方へおよこしなさる時、左様いつておよこしなさつたものヲ。」たゞ「嘘をお吐き遊ばしませ、御本家で何とおつしやいましたへ。」鳥「エなんだといつて、おれが見せへ

往つた時、母人さんがおッしやるには、どうもお民を此方へ置くと、色をしたがつてならないのに、寄るものもさはるものも、惚れたがつてならねえから、寮へでもやつて置かう。左様したら出入がないから、情人も出來まいと左様いつて、およこしなさつたものを。」たみ「すオ、、、、あんな譃をおつしやいます、どういたして私の様な賤しいものに、誰がかまひてがございますものか。」鳥「ナニねえことがあるものか。マア直においらが惚れたから、これが證據だ。サ今まで深くいひかはした、情人の名をいつたら、堪忍してやらうが、いはねえと無理に、おれが戀人にするがどうだ。」たみ「ほんたうに、其様なものは夢にも存じません。」鳥「いよ／＼なけれやア、おれと色になるか。そりやア否だらう、またなつては、言ひかはした人に濟むめえ。」たみ「アレマア、やつぱり左様思召しますか、貴君に左様思はれますくらゐなら、殺されましてもかまひません。」ト少し涙ぐむ。鳥雅はこれを見て、鳥「オヤ／＼泣くか、それほど否がるのに、無理にとはいはねえ。そして殺されても、情人のことをいはねえといふのに、聞きたがるも野暮なはなしだ。モウ／＼其様なことはいはねえから堪忍しや。」たみ「アレどういたしたらようございませう、左様まうしたのではございません、貴君のお疑ひがはれませんならば、死んでもよいと申したのでございます。」鳥「そんならば、實に情人もなくッて、疑ひもしねえければ、おいらの情人になるか。」たみ「イヽエ。」鳥「それ見たがいい、出たらめのいひわけば

かりいつてゐらア。」たゞ「ナニ左様ではございませんが、貴君のはじやうだんでございます、また實正ならば、私やア煩ひか何かいたします。」鳥「ナゼ煩ふといふのだ、外の男のいふことは聞きますまいといふ、願がけでもしたのか。」たゞ「アレ左様ではございません、貴君のお身をお案じ申して、煩ふと申すことでございます。」鳥「エヽよくいろ／＼に、逃げ口上ばかりいふぜ、いいかげんに氣をもませるな。」トいへば、お民は鳥雅の言葉、なか／＼座興といふにはあらず、信實その身に惚れたる樣子と、思へばうれしくはづかしく、それより後は身を恥ぢて、ろく／＼に返事も出來ず、たゞハイ／＼と口の内、顔に紅楓のちりそめて、耳には照りを紅葉の、まとはれ見たき蔦かづら、惚れた男の眼で見れば、何から何まで言分なく、恍惚子娘のとりまはし、郭の花も和歌町の、月も見かへる心なく、只此の少女にまどひ入る、秋の夕部の木下闇、菊月中の八日にて、鳥雅は雨戸をおしあけて、手水鉢にて手を洗へば、いつしかはれて小夜の月、物おもへとや戀衣に、露置きそふる庭の面、はるかに垣根を見越したれば、まだ秋ながらさむ風に、森の下行く狐火の、さも哀れにもの寂しければ、鳥「お民や。」たゞ「ハイ。」と縁側へ來るを、鳥雅は側へ立たせて、田甫の方へ指をさして、靜かなる聲、鳥「アレあれを見な。」トこはさうにいふ。たゞ「オヤ何でございますエ。」鳥「狐火がいくつもとんでいくわな。」たゞ「アヽこはい、ひよつとこちらへ來ると、わるうございますから、モウ早くおしめなさいまし

んかこ」鳥「左樣ヨ、こちらで見るのを知ると、直にこゝへ化しに來るから、靜かにしねえ。」たみ「アレ氣味のわるいことを、はやく〆めませう。」ト、雨戶へ手をかける、その脊中から手をまはして、鳥「コレサ俺が〆めるわな。」ト手に力を入れる。たみ「オ、せつない。」鳥「ソレ狐が來た。」たみ「アレ引。」ト、泣聲になつてふりはらひ、奥の方へ逃げこむ。鳥雅は笑ひながら戶を〆めて、座敷に來りしが、何か用ありさうに、鳥「そりやアいいが、大變なことが出來た。」たみ「なんでございますか。」鳥「エ急にはらがへつて來たが、何もおかずがあるめえの。」たみ「左樣でございます、宵のお客の節の、お肴がございますが、あれではわるうございませう。」鳥「左樣ヨ、魚類は氣がねえ、何ぞ淡薄としたものはあるめえかなう。モウ夜中だから、むさしやも平岩もはじまらねえス。」たみ「先刻久助どんが、寒竹の竹の子を、あなたへあげると申して、とつて參りましたが、やはらかさうでございますから、あれを煮て上げませうか。」鳥「ム、それは奇妙だ、世話でもそれを煮てくんな、何よりかいいものだ、何樣な料理通でも、こゝに住むものでなければ、今時分寒竹の竹の子を、喰ふことは知るめえ。寔におれが好物だ。」たみ「左樣ならば竹の子を、はやく煮てあげませう。」鳥「竹の子もいいが此の子もいい。」たみ「ア、レ、くすぐつたうございます。」鳥「はやく茶漬を給べさせねえか。」たみ「ハイ〳〵。」ト笑ひながら、いそいそして手ばしこく、膳をこしらへ竹の子を煮て、鳥雅に茶漬を喰はせる其の中も、衣類をよごす

まじとの心づかひ、見て居る烏雅は、ひとしほかはゆく思ふなるべし。

風月花情 春告鳥巻之二十了

# 風月花情 春告鳥 卷之三

江戸　爲永春水著

## 第五章

嬉しさを憂瀬にかへん今宵よりあふくま川を渡りそめつゝ、とは寒葉齋の秀逸にて、川によせるの戀歌なり。實にもうき世を嬉しさに、わするゝ今朝の朝日影、お民は雨戸の方をみやりて、しづかに枕をはづし起きにかゝる。鳥「なんだ起きるのか、まだはやいから、まアモウちつと寐て居るがいい。」たみ「ハイ、大そうにおそくなりました、久助一人で御臺所をしては、私がわるうございますから。」ト、牀を出るをおさへて、鳥「コレサマア寢てゐやヨ、しづかでもいいから、そして久助は、先刻神奈川まで使にやつたから、明日でなければ歸らねえ。」たみ「オヤ左樣でございますか、少しもぞんじませんか、暗い中にでございますかえ。」鳥「左樣ヨ、曉方に起してやつた。」たみ「さうでございますか、それでは今日は貴君が、他所へお出で遊ばすと、私一人になりますネ。」鳥「嬉しからう。」たみ「寂しくッ

て悲しうございます。」鳥「何一人手あへを置くものか、其のくれるならば久助を、遠くへ使にやりはしねえ。」トいはれてうれしく〳〵にっこりとわらひ 民「それでもまア起きまして、お朝御膳を上げまして、それからまた」鳥「お飯を給へて、それからまたとは何のことだ。」トことばとがめにこゝろづき、民「ハイ、それからまアお座敷や何かを片づけませう。」ト、いひ直して何とやら、うつりのわるき言の葉に、聞かれるければはづかしく、「ナニサマアおたばこの火を拵へませう。」ト、牀を脱け出る其の姿、寐しまに無理に著せられた、緋の紋縮緬の對丈じゆばん、それを寢卷に著たる形にて、枕元へ出でしうつくしさ、戰慄するほどなるはゆらしければ、鳥「はやく著類を著ねえか、寒くなるぜ、そして今何かをするうちは、今部のおれが寢まきや、その上に著るがいい。それを脱ぐと風をひくぜ、サアこゝにあらナ。」ト、寢牀の脇にありしをとつてやる。民「ハイ。」トとつて次へ立ち出で、寢まきと襦袢を脱いで、其の身の他所行の、衣類を出して著かへる。この衣類は鳥雅の母が情ふかく、お民にこしらへて與へしなり。上著は御納戸中形の太織、下著は藤鼠の冰梅の、中がた縮めんを回りへ付けし、繼ぎ〳〵の胴ぬき、紫中形の裏へ、板〆ちりめんの付いたる、半衿をかけし襦袢、袖口は淺葱の山まゆちりめんなり。帯は黒繻子へ緋鹿子の割を入れて、實に人品よき娘風、かはゆらしきこしらへ。昨夜著せたる唄女すがたとは、またた品かはりて、をさなめくも憎からず。民「オヤうれしい、久助どんが何も角もしてから、お使に往

つたさうだ。」トひとりごとをいひながら、火鉢のすがれかゝるにすみをつぎたし、朝めしのしたくをする。折から世間は、巳の刻頃のけしきと見えて、はや鄰家には淨瑠璃をさらふ娘のこゑ、

〽夕されば、汐風こして陸奥の、合野さへ山さへ色づきて、合戀に時雨の名所も、合たま玉川のあふせさへ、しのぶもぢずり誰ゆゑに、合みだれ心の〽狂ふらん。合〽しどけなりよしふりもよく、ふりかたげたる合笹の葉の、合一夜のちぎりゆかしやと、合およばぬねがひ求塚、合かの合水鳥のかけことば、それもとゞかでくちはてし、合その錦木のかずならで、これぞ千鳥の物ぐるひ。

たみ「オヤ〳〵、つひぞさらはない淨るりをさらふなう、あれはたしか六玉川の内の、千鳥の玉川とかいふのだが、何處でも稽古にするのを聞かないのに、どうして語るかしらん。」

上るり〽ア、戀せまい迷ふまい。

たゝ「どうして迷はずに居られよう、若旦那のお言ひのが始終かはらずば、どんなにマァ嬉しからう、とはいふものの下女はしたの、身ぶんどうぜんな身で、とてもおよばないことだらうが、此の間も噂に聞いた、婦多川のお濱さんとやらもあるし、また此の節先でも血みちをあけて居る、玉屋のおいらんのことも聞いたし、歳のいかない私ぢやア、おもしろくないから、今に直に捨てられるだらうかしらん。」ト、こゝろに餘る獨言、いつの間にかは牀を出て、後に伺ふ彼の鳥雅、お民の脊後より抱きす

くめて、鳥「此様にかはいゝから見捨てはしねへが、まん一わかれるやうなことがあつたらどうするへ
たミ「ア、恂りいたしました。」ト、言ひながら莞爾として、振り向く顔、ちやうど鳥雅の顔と押し合は
す。そも／＼お民が肌目細かなること、白羽二重の如く、すべ／＼せし生質なるに、今うがひ手水を
つかひ、仙女香をすりこみしゆゑ、龍脳の匂ひ梅花のかをるがごとし。殊に口元かはゆらしく、只二
三枚笑ふ節に見ゆる白歯さへ、丁子車のはみがきにてみがき上げ、唇は紅の色より赤く、近まさり
してうるはしく、さて鳥雅は爪立ちながらの戯れゆゑ、お民を抱へし儘仰向に倒れかゝれば、お民は
いと細き手にて、胸を押へし鳥雅の手をおさへながら、同じく仰向に倒れかゝり、たミ「アレどういた
さう、あぶなうございますヨ、何所ぞおいためなされはなさいませんか。」鳥「アイタ、、、たミ「ア
ヤどうかなさいましたか。」ト、周章へて脇へ下りにかゝるを、鳥雅が押へてすこしもはなさず。鳥「ア
いたい／＼、寔にひどい子だなう。す、引いてえ／＼。」たミ「オホ、、、それでもあなたがお放し
なさらないから、動かれませんものヲ。」ト、横に起きかへるはずみに、○○○をあらはにして、恥か
しがるを、鳥雅は猶もはなさず、狂ふ折しも、臺所へ案内する人音、「ヘイ御免なさいまし、ヘイヤト
お頼み申します。」たミ「ハイ／＼引。」鳥「オヤだれか來たのか。」たミ「ハイたしか、お臺所でございま
す。」ト、いひながら驅け出して行き、何か勝手にてあいさつをなし、それより奥へ來り、たミ「お客が

ございます。」鳥「だれだ。」たみ「アノウ櫻川由次郎でございます、ちよいと御機嫌うかゞひに上りました、トおつしやいます。」鳥「オヤさうか。」たみ「何と申しませう。」鳥「早くこちらへ通しな、いつもだと戀しいが、今日は少しありがた迷惑だ、しかし外のものと違つて、延刻もこじつけちやァ居ねえ。殊に歳のいかねえやうではねえ、目先がよく見えるから、手めへの居るのを見ると、直に歸るからいい。」たみ「オヤ私が。」トいひかけしがこゝろづき、たみ「私が居ると、なぜ直にお歸んなさいますねえ。」鳥「マァ其樣なことをいつて居ねえで、はやく此方へお出でなせえと、左樣いはねえか。」たみ「ハイ〱。」ト立つて行く。程なく來る櫻川由次郎、和歌町第一の流行ッ子、お客は更なり唄女衆まで、ひいきの強き色男、されどいやみはさらになく、あどけないのが株となり、かはいがらるゝ愛想もの、由「へイ此間は大きに御不沙汰申しました。」鳥「ハイ此間は、おとほ〱しかつたなう。」由「へイ私よりかお前さんが、此間は寔にお見かぎりでございます。もつとも例のが、お氣になるからでもございませうが、あんまりあちらへお見えなさらねえから、和十と私と、此間中からお尋ね申しに、あがるつもりでございましたけれど、いつもの通り和十は、おやしき方の旦那で、出てばかり居りますから。」トいふ所へお民は、茶臺に茶を持ち來り、たみ「ハイお茶をめし上りまし。」トていねいにいふ。由「へイ〱、これは憚りで。」ト頂いて取る。たみ「若旦那、御膳はどういたしませう。」鳥「エ左樣サノ、由さんもまだだらう、

何ぞ左樣いつてやらう。」典「すヤ最うお晝でございますかネ。」典「ナニつまらねえ朝めしだ。」ト二「ま、、、もうお晝かも知れませんヨ。」島「大變に寐たよなう。」島「此間は男衆も、女中もなしでござ いますかえ。」島「左樣サ、此の節誰もおかねえ、この孃とおいらばかりだ。」典「エヽヽ」ト、なさけな顏をして手を組み、エヘヽト咳ばらひをして、溜息をつき、「ア、引ひよんな場所へ出て、手痛く仰せを承るものだ。」トいふ時、お民は次の間へ立つて行く。由次郎は跡を見送り、典「旦那もし、和歌師をお見かぎりも、むりはごぜえませんが、新孝に昨日うけたまはつたら、角のも大そうに、氣をもおさうでごぜえますか、どうもモシおめへさんも、うるせえねえ。チツト補ひでもお上になせへまし、實正に御病氣でも出るといけませんぜ。」島「アハヽヽヽ、おめへぢやァあるめえし、親父は少しその方が好物だッけ。おめへは女の方でゆるさねえから、用心しねえ。」トいふ折からに、蓮花寺の鐘午刻をつげ、商人の聲、「豆腐イ引。」かくて由次郎は、しばらく世事ばなしをして歸りけり。

第六章

たミ「私やァ、始めて見ましたが、人品のよいお方でございますネ。あれでも可笑しい事がございますかネエ。」島「モウ由次郎に惚れたのか、しかし太夫の中じやァ、一ばん憎氣のねえ男サ。」たミ「どう致して、私なんぞが惚れましたと申して、おだでございます。婦多川には、誠に好風な女ばかり

居ると申すことではございませんか。」鳥「左樣サ、それだけれども其の土地に居てみると、また種々の穴が知れて、他から往つて覗いて來る樣なわけでもねえのサ。只なりのこしらへや、貌のつくりが他より清麗として、いいといふ分のこと。女は諸方から集まつて居るのだから、別に違ひもしないのサ。」たみ「それでも貴君ァ、日本國中に、お濱の樣ないい女はないとおつしやつたと、御本店の乳母どんが左樣申しました。」鳥「左樣ョ、手めへがなければ左樣だけれど、モウ／＼お民といふ娘が出來たやァ、他は錦繪の女を見るも否だァ。」たみ「譃お吐き遊ばしませ、お濱さんとやらのかはりは、薄雲さんとかが、誠に貴君を戀ひ慕つて、お出でだと申すではございませんか。」鳥「モウ／＼何といつて逃げても、はなしは仕ねえから、左樣おもふがいい、おれがやうな者に、惚れられたのが手めへの因果だ。」といひながら、右の方の袖をもちあげて、鳥「コウ脊中をかいてくんな、コレサ袖から手を入れてョ。」たみ「ハイ。」ト左の手を、鳥雅の脊中へまはして、ならぶ姿、看るものあらば羨ましかるべし。此の時庭の垣根越しに、誰か知らねど、川柳點を口ずさむものあり。

　其所かいてとはいやらしい夫婦中

ト、いふを聞くより鳥雅とお民、かかる姿を覗いて看る人ありと思へば、びッくりしてちよいと飛び退き、二人の中へ、關にすゑたる筥火鉢、他目つくろふ戀の宿には、よくある方の所爲なるべし。ま

たも外にて以前の聲、ほれさせるうしほかけんの料理人ッ。八百屋「へイ今日はよろしう、ふきのたうに柚、白魚干でございます、その外は蓮に大根、鹽煎餅に大把附木。」鳥「何の事だ八百屋ださうだ。」たみ「オホヽヽヽ、あの八百屋は、いつでも本を見ながら歩きますョ。」鳥「ハヽアそれでわかつた、川柳點にこりかたまつてゐると見える。」八百や「へイ御新造さん、何ぞお買ひなさつてくださいまし。」鳥「コレ御新造さん、返事をしねへか。」トお民の頬の所を、ちよいと突いて笑ふ。たみ「私の事だやすござゐませんか。」ト、口にはいへど嬉しい顔色、莞爾として縁側の障子を明け、たみ「八百屋さん玉子はないかえ。」八百や「眞にお約束申しましたッけねえ、今日はしかも大飛びの、いい玉子がございます。」たみ「左様かえ、それおやア其の中でいいのを選つて、二百文だけおくれ。」八百や「ハイ〳〵、それはありがたうぞんじます。」ト いひながらかきねをまはりて勝手口にいたり、玉子をうりに出てゆく。たみ「オヤ〳〵、また雨が降つてきさんじよした。」鳥「左様か、それは有りがてえ。」たみ「なぜでございます、快晴の方がよいではございませんか。」鳥「ふだんは日和がいいが、今日はゆきでも降ればいいとおもつてゐる。」たみ「なぜでございますエ。」鳥「他人の來るのがうるせえからョ。」ト、いひつゝ立つて勝手に至れば、木戸より驅け込む百姓四五人、百「イヤア丁度いい、旦那がお宅だ。」ト、いはれてうんざりせしが、顔に見せず、鳥「オヤ〳〵、何だ、お揃ひで、傘の御用かね、マアチツトお休みなせえ、ドレ傘をば出しませう。」ト、奥へ往きに

かゝれば、「イエ〳〵、傘は宿が近いから入りませんが、今日は少し御相談申したいことがあつて參じました。」トいはれて、鳥雅はいよ〳〵迷惑、鳥「左樣でございますか、それは折角たま〳〵のお出でだが、今日はあいにく客がございますから、何の御用か明日ではわるうございませうか。」▲「ヘイ〳〵、ナニ左樣ならばまた上りませう。」ト出でにかゝれば、鳥「モシ傘をお持ちなさい。」▲「ヘイ左樣ならば、どうぞわるいのを、おかしなすつて下さいましと、お言葉にあまえて申しませう、アハハ、、、。」ト、をかしくもないに笑ひ居る。鳥雅は自身に傘を二三本持ち出し、鳥「どれも番傘だからよくはございません。」▲「イエ〳〵、どう致しましてこれはモウ澤山に、どうご左樣なら少しの中。」ト、いひつゝ傘をおし開きて、路のぬからぬ其の中にとや、匇々にして立ち出づる。折から又も人音して、木戸口より入り來る變仁先生、迎島にて人の知る、長座異變の半狂人、變「ヘイ今日は雨天で、お寂しからうと存じて、お咄に參じました。」トいはれて、鳥雅は泣き出しさうになりしが、爲方なしに、鳥「イヤこれはマア、一ぷくおあがんなさいまし、せつかくお出でくださつたが、今日は此の降りますのに、只今から增見さまの弟子の方に、歌の會がございまして、下谷邊まで出かけますから。」變「イヤそれは幸ひなことでございます、御同道申して、お近付になつて、お歌をチツトお貰ひ申しませう。」トいふを聞くより、お民は中の間から、たみ「貴君ア直にはお出でなされますまい、東

連の御見物のことで、御相談がいたしたうございますから、是非今日御たち寄りを、お願ひ申しますと、先刻お使ひが參つてをります。」鳥「オヤ左樣か、それぢやァ廻つて往かざァなるめえ。」ト雙仁に向つて、鳥「お聞きなさる通りでございますから、今日はどうも。」雙「ハァ左樣かナ、それではまた此の間に。」ト、不承々々に歸りゆく。鳥雅はホツト溜息を吐き、鳥「ア、引おそろしい日だ、種々な邪魔ッ返子が來やァがる、恐ろしいことだ。はやく木戸を締めて置かう、また何ぞ來るといけねえ。」ト、ナウお驅け出して木戸をしめ、鳥「大そうに大降りになつて來た、これぢやァ最う誰も來やァしめえ、ナウお民。」たみ「ハイ左樣でございます。」鳥「左樣でございますぢやァねえ、いろ〳〵なものが來て、おれが氣をもむのに、平氣で奥へ引籠んで居ることもねえ。」たみ「オヤそれでもおまへさんが、お臺所へお出でなさると、人が參つたのだから、仕方がございませんものヲ。」ト、すこしづゝ打解けて、あまえたる物言ひが雜ると知るべし。鳥「サア〳〵、是れから何ぞ美味いものでも、こしらへて給べよう。それやァいいが能い茶のとつたのがあるかノ。」たみ「ハイ昨日豐島町の伊勢吉から、清風を一斤持たしてよこしました。」鳥「ウム左樣か、それぢやァまづ茶はよしといふものだ、外のものは揃つて居るか知らん。」たみ「お醬油も昨心口を付けましたのに、御酒もみりんも取りたてでございます。」鳥「それではまづ、買物に人を頼まずともいいの。夫婦かけむかひはいいけれども、何ぞこしらへて喰はうと思ふ

と、世話だよなう、ナウおかみさん。」ト笑ひながらいへば、お民は嬉しさ限りなけれど、賤しき身ぞとかへり看る、その身に恥ぢて裏なくは、かたらひかねし娘氣に、顔赤らめて返事さへ、出來ぬはいとゞかはゆけれ。鳥「オイコウ、内室さんといはれちやァ否か、エヽ。」たみ「それでも勿體なくッて、何とも申されませんものヲ。」鳥「其様に高くとまらねえでもいいぢやァねえか、おいらの様なわりい男の、内儀さんといはれちやァわりいか。おれも自惚で、おめへのばちがあたると勿體ねえから、左様いふめえ。」トわざとすねていふ。たみ「アレ左様ではございません、私にあなたの罰が、あたるだらうと申したのでございます。」ト、立つて縁側の方へゆきしが、手を拭きながら來て、たみ「お湯が沸きましたから、お這入りなさいませんか。」鳥「オヤ〳〵何時の間に焚いたのだ。」たみ「ナニ水は、昨日久助が汲み込んで置きましたを、最う少し先刻、お火鉢の火があんまり澤山おこりましたから、鐵砲へ入れて自然に沸きましたヨ。」鳥「左様か、そりやァ奇妙だ、よく氣が付いた、それならば一風呂這入らう。」たみ「其の中お茶も出來ます。」鳥「玉子は燒くよりか、いり付けながら喰ふ方がいいヨ。」たみ「ハイ左様いたしませう。」ト浴衣を出し、ゆどのへ持つて行く。それより鳥雅は居風呂へ這入りて後、お民と倶膳にて食事をなし、其の中のよきこと筆にはしるしがたし、看官よろしく察してよみ給へ。鳥「お民や、此の浴衣をば手めへのにするから、湯から上つたらば、それで化粧をするがいいぜ、おいらは絞

りの浴衣を著るから。」ト、湯殿へまで來て世話をやく。たみ「ハイありがたうぞんじます。」鳥「また遠慮しねえで、直に著るがいいぜ。」たみ「ハイ著ますヨ。」鳥「背中を流して遣らうか。」たみ「それこそばちがあたりますヨ、早くそちらへいらしつてくださいまし。」ト、はづかしがる雪の肌を、湯の氣にて櫻色なすうるはしさ、粂の仙人ならねども、鳥雅は氣をもうしなふばかり、やう／＼座しきの方へ行く。おたみはやがて風呂より上り、さも手ばしこく化粧し、浴衣のまゝにて部屋の方へ、ゆかんとするを見送る鳥雅、そも／＼お民が風情をいはば、花も柳もたとへるに、たらぬ美麗の素顔なるを、湯より上りて以前より、少し濃くせし白粉も、彼の仙女香の別製にて、匂ひゆかしき蘭じやのかをり、衿白粉も一際濃く、あごまで別に顔よりは、厚きが流行るか口紅も、野暮に付けたる笹色は、また格別に目にも立つ、白地の浴衣もぱち／＼と、京花色染の梶の葉にて、肌の雪と白き浴衣の、間にちらつく緋縮緬の、湯もじを蹴出すうつくしさ、花美が似合ひし娘風、著かへさせるもをしきほどなり。

近年女中の化粧、はなはだ麁末になりて、白粉を付くるを、そしり笑ふやからおほし。それ化粧は其の身をつくろふのみにはあらず、親夫をことほぐ爲の業にして、女中たしなみの第一なり。殊に貌かたちの作りにて、一きは容美も美しく見ゆるぞかし。壯年の肌うるはしきを自慢して、素顔などにて居るは、かならず不吉のことなり。たとひ化粧を濃くして笑ふ人ありとも、それに

遠慮することなかれ。その人々は下司を好みて、誠の娘にあらずと知るべし。

鳥「アイタ、、、、〳〵。」たみ「オヤどうかなさいましたか。」ト、浴衣の姿で驅け寄る。鳥「ア、いてえいてえ、急に腹がいたくなつて來た、そして何だか、ぞく〳〵寒氣がしてならねえ、その布團をかしな、アイヤ〳〵其所へゆかう。」トよろ〳〵しながら、三疊の小ざしきへはひる。此所には昨夜の牀がまだ疊まずにあり、鳥雅は牀の上に倒るれば、お民は案じて苦勞さうに、夜著をかけながら、たみ「おこまりなさつたものでございますネエ。お醫者さまを呼びに參りませうか、ホンニお丸藥がございましたッけ。」ト立ちにかゝれば、鳥雅は引きとめて莞爾笑ふ。たみ「オヤお腹のいたいのが、をかしうございますかえ。」鳥「左樣ヨ、そして手めへ寒からう。」たみ「ア、レマアオホ、、、。」鳥「かはいらしい肌肉だなう。」このときしやうじへあめがはら〳〵とかゝる。たみ「オヤ鳥影がさしましたヨ。」鳥「エ、左樣か、また客でも來ねえけりやアいいなう。」トいふ折節、またもや近所にきこゆる淨るり、

〽實に樂天がからうたに、つらねし秋の名にしおふ、三五夜中新月の、〽中に餅つく玉兎、餅ぢやござらぬ望月の月のかげかつ　〽飛び團子　〽やれもさうやれさてな、〽うすと杵とは女夫でござる、〽やれもさ〳〵、合〽夜がな夜一夜お、やれ、合〽とゝんが上から月夜にそこだぞ。下略

たみ「オホ、、、赤子をかえ。」鳥「手めへに似たら、さぞかはいいのが出來にだらう。」

浄るり へやれこりやよいこの團子ができたぞ　へおゝやれ、へやれさて、へあれはさて、へこれはさて、へどつこいさてな、へよいと〳〵〳〵よいとなとな、へこれはさておき。

トン〳〵〳〵ト、かはる調子を幸ひに、作者も濡場の卷をかへて、これから口舌と愁歎場を、一篇にあらはし三冊出來仕り候。

風月花情 春告鳥卷之三了

# 風月花情 春告鳥二編之序

春も稍景色調ふ月と梅、さて黄鳥の音もあらばと、文このむなる溪の扉の、主人の求めに隨ひて、愛でたく開く惠方の門、鴬賞氣の一飄案も、まだ花寒き雪中の、梅が枝うたふ片言は、くちばし黄なる例の筆癖、されど年齢老衰まで、兒女童幼に愛翫せられ、贔屓を繪入中形本の、作に連業の得意をば、外さで綴る人情の、的へ當りのゐるの年、支干へ向ひし末の極月に、冬籠りせし一夜の急作、繁昌時節は寛々と、春告鳥の養ひは、摺餌にあらぬ摺本仕立、畫工も彫刻も板元の、丹誠愛に顯はれて、花の蕾と春告鳥に、冰も解けて和ぎし、初日の影や看官の、おかげで今年も新著の、發行るゐ巳午の閒から、萬よしとは面白き、笑顔ぞ貸本問屋衆の、喜悦かさなる二編三編、おひ／＼口のかゝるが中に、花鳥の相對流行りなば、僞りならぬ人の爲、また爲永の愛敬の、もとゐるとなりて儘倖も得ん、和合の人情、戀の手練の快悒が、當つて碎けし好意な世に、泣いて嬉しき鶯の、音色もやさしき口說の新案、嗚呼我ながら人情本は、その極意を得たるかな、其の主要を得たるかなと、自讃をしるしてはしかきに備ふ。

江戸人情本作者の元祖

狂訓亭主人

爲永春水誌

酉ノ春出版

風月花情 春告鳥 巻之四

江戸 爲永春水 著

第七章

節は夾鐘の初旬なりけん、郭は殊に閑麗にて、跡著の衣裳なほ花やかなり。加田多満のおいらん薄雲の座敷には、此の程少し通ひ路の、遠ざかりたる彼の鳥雅、口舌といふにもあらざれど、戀しと思ふ女の情には、愚癡の出るも憎からず、實に男女の眞情は、契情の身のうへに在り、素人の及ばぬ戀の極祕は、郭通ひのよく知る所ならんか。折節聞ゆる表座敷の淨るり、

へそら定めなき花ぐもり、くらき此の身のくり事は、戀に心を奪はれて、御家の大事と聞いた時、重きかうへの罪科と、かこち涙に目もうるむ。下略

薄 誠に背をそらせなんして、漸と來てくれさしッたのに、何たる按じられる、ぬしの身のうへさますねえ。くどくもぬしにいふ通り、いッそお心が、替り切りになつてしまつて、たとひどんなに氣を

もんでも、さわいでおれを呼びたがつても、其方へは往かれないから、モウさつぱりとおれが事は、あきらめると言つて仕まつてくれさツしやれば、また私も覺悟の仕様もありますのに、ぬしはよく私の言ふことを茶にばかりして居さつしやるから、誠にモウじれつたうざますわ。」鳥雅「ナニ茶にして居るものか、實正の事をいふのだァナ。いつそ其方から、さつぱりといふがいゝわな。ぬしの家内が首尾で見りやァ、どうも友輩の前へ外聞がわるいから、呼び申されねえと、おめへの方から、すツかりといふ方がいゝわな。」うす「オヤもしえ、それぢやァ主は、私の心を、轉變う思つてお出でなんすのかえ、誠に悔しう御座つすねえ、私に限つて轉變な心ぢやァ在りませんョ。實にぬしの家内の首尾がわるくあらッしやるのなら、何程ぬしの様なおほ様な人だつても、少許は苦勞にもさつしやるだらうのに、何だかぬしはそは／＼して、どうもしんみりとさつしやらねえやうで、浮いて居さつしやるし、また實正に首尾のわるいのなら、しんきにおたのしみをこしらへなんす事も、おあんなんすまいかと思ひイす。左様して私のはうへは是れ限りで、來さつしやらねえ料簡であらッしやると、私やァ先刻から推量して居ますョ。」ト少し聲をくもらせ、ホツト溜息を吐く。「ほんたうに女郎衆ほど、儚いかはいさうなものはありませんわ。」ト、しみ／＼しくいふ詞、そなはらずしてあどけなきは、殊更に愛すべし。鳥「自分の口から、かはいさうだも可笑しい。」トわらひながら、「何がかはいさうだらう、一年中男

を自由に取り扱つて、思入迷はして、心の中で、阿房がよく來るもんだなどと思つて、あやなしゝて居て、それがかはいさうなのか。」うす「ぬしの樣な心持に、なつて見たうござますわ、さぞ氣樂で宜うさませう。實正に同じ人に惚れながらも、素人ならば先が謔でも、實だと思はれるし、女郎衆だと死ぬほど惚れても、謔だと思つて茶にして居られるし、そしてどんなと逢ひたいト思ふときは、何樣な事をしても、會ひに往つて顏を見るばかりでも、此方からも往かれるから、苦勞しながら嬉しからうけれど、女郎衆といふものは、誠にじれつてえくやしいものでございますわ。」トさもくやしさうに言つてなく、鳥雅もこゝろのうちにおもふやう、お濱が行方といひ、今となつてはお民が眞實も捨てられず、又この薄雲が情は、さすがに苦界に沉みしだけ、愚癡も利口な言ひまはし、何所やらあどなき心の眞實、ほにあらはれてかはゆさが、身には餘れどさすがは大人、やはらかなる中に少しうゝ手づよき言葉、「何だか先刻から、おめへぐす〳〵言つて、泣いたり笑つたりして、おいらにやアさつはりわけがわからねえ。勿論おいらも久しく來ねえから、來たいとは思つて居たけれど、どうも少々出かねる事が有つて、出ずに居たが、是非用があるから、來てくれろといふ文をよこして、おいらが讀んでも勿體ねえやうな、事が書いてあつて、氣の毒だから來て見れば、何だか不調子えこと許り言つて、泣いたり何かして居て、おれが身のうへの苦勞ばなしは、承知けもしねえで、自分の言ひてえ事ばかりいつて居て、どうも仕樣がねえ、歸るとい

ふも野暮氣て居るし、また好漢がつて我慢するも氣の毒だ。誰ぞ呼びにやつて一口呑み直さう、其の間にやァ夜が明けるだらうァ、ァ引。」トあくびをする。うす「オヤ鳥雅さん、堪忍しておくんなまし、ツイ私が愚癡を言ひ出して、ぬしに腹を立たせ申して、誠にどうも言解がありません。酒を上らッしやるなら、食物も澤山ありますし、火もよウく發つてありませうから、呑みなんすは宜うざますが、マァうるさくとも堪忍して、私の言ふ事をちよつと聞いておくんなましえ。今ぬしのいはッしやる通り、御家内の首尾のわるいとの事は、實正のわけでありますかえ、エもしえ鳥雅さんえ、マァお聞きなまし、私やァ實にお前樣の咄を、罪なやうざますが、虚言だとばッかり思つて、聞いて居りましたものヲ。なぜならマァお聞きなましョ、私やァ只ぬしに、おめに懸りたい、どうぞせめて最う一度お呼び申したいと、しみ〳〵ぬしがなつかしくッて、座しきの者にも（ばんしん新造などをさしていふ言葉なり）氣の毒なくらゐ、鬱いでばッかり居たンざますわ。そしてやう〳〵のことで、樣子を聞いて貰ふと、何か主やァ御内室さんでも、もたしッた樣子だといふこと。そりやァモウ私が何の樣に思つても、氣をもんでも、主が最うかはいい人を、おかみさんにでも、さしッちやァ、とても來てくれさッしやることはあるめえからと思つて、急度最う多慾な事を言つて、後を是非來てくんなましとは言ふまいから、どうぞト（すこしなみだごゑにて、）鳥雅さんの顔の、見納めをさしておくんなましと、一向頼んでモウ〳〵、やう〳〵

の事で來てくれさしッたのも、後を招び申すめえと申して上げたから、まづ安堵して否な所へ來てくれさしッたらうのに、まさか左樣もいはッしやられねえから、内の首尾がわりいの、ヤレ私の仕うちがわりいのと、私の行きとゞかねえのを、今さら知らしつた樣に言つて、仕うちで愛想をつかして、彌是れ限りにして了はつしやる氣で、あらッしやるのだらうと思ふと、しみ〴〵悔しうざますわ。」に

ト なきながらいふ。鳥雅はさきほどよりだまつて聞いてゐたりしが、たばこをのみさして、 鳥「よく先刻から、息もつかずにせつなかァねえか、ドレ息繼に一ぷく付けてやらうの。」ト いひながらたばこをつけてやる。 薄雲はふしぎさうに、鳥雅の顔を見て小聲に、「おありがたう。」ト とつてのむ。 鳥「コレサおめへ、今おいらが來るのが、否なら否だと白地で言つてくれろ、左樣すれば覺悟をすると言つたが、今どき下手な作者の小本のやうに、鏡臺の引出から剃刀を出して、ひねくりまはしたのでも、餘りあたらしくもあるめえが、覺悟と言つてどうするのだ、忍びがへしを引つぱづすといふ譯にもいくめえ。」 うす「そりやァぬしの言はッしやる通り、今時其樣なことをするものもありますめえが。」ト いよ〱なみだにはなをつまらせ、「しかしあの素人のときならば、そりやァもう悔しいと思ひつめて、死んで仕舞つてかはいさうなことをしたと、思はれるのをたのしみにもしませうけれど、苦がいの中に居るだけ、さういふ事も出來イせんから、もし是れ限りでぬしに合はれないと、最う客衆にも何も出ねえで、お飯も給べず湯へもはひらず、髪も結はずに引籠んでばかり居て、そして内所で呵

られたら、居つてゐても年季中、
　昔はおいらんに罪ある時節は、内所へ居らせて置きしとぞ。
他の客衆に出ず、化粧もしないで、此の儘でぬしに別れたら、此の姿をぬしに緣の形見にして、年季のあけるまでこがれて死んだら、物怪の幸ひと心を定めてくらして居ますわ。」ト　めにもつなみだはらはらと、思ひ入りたるこころのまこと、たわいもなきことばのうちに、しぜんとしられてあはれなり。　鳥「不調子え事ばかり言つて、泣いて居る事もねえ、そしておれが女房を持つたの、お樂しみが出來たのと、少しもわからねえ。だれが其樣な事を言つたのだえ、エ、。」　うす「誰が言つてもようざますわ、たとひぬしが情人が出來さしッたとッて、おかみさんをもたしッたッて、私が及びもねえことを、やかましく申しィすといふわけは有りませんから、それはどうでも宜うざますが、どうぞ一年に一度でも、相かはらずぬしに逢ひたいとばッかり、心の願ひざますから、どうぞ願ひの叶ふやうに、してくれさつしやればいい。お祖師さんや金毘羅さんや、左樣して穴の稻荷さんも、何だか憎くなりましたわ、じれッてえ。」ト　いへば鳥雅は笑ひながらまくらを寄せ、　鳥「おいらもじれつてえ。」　うす「ア、レサ。」
　淚にぬれし枕の紙を、不便と氣のつく鳥雅の才智、薄雲の枕を引つぱづして、その身の枕と取りかへてやり、言葉數をいはずして、手當に情をふくみ、すべて女をいたはる鳥雅の艶姿、元來し

たふ薄雲には、千萬無量のうれしさなるべし。その情態は、拙き筆につゞることあたはず、風流の好漢閨房の歡會は、よろしく看察に任するのみ。

さてしばらくしづかなる薄雲の座敷の外へ、廊下をばた〳〵かけて來る、内所育の新造お袖、障子をしづかにすこし明けて、かはゆらしく小聲、そで「おゆるしなまし。」うす「アイどなたざます、お袖さんかえ。」そで「アイ私ざます、參つても宜うざますかえ。」うす「ア、ようざますとも、お這入んなまし。」そで「アイ。」ト、かけ入りて屛風を引きあけ、そで「鳥さんはえ。」うす「アイ寐て。」鳥「居なませんヨウ。」ト大きなこゑをする、そで「オヤびつくりしましたわ、憎らしい。」

このお袖は、内所育新造の中にても、いたつてうつくしく、殊に發明にてまたあどけなく、おいらん中に睦ましくして元氣よく、さればとて浮薄なる性ならず、實情ふかくかはゆらし。

## 第八章

さてもお袖は、鳥雅の枕もとへさしよりて、そで「先から、しらぬふりをして居なましたかえ、私やア私と思つて、美味いものをもつて來てあげ申したに。」鳥「オヤ左樣か、そりやアありがてえ、サアくんな。」ト手を出す。そで「アレぬしやアずるいヨ、まだ出しもしないのに。」鳥「おめへが出さねえから、此方から手を出すのだ、サアマア見せなな。」うす「お袖さん何ざますえ。」そで「アイサア、マアお

まはんにあげ申すのはこれ、それから鳥雅さんにあげ申すのは、これざますョ。」ト、兩方の手に持つて居る、紙につゝみしものを出す。「ドレ〳〵。」ト、とつて中をあけて見て、「こりやァびつくり、ずッとよしだ。ずつとよしといふことばちかごろもはやるなり。これぢやァ茶を呑みてえノ。」うす「ドレぬしのをおみせなんしョ。」鳥「おいらのばかり見たがらずと、おめへのを見せな。」うす「私のはこれざます。」ト出しさうにする。そで「アレサ薄雲さん、よしなましョ、ぬしやァずるうざますから、油斷がなりませんわ。」鳥「ナニ〳〵おいらんが、おいらんがずるくッていけねえョ。」そで「うそをおつきなまし、ぬしやァどうもうそッつきで、ずるうざます。此間來さしつた節、あれほど私が極めてあげ申したのに、やつぱり薄雲さんに苦勞をさせさつしやるから、虚言吐きざますョ。」鳥「ナニ薄雲、なにしに苦勞するものか、おめへが第一うそツつきだァ。そりやァいゝが貰つたものを給べようか。」そで「お上んなまし、今お茶をもつて來て上げまうしいすから。」鳥「また譃を吐かうと思つて、今時分茶があるものか。」そで「何譃をつきますものか、今もつて來て上げ申しいすョ、極上々引お煮花がありますョ。」うす「オヤ、それぢやァぬしやァ、今夜ァ吉兵衛さんざますネ。」そで「アイ、なぜざますえ。」うす「それでも今時分、お茶があると言ひなますからサ。」そで「アノサ、毎度の通り子刻過ぎから起きて、お茶を煮てお菓子をたべたり何かして、寅刻をうつとお歸んなますわ。ドレお茶を取つて來てあげ申さう、その中ぬしやァ、

小川にでも行つて來て、うがひをして手を洗つて待つて居なまし、ぶしやうざますヨウ引。」ト笑ひながら出て行く。うす「おたがひざますヨウ。」ト わらつてゐる。何ゆゑにかくいふや、いまだことばゝたらぬとしるべし。 鳥「吉兵衛さんといふのは色客か。」うす「ナアニ老父樣ざますわ、誠に氣のいい、戯言ばつかり言つて居る能い人ざますヨ、店衆ざますから、寅刻を告つとお歸んなますから、誠に樂な客衆ざますわ。」鳥「あの子は實のありさうな子だノ。」うす「アヽ誠に深切で、私の事でも倶に苦勞してくれますわ、左樣いつてまたぬしやァ惚れさしッちやァ否ざますヨ。」鳥「ナニつまらねえ。」ト いふうち、おそではかた手にどびんをさげ、かた手にふたものをもつてくる。 そで「サァお茶をもつて來ましたヨ、そしてまたおいしいものをもつて來ましたわ。」ト まくらもとへ何やらおきて、 そで「サァ起きなましヨ、ずるうざますねえ。」鳥「今おきる所だが、マァ一杯その湯呑へついでおくれな。」ト、いひながら、やらくとおきかへりて、かみにつゝみてありし天門冬とぶしかんの、さとうづけをつまみだし、 鳥「こいつやァ奇妙だ、おめへのは何だ。」うす「私のはやうかんざますヨ。」 そで「サァお茶をつぎましたヨ。」 鳥「オツト有りがたい。」ト いひながらちやをひとくちのみて、 鳥「アヽ能い茶だぞ、夜中に茶を呑むと、どうも能い。」鳥雅一人、こゝろのうちに思ふがくやおちをいふは、これお民に夜中茶をこしらへさせたることなり。 うす「何ざますえ。」鳥「能い茶だと言ふことヨ、ドレお菓子を一ツ。」そで「アレぬしやアきたねえ、其の手でかえ。」ト これよりまた、たがひにきたないくといふわらひごゑするが、何ゆゑかしらず。 折からひな鶴の座敷と思はれて、女の子の淨瑠璃「ヘッイ染みやすき郭の水、へもしおいらんえ、おいらんかこうと許りで、跡先は戀のくらやみ、辻

行燈のかげで、一夜さしやんねかし、へ格子の元へも幾度か、あそばれるのは初めから、心でしようち仕ながらも、もしやと思ふこけみれん、晝のかせぎもよはの空、鼻のさきなるほゝかぶり、吹けば飛ぶよな玉やでも。下界

うす「オヤ〱、あの聲はまだ根つから、歳のいかねえ子の聲ざますネ。」そで「ア、あれは、八歳許りの男の子でありますわ。」うす「左樣ざますか。」そで「ひな鶴さんの座しきざます、いつもの延津賀さんが、弟子を四五人つれて來て、かたらせるのざますわ。」うす「オヤ左樣ざますか、能くかたるねえ。」そで「アイサ、延津賀さんの弟子は、不殘よく語りますわ、其のかはりモウ〱、稽古は意地のわりいやうにやかましくツて、子供が誠にこはがりますわ。」うす「オヤ、實正は何のお師匠さんでも、やかましいのが弟子の爲ざますとサ。」鳥「訓へて嚴ならざるは、師の過なり歟。」うす「なんざますとえ。」鳥「ナニサ、司馬溫公といふ人が左樣言つたとョ。」トいへどもいよいよわからず。そで「オヤ司馬龍生といふのは、噺家ざますネ。」鳥「ハ、、、こいつァいい。」うす「アレサマア、だまつて聞きなまし、今度は大きい子ざますネ。どうしても節がこまかいやうざます。」そで「イ、エ、延津賀さんはやかましいかはりにネ、延津多といふ名とりの弟子はネ、半年ばかり習つたといふことざますが、モウお師匠さんになつて、弟子が大勢出來ましたといふ事ざます。」うす「そりやァ、しかし歳をとつた子ざませう。」そで「イ、エ

まだ十四歳ざますヨ。」うす「どうして知つて居なますえ。」そで「保里に家内中が居ました時、お津賀さ
ん所で見ましたヨ。」鳥「成程、清元もあんまり流行るから、いやな節のお師匠さんが澤山あるなう。」
そで「イヽエ、保里のお津賀さんの弟子は、うそを彈いたり譃をかたッたりする子は在りませんとサ。」
鳥「左樣だらう、清元榮次郎から請取りやァ、立三味線だから、延壽の直弟子も同じ事だ、そりやァい
いがお袖さん、その蓋物は何だ。」トふたをとる。うす「アレサ、ぬしやァ、モウけびざうざますわ、ドレお見
せなまし。」鳥「それ見ねえ、おめへもけびざうぢやァねえか。」そで「アレサ、夫婦喧嘩をしなますな、
中をよくお仕なましナ。」鳥「左樣ヨなう、食物で喧嘩をしちやア、餘りけびざうらしくッて外聞がわ
りいなう。」トいひながらうつはのふたをとつて見て、鳥「こいつァしやれてるの、いかさま小用に往つて來て、一ッうが
ひを仕よう。」と起きる。

これよりまたしばらく遊びて、種々の風情もあれど、こゝは畧す。さて次の條下は、鳥雅の歸り
し後朝のありさまをしるしたり。

且說薄雲は、鳥雅を送り出して、宵の口舌も今更に、別れと後朝をかこち顏して、座敷の障子をし
づかに明け、うす「オヤお袖さんえ、よく座しきに居ておくんなましたネ。」ト何やらくらうのかほいろ、ま
へがみは、ばらりと横がほにかゝり、さ そで「アイ、おまはんと同枕に寐ようとおもつて、待つて居ました
も力なささうにふとんの上にあがる。

ヨ。鳥雅さんは機嫌よくお歸んなましたかえ、何を其樣に鬱情なますえ。」うす「お有りがたうざます、何だかとりわけて、今朝は別れが悪うざましたヨ。」ト ほろりとこぼすひとしづく、いとゞあはれにおもはれたり。お袖は是れを見ぬふりして、そで「アレサなんざますえ、其樣におふさぎなますな、サア〳〵おまはんと一牀に寐て、私が鳥さんになるから、はなしながら寐なましヨ。」うす「左樣ざますと嬉しうざますネ、左樣してくんなましヨ。」うす「アアサア、おまはんも寐なまし。」うす「私も寐ますわ。」ト なかよきどしのひとつよぎ、はかなき事がぜんせいの、身にうれしとは何ごとぞ、こゝがくがいといふなるべし。うす「もしえ、鳥雅さんえ。」そで「なんだ。」うす「アノ私やァぬしに願ひがありますわ、聞いておくなますかえ。」そで「ア、何でもおめへのいふ事は聞いてやるヨ、サアなんなりと云つたり〳〵、と云つちやァ唄女兒の浚つて居る、春駒とやらのやうだねえ。」うす「アレサ、其樣なじやうだんを云ひなますな、しかし鳥雅さんも、眞な話をして居るときに、茶を云ひなんして、わちきに腹を立たせて笑つて居なんす事も有りますから能うざますヨ、私の願ひを叶へておくんなましえ。」そで「ム、おめへの願ひを、かなへてやるから云ひなヨ。」うす「あのね。」そで「ア、。」うす「アレサ、ア、と云つちやアわるうざますヨ。」そで「そんならウ、なんだ。」うす「アノウ私やア、ぬしのこゝろを誠にして、モウモウしんじつにしてざますヨ。」ト ちからを入れていふ。お袖はわらひながら、そで「ム、ヨ信實だヨ。」うす「そして藝者でも娘でも、今まであつた情人は不殘切れて仕まつて、そして内室さんも持たねえで、このすゑ誰とでも色

はこしらえねえで、私の自由になつて、十年も百年も、私のそばへばかり置いて、そして斯うして。」そで「毎日々々寐て許りゐるのかえ、それぢやア餘りすけべいざますネ、オホヽヽヽ。」うす「オホヽヽヽ、又可笑な事をお云ひなますヨ、思はずしらず笑ひイした、然し誠にく＼苦勞がありますわ。」そで「アレサ、苦勞なことをお云ひなますと、また鬱憤なますから、私やア、モウ苦勞なことの咄やア、鳥雅さんにはなりませんヨ。」うす「アそれぢやア堪忍なんし、アノ嬉しいこと許り云ひますわ。」そで「ア、左様なましヨ。」トいふうちに、またつぎのまのしやうじをあけて、傍輩女郎これもなかよきおいらん、花鳥「もしえ、まだ咄をして居なますね、湯へ這入つて寐なませんかえ、最う明きましたヨ。」トざしきへはひる。うす「花鳥さんお有りがたうざますが、私やア湯はいやざますヨ。」花「お袖様はえ。」そで「アイ私もいやざますわ。」花「薄雲さん、よごれしま、の移り香を、とやかえ。」うす「アイサ、じれつたうざますわ。」花「お袖さんも、吉兵衛様でさますかえオホヽヽ。」そで「花鳥さんも不躾ざますわ、そしてぬしやア實がありませんねえ。」花「なぜざます。」そで「それでも薄雲さんは、鳥さんの歸つた跡は、湯へ這入らねえと言つて居さッしやるのに、ぬしやア昨夜宇之さんの癖に。」花「オホヽヽヽ、それぢや私も湯へはひりイすめえ。」そで「それ見なまし、ぬしも此牀へ這入つて寐なましヨウ。」そで「花鳥さん、私の座敷にやア、今鳥雅さんが出來た所ざますワ、ぬしもこゝへおはひんなんしな。」そで「花鳥さん、ぬしも鳥雅さんになつて、少許助勢てくんな

ましョ、あんまり惚けなますから、私一人ぢやァ、手がまはらねえンざますョ、ホヽヽヽ。」花「オホホヽヽヽ。」うす「ホヽヽヽ、お袖さんでツイ笑ふンざますョ。」花「實情にお袖さんは、如在ないとやらさますねえ。」そで「ぬしも能うさますョ。」トわらふ花「なにがえ。」うす「名がうらやましうざますョ。」そで「オヤそれぢやァ、花鳥さんを鳥雅さんになんしョ、私やァ最ういやざます。」うす「オヤいやなじんすけざますョ。」花鳥「それでも、今すけてくれろと言はしツたぢやァないかえ。」そで「左樣ざましたツけねえ、ホヽヽ、ア、可笑しい、オヤ花鳥さん、昨夜はぬしの座敷へ、宇之さんが連れて來さしツたのは何ざますえ。」花「あれざますか、婦多川の唄女とやらざますとサ、氣障ナ。」そで「ナニ氣障ぢやァありません、誠に好風で宜うざますわ。おまはんは宇之さんが連れて來さしツたから、それで腹を立たしつて、氣障だと言はツしやるのだョ。」うす「花鳥さんえ、和歌町の唄女なら、私も氣障ざますわ。」トいふうすぐものがくやおちは、鳥雅のふかきいろとききし、おはまをおもひいだしていふじんすけなり。そで「オヤみんなが左樣ざますかえ。」花「主ばツかり賞めて居なますから、其樣なら唄女におなんなましな。」そで「オヤ否なねえ、三味線も彈き得ねえでかえ。」うす「それでもぬしやァ、田中のお幾さんとやらに、稽古さしツたぢやァないかえ。」作者いふ、此のおいくの事を、今いふはいかゞぞや、しさいあつてこゝに記すものなり。流行にあはぬことはしようちなり。穴さがしのでんぼふ見物、かならずふあんないとそしる事なかれ。そで「アイサ、松の内の前彈に、二タ月と二十日かゝりましたわ。ホヽヽ。」うす「オホヽヽヽ。」花「ホヽヽ。」うす花二人「をかし

いお袖さんだねえ。」トふたりがおなしことをいふどに　うす「ナヤ待人チウ〳〵〳〵。」花鳥もおなじく、花「チウチウ。」トいひしゆゑ、うれしさうに、そで「私ばッかり待人もなし。」花「オヤ吉兵衛さんはえ。」そで「アレ否ざますヨ、老父めえ。」トねずみなきをする。花「アレマア、鳥渡見なまし、あんな事をお言ひなますヨ。」うす「じやうだんぢやァありません、吉兵衛さんは實正に能い老父様ざますヨ。」花「實正に大事にして上げなましヨ。」そで「ア、それだから、昨夜も歸らッしやる時、大事にしましたわ。」うす「左様ざますか、何様なんした。」そで「おのね、羽織を引つかけて上げまうさうと思つたがネ、脊丈が届かねえから、座敷の雙六盤ィ、」花「ふみ臺にしたのかえホ、、、。」うす「ホ、、、。」そで「オホ、、、。」果ては三人笑ひとなり、お袖の頓智に薄雲も、惚れた男の噂して、しばしはうさをはらしける。

此のお袖が始終は、拾遺にくはしくいだすべし。これよりはまたお民のうへをしるして、しばらく郭のことをとかず、かならず嗣編をよみて佳情をしるべし。

風月花情 春告鳥巻之四 了

# 風月花情 春告鳥 巻之五

江戸 爲永春水 著

## 第九章

町名は何といふやらん、辰巳の里に遠からぬ、爲島とかよぶ裏住に、小細造作とした家ありけり。主はたしか獨身者、道具渡世の仲買とやらにて、監定上手の如才なく、金まうけをもするなれど、男の好いのがたまさかに、疵ともなりて色情ゆゑに、折節不都合事もあれど、得意旦那に贔屓されて、彰飾半業友達の、附合廣き商賣に、ツイ吉凶もありぬべし。彼の鳥雅の弟子となりて、俳名を雅友とよび、俗の名は友吉といふ。毎日留主さへ頼まずに、出行く事のみ多かりしが、今日はたしかに内情のある、女と見えて二十四五の大島田、戰慄とするほどうつくしき、仇ものと口舌の樣子、衣裳の拵へと言語にて、和歌町の唄女と推せられたり、名は仲次といふ。友「そりやア、手めへの例の愚癡で、種々先繰をして見れば、わけもねえことまで、がうぎに怪しく見える事もあるものだから、うたぐツ

て見れば限りのねえもんだか、マァよウく氣を鎭めて聞きなヨ。手めへは只おれが少許したことがあつても、夢中にばかりなつて居る樣にいふけれど、有體はおれも少しは、慾と德を考へて、マァ面白ろくの樣に見せて、一連に歩行いたといふものの、何も往つた先方で、うかれて居るものか。それだと餘程ありがてえが、他の機嫌をとつて遊ぶのだから、酒も何も身になるものか、手めへが取り越し苦勞をして、考へる樣なわけは少しもねえから、マァ左樣おもふがいい。」仲「すヤ左樣かえ、私やァ其意味にやァさッぱり氣が付かなかつたョ、そして慾德を考へて、毎日毎晩同家へ往つて、樂しんで居たおつな慾心だネ。」ト鼻の先であしらつて居る。友吉はじろりと仲次を見ながら、友「どうも何をいつても、手めへの樣なわからねえ者にやァ、實正に無言だから、何もいはねえけれど、鳥雅さんは俺が爲にやァ、まづ主人すぢではあり、俳諧の師匠なりか、此の頃は少し親御の方が不首尾だから、思ふ樣にはならねえけれど、根が家督をとるべき旦那のことだから、始終の爲に今勤めて置くのだァ。それにまた鳥雅さんの方でも、おれが樣なものでも何と思ふか、やれこれと言つてくれるから まづほんの付合で往くのだァナ。それに丁度わりい所へ持ち込んで、手めへのやくそくした堀の内の日があの通りの大雪だらうぢやァねえか、歸らうといへば、衆人にとめられるし、手めへの事も案じられるしか、取つ置いつして居るうちに。」仲「フヽおまへの女がとめたから、歸るのが否になつて、三日

四日の居續けかえ。其様に愚事々々おいひでなくッても、さつぱりとまるでむきだして、言つて聞かしておくれなねえ。おれは斯う言ふ事が出來たから、手前はどうぞあきらめてくれと、白地でぶつ付けておくれなねえ。」ト少し泣聲にていふ。友「ソレ、夫れがわからねえといふのだア、此様な事が出來ても、あんな事が出來ても、マア今日の所をよウく考へて見やノ、さぞ手めへは腹を立つて居るだらう、例の癇癪を發して、立腹酒でも呑んで居るだらうと、此方の自惚か知らねえが、しきりに思ひすごしをして、手めへに出會つたら、其の事も言はうしと思ふから、我が家でさへ種々心配をして、またあの出合が大勢來ると、しみ〳〵した咄も出來ねえからとおもつて、衆人に譃を吐いて、さきへ芝居へやつて仕廻つて、手めへをわざ〳〵呼びにやつて、斯うして逢はうと思ふばッかりで、おれが使をやつたも知らねえで、手めへは何所を歩行いてゐるか、宅にやア居ねえと鶴次さんが、返事をしてよこしたわ。出て居るならば、其の所へ聞いて行つてくれろと、左様いつてやつたが、鶴次さんのいふには、座しきではねえと左様言ッてよこしたア。それ見ろ、手めへの方にも落度があるのに、俺ばつかりをわりい様に。」仲「アヽ、左様サ、私やアくやしくッてノ〳〵。」ト言葉にちからをいれて、おしつけるやうにいふ。友「何が其様にくやしいのだ。」仲「くやしいのサ、くやしいからおまへの心いきを見て貰ッて、どうとも覺悟を仕ようと思つて、明許さまの毘沙門様へお參り申したり、また外でもおみくじを、いたゞいたりし

て、みれんらしいが、今日はひよつと宅へ歸つてお出でなら、嬉しからうと思つて、こゝへ來て見たんだアネ、何だか私やァくやしくツて〳〵、氣がうろ〳〵して、エヽ悔しい友さん。」トさもくやしさうにないて居る女「ナゼ其樣にくやしいか、己にはさつはり解らねえ、どうで幾度言つて聞かしても、わからねえ者にあつちやァかなはねえ、モウ〳〵どうとも手めへのいいやうにするがいい、言ひてえことがあるなら、幾程でもおれをいぢめ殺すとも、どうとも勝手にしろヨ。」トはらだたしくいへば、仲次は友吉のかほを見て、仲「友さん左樣かえ、勝手にしてもよいかえ、急度勝手にしろとお言ひだネ、私やァ實正に勝手にするから、其の時はせめて不便な奴だと思つておくれヨ。」トいひさして泣いて居る。

此の節友吉が心の内におもふ樣、そも〳〵仲次がこれまでの氣性、男の及ばぬいさみはだ、奴といはれて流行りし者が、おれゆゑには此樣にも、愚癡になつたかと思へば、不便が彌增しになれども、最う一ツぺん氣を引いて看ようとおもへば、わざとちやかしてせゝら笑ひし顏色にて、女「左樣ヨノ〳〵、其樣にをかしなことをいつて、おれにびつくりさせようといふのか、へゝ手のある女だナア、其樣なことを言つた者に、死んだ例やァねえもんだ。」トちやにして見せる。

こゝにおいて仲次は、つく〳〵思ふ樣、これほどまでにいつても、まだ得道せぬやうすは、彌〳〵もつて此の頃の居つゞけに、先の女にくるめられ、それに心を奪はれて、いひかはしたることも

わすれてしまひ、勝手にしろとは恨めしい氣隨な返答と、おもへばいとゞくやしいと、またなつかしさに心も亂れ、涙に善悪もわからばこそ、しばしはものもいはずして、泣きくづをれて居たりしが、やう／＼氣をとり直し、何の様に事をわけて言うたればとて、男の腹が變つて居ては最早及ばぬ事、とても左様なる事ならば、死んで仕舞ふがましならめ、左もあるならば跡にては、不便な事をせしことと、おもはるゝのをたのしみにと、哀れなる氣を引き出すも、戀ゆゑ狂氣にひとしき所爲か、今にも年季が限れたならと、思ひしことも水の泡、親方持も義理合も、斯うなるうへは不料簡の、覺悟極めて男に向ひ、

仲「友さん、たしかに考へて見たらネ、今までのことはみんな私がわるかつたョ、我が身をかへり見ねえで、あくまでおまへを恨んだは、私が自惚から。此様なものに思はれて、さぞ今まではうるさかつたらう、堪忍しておくれよ。あんまり久しくこゝに居て、猶のことおまへの癪にさはることでもいふとわるいから、私やァかへるョ。」ト涙聲、おもひ入つたる様子にて、ずつと立ち上る。

それ人情を察すること、いと／＼難き所爲なれども、右にしるすごとき愚癡なることをも、其の身になりてはさぞあらんと、よく／＼察して哀れを知り、他人のことにてもよそ／＼しく聞き捨てず、情をかけるは、人情のおもむきを知る人といふべし。されど戀路をせぬ人の心に、これを

讀むときは、なんでこのくらゐなことが面白いか、悲しくもなければ哀れでもなしといふべし。色をも香をも知る人ぞ知ると、おもひながらも愚智のぐちたることを記せば、世間の衆徒の口やかましきを防がん爲に、愚なる分解をこゝにいふのみ。

## 第十章

折から路次より足音して、障子の外より内を覗きて男の聲「友さんちよつと。」友「アイ誰だ。」ト言ひながら、折のわるい所へと思ひ、外へ立ち出づる。仲次はじれッてえと思つたばかり、だんまりで考へて居る。おほかた此の間の所から、人でも來たのか、それなれば直に出て行くだらう、無心かへる所おやアねえなどと、種々工夫して居る。此の時外面には、何かこそ／＼相談したうへにて、友吉の聲、友「ア、宜いとも、おめへ直に往つて、鐵こうに左樣いつてくれるがいゝ、今夜ア、おいらア往かれねえから、旦那の前をいい樣に頼むと左樣いつて、そして今夜アはねがおそからうから、茶人と一同に何所へでも止宿りねえ、オイ／＼、おれが宅に居たといつてはわるいぜ、チツト用があるからよ。」男「アイよし／＼、それは呑込みやした、夫んなら。」ト、歸ッて行く。

仲次は心に思ふやう、いよ／＼愛想が盡きたなら、あの人と一連に出て往きさうなる所を、跡に殘るはまだ少し脈があるわえと、また種々迷つて居る。友はだんまりにて内へ這入る。この時は

はや日も西に入りければ、ともし火をてらし、障子をはづして戸を入れかへ、窗の方もしめながら、

友「お仲庭の方の雨戸をしめてくれねえか、さむいやァ。」ト何氣なく言ひ付け、火鉢へ炭をつぎ、火燵へ火を入れ、布團をかけなどすれば、仲次は無言にて、雨戸をしめて來り、まただまつて火鉢のそばへ、寒さうにすわつて居る、眼のふちをあかくして、泣いたる顔はてら／＼とひかり、前髪の毛は、ばら／＼と天庭へかゝり、うつくしき面に愁へをふくみし姿、仇にして情深し。友吉は心の内に、何樣しても不便な奴だと思ひ、しきりにかはゆくなりて、寐まきを著かへて火燵へ這入り、友「サァモウ宜いかげんにして寐ねえか、べらぼうめえ、何時までぐづ／＼して居るのだ、マァこゝへ來て、寐てから死ぬとも生きるともするがいい。」ト笑ひながらいふ。仲次も少し莞爾して、仲「寐てもいいかえ。」友「いいか惡いかこゝへ來ねえな。」トいひながら、縞ちりめんのふるきわたいれをねまきに出してやる。友「サァそれを著ねえな。」仲「アイ。」トさも嬉しさうに笑ひ顔して、いきなりに帶を解き、じれッたさうに著物を著かへて、枕元に立つて居る。友「サァはひらねえのか、じれッてえ。」仲「それだつても。」ト言ひながら、布團をまくッてはひる。此の時になりて、土瓶を枕元へとりよせ、火燵の火を埋けさせ、いろ／＼と用をいひつける。少し小じれッたくなりしと見えて、また仲次は、火鉢の際にすわつて居る。友「オヤ寐ねえのか。」

仲「モウなにも用はないかえ、また其所へ這入ッて、じきに起きるより、私やア、こゝに居ませうヨ。」友「左様か、手めへ今歸ると言つたぢやァねえか、またすわつて居る氣になつたのか、氣のおほい女だぞ。」トまたすこしじらして見る。仲「左様かえ、そりやァわるかつたねえ。其所へ這入れとお言ひだから、おまへの心も知らずにはひる氣になつたのが、あんまりうか／＼して、なほ／＼おまへの愛想の盡きる種を蒔いて、心はづかしいヨ。しかし友さん、仕うちで愛想をつかされるほど、なほ私が心にやるせがないヨ。」トいひさして、なみだを漉返紙にてふきはなをかみ 仲「ほんに左様だッけ、私がかへるといつたのを、ツイ忘れていつまでも居たッ、堪忍しておくれ、さぞうるさかつたらうネ。」ト、ずつと立つて這入口へゆき、戸ぐりのしてあるところを、やう／＼あけて外へ出で、戸をぴつしやりとしめながら、何やら書いた物をなげこみて、路次をばた／＼と驅け出す。友吉は最前より、中敷居の障子の陰に身をよせ、始終をかんがへて居たりしが、いかにも思ひ入つたる樣子にて、外の方へ驅け出せば、内へなげていれた手紙をとつて、袂へおしこみ、直に後から飛び出して追驅けゆきしが、やう／＼のことにて追捕へる。友「コレべらぼうめえ、マア宅へ這入れヨ。」仲「アレマア放しておくれヨ、どうでも。」友「エヽやかましい、なんでもいいから何でも／＼。」トうろたへて同じことをいふ。「コレサ世間へ恰好がわりいやァ、こゝで押問答をしては外聞がわりいやァナ。」ト無理むたいに路次へ引き入れ、家内へ抱き込み戸をしめて、かけがねを

かけて火燵の所へ抱き居る、友「エ、世話のやけた嬢だぜ、コレいゝかげんにだゝッ子もするがいゝ。」ト仲次の貌をちよいと突いて火燵へはひり、友「サア〳〵こゝへ這入りなヨ、マア此の文は後でゆるりと讀まう、サアモウ〳〵何も言はねえでもよしとして、サア〳〵早くこゝへはひンねえ。」ト手をとつて引き倒す。仲次は倒れながら、多葉粉を吸ひ付けて友吉にのませながら、仲「ア、モウ〳〵、實に人に惚れるもんぢやァないねえ、心を見ぬかれて、いゝやうにじらされるやら、なぐさまれるやらしても、則り此様に馬鹿のやうになつてしまつて、ほんに私やア、なぜ此様にくだらなくなつたらうと、しみ〴〵手めへでも氣がわからない。」友「ヘン手めへばかり迷やァしねえ、此方もくだらなくなつて氣をもむだらうぢやァねえか、これがまた俺ばかりのろくなつて、其方の心がしやんとしてゐて、何所に實心があるか、何だかわからねえやうぢやァ、他の懐で、女郎買も芝居も往かれるのを、逃げてはづして、こんなにのろいことをして居られるものか、サア寒いやア、寐ねえナ、泣きむしめえ。」仲「おまへが泣かせるのだものヲ。」トいひながら火燵へはひる。友「オ、引冷てえ足だ、氷のやうだ、サアおもいれはゞをして溫るがいゝ。」ト顔と貌つ。仲「にくらしい。」友「それぢやア出ようか。」仲「アレまたあんな。」

上るりへむりいうて、そんなそのよないひわけを、それよりわしがいやならば、一人未來へいつて見

や。

女「ナャ、あつらへの鳴物とは、あのことだぜ、ちやうどおめへの言葉へ付いて、かたり出すやつさ。」仲「いい聲だねえ、餘程大きい兒女かえ巧者な語り様だネ。」女「ナニまだ十五ばかりだらうが、誠に奴の子で、大そうに氣がるな子だア。」仲「ちつと氣になるネ。」女「エ、イ、おもしろくもねえ、兒女の様なことをいはア。」仲「それでもおまへは、新造ッ子が好きだものチ。」女「そりやア、むかしの事だア、今ぢやアなりの大きいのを隠さうと思つて、ひくい島田に結つて、すこし他所行の時は、眉毛を氣にするくらゐの女でなくツちやア、目にはつかねえ。」仲「すヤ私ヤア最う其様かネエ。」女「ナァニ手めへはまだ四五年もたたねえぢやア、埒はあかねえ、手めへの氣ぢやア年増の氣で居るだらうが、まだ／＼何所もかしこも生娘だからいけねえ、そんならといつて、嫉妬をやくのは極素人で、そして泣きむしの大將だア。」仲「よいヨ、泣きむしでも。わちきが泣きむしなら、お前は泣かせむしだヨ。」女「アハ、、、、それだから生娘だといふのだア、泣かせむしといふがあるものか、くだらねえことばかりいはア。それでも相應にお客のものを濟ましたり、もつれたことを口に利いたりして、さわぐうちがふしぎだ、そして新子や何かに意見をいふも、をかしいぢやアねえか。」仲「ふゝくいろ／＼なことを言つておいぢめだねえ。」ト、いふ時節門語の淨瑠璃、

へかはる心に傳兵衛は、せきたつむねをおししづめ。

仲「ア、否な辻占だ。」友「また愚癡か、モウいいにして寐ねえか。」仲「ア、四五日寐ないから、寐むからうねえ。」友「夜晝寐ねえやつがあるものか、そりやァいいが宅の方はどうして來た。」仲「ナニ鶴次さんによく賴んで來たし、そしてやつはりざしきのつもりだァね。」友「左樣か、それおやァいいの。ア、引何所へ往つて居ても、手めへの側に居るやうなことはねえ。」仲「譃をお吐きな、たま〱でせえ、人をいぢめる癖に、エ友さん實正におもしろかつたらうね、粂さんに聞いたが、寔に手のあるほどのいい女だといふこッた、年は何才ぐらゐだエ。」友「歳も容儀もいるものか、手めへに替へる女があるくれゑなら、いままで手めへの氣儘をうけながら、機嫌をとつて情人になるものかナ。」仲「アレサ。」友「どうした。」仲「どうもしないが、マアよくおまへの心をきめておくれなねえ。」友「また惡いくせだ、いつでも此樣な節になると、見せつけやがらァ、モウ〱後生だョ。」仲「おまへはまことに手前がつてだョ、アレひどいねえ。」友「エ、イ、よくいろ〱と氣をもませるぜ、面の憎いほどかはいいナア。」仲「アッ齒の跡がつくョ。」友「疵でも付けたら、他の人が惚れねえでよからう、ア、くやしいが、何樣なことをしても、手前をわすれることは出來ねえ。」仲「ナァニ私こそ左樣だけれど、おまへは女をつかまへると、誰にも左樣だらうとおもふと、また憎らしくなるョウ。ョ、モウ私やァ

口も利かれないほどねむくなつたから、口もきかないヨ。」女「ウムヨ〳〵、おれも寐る、口もきかねえ。」ト、口舌も愚癡も思ふ同士、なかよく寐ると思はれて、いとしめやかになりにける。

此の時はるかに戌刻の鐘、ゴウ〳〵とひゞきて、雨の音ひさしにあたりて、バラ〳〵、風鈴蕎麦の聲、かすかに遠く風につれて、「はな巻てんぷらあられでござる。そば〳〵引。」

仲「ヲヤ何だか、表がしづかになつた様だねえ。」女「左様ヨなう、まだ宵だのに。」トいふ時しも、ひやうし木の音カチ〳〵カ、チ。仲「もう戌刻だね。」女「ほんにナア、今夜ア慾のせえか夜が短けえ様だ、サア起きねえ夜食の手段を仕よう。」仲「マアチツト、しづかにしておくれなねえ、誠にモウうつとりとして。」女「よし〳〵、久しぶりだア、おれが今ちやんと何かをこしらへて喰はせよう。」ト はね/おきて、茶をこしらへ膳だてをしてさ/けのかんをつけこしたくをする、仲「堪忍おしヨ、サア起きませうア、引。」

風月花情 春告鳥巻之五 了

# 風月花情 春告鳥 巻之六

江戸　爲永春水著

## 第十一章

再說鳥雅は福有の、家に生まれて不足なく、思ふ儘なるたのしみも、滿つればかける世のならひ、昨日にかはる悲しみの、俄におこるぞ是非なけれ。それをいかにと尋ぬるに、鳥雅の兄は、先妻の產むところにして風雅の心更になく、鳥雅は今の妻の子なり。さて鳥雅の父福富屋幸左衛門といふは、福富屋萬右衛門といふ、大分限の出店にて、今の幸左衛門の女房、お由といふ鳥雅の母は、本店萬右衛門の娘なり。このゆゑに、幸左衛門の家を繼ぐ幸次郎よりは、弟鳥雅の方が人の用ゐるも重く、自然と本店の孫なりといふ、勢ひある如くなれば、兄の幸次郎と睦ましからず。元來兄の心は、兩親に似もやらず、なか／＼福富屋の旦那といふ風にあらず、强情多慾のふるまひ、誠にいやしき生得なり。こゝにおいて、此のほど鳥雅の身持甚だよろしからず、薄雲の爲に多くの金をつかひ、其のほかの奢

りに諸方へ行き、遊びに金を蒔きちらし、母のお由よりして、内々二包も送りしことのみならず、昔隠居同前に、別荘のくらし方雑用も、是れまで月々に、十両ヅヽ、遣ひ捨てながら、猶たらずとして母の許へ無心、または本家の祖母隠居して、妙春といふ方へもねだりて、百両も貰ひけれども、これは妙春が、かはゆき孫の事ゆゑ、やかましくもいはされど、針ほどの事を鐵棒を引く如く、仰山に言ひふらしければ、幸左衛門も捨て置きがたく、本店へ相談しければ、鳥雅の爲に母方の伯父、當時の萬右衛門のはからひにて、こらしめの爲に遠き田舎の親類の方へ頼み、厳しく押し込め同前に、はからひくれよと言ひ送り、鎌倉への通路は、何事によらず両三年の間は、鳥雅事に付いては決して無用なり、心ざし改めなば格別、さもなくばすゑ〴〵勘當なすべしと、申し渡され、終に田舎へおくられしは、今さらにいとしけれ。されば由縁の人々の、愁へ歎くその中に、薄雲は身もよもあられぬ思ひ、終におもき病となりて、引籠みけるが、ながく出勤もせざりしとぞ。亦迎島なるお民は、以前幸次郎の口説きよりしをきかざりければ、幸次郎はそれを意恨に思ひ、殊に鳥雅と深く契りし事を知り、懲の意恨も此の時にと、情なくはからひしが、鳥雅の母は風邪にて、何事もさしづなりがたくありしとぞ。されば幸次郎は、お民の伯父を呼び寄せ、お民を此のうへ其の方にて世話いたせば、家守をも退役さすべしと、厳しく言ひ付けられて驚きおそれ、迎島より直に女房の國、長狭郡花房といふ片山里

に、お民の縁者ありしゆゑ、その人呼びて引渡しけり。こゝにはお民の誠の伯母の、故あり同居する親類なりしが、伯母はお民をいたはる事、我が子のやうになすといへども、此の家の主寅吉といふは強慾非道の白徒にて、妻のおくねも同氣の惡婦、お民をこゝへ引きとるより、直にもだまして金にせんと思ひ付きしが、伯母おさよが大事になして、側をはなさず、元來この家は寄合世帶、おさよの金を九分出し、寅吉の金はわづかにて、しつらひし家なれば、其のおさよが身につくべきお民なれば、まづしばらく其の儘にして置きけるが、此の節おさよは大病となりて、二タ月あまり煩ひけるを、寅吉夫婦は死ねかしに、つらくあたるを如何とも、なすことかたき名前人、邪見にされて居たりしが、お民はこゝへ來りしより、伯母のおさよを杖はしらと、頼む身なれば大切に、心を付けていたはれども、寅吉夫婦へ氣がねもあれば、またこれらへも氣を付けつゝ、仕ふるといへど、彼等が腹にはすこしも合はぬ胸算用、いつもお民を罵りて、いぢめらるゝぞ哀れなり。今日もお民は伯母の藥を煎じながら、くよ／＼と過ぎ越し方と行末を、案じ入つたる折しもあれ、おくねは醉さめ起きあがり、お民の方をじろ／＼白眼付け、くね「エ、いめえましい、朝ッから晩まで藥三昧だなう、コレサお民さん、いいかげんにしねえナ、團扇ではた／＼あふぎたてるから、其所中が灰だらけだァ、そしてマァ物が取り散らかしてあつても、それを片付けようぢやァなし、寔に後生樂だヨナウ。」たみ「ハイ今すこしで

薬が出来ますから、跡でよく片付けますョ。」〈米〉「エ、ィ薬は付いて居ねえでも、火があれば煎じあがるわナ、マアきり／＼掃き出してしまつて、薬でも水でも吞ませねえナ。」ト、どなり付けられ、お民は是非なく薬を捨て置き、さツ／＼とはきいだせば、〈米〉「アレサしづかにはきねえ、エ、忙しい事も腹をたつて、ぎす／＼するヨ。それほど否なら、おいらがはき出さア、こつちへ帚をよこしねえ。」〈民〉「イ、エ、私やアはらを立ちはいたしません。」〈米〉「それなら、ぶり／＼しねえではきなせえ、おめへが腹を立つたといつて、誰もこはがるものはねえ、アレサ／＼足元の物を片付けてはきなよ、田舎者にはおとらア、人をばかにした、それでも氣のきいた風俗をして、おいら達をこけにしたといつて、はじまらねえ、エ、ばか／＼しい、若旦那とやらになぐさまれて、あげくのはてに、貝追ひはらはれて来るやつもねえもんだ、手切の少分やそッととれねえことがあるものか、さまア見たがいゝ。」ト、あくまでも誹られて、無念の涙はら／＼／＼、おくねはこれを見るよりも、更にとがく／＼しく、〈米〉「ふウくちよッとのことにも泣聲兒女だなア、なにが悲しいのだエ、サア／＼帚を此方へよこしなせヱ。」ト、いひつゝ邪見に引つたくり、ばた／＼／＼とはき出し、その儘表の方へ出て行きながら、〈米〉「サアはえて居ずとも、飯の仕かけでもしなせえ、ドレ新家へでも行つて遊ぶべえ。」ト、はな唄うたうて出て行く。後にお民はくちをしく、悲しきうちにも思ひ出す、鳥雅の情昨日今日、夢かとば

おもふ迎島、海山こえて北の方、それさへ其處に今ははや、あらで遠くの田舎とやら　我が身の如くつまらしき、思ひはたとへあらずとも、何不自由のなき人が、此樣な山家の住居にあらば、さぞくやしくぞあるならん、いかなる所にあらるゝとも、せめて此の身が一所にあらば、朝夕介抱せんものをと、我が身のつらさに男のうへを、おもふ女の操をも、しらでいづくに住むことぞ、あんじながらもさしあたる、大事は眼前伯母の病と、せんじ立てたる藥なべ、片手に茶椀をたづさへて、咳き入るおさよが病の牀、たみ「サァ伯母さん、お藥が出來ましたヨ。」さよ「アイ／＼、毎日々々世話だらうに、あしたッからは俺が煎じるから、おめへはチット内の事をしてやつてくんな、たしか今もおくねが、小言をいつて出ていつたナウ。」たみ「アイ。」ト返事もおろ／＼涙、ひざにおちるをおしかくし　たみ「ナニいつものくせだから、何とも思ひませんヨ。」ト、口にはいへど心には、いとくちをしき今の身を、死にもせうかと思ひゐる、そのたよりなさはかなさに、いとゞ涙はこぼれけり。折から歸る寅吉が、とら「ヤイ誰も居ねえか、お民はどうしたヤイ。」といはれてびつくり立ち上る。お民は涙をふきながらたみ「アイ老父さんおかへりかえ。」　とら「エヽイしれた事だァ、出て行く時、あれ程言ひ付けたのに、薪をなぜ干しておかねえのだ、そして鳥網も干せと言つたのに、夫れもしやァがらねえ。」　たみ「アノあれから、おくねさんの酒を買ひに往つたり、またお醫者さまが、お出でなさッたりしたからッイ。」

とら「エヽまた口返答をしやアがらア、むかしは昔、今ぢやア伯母の出した金も、さし引き勘定をすると、最う此の春から喰はしておいただけが借しになつて居らア、それから手めへの喰ひ雑用をいれて見やアがれ、残らず俺が苦しみだア、おさよどんだといつても、大きな面をして、御新造様の様にして居られてたまるものかエ、モウ／＼薬もいいかげんにして貰はう、死んだ跡ぢやア俺が借金にならア、ばか／＼しい。」ト、どなり付けられ、氣の弱きお民は何といらへなく、亦も涙に咽びける。

## 第十二章

世の憂き事を身一つに、かさね／＼の薄命、涙の露の乾く間も、泣きあかしたるお民が難儀、寅吉は病人の、勞れておく／＼舌さへも、廻らぬ様子に付けこみて、己が勝手をたけりたて、傍若無人（子どもしゆへ申しますが、ばうじやくぶじんとはかたはらに人なきがごとしと申すことなり。）の悪口雑言、とら「コレお民よく聞けヨ、うぬが料簡ぢやア、伯母御さへ大事にすりやア、此方等夫婦にやア、恩もひらもねえといふ考へで居るだらうが、まさか左様でもねえぞ。手めへを寺島の旦那から、（島雅が兄幸次郎の事をさしていふことばなり。）引きとつて来る節に、鎌倉の伯父御が何といつた、手めへの身の上は、寅吉の自由にはからつてくれろと頼んだア。お由は親身の血筋伯母だけれど、女の事ではあるし、だん／＼歳は寄るものなり、始終おのれが心まかせにしてくれと、斷つてよこしたぞ。左様して見りやア、おくねを追ひ出して、手前を俺が女房に仕ようとも、ま

た妾奉公に出さうとも、それでなけりやァ、女郎に賣るとも、いづれ俺が心持次第だぞ。其所を俺が勘辨して、一日々々と其の儘でおくのだァ。それになんだ、明けても暮れても伯母御のくすりだの、ヤレ醫者どのへ往くと許りぬかして、家内の事ァ少許もかまやァがらねえ、左樣して何ぞといふと直に泣聲えやァがる、口でいふのが痛くも痒くもねえ筈だァ、エ、不吉な女だァ。」ト、いひつゝ火皿の大きなる、煙管をとつてお民の顔を、遠慮會釋もあらくれ男、力に任して叩き擲れば、ワアツト泣き伏し顔を押へ、たみ「アレ老爺さん、御免なさいましョウ、最うこれから氣をつけますから、どうぞ堪忍して下さいまし、アレどうぞアイタ、、、、眞平御免なさいましョウ。」ト、打ちたゝかれる苦しさも、泣く聲伯母に聞かせじと、袂につゝむ心配は、病氣に障るをいとふなるべし。伯母のおさよは我が子より、便りにおもふお民の難儀、聞くも悔しき寅吉の、悪口非道のふるまひに、こらへ兼ねたる病の牀、破れ屏風を力となし、よろめきながら立ちあがり、さよ「何だかマァ、ひどい事をしねえでもいいぢやァねえか、女の子をぶちたゝきする程の事もあるめえ、夫れともお民をせつかんしねえでならねえ事ならば、私をぶちなせえ、あんまりな事だ。」ト、腹だたしくいへば、寅「ナニあんまりだ、エ、死にかゝつて居るくせにたは言な、うぬが體も利かねえでるながら、引籠んで無言つて居るがいい。」トいふをきくより、これまでのしまつをならべて、いはんとすれど氣をいためしゆゑ、さしこむやまひ。さよ「アイタ、、、、ア、せつない。」トよこにたふれてくるし

めば、おどろきあんじておたみはかけより、せなをさすりてかいはうし、たみ「アレ伯母さん、氣をおもみでないヨ、私がわるいから叱られるのでございますヨ。」トなきごゑをかくしていふもあはれなり。こら「サア病人は、いゝかげんにしたがよからう、ぐら〳〵ふしてばかり居られちやァ、此方の難儀だァ。ヤイお民、山へ往つて薪を拾つて來い、ソレその前にこの綱も干して行け。うじ〳〵仕やァがると、家内へは片時もおかねえぞ。役にたたずめエいま〳〵しいこつト、どなりつけられ不便やな、お民は伯母の介抱さへ、ならぬのみかは木枯の、音さへ寒き山路へ、未の刻も半ば過ぎ、猿に等しき者共に、口ぎたなくも追ひ立てられ、熊手を引つさげ脊に籠、脊おうて泣く〳〵出でてゆく。嗚呼いかなれば此の處女、かくまで薄命のかさなるやらん、かかる時にぞ過ぎさりし、親達の事情ある、人の事などいろ〳〵に、思ひ出して戀しくも、悲しさ勝る歎きにて、哀れといふもおろかなるべし。斯くの如くに日に幾度、無理なる他人の雜言を、腹だたしくは聞きながら、伯母のやまひも見すてがたく、又便りなき身のうへゆゑ、泣く〳〵其の日を過しけるが、ある時伯母の藥をとりに、隙を見合はせて夕方より、家を出づるも寅吉夫婦の者に、氣がねと知られたり。さてもお民は里をはなれて、半道ほどありける醫者の許へゆき、藥をもらひ立ち歸る、野みちあぜみち風荒れて、いとものすごき海の音、木精にひゞく泡の國、はかなきその身をかこちつゝ、いそぐ野道の只中を、尾花をおしわけお民の前へ、立ちふさがつて大男、●「コレサ、どこへ往くのだ娘

ッ子、夜の道の物騒なのに送つてやるべい。」ト、出しぬけに、聲かけられてびツくりし、月の明りに見あぐれば、さかやき延びて熊毛の如く、眼をひからする恐ろしさ、お民はぶる／＼ふるへながら、たみ「ハイ私は、花房の蓮沼村のものでございます。」●「譃をいはねえがいい、蓮沼村に、主の様な美麗しい娘があるものか、鎌倉の者だらう、何にしてもかはいらしい娘が、一人で夜道をするものだ、丁度やァねえ、ドレ己が手を引いて、おくッてやらう、そのかはりにおれがいふことをきくがいい、丁度往來の人もなし、二人が溫まつてから往かう、サア／＼。」たみ「アレ御免なさいまし、私は病人のことで、急ぎの道でございますから。」ト、摺り抜けて逃げ出す、向うの方にもまた一人、雲つくごとき大男、兩手を廣げて、▲「コレサ／＼お娘や、なぜ逃げるのだ、あのをぢさんが能いことをしへてやらうといふぢやァねえか、嬉しがるこそあたりめへの歳で、野暮に逃げる事があるものか、ドレおれも手傳つてやるべい。」ト、引き捕ふればお民は泣き出して、たみ「アレ御免なさいヨウ引、アレエ引、どなたぞ來ておくんなさいましヨウ。」ト いふうちいぜんのをとこもはせ來り、二人にてお民を抱きすくめ、●「サア泥八おぢい、足の方をかつぎあげろな、俺が肩の方を持つて行くべいわ。」▲「そして何處へ持つて行くだ。」●「ハテしれたこんだァ、道樂寺の本堂へ連れて往つて、なぐさむべいサ。」ト 二人にてかつぎ出す。たみ「どうぞ御免なさいましヨウ、アレヨウ引。」泣聲夜風に木精して、さも悲しげに聞えたり。此の時しも小湊なる誕生寺に、經

堂を建立せんとて、信者の講中言ひ合はして、毎夜十人十五人、一組二組別れつゝ、最寄々々の邑村を、勸化にあるく一輩か、折よく爰へ來かゝりて、女の泣聲を聞くよりも、情ある人々なれば、夫れたすけよと走せかゝる、その勢ひに兩人の悪漢、おたみを捨てゝ逃げ出せば、題目講はお民をいたはり、これも高祖の御慈悲と、一際聲をはり上げて、夜風に傳ふ尊さは、草木國土悉皆成佛、かゝる野邊にも法華經の、功力に逢はぬ世尊のやくそく、今此三界皆是我有と、捨て給はぬぞ有り難けれ。テても題目講中の、聲もはるかに遠ざかる、野道かすかに木精して、南無妙法蓮華經〳〵〳〵、ドコドコドコドン〳〵。●「泥八か。」▲「權十か。」●「いま〳〵しい邪魔が入つたなア。」▲「それヨ、しかしアノ法華の講中は、人の難儀を身に引き受けて、世話をする奴等だから、捕まるといけねえから逃げ出したが、アノ娘をつれて往つたかなア。」トいふ傍の枯尾花に、隱れて在りし彼のお民、見つけられじと身をちゞめ、ひそまる折にざは〳〵と、風にはあらで尾花の音、聞きつけ見つけて泥八權十、思はず莞爾うなづきて、忽ちに引捕へ、▲●「アハヽヽヽ、どうしても縁のあるのだ。」▲「サア〳〵今度は意地ばらずと、素直になりやア此方も其の氣で。」●「それヨ〳〵、おとなしくいふ事を聞きやア、いたはつて隨分やさしい介抱は。」▲「魚心あれば水心だ、サア自由に道樂寺の本堂へ往くか。」●「あすこは無住の明寺だから、何も恥かしいことはねえ。」ト、とり巻かれてお民はかなしく、ふるへて居

たるが兎に角に、退れぬ所とあきらめてか、たみ「サアそれ程に私を、思し召しての事ならば、身を任せまいものでもないが、親兄弟もない私、蓮沼村も他人の事、今から直に女房に、もつてお呉れの心なら、縁づくと思つてこゝから一作に、何所へでも否とは言はない氣だから、お前達二人の中で、實義な方へ此の身を任せ、たとひ死んでも見棄てまいとか、他には情人もこしらへまいとか極めての上で、私を可愛がつておくれなら、どうで一度はもつ男、此方も外には男をば、一生もたない私が氣性、それとも二人が當座のなぐさみ、只さしかゝつたいたづらならば、殺されてもなぐさみ者にはならないから、其の氣でどうでもしておくれ。」ト、いはれてさすがに泥八權十、迷ひ出したる戀の慾、二人の心に敵味方、たがひに邪魔と友達の、好情をわすれて泥八が、▲「なる程なア、お娘のいふが尤もだア。コレ權十、おぬしは歳に不足もなくつて、此樣なかはいらしい娘を、抱いて寝ようとは押しがおもてえ、貴樣にはおれが酒をふるまふから、此の娘はおれにくれせえ。」●「エ、イ、いけずるいことをぬかしやァがれ、此の嬢はおれが見つけたから、おれが自由だァ、手めへはおれより年が一ッか二ツ、多いくらゐで居やァがつて、若えふりをしやァがらァ、そして此の子を女房にするといつても、第一宅がねえぢやァねえか、他所へ行くといつても小遣ひもねえくせに、ふといことをいやァがる、エ、コウお娘や、此の男はの、名を泥八といふくらゐこはい人で、元は盗人の告子だから、おめ

へも此の人のいふことをきくと、盗人に落されるぜ。」泥「うそを吐きやァがれ、おれよりかうぬこそ盗人だァ、それだから鎌倉へ出ると、首がとぶといやァがつただぢやァねえか、サァお娘や、おれといつしよに此所へ來な。」權「エ、むしのいい事をぬかせえ、うぬ一人にいいことをさせるものか、その娘はおれが女房だわ。」ト、泥八を突きのけお民の手をとり、權「サァ此方へ來なァ、かはいらしい手だナァ、す、〳〵此の頬皮のすべ〳〵したことは、羽二重よりもはだがいい。サア〳〵モウ〳〵早く來な。」たみ「アレサマァ、よく何かを極めてから。」泥「さうだ〳〵、その野郎のいふことを聞くと、かたはになるぜ、必ず其方へいきなさんな。サァ權十、うぬァ彌邪魔をすりやァ、斯うだぞ。」ト權十に、挫りこぶしで打つてかゝれば、權十は傍なる、竹の折にて打ち掛る、中にお民はうろ〳〵と、取り押へるさへかなはねば、途方にくれし此の場の仕儀、二人は戀の敵同士、たがひにおとらぬ荒者ゆゑ、毛をむしるやら喰ひ付くやら、しばらく息吐きする事ならず、打ちつ打たれつ爭ひしが、今は雙方片息にて、左右へどうと倒れ伏し、ハァ〳〵苦しげに、目許りきよろつく阿房のふるまひ。お民はさすがに氣の毒にや、近邊をたづねて徳利のかけへ、樋の口の水を汲みきたり、泥八權十にあたふれば、二人は嬉しく舌つゞみ、泥「ア、いい心持だ。」權「醉醒にのむ水よりも。」泥「呑ましてくれ手がありがてえ。」權「それに付けても泥八や、手めへ何と思ふか知らねえが、どうで斯ういふ場にな

つた事だァ、娘によく承知してもらつて。」泥「左樣サ〳〵、否であらうが跡は兎もあれ、今夜許りは二人の願ひを聞いて貰つて。」權「マァくじ取りにして、前後の恨みのねえやうに、と言つてもお娘はどうだらうか。」たみ「イエ〳〵、それでは私やァ否々、正直は泥八さんの女房になる心、權十さんのいふ事は。」泥「ヤア〳〵、それぢやァ此の泥八を、亭主に持つてくれる氣か、それぢやァ權十氣の毒だが、どうぞ手めへは、此の孃の事を思ひ切つて堪忍してくれろョ。」權「否だ〳〵、嫌はれて見りやァ猶のこと、命をかけてもやめられねえ。」泥「左樣聞きわけがなけりやァ、此方もモウ〳〵、友達のよしみもねえ、うぬを殺して其の跡で。」ト、またも二人が立ちかゝる所へ、お民とおなじ樣なる島田の娘の美しきが、月のあかりに跡先を、見まはし〳〵急ぎ來る、姿を見るより泥八が、泥「ソレソレ權十、此の子に劣らぬ其の娘。」權「オ、〳〵、成程有り難え、それぢやァ俺は。」ト今來たる、娘を捕へに走せかゝる、此の場の模樣ぞ怪しくも、お民が身こそ覺束なく、儚き風情に思はれけり。

これより烏雅お濱の再會、薄雲の實意、お民の安否いとおもしろく、聞き傳へし實錄を、第三編に御覽にいれまゐらすると、撰者にかはつて。

書林　文溪堂　敬白

風月花情　春告鳥卷之六　了

# 風月花情 春告鳥三編序

來る春も、また來る春の、いちはやく、おなじ音をなく鶯の、玉の聲よりうらゝかに、明くる初春初日影、光かはらぬ初空を、珍らしさうに見はやすぞ、實に太平の人ごゝろ、三都はいふも更なり、おくれがちなる片田舍、山里の侘住みも、心ざいさむ春の色、梢の雪の眞しろきも、いつしか融る初花や、その立枝さへ佐保姫の、霞の袖の深みどり、操たゞしき姫小松、野邊に賑ふ若菜つみ、こほりも今日は解けそめし、若水汲むや澤邊の水、四澤にみつる春水先生、御ひいきゝきに人をばえ、幸ひ今度下りし序に、狂訓亭をたづねたれば、稽古ながらに此の本の、序文を綴りて見よかしと、いとねんごろなる言葉にあまえ、藪鶯のさえもなき、音色を恥ぢず片言を、こはたゞなから並べ記して、爲永大人の門に入つたる、戯名を世に春告鳥、初音をやう／＼出すのみ、狂訓亭をひいきの諸君、何とぞ我が名をも、呼ばせ給へと願ふになん。

江戸人情本作者の元祖
狂訓亭爲永春水門人
尾州一の宮　狂花亭爲永春蝶述

# 風月花情 春告鳥 巻之七

江戸 為永春水 著

## 第十三章

鶴が岡の宮居より、海手にあたりて築地あり、そのころ新たに出來しにあらねど、久しくしんちよといひならはして、こゝにも多くの酒樓あつて、酌取る美婦人數多つどひ、深情笑語おもしろく、若宮小路になを／＼劣らず、これは何屋かしらねども、一かたならぬ其のなかへ、水あげしたるものおりて、たがひにまづくなりける折しも、丁度兩人が胸と胸、思はく出來て男のかたより、離別の口說の牀の中、珍らしからぬ事ながら、つながる縁の筋立ゆゑ、いさゝか他文をかきつゞれば、また哀れにもはかなくて、情を知るの教訓ならんか。 男音次郎三十才ほど「昨夜はおたのしみだつけネ。」女お雪十八才位。「なにがさ。」音「なにがもよく出來たナ、コレおめへもいいかげんに、人を馬鹿にするがいいぜ。」ゆき「ヲヤ何を私が馬鹿にしたのだヱ。」音「そんなにしらをきらねえがいい、コウこの間も何と言つた、

たとひ深いわけはねえにもしろ、俺が氣にくはねえ奴だから、銀八とかいふのはよぶなといつたら、ナニありやァ、モウ呼びはしねえ、豐松から左樣いつて來たときに、手づよく斷つたと、おれが前では口ぎれえな事をいつておいて、此の節はしげノ\來るぢやァねえか。讒ッ吐きめエ。」ゆき「ナニ讒を吐くものかネ、思ひも付かねえ事をおいひだョ、をかしいネエ。」貢「ヘンやつぱりおしきるつもりか、コレこりやァ何だ。」トふみをなげだして見せる。ゆき「オヤ何だえ。」ト手にとつてびつくりせしが、胸だくみをして、ゆき「オヤ、こりやァ、モウ久しい以前の文だわネ、鼻紙の中にあつたから、枕紙にでも仕ようと思つて、そこらへ置いたのだわネ。」貢「ハァ左樣か、久しい以前といふが、おれが斷つたのは六月の事だぜ、左樣して見りやァ、六七八と三月にしらならねえ、コレ今月の十五日の外に、八月十五日といふ月があつて、八幡の祭が外にもあるかエ、コウ、こりやァ今月の祭の文だぜ。」ト、いはれていよノ\お雪は當惑、さしつかへて居たりしが、ゆき「オヤノ\、それぢやァ私の文ぢやァないョ、他家の妓女衆の文を、お客でも持つて來て落したのだらうわネ。」貢「コウ他家の同じ名の、女の文を手前の袂へ、入れに來るお客があるものか、それよりやァ惚れた男だから、呼ばねえ樣には出來ねえといへばいい、其の方が馬鹿にされねえだけ、此方もいいやァ、その上に昨夜も初めて來た客に、鳥渡惚れをしたのも知つて居らァ、愛想のつきた女ぢやァねえか、これからァ此の文を證據に、だれでも

好きなものを酌に呼ぶから、其の時ぐう／＼言ふなョ、ばかにされた念ばらしに、こゝの宅で恥かすがねえければならねえ。」ト、言ふはかねて此の家にて、情人になりし女の有る故なり。ゆき「そりやァおまへが倦きた日には、廣い世界は兎も角も、此の場所の中何所へでも、往きなさるのは詮方もないが、此の宅で左様しなすつちやァ、どうも私が立たないから、そりやァ何所までも障をつくよ、無理を言つていなさるとも、堪忍しておくれナ。」音「へゝ蟲のいいことをいはァ、障をつくとも小言をいふとも、勝手にしろ、女中や若衆でわからねえけりやァ、親方にわけを話して、立派に見立代をして見せらァ。」ゆき「それはお客の威光だから、何でも無理が通るけれど、おまへに限つて其様なことを、お言ひだらうとは思はないから、親も無疵で産んだからだへ、疵まで付けて今さらすこしのことを言ひたてに。」ト、いひながら涙ぐみて、さしうつむく風情、くどく言譯をするより哀れにて、丈夫この手にて、よわる男多し。されども音次郎は情人があるゆゑ、平氣にてかはいさうだとも思はず、お雪はいまだ年がゆかねば、古きなじみを捨てるもをしく、殊に情女の出來しをさとりしことなれば悲しくなりて、ゆき「モシ音さん、おまへも餘り手づよいねえ、何ぼお徳さんと情合があるといつて、わづかの事をいひ立てにせずとも、倦きたから否だと、男らしくいつておくれの方が、私のあきらめにもなるわネ、此方でいくら惚れて居たといつて、おまへがあきた日にやァ詮方がないから、わけて

へたてば私やアどうでもなるわネ、それを今さら其の樣に、邪見なことをいはずともよさそうなもんだ。」音「ヘン、ドヽ一の古いのを、まるでならべてくれる事もねえ、邪見ばかりが男の辭よとは、極古いいたことといふものにもあらア、エ、人をつけにした、新子同前の手めへに突き出されちやア、音さんのお名が捨たらア、突き出されねえうち、此方からきりあけて、これから手めへの、末をとげる色ごとを、高見で見物だア。山賣の反魂丹を、水へはなしはしめえし、人をばゞる〳〵まはしものに仕やアがらア、何ぼうぬが美しくつても、うか〳〵と來るものか、此所へ來て居ねえ日でも、此の土地のことが心にうかんで、手めへの仕打ちは巨細に、おれが耳に這入つて居らア。二十三夜の勢至樣へ鹽斷をしやアがつて、銀の野郎を呼びてえと、願掛けをしたことまで知つて居らア、面ア見やアがれ、蛙の水をあびた樣に、しやア〳〵としてけつかるぜ、いめえましい女だ。」ゆき「モウいいかげんにおしな。」音「ナニいいかげんにしろ、申譯が出來ねえと思やアがつて、我慢の平氣も利いた風だア、わるく落付くなえふさ〳〵しい。」とならべ立てたる惡言に、お雪はしみ〴〵腹立てども、さすがに年もゆかざれば、愛想盡かしを言ひ返すほどの、手強き所爲もなければ、悔し涙を流しながら、ゆき「そんならお前の勝手におしな、これ程わけを言つても、聞き分けねえとはあんまりだヨ。」ト、濾返紙にて涙をふく。音「ヘン泣いて廊下で舌を出しが、聞いてあきれらア、泣いてよければ私がなくか、エ、

人をばかにした。」ト、流行おくれの唄や、つまらぬおもしろくもないせりふにて、無理な口舌、女もこれにて底心愛想を盡かし、さまでに思はぬ客と、情人にもなりて、面あてをする氣にもなるものなるべし。かかる座しきの鄰には、和哥町より住みかへたる小ひな、いぜんの名は伸吉、ひな「友さん、おまへも種々な事をお言ひだねえ、たま〳〵は氣をもませずと、遊んでお歸りな。何でも此の頃おやァ、何所へか行く所が出來たのだネ。」友「ナニ〳〵、左樣いふ事ぢやァねえ、手めへも知つて居る鳥雅さんの事で、是非田舍へ往つて來ねえぢやァならねえ。」ひな「すりやァ鳥雅さんは、上方へお出でで、こつちには居やァなさらねえとお言ひではないか。」友「さればサ、それだからその上方の、鳥雅さん所から、手紙が來たに付いて田舍に行かねえければならねえ。」ひな「否々ずるいことをお言ひな、また上がたへ往つて情通をしようと思つて、誰がおまへのやうな女好きな人を、好女の澤山な、上がたへやられるものか。もしお出でならば、私も同伴に行くヨ。」ト、言ひながら、男の顏をぢつと見つめる。友「へ、先くぐり詐りすらァ、惡い癖な。田舍へ往つて來るといへば、上方へ往つて情人をするのなんのと、上へ行つたと言つたつて、女が自由になるものか、上方でも長崎でも、手前に見かへる女もなければ、手前の樣に浮薄女もねえわな。」ひな「すヤ〳〵、何時私が浮薄をしたことがあるエ、サァそれをお言ひな、だれと私が、其樣なことをしたことがあつたエ。」友「なくッてサ、稻荷横町をまはつて、此度

か四度同じ家へ往つたことせえあるぢやねえか。」（これはそのみの上にありしことをわらひながらいふ。）ひな「およしなねえ、其樣なつまらないことを、そりアおまへが私をまごつかせたのだわネ。そりやアよいが田舎へ往つちやア否だョ。」友「田舎へ往つたといつて、半年も一年もかゝりはしまいし直だア。」ひな「それだつて、百三十里とかあるぢやアないかえ。」友「そりやア上方のことョ、おいらが往くといふのは、舟へ乘ると一夜に往かれる所だア。」ひな「オヤ上方ぢやアないのかえ。」友「ナアニ、安房國長狹郡西條花房といふ所だ。」ひな「オヤ／＼、それぢやァ小松原の所だネ。」友「小松原の所たア何のことだ。」ひな「アレ御難の所だといふ事サ。」友「サアなほわからねえ、しかし御難とは否な辻占だ。」ひな「お祖師さまの御難の所だわネ。」友「ム、左樣か、やう／＼わかつた、おいらア門徒だから氣が付かなんだ。」ひな「エ一向宗だエ、鶴龜々々フッ／＼／＼。」友「アハヽヽヽ、おほべらぼうめえ、宗旨にいいわるいがあるものか。」ひた「實正に門徒だと、わちきやア料簡があるョ。」友「堅法華めえ、俺が一向宗ならば離別る氣か。」ひな「きれずとよいが改宗をしておくれな。」友「手めへ門徒になるがいい、身上がよくならア。」ひた「オヤ／＼左樣かえ、それにまたなぜおまへは門徒で居ながら、工面がわるいのだえ。」友「女房が法華だからョ。」ひな「女房とはエ。」友「エ、知れた事だア、手めへが法華ぢやアねえか。」ひな「オヤ、おまへ先頃中上事寺だとお言ひぢやァねえか。」友「左樣ョ、手前と情人になりてえから、俄に法華だ

と言つたのだァ。」ひな「嘘をお吐きな、其のまへはじめて私を呼んだ時に、保里の中のお洗米をもつてお出でぢやァないか。」文字「左様ョ、其のはじめつから、種々心配をして、やう／＼此の位になつたのだから、今突き出されちやァつまらねえ。」ひな「ウムようかし突き出される風だァ、私やァ最う今ぢやァ後悔をしてゐるわ。」文字「ナゼ／＼。」ひな「なぜもいいねえ、私が此樣に苦勞をして居るのを、かまはねえで、諸方遊び歩行く癖に、私を疑つて何ぞ間違があつたらば、それを手にして上足をとる氣で、お出でぢやァないか。」トいふ所へ、女中來りて障子の外より、手紙をさし出し、外の座しきへ出しものを運びながらと見えて、女「置いて歸りましたョ。」文字「ハテナ。」ト、手紙を讀んで、文字「イヤ此の手紙ぢやァ明朝立たねえければならねえ。」ひな「連があるのかえ。」文字「左様ョ、喜代太夫が旦那思ひの男だから、鳥雅樣の頼みはねえが、恩返しに一骨折りといふから、同伴に行くつもりだ。」ひな「はやく歸つておくれよ。」文字「しれたことサ、手めへより此方が不安心だァ。」ひな「アレサをかしいねえ。」

## 第十四章

佐介谷の芝居より、辰巳にあたる相坂町の、風呂家をいとなむ町唄女、浴衣を抱へて棲をとり、和倉の前をゆく折しも、風呂敷包を脊負ひし小僧、摺り違ひしが立ちどまり、過ぎ行く唄女の後影、つく／＼と見送りしが、後を慕ひて唄女の歸り、宅まで見とゞけ立ちかへる、發明らしき小僧の動靜、何故な

るか知らねども、一人合點きはしりゆく。そも此の唄女はいかなるものぞと、その素性を尋ぬるに、こゝへ來りて唄女となりしは、纔に二月許りにて、近き頃まで安房の國、花房の里に難儀をなして、種々の事に出合ひし、彼の迎島のお民なり。

作者曰く、此の草紙二編目にしるしたる、房州花房の續き、お民が伯母の藥をとりにゆきし歸り道、惡漢どもに出合ひし後を、くはしくしるさば、よみあき給はん事をおそれて、あら／＼こゝにしるしてはやく人情のうつりやすき所を、見せまゐらせんと思ふのみ。さてもお民と、今一人の娘をとらへし二人の惡漢は、お民が常に信仰せし、稻荷明神の應護によつて、配下の狐の通力をあらはし、道樂寺の本堂に化しけるが、彼の二人は舊惡ある族にて、其の折節召し捕られ罪に伏せしとぞ。思ふにお民と、今一人の娘と見えしも、皆狐の所爲と知られたり。かくてまた伯母なるものも病死して、寅吉が惡計にて、既に遊女ともせられんとせしを、やう／＼のことにて諸所を遁れ、やがて鎌倉に立ちかへり、唄女となりて、寅吉に身の代を與へて手切をなし、此の相坂町のお熊といふものの妹となり、名をも改めてお花と呼ばれ、酒宴の席へ招かれしとぞ。

男「ハイ御免なさいまし、薬倉井でございます、お花樣をお早く御頼み申します。」くま「ハイ只今直に上げます。」男「ハイ／＼どうぞ左樣ならば。」くま「オイ／＼彌助どん何樣だえ。」男「折居の木佐田樣で

ござゐます。」くま「イヤ左様かえ、有り難う存じますと、宜しく左様申しておくれヨ。」男「ハイ／＼。」
ト、歸りゆく。お熊は二階へ向ひ、くま「お花／＼聞えただらうの、手まはしをして往きなヨ。」はな「ハ
イたゞ今。」くま「ヲヤ／＼まだ化粧が出來ねえのか、のろッくさいネヱ、早く／＼しなヨ、そしてどうも
おめへの白粉は薄いヨ、お屋敷なんぞの節は猶の事、濃いのが德だヨ。」ト、二階へ上り來りて、化粧
を手傳ひ、せき立てゝ支度をさせ、出してやりながら、くま「大事にしなヨ、一通りのお客たアちがふ
ヨ、そしてなにを仰しやつても請けて居なヨ。此の間も他が噂をしたが、誰方なしに厘しきやうな樣
だ、あんまり慾のねえ子だといつたことがあるが、左様評判をされると、此方が損金だネ。親がいい
からといつて、てん／＼した日にやア、流行らねえものだ。」ト、出る先へたち、不吉とは思ひなが
らも、生得の内氣に心をなやますのみ、親も血緣もなき身には、姉とたのみしお熊が言葉、善惡とも
にすがらはず、はな「アイ、隨分氣を付けますヨ。」ト、立ち出いるその姿、折手ながらも押し立ては、
近年稀なる世間の風聽、あれで最少と色氣があれば、よき仕合もあるべきにと、見送る門へ來かゝる
男、二十四五歲の旦那風、後より來るは清元常八、當「モシヤア、餘り早足でござりますネ。」旦「それ
だッて、おめへは途中で女を見ると、足がとまるから、ちつともあかねえ。」當「ヘ、つまらねえことを
おつしやる、浪花町の角で、小便をする中に見えなくおなりなさつたから、何樣にかまご／＼いたし

ましたらう。トキニ例のお咄のは、此所でごぜえます。」旦「サアそれだから、おめへ先へ這入つてくんねえな。」ト、遠慮の様子、お熊ははやくも見付けて、くま「オヤ〳〵いらつしやいまし、常八さんサアお這入りなねえ、なぜ立つて居るンだえ。」常「エ今衣紋を直して、めかしてからはひるつもりサ。」くま「オヤ左様かえ、それぢやア私もおもひれ化粧をして、お待ちうけをすればよかつたネ。」ト笑ひながら、出格子の障子を〆めて、沓脱の方の障子を内より明け、くま「サアマア貴方お上り遊ばしまし。」常「イ、エ、門口からお帰りなさいまし、どうも旦那を爰の宅へ、お入れ申したくございません。」トからかひながら二人とも家内へはひる。くま「サアお上り遊ばしまし。」ト、中臺所を越して、奥の四疊半の間へつれて行く。二間に九尺の庭、巾の狭き縁側、右の方のはづれを少しはり出し、向うの塀際に雪隠ありと見ゆ。お熊は縁側から、井戸ばたの方へ聲をかける。くま「清や〳〵、お客があるからはやく來なよ。」ト、いひながら座しきへ來り、火鉢へ炭をつぎながら、くま「今日はどつちらへいらッしやいました。」常「今日はネ、旦那がお前にあらためて、お近付にならうと被言るから、それ故お供をさせて參じました。」くま「オホヽヽヽヽ不躾なことばつかり。」常「なぜえ、お供をするもさせるも、同じ事ぢやアねえかネ。」旦「駕籠をかつぐもかつがれるも、心をつかふだんになりやア、同じ事サ。」ト、笑つて居る中、常八はお熊を呼び出し、勝手にて囁く。たしかに酒肴を言ひ付けて貰ふのならん

か。これよりしばらく杯ごとあり、その風情は畧してしるさず、よろしく察したまふべし。既に酒も久しく汲みて、日も暮れたるをりしも、表の方の障子をあけ「ヘイチト御免なさいまし、此方に常八さんはお出でなさいませんか。」常「アイ〳〵。」と立ち出で何か咄し合ひ、座敷へ來り、常「旦那どうぞ少しの間、おひまをお願ひ申します。」旦「オヤ左様か、それぢやアおいらも歸らう。」ト、立ちかゝれば、くま「何だエ、常八さん誰が來たんだエ。」常「ナニ勘次が、此間中たのんだことで、ちよつと新川まで行つて來ます、どうぞ少との間お頼みだヨ。」旦「清元勘次か。」常「エイ左様サ。」旦「それぢやアこゝへ呼びねエナ。」常「エナニ勘次の使でございます。」くま「そんならば、はやアく往つてお出でな、旦那をばお待たせ申しておくから。エ旦那え、おそくともお待ちなさつて、つかはさいまし。」常「それはありがたう、其様ならば直に往つて參じます。」と無理にお熊に頼み置き、その身は急ぎ出で行く。跡にはお熊と彼の旦那、遠慮なければうち解けて、倶に醉をぞつくしける。抑此の旦那といふは、相應なる通人にて、名を何とかいふを知らねど、俳名を梅里とよびて、隨分女郎唄女にもなじみありて、面白き身のうへなれど、いかなるゆゑにか此のほど、この家のお熊に思ひをかけて居たりしかども、言ひ寄る手つゞきもなく、日を過せしうち、清元常八が心易きよしを聞きて、今日わざわざと來りしなり。理なるかな、此のお熊も、年は二十七八歳なれども、いまだ定まる夫なく、家

は弟の名まへにて、元來氣勝の生得、派手なることが好きなる故に、近き頃まで座しきを勤め、まだ白歯でも憎からぬ風俗、殊に近年は少し時節に外れたる、歳増女の島田髷が男の目に付いて、流行る折からなれば、すべての出立娘風の、おかみさんが多く、歳増女仕立を好む娘、また少なからず、二十歳にして緋鹿子の切をかけ、七歳の兒女紫ちりめんのまけ紐を好む。嗚呼世の中の流行、其の是非に辨ずることあたはず、これしかしながら夏の土用中に納豆を賣り、元日から拂ひ扇箱とよくをかき、萬事はしり過ぎて、あとへもどるものゆゑなるべし。それはさておき、お熊が姿をこゝにしるさば、いま唄女を止めてより、却つて其の時の風はなく、黒紬に三ッ龜甲の紋付、もつとも黒繻子織留の上に、金銀にて蝶々を縫ひし野暮なる半襟をかけ、下著は本八丈の、三升格子の黄綠、極色の薄き花色、裏紫の山繭に、媚茶の小緞子を腹合はせにせしおびを〆め、繻袢の袖は兼房の小紋縮緬へ、もえたつ樣なる本紅の裏を、毛拔き合はせに付け、半襟は大紋りん子を、紫と淺葱にて、摑み絞りにしたる素人染の思ひ付き、もつとも衣紋の所へ、紅入の友禪ぞめの、縮緬の胴がすこし見ゆる。襟おしろいは松本の舞臺香、貌は仙女香の別製、龍腦の匂ひ梅花のごときを薄くつけ、紅も笹屋の色好み、眉毛を剃りし跡眞青に見え、黒目勝に力身ある眼元、はげし相に思はれても、聲は鶯の如く、男へ對しそのものいひは、あまえずして自然に色氣あり、音曲の諸藝は、いづれも師匠の出來る所爲

にて、別けて園八節のくどき、古今の名人なりしかば、近所の唄女も姉さん〳〵と敬ひて、教へられんことを願ふ。斯くのごとくなれば、これまで宜き旦那が種々に言ひ寄れども、上手にあやなして、一度も男に身を任せしことなきは、小野の小町のたぐひならんと、噂をせしとかや。實に世の中の人情は、得難きを求めたがり、なりがたきをこしらへたく思ふが常なる故か、梅里もこれを見聞きして深くしたふ心の發り、今も次の間へ立つて行く、後姿を見送りつゝ、溜息を吐いて、手に持ちし煙管、膝のうへに落し、吹きがらのちるをはらひ除けて、鼻紙入の小菊を一枚とり、金入より金を出して、五百疋ほどつゝみ、別に五十疋をも紙にひねりてさし置きけり。必竟いかなる所爲なるや、さらに其の意をしることかたし、次々の卷をよみ得て、おのづからに察したまへ。

うぐひすや竹の子藪に老を啼く

かくはいへども、人々の好みにより、思ひ入りに依つて其の情は深かるべし。

風月花情 春告鳥卷之七 了

# 風月花情 春告鳥 卷之八

江戸 爲永春水 著

## 第十五章

雲の鬢霞の眉、雪の膚と天地の、氣にも譬ふる美女の、情人まつ宵の油賣り、嬉しと思ふ曉は烏の聲も恨めしき、そのきぬ〴〵がまた兼言と、なるまで深き中といふ、はじめになにが媒人ぞ、男女の多かる世に、思ふ人より他所外には、男女もなき樣に、こがれこがるゝ戀の路、實に月下氷人の所爲にやあらん。爰に相坂町の、お熊をしたふ一個の通子も、過去の緣のあるゆゑか、思ひ詰めてはなか〳〵に、わすられずとや今日もまた、お熊が許へ音信るゝ。表を伺ひ路次へまはり、しづかに勝手口の腰障子をあけて、梅「御免なさい、オヤ大分おしづかだねえ。」ト、立つて居る。中の間の障子の內、女の聲「ハイ何人。」ト、いひながら障子を少しあける。梅「ハイ私、あんまりお靜かだから、考へて居りますのサ。」くま「オヤ〳〵、何御人かと思つたら、よくお出でなさいましたねえ。」ト立つ

て、出迎へ、「サア此方へ。」ト、言ひながら、次へ来る姿を見れば、茶みぢんの艶なし上田紬、下著は縞縮緬の、媚茶の小辨慶を二ツかさね、もつとも花色羽二重の裾まはしをつけ、御納戸しぼりの長襦袢、淺葱縮緬の湯具、黒朱子の帯をしだらなく結び、紬を御納戸と媚茶と、鼠色の染分けにせし、五分ほどの手綱染の前垂、紐は松葉色の、呉呂服綸の端を裁ち落せしを、幅を狭くして付けたり。さて髪は、いまだ髪結さんが来ないと見えて、初んどりといふ、梅花のふけとり薬の水油にて、よく梳き上げて、結んで貰つた達摩がへしへ、大きな珊瑚珠の、菊座の玉を付け、鼈甲の浮なしへ、四分一の散らし蒔繪をしたるを中へ指し、象牙の中へ青貝にて、南天の葉を彫り入れ、南天の實は、〇此のくらゐのさんごじゆを寄せて入れたるさし櫛をちよいとさしたり。作者曰く モシ好風なこしらへでございませうね。

猶詳しくいはば、少し寒邪がしたと見えて、大辨慶の廣袖、黒袷子の衿のかゝりしを上に羽折りて、今日は湯へゆかぬと見えて、素貌の眞白なるうつくしさ、紅を少し付けたるは、今漿水を付けたる所とおもはれたり。抑はかなき事をしるすに似たれど、時代の風俗を、百年後の好士に見せんとて、をさなくもかい付けぬ。くま「サア此方へおいでなさいましなねえ。」ト、言ひながら、上に羽折つて居たる廣袖を、さらりと兩袖から脱いで仕舞ひ、くま「今漿水を付けて仕舞ひましたら、何だか戰慄がす

る様になりましたから、此様な衣類を致して。」トいふは、強氣い女だと思はれまじとする、男への會釋なり。くま「サア火鉢の際へお出でなさいましな。」ト、炭をつぐ手元も雪の如し。梅「モウおかまひなさんな、私やアまた餘りしづかだから、お留主かと思つたのサ、お獨りかえ。」くま「ナアニ、今清は湯へやりました、理助は はこまはしのことなるべし、すべて略したる文あり。 あの子の迎へに參りましたヨ。私一人で寂しいから、本を讀んで居りましたのサ。」トいひながら、繪入の本を脇へ片寄せ、くま「サアマア御安座となさいましな、今お茶を入れますヨ、今日は何所へ。」梅「エナニ、何方へとおつしやつて、此御許へ來ましたのサ、此間も鳥渡參つて、大きに酒べ醉つて、どんな不調法でも言ひはしないかと思つて、申し譯ながらまた少し酒べ醉ひたく來ましたのサ。しかし折角本を看てお在でのところを。」くま「ナニ本を見て居ると申したツて、たわいのない本でございますわね。」梅「ナニ左樣でもございますめえ。ハヽア、娘七種かネ。」トいひながら、中本をとつて序文をよみ、梅「金龍山人狂訓亭爲永春水か、よくいろ／＼な名を書いて置く作者だ。」くま「左樣サねえ、全體元は南仙笑楚滿人と、申しましたねえ。」梅「左樣サ、二代目の楚滿人サ、大そうに弟子なんぞも出來やしたツけが、なぜ名をかへやしたか。」くま「オヤ、それでも狂訓亭としてからは、弟子任せにしないと申すことでございますが、そのせゐか近頃の中本は、この作者が一ばんおもしろうございますヨ。それは左樣と私も丁度寂しくッ

て居る所でござゐますから、誠に嬉しうござゐますわ。今に清が歸りますから、ナアゆつくりとなさいましヨ。」ト にっこりとして たちあがり、 違棚より茶の箱をとりいだし、菓子皿などを持ち出で、鐵瓶の湯を土瓶の中へうつし、茶を氣ながにはうじて、煮え立つたる土瓶の中へ入れうとて、しなやかなる指を湯氣にてやけどをなし、耳をおさへ、左の手にて、土瓶を五德の脇へかけてならし置き、猪口のやうなる小器茶碗でありさうな所を、朝鮮湯吞の新しきへ、茶を汲んで出し、くま「サアお茶を一ツお上んなさいまし、そして美味しくもないお菓子だけれども、お取んなさいましな。」梅「さつそくお茶が出來ましたネ、一ツいたゞきませう。」ト茶碗をとつて見ながら吞み、梅「おもしろいお茶碗だネ。」くま「ナアニお茶がおいしくない樣な色に、うつりますけれど、お花が此間千島さまで、頂戴いて參つて、まだ一度も遣ひませんから、貴君へ上げました。」ト云ひながら、火鉢の引出しより、船ばし屋の振出しを火鉢の角へ置き、くま「金平糖を一ツ、しかし何樣だか、もらひましたのだから知れませんヨ。」梅「それなにごちそうなすつては恐れ入ります。しかしお清どんが、早く歸つてくればいいネ、御面倒でも歸つたら、どうぞ少し飲べようぢやアないかネ。」くま「サア宜うございますヨ、最う今に歸りますヨ。」梅「酒盛もいいが御迷惑だらうネ。」くま「ナアニ、めいわくなことがございますものかネ、私も丁度よいと思つて居りますのにねえ。」ト笑ひ顏をする。梅「それでも程のいいおまへだから。」トヤヲ

れは左樣と、先刻から忘れきつて居た。」ト云ひながら、袂より何か小さく四角に、紙にて封じたる物をいだし、梅「今日は何も持つて來ないが、これをお土產に上げよう。」くま「オヤ何のお土產がいりますものか。」トいひながら、彼の包みしものを看て、くま「そしてマア、何でございますか、誠がありがたう。」梅「何だとお思ひだネ。」へま「左樣さねえ、なんでございませうか、お猪口の樣でもありますが。」ト考へて居る。梅「知れますかネ。」くま「左樣サ、只上にはおのし許りだから、どうも知れません、マア何でも器物の中でございますねえ。」梅「左樣サ、マアだうぐでもないネ、持遊びサ。」くま「オヤオヤ、お手遊びかえ、それぢやア急度私の好きな、小細工物だねえ、何だらう最うじれツたいネ、早く見たいねえ。」と手にとりあげ、何か嬉しさうに封じを切る所へ、下女お清、湯から歸つて來る。くま「淸かえ。」きよ「ハイ。」ト中の間へ來て、きよ「お客さまでございますかえ。」ト、梅里を見ておじぎをしながら、きよ「これはお出でなさいまし、此間は有りがたうございます。」トいつぞやもらひし禮をいふ。梅「イヤお禮ではいたみ入るネ、トキニおまへのかへるのを待つて居た、どうぞまた今日も、お世話になるのだがわりいかネ。」きよ「ナニわるいことがございませう、今日は宅の姉さんも、すなはちおくまをさしていふ。氣がふさぐと云つてお在でなさいましたから、丁度お賑やかでようございますヨ、ドレ往つてまゐりませう。」ト立つ。お熊は最前より餘念もなく、手遊びといひし箱の封じ紙をとつて、やう／＼箱のふた

をあけようとして、くま「ア、清や、はやく往つて来ておくれヨ。」トいひさして、また箱のふたをあけにかゝる。きよ「ハイ往つて参りますが、何をマア一心になつてお出でなさるんだか。」トいへば、お熊は恍惚として、くま「今お土産におもらひ申したのサ。」きよ「大分かはいらしい箱でございますネ、おまへさんのお好きな。」トいひながら、台所の方へ行く。くま「ア、もしお清どんエ、どうぞおまへ往つておくれなら、御如才もあるめえが、此間のとほりにして、そして帰りに親父ばしの和田で、大概なをたんと焼いて、お饅を付けてよこせと、言ひ付けて来ておくれ。そして仕出屋の方へは、王子蒸の中へ、ぎんなんを多分入れてと、左様いつておくれ、此方の姉さんがお好きだから。」きよ「ハイ／＼かしこまりました。」と出でて行く。さてまたお熊は、彼の箱のふたを開けて、くま「オヤ／＼、マアかはいらしいねえ。」トいひながら、箱の中に、吉野紙に包んであるものを一ツづゝ出して見る。

これは京都土産の芥子人形なり。近来何にかぎらず、小細が流行り、ひなの道具なんども、こまやかなるを愛することは、お娘御さんがたの御存知なるべし。

伎の人形は、祇園町の唄女舞子、妓女そのほか仲居小女子なんどか、いこらお客の席にて、さわぎ居る體、座敷一統赤小豆粒ほどにこしらへ、客は喜世留を持ちたるもあり、杯をもちたるもあり、幇間は黒羽織にて、奇妙なる手つきをして居る類を、幾数ともなくこしらへて、凡そ人物

は二十四五人ほどあり。そのほか臺の物、吸物どんぶり、皿の類をのせたる臺の大きサ、赤小豆よりも小さく、燭臺は米粒ぐらゐるもあらんか、猶その外の品も、いろ／＼器用に彩色して、こしらへたるを、四方三寸ぐらゐの桐の箱へ入れてあり、その箱のふたを引つくりかへせば、疊を敷きたる樣にさいしきしたり。それを座しきとなして、人形をならべるそのこまかなる手際は、賞めるにたとふるものなし。

嗚呼看るもの聞くもの何に寄らず、日々に新奇に競ひ、自由の上に自由をなす、しづけき御代の節に住む、兒女童子たちよ必ずしも、おろそかに思ひたまふことあるべからず。今より二百餘年のむかしは、三度の食事もやすからざりしを、上々の御惠みにて、かかる太平を樂しむことと尊み給へ。

## 第十六章

くま「オヤ／＼綺麗でございますネエ。」梅「その箱のふたをかへして、その上にならべるといゝヨ。」トいひながら、箱のふたをひッくりかへし、疊のさいしきの所を出してやる。くま「オヤマア、どうもどうも、よく出來て居るぢやァございませんかねえ、そしてマア此の髮の風をこしらへた所から何から、モウ／＼何とも賞め樣のない樣でございますねえ。オヤ此の蓋がお座敷でございますネ、どうしたらよからう、どうも／＼感心ぢやァございませんか、このお座しきへ、みんな乘つて仕舞ふのだも

のを、小細はずだ。」ト、いひながら、段取をしてならべ、くま「どうも寔にありがたいねえ、どうして
これが考へたと申して推量りますものかねえ、まことに〳〵嬉しい。」ト、餘念もなく悦ぶ風情、自然
とあどけなく見えて、十五六の娘の如し。梅「なんぼ才物なお前でも、當らなかつたネヱ。」くま「イヤ才
智が否でございますヨ、おまへさんこそ御才智とやらでございますわ。人の嬉しがる樣な事ばッかり
おつしやつて、そしてマァおせじがよくッて、下女にまで丁寧に物をおつしやッて、それだからあの
子や、おはなのことをさしていふ。お清までが、理助でも誰でも、不躾ながらお賞め申して居りますわ。」梅「イヤ又
お前のお口前はその通りだものを、それだから、私なんぞは行き屆かねえから、歸ッた跡では、さぞ
さぞうるさい奴が何時までも居て、忘屈だといはれないうち歸らうと思つても、ツイ長くなつて、後
ではどうも氣の毒でならないから、言解ながら參つてなんぞと思つて、やつはり來たいからだねえ。
さぞさげすんでお出でなさるだらう。」くま「まことにどうもおまへさんは、女郎衆でも買ひにお出で
なさるか、可愛いと思召す情人のところへでもお出でなさつたら、さぞ先よりは手とやらが、おあん
なさるだらうねえ。」ト いふ所へ、出し拔けに下女、げぢよ「マァ〳〵、左樣お二人で、賞美ッくら許りし
てお出でなさらずと、お燗が出來ました、お肴の參りますまで、御漬物ででも、一口お上んなさいま
し。」ト、燗ちやうしを袴へ入れ、足なしの好風な臺の上に、小品丼へ種々ならべ、へうたんの清まし

しどんぶりへ水を入れ、かはいらしき猪口を二ツばかりならべ持ち出で、きよ「やつぱり中の間で宜うございますか、奥の火鉢へ火を入れませうか。」くま「オヤ清か、びツくりしたヨ。何時の間に歸ツて來たのだえ、障子の音もしなかツたのにヨ。内證ばなしをして居ないでよかつたねえ。」ト、男の顏を見て笑ふ愛らしさ。何とか思入ある女の、かかる言葉をいだす節は、誰とても胸のとゞろくものなるべし。梅「どうぞ内證ばなしといふことを、一生の中にして見たいもんだねえ、お清さん。」きよ「オホホ、、、おまへさん其樣な事をおつしやつて、ネエ姉さん。」くま「左樣サ、それぢやア私が内證ばなしをしないでよかつたと申したが、自惚らしいと思召すだらうナウ。」きよ「左樣サねえ、あんまり何もおつしやらないがようございます、下目んでお在でなさるも知れませんヨ。」梅「コウ〳〵、おほえてお在でよ、おまへまでが其樣なことをいつて、何樣してもまた違つたもんだねえ、お召仕までが。」くま「アレまたあんな世事をおつしやるヨ、夫りやア宜いが、此所ぢやア餘り麁末らしいねえ、奥へまゐりませうぢやアないかねえ。」梅「ナニ〳〵こゝがようございます、又お客でもお出でなさるとわるいから。」ト、いひながら、ちよいと立つて居直り、梅「サアマア、おもちやは後にして、御酒におかゝんなせえナ。」ト おくまはわらひながら人ぎやうをかたよせ、くま「さやうサねえ、放蕩れきつてお前さんが、内の者の樣だねえ可笑しい、併しどうも大事で氣になりますヨ。」ト、いひながら、人形を吉野紙に包み、元の如くに

仕舞ふ。きよ「何でございましたか私も見たうございましたねえ、よく／＼お氣に入ッたと見えます

ネ。」くま「ア、モウ／＼、氣に入るの何のどころではないヨ、今出すとまた、御酒をあけるのに邪魔になるから、跡でゆつくりと見せるヨ、あの嬢に見せたら、さぞ嬉しがるだらう、サアマア一ッおあがんなさいまし。」ト、猪口を滌ましておく。隼「マア／＼、お始めなさい。」ト、いひながら燗でうしをとる。くま「マア／＼、其樣なことをいはねえで。」ト、麁末に言つて心づき、きよ「すヤ御免なさいましヨ、サアおまへ樣からおはじめなさいましな、今家内の者の樣におなんなすつたからサ。」隼「そんなら仰せにしたがつて、始めませう、少しの内もお宿のものになる氣でと、自惚のお猪口はじめと致しませう。」ト、猪口をとる。お熊は先刻の言葉より、いよ／＼色氣を含み笑ひながら、くま「先刻しがたの、同庵相としてお酌を。」ト、燗でうしをとつて酌をする。をりから勝手の障子を明けて、一「ハイおあつらへでございます。」きよ「アイ／＼、御苦勞でござい、其所へ置いてお出で。」ト、言ひながら立つて、來りし肴を臺へならべて、座敷へ出す。隼「サア おまへのお好きな、銀杏の多分はひつた玉子蒸が來たから、澤山おあがんなさい、サアまづお猪口を。」ト、お熊へさかづきをさす。これよりいろ／＼酒事ある、其の所へ、またもや障子の音ガラ／＼／＼、女がみゆひお元、もと「ハイ今日は、おほきにおそくなりました。」しよ「すヤお元さんかえ。」ト言ひながら、中の間へむかひ、きよ「お元さんが參り

ましたがどうなさいますエ。」 くま「ア、どうせうねえ。」トすこし考へて、くま「どうぞ明日にしておくれといつておくれな。」トいふを、お元は直に聞き付け、もと「左様なら、明日参りませう、今日は遲くなりましたから、どうだらうと存じましたが、それでもと思ひ直して、ちよいとお寄り申しました、左様なら、明日は早ァくまゐりませうねえ。」 くま「ア、どうぞ左様しておくれな。」 もと「ハイ左様なら。」ト、かへりゆく。 梅「私には決しておかまひなさらずに、お髪をなさればいいね、それぢやァお氣の毒だ。」 くま「ナァニ左様ぢやァございませんョ、私の我儘でございますネ、御酒をすこし給べると、どうも無精になつていけませんョ、それだから女は、御酒をたべないはうがよいと申しますが、實正に左様でございますわ、外を歩行いても、女の醉つてぐた／＼して歩行くのを見ますと、モウモウ見ッともないから止めようと思ひますけれども、ツイたべてなりませんわ。」 梅「ナァニ左様仰しやるけれど、おまへさんのは、寔にいやみのない、癖のない上戸だからいいのサ、またあんまり上らないでも、御活業がらでわるいからといつて、やつぱり心なくおまへを御相手にして、數刻までもたべようといふのではないが、丁度いいほどの御酒だからいいのサ。私なんぞも酒を吞むと、どうも思はず口數をきいたり何かして、他さまの氣に入らぬこともあると見えて、兄きなんぞにやァ、トキドキ叱られますけれど、どうも少しづゝたべないと、寔に心さみしくつてならないから、外の樂しみ

はなしと、ツイたべてなりません。」くま「オヤ〳〵、いかな事でもおまへさんこそ、まことに癖のない和かな、いい酒だとまうして、衆人お噂をいたしましたわ。わたくしなんざこそ、どうもさつぱりになつていけませんヨ。」梅「ナァニ左様でないのサ、酒はわるいと難癖を付けて見ると、男でも酔つた日には、やつはり外聞のわるい事がありますのサ。」といふところへ、また〳〵蒲焼をもつて来る。きよ「ハイおあつらへが出来ました。」梅「いろ〳〵大きにお世話さま、サァ〳〵おまへも此座へ来て、ひとつお上り、そして後で、衆人うなぎでお飯をおあがり。サァお清さん、酌をいたさうぢやァないか。」ト銚子をもつ。きよ「ハイありがたう。」ト猪口をとり、きよ「スヤはゞかりでございます、こちらへお貸しなさつてくださいまし。」ト手を出す。くま「スヤ私が酌いでやりませう。」梅「どうぞ私に、お酌をさせておくんなさいな、お清さんのお酌をして見たいからサ。」きよ「スヤどういたしませうネ、私やァまだ今年は、有卦に入りは致しませんはずでございますが。」ト笑ふ。

實にも人情のおもむく所、おのづから下女までも、かくのごとき洒落をいふ、勸學院の雀にあらねど、常住に馴れし口合は、さすがに土地にも依るものならんか。

さも〳〵、主女に対する此の客人の出立はいかに、左にしるして以て、流行をしるの一興とするものなり。

上著は媚茶の、二升格子の極こまかき縞の南部縮緬、下著は琉球紬一ツ、羽織は唐棧のおとなしきごまがら縞、帯は筑前の紺博多、しかも一本どッこなり、その外持物懐中もの、これにじゆんじて好風なることと、知りたまふべし。

風月花情 春告鳥巻之八 了

# 風月花情 春告鳥 巻之九

江戸 爲永春水 著

## 第十七章

倩も梅里は婢女の、言の葉草も野暮ならぬ、他愛相に感じ入つて、お清の顔をじろりと看て、梅「おめへまでが其の口才だものを、姉さんは申し分のねえはずだ、ドレお肴を。」トいひながら、蒲焼の蓋をとり、魚尾の方の味美所を、まづ二三本小皿へとりわけ、梅「これはマア姉さんのお初穂と。」ト言ひながら、お熊の前へおき、また二串三串とつて小皿へいれ、梅「サア お清どんお上り。」ト出し、紙入より金を二ツほど出して、紙に捻りてそつとお清の手にわたし、梅「お清さん、もう一ツお重ね。」トまたまた酒を汲ぐ。きよ「オヤこれは何でございますえ、ありがたうございます、姉さんどうぞお禮をおツしやツて。」トきよひしかねをおくまにみせる。くま「オヤどうも、毎度ありがたうございますネエ、其樣にお出でなさる度毎に、此方ではお心易だてばかりいたして、我儘なことをして居りますのに、そんなになすつて

はどうも、寔にお氣のどくでございますョ、お清やよウくお禮を申しな。」ト蒲焼をすゝめる。くま「ハイありがたう、いたゞきます。サアお前さんもお上んなさいな、今日のは格別美味しい様でございますわ。」梅「何だネ、其様におつしやると、かへつていたみ入るネ、サア〳〵おあがんなさらねえか。」このとき下女は、ちよくを、よくすましてさしいだし、きよ「はゞかりながらあなたへ。まだ私はお臺所に用がございますし、お燗を直して參ります。」ト立つを呼び止め、梅「マアいいわな、そしてうなぎをそればかり持つて行かずと、こゝで澤山喰べなせえ。」きよ「ハイありがたうございますが、今にまたお花さんが歸りますと、著物でも火燵へかけて置いて上げませうとぞんじて、火がたんと發してございますから、あぶなうございますから。」ト勝手へ行く。梅「イヤ實にお花様は、とんだ評判がいいねえ、おまへはお仕合だ、いい妹をおこしらへなさつた。」くま「ハイありがたうございます。寔に衆人さんが御ひいきになすつて、呼んで下さいますから、私も仕合でございますョ。そして當人が素直で、實體ものでございますョ。」梅「容儀はよし、藝は出來、それで實があつて言分なしだ。餘ほど愛くるしい、かはいらしい子だねえ。」くま「ナニ左様十分でもございませんけれども、しかし骨が折れませうョ、昨夜も丁度丑刻にかへりましたわネ、それからまた今朝直に早く、安堵に寢も仕ないで、ちよいと淨水をつかつたばかりで、すぐに出て行きましたから、どうかと思つ

て、理助をやりましたが、まだ歸りませんから、通しにでもなりましたか、それとも理助をかへしませんから、今に歸るかも知れませんのサ。かはいさうにさぞ骨が折れますだらうヨ」トいふところへ、下女は膳をして持つてくる。

梅「しかし、おまへなんぞに仕立てられる子どもは、仕あはせだネ、そしてマア本人衆が、不殘實體らしい。それといふも仕ひ人がいいからの事サネ」くま「ナァニどういたして、私なんざァ我儘者でいきませんけれども、人仕ひのわるい私に引きかへて、居る者はみんなようございますヨ。たがひに實を盡し合つて、よく氣を付け合ひますわ。理助なんぞも、よくあの子を勞はつてやりますから、マァ安心でございますのサ、また箱廻しの未可通なのには困りますヨ、どういたしても歲を經つて、律儀なせゐかよく氣が付きますヨ。」梅「それといふも、一切おまへさんの勤功サ、どうぞ其の實者ばかり寄り合つて御在でなさる所へ、私も仲間に這入りたいものだネ。」くま「お前さんは實がないから、かぶれたいのかえ。」梅「ナァニ、左樣ぢやァないのサ、仲間へはひつて、實を盡して見たらよからうといふのも、及ばねえ願ひだネ。おまへなんぞは、おたいしみなんぞには、さぞ〳〵眞實をお盡しなさるだらう、おうらやましいネ。」くま「お樂しみとはエ、私なんぞが何の樂しみがありませう、たとひそれはマァ、破鍋にも綴蓋とやらが、ひよつとございました所が、御存じの通りわが儘ものだから、どうせ男の氣に入る事ぢやァありませんわ、そして どうも私やァ嫉妬深だから、

ひよつと間違つて情人の一人も出來ませうものならば、それこそモウ〳〵、何所へもやるのが否な氣になつて、自分許り可愛がる心が發つて、自惚れ切つて嫉妬が病けてなるまいと存じますわ。それをマア心で意見をして、覺悟めて居るにした所が、生きて居る自惚には、小許は斯うと思ふ人があつても、嫉妬といふ慾心が出るので、愛想の盡きる種を蒔くよりか、出來ない方が增しだらうと、これまで情人をば辛抱して居つたのでございますわ。なまなか思ふお人が出來ましても、嫉妬で捨てられるよりは、何にもない方が、拙い心を知られないで、恥をかかずに仕舞ひますわ。」

近來の流行ことばに、嫉妬をやくことを、じんすけといふことは、遊所の隱しことばなりしを、今は荒麻の風呂敷を脊負つて、使にあるく上出店の小僧の詞となり、昨日山家を出でし、猿の樣なる丁稚が前後も知らで、墮落を歸して嫉妬を揚げて、トそゝり節に異變なる聲にうたへば、實に正銘まじりなしの江戸ッ子が、流行おくれのじんすけを、いつまでいふべきことならんや。ここにおいてお熊が、嫉妬といふ言葉を嫌ひて、白地にやきもちとはいふなり。最早じんすけおッこちの、氣障言葉をやめて、新しき東ッ子らしき、眞の通言をこそ好ましけれ。以來はじんすけといふ詞を遣ふ人をさして、氣障の本店と笑ふべし。此のことをしるす中にも、彫刻の間に光陰うつりて、予が筆もまた流行におくれんことをおそるゝのみ。

天保六年の九月はじめつかた、はやりのことばをそしりてしるす　　作　者

此の時梅里は、お熊が情を含みて心深き言葉に、いよ／＼いどむの心を發し、梅「なるほど才智なおまへなんぞの、思召しは左樣だらうネ。また私なんぞのやうな愚鈍なものは、前後の勘辨もなく、どうも能いと思ふ人があると、どうぞ一生の思出に、如此人を自由にしたらと、おもひ詰めたら實正にじれッたくッて、男だから他人にこそ言はれないが、愚痴に氣をもんだり、考へたりすることがあるのサ。そして他がよく嫉妬深いの、やきもちやきだのといふけれど、それは男の料簡にあることぢやアないかえ、嫉妬をやかせる樣な風をするから、女がはらも立ちやきもちをやくのだらうぢやアないか、それが女の情合だものを、何をしてもいい、勝手にしろとしめくゝッて居られちやア、まア私どもならおもしろくないね。それだから男の方で、世話をやかせさへしねえけりやア、いいのにと思ふやうな、私どもには誰もかまひてがなし、またやきもちをやかせるほどのものは、幾人も惚れ人があるものだから、どうも爲方がないのサ。」くま「オヤマアいかに如在なく、卑下してものをおつしやればといつて、かまひてが有るの無いのと、おまへさんがたの樣な、その位心の行き屆いてお在でなさるお人が、世の中に二人とあらうものなら實正に。」トいつてあとをいはず、だれでもほれるといふおも入あるべし。　梅「なぜ二人とお言ひだらう、そればつかりは私ばかりだヨ、世界の男は衆人宜いから女に世話をやかせるのサ、私なん

ごア所詮その眞似は出來ねえから、どうぞせめて戯言にでも、やきもちをやかれて見たいのサ、それだからおまへさんも。」くま「なんでございますエ。」梅「何でもないのサ、マア上げませう、そして最う餘り長座になつたネ、どうか日が暮れる樣だ、大そうに久しく遊びました。」ト　にはかにかへる身づくろひをして、きせるをしまひさかづきをあづけにせんといふ。くま「オヤなぜえ、マアいいぢやアございませんか、左樣急になにかお思ひ出しなすつたやうだねえ。」梅「じやうだんにも、其樣な事をいつておくんなさると嬉しいね。」くま「それ御覽なさいまし、他人さまのことでも此のくらゐなものだから、ひよつとして何したら、何樣にやきもちがやけるだらうねえ。」ト、男の顔を見て莞爾とわらふ、その思入の艶色、筆にはつくしがたし。男は心ち蕩ける如くならんか。梅「ひよつとしてどうするンだエ。」くま「マア左樣なら酒はよしてネ。」梅「エイ。」くま「お飯をお上んなさいな、お茶を入れませう。」梅「左樣かネ、それぢやアおまへがあがるならば、いたゞかうかネ。」くま「ア、左樣なさいまし、お清や。」きよ「ハイ。」ト、勝手より來る。くま「アノウお飯を上げるしネ、わたしも給べるから、能い漬物をすこしおくれ、そしておめへもたべなな。」きよ「ハイノ〳〵。」くま「アそしてお湯を入れて來ておくれヨ。」きよ「ハイお湯はよく煮立つてをります。」ト、立つて行く。お熊は其のうちに、新橋の淸風といへる茶をはうじる。近來流行の茶なり。この折節勝手の障子をあけて、男「ハイ御免なさいまし、尾張屋から參りました、明後日は間違ひなく、お

花さんをおやしきへお出しなさいますか、相唄女は此方でこしらへますから、間がひましてはわるうございますから、鳥渡お聞き申しに上げますと申し付けました」ト　いふこゑをききつけておくまは立ち出で、くま「すや尾張屋さんかえ、左様申しておくんなさい、大きにありがたうございます、明後日は少し外に約束もございますが、他ならぬ尾張屋さんの事でございますから、差し替へましてお屋敷へ上げますから、御心配なく連立のお方を、お約束なさつてよろしうございます。しかしながら、まだ新子の事でございますから、萬端よろしくおねがひ申しますと、言つておくんなさいまし。ハイ御苦労さ」　をはりや「へイ左様なら。」ト歸りゆく。お熊はもとの座敷へ來て安居る。

作者曰く、右尾張屋の男へ對せしお熊が返事、何と明後日急度したる約束もなけれども、止めになりましたといふ、變替をくはぬ用心の釘と見えたり。かくのごときあいさつは、先刻手遊びの人形をうれしがつたり、あどけなき風情をしたり、また嗜愚ことをいつて酒を呑んだりせし樣子とは、はるかに違つてしやんとせし言葉、なんと如在のなき中嶋なるかや、看官よろしく察したまへ。

## 第十八章

こゝにお熊が姉となりしお花が、以前お民といひし節に、深く契りしかの鳥雅は、兄の幸次郎に

憎まれ、上方の店へ登せられしが、東のことのみ心にかゝりて、過ぎにしお濱が行方を始め、薄雲の情もしたはしく、第一にはお民のことを案じて、不便さやるかたなく、種々と東へ便りをもとめ、目をかけし友達、または彭間などの方へ、毎度手紙を下し、何卒その身の東へ歸るまで、兎も角も凌ぎ暮し居る樣に、とりはからひくれ候樣にと、たのみくだしけれども、一向に東より音信なく、餘りの戀しさに氣病となりて、ぶら〳〵と煩ひけるが、ある夜只一人牀の中にて、倩と思案をするに、今の樣子にては、中々急に故郷へ歸られまじきはからひなれば、所詮上方にて物を思はんよりは、いかなる業をなしたりとも、わが一身をやしなふほどのことは、出來ざることのあらざらんやと、心をさだめその夜すぐに上方の店をしのび出でて、路をいそぎ東に下り、まづ誰よりか苦勞になるはお民なれば、それをたづねて少し音信を聞き出し、安房上總下總常陸の國々を、たづねめぐりしが、少しづつそのゆかりを聞くことあれども、しかとせし在所ををしへられねば、心をくるしめ身を勞らし、狂氣のごとくさがし歩行けども知れず、爰に松岸の里をはなれて、芝崎へゆく手の村の片山添に、古りたる一軒の草屋あり、あるじは野出の二太郎とて、こゝらに名うての惡漢なり。何所よりかは連れ來りけん、十六七の處女にて、いと美麗しきを傍に引き居ゑおき、二太「サアどうする、松岸が否なら潮來へ往くとも、又他へ行くとも返事をしろな、鎌倉そだちの我儘を、直高にする氣で三四人、雑川

つかつた手めへの骸、一人前に十兩づゝも立ちめへにするのだァ、いくら強情を云つても、元の娘になられるものか、情男に逢合をして居る穴を見つけてから、引き出した此の活業、どうでたゞは通さねえ、いよ／＼情をこはくすりやァ、責め殺してくれらァ。」ト、いひながら、戸棚の中より取りいだす、銀銅金のいかもの作り、鞘をはらへば二尺七寸、重ね厚なる段平に、夏なほ寒き氷の刃、すこしながめて笑みを含み、二太「これで切り殺されりやァいたくもあるめえ。」トいひつゝ、またも鐺音を、しやんとならして鞘にをさめ、二太「サアどうした、返事をしねえか、併し野暮な處女の料簡だやァ、女郎をするのは地獄へでも落ちるやうに思ふから、否だといふも尤もだが、素人のやうに窮屈なものだやァねえ。金をもらつてかはいがられて、浮氣は仕徳情人はかけながし、美味は客人が驕つてくれるしか、其の中でほどのいいのを見立てて、思ひれわが儘をいつて、何をすねてもかはいがつてくれる、美男を選りどつて、始終をまかせて見ねえ、素人よりは何程いいか知れねえ、此の以前八日市場の泥八が、さらつて來た娘なんざァ、極貧乏人の子だッけが、松岸の橘屋へ、おれが制ですみ込ませたが、小見川の富有に請け出されて、田舍は否だといふと、直に戸綱町の方へ、商人見せを出して貰つて、女男を四五人も使つて、今ぢやァ兩親を引き取つた上に、兄弟も見せを出してもらつて、店請人から旦那寺まで、うかみあがつたといつて、先月もおれが所へ、手紙と太織の羽織に、金を二

雨もたしてよこして、おれがお蔭で出世したから、一生の間恩はわすれねえ、芝崎の方へは足を向けて寐ねえとまで言つてよこしたア、手めへもいまにおれがことを、ありがてえと思ふやうにならア。」むすめ「ナニモウ、そりやア私を親の方へかへしておくんなさると、隨分おまへさんに禮は多分出來ますから、どうぞ歸しておくんなさいまし。」二太「エヽこの女も、ずるい事をぬかせえ、左樣したら、うぬが勝手にはよからうが、此方の活業にならねえわ。ドレ／＼どうで只口先では承知もしめえ、サアうぬ覺悟しろ、萬一いふことをきかねえ時は、殺しても生膽をとる相談をして置いたア、生身で賣るより、膽にすると直打が下るけれども、そりやア此方の薄命だア、オヤ細引が見えねえ、イヤ／＼血が付いてもかまはねえやうに、あら繩にしてくれよう、といつた所が繩があればいいが。」トいひながら土間へ下りつゝ、麥俵の繩をほどいて、水にしめし、二太「サア泣えるな、うぬらが強情をいやア此方も意地だア、なぶり殺しにしてくれるぞ。」ト娘を捕へ引き倒し、細き手元を捻ぢ返され、むすめ「アイタヽヽヽ、アレをぢさんどうぞ御免なさいまし、ア、イタヽヽ。」二太「そんならば奉公をするか。」むすめ「アイ女郎でない奉公ならば、いたしますから。」二太「エ、べらぼうめえ、手めへのやうなかほそいものが、田舍の奉公が出來るものか、勝手なことばかりいやアがらア、コレよく前後をかんがへて見ろヨ、手めへ一人の身にモウ三十日も日を費して居るわ、いくら何といつても、二三年はかせがせ

ねゑければならねゑ骸だァ。」トいひつゝ、両手をうしろへ捻ぢあげ、二「サァこれから、梁木へつるして責めるのだ、ァ、引世話だ〳〵。」ト縄を手繰りて、その端を天井へ投げかけんとするおそろしさ、娘は心に思ふやう、とても遁れぬ事なれば、責め殺さるゝも覚悟なれど、此の苦しみを露ほども、思ふ男に知らせもせず、操とやらを守るとも、知らで何所でか亭主でも、持ちもしたかと推量され、去る者は日々に疎しとやら、外の娘を女房に、もらはれもしてそれなりに、忘れられたら死んだ跡で、かはいさうだと仏さまへ、をがんでくれることもあるまじ、左様して見ると貰人もなく、あはれとおもふ人もなく、実にくやしい犬死とやら、身を穢しても命をたすかり、時節をまつて親達にも、めぐり逢ふのを待ちもしようか、左様した所が男には、モウ添ふこともなるまじと、思案にくるゝ風情を看て、二「サァどうする、責め殺されても承知しねゑか、エヽ、不料簡な女だナァ。」ト、既に縄を引き立てんとするありさまに、娘「アレをぢさん、いふことを聞いて女郎になりませうから、最う堪忍しておくんなさいヨ、よウをぢさん。」二「そんならばきつとだナ。」トいふ所へ、表の方、人おとすれば周章へて、娘をとらへ猿ぐつわ、いましめの儘戸棚へかくし、其の所をかたづけ居る所へ、村の歩行の定使が、門口がらりと押しあけて、定「オイ二太郎さん、今御代官様の御役人が御出でなさつて、村中へ急に仰せわたされることがあるによつて、残らずよんで来い、すぐにこないやつはあやしいか

ら、即座にしばつて吟味をする、今跡からといふやつがあらば、呼んで來るにはおよばぬ、村の出口を〆め切つて、他へ出すな、もし左樣いふやつがあらば、其の家で法螺の貝を吹き上げろ、それを合圖に捕手をやるとの言ひ付け、モウ殘らず驅け出して往きました、サア私と一所にござれ、それとも貝を吹きならさうか。」ニ「ハテナ、なんで其樣にいそぐのだか、今すこし仕かけた用があるから、それをしまつてから直にゆく。」定「イヤ／＼、いつものやうにゆるやかにしては濟みませぬ、そんならば、すぐに貝を吹く。」と竹の筒を吹きにかゝれば、ニ「ア、コレ／＼氣の短い、まあ待つてくれ、ア、氣がゝりなことがあるが仕方がねえ、よく〆まりをして往かう。」ト窗をしめたり、門口を錠下したり用心して、為方なければ定使と、打ち連れだつて走り行く、跡に娘はやう／＼と、戸棚を足にておしあけつゝ、骸は出てもいましめの、繩とくつわをとるよしなく、うろ／＼まごつく、折しもあれ、壁の崩れを外の方より、めり／＼と蹈みこはし、うちへおし入る曲者あり、娘はアッと驚けども、聲たてられぬさるぐつわ、ぶる／＼ふるへて居たりしが、彼の曲者は冠りたる、手拭とつて娘に向ひ、鳥「サア　お民ばうや、此のひまにちつとも早く此の家を。」トいひつゝさるぐつわをはづし、サア／＼トいはれて、娘は鳥雅の顔見るより、うれしさ飛び立つごとく、たみ「オヤ若旦那さんかえ。」鳥「オ、おれだ／＼、何かのはなしは途中しよう、サア／＼あの親父のかへらねえうち、すこしもはやくサア

サァ。」ト手拭をとり、いましめの繩をほどけば、夢かとぞ言葉も出でぬうれしさに、また泣き出してすがりつく、其の手をとつていそがしたて、壁の崩れを踏み越えつゝ、脊中へしつかりせおひあげ、息をはかりに驅け出し、勞れては手を引いていそぎ、または脊中に引きかけつゝ、やう〳〵のことにて逃げ延びしが、今はなか〳〵二人とも、一足も歩行み難く、人里までとこゝろざしたる元氣もくじけ、片息になり傍を見れば、何の社か堂なるか、森の中に見えたるを、これ幸ひと辿り入りて、扉をあけんと濡縁へ、足踏みかける其の時しも、内よりパット火のひかり、表のかたへさしければ、これはとおどろくその時に、扉を内より押し明けて、立ち出づる大男、堂の中にも五六人、いづれも猛猛しき姿なり。この形勢を見るよりも、鳥雅はびつくり驚きて、とても遁れぬ仕儀なりと、思へば悲しく聲を上げ、ひとの助命を賴まんと、當てはなけれど一生懸命、鳥「アレ人殺し〳〵。」と呼びかけたりしが大音に、ふと目を覺せばふしぎやな、是れなん南柯の一夢にて、身は上方の本店の、見世の二階に只一人、牀の中にて冷汗を、流して暫時忙然と、溜息をつくばかりなり。

此の時より鳥雅は、いよ〳〵東の方を案じ、ひそかに鎌倉へ下り、お民にめぐり逢ひ、また初編に名ばかり出し、噂にのみさせたるお濱のこと、かつ薄雲の始終はいふもさらなり、お熊梅里の戀情、其の外鳥雅の友なりし人々の前後など、凡て雜交みたる編次を、委しく分解け續編の發行

は近きにあり、其の期を待ちて、よろしく高覧を願ふといふ。
友人作者を難じて曰ふ、予作る所の中本、夢の段をもちゐざる事なし、いと拙き所爲ならずや。
春水曰く、そも／＼予が著はす草紙は、いづれも人情の他をしるさず、こゝにおいて其の段取相同じ、故に狂言の如く、今の世態にあたらぬ場に、こと／＼く夢となす、夢にして夢ならず、かくも在りけんと思はるゝこともあるべし、こは畫組と目前の同じきを、變化する所爲とゆるしたまへかし。

狂訓亭

風月花情　春告鳥巻之九　了

玉屋の君、白玉のぬしへ、序文を乞ひし節の返事をこゝに寫して、換レ序ものなり。

爲永春水寫

數なればいともかしこし鶯の
やどはと問はばいかゞこたへむ

とは、鶯宿梅の故事とやら、承りつたへまゐらせ候が、其の梅ならで誰が家にも、ひなどりたちのよみ聲の、音色もやさしき春告鳥の、はし書などていつぞやより、御申しにおはしたれど、谷の戸の外をしも、しかことならぬをさなき身には、なか／＼におよびまゐらせ候はねば、かたくいなみたり、御草稿とて貸したまはり候冊子をば、くりかへし／＼拜したり。いとけなきものゝ手習よりて、面白う愛で悦びたり、誠に／＼近き比、人の情をうるはしく、かきあらはせし艸紙、數々多く世にありて、徒然をなぐさめ、いづれもおろかならぬ、語りぐさと致し候ものの中にも、この冊子の樣に、愛でたきは覺えなく候。定めて／＼世に御弘めのふしは、視る人々のよろこび、左こそとおしはかりまゐらせ候。狂訓亭の御許へ、よろしく御傳へ願ひあげまゐらせ候。めでたくかしこ。

彌生の日　　　　玉樓しら玉

柳水ぬしへ

風月花情 春告鳥 巻之十

江戸 爲永春水著

## 第十九章

傾城の晝寐ぬ程に思ひつめ、問はれぬつらさ待ちわびて、無理に合はせた疊算、じれて迷うて恍惚うてじれて、慣發煙管に齒の跡が、夜明の星のふたつみつよつ。

葛の葉のかるゝ恨みに袖ぬれて暮るればむしの音にたてゝなく

爰に加田玉のおいらん薄雲は、鳥雅にわかれてより、つとめといふは不知ながらも、思ひみだれてさすがには、女心の前後を、忘るゝばかりに鬱氣ぎつゝ、果てはやまひの牀にふし、中の町へもいでざりしが、別荘へ引籠むほどの事にもあらねば、只二階に保養してありけるが、ある時彼の内所養新造の、お袖の客なりし吉兵衛は、薄雲の住居にきたりて、段々と意見を言ひ聞かせ、鳥雅のためをおもはば、出勤して親方にも安堵させ、またその身の都合もよろしきやうになして、鳥雅をよぶこそ

近道なるべしと、老人の實意をつくして教訓しければ、發明なるおいらん故に納得して、涙の眼元をぬぐひながら、蕣「モシヱ吉兵衛さん、まことにおありがたうござますヨ、しみ〴〵と得度しましたわ。親身もおよばぬ貴君の意見、今までの心をあらためて、何様か出勤しませうヨ、マア酒をお上んなんしな。」トちからなささうに、蝶足のぜんを吉兵衛のかたへむける。吉「さすがは何様も薄雲さんほどあつて、わかりが早い。左様さいて貰ふと、私も愚意ことをいつて、言葉えがするといふものだ。しかしながらお前のこゝろも、察して見ると苦しいわけサ。といつていまも言ふ通り、年季のうちはその身一人の體ぢやァなし、たとひ苦界のうちに居ても、冥利を考へない者は、何様しても天のとがめで、その身の思ふことが叶ふ物ぢやァないヨ。」蕣「實正に左様ざますのサ、自己の思ひをかなへようと思ふ日には、苦しい悲しい否なことも、勤めないければいけますまいヨ。しかし吉兵衛さんえ、こゝに一ツまことに苦しいことがありますわね、マア酒をお上んなんしな、面白くもない、わちきのことにばかりかゝつて居さしッて、せつかく氣晴らしに來さしつたのに、美味しい酒もお上んなんせんで、お氣の毒ざます。コレサお酌をして上げ申しやヨ。」吉「ナニノ〳〵、お前が世話をやかねえでも、相應にのんで居るから、打捨つて置きなせえ、さてその苦しい理は。」蕣「アイサそれざますヨ、去頃中島雅さんが來さしつた節のことざますが、モウ〳〵その晩に限つて、種々なむつかしいことを言はしッて、私に氣をもませなんした

時、もう是れ限り貴君に逢はれない其の節にはと、言つたンでございますわ。左様したら何様するとお言ひなましたから、わちきが心にも、よもやその晩限りにあはれない様にならうとは。」トすこしこゑをうるませて「戀にも思やァしませんが、なんだか物が悲しいやうで。」ト涙をはら〳〵とおとして「もう貴君にこれ限り逢はれない節は、直に仲之町もひいて仕舞つて、髪もいはず湯にも這入らないで、貴君に別れたこの儘で、年季のうちは引籠んで居て、命があつたら信實尼になりますわ。死んで仕舞へばそれでよし、旦那さんへつらあてらしく、自害するの身をなげるのといふことは仕ませんョ。と申しィしたら、やつはり命がをしいのだと言つて、思入私をじらさしツて、それからしまひに、其様な馬鹿なことをいふものぢやアねえ。そしてなにも別れて逢はれねえ様なことが、ありも仕まいと言はしつて、それから明朝歸らッしやるその節も、いつもよりか機嫌をよく、やさしいことを言はしつて、歸ッて仕まはしッた其の時の思ひは。」トあとをいひさしてなみだをふいて、びんのほつれを、細きゆびになであげ、はれたる眼のふちを手でなでながら、ためいきをつき、さもかなしさうに、「誠に〳〵、なんともいふにいはれないのでございます。それから座敷へはひつて、お袖さんにいろ〳〵と氣をまぎらしてもらつて、笑つたことも有りましたり、またなほ思ひまさる事を考へ出して、もう何様せう、私やア拍子にかゝつて、則り自惚けるやうでございますねえ。」トにッこり笑ふ。やつれし顔にあいきやうある、自然のうつくしさ、是れぞ千金の値うちにして、おいらんのくらゐなるべし。

「なにサ〳〵、なッと吉しやア、のろけもしたり鬱氣もして、すこしは心をなぐさめるがいい

のサ。しかしまた、あんまり泣いて癪がひどくさしこむと、衆人がこまるから、マア少許氣を晴らして、夫れからまた、悲しい咄はしなせえヨ。」薄「アイおありがたう、ナニもう少とも泣きは仕ませんヨ。マアネ今お咄し申した位に、鳥雅さんに言つて置いて、いまさらに出勤して居りいしては、ひよつと何樣な能い月日に、鳥雅君にお目に掛つた節、此樣に思つて、わづらつたことは知らッしやらねえで。」ト すこしまた心になみだが出さうになり、「それにお前さんが、だん／＼斯うして深切にしてくんなますから、出勤をしたとはおもひなんせんで、口の半分にも出來ない女だと、思ひなんしたら、それこそもう、夫れ限り愛想を盡かされて仕まふのも、まことに悔しうざますわ。」吉「そりやァなる程、思ひすごして見ればもつともだが、しかしそれぢやァ神さまや、佛さまもねえやうなものぢやァなしかえ。お前の不斷信心する、堀の内のお祖師さまでも何樣でも、まことの道を缺かねえで、おや方にも損も掛けず、鳥雅さんにも實をつくし、他人の思はくを惡くせず、少しもまがつた事がなくつて、信心をする日にやァ、それだけのねがひが叶はねえことがあるものか。また神さまのおちからを、賴むばかりか、其一條は私がどんなにでも、其の節の證人になつて、お前を鳥雅さんに、不實だと思はれる樣なことはしないから、ハテいいとしをして、此所なところへ來て遊ぶから、新造禿には馬鹿にされるけれど、左樣いふときの證據人には、としよりだけに他人も用ゐてくれるわナ、ネよしかえ。マアよくこゝろ

を落着けて、勘へて見なせえ。」喜「アイおありがたうございます。」トいふ所へ次の間の、しやうじをあけてわかいもの、喜八「ヘイ御免なさいまし、吉兵衛さんへ、先刻左様おつしやつたものが参りました。」喜「トイ喜八どんか、御苦労御苦労。」喜「ヘイ御酒も此所へ置いてまゐります。」喜「アイよし／＼、その鍋をば爰へ持つて来てかけて貰はう。」喜八「アイ私が其火鉢へかけますヨ。」トいふところへ仕出屋の男来る、仕出屋とよぶなり。男「ヘイ御免なさいまし、御あつらへが参じました。」喜「オヤ最う来たか早かつたノ。」吉兵衛さんえ、今の物のおあつらへも参りました。」喜「オイ／＼、そりやァ丁度いい、サァ／＼此方へ入れてくんな。」男「ヘイ／＼イ。」ト、立派なる肴をならべて出でて行く。喜「喜八どん、頓に来てお飯を喰ひなヨ。」喜「ヘイ有りがたう、只今いつて参じます。」トいでて行く。薄雲はこの品々を見て、氣の毒さうに、薄「オヤ何さまァま、こんなにいろ／＼取寄つて、薄垣さん私の左様言つて置いたものは、何様したえ。」吉「アイ今おきだと言つて来ましたが、まだ来ませんから、また雲路を下まで見せにやりましたヨ。」トいふを聞きつけこは吉兵衛が、薄「なにせまた左様いつたのだえ、これで澤山だのに。おいらァ又お前に上げようと思つて、なまつを左様いつてやつたのだ。そして好きな玉子蒸の中へ、つつこんで食べるといふのが、極真味いのだ、サァ／＼お上りな。」喜「アイおありがたう、アヽ引鳥雅さんが好物でありましたツけ、トキヤお前もしなまし、ヲイまた言ひ出して。」吉「そりやァ何様もそのはずサ、マァ／＼早く食べなせえヨ、

しかし斯うして二階に居られるから、病氣でもなんでも氣儘が出來て能いネ。」蔦「アイサ、旦那さんのこゝろもちも、實に有り難いンざます。わちきの病氣は他おやァなし、鳥さんの事ゆゑの病氣ざますから、別莊なんぞへ遣つて、陰氣になつては猶わるいし、まだ二階ならば、常住の居所だから用も足りるし、なかのいい傍輩とも、朝夕同宅にゐることだから、鳥雅さんの噂でもして、また氣の晴れることも有つたら、自然と出勤する氣にもなるだらうと、内室さんもいろ〳〵氣をもんでくれさしツて、斯うして置いておくんなんすのざますから、實にお峯どんこれはやりての名なりはじめ、わるくしてはくれませんのサ。それだから私も、だん〳〵考へて見ると、今貴君のいつてくれさつしやるとほり、ほんたうに如斯して居ては、冥利がわるうざますけれど、まァお聞きなんしョ、再應いふやうざますが、鳥雅さんがあひかはらず來てお在での事ならば、そりやァもう何樣な承知りにくい、嫌な人でも、つらい客人でも、急度辛防してとつてそのかはり。」トいひかけてすこしにつこりして、「はづかしいことざますが、鳥さんでこゝろを晴らして、否な客人の取り返しをして、それをたのしみに苦界の月日を、たたせたうざますわ。いまの身になつて見ると、何樣も〳〵、苦しい悲しいことの、とりかへし樣がおざんせんわネ。」トなみだをふき、くやしさうにことばにちからをいれておしつける樣にいふ。これ女郎衆のくせなり。しばらく無言で居たりしが、やう〳〵と氣をとりなほし、蔦「吉兵衞さん、かんにんなんしョ、病氣で居るくせによく口數をきくと、おもはつしやるだ

らうか、ツイ貴君のやさしいことを、いつてくれさつしやるのにあまえて、心に思ふありたけを言つたらば、少とは氣も晴れようかと、貴君の迷惑さつしやるのも思はず、面白くもないことばかり、堪忍なんしヨ。コレサ薄垣さん、お袖さんは、先刻から、何樣さしツたのだナウ。」新薄「アイサ呼びませうかねえ。」吉「ナァニ打捨つてお置きなヨ、何所へかいつて、またてだまでも取つて遊んで居るのサ、今になんぞ喰ひたくなると出て來るわナ。それでもお前の事をば苦勞にして、氣をもんで居るが可笑しいアハ、、、、。」薄「アイサ、何樣に實者で在らッしやるだらう、實に年の經かない者の樣おやァ有りませんわ。そしてお袖さんに限つて、腹を立つた貌を、人に見せさしッたことはありませんヨ」吉「隨分あの樣子では、全盛にもなり兼ねまいとおもふのサ。サァマァ私ばかり酒を吞んで居て、お前お飯を給べればいい、サァこれでたべなせえナ。」薄「アイおありがたう。」新薄「吉兵衞さんえ、薄雲室ぢやァ子ノ刻をうつまでは、何にもあがらッしやりやァしませんヨ。」吉「ハ、ァ左樣か、そりやァわりいノ、小僧なんぞも、（この小僧とはお袖のことをさしていふ。吉兵衞がおやぢかたぎのことばなり。）ときどき其樣なことをいふから、思入叱言をいつたら、夫れからあんまりそんなことも仕ねえ樣子だ。」ト いふをりから子刻のしらせ。新薄「すヤ丁度子ノ刻でますヨ。」ト うれしがる。此の時振袖新造薄の香、手に闇持をもち、片手に鐵瓶の湯のわきたるを、重たさうに持つて、座敷へ這入り、うすのか「モシエ薄垣さんえ、やつと今忠助どんがかへつて來ました

わ。今まで何をして居たと、おもひれ叱言を言つてやりましたわ。」

是れよりいよ／＼、がや／＼として、書きとるもうるさく讀み倦きたまはんかと、しばらく筆を休む。

## 第二十章

新造「それからあの人は、何と言ひましたえ。」い「アノウ少し用の有る人に逢つて、よんどころなく晴間屋へ連れて往つて、酒を吞ましてゐましたから、遲くなりました。薄垣さんに叱られますから、お座敷へは往かれねえといつて居ますわ、モすかねえやつざますヨ。」新「否な奴ざますネ、そしてふア外聞のわりい、晴間屋なんぞへ往かねえでも、青善か當新亭へでも往けばいいのにねえ。」い「ハ、ハ、、晴間屋から直に青善も可笑しいナウ、アハ、、、。」ト ころげてわらつて居る。しんざうにはわからぬゆゑ、まじめになつて、 新「すヤなにが其樣にをかしうざますえ。コレサ薄の香さん、そのお湯の冷めねえやうにしておきなましョアイおいらん。」トいひながら、菓子の箱を出す。薄「そこへ、お上げなましョ。」ト ちひさなこゑにていふ。 新「吉兵衛さんえ、おいらんが貴君にお茶を、あげ申すといつてとりにお遣んなました。」ト かのくわしのをりを出す。 吉「どうもありがたいネ、酒を吞んだあとで能い茶をこしらへて、菓子を喰ふといふのがくせだ。」ト いふところへ吉兵衛の相方お袖、はや足にてばた／＼とかけ來り そで「薄雲さんえおやかましう。」ト いひながら、吉兵衛の方をみてにつこりわらひ「オヤ親父さん、ふ

だおさけさますか。」トいつてなにをさわいであるいたか、いきをきらしてせい／＼いつてゐる。 藤「お袖さん、さぞこゝろおしだとおもふひ
だらうネ、お前もまた何所に居なましたえ。」そで「アイナアニ、花鳥さんとお手習をとつて居たら、ト
たから挿花のお師匠さんが、来たといつてよこしましたから、すぐにしたへいつて、稽古をして居た
んでますわ。吉兵衛さんだから、ことわらずにしたへいきましたがネ、ひさしく来もしねえくせに、
夜教へに来てサ、氣違じみて居るおやアありませんか。それから子ノ刻をうつたから、さう／＼瞞け
出して来たんでますわ。モウ／＼したに居るといやで／＼。」吉「ナアニうそばつかり、花のお師匠さ
んがあやしいノ、アハヽヽヽ。」そで「イヤ否な吉兵衛さんでますヨウ引。」トおほきな聲でいつてわらつてゐる。 吉「ドレお
茶を煮てもらつて、今のものをいたゞかう。」そで「イヤ何でます、わちきにもおくんなましな。」吉「ナ
アニめづらしいものおやアありません。鳥雅さんが来さしツた時分、おまへがよく／＼よこしておくんな
んした、ぎうひのあんころと金玉糖でますヨ。」吉「サアお茶をいたゞきてえの」そで「貴君やア寝さ
ッしやらねえのかえ。」吉「ナニ／＼、今ッから寝ると、また寝忘れる。」そで「左様でますかえ」ト平氣でゐる。
吉「それでもすこしお休みなまし。明日ねむうざませう。」そで「ナニ宜うざますヨ、あしたねむくなつ
たら、また寐においでなましョ。」吉「アハヽヽヽ、くだらねえことばかり言つて居ねえで、このお茶
をついでくんな、そしてみんなが、菓子をたべればいいなう。」藤「お袖さん、夜中にお茶を呑んだ

りお菓子をたべると、まことにじれつたうざますネエ。」そで「アイサ、左様ざましたツけネ、あの朝歸してしまはしツて、わちきが一緒に。」薄「寐てくんなまして、私が鬱情いでゐるのを、まぎらしておくんなましたツけネエ。あの晩のやうに、嬉しいじれツてえ夜はありませんかツたヨ。」吉「ナニサまたうれしいじれつてえことは、幾度もあるわな、マア先刻いふ通り、よく／＼手紙を書いて置きなせえ、是非わたしがたづね當つて、くはしく云つてとゞけるから。」薄「アイ、何様ぞモウ是非おたのみ申しいス、いままでの文は何様なつたか、ちつとも様子がわかりませんから、モウ／＼悔しくツて悔しくつてなりませんから、今度は唐紙をとりよせて、よウく信心してかいて、切れものをつかはないで、ふでのさやがさでたつて、それから箕の輪の鬼子母じんさまへ、お加持をたのんで遣りましたわ。それだからこんどは、急度いいたよりを、きかしてくれさつしやるはずに、願をかけておきましたから、何様ぞ貴君の深切で、とゞけておくんなましョ、きつとざますョ。」そで「おとつさんェ、急度あつて上げ申しなましョ。」吉「ム、夫れは急度承知だョ。ほんに女郎衆といふものは、おもしろいことばツかりいふもんだナウ、アハ、、、。」トわらつてゐる。このうちおの／＼ちやをのみ、くわしにかゝる。薄「お袖さんえ、喧嘩をしない様におあがんなんしョ。」そで「オヤいやざますョ、貴嬢ぢやアあるまいし。」薄「オヤ、私が何時誰と喧嘩をしましたえ。」そで「鳥雅さんとサ。」薄「それやア昔のことざんすわ、モウ喧嘩をする人はあ

りませんヨ。」トすこしなみだを限のうちにうかめる。おそでは見ぬかほして、そで「すヤ昔のことゝごますネ、むかしのことが去年さますか、昔といふは十年か百年のことゞざますわ、去年のことだからまだ昔の中へはひらないから、いまにまた鳥雅さんが来なますわネ、十年と百年と、かうふたッ立つて仕まふと、それこそモウ来さつしやりやァ仕ますまいわ、ほんたうのむかしになりますから。」薄「それおりやァうそのむかしがありますかえ。」よし「アイサ、貴孃の云はしつたのは嘘のむかしざますヨ。」吉「それから他所いきの昔に不断着のむかしか、アハ、、、。」そで「オホ、、、。」薄「ホ、、、。」うすがき「むかし／＼が重なりますねヱ。」そで「それだから、花咲老父さんがひとり居ますわ。」吉「アハ、、、、此方ならば親父さんおやァ、まだくやしいとおもつて、老父と名を付けたな、イヤしかし花咲老父とはありがてえ、何様ぞ此方も達者な中、此家の二階中、はなをさかせるやうなあそびをして、家内中にもうれしがらせて、ひつこみてえものだ。殊にまたおいらんの身にとつても、花がさくとは能い辻占だ、煎豆にはなといふほどの、たとへでもねえが、出勤を仕ようといふ相談のせきで、花咲老父のすゝめにしたがつて、薄雲さんに花がさけば、老父の貰ふ賞祿のかはりに、鳥雅さんを是非つれて来て、その美麗しいかほの莞爾を見せてもらふが、この親父の、ホイ老父の願ひだ、サア／＼衆人がモウ寐なせヱ、たいそうに夜がふけた。サア孫は何様した、老父さんを休ましてくれねえか、先刻寐ないといつたから、寐ずともいい、

たゞすこしの中、氣をやすめて往かう。」そで「アレ親父さん、堪忍しておくんなさいましョ、わるいことをいひましたッけネ。」吉「馬鹿を言ひねえ、口へ出してわるく言はれるやうに、心やすくなつた此方が嬉しさは、若いしゆが情人の二個も、一時に出來たと同じ心持だ。これが又此の年になつて、お客の會釋にされて見るがいい、それこそ氣恥かしくつて、此樣に二階を遊んで歩行かれるものか。しかし是れでも情人が出來るから、油斷をしねえがいいアハ、、、。」薄「オホ、、、オヤ實正に親父さんの樣にやさしいと、だれでもほれますわ、ネエお袖さん。」そで「ア、左樣ざますが、このごろぢやァ叱言をいつてなりませんョ。そして何所へかほかに往きなます、二階が出來た左樣でありますョ。」薄「オヤなぜでござますエ。」そで「それでも泉目吉とかの人形を、ふたッ持つて來なまして、一ッ能い貌の方をば、わちきに見付からねえやうに、隱して置きなましたョ。あれをばたしかに歸んなますとき、何所かかはいがる所へ、持つておいでなんすに違ひはありませんョ。」吉「イヤ小僧が、珍らしい勘繰を言ひ出したわえ。しかしよく氣がついた、此方はもつては來たが、ツイわすれて仕まつた、早く此所へ持つて來てくんな。」そで「いやざますョ、たれが他所へ持つていかッしやる人形を、もつて參りイすものか。」吉「マァ〳〵、其樣に腹立らねえでもつて來なョ、左樣するとぢきに、人形の遣りどこがわかるから。」トいはれてお袖はやう〳〵かけだしてゆき、三ッをれの木ぼり、玉眼入の人形を持ちきたる。吉「よし〳〵。」トとつてわらひながらうすぐもにわたし、

吉「サアおいらん、おまへにはこの木偶の、往き所が知れるだらうネ。」トいはれて薄雲は、不思議さう に手にとりあげ、薄「オヤ／＼、マア能い貌ざますネ。」ト倩となかめ、薄「オヤ。」トうれしさうににつこりわらひ、「誠に誠に、鳥雅さんによく似て居りイすねえ。」トいへば、一座がさしのぞき、●▲「ほんにさうざますヨ、モウモウ／＼鳥雅さんが小兒のときは、きつとかうざましたらうヨ。」そで「オヤ／＼左様ざますか、わきやア少許も氣がつきましなんだわ。」吉「そりや何様だ、わかつたらうノ、モシおいらんうれしくもないかネ、日吉にあつらへて、鳥雅さんの似がほの木偶とは、随分老人のうがちには、にく／＼もあるめえ、おいらんへはいい土産のつもりだが、お氣にいらないかネ。」薄「オヤ／＼左様ざますか、まことにうれしうあります。ほんに左様お言ひなんすので、おもひ出しましたが、あの日吉さんといふ木偶師は、鳥雅さんがひいきにさつしやる人さんで、いつうか一度つれて來なましたつけ。それざますから鳥雅様のかほを、こんなによく似るやうにこしらへて、くんなましたのざますね、吉兵衛さんえ、まことにおありがたうざますヨ。」ト、木偶を抱いて貌をおしつけて、うれしき思入。そで「オヤ薄雲さんが、モウ直に亂情けなますヨ、ホヽヽヽ。」●▲「オホヽヽ／＼。」薄「アレサお袖さん、其様にいぢめておくんなますな、ホヽヽヽ。」トわらふなしほに、吉兵衛はたちあがり、吉「ヤレ／＼、久しぶりでおいらんの笑ひがほを見た、サア／＼チツトやすみやせう。」薄「それぢやアおやすみなまし

ヨ。まことにモウおありがたうざます、お袖さんえ。」袖「アイ。」薄「どうぞよウくお禮をお願ひざますヨ。」袖「アイそれぢやア、久しぶりで鳥雅さんと、一緒におやすみなましョ、そして明日はすぐに木偶の著物をおあつらへなましな、私もこしらへてもらひますから。」ト、言ひつゝ立つて廊下へいで、吉兵衛とならびて物しづかに、發明なればそは／＼せず、さりとて元氣のよき生質、自然の愛敬ふかくして、あつぱれ大立者トなるべきお袖の風情は、つたなき筆に書きうつしがたし、看官の通君よろしくさつしてよみたまへ。されば座しきにて、他人のおほく居る節に、吉兵衛をとりあつかふ行狀と、さし向ひになりたる節の會釋とは、はるかに違ひ、老人なればとて、なか／＼に麁畧なることをせず、さりとていやらしき姿も見せず、おのづから實意の情をふくみて、送り迎へをするそのとりまはし、眞の手とりと後々を、頼もしき生立にて、内所のよろこびさぞかしなるべし。さて又薄雲の座しき、薄垣薄の香杯、大勢にて其邊を片付け、それ／＼に休み、薄雲も牀にいりて、お袖が明察のごとく、彼の人形を枕の際に抱きそへて、しけ／＼と貌を見て、また思ひ出す鳥雅の事、只何となくかなしさが増りて、涙をはら／＼／＼、兼言つもりし枕の上、ぬれてホロリと人形の、かほに落せしなみだを拭き、口のうちにて、薄「オヤ堪忍なんしョ。」

此の時町内の主人達、當番の衆三四人、戸を明けさせて家内に入り、不寐番にむかひ、自身番方「火

の用心を氣を付けさッせえョ。」トいつて出でて行く。

風月花情　春告鳥卷之十了

# 風月花情 春告鳥 巻之十一

江戸 爲永春水著

## 第二十一章

仕居の雜作たいふも、常に珍らしからねば記さず、言葉づかひにてよろしく察したまへ。年齢二十八九の、好風なる内儀、今歸りし夫にむかひ、おりき「私やァ案じきつて居たヨ。」ト いへば、三十七八才のいやみのなき亭主華ばおりをぬぎながら、居 甚「なぜ案じた、今日も女が歸すめえとおもつてか。」ト笑ひながらいへば、女房も莞爾として、おりき「お洒落でない、能い好男の風俗をして、誰が幾日も止宿めて置くものか、必定今朝らァ追ひ出されて來る時分だとは思つたけれども、お店からァ二度も呼びに來たし、それにお前今日は、苦味英の和睦ぢやァねえか、仲人の癖に怠慢いョ。」甚「オ、眞に左樣だッけ、誰ぞ來たかナア。」りき「ア、寮房町の頭に、誰だかまだ四五人來なすつたから、まだ歸りませんともいはれないから、今朝ほど店へ参じましたから、只今歸りますと直にお跡から上げますと言つて歸したわ。」

甚「左樣か、權次やァ何樣した。」 りき「風まはりに往つたョ。」 甚「鐵は何所へいつた、またあの野郎めえ、遊行れやァしねえか。」 りき「ナアニ、昨夜仕合が能かッたから、今日は直に活業に行くといつて出て往つたッネ。」 甚「ムヽ、今日は、大叉の砂糖藏の建前だナ、そりやァいいが、店の用は何の用だか聞いたか。」 りき「番頭さんが、最初に呼びによこして、又其の次は二度ながら、跡髮結の小僧が來て、祖母樣が隱居所へ、來てくれろと仰しやる口上だョ。」 甚「ハテナ、それおやァたしかに鳥雅さんの事たわえ、何卒いい鹽梅にして上げてえ物だ。しかし本店の威光で言はれたら、鳥雅さんの兒さんも、否とは言へめえス。ドレおれアちよッと店へ往つて來べえ、若旦那に左樣申して置きねえョ、お前さんの事で、お店へ參りましたから、何れ近い中何樣かなりませうから、餘り外へ遊びにおいでなせえますナ、お宅の方へ知れるとわるうございますと、よく左樣申しねえ。そしてまた起して上げねえよ、餘り寐ると毒だァ。」 りき「馬鹿ァお言ひナ、今時分寐て居る者が在るものかネ、もう巳ッ刻過ぎだヨウ。」 甚「うそを吐けえ、たッた今辰刻を途中で聞いたァ。そりやァ左樣と若旦那は、鳥雅のとなり 何所へお出でなすつたか。」 りき「アヽ、今、奥の家へ遊びにお出でたわ。」 甚「奥の家たァ、お園さんの所かネ。」 りき「イヽエ、あの隣のおやなさん所さ。」 甚「オヤ、そいつア、むづかしいナア。」 りき「なぜだいの。」 甚「なぜといつて、兩方が好物だのに、雙方も獨身同樣だから、あぶねえわけだァナ。」 りき「すヤ

お前も、とんだ嫉妬だねエ。」甚「べらぼうめえ、此方やァ女はうるせえといふ拗だァ。」りき「おふさけでないョ、自惚れるも程があるわネ。」トいふ所へ、出入店の小僧驅け來り、小「甚五郎さんに、手開はとれない川だから、ちよつと來ておくんなさい。」トいひながら、犬にからかつて居る。小「黒ヤァイおゝしき／＼。」甚「オイコウ、お見世かお奥か。」小「御隱居さまが、先刻から待つてお出でなさるから。」甚「左樣か、それぢやァ直に往かう。」ト 麻付のざうりをはきながら、 甚「コウお力、長太郎どんに何ぞ喰はせねえか。」りき「アイ、眞に美味い物があつたッけ。」ト ぶつだんよりまんぢうを出して、小ぞうにやりちやをくんでのませながら、 りき「アノお前歸ッたらネ、作兵衛さんに宜しく申しておくれョ。」小「ハイ。」ト、あいそもなく驅け出して行く。甚「オイその喜世留をくんねえ。」りき「アレサ、腰に提げてお在でぢやァないかネ。」甚「ナニこれを持つて往くと、又隱居番頭が白眼みつけらァ。」りき「オホ、、、、あの番頭さんをば、誰でも否がるねえ。」ト いふを聞きさしていでてゆく。 お力は、甚五郎の脫ぎ捨てたる革羽織を、疊んで戸棚へ入れて居る所へ、障子の外から、 女のこゑにて「おりきさん、お宅にお在でだネ。」ト、いひつゝ入り來る婀娜者は、二十六七才の年增女、此の節少し不都合と思はれて、上田紬の茶見盡の小袖、下には縞縮緬の大縞の、繼々を著て、じゆばんの半襟は媚茶の花絞り、袖口は御納戸の山繭、本紅の裏を付け、平ぐけの一寸幅の帶をくる／＼巻にして、褄をとつて白き足を見せ、髪は油氣もなく亂したる姿、持病が起りて化粧も、

半月ほどかまはず、やうく\昨夜久しぶりにて、泉湯へ這入つたといふ風俗、一向に色氣は含まねども、自然とうつくしく垢のぬけたる苦勞人、たしか去年の極月あたり、北郭を出でたるなどと、評をせらるべき婦人なり。りき「オヤおやな樣、サアお上りナ、今日は顔色がいいネ。」やな「ア、昨日から大きに能いヨ。」りき「オヤ、今鳥雅さんが、お前の所へお出でぢやアないかえ。」やな「ア、まだお在でだヨ。」りき「オホ、、、、たつた一人捨ててお出でか。」やな「イ、エ、お圍さんが何だか浮いて居る樣だから、所爲と對坐にして、小川の風で外して來たんだアネ。」りき「オヤく\こまるねえ、今も甚五郎さんが、ていしゆのことを甚五郎さんといふは、色でもつたるとしるべし。お前の宅へ鳥雅さんが往つて、またこじつけねえけりやアいいと、噂をして出て往つた所だッネ。」やな「オヤあり難う、どうぞ左樣だと嬉しいけれど、もウ私なんぞは老いこみだからいけないヨ。」りき「フムウ、大そう下からお出かけ遊ばすネ。此の裏も能い婦女揃ひであつたッけが、お前が來てから年增はいふに及ばず、十六七の娘たちまで、不殘おやなさんに、押し付けられたといふ評判だワネ。」やな「氣味のわりい、其樣にいぢめておくれでないヨ。しかし鳥雅さんは、餘程より好い男だねえ。」りき「ア、それだから、かへつて身が保てないのだヨ。」やな「イ、エ、鳥雅さんの方よりか、相手になるものの方が、身の困窮だッネ。私が郭へ這入つてからも、薄雲さんのところへ、鳥雅さんがお出でのを、二三度見かけたッけがネ、其の時の衣裳な

んぞは何様によかッたか知れないョ。寔にモウ／＼、女の好く風俗で、誰でも賞めないものはなかつたわ。それだから薄雲さんが惚れきッて、眞に苦勞をして煩ふくらゐだッけがネ、程なく鳥雅さんも勘當されさしつて、其の後といふものは、モウ／＼鬱氣いでばかり居た所へ、寔に可笑しい事が出來たわ。」りき「また薄雲さんの情人が出來たのかえ。」やな「イ、エノ＼、全體薄雲さんは、生質が貞實つて、情人なんぞを拵へる氣は少しもないョ、先の鳥雅さんはネ。」りき「エ先のとはえ。」やな「アレサ、今私のとこへ來てお在での、アノ鳥雅さんは、素人の節からの情合だから、したひこがれてお在でだがね、其の後來る今の蝶賀さんといふのワネ。」りき「オヤ／＼、それぢやア私の所にお在での鳥雅さんの他に、また同じ名の人が、薄雲さんの所へ往くのかえ。」やな「ア、字は書き様が違ふさうだけれども、蝶賀さんといふ客人が、夏屋の宅から（なつやといふは茶やのことなるべし。）おくられて來るのさ、實名號は僕さんといふ名で、モウ／＼氣障アな、否な人だから、薄雲さんが否がり限つて居てネ、なまなかに、以前の鳥雅さんの名と同じ名で、今のは餘り否な人だから、雪と墨のたとへより、最少かみがつておいでだわネ。それだから外のおいらん達が、不斷左樣いつて笑ふわネ、勘當された鳥雅さんが、上方から歸ッてお在での節は、直に名をかへてお貰ひと勸めてゐるわネ。妙なもので、好風な名でも否な人が名號ると否な名に思はれるし、否な名でも好いた人が名號ると、意氣な名の樣に思はれるね

ゑ。以前の烏雅さんと、今の僕さんの蝶賀さんとは、なぜまア違ひ樣が大そうだらうと、僕さんなれば新造衆まで、否がつて居るのに、以前の烏雅さんの噂をしても、自分のことだと思つて、今來る蝶賀の僕さんが、自惚れきつて居るから、薄雲さんでも誰でも、モウ〳〵否がりきつて、此の頃ぢやア茶屋の夏屋まで、衆人が憎がりますわ。」　ちき「ナヤ〳〵左樣かえ、何樣してまア同じ名の人が、其樣に幾人も在るだらうねえ。」

因に曰ふ、狂訓亭は生質野夫にて世間の事をすこしも知らず、たゞ古き机に倚りゐて、下手なる推量をのみ綴りて、お伽の物語となし、筆墨の料を貰うて、同族をやしなふのみ、青樓妓院は夢にも見たる事なし。されば通君子の謗りすくなからず。また卷中の人物、其の名前のはからず現在の人に的中して、もしやその人の事を作りしかと、思はるゝ憎しみ每度なりと、噂を聞いたり。かならずしも予が作の中本に、似寄りの御名があればとて、それならんかとの御評判は、くれ〴〵ゆるし給へと願ふになん。

やこ「俗名は、何人も同じことのがあるけれど、俳名とやらは、其樣になさそうなものだけれども、一人のおいらんに同じ俳名の人が、二人來るといふも廣い世のなかだねえ。」　ちき「そりやアいいが、ナア烏雅を呼んで來ておくれな、今詫びこと最中、ひよつとお圍さんと出來でもすると大變だわネ。」

やな「宜いわネ、打捨つてお置きな、不躾だけれども、お園さんの手ぎはぢやァ、鳥雅さんの相手には出來ないいョ。」りき「イ、エく、あれでも鳥雅さんは、其の方が少々早業い方だから、選り嫌ひをしては居ないョ。またお園さんも愛嬌のある娘だものヲ、まんざらではないのサ。」やな「ア、ねえ、隨分即席惚れのする孃だから、油斷をするもわるいねエ。」りき「それだから、マァ看て來ておくれョ、其の間に私やァ、煮花を拵へてお前に上げるから、サァ早く往つてお出でョ。」やな「ハイノ\かしこまりました。」ト、笑ひながら下駄をはきて、お力の髪を看て「オャ髪結さんが來たのかえ。」りき「ナァに、なで付けたンだわネ、今日はたしか來るョ。」やな「オャ、それぢやァ待つて居るといつておくれナ、ドレ先づ情合の邪魔をして來よう。」ト驅け出して、我が家へ行き看れば、いと靜かなる中敷居のうちにて、お園は爪彈の端唄を唄ひ居る。

うたへ鷄も烏もにくい早起よ、はれて雀のものがたり、障子へうつる春の日に、梅が枝つたふ鶯は、ないた寐覺のわらひごゑ、へァレ淺草の鐘の音が、隅田の堤に向うごし、こがれておそき巳の刻に、いとゞしづけき庵のきぬく。

鳥「オャ、その唄は世間の人の、知らねえはずの唄だが、おまへは何樣して知つてお在でだ」かこ「ナニこりやァ此の頃はやりますョ、初手は相坂町の唄女の、お花といふのが唄ひはじめたので、私やァ

そのお花さんに教はりましたヨ。」

ト聞いて鳥雅は不思議をなし、胸にわすれぬお民が事、そも／＼只今お園の彈きし唄は、逆鳥の別莊にて鳥雅がつらねし文句にて、お民にさしづして三味線の調子を付けさせ、只二人がなぐさみにせしのみにて、中に世の中へひろまる道理なし。殊にお民は遠き田舍へ、追ひやられたるよしを、ほのかに聞きたれば、いよ／＼世間に傳ふべきことにあらず、いかゞして此邊に唄ふや、お花といふ唄女こそゆかしけれと、お園にくはしく其の模樣を聞き糺して居る。

やな「オヤ／＼、なんでございますエ鳥雅さん、お園さんの樣な、美しいのをつかまへて、まだ他の女のことを、根をほつてお聞きなさるのかえ。」 かこ「イ、エおやなさん、お前はまだお知己ので在るまいがネ、お花さんといふのは、寔に可愛らしい能い唄女衆でございますわ。」 やな「オヤ左樣かえ、それも若旦那の情人かね、オホヽヽヽヽヽ。」 鳥「なんだナおやなさん、私とお園さんを置き逃げにして、何所へお出でだ。」 やな「オヤ私やア、所爲と氣をきかして上げたのだねえ、まだお園さんと情人におなりでないのかえ。」 かこ「オホヽヽヽヽ、どうして／＼、私が種々口說いてもお聞きでないヨ、おやなさんが先へ口をかけたから、まア私のはうはお斷りだとさ。」ト さすがにしやれたる女同士、わらひいひかはすは、只のむすめのおよばぬわざにて、かゝの中にいろごとの、はりあふことばも實情のながやずまひも、また諸所にあるものなり。 やな「オヤ／＼、わたしやア先かも知れないが、モウ前

にことわられて了つたのだわネ、オホ、、、、。」トいふときしも長家の子ども、ふたりばかりおやなの家のまへにあそび居たりしが、六ツばかりの女の子、何を聞かいて女の子「いイろャ〳〵、おやなさんとお園さんといイろャ〳〵。」鳥雅おやなおかこの三人共に顔見合はせて、▲●×「アハ、ハ、、オホ、、、、ホ、、、、。」やな「ア、引をかしい子だねえ。」かこ「あの子は、毎度何かを聞きかじツては、あんな可笑しい事をいふヨ、オホ、、、。」ト、さまでにあらぬ事にても、笑ふは若き花の貌、おもしろさうに思はるれ。折からお力も此所に來り、りき「何を其様にお笑ひだ、わたしにもチットお聞かせナネエ。」トまた鳥雅にむかひて、りき「若旦那、ちよつとおかへんなさいまし。」鳥「アイなんだえ。」りき「アノウ御家の小僧さんが參りました。」鳥「ハテナ誰だか。」りき「アノお前さんが御ひいきになさつた、發明らしい小僧さんでございますヨ。」

## 第二十二章

再説鳥雅の、上方より立ち歸りしは、古郷の人々を戀しくなつかしく、また夢の中にも、お民が必死の難儀など、正々しく見たる故、わけて不便に案じられ、彼の地に安閑と時節を待つ事ならず、其の家の許へは置き手紙をして、はる〴〵と逃げ下りしが、何れの家にも立ち寄るに便り悪ければ、本店の抱へにて、祖父の代から出入する甚五郎は、前々より目をかけて置きしもの、殊に祖母のひいきにする男ゆゑ、萬事に都合よければ、まづ此の家に身を落著け、其の身の家へたよらず、内々甚五郎

をもつて、本店の祖母の許へ詫言を言ひ入れしなり。されば甚五郎も、出入店の出見世とはいへ、實は血筋の鳥雅なれば、麁畧にならず、また當時勘當同然なればとて、始終は三箇と四箱の元手を出して、別家をさせねばならぬ息子のこと故、大事にして其の家に置きしなり。さて鳥雅は、おやなの家より歸り來て見れば、十五才許りの若衆の小僧、千松といふもの、これ鳥雅の目をかけて、使ひし我が家の小僧なり。生得實情の深き者と思はれて、久しく出されし鳥雅を見て、涙ぐみ手をついて、

千「御機嫌ようございますか。」ト ちひさなるこゑにていひながら、いたの間へホロリと涙をおとす。 鳥「オヤ千松か、よく此所へ寄つたツけナ、何所ぞへ使に往つたのか。」千「ハイ、諸方へ參じました、そして今朝御母堂さまが内所で御用を被仰いました。」ト懐中より財布を出して、金を十兩紙に包みし儘鳥雅に渡し、千「エ、アノ左樣被仰います、若旦那に今の間、餘り他人に合つてはわるいから、そとへ出てはならないから、其の氣で本店の御隱居さまの方へ、よくお頼みなさいましと。そして著用衣類は、明日櫻川三孝が、持つて行く、はずにして置いたから、そのつもりでお在でなさいましと。いづれ四五日の内に、御寺參りから此家へ、内々でいらッしやいますさうで御ざいます。」ト、いはれて流石に前後を、かへり見もせぬ息子氣質も、今さら母の慈悲を聞き、勿體なくも嬉しさを、何にたとへん方もなき、ありがた涙にしばらくは、言葉も出でぬ風情なり。千「アノウ、お前さんは迎島にお在でなさつた節、かはいがつておやりな

さつたお民さんをば、何樣なさいました。」ト、思ひがけなく問ひかけられて、鳥雅は苦笑ひをして、
鳥「ナゼそれを聞くのだ、お民はおれが上がたへやられた後で、田舍へとかやられたぢやアねえか。」
千「ハイたしか左樣でございましたが、それぢやァお前さんも其の時ぎりで、後は御存じはございませんか。」鳥「なぜ〳〵、そのお民がどうかしたか。」千「イ、エ、何樣も仕ませんが、先達中私が爲島の方へお使に參つた節、相坂町の泉湯から、浴衣を抱へて出て行くのを見かけましたから。」ト、いはれておどろく鳥雅の胸、いかなる譯かとせきたちて、鳥「エ、ナニ、お民を見かけたと、嘘だらう、又空言でなけりやァ人違ひだらう。何樣してお民が浴衣を抱へて、泉湯へ行く樣な横しまな、出世をするものか。」千「イ、エナニ、うそでも人違ひでもございません、私やァ急度覺えてをります。アノお民さんの右の耳のうしろに、ほくろが二ツあつて、眼元が杜若の樣で、物言が早言でございます。」
鳥「ハテナ、そして何方の方へ往つた。」りき「若旦那、大分お氣がもめますネ。」ト笑ひながらいへば、鳥雅はまじめに、鳥「左樣サ。」ト、いつた許り考へて居る。千「私やァ、それから後を付けて行つて見ましたら、相坂町の格子造作の家へ這入りました、その後また通りか、つて見ましたらば、あのお民さんが立派な姿をして、三味線箱を男に脊負はして、出て行くのをたしかに見ました。」ト、目角のつよき小僧の言葉、さてはと思ふはたつた今、お園が彈いた端唄の一條、彼是お民に符合すれば、もし

や唄女になりたるか、左もあらんには何者が、其一件の世話をなしたるぞと、安心ならぬも惚れたる人情、胸さわぎのみしたりけるが、やう／＼に押し鎮め、鳥「それぢやァ、手前は其の家を知つて居るナ。」千「ハイ能く看ておきました、お手紙でも遣はさいますならば、持つて參じませうか。」鳥「ナニ手紙ではいかねえ、コレ斯うしてくんな、今度外で其の唄女に出合つたらばナ、其方が聞くにはかまはず遠慮はいらねえから、聞いて見てくりや。お前は以前、迎島の別莊に居た事はないか、さうして元の名は、お民さんと號やァしないかと、直にやらかして見て下ッし。」千「ハイ左樣申しませう。又御用があるならば、明日參じます。」鳥「ム、何樣ぞ左樣してくんな、そして他人に知れねえ樣に、陸人さんにありがたう存じますと。」千「ハイ／＼。」ト歸り行く。此の節巳ノ刻の鐘ボーン／＼。水や「今日はようございますかナ、水屋でございます。」りき「水やさん看て入れておくれヨ。」水「ハイ／＼かしこまりました、水や宜しう。ハイ半荷の口もございませう。」鳥「イヤおいらは、水やぢやァ氣がすまねえ、今ッから往つて見て來よう。」りき「オヤどちらエ。」鳥「今のはなしの相坂町へサ。」りき「ナヤナヤ、貴君出て歩行きなすつちやァ、おわるかァございませんか。」鳥「ナニ／＼かまはねえ、ちよつと驅け出して往つて來よう。」りき「左樣ならば、お羽織を出しませうか。」鳥「エ左樣サネ。」ト帶をしめ直して、お力に羽織を引きかけもらひ、立ち出でんとする所へ、櫻川三孝、道具屋の友次郎、か

ねて諸方の旦那方に、ひいきさるれば、其の恩の爲には慾の勤めにあらで、實意をあらはす見舞物、尋ねて此の家に來りける。

風月花情 春告鳥巻之十一 了

江戸 爲永春水 著

## 第二十三章

こわいろを傳吉する人、ふたりづれ、今「梅に木づたふ鶯の、音色やさしきあの唱歌、たしかにそれとしりながら、向方に知れぬ我が心。」●「コレサノヽ吉ッ子、それおちやア息の續ぎ目がわりいやア、最うちつと跡を引く樣にしねえな。」今「左樣か、跡を引くなア大傳か平庄が癖だア。」●「違へねえ、菊幸も跡を引くぜ、」「イヤ見さつし奇妙な繪が出たぜ。」今「ムヽ、ナア、向へ町の狂言だらう、ハテナア、ら役者が混ッて書いてあると思つたら、見立てだアナ。」ト 繪ぞうしとひやの山本のとへにたいずみある。×「それ、其の節の引。」「割りあへがまた貸しになつて居るから、今夜川合しるこを奢らッし。」「オイノヽ承知だノヽ、」「汁粉よりか天麩羅に仕やナ。」「それおちやア高く上るぜ。」「また其樣なしはいことをいふヨ、あすの晩自己が澤山おごるから、今夜まア其方が天麩羅をおごらッしな。」「ヲヽすヤノヽをかしなことをいひ

ふぜ、それぢやァ其方が奢るのではねえのか、道理で大びらにしることよりか、天麩羅がいいなんぞといふと思つた、むしのいい男だぜ。」二「アハ、、、、そりやァ左様と、明日の晩の浚ひは何様する。」□「エ何所の浚ひだ。」二「オヤ〳〵、まだ知らねえか、昨夜亀の子が、お前に左様いふはずッだけかナ。」□「ナァニ亀の奴めエ、きのふしかも二度逢つたけれども、何とも言やァしねえ。」×「左様か、他でねえから往つてやらねえけりやァならねえ。」□「誰の浚ひだ。」×「岡本歳太夫サ。」二「歳太夫ぢやァ往かざァなるめえ。」トいひながら、よし町のかたへまがりゆく。これよりすべて往來の人が、あるきながらのふぜいと察してよみたまふべし。※「オヤ〳〵、大變に人が込み合つて來たぜ。」二「ムン何だァ、吹矢町が打出ねたんだァ。」※「ハァ左様か、オヤ〳〵、大層に娘がそろつて來たぜ、何れもみんな美容しいなァ。」×「ほんになァ、人柄のいい娘ばかりそろつたが何だらう。」※「ア、引知れたこと〳〵、東連の見物だぜ、しかも坂東三津代の弟子が、大勢まじッて居らァ、祭に出て、心やすくした娘が三人ばかりゐらァ。」あきんど「おでんやおでん、あまいとからいおでんやおでん。」○「アレサ、お傳さんといふのに。」今「オホ、、、、私やァまたじやうだんだと思つたァネ。」○「アノネ、先刻左様言つたことネ、おまへは何様おしだ。」今「あしたの事かえ。」○「アァ。」今「三津代さんは往きはしまいねえ。」○「イ、エ、お師匠さんは往つておくれではないが、お歌さんが同道に往くとお云ひだからお出でな。」今「それぢやァお前とわちきと、お歌さんと三人かえ。」

い「ア、それにお津多さんが參るヨ。」△「淸元のかえ。」○「ア、岩附町の延津多さんサ。」ト　おや〳〵はなしながら、おやぢばしをわたりゆく。　⊖「御存じしられし玉藥、鐵砲玉とはことかはり。」⊖「ヘン榮こう、ナア鐵砲ぐれえおやァねえ大筒だァ。」⊖「イヤ、おれが何時嘘を吐いた事があるえ、其方こそ石火矢だァ。」ト　いふうしろから、座しきよりかへるげいしや、そのいでたちのいきなること、筆にのべがたし。はこまはしにちやうちんをもたせ、すれちがひに、　げいしや「榮さん市さん、喧嘩をおしでないよ。」ト笑ひながらいふ。　榮と市はふりむいて、　⊖⊖「アハヽヽヽ、おほしくじりだ、お花さん相かはらずに御繁昌だネ、お熊さんへよろしく。」　げいしや「ハイありがたう、チツト遊びにお出でなねえ。」ト　よしやの家の方へゆきすぐる。

⊖「エヽウ何樣もいい唄女だぜ、氣障な所は少しもねえナア。」⊖「左樣ヨ、あの娘ナァ世事をいふのが上ッつらでねえから、賴もしいぜ。」⊖「今ぢやァ、あの娘につゞく唄女はあるめえ。」⊖「何でも藝がいいのに、容儀がいいときて居るから、鬼に鐵棒だァ。」⊖「それに性が堅くつて、いやみな座しきは、何程金になつても勤めねえといふのだから、俠氣だァ、オヤ〳〵最う亥刻だぜ。」⊖「今夜ァすてきに夜が短えぜ。」⊖「左樣でもあるめえ、延登代の所に、よつほど久しく遊んで居たぜ。」⊖「それならあしたァはやく往かうぜ。」⊖「オイ承知だ、バウッと早く巳刻目覺か。」⊖「ナニ〳〵、それぢやァいかねえ、明六ッにやァ路次を開けておくぜ。」⊖「ヘン左樣うまくいけばいいが。」ト　わかれてみぎひだりのかたへかへりゆく。　また唄女お花は、金たが鮓の前の所にて、小僧の持つたる弓張提灯の印を見て、花「もこゝで

シ小僧さん〳〵。」小「ハイ私でございますかえ。」花「ア、おまへネ、不躾だが鳥雅さんといふ、若旦那の在つた、お店の小僧さんぢやァないかえ。」小「ハイ左様でございます。」ト いひながら、おはなのかほを見てわらひ、小「アノおまへさんは、迎島の別莊にお出でなすつた、お民さんでございますネ。」花「オヤ〳〵、私を知つて居ておくれか嬉しいねえ、アノ若旦那さんは、去頃上方へやられてお出でだと聞いたが、まだお歸りではないかえ。」小「イ、エモウお歸ンなさいました。」花「エ、。」ト びつくりする。あんじてきながらも、まだ歸りしとは、おもひがけねばなり。「おかへりだとえ、嘘ぢやァないかえ。」小「イ、エ嘘ぢやァございません、まだ實家へお歸りなさりはしませんが、上方をば逃げ出してお出でなすつて、御本店の抱への、甚五郎さんといふ頭の宅に、隱れてお在でなさいます。」花「オヤ〳〵左様かえ。」ト いふうちにも、うれしさかなしさむねどき〳〵してゐる。小「實はお前さんが、お民さんに逢ひないかどうだか、お聞き申せと若旦那に、一昨日私が言ひつかりました。」花「オヤ何様してエ。」小「ナニわたくしが、先達お前さんの湯から上ッて、お歸りなさるのを見たことがございましたから、其のことを若旦那に、一昨日おはなし申した。」花「オヤ〳〵左様かえ、私やァさつぱりわすれて仕まつたのに、お前はよく覺えて居ておくれだッけねえ。」ト いひつゝうしろをふりむきて、まはしのをとこにむかひ、花「理助どん、お待ち遠だネ、チツト待つておくれヨ。」ト すこしかんがへごとをして、花「それぢやァネ小僧さん、エ、引何だッけ、オ、それ〳〵、その甚五郎さんのお宅は、何といふ町内だエ。」ト だん〳〵てまがと

れるゆゑ小ぞうは すこしこまりて 小「ヘエ何いたしませう、若旦那に左様申して、お前さんと逢はれる様にいたしませう、お前さんのお宅も知つて居りますから。」トいふうちに、往来にけんくわが出来て、さわがしくひしめき、てんどう／＼とおしへだてられ、お花はおどろき、隔てられたる朧月、小僧は脊負ひたる風呂敷を、大事にかけてちやうちんの、消えた其の儘いや／＼を、走りて去れば箱まはしも、お花に怪我をさせまじと、すゝめて曲る相坂町、急いで家に入りけく。此のときお熊は何事やらん、腹を立ちし様子にて、門口を出るを下女のお清は、小声にして、「アレサ姉さん、マアお待ちなさいましョ。」ト抱き止める。くま「ナニかまはないから放してくんナ。恥をかいてもいいから、伊勢木やの家へ往つて、梅里さんに逢つて、わけをつけて貰ふから、案じなさんな。」清「イヽエ、それでも最う夜刻過ぎでございますから、マア明日になさいましな。」くま「ナニサ、梅里さんが寝てお在での所へ往くがよいヨ。」トふり払ひ、駆け出さんとする向うへ、帰り来りしお花は驚き、花「オヤ姉さんかへ。」くま「お花お帰りか、丁度よかつた留守をしておくれ。」ト、いひ捨てにして駆け出すを、理助は引きとめ、無理無體に宅へ抱き入れる。お花はやさしく泣き聲にて、花「姉さん、何だか知らないが堪忍おしヨ、お清どん何様したもんだねえ、姉さんの駆け出してお出でのを、なぜお止めでないヨ。」清「イヽエ、モウ／＼先刻から、いろ／＼と御意見を申しましたけれども、お聞きなさらずに、今伊勢木の宅へ往つて、梅里さんに逢ふと被仰るのでございますわネ。」

そも此の一條は、いかなるわけといふに、彼の梅里といふ好漢、いつしかお熊と深き中となりしが、何故か此の頃は、少し足を遠くして來らず、他の噂にて聞けば、鳥居町の舟宿、伊勢本の家に預けられて居る娘に、お八重とて寔にうつくしき孃のあるを、如何してか梅里がいひよりて、たがひに相惚となり、日毎に其所にのみ遊びくらすと聞きしより、お熊は心を惱まして、今夜も斯かる仕儀におよぶなり。

さてもお花は理助とともに、お熊をやう〱中の間へ落著かせて、花「姉さん、マアお前さんにも似合はないねえ、今驅け出してお出でだッても、梅里さんが彼家にお在ででないと、恥をおかきなさる許りでいけませんわネ。」理「たとひあの旦那が、伊勢本にお在でなさるにもしろ、お前さんが其樣に、輕々しくお出てなさるといふ事が、あるものでございますか、よくお考へなすつて御覽じまし。」くま「それだッても餘り悔しいものヲ。」花「アノウ、私が左樣言つても、お前さんはうそだとお思ひだらうがネ、先刻他の人に梅里さんの噂を聞きましたがネ、お前さんの思つてお在での譯とは違つて、何だかつまらない事で、氣をもんでお在でださうでございますヨ。」くま「ナアニ、何も他に苦勞をする樣な身分でお在でぢやアないものヲ。何でも私やア先の娘と喰ひ合つて、死んでも構はない氣になつて居るものヲ。」ト、涙を拭いて眼をすりながら、お花の吸ひ付けて出したる煙草を呑み、溜息を吐

いて居る。常「お花さん、お著かへなさいまし、温まつてありますヨ。」花「アイありがたうヨ、いよいと著かへて仕まはう。」ト言ひながら、二階へ著類を著替へに行く。跡にお熊は兎に角に、心すまねばまた帶をしめ直して、くま「理助、おまへ今歸ッて氣の毒だが、私と同伴に鳥居町へ往つておくんな。」理「ナニ氣の毒も大儀も入りませんが、今夜アマアお止しなさいまし。そしてマア、不斷世間で賞められてお在でなさる、才智なお前さんが、引けになる樣なことがあつちやア、私どもまで悔しうございます。殊に今お花さんが、誰にか梅里さんのことを聞いたと、仰しやッたおやアございませんか、よくマア先から先のことまでも聞き糺して、それから取極と、談じつけるがいいおやアございませんか。」くま「ナニ、それは迹の掛合をする氣ならば、常八さんも中へはひつてゐる事だから、何樣でもなるけれども、肝心の梅里さんの氣がそれた口にやア、いよいよ私の恥だから、是非直にしなくつてはいけないから。」ト鬱氣いで居る。

## 第二十四章

嗚呼、才女の類まれなるお熊なれども、眞實惚れたる梅里の心が、變りしといふに思ひ亂れて、常の發明なる胸のかきみ曇りて、其の理のわからざるがごとし。

抱きしめて餘念のなきを憎さうに只突きはなすあかつきの鐘、とよみたる明の鐘ならで、丑三の鐘

物すごく、コウ〳〵として告げ渡る、眞夜中なれども戀ゆゑに、寢られぬお熊が憂き思ひ、飛び立つ胸をおし鎭めて、こらふる辛さもお花が思はく、理助お清が深切に、引き止められてくよ〳〵と、前後案じて中の間に、延べたる牀の中に坐し、煙草くゆらし居る折節、表の戸をドン〳〵、「お熊さんお熊さん、ドン〳〵〳〵。」「オイお清どん〳〵。」トいふ聲きけばたしかに梅里、お熊は胸もとゞろきて、何ゆゑなるか知らねども、腹立つ中に戀しき人、戸じまりの際へ立ちよりて、くま「誰人でございますエ。」「アイ私だヨ、はやく明けておくれ。」くま「梅里さんかえ。」梅「アイ私だが、同道人があるからどうぞ、早くあけておくんなせえ。」ト、いはれてお熊は不思議ながら、理助を起してあけさすれば、急いで家へ驅け入る梅里、十七八の美しき、娘を伴ひ來りし故、お熊はいよ〳〵胸さわぎ、兼ての人を連立ちてか、あまりのことと悔し涙に、挨拶もせず立つて居れば、梅里はそれとも氣が付かず、入りたる跡の戸をしめさせ、梅「ア、引、ヤレ〳〵怖ろしい事であつた、サアマア奥へおいでなせえまし、此家は決して知れる所ではございません。オイお熊さん、此の孃をどうぞ奥へ連れ申してくんなせ。今にマア理を咄すから。」ト、いはれてお熊は不承々々に、くま「サアマア、此方へお出でなさいまし、何樣いふ事だか、薩張解らない事でございますねえ。」ト、梅里を尻目に白眼みて奥へ伴ふ。梅里もあとから奥へ行き、お熊にかまはず、理助を寢かして仕まひ、お花も二階にて目をさませし樣子

ゆゑ、挨拶をしてお清には火を發して貰ひ、火鉢へ土瓶などをかけさせて、是れをも次へ立たせて、連れて來たる娘にむかひ、梅「何樣してマア、伊勢本をかぎ付けて踏み込みましたらうネ。まづ第一お前さんを、男だと思ふものは、伊勢本の夫婦ばかり、彼家の婢女も舟頭も知らねえのに、あの横島惡八が知つて參りましたらう。何でも彼奴めが、此度の一件で殿さまにへつらッて、貴君の御親父さまをしくじらせて、其身が御家老にもなる料簡と見えます。」ト、ひそ／＼と話すを、お熊はあやしく思ひ考へながら、娘の顏をじろ／＼とよく看れども、男らしき所もなければ、何れ梅里がこしらへごとならんと、樣子をうかゞひ一言も口を出さず、默然として火鉢の際、梅里の心をはかりかね、常の風情はさらになく、其の座もしらけて見えにける。

さて梅里の連れて來りし娘を、いかなる者とたづぬるに、元來女にあらずして、梶原家の老臣、番場忠太夫の次男にて、忠之丞と名を呼ばれ、御小姓を勤めて今年十六才なりしが、今梶原家の殿といふは平次郎殿とて、至つて心よからぬ性質にて、兄上源太殿死去有りしより、さいはひに家督となられて、我儘增長たとへるにものもなく、此の程兄源太殿の御愛妾に召されんと、既に其の事極りし、腰元千鳥といはれたるが有りけるに、未だ御寢所へ出て、源太どのに添ひふしもせざる中、殿は御死去となりし故、常の御妾にすゝみし者ならば、直においとまとなるべき所を、

家中の娘にて御小姓に御殿へ出で、未だ御手は付かずといへども、源太どののふかく御氣に叶ひし者なれば、御菩提を弔ひたてまつるこそ、忠貞の道なるべしと、老女などの申し出せしゆゑ、情なくも歳十九才にて切髪の尼となされ、滑川のむかうなる、御下屋敷に佛間をしつらひ、侍女一人と婢女一人を付けて置かれしが、千鳥は遉に年壯く、肌さへしらぬ殿の爲に、せん方なくも後世の修行、緑の髪はそぎながら、心に悟れぬ佛の教へ、朝夕香花を手向けても、十種香ほどは身に染みず、遠州流ほど詠めもなし、浮氣といふにはあらねども、まだやう／＼に咲き初むる、花の姿を我ながら、そぐはぬ珠數を爪ぐりて、春心院と法の名を、付けられたるも恥かしく、春の心に庭面を、見れば番ひの蝶々も、羨ましやと思ふより、自然なる化粧風俗、白綾重著て紫の、被布を羽織りし出立は、故人の路考が女鳴神、猶それよりも美麗しければ、是れを見る他人毎に、賞めざる者のあらばこそ、あつたらものを後家樣とは、いとしい事やと噂せぬ、日もなき程に評判せしが、當主平次景高どのには、家督の後在國して、病氣ゆゑ三年ほど、鎌倉に出勤せざれば、此の千鳥の事などは、一向に心づかざりしが、全快してかまくらに參勤し、あるとき下屋敷へいたりて、風と春心院を見初められ、所爲と其の夜は下屋敷に、酒宴をもよほし、かの春心院を酒の席へまねかれ、酒興にことよせ種々と、戯れ口説かれしかども、男ぶりより心まで、

いと憎らしき平次殿なれば、千鳥は以前より身ぶるひして、いやがりし次男景高ゆゑ、なほ／＼に承引せず、前殿の事を言ひ立て、菩提の道に入りたる身をかこつけて、きびしく断りをまうし上げしかば、平次殿には心中にはなはだ怒り、憎きをんなの心ざし、故人源太に操立ても、實は我を嫌うてのことなるべし、其の義ならば、思ひ知らする憂き目を見せんとて、役人に言ひ付け扶持小づかひ等まで、やう／＼其の日／＼に足らざる程を渡し、困窮をさせけるところに、先殿の母公、櫻の禪尼御秘藏の若殿、源太殿ゆゑに姿を替へたる千鳥の事なれば、其の由をほのかに聞しめされ、いと／＼不便の事なりとて、此の度御隱居所を改めて、御下屋敷に移し建てられ、表方にても、心やさしき侍のみを選み出して、その身の附人とあそばされ、それより彼の春心院を、多分その御殿に呼び置かれて、不自由のなき様にやしなひたまひぬ。平次殿はこれを聞かれて、いよ／＼千鳥を憎みしかど、大切なる母君、櫻の禪尼のなさるゝ事なれば、とがめもならず、無念にはあれど、月日をすごされしに、前にもいふ如く、千鳥は十九才の節に切髪となり、今年やうやく二十一才にて、其のうるはしき姿は、唐土の西施我が朝の衣通姫を、當世に賑ひたるともいふべし。殊に幼年き節より御殿に勤め、未だ男子の肌知らず、雪よりしろき顔ばせに、露もたるべき艶々しきに、男は元來侍女婢女に至るまで、ほれ／＼となる美人なれば、春心院を

見て、戀慕の心を惱まさぬ者はなかりし中に、御小姓忠之丞が、御隱居附となりて、おなじ御殿に在りし故、いつしか人目を忍びて、かたらふこととなりければ、たちまちにあらはれて、平次殿の耳に入り、以前の憎みもあるゆゑに、春心院をば牢の如き部屋に押しこめ、忠之丞をば上屋敷の家中、石部銀吉といふものに預けられ、重き役儀の子息に似合はず、武家の掟の專一たる、不義を行ふ相手もあるに、春心院と密通せし事、はなはだもつて不とゞきなり、きびしく申し付くべきなれども、當家第一の舊臣、番場忠大夫の家柄に免じ、近日切腹致させ、春心院は重く、長の押しこめと致すべしとは、まだ平次殿の執心あるゆゑなるべし。しかるに石部銀吉は預り、忠之丞をいたはり、何とぞ助命をさせんと思ふ所に、母君櫻の尼より御內意ありて、いかやうにも命をたすけ、後日にいたし方もあるべし、其のはうの落度とならば、尼が威光をもつて、平次へは詫言なしてつかはす間、宜しくとりはからひて、他へ落してなりとも助命けよとの仰せなりければ、出入の町人御隱居の御ひいきある梅里と內談にて、忠之丞を夜中ににがし、梅里のはからひにて、詮議きびしくたづねらるゝをのがれん爲に、若衆姿を幸ひと、箕掛かもじをもつて、島田の娘に仕立て、伊勢本へあづけおき、なほ慈悲深き櫻の禪尼の御賴みにて、春心院の押しこめをも助け出して、いづこへなりとも、忍ばせつかはしくれよと御內意あり、そのことなどの用

事と、心配ひの重なりければ、戀しきお熊の許へも、遠ざかりて居たる所に、今夜忠之丞が尋ね出さんとて、横島惡八が踏み込みしゆゑ、裏の方より連れ出して、このお熊の方へ逃げ來りしなり。さて梅里は此の始末を委しく語り、忠之丞を當時あづかりくれよとありければ、お熊も心がけなき事なれども、梅里がたのみ殊更に、推量違ひの娘心か、我ながらはづかしく、恨みし疑惑をはらして、まづ忠之丞をかくまひおき、他に知らさじと請合ひける。

おくま漸く心おちつき、につこりとわらひこ、くま「私やアマア、どんなに悔しかつたらう、此樣なこととは知らないで、今夜ア鳥居町へ驅け出して往つて、此の嘲しあひも仕ようかと思つたのを、理助やお花が無理に引き止めるから、往かずに居ましたけれども、悔しくつて／＼、チットも寐ずに居た所を起されて、嫌の立つ中で、お前さんの聲を聞いて、嬉しい悔しいで、何樣せうかと思ひましたわ。」梅「何の他人を、此方はまた御屋敷の御用で、驅け歩行いて居る中に、ひよつとお前が氣でも變りはしまいかと、大概苦勞をした事ぢやアねえ。」くま「嘘をお吐きなねえ、私を案じておくれな位ならば、ちよつと此所へ寄つて、いそがしいから四五日來られないが、其の氣で居ろとか何とか、言つておくれでも能いぢやアないかね。」梅「ナニ、左樣言つた所が、疑つて氣をもむから同じことだ。」くま「ホヽヽ、左樣でもないワネ、それだが此のお子は、實正に男のお子かえ、何樣見てもかはいらしい、娘のやうでお在で

だねえ。」梅「それ見たがいい、まだ疑ッて居るぢやァないか。」トわらひながら、「忠さんどうぞ、お前を見せてやつておくんなさいまし、アハヽヽヽ。」くま「オホヽヽヽをかしいネエ、そして忠さんといふお名かえ。」梅「ナニ忠の字をとり直して、お中さんとでも言つてもらふ樣に仕やせう。」忠「寔に大變な御厄介で、お氣の毒なわけだ。」梅「ナァニ、其樣なお心づかひは入りません、マア／＼お休みなさいまし、何れまた明日御相談申しませう、トキニ何樣仕ようナウ。」くま「左樣サねえ、花を下へ呼んで、此いお子を二階へ寐かしてあげる方が、いいぢやァありませんか。」梅「夜具は丁度いいか。」くま「ナニサ、明日は何樣でもいたしますが、今夜ァお前さんとわちきとお花と三人で、いつしよに寝ませう。」梅「左樣かそいつは。」くま「嬉しいだらうねエ、オホヽヽ。」丑刻半の鐵棒の音、チヤランチヤラン／＼。

風月花情　春告鳥卷之十二　了

# 風月花情 春告鳥の序

これ狂訓亭の机の上は、筆にて旅をするが如し。何故となれば、日毎に同じ所をしるさず、昨日は貧家の愁歎場を辿り、今日は郭中の全盛をうつし、明日は何處の風情を綴らんと、胸の日記の帷幄れては、筆の建場の長あくび、はてしもあらぬ戀の道を、餘さずもらさず書き留めんと、勸善懲惡の本意を出でしより、意見になるべき名處をさぐり、細かに人情のおもむく道をたゞぬれども、さらに不實の横道をしるさず、さればとて、正直は兎に角まはり遠く、行路に埒があかぬに似たれど、操の松の並木には、あしきやからのさまたげなく、出世の都へ著きにけるは、かならずつゝがなきものなりと、悟らす爲の教への近道、人間一生道中をするに等しと、おもふ所を序文に著はし、また拾遺の種にもと、口書に江の島を出せしは、浮世の旅のおもむきなりけり。

江戸人情本一流の元祖

狂訓亭　爲永春水戯述

# 風月花情 春告鳥 巻之十三

江戸 爲永春水 著

## 第二十五章

それ戀の道たるや、百八煩惱の隨一、戀慕可愛の根元たる故に、迷ふ時は一生をあやまるのみならず、他生曠劫の絆ともなりて、靈性をうしなふにいたる。されども迷ふほどでなければ、薄情の戀にして賴もしからず、但し何事も緣ながら、その原をつゝしみて、始終全き契りこそ、貴賤を論ぜず男女の寔といふべきか。此所に何屋か家名は知らねど、いと靜かなる茶亭の二階に、しのび音を泣く女の聲、往來も途絶えし子ノ刻時分、同じ軒端の並びにて、さえ渡りたる清元の淨瑠璃、

〽思ひ直してもたれより、合をなご心にうたがひの、深い中にもなほ深い、二人が中に水さして、たとひのかしてあるとても、言ひかはしたをほごにして、そなたはそはぬ心かと、むりに引きよせうらみいへば、

ト語るを茶亭にて聞きとる唄女、口説の種の言ひがゝりも、惚れた因果か女氣の、つい折れ易き戀の癖。　はた「それぢやァ私がわるかつたから、堪忍して下さいましな。」　鳥「ナニサ、久しぶりで逢つて、其様にあやまらせる程の事もねえが、餘りくだらねえ事許りいふからヨ。そして薄雲の事は、おめへも最初ッから、知つてゐる譯ぢやァねえか、殊に此間はじめて上方から歸つて、ちよつと出會つた節にもいふ通り、未だに薄雲の方へは、便りも仕ないわな。」　はた「アレサ、それだから私がわるかつたと、いふので有りますわね。そしてお前さんも、薄雲さんの事といふと、憤然になつて腹をお立ちなさいますがね。」　鳥「何も此身が、腹を立てるといふわけぢやァねえぜ。」　はた「アヽサァ、私のいふ事をお聞きなはいましョ、よしや腹をお立ちなすつたと申しても、彼程惚れ合つてお在でなさつたおいらんの事だから、少しも御無理とは存じませんけれども、私がお目にかゝらうと、約束をした日といふと、待ち忙然にさせて、お前様は仲の町の茶やに、遊んでお在でなすつた事を、毎度後日で聞きましたから、私がこがれてお待ち申した心を、些とも慈愛さうだとは、思召さないと申す事サ。」

作者曰く、此の節鳥雅の心の中は、いかにと看察し給ふぞ。其の以前此のお花が、お民といひし頃はまだ、肩縫上げせし少女にて、愛敬は深かりしかど、只初心なるのみならず、鳥雅を主人と畏れうやまひ、遠慮と恥かしいので、千話も口説もならばこそ、何事も直にて、自由になるばか

り、少し鳥雅には相手に足らぬ様なりしかど、生得の艶しきを慕ひ、此の度故郷へ歸りても、風説を聞きしとはいひながら、先づ薄雲よりも、お花の方を尋ね問ひしなり。また此の節さそはれて、兩三度郭へ至りしかど、馴染の茶屋へは行かず、彼の吉兵衛といふものに出合ひもせねば、竟薄雲が心ならぬ出勤せしとも知らず、相かはらぬ全盛といふ、噂を聞いておもしろからねば、竟に一度も問ひ音信れず、薄雲も鳥雅の上がたより歸りしことは知らず、お花は推量にて、薄雲の事を嫉妬するも用心なるべし。鳥雅はお花を、元のお民と茶にしてかゝりし所、名にしおうたるお熊が仕込み、みがき上げたる唄女となり、五分も透かさる前後の取りまはし、口舌の中にも先刻から上げ足をとられて、いひ譯にまごつくほどなれば、相手になす力もありて面白く、鳥雅の嬉しさいはん方なけれども、まづ少し腹を立てたる風をして、負ける言葉も吹き消したれども、また〳〵今の如く、薄雲とは深き中の事故と、油ッ濃く言ひまはされて、じれッたく思へども、過ぎし日お花と出で合ふべき約束なして、其の日に郭へ行きし理解は、こまやかにしたりける。

鳥「どうだ、まだ疑るのかえ、お前も此身が事はやかましくいふけれども、此間約束した日には、お前の方で東連のお座敷だといつて、はづしたぢやァねえか。」トまじめにいはれて、さすが正直なる心故、お花は氣の毒になりて、はな「アレサ、あの日にはネ、私がお前様と約束したのを知らずに、姉

上さんが、（おくまのことなり）請合つて急度上げますとお云ひだといふので、爲方なしに出たんでありますわ。夫れだけれども、其の事をお云ひだと、私も面目がありませんから、モウ薄雲さんのことを言ひは仕ませんョ。」鳥「サアもう能いから、中直りに些と呑みな〳〵。」猪口を笑ひながらさし出せば、お花も莞爾笑ひ、はな「ハイ有りがたう。」ト猪口を手に取る。鳥「ドレお酌を仕よう。」はな「オヤ、大そうに強いお酌でありますねえ。」ト一口呑みて下に置き、はな「アノウ若旦那さんェ。」鳥「何だ。」はな「アノウ縁といふものは、何樣に結ばつて居るもので有りますだらうね。」鳥「なにを云ひ出すかと思つたら、妙な事を聞いたものだ、藪から棒に、何を思ひ出して其樣な事を聞くのだ。」はな「それでも考へて見ますと、寔に不思議でございますものヲ。私がはじめて、迎島の御別莊へ參りました時分、お前さんは薄雲さんの所へ、一心になつてお出でなさる節でありましたから、夜なんぞは些とも御宅にお眠るといふ事はなし、雨の降る晩や何かは、まことに怖くつて〳〵、いつそ驅け出して、何所ぞ賑やかな家へ參らうかと、思つた事が有りましたが、其のうち不圖した事でなんしてから。」トにつこり笑ふ。鳥「オイ〳〵なんしてからと許り云つちやァ、分らないから、モウちつと委しく言つて聞かせなな。」はな「アレ、くはしく言はないでも宜うございますョ。」鳥「そんならば、其のなんしてからのあとは何樣だ。」はな「イ、エモウ止しませう、お前はんがお笑ひなさるから。」鳥「ナニ〳〵、決して笑やァ仕

ないから噺しなな、なんした限りで止められては、氣にかゝる樣だ。」はな「そんなら云ひますから、お笑ひなさつちやァ否でございますヨ。」鳥「よし／＼、此の通り老實になつて居たらよからう。」ト、兩方の手を膝の上に、しやんと構へて四角に坐るゆゑ、お花はわらひ出し、はな「オホヽヽヽ、ヤレサ其樣になさらないでも、宜うございますワナ、寔に意地がわるいねえ。」鳥「オヤ／＼、これでも悪いのか、イヤ噺しを聞くのは餘程骨の折れたものだ。」ト笑つて居る。はな「それでもお前さんの樣に、老實になつてお在でなさつては、可笑しくッて噺も何も出來ませんものヲ。」ト笑ひながら、衣類の前を合はせて居り直し、はな「サァほんたうに云ひますから、お聞きなはいヨ、エヽ、アノゥ夫れからネ、お前さんも私も、思ひがけない事で別れ／＼になつて了つて、モゥ兎ても再度とお目に懸る事は、出來ないのかと思つて居りましたのに、また斯うしてお噺でもする樣になりましたのは、寔に不思議では有りませんか。」鳥「オヤ、それでモゥお仕舞か、大そうに前書が長いから、よつ程むづかしい事かと思つたらば、餘り短いはなしで力が落ちた、アハヽヽヽ。」はな「アレサお前さん、其樣に茶にしてお在でなさるけれども、是れでもモゥ／＼お別れ申して居りましたうち、何樣に苦勞を仕ましたらう。」鳥「左樣いふと、お前ばかり苦勞した樣だが、別れて居る中の苦勞の競べッこなら、お前よりか此身の方が勝つくらゐだァ。マァ第一夢にまで見て、それから寢ての事案じて、急に上方から驅け出し

て、下つて來たといふ所なんぞは、實が餘計にあるぢやアねえか。」お民のなんぎせし夢の咄ははじめて再會せしときに言ひ聞かせたる事とさつし給へ。はな「それは左樣かも知れませんが、其の代り私の樣に、お前さんは非道い目にお合ひなすつた事はありますまい。」鳥「ナニそれは、お前が女の美麗い爲で、衆人が惚れて無理に口說くのを言ふ事を聞かねえからの事だ。併し又嬉しがつて、きいた事があるかも知れねえ。」トいへば、お花は顏色を變へて、眉毛を八の字になし、はな「なんでございますとエ。」鳥「ナニサ、田舍にもまた相應に、面白いことが在つたらうといふ事サ。」トいはれてお花はくやしくなり、いのちをすてても身をけがさじとうきかんなんをせしものをと、目になみだをうかめて、はな「お前さんマア、實正に其樣な事でもあつたらうと、思つてお在でなさいますのかねえ、實に左樣思つて下さつては。」トなみだをはら／＼とおとして、うらめしさうに、「まことに私は無本意ヨ。お前さんにお別れ申して居る中の、苦勞といふものは、なか／＼今更お咄し申すにも、咄し盡されないほどの事でございます。其の中にも寅吉といふ人は、伯母さんの居る中から、私をつかまへていろ／＼な、無理な事を言ひますのを、ぬけつ潛りつして居る間に、伯母さんは亡去りますし。」鳥「オイ／＼お民、最う止めにしなな、女房に其樣な事をいつて泣かれると、寔に氣が鬱悁いで來て堪らねえわナ。サア／＼其樣な愚癡や、疑りッこは止しにして、是れから和合く仕ようぢやアねえか。」ト、やさしくいはれて莞爾と、淚の笑顏のうつくしさは、燭臺のあかりに照らしてうるはしく、お花は鳥雅に女房といはれしのみか、幼名を呼ばれて

嬉しさ飛び立つばかり、恍惚として膝をよせ、はな「オヤ堪忍して下さいましョ、ツイ過ぎた事を思ひ出しましたら、悲しくなりましたから。」鳥「情人のことを思ひ出してか。」はな「エヽ。」鳥「ナニ、俺が事を思ひ出してかといふことョ、モウ泣くのは御免だサ。」ト笑ふ。お花も莞爾して、はな「モウ泣きは仕ませんョ、其の代りに今の様に、過ぎたことでも疑つて、お在でなさるやうだと、死んで仕舞ひますわ。それでなければ幾時も、泣いて居ますわ。」鳥「そんなに泣くのを、恩にかけて呉れることもねえ、併し其の涙が一粒十両づゝと看ても、餘つぽどの金高だから、恩にかけるも無理ぢやァねえノ。」はな「宜うございますョ、何とでも言つて、思入れおいぢめなさいまし、何様でいぢめ殺されても、お前様より外には、何といふものが有りません、本望でございます。」鳥「ナゼ死ぬのが本望だ、何もいぢめ殺すといふわけもなし、お互に命があつたればこそ、斯うしてなんするわけだから。」花「オヤ斯うして何するとはえ、最些と委しくお言ひなはいな。」トわらひながらいふ。鳥「フウム、先刻の意趣がへしか。」花「それでもネ、私には分解りませんものヲ。」鳥「そんならわかる様に。」花「ホホ、、をかしいねえ。」

此の後鳥雅は、お熊の許へもいたり、只お花にのみ心を移しけるとぞ。

## 第二十六章

爰に梶原家の御母公は、仁心深きお方なれば、春心院の命を救はせたまひて、松が岡の尼寺へ送り

入れ、食料その外も不足なく、惠み遣はされければ、彼の境内にて小庵を預けられ、以前に寺入りしたる、一人の美女と同居なし、馴染かさなりて姊娣のごとく、睦まじかりけるゆゑ、次第に素生を明かし合ひ、身儘になるまでの力草となりなられしが、其の一人の美女といふは、何者ごとくはしくしるせば、彼の鳥雅と契りて、ふと行方知れずになりし、小濱といへる唄女にぞ在りける。小濱の名は此のさうしの初編に、わづかにいだせり。小「オヤ〳〵、それぢやアお前さんのは、男の緣を切らうといふ爲に、此所へお在でなすつたのではありませんネ。」千「ア、左樣でございますわ、それだが私の身が斯うなりましても、其の忠さんといふお方が、何樣おしだかと、それが朝晩苦勞になつてなりませんヨ。」小「ナニそれはお案じでなくつても宜うございませう、其の親御さんもお在でだから、是非何所へか知れない家へ、隱してお置きなさつたに、違ひございますまいわネ、やがて月日が立つうちには、お屋敷の方もすんで、夫婦におなんなされるのは大丈夫出來ます。」千「イ、エ、何樣いたして、なか〳〵左樣はなられませんヨ、夫婦になんぞなり度いといふ慾心は、兎ても叶ひませんがネ、何卒此の後出會つてから、折節貌が視られる樣だと、嬉しうございますが、既に二人が今の殿樣の、お手討にもならうとした所を御隱居樣の御一言ばッかりで、其の座を退れたのでありますから、マア今の命のあるのを、有りがたいと思はなければなりませんネエ。」小「オヤ、それでも又思ふ男が在りながら、一生添はれないく

らゐならば、早く死んだがましかと思ひますわ、私は斯うして居つても、唯其の人ばかりを氣にして居ますわ。」千「オヤほんにお前さんのも、男と緣を切り度いから、此地へお出でのぢやァないと、お言ひでありましたッけネ、二人ながら同じ樣な身で、殊にマァお前樣も私も、一ツ庵を預つて居ますのも、まことに不思議な御緣でございますネエ。」小「左樣申すとわるいが、お前さんのは最初の殿さまと、一度もお合ひなすつたのでもなく、お心にない事でも、まづお武家の掟か何かで、切髮の尼にでもおなりのだらう。御迷惑でも他のお方と情人が出來ては、些とすまない樣な物でございますが、私なんそのは、直にそはれないといふのは、寔に悔しいこつてございますわ。」千「アレサ、私のだつても、無理にお妾になれと言ひ付けられた許りで、其の殿樣がおなくなり遊ばしたといつて、私に尼になつて仕まへといふのは、かはいさうに無理ぢやァありませんかねえ、その上に今の殿さまの、言ふ事を聞かないから、それを遺恨に殺すのなんのとは、餘りではございませんか。」小「それは無理にちがひないのでございますがネ、マァ無理にも後家樣でお在でのお前さんだから、御小姓と情通をおしでは、表向わるくも聞えませうが、私の身の斯うして居ますのは、寔に理にあたらない事だと、悔しい樣に思ひますわ。」千「オヤ左樣でございますか、私やァまだ其の譯をば、くはしくお聞き申しませんが、何樣してか戀しいお方に、爲方なしにわかれて、此院へ來てお在でだと、お言ひだつけ

ねエ。」小「アノウ私のはネ、何様も他人にはなすと、譃の様でございますヨ、此間も些と許り、お前さんにお噺し申したつけが、私が和歌町へ出たのは、まだ十四才の節でありましたわ、其の時分に私の母が、人に欺かされて、種々私の身の事を氣をもんで、はやく自業に仕度いの、相應の旦那がなくつては、借金ばかり出來て今につまらなくなるの、衣類が悪いと流行らないのと、他人にも相談を仕てばかり居ましたつけがネ、その最中私を五六度、お座敷へ呼んだお客が、何だかいやらしい事を言ひかけたり、深切らしいことを言つたけれどもネ、何をいふかと茶にして、會釋つて置いたらば、何時の間にか、母人アの所へ尋ねて行つて、何様だまかしてか、私を貰はう、遣らうと約束をして、些と許りしるしを取つた事がありましたのサ。」千「オヤ、お前によく得心もさせずにかへ。」小「ア、左様でございますがネ、唄女の新子にでも出て居た當座は、何だか勝手が知れないから、お客の言ふ事を、ハイ〳〵と請けて居なければならない様に、思つて居ますから、實正の情心こそ、放心とは仕ませんけれども、女房になるの仕ようのと云ふくらゐの事は、口先でアイといつて置きますわネ。それをその人が實事にして、私の方よりは母人アの方を、大事にして居る中、其の人の氣では最早きまつて居るから、大丈夫だと思つたのか、お金がないのか、私の方へは滅多に來ないでからネ、二年程過ぎる中に、私は鳥雅さんといふ、お方に深くおもはれて、十六歳の暮に、和歌町の年季を抜いて貰つ

て、其の鳥雅さんに、宅まで拵へてもらひましてネ、私と母人とは、やつぱり別宅になつて居ましたのサ。其の時分には、私をもらはうといつた人は、ひさしく田舎へ行つて居て、何の沙汰もなかつた所が、田舎から歸つて來て、私の身分の事を聞くと、大變に腹を立ちましてネ、母人にむづかしく言つた所が、だん／＼母人に理詰めにされるし、私はまた一度でも何した事はなし、約束した證據もこともないから、奉公の身分で、主人の勝手に付いて、鳥雅さんといふ人の方へ、奉公するやうに言ひつけられて、給金をもらつて居るのだから、給金さへすましてお呉れならば、また何樣でもなりませうが、永い年のことだから、實はお前を當にはしないと、返事を仕ましたらネ、其の金も出來ず自分も行き屆かないのを、他人にいはれて悔しくなつたのか、何樣したいのだか狂人になつたあげくに、たうとう變な死に樣でも仕ましたさうでネ。それから毎晩々々母人の方へ、夢現に其の人の姿があらはれて、何でも私と母人を、とり殺すといつて祟りをしましたのサ。」千「オヤ／＼怖いねえ、それでもよくお前樣の方へ、化けて出なかつたネエ。」小「イ、エそれからネ、最初の中は母人も、私へ對して氣の毒だと思つて、隱して居たことでありますが、段々自分も怖くなつて、私に其の理を話して聞かせて、私にあやまりましたのサ。實は當座のしのぎに挨拶をしたが、よもや永の年の中、向うでつゞきも仕まいし、其の中には何樣かなるだらうと、思つて居たところで、此樣な事になつたが、何卒お

りがたい御加持か祈禱でも頼むか、願がけでもして、母人は爲方もないが、其方をば祟りのない樣に仕度いと、種々に除けをした上で、何樣も私までおそろしい夢を見たり、うなされたり、病氣になりさうな時になつて、ある人に教へられて、何でも其の人を一旦丈夫の樣にして、法事でも仕てから、私が二年か三年尼にでもなつたらば、怨念が消えるだらうからと勸められて、實にもと親子が相談して、鳥雅さんにも祟ると言ふ樣だと、いふのが悲しさに、戀しいのを我慢して、かならず今の男には明かすなといはれましたから、思ひ切つてその通りにしたのでありますが、當時考へて見ますと、欺かされたのではないかと思ひますが、其の時分に夜ばかりか、晝も薄ツくらい所には、其のいやな人の俤が見られる樣に思はれて、モウ〳〵前後の事も思はず、此所へ願つて參りましたわ。ト、小濱の過ぎしものがたりを、千鳥は聞いて溜息を、つく〴〵思へば世の中の、儘にならぬが人の上、身にもくらべて歎きけり。

風月花情　春告鳥巻之十三　了

# 風月花情 春告鳥 巻之十四

江戸 爲永春水 著

## 第二十七章

爰に相坂町のお熊の許へ、遊びにいたりて、はじめは浮きたるやうにいどみたる戀も、縁の深かりしゆゑか、つひに二人は水と魚、はなれぬ中となりしかば、兼てお熊の生質と、自ら云ひし嫉妬の、まはり氣ならで梅里の浮薄、確かにそれと思ひ詰め、彼の伊勢本へ踏み込まんとまで恨みし所へ、其の娘が連れて夜中に梅里の頼み、くはしき仔細を物がたり、他のためにも眞實を、盡す男の生得と、だん／＼聞けば此の程の、無沙汰も無理とは恨まれず、却つてとも／＼相談し、力となるも重縁や、結ぶの便りと才智の思案、翌日いよ／＼お八重と名乗りし娘は、忠之丞といひし梶原家の小姓に、相違なき事がわかりしかば、安堵して其の夜梅里と咄し合ひし如く、お八重の假名をまた假に改めて、お中と呼び、お熊の宅にかくまひ置きけるゆゑ、忠之丞と知るものは絶えてなく、また／＼世をば忍

のばせけるが、是れよります〳〵お熊と梅里は、同じ住居をせぬばかり、夫婦のやうにむつましく、朝夕往きかひ絶え間のあらず、今は浮名もたち過ぎて、他が噂を云ひ止むまでにぞ契りしが、そもそも梅里の身のうへは、いかなる人ぞとくはしく記せば、まづ相應に富家なりとはいはでも知れたるその行狀、當時は隱居も同樣に、遊ぶが常の如くなるも、家督の兄が世を去りて、家内に目上のものもなく、其の身が當主となるべきを、諸事商人の世話をきらひて、一人の姉に後々は、婿をとりて家を繼がせ、其の身は若隱居となるべき心にてありけるゆゑ、是れまで女房をも持たず、萬端家業のとりしまりは、血縁の別家吉兵衛といふものに頼み、通ひ勤めの支配人とし任せ置き、只奥の離れ座敷を居間になし、風流に洒落て暮せしなり。然るに此の節はからずも、時候の邪氣におかされて、果ては疫癘のごとく煩ひて、ひさしく重き病となりて、甚だ惱み苦しみけるが、其の熱病もいとひなく、お熊は折々問ひなぐさめて、看病する日もありけるが、さすがに梅里は壯年だけ、いさゝか苦勞のやはらぎしより、口に隨ひて快く、今日は殊さら病をわすれ、牀の上に起き直り、病氣の見舞にもらひたる、菓子折の蓋をひらきて獨言、梅「なるほど烏雅さんといふ人は、深切な人だ、此間中相坂町で出會つて、二三度呑み合つたばかりだのに、病氣見舞までよこすとは、どうも嬉しい心ざしの人だ。お熊も賞めるし、お花も恍惚て居るのも無理はねえ。」トいふ折からに枕もとの屏風をあけて、小傳「へ

イ旦那様、お薬が出来ました。」番「すイ／＼、それは今朝のお薬か。」小僧「へイ、昨日のはお辰どんが流して仕舞ひました。」番「ム、左様か、今朝薬とりの節、玄桂様は何とおつしやつた。」小「イ、旦今日は御見舞ひなさいますと仰しやいました。」番「ム、よし／＼、其所へ薬はさまして置いてくれ。そしてナ、吉兵衛さんが居るなら、鳥渡呼んで来い。」小僧「ヘイナノウ番頭様は、先刻何所へか往きました。」番「ハア左様か、夫んならば其方は鳥渡由町の萬久へ往つて、松の内をあつらへて来て呉れねえか、夫れからその序に相坂町へ往つて、お熊さんに此間お咄し申した事は何様でございますか、出来さうならば、早いのが宜うございますと、左様云つてくれろ。ア、ア一筆書いて遣るといいが、何様も手がふるへて書かれねえ、よく間違はないやうに左様云ふのだヨ。」小「へイ、只お咄し申した事は早い方が宜うございますと、いへば宜しうございますか。」番「ム、左様いへば、先方で承知して居るから、くど／＼いふには及ばねえ、またつまらねえ事を間違へていふなヨ。」小「ハイ何なら、お熊さんを呼んで来ませうか。」番「左様サ、逢つて咄せば猶能いけれども、ナニ／＼それにも及ぶめえから、今の口上を忘れない様に左様いふがいい。」小「へイ左様申しませう。」ト立つて行く。出合がしらに勝手口より、中の間のかたへちよいと首をさけて、誰にか會釋をしながら、廊下傳ひに梅里の居間へ通る美麗の年増、小僧にむかひて、女「どうした小僧どん、旦那さんはお快いやうかネ。」小「イ

やお熊さん、私は今貴孃へ参るところでございます。」　くま「エ、旦那さんが、何様かなすつたのかえ。」トびつくりせし風ぜいは、梅里の事を案じて來りし女の心さも有るべし。　小「ナアニ、何様もなすつたのぢやアございません。」トいひながら奥へたち戻り、梅里の牀の枕元にて、小「旦那さん、アノお熊さんがお出でなさいました。」　梅「オヤ左様か、それは丁度よかつた。」　くま「今日は何様でございますえ、誠にお案じ申してまゐりましたわ。」トいひつゝ、しづかに火鉢のわきへ坐る。お熊の姿、黒紬の紋付の花色裏、御納戸の米澤博多の無地へ、媚茶の絲にて織止を縫はせ、文晁先生の畫を寫眞にしたる蝶に、菜の葉を色絲にて縫ひ、紫の蛇腹絲をもつて、發句を縫はせし帶を結び、下著はせんさい茶の色にて、梶の葉の、二分ぐらゐの大きさの小もん縮緬、惣地は白茶なり。裾まはしは御納戸の海氣をつけ、湯もじは淺葱縮緬の切りたての色に、光澤を出したるをしめて、襦袢の袖口は短くして見えず、紫の呂覆輪へ、萌葱の絲にて篠すゝきを縫ひたる半衿をかけ、髪は島田くづしの一が、少し大き過ぎたる結ひかたは、人によりて好き嫌ひがあるか知らねど、上品よく目に立たぬ衣裳著け、こゝろをつけてよみ給はば、梅里が迷ひしも、もつともなる女と察せらるべし。さてお熊はしなやかにすわりて、梅里の顔をぢつと視る。男は心うれしく、梅「なぜ其様に案じて來たのだ。」　くま「ナニネ、今朝曉方にモウ〱否な夢を見ましたから、起きると直に驅け出して参らうと思ふと、長座お客が、婦多川の歸りだと言つて、朝ツ

から二人連で來て、今まで居ましたわネ、それから歸るのを待ち兼ねて、早々出て來ましたら、今小僧どんが私の所へ往くのだと言ひましたから、胸がドッキリと仕ましたヨ。」傳「なぜ其樣にびつくりしたヨ。」くま「アレサ、貴君樣が何樣かなすつたのかと思つて、びつくり仕ましたァネ。」傳「ナァニ、二三日以來おほきに快氣、かねての咄もあるし、また外に用もあり、貌も見たくなつたしするから。」くま「ヲヤさうそばッかり。」と莞爾笑ひ、くま「呼びによこしなさるとこでございましたか。」傳「ナニサ、呼び付けるも氣の毒だから、小僧を使にやつたらば、何か分らねえと思つて、出て來て吳れるだらうと思つたのサ。」トいふ中、お熊は盆の上にありし藥を看て、くま「オヤ、お前さんお藥があるぢやァございませんか。」傳「ナ、ほんに左樣だッけ。」くま「それはあんまり冷めたではありませんか、マァお出しなさいまし、溫めて上げませう。」ト藥茶椀を、火鉢にかけてありし土瓶へのせて、湯せんにして服用せながら、くま「それでもマァ、少し宛でも餘程快氣おなんなさいましたねえ、此間中の樣だと、私やモウ／＼心ぼそいやうで、何樣いたさうかと存じましたわ。夫れでもお花が深切に、貴君樣の身を案じて、淨泉寺へお參り申したり、下溝店のお祖師さまへ、お百度を上げに往つたりして、私に力を付けて吳れましたわ。今日は又山谷の毘沙門さまへ、お前さんの病氣を、其身の願がけをすると言つて、今朝早ャく出て往きましたわ。勿論堀の若たけへ倚つて、延津賀樣に、稽古して貰つて來る

淨瑠璃があると言ひましたが、可愛さうに、藝をば身に染みて仕ますわ。」梅「左樣ヨ、何事も實があるから頼もしい、その代りやがて我身が全快して出かけると、お花の身のうへをば、立派に世話をして遣らうと考へて置いたが、忠さんは何樣だ、おとなしく不自由な姿で居るかの。」くま「左樣サ、全體が女のやうなやさしいお子だから、其樣に困りもなさらないやうでありますヨ。それに此間も可笑いことが有りましたアネ。アノウお屋敷のお客が、三四人でお花を連れて、船へ行くと仰しやつて、さそひに倚つて下すつた所が、お花は其の日に董齋さんに連れられて、延津多さんと同伴に、五山さんの會へ往きましたのサ。それからお中さん忠之丞のかりの名が出て、そのお客に、お花は今日は、書畫會のお座敷へ出ましたと言ふとネ、そのお侍がお中さんの貌を見て笑ひながら、何を戯言をいふのだ、其方がお花で居ながら、自身が留守をつかふものがあるものかといふとネ、連のお侍が、イヤ／＼お花に似て居るが、例時呼んだお花ではないやうだといつて歸りましたわ、私は中の間に髪を結つて貰つて居て、何樣にをかしうございましたらう、お中さんが挨拶にこまつてお在での中が、餘程宜うございましたヨ、オホ、、、。」梅「なるほど、左樣いつて見ると忠さんの貌は、お花女に似て居る所が餘程あるヨ。」ト、少し考へて、梅「よし／＼猶の事能いわえ。」くま「オヤ何の事でございますえ。」梅「エ鳥雅さんのことに付いて、工夫した事があるからサ。」くま「ホンニ鳥雅さんも、まだ實正に勘當

が免りないうちだに、あんまり遊びが過ぎるといふ事で、また御家でやかましいさうで御座います。」梅「ナニ〳〵、そりやァ何と言つたからとッても、本店の御祖母さんが、烏雅さんの肩を持つてゐるし、家を再興した大事の御祖母さんのいふことは、誰も否といふことはならねえ。」くま「左様でございますか、それぢやァお花も苦勞する甲斐がありますネ。」梅「左様サ、それはさうと何は何様して居るの、お玉は、作者いはく、これはこゝにはじめて名をあらはせど、則ち梅里の姉なり。定めし我儘ばかり言つて居るだらうネ。」くま「イヽエ何様して、誠におとなしくしてお在でございますヨ、それにお花がやさしくして、お相手になるもんだから、お座敷へ出ない節は、お玉さんと和合く終日合はせものをしたり、綾つたりして居りますから、賑かで宜うございますわ。」梅「左様かノ、實はあの孃は、私とは腹違ひの兄姉だけれども、少しも隔心る様な事もせず、誠に私へ遠慮なく、我儘をいふから可愛がつておけば、種々と兄をこまらせてならねえ。それだからさぞお前が世話だらうと思ふけれど、モウ少しお前の宅へ置いて呉んなせえ、何様も傳染りやすい病だから、此の全快際にわるくすると、血脈へは染りたがるものだといふから、牀でもあげるまで側へ置きたく無え、面倒だらうが最う些とだ。」くま「ナニ面倒なことがありますものか、私もネア必竟は、お前さんが如彼に可愛がつてお在でなさるから、何卒傳染病なんぞはわづらはせ申したくないと思ひましたればこそ、お前様の御病氣を見かけて、私どもへお連れ申した

くらゐだから、なるたけ氣をつけて居りますヨ、それだから此の上とも、安堵してお在でなさいヨ。」梅「ナニお前の世話だから、如在ないと思つて居るが、それだけ氣の毒だ、何卒はやくあの孃に壻をとつて、樂な身の上になりてえもんだ。」くま「ヲヤノヽ、今まで樂でなかつたのでございますかえ、餘り蟲がいいねえ、此の上に樂のなさりやうはないではありませんか、ホヽヽヽ。」梅「ナニサ、これまでも苦勞もないが、何樣も世間があるから、思ひ切つた事が出來ないわナ。」くま「ヲヤ世間をはばからなければ、何をなさる氣か存じませんが、何も思ひ切つたことをなさらずともの事ぢやアありませんか、私やア思ひ切るといふことは、戲言にもいやでございますヨ。」トいふ折から、奧香の小僧が、勝手働きの女にこしらへて貰ひし煮花の茶を、小土瓶の儘茶わんをそへてもちきたり、續いてお熊が土產の練やうかんを、南京の菓子鉢へいれて持ち出で、小「ヘイお茶を。」トいひつゝまた梅里に向ひ、小「ヘイこのお菓子は、お熊さんがお持ちなさいました。」梅「オヤ左樣か、土瓶は其處へ置いて行け、そしてな今に伊之助が由町から歸つたら、幾女に膳をこしらへて持つて來いと言へ。」小「ハイ。」ト小ぞうは勝手へ行く。梅「今日は格別に美麗しくなつて來たナウ、それおやアお前の方よりか、此身でおもひきる事は、夢にも出來ねえ。」くま「ア、レサ、お前樣マア、今が大事の所ぢやアありませんか、またぶりかへすといけませんから、モウ些と辛棒して、薄著におなんなさいますなヨ。」

## 第二十八章

再說お中は、（實は男子忠之丞なり。）相坂町に身を忍び居る中に、屋しきの方も大略は事濟みて、かの橫島等は却つて咎めをかうむり、國元へ押し込めとなり、春心院をば御母君のはからひにて、何所へか遣はされし由の聞えければ、まづ安堵といふにはあらねども、少し心やすく其の日を送りしが、猶なまめきし娘姿にて、今日も二階につれ〴〵なれば、物の本をよみて居たりし後から、梅里の妹かのお玉、元來お中を男ぞと知つたる故に、笑ひながら本を讀んで居たる背後から、出し拔けに、玉「お忠さん、おやアないお中さん、何の本を一心になつて看ておいでなさいますえ。」忠「オヤお玉さん、何時の間に其處へ來てお出でだつけ。」玉「ナニ、モウ少し先刻來ましたけれども、餘り一心になつてお在でなさるから、夫れで無言て居りましたのサ。」忠「オレマア、お前も實がないねえ、私は寂しくツてならないから、中本でも見て氣をなぐさまうと思つて居たのに、お前は側へ來て居ながら、口も利かずにお在でのは恨みだネエ。」玉「ナアニ左樣じやアありませんわねえ、私もお咄でも仕ようと思つたけれども、折角本を見てお在でなさるのに、口をききましたら、お邪魔だらうと、夫れで我慢して居りましたのだから、かならず惡くお思ひでないヨ。」忠「ハイ〳〵、御もつともでございます、御免なさいまし、氣がきかないから一言いふと、直にこめられますネ、モウ〳〵めつたに口をききますまいヨ。」ト苦々

しくいはれて、お玉は氣の毒さうに、貌赤らめて涙ぐみ、玉「お前さん、何ぞ腹をお立ちなさいましたか、何卒堪忍して下さいましな。エ私は何もお前さんを、馬鹿にするの言ひ込めるのと、其樣な氣おやァございませんが、ツイ氣がつかないで、悪い事を言ひました、何卒御免なさいましョ。」ト、涙ぐみたるかはいらしさ、忠之丞は莞爾と笑ひ、忠「ナャよしか譃だョ、おまへが實情にうけては、私が氣の毒だョ。斯うして他の世話になつて居る身分で、たとひ何樣な事が有つたにしろ、腹を立つなんぞといふ樣な、我儘が出來るものかネ、たかが食客の身のうへだものヲ。」玉「イ、エ、お前樣はお屋しきの若旦那樣で、なか〱私なんぞと友達になつて、お遊びなさるのではないのだけれども、餘りお前さんが女中衆と、種々なことをなすつたから、それで當分よんどころなく、此處のお熊さん所にお出でなさるのだと、兄上さんが（梅里の事をさしていふことばなり。）はなしましたものヲ。」忠「ナニ能い推量なことをおいひナ、私が女中衆と何かしたのなんのと、何人が其樣な事を言つたのだえ。梅里さんだと言つて其樣なことをいひなさる筈もなし、元來ないことだから。」玉「イ、エ、お隱しなさつても、私はよウく知つて居りますわ。しかもその女中は、先の殿さまのお妾で、モウ〱〱誠にうつくしいとも何とも、たとへやうのない御機色で、歳もまだ十八九でお在でなさると聞きましたものヲ。」忠「ナンノつまらない、譃ばつかり、何樣して其樣な事が有りますものか、たとひまた一人や半分、情合のあつ

たものがあるにもした所が、過ぎた昔のことだものヲ、今では忘れて仕まつたのサ。」ト[illegible]、其様な言ひ紛らかしは聞きません、その證據にはお前さんも、何だか折々おもひ出して、御噂なさる事がございますから、やつぱりその女中の事がお心にかゝつて、お案じなさるのでございませう、たしかに左様でございますヨ。」ト、

あだな所から仕かける戀路、互の心も相坂町に、同じ住居の好いた同志、また是れ餘儀なき赤縄とおもはる。

風月花情 春告鳥巻之十四 了

# 風月花情 春告鳥 卷之十五

江戸　爲永春水著

## 第二十九章

再說お玉は何時よりか、戀の染衣著て見度き、春の心の催してか、お中へ對し戲言に、言ひかけたりし言の葉を、きけば男も歳ゆかぬ、身には前後の思案もなく、ついざれ言の念入りて、互にこゝろ亂るゝは、また是れ前世の因縁か、自然と縺れよる絲の、結ぼれかゝる其の風情。 忠「なるほど、お前は他人のことをせぐり出して、こまらせるのがお上手だねえ。」 玉「アレサ、左樣ぢやァございませんがネ。」 忠「ございませんが何樣したと言ふのだえ。」 玉「ナニ何樣も致しませんが、其のお方はさぞお前さんを、戀しくつてなりますまいと存じましてサ。」 忠「それは御深切な思しめしでございます。」 玉「アレサ、戲言ではございませんョ、大かた今時分は、お前さんの事を思ひ出して、泣いてお在でなさるだらうと存じますと、誠にモウノヽおかはいさうでございますわ。」 忠「ナァニ、其樣なことをい

ひかけて、私を罔ひおとす氣でお在でだらうが、なか／＼お前のいふやうに、悲しがつて居るだらうの、何のといふ深い事はないのサ、梅里さんは何と言つて、お前にお咄しだかしらないが、實はマヽ私が氣がきかないから、はやくいへば、他人に勝手に爲れた譯で、誠に此方ばかりつまらない目に逢つたのサ。夫れだから、今更執念を殘すの何のといふ程に、面白かつた中では決してないヨ。」千「ヤーヤ譃ばッかり、其樣にお隱しなさいますけれど、私は姉上さんに、（これはこの家のおくさまの事をさしていふことばなり）委しく聞きましたわ。誠にお前樣も實がないねえ。早く誰ぞに頼んで其のお方の所へ、お文でもお上げなさいましな、何樣に案じてお在でだか、知れやアしませんヨ。」男「ナニサ、何樣に思つて居るか、先の料簡がしれるものかネ。」千「オヤ／＼うそ／＼、口外では其樣な事を仰しやるけれど、やつはりお前樣も心の中では、逢ひたく思つてお在でなさるのサ、それに違ひございますまいネ。」男「ナニ、ノお前が古ひ者ではあるまいし、何樣して私の心のうちが知れるものかネ。」千「イ、エ古ひ者でなくツても、私にはしれますわ。」男「イヤこれはおもしろい。夫れならネ、私が惚れて居る娘が在るが、それが知れるならば當てゝ御覽。」千「ア、知れますとも、則ちお屋敷の千鳥さんのことでございます。」男「ソレ左樣いふ古ひ者だから、いけやアしない、それでは少しも當りは爲ないヨ。そして私が極惚れて居る娘と言ふは、誠に美麗しい容貌だアネ。」千「オヤ千鳥樣も、モウ／＼美麗しいとも何ともいた

へ樣のない御艷色ぢやァ在りませんか、其の外に又お前さんが、そんなに惚れてお在での、美しいお方があらうとは何樣も。」忠「知れないといふのかえ。そんな易者があるものか。」玉「イ、エ知れましたわ。マアネ。」忠「知れたなら早くお言ひな。」玉「オホヽヽヽ、せはしないねえ、マア能く考へて看なくツては。」トいひつゝ、莞爾忠之丞の顏を詠める、其の愛敬のうるはしさ、花の口もと月の眉、雪より白き衿元に、ほつれかゝりし黑髮も、おもむきありてあざやかに、露の海棠柳の雨も、及ばぬ艷の島田髷、見とれるばかり暫時は、男も言葉なかりしが、忠「サァ何樣だネ、大そうむつかしい考へ樣だネ。」トいへば、お玉は笑ひながら、玉「それではネ、アノウお花さんで御座いますかえ。」忠「ナァニ大違ひ〳〵、お花さんは美麗しいけれども、娘ではないわナ、そして鳥雅さんとかが、誠に惚れて居るさうだのに、彼の孃も鳥雅樣には、命も捨てる氣だといふから、なか〳〵他人が何と言つても、はじまらないわネ。私の惚れて居る娘は、お花さんよりも惚れた慾目か、猶うつくしい樣だから、氣をもんでも及ばないことかも知れないヨ。」玉「それでは何樣も、私には知れませんヨ、左樣言つてお聞かせなさいましナ。」忠「イ、エマァ止しませう、兎ても出來ない相談だから。」玉「オヤなぜでございますエ。」忠「なぜといつて、咄した所が、其の娘が所詮不承知だから。」玉「何所のお娘御かぞんじませんが、お前さんに惚れられて、否といふ者はありさうもない事でございますネ、何でもモウお前

さんと、千鳥さんとかの様だと、宜うございますねえ、相惚れでお在でなさるから。」忠「左様サ、お前と此間此宅へ鳥渡來なすつた、好さんとやらの様だと、夫れこそ誠に相惚だから、譯はないのサ。」ト、所爲とぢらしていへば、娘は少し氣色を變へて、玉「おや〳〵、何時私が好さんを宜いといひましたえ、サア何時左様申しました。」ト、膝を進めて問ひよるも、あどけなくかはゆらしけれ。忠「いつでもサ、私は聞きました事がありますヨ。」玉「其様な譃ばッかり、ナニ私が如彼お人をサア。」忠「情人にお持ちならばかはいからうネ。」玉「宜うございます、何とでも仰しやいまし、エ、モウ悔しい。」ト襦袢の袖を、前歯でくはへて引つぱる姿、よろしく推察あるべし。」忠「おや〳〵、また悔しいのがはじまつた、悪い節おこる蟲だねえ、些と大きな灸でもすゑて上げよう。」玉「サァすゑて下さいまし。サア〳〵。」ト身を摺りつけて相媒風情、いづれを娘と他見には、看わけもならぬ島田髷、名さへお中と呼ばるゝ男、元來艶弱なる忠之丞、お玉は玉をも欺く美麗、梅と櫻の一枝に、咲いたるやうに其の姿、拙き筆に書きわけ難し。

それ中昔、男色の流行はれたる時節は、美少年の爲に命をうしなひし男、數多ありしとぞ。至つてうるはしき若衆は、二八の處女にも、まさる艶色自然にそなはりて、身體のしなやかなる、女も及ばぬ者もあり、今此の書に記したる忠之丞もそのたぐひなり、宜しく情合を察して、筆力の

不足をごけんぶつの心に、補ひ給はん事を願ふ。

忠「サア灸點をおろして上げよう。」玉「アヽレサ、お止しなねえオホヽヽヽ。」忠「そんなにいやがる位なら、下家で一人でお遊びなら能いのに。」玉「なに否がりは仕ませんけれども、姉上さんが歸つた樣だからサ。」忠「ナニ、お熊さんが歸つたからといつて、處女同志で遊んで居るのに、誰が何といふものかネ。」玉「オホヽヽヽ、能い處女でお在でなさるねえ、他兒は誠にかはいらしい風でそして。」忠「根生がおそろしいと言ふのかえ。」玉「イヽエ、根生はかはいらしくッてもネ、薄情でお在でだから油斷はなりませんと申すことサ。」忠「どうして／＼、實が有りすぎるほどあるから、却つて他人に馬鹿にされるのだわネ。」玉「ナニ誰が、お前さんを馬鹿に仕ますものか。」忠「それでもお前なんぞも、私を馬鹿にするではないかえ。」玉「アレマアあんな謔ばッかり。」忠「ナニうそなものか、只今灸をするて呉れろと言つて置いて、灸點をおろして上げようといふと、脇へ逃げるではないかえ、他に物を頼んで置いて、サアといふと否だといふのは、やつぱり私を馬鹿にするのだわネ。」玉「ホヽヽヽ、それだつてもアレ。」忠「身ぶるひをする程、私をお嫌ひのかえ。」玉「イヽエ、ふるへるほど嬉しうございますわ。」忠「急度左樣かえ。」玉「アレサ、マアお待ちなさいヨ、實にお前さんの心はかはりませんネ。」忠「しれた事サ。」

此の節しも、軒端に釣りし、風鈴の付いたる短冊の絲解けて、忠之丞とお玉の膝元へ落ちとゞまる。

吹かぬまはなびかぬにこそ花すゝき風にしたがふ心とはしれ

玉「ヤ、何といふ歌の心でございますえ。」忠「エこれかえ、たしか二條の院の讃岐の歌だがネ、深いこゝろは兎も角も、風次第とは否な辻占だ。」玉「アレサ、それでは判斷のなさりやうが、惡いではございませんか、花薄もお前樣の樣な、粋な風なば招くといふ心でございませう。」忠「なるほど、さすがに梅里さんのお姉御だけ、何事も如在ないねえ。」玉「オヤ〳〵、私はいけない事を仕ましたヨ。ヨウ簪を、此樣に折つて仕まひましたわ。」忠「オヤほんに大變だネ、しかし鼈甲だから、丁度其の玉の所から繼げばしれは仕ないヨ。」玉「ナニ折つても惜しくはございませんが、モシ姉上さんに、聞かれると困りますものを。」ト、少し困る風情は、さすがに深窓にやしなはるゝといふ程にはあらねど、正直なる處女心ならんか。忠「モシお熊樣がお聞きならば、お中さんが灸をする爲て呉れるといつて、ツイ折りましたといふのサ。」玉「何樣して、其樣なことを言つて御覽なさいナネエ、何樣に叱られるか知れやァ仕ませんわ。」忠「なぜえ。」玉「なぜと言つて、斯うしてお熊さん所にお在でなさる中も、はやくお屋しきの方のお詫びを濟ませて、お前樣も御本家へお歸りなさる樣に、爲ないければならない

と、私の兄上さんが申して居りますものを、私と何した事でも知れて御覧なさいな。夫れこそ大變でございます。」忠「何様して／＼、兎ても本宅へ歸られる身分でもなし、たとひ歸られる様な事が萬一あつてもお前の事は。」玉「イ、エ、何様思つても私の様なものが、始終お側に居るやうにはならないと、はじめから知つて居ても、今さらそれが悲しうございますわ。」トいひつゝ涙をはら／＼、膝に凭れて倩と、溜息をつく折しもあれ、格子のくゞり戸ぐわら／＼と、明く音聞いて飛び退く二人、階子の際にてお熊の聲、くま「お玉さん今歸りましたヨ。」

## 第二十章

再說梅里は日數立ちて、病氣全快なしけるが、お玉は相坂町の家に馴染みて、兎角お熊の側に居り度きよしをいへば、元來兩親もなく、我儘育ちのことなれば、まづ其の儘捨て置きしが、此の程鳥雅の不首尾より、思ひ付いたる手段ありて、お熊の許へ來り、皆々うちよりて酒盛をしながら、梅「トキニお中樣、明日はお前を連れて見合に行くのだから、其の氣で居てお吳れ。」ト出し拔けに言はれて、座中は不審の顏色、中にもお玉は驚天し、玉「エお中さんが、お壻にお出でなさるのかえ。」ト少し泣きもするかと思はれる風情、忠之丞もいまだ其の意を得ずといへども、お玉の顏色を、他に推察もするかと心配して、言葉もいださず。お熊は是れを聞いて、くま「オヤ／＼、それでは、お屋敷の方の事に

かよはすかえ、何様もまだ今急に、聟なんぞにお出でなさつては、濟みさうもないものでございます
ねえ。」トいふを、お玉は心の中に、頼もしく思つて居る。隼「アハヽヽヽ、ナニ聟に往かれるものか、
娘姿だから、嫁に往くのサ、しかも息子は、寔に好い男だが、其の代りに情奴が數人あつて困るけ
れども、媒人が是非と頼むから、マア明日雨見をさせるつもりだから、髪を結つたり化粧をしたり
て、支度を早くして待つて居てお呉んなせえ。著物はお玉のを、晩にでも持たしてよこすから、お熊
さん、いい鹽梅に著せて上げて呉んなヨ。」くま「オヤ〳〵、お前さんマア何をお言ひのか、少しも分
解ませんねえ、男のお子を嫁に遣るとは、何の事でございますねえ、聟にお出でなさるには、お玉さ
んの著物を著て、互視に行くとお言ひでは、をかしい形容の出立なり、そして先方が息子なら、此方
が處女でなければならないのに、忠さんが（假の名はお中なり）をとこだから、行けまいぢやアありませんか。」
隼「ハヽヽヽ、實身は男でも、此の姿はかはいらしい娘だから、私の姉だといつて、互視に連れて往
つても能いぢやアないか。」くま「それはマア、明日たゞ見せるばかりなら、女の子と見えるから能う
ございますが、いよ〳〵夫れが極つて、嫁に貰はうといはれたら、何様なさいますえ。」隼「ナニサ、
其の時ははんたうの女を遣るから能いわナ。」ト（いはれてお玉は、其の身をやるといふのかとすゐりやうして、むねにぎつくりこたへしかば、こらへかねたるがまゝに、）
「ナニヤ、兄上さん、私は嫁に行くのは否でございますヨ。」ト（つんとしていふ）隼「何様してまた、家の跡取を他

へ遣られるものか、此方で遣らうと言つても、評判の我儘娘だから、向方で御免なさいましと斷るわナ。」くま「そしてマア、忠さんを視せて置いて、其後誰人を嫁にお遣んなさるのでございますか、むづかしさうな事でございます。」トお熊をはじめ座中の人々、合點のゆかぬ其の風情、梅里は一人微笑して居るゆゑ、忠之丞は膝をすゝめ、忠「梅里さん、その事は實正でございますか、何樣も私には解せませんが、何所へまゐるのでございますねえ。」梅「エ嫁に行く先かネ。」忠「イ、エマア、其の互視に參ると仰しやるのは、茶番の狂言でもございますのかえ。」梅「アハヽヽヽ、成程茶番の趣向とは、尤もな考へだが、大違ひサ。」くま「それでもお前さん、一人で承知して、笑つてばかりお出でなさるから、さつぱり分解ませんわネ。」トいふ所へ、座敷から歸り來りし彼のお花、此の程鳥雅の押し籠められしと、噂を聞きしのみならず、絶えて便りもなき故に、心を苦しめ居ながらも、姉のお熊へ遠慮して、少しも苦勞を顏に出さず、元氣に座敷を勤めしが、梅里にむかひ、はな「オヤ今日は、能くいらツしやいました、今朝もお座敷へ出掛けに、姉上さんとお前さんのお噂をいたしましたわ。」梅「今日は來ないければいいと言ツてかえ。」はな「オホヽヽヽ、何樣して其樣なことをいはれますものか。」くま「アレサお花、梅里さんのいふ事を、まじめに言譯せずともよいヨ、先刻からわからないこと許り言つてお在でだァネ。それよりかマア、早く著類でも著かへてやすみなヨ。」はな「アイナニ、今日は

お店の若イ衆ばッかり揃つたお客だから、ちつとも骨は折れませんヨ。」トいひながら、着類を着かへに次へ行く。お熊はまた梅里にむかひ、くま「サア嫁を遣る先方は何所だか、早く言つてお聞かせなさいましヨ。」梅「嫁に遣る先は、鳥雅さん所だが、嫁を見に茶屋へ来る人は、鳥雅さんの本店の祖母さんと、鳥雅さんの母人さん許りサ。」くま「エ鳥雅さんの嫁にかえ。」ト、お熊をはじめお玉もお中も顔見合はせて、呆れてしばらく言葉もなし。お花は一間隔てし所にて、鳥雅へ嫁が行くと聞き、胸にギックリ思はずも、着物を脱替へながらたち聞きする。くま「ナヤたれでも鳥雅様は、また首尾がわるくッて、親類の一番むづかしい家に預けられて、押籠めになつてお在でおやアありませんか。だれに嫁を貰はうとは、嘘らしうございますネエ。いよ／＼それが眞正ならば、お花の事も是れ限りにされちやア何様もかはいさうでなりません、又私が付いて居て、其様な事にでもなつて仕まつては、第一私が悔しくもあり、外聞もわるいから、何所までもお花の肩をもつて、道理を付けないければなりませんヨ。」トいふを聞き取るお花は、悲しき中にも有り難く、お熊を陰で拝み居る。梅「ナニ何様して、其様なつたからといつて、鳥雅さんの方へ、何の角のといつてかゝつちやア、此方がおとなしくないわナ。元を正して視ると、お花孃は前に名をお民といつて、鳥雅さんの家の目下の者の娘だといふから、なか／＼表向になつては、口はきけないわナ。」くま「イヽエ、それだッてもマア、是れまでお花の

苦勞をしたのは、何樣だか知れやァ仕ませんわネ、たとひ元は目下でも、奉公人でも構やァしない譯になつて居まさァネ。全體花女が娘で居たときに、鳥雅樣の方から手を出して、それから後に誰もお花の腰の押し人がないから、それなりに田舍へ追ひ遣られたといふことでございます。其の後もお花は貞女を立つて、命がけで私の方へ來て、始終鳥雅さんのことばかり苦勞にして居まして、漸々久しぶりで巡り逢つて、花女の實情も屆き、鳥雅さんも上方から、歸つてお在での甲斐もあつたといふ樣な所で、是れ限りにも、しなさるまいけれども、まだお花に嬉しがらせる程の息繼ぎもさせずに置いて、今直に女房をお持ちでは、餘りでございますわ。お花はあんな温厚い氣の子だから、堪へて居るかも知れませんが、私は鳥雅樣を相手へて理窟を言ひますョ、それでなければ、花女を婚禮の席へ振り込ませて遣ります。」ト手強くいふは、お花の爲を思ふ許りか、其の身の垣根、萬一梅里も他心が出でたる節の用心に、斯くの如く言ひ出せしなるべし。梅「イヤ大變にむづかしく言ふナウ、何もこれが鳥雅さんの心から、女房を急に貰つて、お花孃の方を止しに仕ようといふ譯ぢやァねえわナ。鳥雅樣が自分の勝手我儘で、まだ此地の首尾も直らない中に、歸つて來るさへわるいのに、預けられて居る家に腰も落ち付かず遊び歩行いたり、お花孃に許り恍惚くなつて騷ぐのが親類中へ知れて、嚴しく押し込められたのだァナ。」くま「イ、エそれだッても。」梅「コレサマァ、此方が言ふことを終へまで聞き

なッ。此度の事はまだ鳥雅さんは知らずに居るのサ、其所で鳥雅さんを祕藏にする祖母さんが、また贔屓の料簡を言ひ出して、全體鳥雅に相應な婦人でも持たして置けば、自然と放蕩も不爲のに、壯年を獨身で置いて、少しぐらゐ女郎唄女に金を遣つたとて、上方まで追ひ登せたり、押し込めたりする程のこともあるものか。是れから祖母が鳥雅の身分を引き請けて別家する、何樣で本店と出店の方で金を出して、鳥雅は別に店を出させるはずの事だから、其の樣にして遣つてくれろ、其の代りに以來祖母が隱居料を、鳥雅の方へ同居に入れて、萬事の世話もする、また直に相應な娘を嫁に貰つて、鳥雅をおとなしくして視せるからと言ひ出しなさつて、さすがに大切な祖母さんの事だから、鳥雅さんの家はいふに及ばず、出店親類でも否といふ事が出來ずサ、まづ其の積りに極つた所で、祖母さんがいふには、兎てもの事に嫁も、おれが鑑定で貰つて、鳥雅に否應は云はせない、せめて夫れが衆人への詫言心、鳥雅に我儘をいはせないといふ證據に、鳥雅には見せずに、祖母が視て嫁を貰つて仕まふといふ事に極つて、其の嫁を尋ねる段になつて居るといふから、梅里が心當りの娘を遣らうと思ひ付いたが、其の娘を見せると、互視の節に萬一故障が出來ては行けないから、そこでお中樣を互視に賴んで視せて、嫁入の節には心當りの娘を、取り替へて遣る手段がありやす。尤も後で化は顯はれも仕ようが、鳥雅樣の氣に入る娘でさへあれば、嫁の里といふものが梅里で、此身の姉と云ふからには、

親類や出店の奴等が、何の角のと吐かしても、歯は立たせねえ覺悟でさせる嫁入だが、もつとも其の場へ差しかゝつたらば、お花の心持が不安心だから、此身が方へ連れて行つて、得心するやうに、意見も仕ようと思つて居やす。お前も其の氣でお花女をしやくらずに、穏びんにさせてお呉んなせえ。」トいへば、さすがに才智のお熊、忽ち梅里の心を悟り、莞爾と笑ひ、熊「なるほど左樣お云ひで察ると事が分解りましたわ、夫れぢやァ鳥雅さんの薄情でもなし、お前樣の世話のなさり樣も無理もなし、兎も角も鳥雅樣が別家して、一ト株の主人になつて納まりさへすれば、其の時お花の身分も安堵されますネ。」ト目交をすれば、梅里もお熊が承知せし風情に、笑ひをふくみ、梅「ネ、能い趣向だらうト自慢をする程でもないかえ。」トいへば、お熊は機嫌よく笑顔にて、熊「ハイ／＼、それではモウ申し分はございません、此の上お花がこゝろ得違ひをいへば、私が合點仕ませんヨ。」トいふを聞きとるお花の胸は、まだ落著かぬはなしの前後、何樣なる事かとあんじても、お熊へ遠慮し其の席へ、出て白地に聞かれもせず、涙ぐみてひかふれば、お玉は其の身の戀心に、お花のこゝろを引き競べて膝を進め、玉「アノウお兄上さん、其の嫁に行く娘は、何所の子でございますえ。」梅「ナゼ。何所の娘でもいいぢやァないか。」玉「イ、エ／＼、萬一其の娘が御内室さん風俗て、お花さんを邪魔にでもする樣だと、お花さんが何樣にか悔しうございますわネ。」梅「イヤお前も、お花女の味方だの、案じなさん

な、お前にも頼ていい男を丈夫に持たせるから。」トいはれてお玉は胸ドッキリ、顔赤らめて、「いやアな兄上さんだねヱ、誰が丈夫を持ちますものか。」ト少し腹を立つもかはゆらし。忠之丞も腹にこたふることとならんか。斯くて此の日は酒宴も終り、明日の互視を約束して、お花にも挨拶し、梅里は我が家へ帰り行く。跡にて又々種々と、お花の心を察しつゝ、お玉忠之丞も氣をもむを、お熊は最初の言葉に引きかへ、お花を宥め鳥雅の方と、梅里の計らひに道理を付けて、翌日忠之丞のお中を、立派なる娘に化粧立て、お玉の小袖を梅里の方より送りしを著せて、十分に身ごしらへ、惚れ／＼とする風にこしらへ、梅里と倶に互視の場所へ、いだし遣ることそ可笑しけれ。

再說鳥雅の祖母と母親は、かねて尋ぬる嫁を媒人するもの有りて、しかも以前より、知りたる梅里の姉なる由を聞き、おほきに悦び、早速互視をせし所に、彼のお中なれば、お熊が丹誠にて、常より十倍の美人となりしゆゑ、祖母と母はいよ／＼滿足し、鳥雅に見せねとも此の娘ならば、氣に入るに相違なし、只娘の方にて男を見ざれば、いかゞあらんと相談するに、兄の梅里も娘も兼て鳥雅の男ぶりは、知つて居る由の返答にて、雙方とも速かにこと調ひしが、其の以前より鳥雅の別家する用意も出來しと思はれて、地面を二ヶ所に金子三千兩、同じ家號にて、支配人に預け置いたる砂糖問屋の店を、所有代物と當時積み著けの荷物、爲替金ものほせ濟みし千兩餘の砂

糖、家土藏問屋株を付けて、殘らず鳥雅に引き渡しけるは、全く本家の祖母の慈悲ふかきよりの情なれば、其の大恩に感伏して、祖母を鳥雅の家に引き取りて敬ひ、扨吉日を選みて、梅里の姊を嫁入させ、首尾よく婚禮を調へける。されば鳥雅は思ひがけなき妻定めも、心にかゝるお花のこと、または小濱に薄雲と、おもひ捨てなんよしもなけれど、まづ一旦身の上を納めて、後になすべき手段もあるべし、第一祖母の慈愛にて、貰はんといふ嫁を違背もならじ、只梅里の姊といふは、合點ゆかずと思ひしが、何事も緣によるものかと、あきらめて婚禮し、扨四五日立ちて、祖母は本家へ用事ありとて出で行き、いまだ下女も定まらず、手代と小僧のみなれば、奧はいたつて物寂しく、鳥雅夫婦のさし向ひ、何かひそかに笑ひながら、

鳥「ナウお民、寔に梅里さんは、嬉しい心ざしの人ぢやァないか、しかしお前は相坂町で、ばり／＼する唄女になりおふせた身の上だから、今さら斯うなつたのは窮屈で後悔か。」はな「何様いたして勿體ない。モウ／＼私は、餘り嬉しいので、何様も夢ではないかとぞんじますヨ。」鳥「イヤ此身も、母人樣と祖母ァさんが、嫁を視立てて持たせる、否應はいはせないと言ふ咄を聞いたときは、何樣せうかと思つた。」はな「かはいらしい娘を、御内室樣になさるのが、お嬉しくつていらしつた所で、則り私だから、お前さんこそ後悔でございませう。」鳥「また其樣な否みをいふヨ、それよりか互視のとき

に、お中樣を視て婚禮の晩に、お前の代つたのを、よく母人さんが氣がつかずにお在でだと思ふヨ、」はな「イ、エ、悟つてお在でだかも知れませんよ。」鳥「ナゼ〱。」はな「なぜでも、此間あつちの御家へお歸りなさる節に、私に對つて笑ひながらも、夫んならば私はモウ歸るから、以來でも相かはらず、和合くしなヨと仰しやつたから、私はハツト存じましたわ。」鳥「左樣か、それぢやア氣どられたかよ、ウ、何でもモウ斯うなつちやア、かまやアしねえ。」はな「ア、レサ、お見世から誰か參りますわネ、アノウそれに母人さんの方から、貴君が御贔屓で、此家へお貰ひなすつた小僧の千松殿は、私の親方見ると、最初ツからのことを知つて居るから、毎度他人に隱して笑つて居りますわ。」鳥「ニく、彼は發明だから、麁相な口を利く氣づかひもなし、殊におれが目をかけて置くから大丈夫だ。」はな「それは宜うございますが、わちきは薄雲さんのことも、氣懸りでなりませんから、何樣かしてお上げなさいましナ。」鳥「其樣な事まで、苦勞にする事があるものか、また其の前に梅里さんと、お熊さんの中と、お玉さんと忠さんの納まりを、よくしてあげないければ安堵しないけれど、マアお前と何身が夫婦になつたから、何よりか嬉しい目出度い春になつたのだ。」はな「まことにモウ〱、嬉しいとも目出度いとも、言葉には盡されませんヨ。」ト、寄り添ふお花鳥雅の笑顔、實に花鳥の名も一對、目出度き春をぞむかへける。

鳥雅お花の趣は、爰に至りて目出度く納めたれども、彼の小濱千鳥の身の治まり、梅里お熊、忠之丞お玉、其の外春告鳥に、說き殘したる人物の始終は、次に出したる外題の、籬の梅にくはしく記してあり。殊に薄雲が戀情の深き、哀れなる物語、また婦多川の奇談等、古今に稀なる新趣向を綴り、江の島詣でを卷の始めにあらはし、實に春色の一覽に備ふものなり。

風月花情 春告鳥卷之十五　大尾

昭和三年八月十二日印刷
昭和三年八月十五日發行

(非賣品)

近代日本文學大系
第二十卷

編輯兼發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
野中文郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座　七八三番
　　　　　二一八八番
　　　　　三六八六番
振替東京五二二九八番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03046 0448